四国横断自動車道建設に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告

第二十五冊

中間西井坪遺跡Ⅰ

1996.11

香川県教育委員会
(財) 香川県埋蔵文化財調査センター
日本道路公団

焼成土坑・谷 3 遺物出土状態

上　円筒埴輪 1 類　　左下　円筒埴輪 2 a 類　　右下　円筒埴輪 2 b 類

焼成土坑出土箱形土製棺

大型竪穴建物出土割竹形土製棺

左下　盾形埴輪　　右下　家形埴輪　　中・下　船形埴輪

序　　文

四国横断自動車道は，高松～善通寺間が平成４年５月に開通しました。これにより，瀬戸大橋と香川県の高速道路が直結することになり，香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では，四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い，昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して，用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。３年６か月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し，平成３年９月に発掘調査を終了いたしました。また，平成３年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土品の整理を順次行っているところであり，平成４年度からは発掘調査報告書の刊行をいたしております。

このたび「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第二十五冊　中間西井坪遺跡　Ⅰ」として刊行いたしますのは，高松市中間町西井坪に所在する中間西井坪遺跡についてであります。この遺跡の調査では，旧石器時代から江戸時代までの多くの遺構・遺物が出土しておりますが，そのうち今回報告します大型の竪穴住居跡・焼成土坑は，古墳時代前期の埴輪や土製棺の工房跡と考えられます。これらは，全国的に見ても検出例が少ない貴重なものと思われます。

本報告書が，本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに，埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが，発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間，日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに，今後ともよろしく御支援賜りますようにお願い申し上げます。

平成８年11月

香川県教育委員会

教育長　　田　中　壮一郎

例　　言

1. 本報告書は，四国横断自動車道高松～善通寺間建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第25冊である。「中間西井坪遺跡Ⅰ」として香川県高松市に所在する中間西井坪遺跡（なかつまにしいつぼいせき）の西半丘陵部分における古墳時代以降の調査成果を収録した。

2. 発掘調査は，香川県教育委員会が日本道路公団から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを調査担当者として実施した。

3. 中間西井坪遺跡の発掘調査は，全体としては平成元年年５月から平成３年７月まで実施したが，今回の報告部分に関しては平成２年５月～平成３年７月に発掘調査を実施している。本報告にかかる調査の担当は以下の通りである。

　　平成２年度　鍋井一視　大久保徹也　萬木一郎　尾方ひとみ

　　平成３年度　大西義則　森下英治

4. 調査および報告書の作成にあたって下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同，敬称略）

　香川県土木部横断道対策室　高松市教育委員会　地元対策協議会　自治会　鎌田共済会郷土博物館　京都大学文学部博物館　金刀比羅宮学芸参考館　琴平宮図書館　東京国立博物館　津田町教育委員会

5. 報告書の作成は，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。本報告書の編集および第４章除く各章の執筆は大久保が担当した。

また出土土器等の胎土分析を岡山理科大学自然科学研究所　白石純氏に依頼し，その成果は第４章に掲載した。

6. 発掘調査および報告書の作成にあたって，下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。

（順不同，敬称略）

秋山浩三，天野末喜，天羽利夫，有馬義人，石川悦雄，石野博信，宇垣匡雅，梅木謙一，岸本直文，白石　純，下條信行，高島芳弘，高橋克壽，田中裕介，都出比呂志，野崎貴博，長谷川桂子，平井　勝，古瀬清秀，古谷　毅，北条芳隆，松井　潔，松浦宥一郎，松木武彦，松原秀明，松本敏三，真鍋篤行，森下章司，山本悦世，山地正夫，山本三郎，吉留秀敏，

7. 本報告書で用いる方位，国土座標系第Ⅳ系による。標高はＴ．Ｐ．を基準としている。
8. 挿図の一部に建設省国土地理院地形図「高松南部」「白峰」（1/25,000）を使用した。
9. 本報告書で用いる遺構図のレベルの単位はすべてメートルである。

本文目次

巻頭図版

序　文

例　言

第１章　調査の経緯……　1

第１節　四国横断自動車道(善通寺～高松間建設)に伴う埋蔵文化財調査……　1

第２節　高松市中間地区の調査……　5

第２章　立地と環境……　15

第１節　地理的環境……　15

第２節　歴史的環境……　20

第３章　調査成果……　33

第１節　調査地区の地形と基本層序……　33

第２節　古墳時代の遺構・遺物……　51

第３節　古代以後の遺構・遺物……　198

第４章　自然科学分析……　217

中間西井坪遺跡出土土器・埴輪の胎土分析……　217

第５章　まとめ……　227

第１節　古式土師器……　227

第２節　円筒埴輪……　238

第3節　器財形埴輪…… 268
第4節　土製棺…… 273
第5節　壷形埴輪…… 285
第6節　中間西井坪遺跡における埴輪・土器棺・土師器製作の特質…… 291
第7節　中間西井坪遺跡における埴輪・土師器・土製棺生産の評価…… 294
第8節　中間西井坪(丘C地点)の変遷…… 297

挿図目次

第 1図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地(善通寺～高松)…… 1
第 2図　中間西井坪遺跡調査区配置(1/5,000)‥ 6
第 3図　中間西井坪遺跡西半部調査区割り図(1/1,200)…… 8
第 4図　遺跡位置図…… 16
第 5図　高松平野西半部遺跡分布図(1/60,000)・22
第 6図　本津川古川流域の遺跡分布(1/20,000)・30
第 7図　遺跡周辺地形分類図(1/5,000)…… 34
第 8図　谷3平面図(1/400)…… 36
第 9図　基本層序位置図(1/2,000)…… 38
第 10図　基本層序図1(1/80)…… 39
第 11図　基本層序図2(1/80)…… 40
第 12図　基本層序図3(1/80)…… 41
第 13図　基本層序図4(1/80)…… 42
第 14図　基本層序図5(1/80)…… 43
第 15図　谷3断面図1(1/80)…… 44
第 16図　谷3断面図2(1/80)…… 45
第 17図　谷3断面図3(1/80)…… 46
第 18図　古墳時代遺構配置図(1/400)……49・50
第 19図　焼成土坑平面図・断面図(1/60)…… 52
第 20図　焼成土坑遺物出土状態図(1/40)…… 54
第 21図　焼成土坑土層図(1/40)…… 55
第 22図　焼成土坑出土遺物1　土師器(1/4)…… 57
第 23図　焼成土坑出土遺物2　円筒埴輪(1/4)… 58
第 24図　焼成土坑出土遺物3　その他(1/4)…… 59
第 25図　焼成土坑出土遺物4　箱形土製棺(1/12)・60
第 26図　谷3遺物出土状態平面分布図1(4a区)(1/80)……63・64
第 27図　谷3遺物出土状態垂直分布図1(4a区1)…… 65
第 28図　谷3遺物出土状態垂直分布図2(4a区2)…… 65
第 29図　谷3遺物出土状態平面分布図2(4b区)(1/100)……67・68
第 30図　谷3遺物出土状態垂直分布図3(4b区1)…… 69
第 31図　谷3・1群出土遺物1　円筒埴輪(1/4)‥ 79
第 32図　谷3・1群出土遺物2　円筒埴輪(1/4)‥ 80
第 33図　谷3・1群出土遺物3　円筒埴輪(1/4)‥ 81
第 34図　谷3・1群出土遺物4　円筒埴輪(1/4)‥ 82
第 35図　谷3・1群出土遺物5　円筒埴輪(1/4)‥ 83
第 36図　谷3・1群出土遺物6　円筒埴輪(1/4)‥ 84
第 37図　谷3・1群出土遺物7　円筒埴輪(1/4)‥ 85
第 38図　谷3(4a区)出土円筒埴輪拓影(1/4)‥ 86
第 39図　谷3・1群出土遺物8　半裁器台形埴輪(1/4)…… 88
第 40図　谷3・1群出土遺物9　半裁器台形埴輪(1/4)…… 89
第 41図　谷3・1群出土遺物10　半裁器台形埴輪(1/4)…… 90
第 42図　谷3・1群出土遺物11　半裁器台形埴輪(1/4)…… 91
第 43図　谷3・1群出土遺物12　半裁器台形埴輪(1/4)…… 92
第 44図　谷3・1群出土遺物13　土師器(1/4)‥ 93
第 45図　谷3・2群出土遺物　土師器(1/4)…… 94
第 46図　谷3(4a区)上層遊離遺物1(1/4)…… 95
第 47図　谷3(4a区)上層遊離遺物2・その他1(1/4・1/6)…… 96
第 48図　谷3(4a区)その他2(1/4)…… 97
第 49図　谷3(4a区)その他3(1/4)…… 98
第 50図　谷3(4a・4b区)上層遊離遺物(1/4)…… 99
第 51図　谷3・3群出土遺物1　土師器(1/4)‥ 101
第 52図　谷3・3群出土遺物2　土師器(1/6・1/4)…… 102
第 53図　谷3・3群出土遺物3　土師器(1/4)‥ 103
第 54図　谷3・3群出土遺物4　土師器(1/4)‥ 105
第 55図　谷3(4b区)上層遊離遺物(1/4)…… 106
第 56図　谷3(4b区)その他(1/4)…… 107
第 57図　谷3(4b区)出土石包丁(1/3)…… 107
第 58図　谷3(4c区)出土遺物1　土師器(1/4)…… 109
第 59図　谷3(4c区)出土遺物2　土師器(1/4)…… 110
第 60図　谷3(4c区)出土遺物3　土師器(1/4)…… 111
第 61図　谷3出土土師器甕　肩部文様拓影(1/4)…… 112
第 62図　谷3出土土師器高坏　接合部拓影(1/4)…… 112

第 63図　谷３(４ｃ区)出土遺物４　古代・中世
(1/4) ····· 113
第 64図　溝状遺構ＳＸ０１平面図・断面図
(1/80・1/40) ····· 114
第 65図　ＳＸ０１出土遺物１　土師器(1/4) ···· 115
第 66図　ＳＸ０１出土遺物２　土師器・土製品
(1/4) ····· 116
第 67図　ＳＸ０１出土土師器甕　肩部文様拓影
(1/4) ····· 117
第 68図　不明遺構ＳＸ０２平面図・断面図
(1/400・1/8) ····· 118
第 69図　ＳＸ０２出土遺物１　円筒埴輪(1/4) ·· 119
第 70図　ＳＸ０２出土遺物２　器財形埴輪(1/4) 120
第 71図　３ａ区出土その他の器財形埴輪等
(1/4) ····· 121
第 72図　大形竪穴建物平面図・断面図(1/80) ··· 122
第 73図　大形竪穴建物遺物出土状態図・
土層図(1/60) ····· 124
第 74図　大形竪穴建物出土遺物１
土師器(1/4) ····· 126
第 75図　大形竪穴建物出土遺物２
円筒埴輪(1/4) ····· 127
第 76図　大形竪穴建物出土円筒埴輪拓影(1/4) ·· 127
第 77図　大形竪穴建物出土遺物３
盾形埴輪(1/8) ····· 129
第 78図　大形竪穴建物出土遺物４
盾形埴輪(1/4) ····· 130
第 79図　大形竪穴建物出土遺物５
家形埴輪(1/4) ····· 131
第 80図　大形竪穴建物出土遺物６
家形埴輪(1/6) ····· 132
第 81図　大形竪穴建物出土遺物７
家形埴輪(1/4) ····· 133
第 82図　大形竪穴建物出土遺物８
不明埴輪(1/4) ····· 134
第 83図　大形竪穴建物出土遺物９
不明埴輪(1/4) ····· 135
第 84図　大形竪穴建物出土遺物10
不明埴輪(1/4) ····· 136
第 85図　大形竪穴建物出土遺物11
不明埴輪(1/4) ····· 137
第 86図　大形竪穴建物出土遺物12
箱形土製棺身材(1/6) ····· 139
第 87図　大形竪穴建物出土遺物13
箱形土製棺身材(1/4) ····· 140
第 88図　大形竪穴建物出土遺物14
箱形土製棺身材(1/4) ····· 141
第 89図　大形竪穴建物出土遺物15
箱形土製棺身材(1/4) ····· 142
第 90図　大形竪穴建物出土遺物16
箱形土製棺身材(1/4) ····· 143
第 91図　大形竪穴建物出土遺物17
箱形土製棺身材(1/4) ····· 144
第 92図　大形竪穴建物出土遺物18
箱形土製棺身材(1/4) ····· 145
第 93図　大形竪穴建物出土遺物19
箱形土製棺身材(1/4) ····· 146
第 94図　大形竪穴建物出土遺物20
箱形土製棺身材(1/4) ····· 147
第 95図　大形竪穴建物出土遺物21
箱形土製棺補強材(1/4) ····· 148
第 96図　大形竪穴建物出土遺物22
箱形土製棺補強材(1/4) ···· 149
第 97図　大形竪穴建物出土遺物23
箱形土製棺小口板(1/4) ····· 150
第 98図　大形竪穴建物出土遺物24
箱形土製棺小口板(1/4) ····· 151
第 99図　大形竪穴建物出土遺物25
箱形土製棺蓋材小口部
復元図(1/4) ····· 152
第100図　大形竪穴建物出土遺物26
箱形土製棺蓋材小口部材(1/4) ·· 153
第101図　大形竪穴建物出土遺物27
箱形土製棺蓋材小口部材(1/4) ·· 154
第102図　大形竪穴建物出土遺物28
箱形土製棺蓋材小口部材(1/4) ·· 154
第103図　大形竪穴建物出土遺物29
円筒形土製棺小口蓋(1/6) ····· 155
第104図　大形竪穴建物出土遺物30
割竹形土製棺小口蓋(1/6) ····· 156
第105図　大形竪穴建物出土遺物31
割竹形土製棺(1/8) ····· 157
第106図　大形竪穴建物出土遺物32
割竹形土製棺(1/8) ····· 158
第107図　大形竪穴建物出土遺物33
割竹形土製棺(1/8) ····· 159
第108図　大形竪穴建物出土遺物34
割竹形土製棺(1/6) ····· 160
第109図　大形竪穴建物出土遺物35
割竹形土製棺(1/6) ····· 162
第110図　大形竪穴建物出土遺物36
割竹形・円筒形土製棺(16) ····· 163

第111図　大形竪穴建物出土遺物37
円筒形土製棺(1/6) …… 164
第112図　1・2号墳平面図(1/200) …… 165
第113図　1・2号墳墳丘・周溝断面図(1/80) … 166
第114図　1号墳平面図(1/120) …… 168
第115図　1号墳主体部平面図・断面図(1/30) … 169
第116図　1号墳出土遺物1　円筒埴輪(1/4) …… 171
第117図　1号墳出土遺物2　円と埴輪(1/4) …… 172
第118図　1号墳出土遺物3　円筒埴輪(1/4) …… 173
第119図　1号墳出土円筒埴輪拓影(1/4) …… 174
第120図　1号墳出土遺物4　土師器(1/4) …… 174
第121図　2号墳遺物出土状態図(1/80) … 177・178
第122図　2号墳出土遺物1　壷形埴輪(1/4) …… 182
第123図　2号墳出土遺物2　壷形埴輪(1/4) …… 183
第124図　2号墳出土遺物3　土師器(1/4) …… 183
第125図　1・2号墳出土鉄器(1/3) …… 184
第126図　3号墳・ＳＸ03検出状態図
(1/400・1/80) …… 185
第127図　2号墳出土円筒埴輪・
3号墳出土円筒埴輪・器財形埴輪(1/4)　187
第128図　ＳＸ03出土円筒埴輪(1/4) …… 188
第129図　2・3号墳出土円筒埴輪拓影(1/4) …… 188
第130図　古墳群周辺出土遺物1
円筒埴輪(1/4) …… 189
第131図　古墳群周辺出土遺物2
円筒埴輪(1/4) …… 190
第132図　古墳群周辺出土遺物3
盾形埴輪他(1/4) …… 191
第133図　古墳群周辺出土遺物4
家形埴輪(1/4) …… 192
第134図　古墳群周辺出土遺物5
家形埴輪(1/4) …… 193
第135図　古墳群周辺出土遺物6
船形埴輪(1/4) …… 195
第136図　古墳群周辺出土遺物7
円筒形土製棺(1/6) …… 196
第137図　古墳群周辺出土遺物8
箱形土製棺部材(1/4) …… 197
第138図　1ｂ・2区出土円筒埴輪・土製棺(1/4)　197
第139図　古代・中世遺構配置図(1/400) … 199・200
第140図　3ａ～3ｃ区中世遺構配置図(1/400) … 201
第141図　1ｂ・2区中世遺構配置図(1/300) …… 202
第142図　5～5ｅ区中世遺構配置図(1/400) …… 203
第143図　掘立柱建物ＳＢ01
平面図・断面図(1/80) …… 204
第144図　掘立柱建物ＳＢ02
平面図・断面図(1/80) …… 205
第145図　掘立柱建物ＳＢ03
平面図・断面図(1/80) …… 206
第146図　掘立柱建物ＳＢ04
平面図・断面図(1/80) …… 207
第147図　掘立柱建物ＳＢ05
平面図・断面図(1/80) …… 208
第148図　1ｂ・2区中世溝断面図(1/40) …… 209
第149図　3ｃ・5区中世溝断面図(1/40) …… 212
第150図　1・2区古代・中世遺物1(1/4) …… 213
第151図　1・2区古代・中世遺物2(1/4) …… 214
第152図　3区中世遺物(1/4) …… 215
第153図　5区古代・中世遺物(1/4) …… 216
第154図　K_2O-ＣａＯによる中間西井坪遺跡
出土埴輪類の胎土による比較 …… 220
第155図　K_2O-ＣａＯによる中間西井坪遺跡の
埴輪製作関連遺構内から出土した
土器の比較 …… 220
第156図　Ｓｒ-Ｒｂによる中間西井坪遺跡の
埴輪製作関連遺構内から出土した
土器の比較 …… 221
第157図　K_2O-ＣａＯによる中間西井坪遺跡の
埴輪製作関連遺構内出土土器と
香川県内古墳出土埴輪類との比較 …… 221
第158図　Ｓｒ-Ｒｂによる中間西井坪遺跡の
埴輪製作関連遺構内出土土器と
香川県内古墳出土埴輪類との比較 …… 222
第159図　中間西井坪遺跡谷3の古式土師器1
(1/4) …… 228
第160図　中間西井坪遺跡谷3の古式土師器2
(1/4) …… 229
第161図　中間西井坪遺跡ＳＸ01の古式土師器
(1/4) …… 233
第162図　下川津Ⅵ式の主要器種と形態(1/4) …… 235
第163図　買田岡下式の主要器種と形態(1/4) …… 236
第164図　下川津遺跡ＳＨⅡ02上層の古式土師器
(1/4) …… 237
第165図　鴨部南谷遺跡ＳＨ8802の古式土師器
(1/4) …… 238
第166図　円筒埴輪1類(1/4) …… 239
第167図　円筒埴輪1類の口縁部形態(1/4) …… 240
第168図　円筒埴輪1類の突帯形状(1/4) …… 241
第169図　円筒埴輪2ａ類1(1/4) …… 243
第170図　円筒埴輪2ａ類2(1/4) …… 244
第171図　円筒埴輪2ａ類の口縁部形態(1/4) …… 244
第172図　円筒埴輪2ａ類の突帯形状1(1/4) …… 245

第173図　円筒埴輪２ａ類の突帯形状２(1/4) …… 246
第174図　円筒埴輪２ｂ類(1/4) …… 247
第175図　円筒埴輪２ｂ類の口縁部形態と突帯形状
(1/4) …… 248
第176図　円筒埴輪３類(1/4) …… 249
第177図　円筒埴輪３類の口縁部形態と突帯形状
(1/4) …… 250
第178図　高松茶臼山古墳・御産盥山古墳の円筒埴輪
(1/4) …… 253
第179図　快天山古墳・姫塚古墳・石船塚古墳の
円筒埴輪(1/4) …… 255
第180図　横立山経塚古墳の円筒埴輪(1/4) …… 256
第181図　岩崎山４号墳の円筒埴輪１(1/4) …… 257
第182図　岩崎山４号墳の円筒埴輪２(1/4) …… 258
第183図　図鴨部不明墳の円筒埴輪１(1/4) …… 259
第184図　鴨部不明墳の円筒埴輪２(1/4) …… 260
第185図　今岡古墳の円筒埴輪(1/4) …… 261
第186図　富田茶臼山古墳の円筒埴輪(1/4) …… 262
第187図　中間西井坪遺跡の盾形埴輪(1/8) …… 268
第188図　中間西井坪遺跡の家形埴輪(1/8) …… 269
第189図　中間西井坪遺跡の蓋形埴輪(1/4) …… 270
第190図　中間西井坪遺跡の船形埴輪(1/8) …… 271
第191図　今岡古墳の蓋形埴輪(1/4) …… 272
第192図　箱形土製棺１(1/20) …… 276
第193図　箱形土製棺２ …… 277
第194図　割竹形土製棺(1/20) …… 277
第195図　円筒形土製棺(1/20) …… 279
第196図　中間西井坪遺跡出土土製棺の成形手法 … 280
第197図　中間西井坪遺跡出土土製棺の接合手法 … 281
第198図　讃岐地方の土製棺(1/8) …… 282
第199図　中間西井坪２号墳の壷形埴輪(1/4) …… 285
第200図　讃岐地方の壷形埴輪(1/10) …… 289
第201図　埴輪焼成土坑(左：平城宮東院跡下層,
右：中間西井坪遺跡)(1/120) …… 292
第202図　土器焼成土坑の諸例(1/60) …… 293
第203図　高松平野の主要古墳(1/10万) …… 296

表目次

第 1表　四国横断自動車道(善通寺～高松)
建設に伴う発掘調査の概要(1)……　3
第 2表　四国横断自動車道(善通寺～高松)
建設に伴う発掘調査の概要(2)……　4
第 3表　中間西井坪遺跡
平成2・3年度発掘調査作業工程表……　10
第 4表　中間西井坪遺跡
平成7年度整理作業工程表……　11
第 5表　中間西井坪周辺遺跡一覧1
(～古墳時代後期)……　23
第 6表　中間西井坪周辺遺跡一覧2
(～古墳時代後期)……　24
第 7表　中間西井坪周辺遺跡一覧3
(～古墳時代後期)……　25
第 8表　谷3出土遺物一覧1……　70
第 9表　谷3出土遺物一覧2……　71
第10表　谷3出土遺物一覧3……　72
第11表　谷3出土遺物一覧4……　73
第12表　谷3出土遺物一覧5……　74
第13表　谷3出土遺物一覧6……　75
第14表　谷3出土遺物一覧7……　76
第15表　谷3出土遺物一覧8……　77
第16表　1・2号墳出土遺物一覧……　179
第17表　胎土分析報告付表……　223
第18表　胎土分析報告付表……　224
第19表　胎土分析報告付表……　225
第20表　胎土分析報告付表……　226

遺物観察表　凡　例……　305
観察表1　土　器……　307
観察表2　円筒埴輪(円筒埴輪・円筒棺)……　352
観察表3　壷形埴輪……　366
観察表4　器財形埴輪……　368
観察表5　箱形・割竹形土製棺……　376
観察表6　円筒形土製棺……　384
観察表7　土製品……　385

図版目次

巻頭図版１　焼成土坑・谷３遺物出土状態
巻頭図版２　円筒埴輪１類
　　円筒埴輪２ａ類
　　円筒埴輪２ｂ類
巻頭図版３　焼成土坑出土箱形土製棺
巻頭図版４　大形竪穴建物出土割竹形土製棺
巻頭図版５　盾形埴輪
　　家形埴輪
　　船形埴輪

図版　１　１　中間西井坪遺跡から見た本津川下流域……389
　　２　雪の中間西井坪遺跡
図版　２　１　１ｂ区南半部(西から)……390
　　２　１ｂ区北半部(西から)
図版　３　１　２区(西から)……391
　　２　３ａ区(西から)
図版　４　１　３ａ区全景……392
　　２　焼成土坑・谷３埴輪溜まり
図版　５　１　焼成土坑完掘(西から)……393
　　２　焼成土坑遺物出土状態全景(西から)
図版　６　１　焼成土坑遺物出土状態(東から)……394
　　２　焼成土坑土製棺蓋材出土状態
図版　７　１　焼成土坑主軸方向断面(西端)……395
　　２　焼成土坑主軸方向断面(中央西)
　　３　焼成土坑主軸方向断面(中央)
　　４　焼成土坑主軸方向断面(中央東)
図版　８　１　焼成土坑遺物出土状態(中央北)……396
　　２　焼成土坑遺物出土状態(中央南)
　　３　焼成土坑遺物出土状態(中央西)
図版　９　焼成土坑遺物出土状態
　　１　南辺中央……397
　　２　排水溝西部
　　３　南西隅
図版　10　１　焼成土坑・谷３埴輪溜まり(東から)……398
図版　11　１　谷３埴輪溜まり(北から)……399
　　２　谷３堆積状態(ＳＲ０３断面２　北から)
図版　12　谷３遺物１群
　　１　全体(西から)……400
　　２　円筒埴輪
　　３　半裁器台形
　　４　円筒埴輪
　　５　半裁器台形
図版　13　１　３ｂ区ＳＸ０１検出状態(南から)・401
　　２　３ｂ区ＳＸ０１遺物出土状態(南から)
　　３　ＳＸ０１西部遺物出土状態(東から)
　　４　ＳＸ０１東部遺物出土状態(西から)
図版　14　１　３ａ区ＳＸ０２埴輪出土状態(西から)……402
　　２　３ａ区ＳＸ０２埴輪出土状態(西から)
図版　15　１　５区　大形竪穴建物(北から)……403
　　２　５区　大形竪穴建物(南から)
図版　16　１　５区　大形竪穴建物遺物出土状態(北から)……404
　　２　５区　大形竪穴建物遺物出土状態(南から)
図版　17　５区　大形竪穴建物遺物出土状態
　　１　壁溝・円筒埴輪……405
　　２　床・土製棺蓋
　　３　床・土製棺身
　　４　床・土製棺蓋
　　５　床・土製棺身
　　６　床・土製棺小口板
図版　18　１　５区　全景(１・２号墳・大形竪穴建物)…406
図版　19　１　５区　古墳群検出状態(西から)…407
　　２　５区　２号墳全景(西から)
図版　20　１　５区　２号墳全景(南東から)……408
　　２　５区　２号墳全景(南から)
図版　21　１　５区　東壁土層(基本層序４－南部)409
　　２　５区　東壁土層(基本層序４－中部)
　　３　５区　東壁土層(基本層序４－北部)
図版　22　１　２号墳周溝セクション１(西から)・410
　　２　２号墳周溝セクション２(西から)
　　３　２号墳周溝セクション３(北から)
　　４　２号墳周溝セクション４(北から)
図版　23　１　２号墳葺石検出状態(南)……411
　　２　２号墳葺石検出状態(南西)
図版　24　１　２号墳葺石検出状態(西)……412

2　2号墳葺石検出状態(北西)
図版25　1　2号墳(北から)……413
2　1号墳周溝埴輪出土状態1(東から)
3　1号墳周溝埴輪出土状態2(東から)
図版26　1　1号墳くびれ部周溝断面(東から)‥414
2　1号墳前方部周溝断面(西から)
図版27　1　1号墳主体部検出状態(北から)‥‥415
2　1号墳主体部(北から)
図版28　1　工事中発見の3号墳周溝断面
(東から)……416
2　工事中3号墳周溝確認状態(西から)
図版29　1　焼成土坑調査風景(西から)……417
2　2号墳　調査風景(東から)
図版30　3a区　焼成土坑　円筒埴輪・大形壺 418
図版31　3a区　焼成土坑　円筒埴輪……419
図版32　3a区　焼成土坑　蓋形埴輪他……420
図版33　3a区　焼成土坑　箱形土製棺……421
図版34　3a区　焼成土坑　箱形土製棺……422
図版35　3a区　焼成土坑　円筒埴輪……423
図版36　3a区　SX02他　蓋形埴輪……424
図版37　3b区　SX01　土師器……425
図版38　3b区　SX01　土師器……426
図版39　3b区　SX01　土師器・土製品‥427
図版40　4a区　谷3　円筒埴輪……428
図版41　4a区　谷3　円筒埴輪……429
図版42　4a区　谷3　円筒埴輪……430
図版43　4a区　谷3　円筒埴輪・土師器‥‥431
図版44　4a区　谷3　円筒埴輪・
半裁器台形埴輪・
土師器……432
図版45　4a区　谷3　半裁器台形埴輪……433
図版46　4a区　谷3　半裁器台形埴輪……434
図版47　4a区　谷3　半裁器台形埴輪……435
図版48　4a区　谷3　半裁器台形埴輪……436
図版49　4a区　谷3　土師器……437
図版50　4b区　谷3　土師器……438
図版51　4b区　谷3　土師器……439
図版52　4b区　谷3　土師器……440
図版53　4b区　谷3　土師器……441
図版54　4c区　谷3　土師器……442
図版55　4c区　谷3　土師器他……443
図版56　4c区　谷3　土師器……444
図版57　4c区　谷3　土師器……445
図版58　4c区　谷3　土師器……446
図版59　4c区　谷3　土師器……447
図版60　4c区　谷3　土師器・中世土器‥‥448
図版61　4ab区　谷3　箱形土製棺……449
図版62　5区　大形竪穴　土師器・円筒埴輪・450
図版63　5区　大形竪穴　盾形埴輪……451
図版64　5区　大形竪穴　盾形埴輪……452
図版65　5区　大形竪穴　家形埴輪……453
図版66　5区　大形竪穴　家形埴輪……454
図版67　5区　大形竪穴　家形埴輪……455
図版68　5区　大形竪穴　不明器財形埴輪‥‥456
図版69　5区　大形竪穴　不明器財形埴輪‥‥457
図版70　5区　大形竪穴　不明器財形埴輪
・箱形土製棺……458
図版71　5区　大形竪穴　箱形土製棺……459
図版72　5区　大形竪穴　箱形土製棺……460
図版73　5区　大形竪穴　箱形土製棺……461
図版74　5区　大形竪穴　箱形土製棺……462
図版75　5区　大形竪穴　箱形土製棺……463
図版76　5区　大形竪穴　箱形土製棺……464
図版77　5区　大形竪穴　箱形土製棺……465
図版78　5区　大形竪穴　箱形土製棺……466
図版79　5区　大形竪穴　箱形土製棺……467
図版80　5区　大形竪穴　箱形土製棺……468
図版81　5区　大形竪穴　箱形土製棺……469
図版82　5区　大形竪穴　箱形土製棺……470
図版83　5区　大形竪穴　箱形土製棺……471
図版84　5区　大形竪穴　円筒形？土製棺蓋・472
図版85　5区　大形竪穴　円筒形？土製棺蓋・473
図版86　5区　大形竪穴　割竹形土製棺蓋‥‥474
図版87　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……475
図版88　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……476
図版89　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……477
図版90　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……478
図版91　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……479
図版92　5区　大形竪穴　割竹形土製棺……480
図版93　5区　大形竪穴　割竹形？土製棺‥‥481
図版94　5区　大形竪穴　円筒形土製棺……482
図版95　5区　1・2号墳　鉄器……483
図版96　5区　1号墳　円筒埴輪……484
図版97　5区　1号墳　円筒埴輪……485
図版98　5区　2号墳　壺形埴輪……486
図版99　5区　2号墳　壺形埴輪……487
図版100　5区　2号墳　壺形埴輪……488
図版101　5区　2・3号墳　円筒埴輪……489
図版102　5区　3号墳古墳群周辺　円筒埴輪‥490
図版103　5区　古墳群周辺　盾形埴輪
・家形埴輪他‥‥491
図版104　5区　古墳群周辺　家形埴輪他……492

図版105　5区　古墳群周辺　家形埴輪他……493
図版106　5区　古墳群周辺　家形埴輪他……494
図版107　5区　古墳群周辺　船形埴輪他……495
図版108　5区　古墳群周辺　船形埴輪他……496
図版109　5区　古墳群周辺　円筒形土製棺……497
図版110　5区　古墳群周辺　土製棺・円筒埴輪 498
図版111　1b・2区　古代・中世土器……499
図版112　1b・2区　古代・中世土器……500
図版113　1b・2区　古代・中世土器
谷3出土焼土塊……501
付図　焼成土坑出土箱形土製棺蓋材実測図

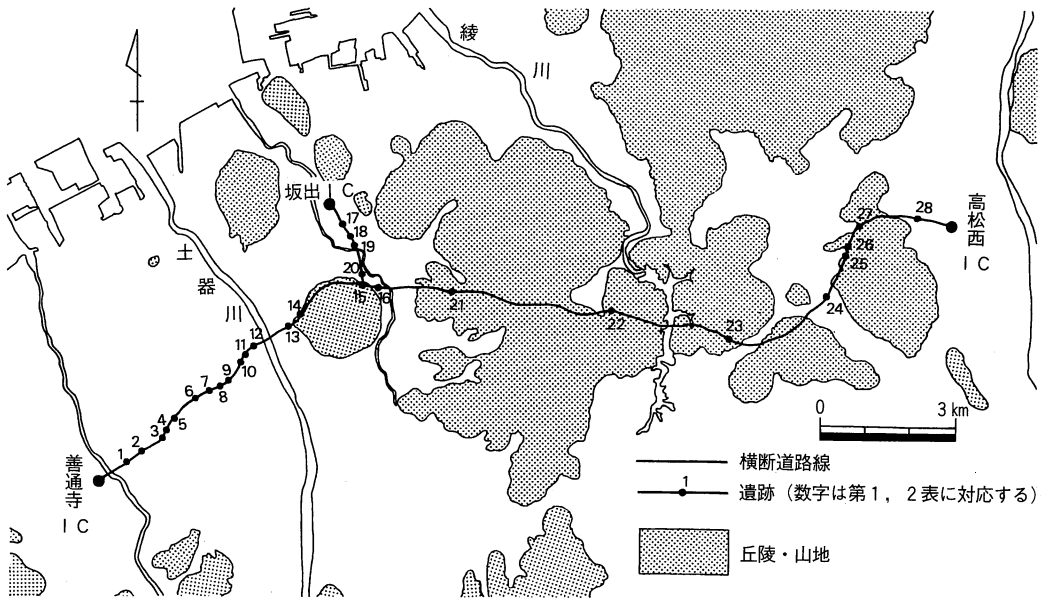
第１章　調査の経緯

第１節　四国横断自動車道(善通寺～高松間建設)に伴う埋蔵文化財調査

四国横断自動車道善通寺～高松間の建設は，同善通寺～豊浜間に引き続き，昭和57年（1982年）１月８日に整備計画が決定され，昭和59年（1984年）11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では，この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に国庫補助事業として分布調査を実施し，これを基に調査対象面積を39万m^2余りと判断した。路線内に所在する埋蔵分化財包蔵地の取り扱いについては，日本道路公団と文化庁の協議により，基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では，これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室および日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度（1987年度）から調査体制などにつ



第１図　四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地（善通寺～高松）

いて協議を開始した。

協議の結果，昭和63年度（1988年度）当初から２ヶ年の予定で本調査を実施すること，整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。これを受けて香川県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に，昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設立すると同時に，専門職員の増員などの措置を実施した。

これと並行して，横断道路線内の埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため，日本道路公団と協議の上，予備調査を実施することになり，用地買収の進捗が著しかった昭和63年３月に実施した丸亀市郡家地区を嚆矢に，条件が整い次第各地区において逐次予備調査を実施の上，本調査の具体計画を立案・実施した。

調査体制の整備に伴い，昭和63年度からの本調査は，香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け，財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

本調査は昭和63年（1988年）４月18日に丸亀市に所在する郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡・三条番ノ原遺跡の３遺跡の調査着手をもって始まり，平成３年（1991年）９月27日の坂出市川津一ノ又遺跡の調査終了によって完了した。この調査成果の整理・報告は調査が終盤に差し掛かった平成３年度から開始し，平成７年度（1995年度）末までに22冊の報告書を刊行し，現在も継続中である。

この間28遺跡316,901㎡の調査を行った。このうち関係諸機関と協議の結果，移築復元がなされた国分寺町六ツ目古墳以外の27遺跡31万㎡余は調査後消滅している。しかし四国横断自動車道建設に伴い実施した善通寺市から高松市に至る香川県中部の広い範囲またがる発掘調査の所見は，本地方のみならず列島全体の歴史的展開の理解に一定の寄与を成し得る筈である。また広範囲に及び連続的に埋蔵文化財包蔵状況を確認したことは今後の周辺地域における文化財保護に重要な情報を与えるものでもある。積極的な成果の活用を望みたい。

No	遺跡名	所在地	面積(m²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
1	龍川五条遺跡	善通寺市原田町	12,300 10,200	元. 6.26～ 2. 3.31 2. 4. 9～ 2.12. 5	竪穴住居・掘立柱建物跡・弥生時代墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器
2	龍川四条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	20,200 1,700 300	元. 7. 1～ 2. 3.31 2. 5.28～ 2.10.24 3. 4. 4～ 3. 6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63. 4.18～元. 2.10 元. 4.10～ 2. 3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7.677	63. 5.15～63.11.26	旧石器ユニット・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町・郡家町	17,099 2,600	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	竪穴住居跡・溝状柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉土器・斎串ほか
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63. 4.18～元. 3.31 元. 4.10～ 2. 3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉土器・灰釉土器
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63. 6.15～元. 3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63. 6.15～元. 2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器
9	川西北・原遺跡	丸亀市川西町	3,033	63.12.12～元. 3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構	
10	川西北・七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町	4,034	63.12.13～元. 3.27	溝条遺構・自然河川	土師器・須恵器
11	川西北・七条Ⅱ遺跡	丸亀市川西町	4,760	元. 2. 2～元. 3.31	掘立柱建物跡・溝条遺構	土師器
12	川西北・鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	12,208	元. 4.10～元. 8.11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器
13	飯野・東二瓦礫遺跡	丸亀市飯野町	3,366	63.12.13～元. 3.27	掘立柱建物跡・溝条遺構・自然河川	土師器・須恵器
14	飯野・東分山崎南遺跡	丸亀市飯野町	300	2. 3. 1～ 2. 3.31		

第1表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積(m^3)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2. 8. 2～ 3. 3.20 3. 9. 2～ 3. 9. 4	弥生～中世掘立柱建物跡・竪穴住居跡・溝条遺構	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2. 5.10～ 3. 1.17	古墳時代竪穴住居跡・溝, 古代～中世建物跡・溝	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2. 5.10～ 3. 2.28 3. 4. 4～ 3. 9.13	弥生時代竪穴住居跡・溝・土坑 古代～中世建物跡・土壙墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀
18	川津下樋遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2. 5.10～ 3. 1.31 3. 7. 1～ 3. 7.16	弥生時代水田・井堰、溝・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2. 5.10～ 3. 3. 8	弥生時代溝・自然河川、中世建物跡・溝	弥生土器・石器・土師器・須恵器
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2. 4.12～ 3. 3.28 3. 7.18～ 3. 9.27	弥生時代竪穴住居跡・建物跡 古墳時代竪穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元. 4.17～元. 5.16		弥生土器・須恵器・土師器
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～ 2.12.26	時代不祥　柱穴・土坑	
23	綾南奥下池南遺跡	綾歌郡綾南町	2,900	元. 5.22～元. 7.24	須恵器窯跡	須恵器
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元. 8.19～ 2. 2.28	弥生時代溝・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2. 4.11～ 2.10. 2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元. 9. 1～元.12.28	前方後円墳（主体部３基）	古式土師器・鉄器
27	国文自六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10. 1～ 2. 2.28	中近世建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元. 8.19～ 2. 3.25 2. 5.10～ 3. 3.25 3. 4. 5～ 3. 7.18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳（３基） 竪穴住居跡・掘立建物跡・溝・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶棺

第２表　四国横断自動車道（善通寺～高松）建設に伴う発掘調査の概要(2)

第２節　高松市中間地区の調査

(1)　分布調査・予備調査の経過

昭和61年度，路線予定地内の埋蔵文化財包蔵状況の確認を目的として，香川県教育委員会が実施した国庫補助事業で，高松西インターチェンジの建設が予定された本地区においても広範に埋蔵文化財包蔵地が広がることが予測された。しかし用地取得前に実施した確認行為のため，試掘調査は伴わず地表面観察に基づく分布状況の確認にとどまったため，包蔵地の広がりは確実視されるものの状況の詳細な把握には至らなかった。

そのため，本調査に先立ち用地確保の進展に伴い，平成元年（1989年）５月～平成３年（1991年）５月の間に計６次の予備調査を実施した。３次予備調査以降は本調査と並行して行っている。本地区において長期間に亘って断続的に予備調査を実施せざるを得なかったのは，用地確保の難航に依るところが大きい。予備調査に限らず埋蔵文化財調査全体が用地確保と工事計画の間で困難を極めた。以下各次予備調査の概要を示す。

なお予備調査はバックホウを使用して，調査担当者の観察の下に地山層以下まで掘り下げを行い，壁面・底面を人力で精査して遺構・遺物の確認に努めた。後に本遺跡丘陵部で旧石器包含層の所在が明らかになった以降は原則的に地山層以下を人力で精査してこれの確認に万全を期した。

なお以下で示す丘陵Ａ～Ｅ等の名称については次章で説明している。

１次予備調査（平成元年５月）

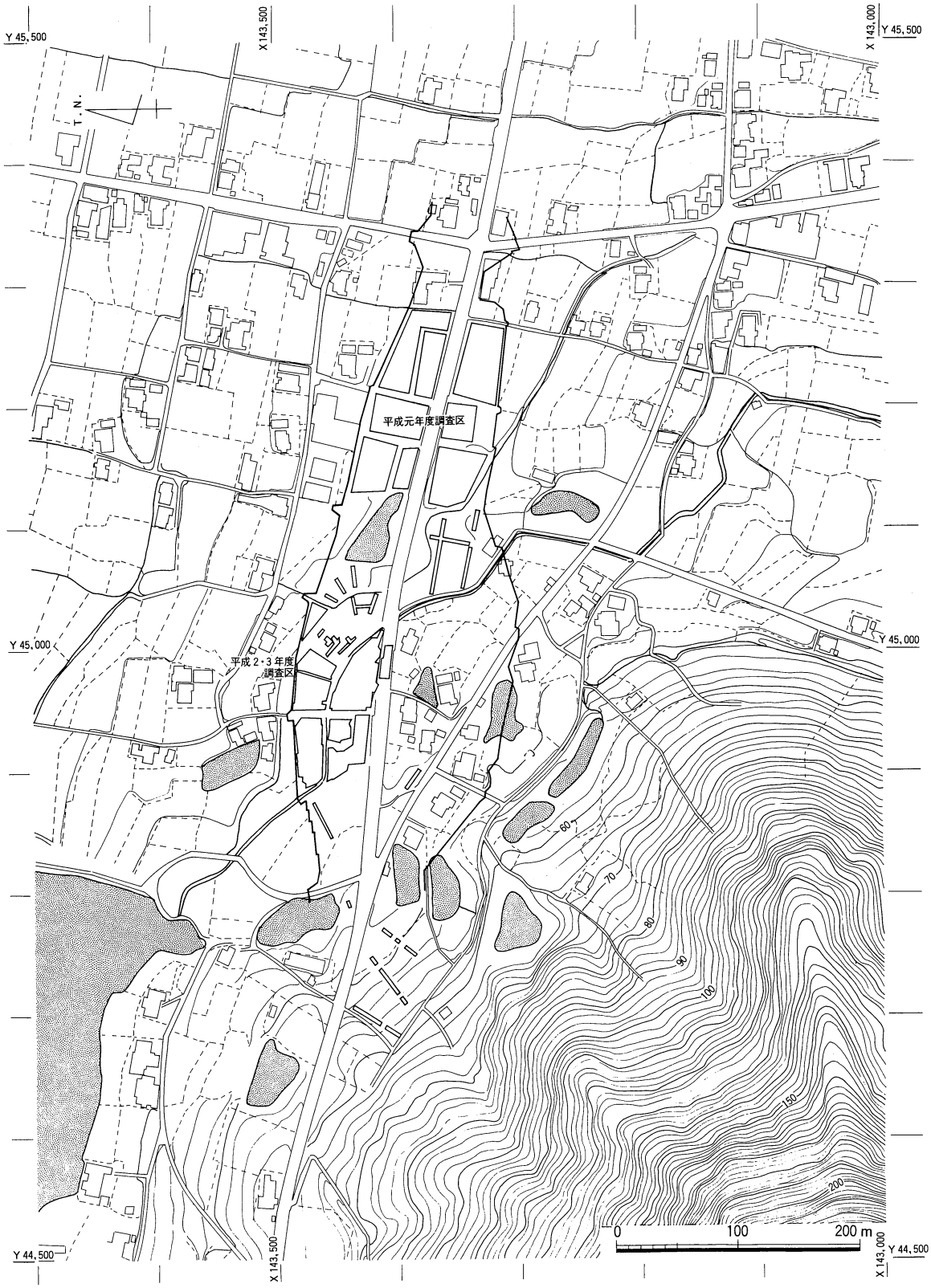
県道西山崎御厩線以東の地区を対象として実施した。トレンチ13本を設定して包蔵状況の確認を行った結果，顕著な遺構・遺物の分布は確認できず，同地点については本次予備調査をもって終了した。

２次予備調査（平成元年６月）

県道西山崎御厩線以西の平地部分と主要県道三木国分寺線以南の丘陵部（丘Ｂ・Ｄ基部）を対象として予備調査を実施した。この段階では当該部分の宅地の多くは退去以前であり，それらを避けたトレンチ設定とならざるを得なかった。本次調査において当該部分のうち平地部には濃密に遺構・遺物が分布すること，丘陵Ｂ・Ｄ基部においてはそれが認められないことを確認した。

なお前者部分を対象として同年８月から本調査を実施した。

３次予備調査（平成２年３月）



第２図　中間西井坪遺跡調査区配置（１/5,000）

平成元年度本調査対象区以西の丘陵部の状況を確認すべく本調査と並行してトレンチ18本を設定して実施した。丘陵A・B・Cおよび谷3部分の確認を行い，丘陵Cに中世遺構が分布すること，谷3に遺物包含層が認められることを確認した。これを受けて丘陵C～谷3を対象地区とする平成2年度本調査計画を立案した。

この段階に至っても丘陵Cの半ば以上は用地確保が完了しておらずその，全域の状況の把握には至らなかった。またそのような悪条件の下での予備調査実施のため，旧石器包含層の分布を確認しきれなかった等後に課題を残した。

4次予備調査（平成2年9月）

平成2年度本調査の進展により，遺跡西部丘陵Cで当初予想以上の遺跡内容が明らかになった事を受け，更に工事計画を考慮して小単位ごとでも用地確保がなされた箇所では逐次予備調査を実施した。

本次調査では丘陵C北東部でトレンチ3本を設定して実施した。当該地区では遺構・遺物は一切確認できなかった。この所見そのものに誤りはないが，これを丘陵C北東部に一般化しうると解釈した担当者の観察は不十分なものであった。

5次予備調査（平成2年12月）

丘陵C南東部・D・E・谷4の一部にかかる用地交渉の進展を受けて実施した。丘陵部では旧石器包含層の分布を念頭に置き地山層以下の精査に重点を置いた。この結果丘陵C東南部で古墳2基・旧石器包含層等を確認し，同地区を対象地として翌年1月から本調査を継続した。一方丘陵D・E及び谷4にはごくわずかな遺物の散布を見るだけで明確な遺構の広がりがないことを確認した。

本次調査では後の本調査と比べても丘陵C東南部の状況をかなりの精度で把握することに成功していることが判る。対象地の地勢を考慮して，適切な位置と規模のトレンチ設定が可能でだったからである。しかし古墳周溝の一部を重機により掘り上げており，予備調査方法，特に遺構の確認手段の点で課題を残した。一方，谷4部分では限られた地点にわずかなトレンチしか設定できず，その所在は確認したもののやはり全体像の把握には至らず，次年度調査に一定の影響を与えることとなった。

6次予備調査（平成3年6月）

丘陵Cに最後に残った宅地部分を対象として，同丘陵北東部で実施した。本調査による丘陵C東部の古墳群確認を受けて，わずかな面積ではあったが個別に予備調査を行った。家屋撤去と工事着手のわずかな間に行った調査で様々な制約から限定されたトレンチ調査

とならざるをえなかった。限定的なトレンチの所見を当該地区に一般化することとなったが，その評価にあたって隣接地点の既予備調査の所見が大きな影響を与えたことは否めない。

以上中間西井坪地区における予備調査の経過を示した。様々な制約から遺跡範囲の精密な把握が本調査前になしえなかった点がこの経過の特徴である。また同じ理由による制約の結果，各次調査において必ずしも理想的な予備調査を成しえなかったことも事実であり，これまでにも記したように様々な形で次段階の作業に影響を与えた。このことは今後の調査計画・遂行に生かされなければならないであろう。

また本遺跡のように変化に富んだ微地形部分に所在する遺跡を限られた調査手法によって把握することの困難さもこの経過は示している。このような調査にあたってはまず十分に周辺地形を理解することに意を尽くさなければならないし，個別の調査所見の限界にも留意しなければならないであろう。

(2) 中間西井坪遺跡西半部（平成２・３年度調査区）における調査経過

第３図　中間西井坪遺跡西半部調査区割り図（１/1,200）

ここでは本報告書で対象とする中間西井坪西半部の調査経過（平成２・３年度調査）に限って，その経過を示す。遺跡東半部を対象とした平成元年度調査の経過は同地区報告書に拠られたい。

遺跡西半部，丘陵Ｃ周辺地区の調査は平成２年５月～平成３年７月の14ヶ月間実施した。調査面積は予備調査部分を含めて9950㎡となる。用地取得の遅れと工事計画の間に立って，調査は必ずしも遺跡内容の把握に最も合理的な手順で行えたわけではない。特に平成２年度後半以降は隣接工事との細かい調整が重要な比重を占め，平成３年度の調査末期には頂点に達した。

同地区は平成元年度末に実施した３次予備調査の結果を受けて具体計画が立案された。この段階で遺跡の広がりが確認された丘陵Ｃ～谷３地区のうち，用地確保が終了して調査着手可能な4500㎡を当初の対象地として平成２年５月10日に本調査を開始した。事後隣接地点の用地確保を待って，逐次予備調査を実施し，必要な部分は本調査対象地に追加した。その経過は前項で既に述べた。

平成２年度調査では当初，担当者として調査員２名を配置し，前年度調査同様に発掘調査に伴う掘削・排土処理・仮設工事などについて工事請負方式を採用した。因みに(株)松村組が請負者となった。しかし丘陵中東部において，調査開始後，当初予期していなかった良好な旧石器包含層の分布が明らかとなり，８月末より直営調査方式を併用した。また同時に調査スタッフの拡充もはかった。11月に当初対象地区の調査が終了した後，追加調査地区は直営方式単独で継続した。

平成３年度は用地確保の遅れた宅地部分など点在的な小単位ごとに，条件が整い次第逐次調査を行った。またこの段階では隣接する調査完了地区や調査対象地区外の工事が本格化し工事工程との調整や調査遂行上の安全管理が大きな比重を占めることとなった。かなりの困難が伴う調査であったが平成３年７月18日に最後の調査区の作業を終えて，四国横断自動車道善通寺～高松間建設に伴う中間西井坪遺跡の発掘調査を完了した。

なお平成２年度調査では遺構の図化・調査区の撮影に航空測量方式を採用して調査の効率化を図ったが，計8680㎡の面積に対して述べ９回の撮影と断片的な作業の連続となった。平成３年度は個別調査区が小面積であったためこの方式は採用していない。

また平成２年度調査において埴輪焼成土坑などの検出があり，２年８月，３年２月の２回に亘って報道機関に対する資料公開の機会を設けた。

地区	内容	現況	平成2年										平成3年							
			3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	
1a	柱穴など	水田				―														315 ㎡
1b	柱穴・溝 下層（旧石器）	水田	○			―	―	―												850 ㎡
2	柱穴・溝	宅地	○			―	―	―												966 ㎡
3a	焼成土坑・柱穴 下層（旧石器）	水田	○			―	―	―	―											479 ㎡
3b	溝 下層（旧石器）	水田	○				―	―		―	―									120 ㎡
3c	溝 下層（旧石器）	宅地														―		―		500 ㎡
4a	谷・埴輪溜 下層確認	水田							―	―										744 ㎡
4b	谷・土器溜	水田	○					―												560 ㎡
4c	谷・土器溜	水田					―	―												504 ㎡
5	古墳群・竪穴 下層（旧石器）	水田										○	―	―	―	―				1770 ㎡
5b	溝 下層（旧石器）	水田														―	―			160 ㎡
5c	溝	水田															―			50 ㎡
5d	古墳	宅地														―	―	―		125 ㎡
5e	古墳	水田														―	―			150 ㎡
5f	古墳	県道																	―	480 ㎡

○：予備調査　――：本調査

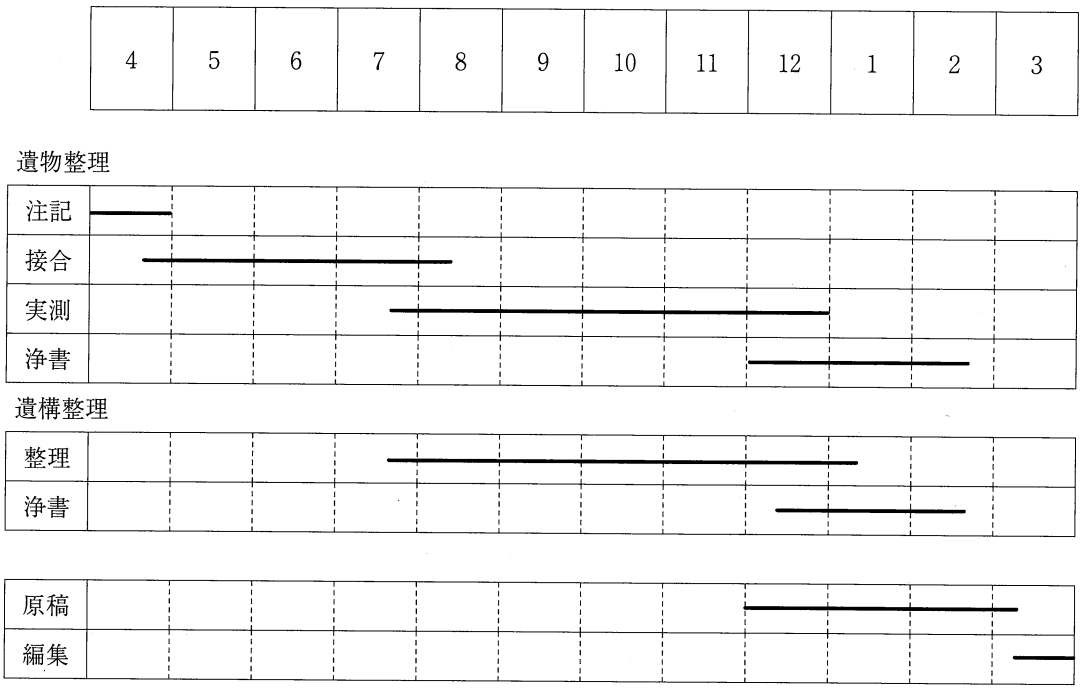
平成元年５月　トレンチ13本
平成元年６月　トレンチ８本
平成２年３月　トレンチ18本　480 ㎡
平成２年９月　トレンチ３本　対象地450 ㎡
平成２年12月　トレンチ11本　対象地5,500 ㎡古墳群の確認

第３表　中間西井坪遺跡　平成２・３年度発掘調査作業工程表

⑶ 整理作業の経過

本報告書に掲載する遺跡西半部（旧石器を除く）資料に関する整理作業は平成７年４月１日～平成８年３月31日に香川県埋蔵文化財調査センターにおいて行った。基礎整理作業の一部は既に行っていたが，注記作業の大部分が未了であったため調査員１名，整理作業員８名の体制で作業を実施した。18リットルコンテナに換算して200箱強の遺物の注記・選別・接合図化・撮影作業と実測図・写真などの調査記録類の整理・浄書を行い報告書を作成した。出土遺物総量は普通程度であったが，土製棺・器財形埴輪など複雑な構造を持ちながらも参考資料に乏しい資料が多数含まれており，特に接合・図化作業は難渋を極めた。

なお遺物写真撮影は外部に委託し，出土遺物の胎土分析は岡山理科大学　白石純氏に依頼した。



第４表　中間西井坪遺跡　平成７年度整理作業工程表

平成２年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	太田　彰一
課長補佐	菅原　良弘
副主幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
埋蔵文化財係長	大山　真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	十川　　泉
次長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
主査	山地　　修
主事	三宅　浩司
主事	斉藤　政好
調査参事	見瀬　　護
係長	渡部　明夫
係長	藤好　史郎
係長	真鍋　昌宏
文化財専門員	鍋井　一視
技師	大久保徹也
調査技術員	萬木　一郎
調査技術員	尾方ひとみ

平成３年度調査体制

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	中村　　仁
主幹	菅原　良弘
課長補佐	小原　克己
副主幹	野網朝二郎
総務係長	宮内　憲生
埋蔵文化財係長	藤好　史郎

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	松本　豊胤
次長	安藤　道雄
総務係長	加藤　正司
総務係長	土井　茂樹
主査	山地　　修
係長	今田　　修
主任主事	斉藤　政好
係長	真鍋　昌宏
主任技師	大西　義則
技師	森下　英治

平成７年度整理体制

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長	高木　尚
課長	藤原　彰夫
課長補佐	高木　一義
副主幹	渡部　明夫
総務係長	山崎　隆

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長	大森　忠彦
次長	真鍋　隆幸
総務係長	前田　和也
主査	西村　厚二
主任主事	西川　大
主任文化財専門員	廣瀬　常雄
文化財専門員	大久保徹也

第２章　立地と環境

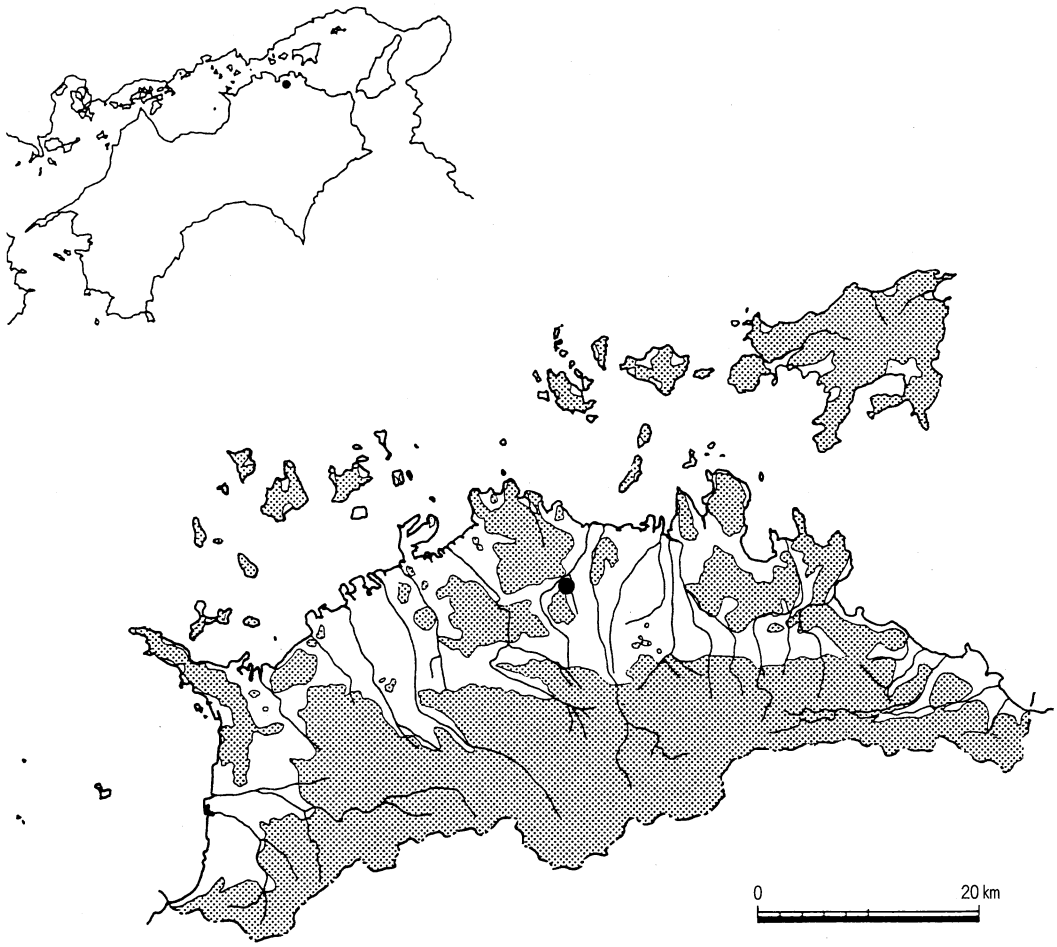
中間西井坪遺跡は香川県東部の高松平野西南縁，行政区分では香川県高松市中間町西井坪に属し，２級河川本津川古川の流域に位置する。高松市中間町は1956年に高松市と合併する以前は香川郡檀紙村に含まれ，近世には香川郡中間村，中世以前には香川郡中間郷に含まれ，その北部を占める。19世紀前半の記録（「天保９年御領分明細記」）では中間村は村高773石余となる。

第１節　地理的環境

1.　讃岐国

香川県（旧讃岐国）は四国北東部にあって中国地方に小さく突出する。北は瀬戸内海中部の群小島嶼が密集する備讃瀬戸を挟んで岡山県（旧備前・備中国）に相対する。南は標高1000ｍ前後の阿讃山地によって四国中央部を東西にほぼ貫通する吉野川流域（徳島県：旧阿波国）と隔てられる。西端では海岸線に迫る阿讃山地裾部の狭隘な平地によって愛媛県（旧伊予国）につながる。東西約92㎞，南北約61㎞と間口の割には奥行きのない帯状を呈する。また山地によって遮られ，連絡路が限られる南方を除いて，他３方は海に面し，西から燧灘，備讃瀬戸，播磨灘に大きく開いている。

さて香川県は面積約1800㎢と全国最小である。（更に中世以前に小豆郡が備前国に属するとすれば讃岐国の領域は更に狭くなる。とはいえ瀬戸内海に注ぐ中小河川が形成する小平野群が，南の阿讃山地から派生して海岸部に突出する幾多の山塊・丘陵群によって隔てられ，この狭隘な版図ですら，変化に富んだ小地域群の集合体となっている。その代表的なものだけでも西部の燧灘沿岸には柞田川・財田川が形成する観音寺平野，中部には高瀬川流域の三野平野，弘田川・金倉川・土器川・大束川からなる丸亀平野，綾川流域の綾北平野，東部には本津川・香東川・春日川・新川からなる高松平野と，鴨部川・津田川流域の狭隘な平地群や播磨灘沿岸の海岸小平野群がある。この地方ではいずれの河川も小規模



第4図　遺跡位置図

で流量に乏しいため，それらが河口部に形成する沖積地は一般的に狭い。またそ沖積層によって被覆されていないむき出しの洪積層が意外に海岸線に近い地点まで延びている。その結果一見平坦地形の連続のように見える丸亀平野や高松平野でも各河川水系の間は相対的に高燥な扇状地形が広く分布し，それらによって隔てられている。そして令制下の郡がほぼこうした完結的な河川水系単位に設定されていることからも，それらが一定程度の政治経済的単位をなしたことを示している。

更に本地方ではこのような政治経済単位が原則的には海岸線に沿って東西に並ぶことに注意しなければならない。個別小地域は独自にそして直接的に外部と交通する条件を有しているのである。狭隘な地域に過ぎないものの瀬戸内海中・東部に広く間口を開く位置関係にあることと共に，このことは全く自然的な条件であるが本地方の歴史的展開を理解する上では重要な材料であろう。

2. 高松平野（令制下香川郡・山田郡）

高松平野は香川県東部に東西はそれぞれ瀬戸内海に大きく突出した屋島・立石山山地と五色台山地によって画され，中央には独立丘の石清尾山山地が張り出す。その間の海岸線は東西10km余を測る。西縁は五色台山地・堂山山地・香南台地・千疋丘陵が連なり，わずかに五色台山地東南端の袋山と堂山山地北端の伽藍山の間の本津川の形成する隘路をもって国分寺の小平地から綾川流域綾北平野に連絡する。また南縁は中央に由良山・上佐山山地とそれから派生する台地が大きく張り出し，その東西を新川水系と香東川水系が大きく抉り込む。東縁は屋島・立石山山地が南北に連なる障壁をなし，わずかに南縁丘陵部とそれらを分かつ新川流域の低地が鴨部川・津田川流域など東部諸地域へ連なる回廊をなす。

高松平野は新川・春日川・香東川・本津川の４河川によって形成されるが，これらも例外なく流量は乏しく小規模である。したがってこれらの河川活動によって形成されるいわゆる沖積地は広くても現海岸線からせいぜい３km前後の範囲に過ぎない。その背後には沖積層に被覆されない台地・扇状地形が大きく広がる。平野東部の新川・春日川流域の低地帯以外では，ほぼ石清尾山山地以南はこのような地形が展開し，香東川・本津川の現旧流路が刻んだ開析谷が網目状に走り，その痕跡は現地表の凹地や溜め池の連続として容易に観察できる。

さて本平野は令制下に山田・香川の２郡が設置される。前者は平野東部の狭小な低地帯を中心にほぼ新川・春日川流域をその領域とする。後者は平野中西部，香東川・本津川（ただし古川合流点以南を除く。）流域を収める。したがって中間西井坪遺跡は旧香川郡の西端に位置することになる。ところで香東川は現在こそ石清尾山西麓に沿って北流するが，近世初頭の付け替え以前は同山地の東縁を巡って，ほぼ現御坊川に相当する流路が本流であったとされることは河口部の沖積地面の発達程度から裏付けられる。むろん治水工事の未発達な段階においては特に河川下流域では流路は固定せず幾多に分かれ錯綜していたことは想像に難くない。その意味で現流路も近世以前においてもある段階ではそれが副次的な流路として機能した可能性が高いが，高松平野西部，五色台山地と石清尾山山地間の狭隘な平地は本津川に専ら拠るところが大きいといえよう。

3. 本津川古川流域（旧香川郡西部）

香東川は高松平野最大の河川で阿讃国境付近の山深く，木田郡三木町津柳に発する。山

間を縫って流れ，平野南端の香川郡香川町岩崎橋付近からは千疋丘陵と上佐山山地を分かつようにまっすぐ北流し，先に見たように石清尾山山地の南方で本来は分岐する。香東川左岸は千疋丘陵に続く香南台地や平野西縁の堂山山地の裾部をなす扇状地形が特に発達し，この部分の右岸に比べ相対的に高燥な土地条件をなす。このことによって香東川は専ら右岸方向に複雑に分岐して流れ，平野中央部の広い範囲を流域とする。

本津川古川はこの香東川左岸の扇状地帯を流れる小河川である。香南台地中の由佐を発して堂山山地東麓に沿って北流し，西庄に発して堂山山塊・鷲ノ山山塊間の隘地を，五色台南麓の落ち水を集めつつ流下する本津川と高松市・国分寺町境の袋山南方で合して，五色台西麓に沿って高松市香西東町で瀬戸内海に注ぐ。両川の合流部以北，特に高松市鶴市町以北では上流からの堆積物でむしろ天井川に近い状況を呈し，現在では長大な堤防によってその流路は固定されているものの，それ以前においては五色台・石清尾山で，東方の香東川支流と交わりながら頻繁に流路を変更しつつこの部分の低地帯（本津低地帯）を形成している。

しかし合流部以南においては両川とも地表を深く開析して流下する。特に中間西井坪遺跡の面する古川では香南台地から延びる段丘面を深く開析して，幅20ｍ内外の谷状地を形成する。縁辺の浸食崖は高松市西山崎町付近で部分的に３ｍ前後に達し，合流部に近い高松市檀紙町付近でも1.5ｍ前後を測る。したがって古川流域では水田面と現河床との比高は軒並み３ｍ以上にもなり，もとより流量の乏しい古川をこの地域の灌漑水源として利用することは困難である。実際現在でも古川を潅漑水源として利用しているのは遙か下流東岸の飯田町中北部地域であって，本津川古川流域では本川は域外排水路としてしか機能していない。

なお本津川古川流域が令制下香川郡中間郷に比定できる。本津川合流部以北は香川郡笠居郷に属する。東方香東川流域には，扇状地帯の東縁から香東川左岸の南北に細長い地域が川部郷に比定でき，石清尾山山地南方の香東川分岐点周辺に成合郷，同山地西方の支流域に飯田郷が並ぶ。

本津川古川に面する堂山山地裾部は浸食によって複雑に谷状地形を発達させている。特に次の３地点では顕著である。日蓮宗の古刹本堯寺の所在する堂山南東麓の高松市岡本町付近，綱敷八幡の所在する堂山北東麓の同市西山崎町～中間町南部と，六ツ目山・伽藍山間の谷部である。中間西井坪遺跡はこの地域に属し，旧南海道もこの谷を抜けて国分寺の平地に至ると推定されている。

これらの地域は大きく見れば幅１㎞内外，奥行き0.5㎞程度の谷状地形ないしはその複

合をなし，その前面に本津川古川に張り出す小規模な扇状地形を発達させている。さらに堂山山地を下る落ち水が複雑にこれを穿ち微細な浸食谷を複雑に入り組ませ微地形を変化に富んだものとしている。そしてわずかばかりの流水を本津川古川に注いでいる。

4. 本津川古川流域の水利と潅漑

さてこれまでの記述で，本津川古川流域の地形の概要を示してきたが，この地域の特色を理解するためには，こうした地理的条件に規定されたこの地域の潅漑システムの特色にも目を配る必要がある。

既に述べたように扇状地帯を深く開析して流れ，なおかつ水量に乏しい本津川古川は直接的にはこの地域の潅漑水源としての役割は乏しい。このため高松市岡本町・西山崎町・中間町・檀紙町では堂山山麓部の谷地形を利用した群小のため池が多く築かれている。特に先に述べた3地区，中小の谷地形が複雑に錯綜する伽藍山・六目山間（檀紙町・中間町），堂山・六目山間（西山崎町），堂山東南麓（岡本町）に集中する。とはいえいずれも貯水量に乏しい小規模なものでそれぞれの小谷の前面に展開する狭小な耕作地を潤すことを前提としており，基本的に地区内で完結する小規模な潅漑システムである。

一方，丘陵東縁に沿って大規模な潅漑用池が南北に展開する。小田池・奈良須池・御厩池・衣掛池である。これらは相互に連結され香東川上流で取水した用水を蓄えて，本津川流域を含めた香東川左岸の扇状地帯を広く潅漑する。近世初頭の改修記録が見られるものの，その規模から見て先の群小溜め池よりも後出的なシステムであることは間違いない。現在ではこの地域の潅漑の圧倒的に主要な部分はこれに拠っている。このほか本津川古川右岸の扇状地帯に，古川旧流路の刻んだ凹地を利用した溜め池が少数点在する。また西山崎から正箱で本津川古川に設けた堰は下流東岸の檀紙町北部の水源であって直接この地域に供されているわけではない。また本津川古川がそうであるように，東方の香東川も，かなり上流より揚水しない限り，左岸の扇状地帯の潅漑水源としては利用困難である。

このように本津川古川流域では願在見るような規模での域外の水源に頼る広域的な潅漑システムを整備しない限りは，小規模で完結的な潅漑システムが個別的に並立せざるを得ない。水利潅漑の点に限れば周辺諸地域に対して閉鎖的な関係にあったといえるであろう。そして，おそらく近世初頭からさほど隔たらない時期以前の長い時代，そのような事態が継続したものと考えられる。このことは歴史的な展開を検討する上で重要な条件の一つであろう。

5. 中間北部地域

中間西井坪遺跡は南北に連なる堂山山地の北端近く，六ツ目山と伽藍山の間に形成された東向きの谷部南斜面，つまり六ツ目山の北麓に位置する。この谷の出口を大きく遮断するように扇形に御厩池が築かれている。本津川古川までは直線で約1.2kmを測る。谷の正面，本津川古川の手前には小規模な独立丘津内山が所在する。谷の両肩をなす伽藍山東麓と六ツ目山北麓斜面は無数の小開析谷が穿たれ，残された山麓斜面が両側から手指状に並んで谷中央部に向って突出する。ほぼ御厩池堰堤の前面あたりまでは谷出口にこの谷が形成する小規模かつ局所的な扇状地が見られるが，更にその前面には平野西部に連続する相対的に平坦な香東川左岸の扇状地帯が続き，いわゆる条里地割と目されるほぼ一町方格の地割が展開する。

先に述べたように，旧南海道は六ツ目山北麓側斜面を通ってこの谷を遡り，通称六ツ目峠を抜けて国分寺の平地に降り，更に鷲ノ山山地北麓をかすめ，綾坂を越えて綾川流域，旧阿野郡甲知郷に所在する讃岐国府に至ると推定される。また川沿いに北上すれば笠居郷を経ておよそ5kmで海岸線に到達する。このように本地域は平野西縁部に南北に連なる本津川古川流域の一小単位をなすと共に，南海道沿線にあたり，主要な東西交通路上にも位置するわけである。

第2節　歴史的環境

本報告の主要部分を占める古墳時代前期資料を理解するにあたって，直接的に参考となる弥生時代から古墳時代の高松平野の様相についてここで整理しておく。とはいえ全般的な評価は困難なため，さしあたって必要と思われる分野に限定して述べることにしたい。

1. 弥生時代の高松平野

(1) 集　落

単独の弥生墓や単発的な青銅製祭器出土地点を除き，集落遺跡の可能の高い遺跡は現状で前期16，中期20，後期28を数える。しかし多くは近年の大規模調査によって新たに確認した遺跡で，従来相対的に少なかった中期前・中葉の遺跡もこの中に多く含まれる。調査が決して平野部全域で同じ精度で進展しているとは言いがたい状況では，この数値を固定

的にとらえて細かな議論を展開することは危険であろうが，後期に向けてなだらかな増加傾向は認めてもよいであろう。

個々の集落構成の具体像を知りうる例はまだ乏しいが大まかに見て浴長池Ⅰ・Ⅱ遺跡のように数棟以下の竪穴住居とせいぜい若干の掘立柱建物からなる小規模な単位と，上天神遺跡4区や空港跡地遺跡の一部のように多数の住居や建物が密集する相対的に大規模な単位との差が基本的には存在する。上天神遺跡の成果に拠れば後者のような大規模な集落単位においては外来系の土器その他の出現頻度が高く，物資流通の結節点として機能したことが予測できる。しかい前者と想定される遺跡数が今のところは圧倒的に多く，そのような分散的な居住形態が当該時期の一般的なあり方であろう。このことは弥生中期以降，本地域において環濠集落が消滅する現象と関連するかもしれない。

また同一地点において長期間継続的に営まれる集落は本地域では確認できていない。多くは同じ地点でせいぜい連続して2型式程度の存続期間しか持たない。

(2) 生　産

弥生時代以降の基幹的な生産部門である農業生産については，水田遺構の確認や木製品を中心とする農具の検出例の増加によってその技術的水準の実態と変遷が具体的に復元されうる段階に達している。また上天神遺跡等で確認した大形水路や空港跡地遺跡で明らかにされた「出水」遺構の存在など，灌漑技術に関する知見の増加も重要である。さらに前者では既に前期後葉には大規模な潅漑水路が整備され始めていることが明らかになった。再び上天神遺跡等，高松東道路関係の調査所見を参照すると，当該時期の平野中央部では香東川をはじめとする主要河川支流が網目状に錯綜し，まだ河川として機能する小水流が東西方向では200～400m間隔で走る。おそらく当該時期の技術水準から見て，これら小河川支流によって分断された紡錘状をなす小単位が，基本的な潅漑単位であったことが予想できる。実際，高松東道路関係調査では，遅くとも前期末葉にはそれごとに基幹的な大形水路が整備されはじめ，個別集落の断続性とは対照的に長期にわたって維持され続けたことが予測できる。

(3) 集団関係

当該時期の平野諸地域の集団間の連結と交流を理解するには，現時点では土器様式とその移動の検討が有力である。例えば香東川下流域では後期段階には下川津B類様式が製作

第５図　高松平野西半部遺跡分布図（１/60,000）

No	遺跡名	所在地	内容	時期
A	中間西井坪遺跡	高松市高松市中間町西井坪	集落・埴輪製作工房	旧石器～近世
B	中間西井坪古墳群	高松市高松市中間町西井坪	前方後円20m　円墳2	古墳前期後半・中期後半
1	西畠遺跡	高松市生島町	散布地	旧石器
2	浜津神社南遺跡	高松市神在川窪町	散布地	
3	弾正原古墳	高松市神在川窪町	横穴式石室墳	古墳後期後半
4	木野戸古墳	高松市中山町	古墳	
5	横立山経塚古墳	高松市中山町	積石前方後円34m～　竪穴石槨　埴輪	古墳前期末
6	横立山東麓古墳群	高松市中山町	1号墳　箱式石棺	古墳後期前半
7	住吉神社古墳	高松市神在川窪町	円墳　竪穴石槨？埴輪	古墳後期前半
8	白骨古墳	高松市神在川窪町	箱式石棺	
9	原経塚古墳	高松市中山町原	積石円墳？	古墳前期
10	桑崎古墳	高松市中山町桑崎	横穴式石室墳	古墳後期
11	沢池西古墳	高松市鬼無町是竹	横穴式石室墳	古墳後期
12	かしが谷古墳群	高松市鬼無町是竹	1・2号　円墳　竪穴石槨・箱式石棺	古墳前期
13	佐料遺跡	高松市鬼無町佐料	散布地	縄文後期・弥生後期
14	虎池西古墳	高松市鬼無町佐料	古墳	
15	善師垣古墳群	高松市鬼無町佐料	横穴式石室墳？	古墳後期
16	今岡古墳	高松市鬼無町佐料・佐藤	前方後円墳61m　箱形土製棺　埴輪	古墳中期初
17	首取山古墳	高松市鬼無町	箱形土製棺	古墳中期初
18	山の神1号墳	高松市鬼無町佐藤	箱式石棺	
19	鬼無大塚古墳	高松市鬼無町佐藤	大形横穴式石室墳	古墳後期後半
20	平木古墳群	高松市鬼無町佐藤	大形横穴式石室墳	古墳後期後半
21	神高池古墳群	高松市鬼無町山口	横穴式石室墳	古墳後期後半
22	古宮古墳	高松市鬼無町山口	大形横穴式石室墳	古墳後期後半
23	空家古墳	高松市鬼無町山口	横穴式石室墳	古墳後期
24	山野塚古墳	高松市鬼無町山口	横穴式石室墳	古墳後期
25	山口龍神社古墳	高松市鬼無町佐藤	古墳	
26	山口山頂古墳	高松市鬼無町山口	古墳	
27	相越古墳	高松市鬼無町山口	前方後円墳？	
28	山口遺跡	高松市鬼無町山口	散布地	
29	桃太郎神社西遺跡	高松市鬼無町鬼無	散布地	古墳後期
30	鬼塚古墳	高松市鬼無町鬼無	散布地	
31	袋山古墳	高松市鬼無町鬼無	前方後円墳？	
32	衣懸古墳	高松市鬼無町鬼無	前方後円墳？（伝土製棺）	
33	王墓古墳	高松市鶴市町大暮	円墳　埴輪	古墳後期前半
34	相作牛塚古墳	高松市鶴市町相作	円墳　竪穴石槨　馬具・挂甲・埴輪	古墳後期前半
35	相作馬塚古墳	高松市鶴市町相作	円墳	
36	青木1号墳	高松市飯田町青木	円墳　埴輪	古墳後期前半
37	中森1号墳	高松市檀紙町中森	円墳	古墳後期後半
38	中森2号墳	高松市檀紙町中森	古墳	古墳後期後半？
39	御厩大塚	高松市御厩町大塚	大形横穴石室墳	古墳後期後半
40	正箱遺跡	高松市檀紙町正箱	集落	弥生中・奈良

第5表　中間西井坪周辺遺跡一覧1（～古墳時代後期）

No	遺跡名	所在地	内容	時期
41	薬王寺遺跡	高松市檀紙町薬王寺	集落	中・近世
42	禿塚遺跡	高松市檀紙町禿塚	集落	古墳後期～
43	西山遺跡	高松市御厩町西山	散布地	古墳後期
44	御厩天神社古墳	高松市御厩町西山	前方後円墳30m　埴輪	古墳中期後半
45	御厩池古墳	高松市御厩町池内	横穴式石室墳？	古墳後期
46	三つ塚古墳	高松市御厩町池内	横穴式石室墳	古墳後期
47	山王神社古墳	高松市御厩町池内	古墳	
48	うたい塚古墳	高松市御厩町池内	古墳	
49	加藍山東麓古墳	高松市御厩町池内	古墳	
50	御厩池遺跡	高松市御厩町池内	散布地	
51	新池東遺跡	高松市中間町	散布地	
52	矢塚北古墳	高松市中間町峠	箱式石棺	
53	矢塚南古墳	高松市中間町峠	箱式石棺	
54	弓塚下古墳	高松市中間町竹藪	横穴式石室墳？	古墳後期
55	西山崎1号墳	高松市西山崎町	円　葺石？	
56	西山崎2号墳	高松市西山崎町	円　箱式石棺	
57	西山崎3号墳	高松市西山崎町	古墳	
58	西山崎4号墳	高松市西山崎町	古墳	
59	西山崎古墳群	高松市西山崎町	円墳10基以上　埴輪	古墳中期？
60	馬塚古墳	高松市西山崎町	古墳	
61	犬のくそ塚	高松市西山崎町	古墳	
62	（包蔵地）	高松市中間町	散布地	古墳後期～
63	（包蔵地）	高松市西山崎町	散布地	
64	本堯寺北1号墳	高松市西山崎町上所	円墳　竪穴石槨　円筒形土製棺	古墳中期前半
65	本堯寺北2号墳	高松市西山崎町上所	円墳　土師器	
66	本堯寺西古墳	高松市西山崎町上所	横穴式石室墳	古墳後期
67	奈良須池古墳	高松市岡本町	横穴式石室墳？	古墳後期
68	立石神社古墳	高松市岡本町	横穴式石室墳？	古墳後期
69	岡本配水池北遺跡	高松市岡本町	散布地	
70	金比羅社遺跡	高松市岡本町	散布地	弥生～古墳後期
71	（包含地）	高松市岡本町	散布地	古墳後期
72	下ノ山遺跡	高松市郷東町	中広銅矛埋納	弥生中期
73	西方寺古墳群	高松市西宝町	横穴式石室墳？3基	古墳後期
74	木里神社古墳群	高松市郷東町	横穴式石室墳	古墳後期
75	御殿神社古墳群	高松市鶴市町	横穴式石室墳4基	古墳後期
76	御殿貯水場古墳群	高松市鶴市町	横穴式石室墳3基	古墳後期
77	切通し積石墳群	高松市西春日町	積石円墳2基以上　竪穴石槨	古墳前期
78	野山古墳群	高松市西春日町野山	横穴式石室墳4基	古墳後期後半
79	浄願寺山古墳群	高松市飯田町・西春日町	横穴式石室墳23基	古墳後期後半
80	浄願寺山南古墳群	高松市飯田町・西春日町	円墳2基	
81	がめ塚古墳	高松市飯田町	前方後円墳27m	古墳前～中期
82	片山池古墳群	高松市西春日町	横穴式石室墳3基	古墳後期後半
83	南山浦古墳群	高松市西春日町	横穴式石室墳（9号墳大形石室）	古墳後期後半

第6表　中間西井坪周辺遺跡一覧2（～古墳時代後期）

No	遺跡名	所在地	内容	時期
84	北山浦古墳群	高松市西春日町北山浦	横穴式石室墳3基	古墳後期後半
85	奥ノ池古墳群	高松市西春日町	横穴式石室墳20基以上？	古墳後期後半
86	摺鉢谷北尾根東古墳群	高松市西春日町	積石円墳　3基	古墳前期
87	摺鉢谷北尾根古墳群	高松市西春日町	横穴式石室墳7基	古墳後期
88	摺鉢谷古墳群	高松市峰山町	横穴式石室墳8基	古墳後期後半
89	峰山墓地古墳群	高松市西宝町	横穴式石室墳4基？	古墳後期後半
90	摺鉢谷9号墳	高松市峰山町・西宝町	積石前方後円墳27m	古墳前期初頭
91	猫塚古墳	高松市峰山町・鶴市町	積石双方中円墳100m　竪穴石槨	古墳前期前半
92	姫塚古墳	高松市峰山町	積石前方後円墳42m　埴輪	古墳前期後半
93	小塚古墳	高松市峰山町	積石前方後円墳17m	古墳前期
94	石船塚古墳	高松市峰山町	積石前方後円墳58m　刳抜石棺　埴輪	古墳前期末
95	鏡塚古墳	高松市峰山町	積石双方中円墳75m	古墳前期
96	北大塚東古墳	高松市峰山町	積石方墳10m	古墳前期
97	北大塚古墳	高松市峰山町	積石前方後円墳40m	古墳前期
98	北大塚西古墳	高松市峰山町	積石前方後円墳19m	古墳前期
99	鶴尾神社古墳群	高松市西春日町	積石円墳4基	古墳前期（5号：弥生後期前半？）
100	鶴尾神社4号墓	高松市西春日町	積石前方後円形墓40m	弥生終末
101	稲荷山西尾根古墳群	高松市西春日町	積石円墳2基	
102	稲荷山姫塚古墳	高松市室新町・宮脇町	積石前方後円墳54m	古墳前期後半
103	稲荷山北端古墳群	高松市宮脇町稲荷山	積石円墳3基以上	古墳前期
104	稲荷山古墳群	高松市室新町紫雲山	積石円墳2基	古墳前期
105	摺鉢谷東古墳群	高松市峰山町	積石円墳13基	
106	摺鉢谷遺跡	高松市峰山町	集落？	弥生中期末
107	奥の池遺跡	高松市西春日町	集落？	弥生中期末
108	南山浦遺跡	高松市西春日町	集落？	弥生中期末
109	片山池下遺跡	高松市西春日町	集落？	弥生中期後半～後期
110	六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町福家	前方後円墳20m　竪穴石槨　粘土槨　箱式棺	古墳前期後半
111	楠井古墳	綾歌郡国分寺町福家	横穴式石室墳	古墳後期後半
112	福家古墳	綾歌郡国分寺町福家	円墳　竪穴石槨	古墳前期？
113	石ヶ鼻古墳	綾歌郡国分寺町福家	横穴式石室墳	古墳後期後半

第7表　中間西井坪周辺遺跡一覧3（～古墳時代後期）

される。その詳細な内容規定は他に譲るが，独特な素地粘土の採用と器種組成・各器種の形態によって容易に他と区別できる土器様式である。ほぼ香東川下流域を覆う，平野中央部の東西約4km圏内で専らこの土器様式が採用される。この圏内も先に見たように複数の潅漑単位からなることが予想されるが，諸集団は素地粘土の選択から土器製作について同一の規範を共有する関係にある。平野の他地域，東部の春日川・新川流域や西部本津川流域の諸集団などは日常的な交流を通して一定量のそれを受け入れているが，基本的に別個の土器様式を保持している。つまり個別的な潅漑単位の枠を越えて概ね河川水系単位で，

それらを包摂する集団間の結合関係が生じていることを窺わせる。

一方，こうした河川水系単位の結合の内部は，先に見たように一定程度完結的な複数の潅漑単位に分かれ，搬入土器や石器石材の入手などに示されるように必ずしも同一歩調をとっていたとは考えられない。このような個別潅漑単位と河川水系単位との二重の結合原理の拮抗が当該時期の重要な特色であって，この未精算の部分が本地域の古墳時代前期に重要な課題を残すことになるのであろう。

(4) 弥生墓制の動向

この地域における弥生墓制の全般的な特徴として，まず第一に居住域との原則的な乖離を挙げることができる。このことは積極的には三谷通谷遺跡や空港跡地遺跡の墓群に見られる当該時期の居住域から隔絶された墓域の設定から，消極的にはこれまで確認された集落遺跡内や隣接地点の原則的な埋葬施設の欠落から弥生時代の全過程を通じて想定できる。

第二に区画墓のあり方である。浴長池Ｉ遺跡における中期中葉段階に遡りうる「方形周溝墓」が，現状では高松平野地域の最も遡及しうる区画墓の事例であるが，丸亀平野における状況などから区画墓の出現は更に遡りうる可能性が高い。その形態には方形基調，円形基調が共に認められ，出現以降少なくとも弥生時代末まで両者が共存する。今のところこうした区画墓は単独で存在するか，せいぜい小規模な群集形態をとるにとどまり，近畿地方などの様相と異なり，かなり限定的な存在であることが予想できる。また林坊城遺跡ＳＸ０３をこうした区画墓の１例と見なしてよければ，早くも後期前半に単純な方形ないしは円形形態にとどまらず突出部を付した区画墓形態が出現する可能性がある。後の前方後円墳あるいは前方後円形墳墓との関係で注意しなければならない。

第三に，上記したように本地方では，区画墓が限定的な存在だとすれば，大多数の集団成員の墓制が問題となる。高松平野地域に限らず，弥生時代の群集形態をとる木棺墓・土坑墓の確認例は極めて乏しい。わずかに観音寺市樋ノ口遺跡で，前期後半のそれが知られているにすぎない。むしろ一般には小児埋葬と理解されることの多い土器棺墓の群集形態の方がはるかに多く報告されている。前期段階の樋ノ口遺跡木棺墓群では成人埋葬と小児埋葬が共存していること，土器棺墓確認数が他の埋葬形態に比べて極端に優越することから，当該時期におそらく存在したであろう集団墓の考察にあたっては，土器棺墓被葬者の再検討を含めて課題とすべきであろう。

2. 古墳時代の高松平野

集落遺跡の確認例，特に後期前半以前のそれの確認例が著しく少ない。そのこと自体，重要な検討課題になる可能性が高いが，ここでは墓制から抽出できる課題に限って若干検討してみたい。

(1) 弥生墓と前方後円墳

鶴尾神社４号「墓」が典型的な前方後円墳出現時期以後の所産か，それに先行する存在であるかはまだ確定的ではないが，いずれにしても奈良県箸墓古墳等の典型的な最古段階の前方後円墳とは，墳丘・主体部形態その他において看過しがたい相違が存在すること11は大方の認めるところであろう。と同時にたとえそうであっても，本地方の首長墓の変遷の中で画期的な存在であることも事実である。

先に弥生墓制で示したように突出部を付した形態の区画墓はすでに弥生後期前半段階に出現している可能性が高い。鶴尾神社４号「墓」に近接した時期の所産である空港跡地ＳＴ０１，ＳＴ０５はやや狭小な突出部を付した前方後円（方）形を有するし，徳島県萩原１号墓や長尾町尾崎西遺跡ＳＴ２４の事例を考慮すると，この様な突出部を付す形態は本地方の特徴と見なすことができよう。またそうした形態が主丘部径10ｍ以下の小規模な墳墓にも認められることは，その採用が一定幅の階層に許容されたことを示唆するであろう。さらに古墳時代に入ってもそうした形態の墳墓が存続する可能性にも注意する必要がある。

単純に内在的発展で律しきることはおそらく妥当ではないだろうが，鶴尾神社４号「墓」はその下地が本地方の後期前半以来の伝統の中で用意されたものであり，その特徴的な形態は，飛躍の具体的契機に外的要因が加わるにせよ，先行するそれらの型式的整備と位置づけることができるであろう。

そしてその出現は，外的諸関係の課題と共に内的諸関係，首長層の階層的再編成の一定帰結として評価できるであろう。その様相は第一に本地方の弥生時代の具体的な歴史過程総体から探られなければならないであろう。

(2) 前～中期古墳の分布

古墳時代前期には各河川水系に複数単位の首長墳系列が認められる。前方後円形の墳丘

もしくは径20ｍ前後の円形ないしは方形の墳丘を備えるクラス以上に限っても次の各群が認められる。新川水系では少なくとも高岡（石塚Ｂ１・丸岡）・池戸～久米山（大宮八幡・諏訪神社・高松茶臼山・茶臼山西・北山）・屋島（浜北２号・長崎鼻）の３グループが指摘できる。同じく春日川流域では少なくとも円養寺（円養寺Ａ・Ｃ・Ｄ地区）・池田（合子神社等）・三谷（瘤山１号・平石上１号・三谷石舟など）の３群がある。香東川流域は中流域左岸に船岡山古墳群が認められ，下流域には著名な石清尾山古墳群がある。同古墳群は稲荷山・すり鉢谷東方・すり鉢谷南西などの支群に分かれ，下流域を基盤とする複数の首長墳系列が結集した形態と理解すべきであろう。また本津川流域では生島湾（横立山経塚・原経塚・前山），笠居（カシが谷・今岡），袋山（衣掛・袋山・相越）の各群がある。その分布からこれらの系列単位は各河川支流水系単位，ほぼ令制下の郷程度を基盤にすると見られる。その程度の広がりを基盤とするクラスの首長層の多くまでが前方後円形態の墳丘を採用することは，本地方の重要な地域色の一つであることをここで改めて確認しておく。

それらの全ての内容・時期が判明しているわけではないが，その主要な部分については第５章７節の関連部分で示した。

前方後円墳出現期前後に比定できる最古段階の諸墳では墳丘規模などの格差はあまり大きくない。高松平野に限らず讃岐地方の全般的な特徴である。このことはおそらく，先に触れたように，せいぜい全長15ｍ内外の墳丘しか築き得ない層にまで前方後円形態が許容されることと裏腹の関係にあるだろう。この点で出現期に既に極端な首長間の隔差を明示する大和や吉備のあり方とは対照的である。しかし本地域でも，この直後から急激に首長墳間の格差が拡大する。１期ないしはそれに先行する時期の最大規模の首長墳は鶴尾神社４号「墓」のように全長40ｍ内外に過ぎなかったものが，２期には全長100ｍの双方中円墳猫塚古墳，75ｍの前方後円墳高松茶臼山古墳が出現する。墳丘規模から見る限り，かなり短期間に前方後円形態の墳丘を許容された一定層内部で急激に格差が進展したことが判る。更に前期末から中期初頭までには石清尾山石船塚古墳，三谷石舟古墳，今岡古墳といった大形前方後円墳が築かれる一方で，上記した平野諸地域の系列の多くで前方後円墳の築造を停止したり，首長系列そのものが途絶えてしまう。

古墳時代中期初頭に至る経過は，古墳時代の開幕において前方後円墳を築きうる格式を保持した首長層内部で階層分化が急激に進展する過程と理解したい。その帰結として大形前方後円墳を築きうる高松平野諸地域を代表する首長の出現と前方後円墳の築造から疎外

される多数系列とに分解するのであろう。

しかしこのような大規模前方後円墳の継起的築造はおそらく今岡古墳を最後に途絶えてしまう。またその終末期において，石清尾山系列の衰退以降は，同一系列で継続的に大形墳を築き得ていないことに注意する必要がある。この地域においては首長層の再編成を通して安定的な階層的秩序を形成することに挫折したものと見なすべきかもしれない。

(3) 後期古墳

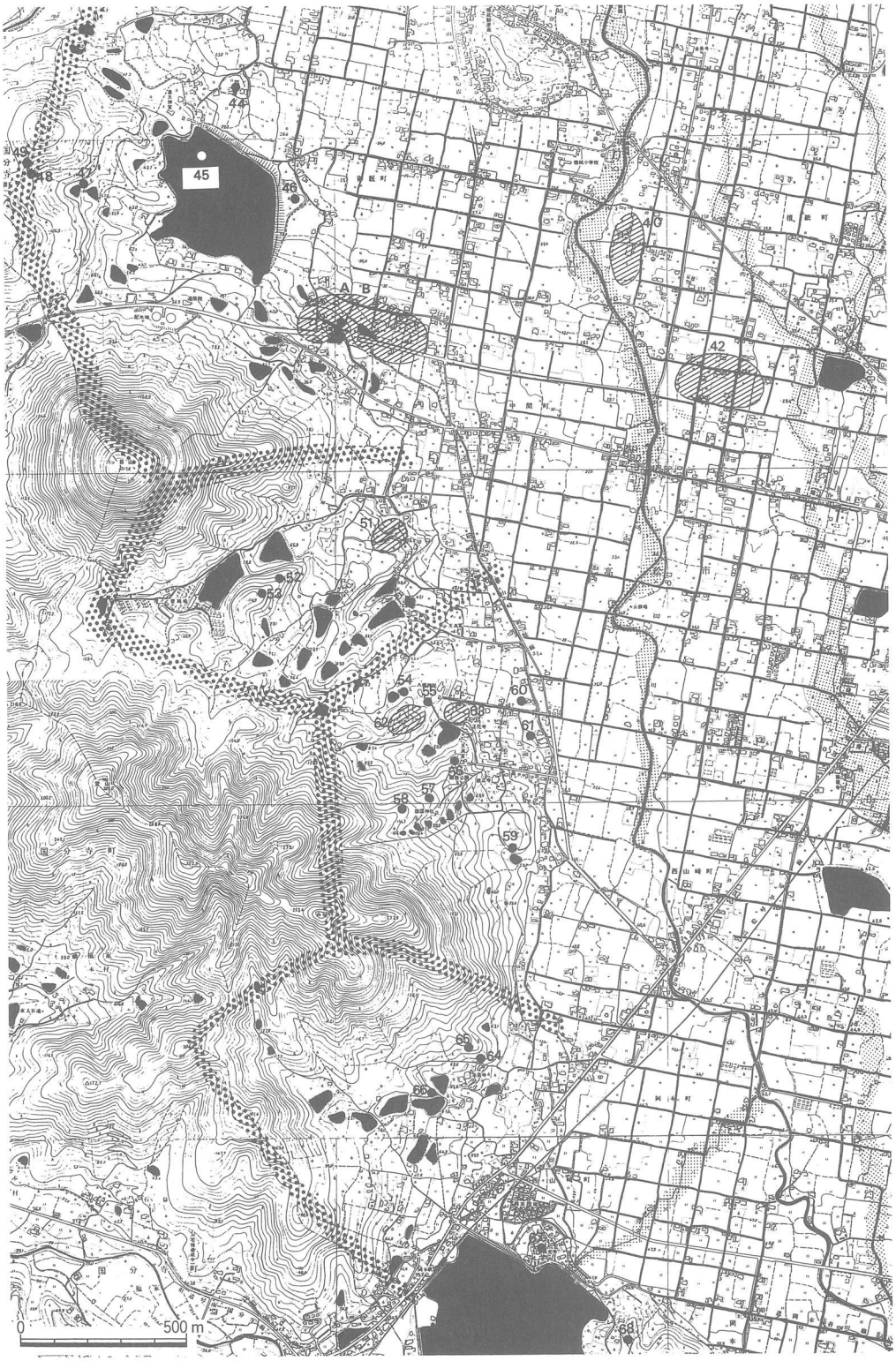
古墳時代後期後半段階，横穴式石室普及期の首長墳では平野東縁部，新川流域の山下古墳・久本古墳等と，西縁部本津川流域の古宮権現古墳・鬼無大塚古墳等の２群が最も傑出した存在である。しかしこれに準ずる内容の首長墳は平野各部にかなり分散的に見られる。複数の大形墳が認められる上記２群についても，一定期間傑出した内容の墳墓を継起的に築造したことは重要であるが，前・中期期段階の有力な首長墓群，石清尾山古墳群などのように複数系列の首長墳が結集する形態や下位の複数系列を従属させた墓域構成をとるものでないことは注意すべきであろう。またこれらにしても，高松平野では相対的に傑出した内容であるとはいえ，前期・中期前葉の大形墳が示した隔絶性にはほど遠い。

以後も平野全域を代表する単一の政治勢力の存在は，少なくとも古墳からは想定できない。本津川下流域等に見るように，せいぜい河川水系を単位とするより小さなまとまりごとの階層的編成が認められるだけで，それぞれの頂点相互には顕著な格差が認められない。むしろこの地域の政治的関係，階層的な再編成は，古墳時代前期後半から中期前葉を頂点にして，それ以降，はっきりと後退したと見なすべきであろう。

3. 本津川古川流域の動向

この地域の弥生時代の動向を知りうる材料は多くない。近年にいたってようやく中間西井坪遺跡・正箱遺跡などで集落域の一端が明らかになったに過ぎないからである。その他には２，３の散布地が知られるだけである。それらの立地は正箱遺跡が古川の段丘崖に接する他は，山裾の丘陵末端ないしは小支谷に近接しており，広範に展開する香東川扇状地帯の開発がまだ手つかずであったことを予測させる。

また中間西井坪遺跡では断片的な資料からの類推ではあるが，石清尾山山塊南西端からわずか2.5㎞の距離にも関わらず，後期後半期でも下川津Ｂ類土器の搬入量が全体の半ばに



第６図　本津川古川流域の遺跡分布（１/20,000）

も達しない量にすぎない。このことは当該時期の本津川古川流域と香東川下流域の関係を考慮する際に重要である。また次期の石清尾山の首長墓系列との関係についても一定の示唆を与える。

前節において本津川古川流域が，広域的な潅漑システム構築以前においては３～４の潅漑単位に分かれるであろうことを示した。この３単位に対応するように古墳群が認められる。以下これらを中間北部・西山崎・本堯寺の各古墳群として概要を示す。

中間北部古墳群

中間北部地域では今回確認した中間西井坪古墳群と御厩天神社古墳群等がある。前者は小形前方後円墳（１号墳）とおそらく８期前後に位置づけられる円墳２～３基（２号墳・３号墳・ＳＸ０３）からなる。後者は埴輪から８～９期に位置づけられる全長約30ｍの前方後円墳，御厩天神社古墳と小型の横穴式石室墳２基以上が知られる。本グループは，今知られている限りでは古墳時代前期後半の中間西井坪１号墳を嚆矢に，古墳時代後期後半まで群形成が継続するらしい。小形とはいえ前方後円墳２基を含む点に注目したい。

中間南部古墳群

六ツ目山南東麓には上記した群とは異なる小規模な古墳群がある。矢塚古墳群（箱式石棺）と弓塚古墳群（弓塚上古墳：伝横穴式石室墳）が知られる。弓塚上古墳は伝承にしたがえば大形の横穴式石室墳の可能性がある。実体は不明ながら内部主体から見て後期以前からの一定期間の造墓活動の継続が予測される。

西山崎古墳群

中世城館（北岡城）の所在が伝承される綱敷八幡南方の舌状台地に10数基の円墳が群集したとされる。現在では石碑基壇に転用された墳丘残骸１基以外は果樹園によってことごとく削平されている。かつてこの付近で低い台形状の突帯を付した軟質焼成の円筒埴輪片が採集されている。古墳時代中期に築造期間の１点をおくことができる古墳群であろう。また綱敷天神裏から中間八幡裏にかけての尾根線上に小規模なマウンドが点在する。西山崎２号墳は墳頂部に角礫が露出しており箱式石棺材らしい角礫が露出してる。西山崎３号墳は箱式石棺と伝承されている。横穴式石室墳は含まないようである。また綱敷天神前面には小規模な横穴式石室墳とされる墳丘の残骸が２・３残存する。以上実体は不詳だが古墳時代中期～後期に小規模墳が継続的に営まれている。このグループでは今のところ前方後円墳や大形円墳はその全期間を通して確認できない。

本堯寺古墳群

堂山東麓諸地域で最も狭小な地域であるが，本堯寺背後の丘陵と奈良須池東方の立石山に小規模な古墳群がある。本堯寺北１号墳は円筒形土製棺とそれを被覆する竪穴石槨の存在が知られる。同２号墳は小規模な円墳で土師器細片が散乱する。また出土位置は不明ながら本堯寺北古墳群で箱形土製棺も採集されている。本堯寺西古墳は横穴式石室をもつ。また立石山の古墳群は実体不詳ながら横穴式石室墳を含むらしい。

このグループも古墳時代中期～後期の小規模墳からなり，やはり前方後円墳もしくは大形円墳を含まない。土製棺の存在に注意する必要がある。

以上，本津川古川流域の古墳についてやや詳しく見た。以上の３ないしは４グループは先に見たようにおそらく相対的に完結した潅漑単位をそれぞれ基盤にして形成されたものと考える。その中では中間北部グループが小形とはいえ前方後円墳２基を含む点で優位にあるが，その格差は顕著ではないし中間北部グループの優位も継続的なものとは認められない。基本的に近似した３ないしは４単位が長期にわたって並立すると理解すべきであろう。

この点で隣接する本津川下流域の様相も比較的類似したものが認められる。本津川合流部では丘陵上に実体不明の相越・衣掛・袋山の小規模な３前方後円墳が所在するとされる。衣掛古墳では土製棺の出土も伝えられる。平野部の大形横穴式石室墳　御厩大塚はこの系列の後裔と見なしてよいだろう。その北方，高松市鬼無町には今岡古墳・かしが谷古墳群・首取山古墳など前期～中期前半の系列と，古宮権現社古墳・鬼無大塚古墳・平木古墳群等を中核とする有力な後期古墳群が所在する。さらに五色台北端の生島湾周辺には積石前方後円墳，横立山経塚古墳から後期前半の住吉神社古墳，後期後半の弾正原古墳等が知られる。

やはり小地域ごとに形成される古墳群が継続的に並立することは古川流域の様相と異ならない。この地域においても比較的小規模に完結する潅漑単位を基盤とする小地域単位がそれぞれに古墳群を形成するのであろう。しかし古川流域の古墳群が最も有力なグループでも最小規模の前方後円墳しか築き得なかったことと本津川下流域の諸グループのあり方は，対照的である。同程度の基盤に立ちながらも小地域間で明確な格差が認められるのである。

第３章　調査成果

第１節　調査地区の地形と基本層序

1. 周辺地形の概要

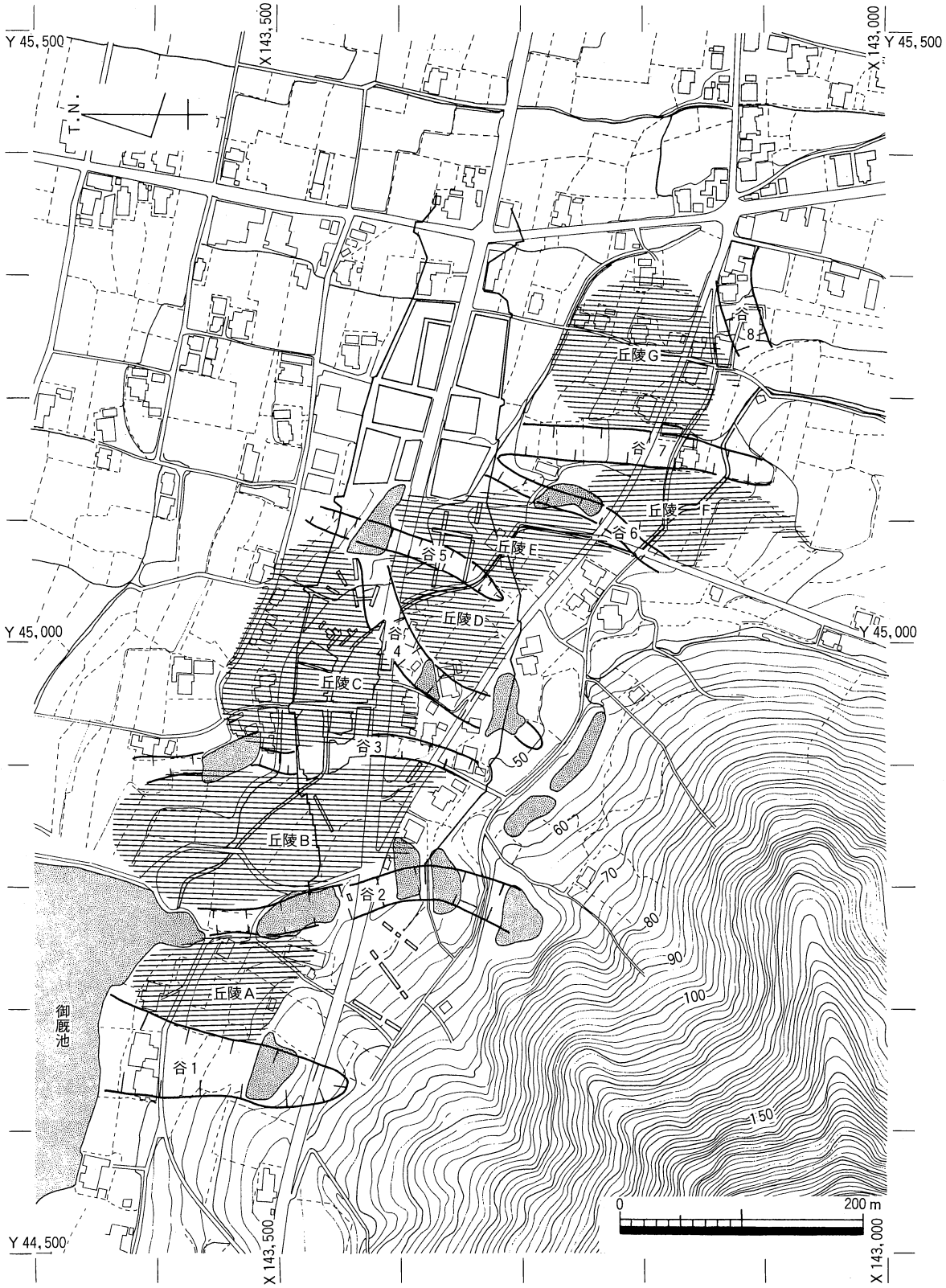
第２章で述べたように，中間西井坪遺跡は高松平野西南縁を画する堂山山地北端に位置する。同山塊北部の六ツ目山（317ｍ）と伽藍山（216ｍ）裾部が形作る谷の南側面に相当する位置，換言すれば六ツ目山北麓に所在する。この部分は両山麓緩斜面と谷前面に向かって広がる局地的な扇状地形およびそれらをとりまくように広がる平野西南部の香東川に起因する扇状地形が連続する。既に述べたように後者では１町方格の地割りが連続する。また六ツ目山や伽藍山から下るわずかな水流が形作る小規模な開析谷多数が山麓部分を穿ち微地形を複雑なものとしている。

さて中間西井坪遺跡は全体としては六ツ目山北麓緩斜面部から北東の扇状地帯に展開する東西50ｍ弱，南北200ｍ前後の縄文時代～近世の複合遺跡の総称であるが，今回報告するのは遺跡西端の丘陵部（標高36ｍ～39ｍ），東西約160ｍ・南北80ｍの範囲についてである。

この部分は東西端を小規模な開析谷で区切られた山麓の１単位にほぼ相当する。讃岐地方の独立丘陵にしばしば見るように整った円錐形の山容を呈する標高317ｍの六ツ目山はおおよそ標高60ｍ以高は平均35％～40％と急傾斜をなすが，裾部の標高35～60ｍは10％以下の勾配で緩やかに広がる。特に伽藍山と向かい合う北麓部分はこの裾が長く緩やかに延びる。山肌を伝わる落ち水はこの部分を大きく穿って流れ，山裾を複雑に分断する。第７図で地表面の凹凸と谷部利用の溜め池の分布からこの部分の谷状地形と残丘部分を模式的に復元した。このような小規模な谷４条以上が遺跡範囲を貫通していることがわかる。

丘Ｃ

今回報告する範囲は谷３及び４によって東西から遮断された丘Ｃが中心となる。「ハ」字状に流下する谷３・４によって画された丘Ｃは標高35～44ｍを測り，先端に向かって扇形に開く形状をなす。現状で見る限り丘Ｃの微妙な稜線は中央より西に偏り３ａ～３ｂ区



第７図　遺跡周辺地形分類図（１/5,000）

東側の里道付近に想定でき，それより東に向かって緩やかに傾斜する。東西に並ぶ丘Ａ・Ｂ・Ｄ・Ｅ等が，痩せ尾根状を呈することと比べる頂部は遙かに緩やかに広い。谷に抉られる両側面はかなり切り立った形状を示すが先端は標高33ｍ前後で緩やかに平地に接する。最も広い部分で幅160ｍ以上を測り，奥行きは180ｍ前後となる。主要部分の傾斜は推定５％前後と緩やかである。東西の谷３・４は現状では水田化しているが，中世以前においては丘陵頂部から２～４ｍの比高で深く抉れ込んでいたことを確認している。また東部の谷４の一部は比較的近年まで溜め池として利用されており，その構築時に丘Ｃ東縁部をかなり削り込んだことが確認できる。今回の調査ではこの丘陵の先端部を除くおよそ2/3を調査した。

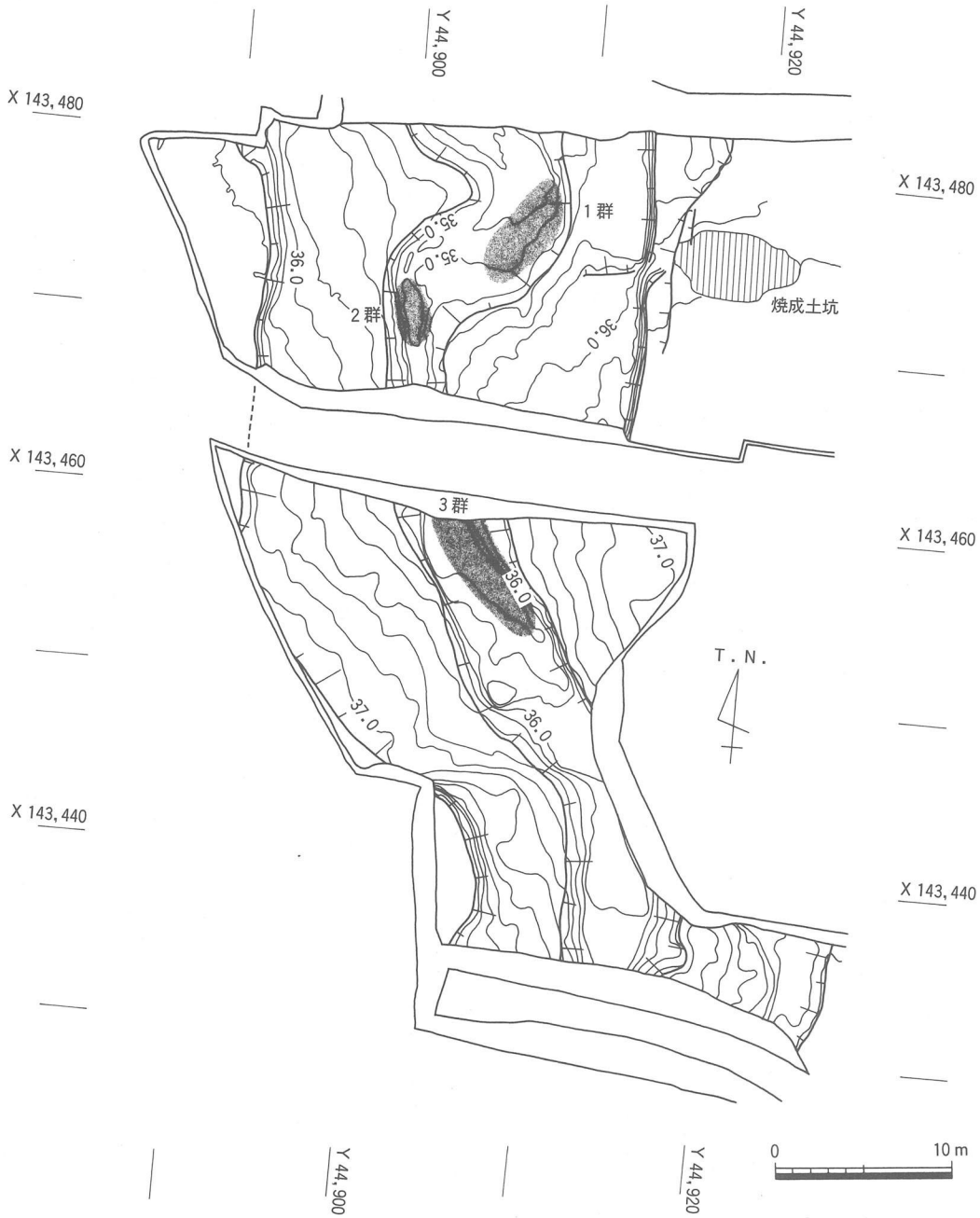
なお奈良須池と御厩池を連結する広域潅漑用水・「本津新幹線」が本丘陵中央部で標高39ｍ前後を東西に貫通している。

谷３

今回報告する中間西井坪遺跡西半部の丘陵Ｃの西側にあって丘陵Ａと同丘陵を遮断している。現状では幅25ｍ前後で東側水田域との比高0.3～0.5ｍを測る凹地が南北に連続するに過ぎないが，確認した範囲でも上面幅20～22ｍ，深さ２～2.4ｍで緩やかに蛇行しつつ北流する深い谷状地形である。調査区の南北方向でこの谷の延長部分に小規模な溜め池が見られる。それらの分布と地表面の起伏から判断すれば谷３は六ツ目山北斜面中腹，標高50ｍ前後の傾斜変換点付近に発して北北西方向に延び，調査区付近では緩やかにＳ字に湾曲して流れ，この谷の凹地を利用した「西や池」を経て，並行する他の小支谷と同様に六ツ目峠に発する谷に合流する。なお調査範囲では谷底部まで掘り下げても湧水量は乏しい。

現状では断面形は二段になる。地点によって形状は異なるが，下半部は概ねＵ字形ないしは台形様を呈し，対照的に上半部は大きく開いている。側斜面上部は緩斜面を形成するか段状に平坦面が連続するが，この形状は自然的なものではない。谷埋没後に同部分も水田化されており，この平坦面は水田造成に伴う改変であることが土層観察からも裏付けられる。特に谷側斜面の改変状況は４ａ区東部で顕著に観察できる。後世の人為的改変を蒙らずに自然地形・自然埋没層をとどめるのは谷下半部の，幅３～７ｍ深さ１ｍ前後の範囲に過ぎない。この部分では杭列その他の地形を改変したり水流を制御するような設備は全く確認していないが，後に詳しく見るように古墳時代前期には多量に遺物が投棄されている。

谷部の勾配は底部で測って調査範囲の南北直線距離48ｍに対して約1.6ｍと平均３°を測る。丘陵頂部の勾配が南北50ｍで2.9ｍ，６°と比べてもかなり緩やかな勾配であることに注意したい。谷部の出土遺物の理解に関わる点である。



第8図　谷3平面図（1/400）

さて谷埋土は全般的に微細な構成物を持って充填されている。中粒砂以上の粗粒堆積物は局部的な存在以上には観察できない。

上部ではほぼ全域にわたって現耕作土・床土直下に極近年の造成土層が認められる。県

道三木国分寺線建設時の客土であろう。例えば4ｃ区ではこれ以前は地形に合わせて東西方向で2段に区画されていた水田が1枚にまとめられるなど水田区画の更新がなされている。客土以前ではほぼ全域で層厚1ｍ内外の連続的な水平堆積の暗灰色～灰褐色シルト層に4～5面の耕作面が観察できる。その多くは谷肩部に対応する削平痕跡を認めることができる。この範囲は現状では強くグライ化している。また弥生時代中期～中世後半の遺物が完全に混在した状態でかつ多くは細片化してこの層序から出土している。開墾・耕作時に谷部包含資料が巻き込まれたものであろう。谷部分水田化の起点をどの段階に求めるかについて明確な判断材料は得られなかったが，丘陵部集落域・耕地域の消長や包含遺物から，中世後半に遡る可能性も否定できない。いずれにしても現水田面以前，比較的長期間継続的に流入堆積物や人為的客土によって耕作面を複数次に亘って更新しつつ耕地利用がなされている。

耕地化の影響を蒙っていない谷下部堆積層は漆黒色～暗灰色のシルト・細砂・粘土が細かい単位で複雑に堆積する。いずれにしても粗粒の堆積物は含まない。断続的かつ微弱な水流によって運搬・堆積したものと見られる。堆積物の強い暗色系統の色調は植物遺体などに起因するものであろうが，それらの組織をとどめてはいない。しかし炭細粒はある程度目につく。またこの部分では，上層とは好対照に最低3単位の遺物集積部分を含め，全域で大形品を頻繁に交えるかなり濃密な古墳時代前期の遺物の包含を認める。その詳細については後章で述べる。

谷4

丘Ｃの東縁を画する谷4は今回の調査ではその西肩の一部を追求しただけで，全体像は確認していない。地表の起伏と溜め池の分布から第7図に示したように東に向かって緩やかに湾曲して西や池付近で丘Ｄ東側から流れる谷5に合する。この部分に設定した予備調査の所見では最深部は丘陵から3ｍ以上抉れ込む。溜め池構築と後の水田利用によって谷3同様にかなりの改変を蒙っている。谷堆積層の上半部はやはり造成土・耕作土等の人為的な堆積物である。それもあってか，後述するようにこの谷に面した丘Ｃ東縁部に古墳群が所在するにも関わらず，谷自然堆積層に遺物の包含はほとんど認められない。上部の造成土中に局所的に混入するに過ぎない。

2. 基本層序

基本層序の観察は各調査区で行っているがここでは典型的な８箇所の土層観察に基づき説明する。（第９図）

基本層序１（５区西壁）　：丘Ｃ頂部の南北方向土層南半部

基本層序２（３ｂ区東壁）　：丘Ｃ頂部南北方向土層南半部

基本層序３（３ａ区東壁）　：丘Ｃ頂部南北方向土層北半部

基本層序４（１Ｃ区東壁）　：丘Ｃ南西－北東方向土層

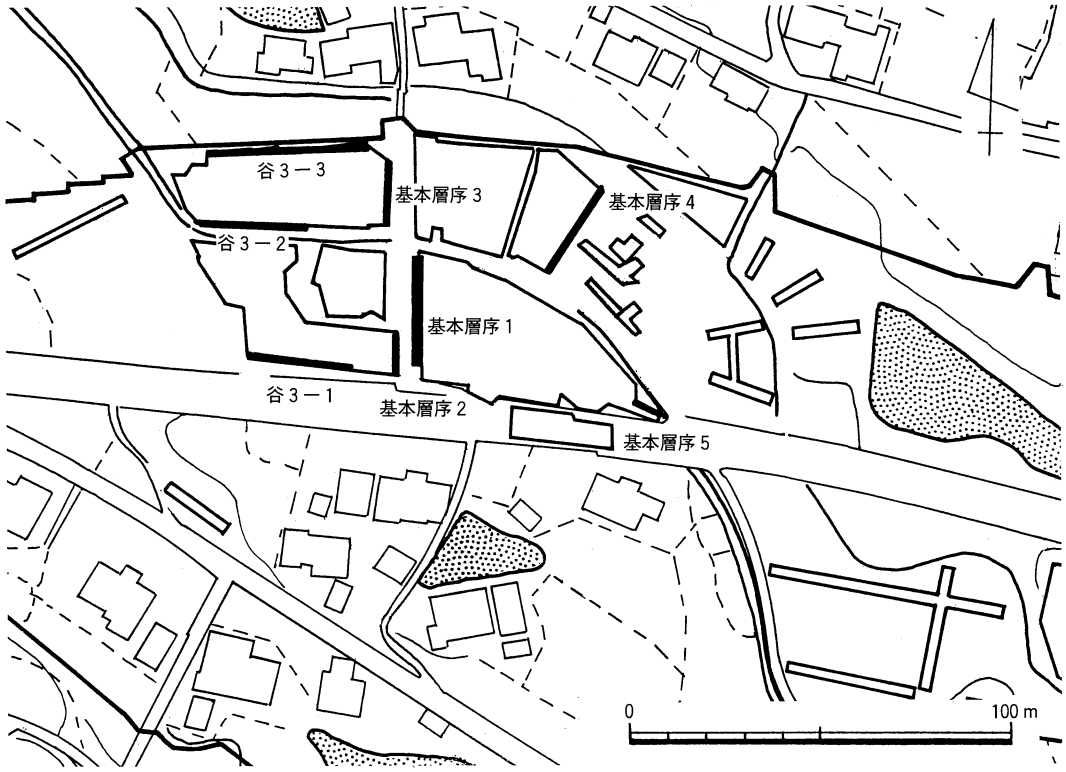
基本層序５（５ｄ区北壁）　：丘Ｃ東縁部東西方向土層

以上５本の土層図によって丘Ｃの形状を観察し，以下の３本によって西側に谷３及び，それと丘Ｃの関係を観察する。

谷３断面図１（４ｃ区南壁）：丘Ｃ西縁部～谷３東西方向（横断面）土層

谷３断面図２（４ａ区南壁）：谷３東西方向（横断面）土層

谷３断面図３（４ａ区北壁）：丘Ｃ東縁部～谷３東西方向（横断面）土層



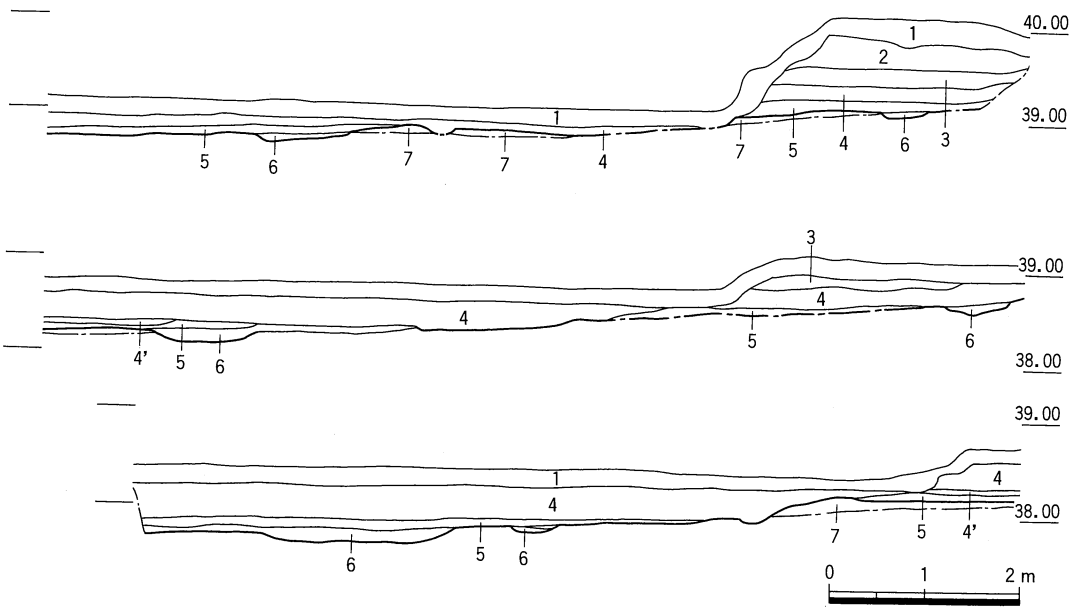
第９図　基本層序位置図（１/2,000）

基本層序１

延長約30ｍを測る。当該地区は４段に造成され最上段が畑地。以下は水田として利用されている。現地表高で38.4ｍ～40.1ｍを測る。耕地造成と耕作によって部分的には地山表層を含めて先行する堆積層・遺構がが多く損なわれ，それらは局所的に残存するに過ぎない。耕地造成面の作出にあたって斜面上方より切り土して前面にそれを盛るため基本的に造成面前半部分では旧堆積層・遺構が相対的に残りやすいが，現状の４段造成以前により細かな造成面の作出が行われたらしく，状況はやや複雑である。

残存する地山面はこの部分で標高37.7ｍ～39.3ｍ測る。ほぼ５％程度の勾配となる。現耕作土・床土（１層）は0.2ｍ前後の厚さで堆積し，この部分に遺物の包含は少ない。まれに確認できてもことごとく細片である。その下部には旧耕作土ないしは造成時客土が前面に見られる。先に述べたように造成面前面ではこの部分がより明瞭でまた層状の堆積が容易に確認できる。

現耕作土層同様に遺物は細片が少量包含されるに過ぎない。これらより下位，地山層との間に２種の堆積層が薄く部分的に確認できる。５層暗灰紫色砂質土層は三足羽釜片など



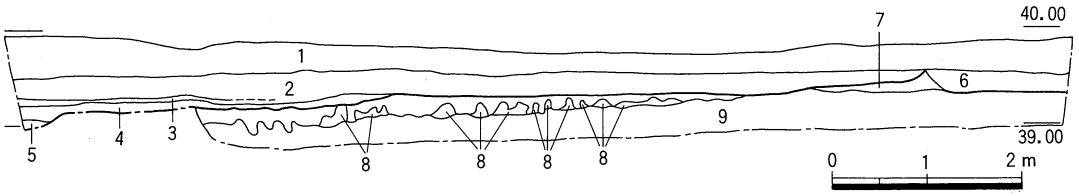
１．黒灰色シルト　耕作土　　５．淡灰紫色砂質土　Ｍｎ
２．灰褐色細砂　旧耕作土　　６．暗紫色砂質土　Ｍｎ
３．黄褐色砂質土　客土　　７．黄色砂質土　Ｍｎ　地山１層
４．暗褐色細砂

第10図　基本層序図１（１/80）

中世後半の遺物片を少数含む。6層はこれよりやや濃色の暗紫色砂質土層でより5層の下位あるいは一部の遺構埋土としてより限定的にしか観察できない。出土遺物から古墳時代以前の堆積層の可能性が高い。このセクションでは地山層の構成まで確認していないが，多少の削平を蒙るものの地山表層：黄色砂質土層が全域に残存する。

基本層序2

3b区東壁セクションで，基本層序1南半部の5m西側で並行する。本地区は水田1面と一致するため，現地標高は39.9m～40.0mとほぼ水平である。現・旧耕作土層・床土層は0.5～0.9mの厚さで堆積し，その直下は地山層となる。北端部分ではこの層序が5層に区分できるが，現耕作土・床土層以下の各層も土質・堆積状から見る限りいずれも人為的な造成土層である。地山層はより淡色で砂質の強い7層，鉄分の沈着が顕著でブロック状に上下層間に分布する8層，やや濃色で粘性の強い9層の3者が認められる。本地区の斜面下方，3a区では8層下部ないしは8層・9層間に相当する層準で火山灰層が観察できるが本地区には分布していない。また南端付近では地山上部の7・8層が次第に薄くなりつつ消滅している。現状では地山面は約3.5％と緩やかな勾配で傾斜しているが，このことからこれが旧状でないことが判る。造成時に地山表層部分まで強く削平を蒙っている。



1．黒灰色砂質土　耕作土
2．淡褐色砂質土　旧耕作土・床土
3．黄褐色砂質土
4．暗灰色砂質土
5．褐色細砂　2層類似
6．淡灰色砂質土
7．淡黄色砂質土　Fe・Mn付着砂礫多　地山層
8．暗黄褐色砂質土　Fe・Mn付着砂礫多　地山層
9．淡橙色粘土　灰色粘土斑紋　地山層

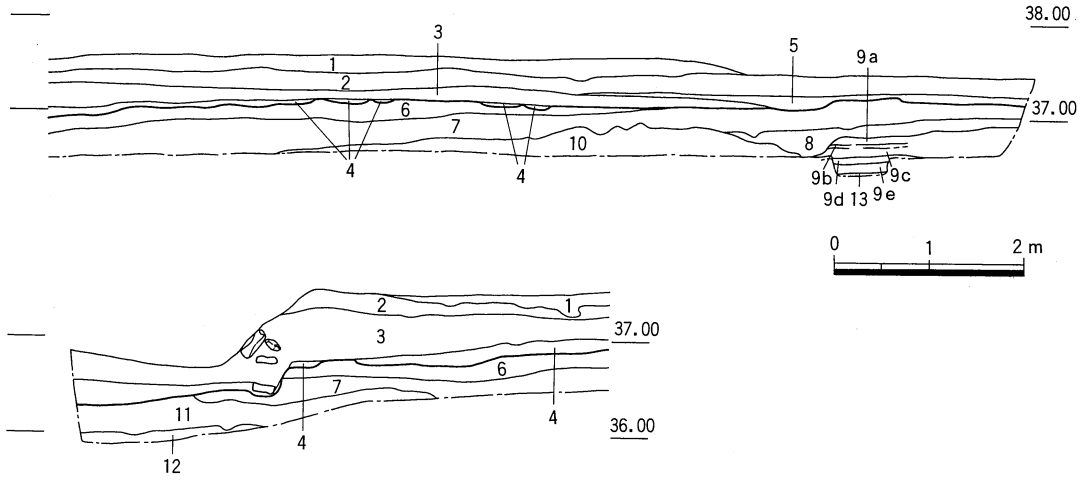
第11図　基本層序図2（1/80）

基本層序3

3a区東壁セクション。延長距離約16m。基本層序2の北方延長線上に位置するが，その間に30m弱の空隙がある。この部分は現状で2面の水田面に造成されており南北端の現地表高に0.6mの比高がある。現・旧耕作土層が0.3m～0.5mの厚さで堆積する現・旧耕作土層の直下に地山層が観察できる。上段に局部的に残存する暗紫褐色砂質土層（古墳時

代遺構埋土の残部）を除き，耕作土層に先行する堆積層は残存していない。

現状の地山面は南北で0.8ｍの比高を測るがやはり南半部では表層部分を消失しており，局部的に残存する古墳時代遺構の状況から見ても本地区も強い削平を蒙っていることが判る。また６層淡黄色砂質土（３ｂ区７層対応），７層淡橙色粘質土（同８層対応）の下位に火山灰層ないしはそれを多く含有する８・９層が丘陵西縁辺に向かって次第に層厚を増しつつ本地区のほぼ全域に分布する。因みに別に報告する旧石器資料は７～８層を中心に包含される。



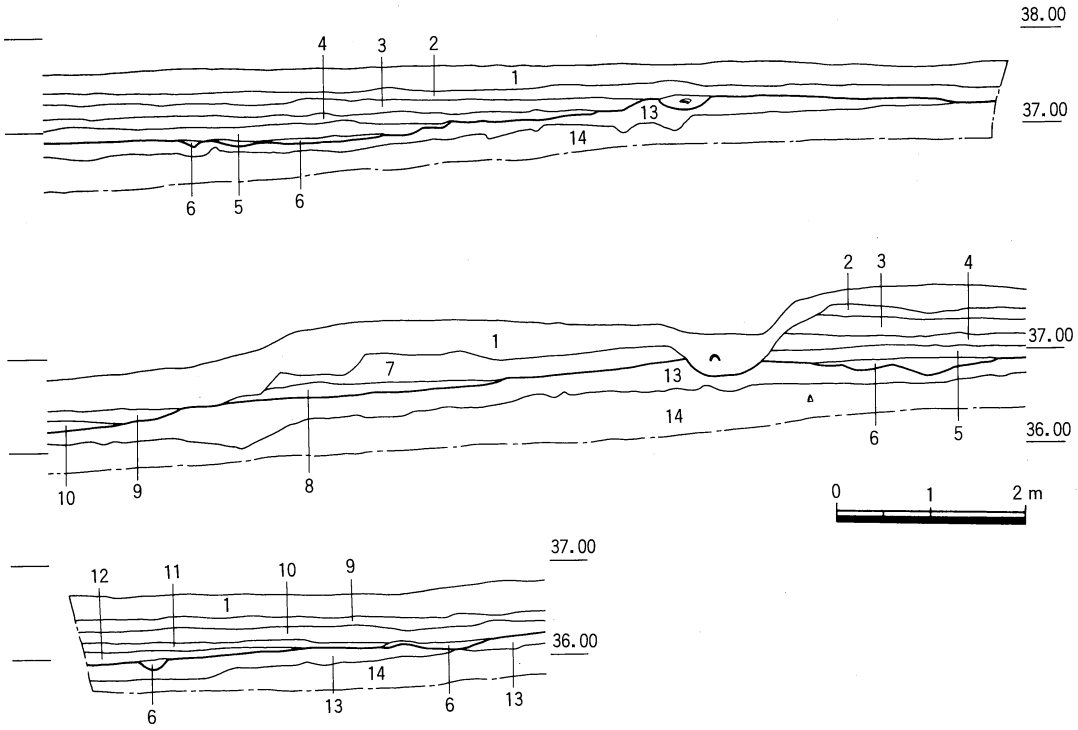
1．花崗土　造成土
2．黒灰色砂質土　耕作土
3．淡灰褐色砂質土　旧耕作土・床土
4．暗紫褐色砂質土　Ｆｅ・Ｍｎ付着砂礫多い　埴輪多く包含
5．暗灰色細砂
6．淡黄色砂質土　Ｆｅ・Ｍｎ付着砂礫多い
7．淡橙色粘土　淡灰色粘土層斑紋
8．淡黄色粘質土　白色風化礫含む
9．淡黄色シルト　火山灰層か
9ａ．灰白色シルト　暗灰色の汚れ多い　堅緻
9ｂ．灰色シルト　やや黄色混じる
9ｄ．クリーム色シルト　５～10㎜大白色砂礫多い
9ｅ．灰色シルト
10．橙色砂質土　凝結して堅い
11．９層
12．10層
13．黄褐色砂質土　花崗岩バイ乱土ｄ％-11

第12図　基本層序図３（１/80）

基本層序４

１ｂ区東壁セクション。延長約27.5ｍを測る。丘Ｃ東部で南西－北東方向の傾斜・堆積状況を観察できる基本層序である。当該地区は現状で３段の水田に造成されている。現地表高は36.7ｍ～37.6ｍで0.9ｍの比高がある。おそらく度重なる水田区画の更新に依って各造成面には旧耕作土・床土層や客土層が累積的に観察できる。やはりそれらは造成面の前面に顕著に観察できる傾向にある。それらの下部に主に各造成面前半部分に限定して薄く２種の層序が確認できる。それらは遺構埋土とも一致する。１は灰褐色砂質土で希に近

世以降までの遺物細片を含む。2は暗茶色砂質土で中世後半の遺物を少量含む。現況の水田造成時に削平を免れた旧堆積層の残部であろう。地山面標高は36ｍ～37.2ｍで５％弱の勾配が観察できる。地山層は13層黄白色砂質土層と14層濃黄色粘質土層が確認できる。火山灰層は認められない。また13・14両層に旧石器は包含される。



1．黒灰色砂質土　耕作土
2．淡黄色シルト　床土
3．暗灰色砂質土
4．暗黄色シルト
5．灰褐色砂質土　Ｍｎ多い　包含局
6．暗紫色砂質土　Ｍｎ多い　包含局
7．淡褐色砂質土　客土
8．淡灰褐色砂質土　包含層
9．淡褐色砂質土　旧耕作土・床土
10．暗黄色シルト　〃
11．淡黄色シルト
12．淡灰色砂質土
13．黄白色砂質土　砂礫Ｍｎ多い地山層
14．濃黄色粘質土　地山層

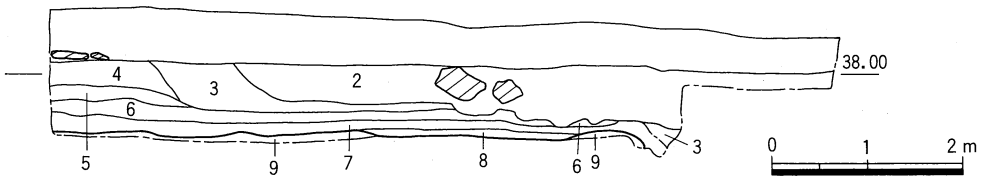
第13図　基本層序図４（１/80）

基本層序５

顕著な撹乱などによって丘Ｃ東縁部の状況を良好に示すことができる材料は乏しい。局部的なセクションであるがここに挙げた５ｄ区北壁セクションで丘Ｃ東縁から谷４の一部にかけての様相を見ておきたい。

本セクション観察位置の東端で地山層が急激に落ち込んでおり，この部分が旧溜め池の肩部となる。丘陵側斜面の一定範囲を削平しつつ大きく抉り込んで溜め池を構築している。また溜め池廃絶後にその凹地を水田として利用しており，度重なる客土によって水田面の

上昇を計った様が観察できる。丘陵東縁部に削平と客土を繰り返していることが判る。溜め池構築～水田整備の過程で丘陵Ｃ東部の削平が進行したらしく，客土層中には後述するように大形の形象埴輪片・土製棺片などが多数混在している。



1．ブロック状堆積　造成土
2．造成土
3．旧耕作土
4．ブロック状堆積　造成土
5．灰褐色砂質土　旧耕作土
6．淡灰橙色砂質土　Ｆｅ斑紋
7．灰橙色砂質土　Ｆｅ斑紋多い
8．灰褐色粘質土
9．黄灰色粘土　地山

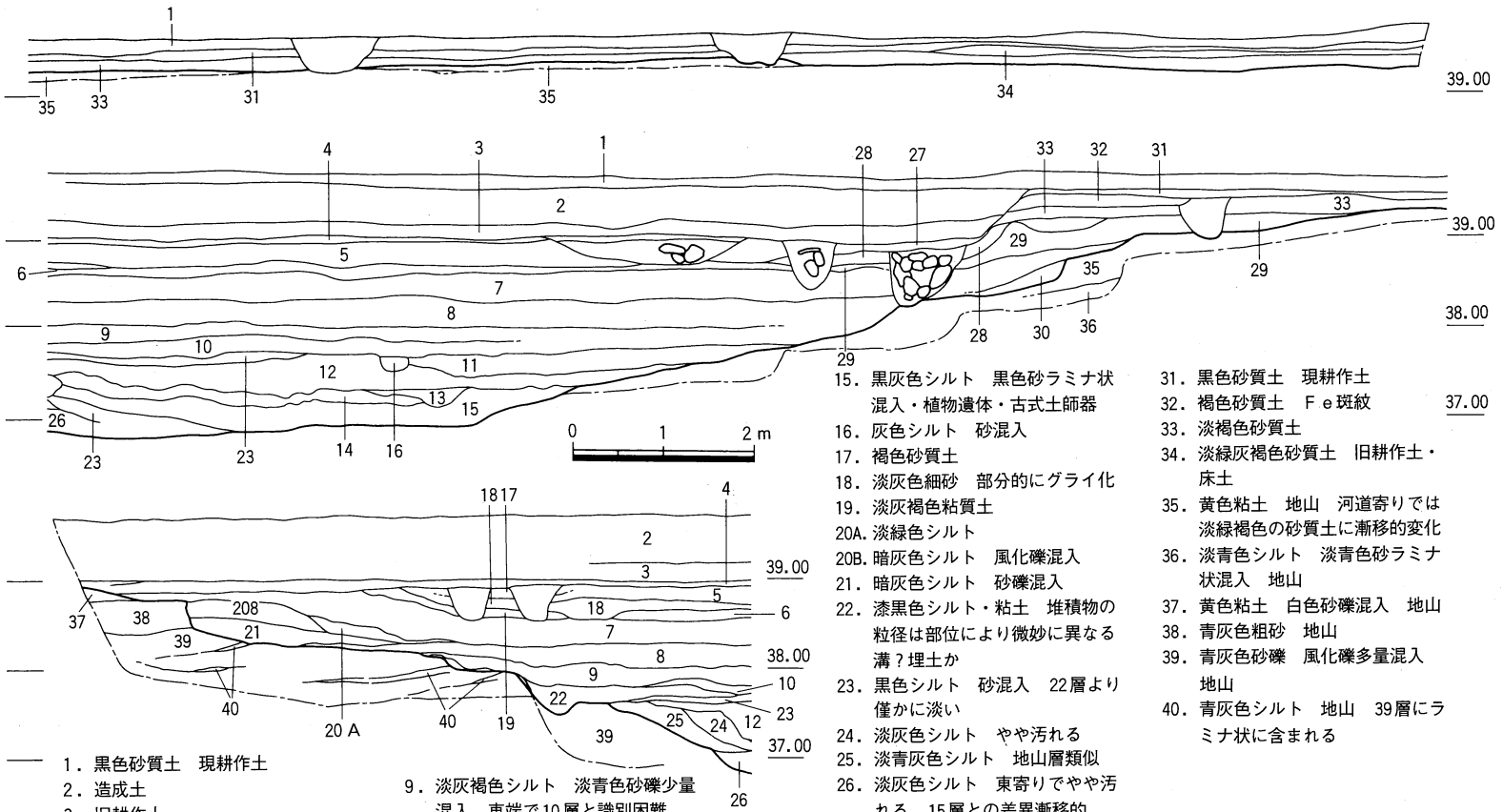
第14図　基本層序図５（１/80）

谷３土層１

３ｂ～４ｃ区南壁セクションで，丘Ｃ西縁部～谷３の断面形状と堆積状況を示している。現状では谷３はほぼ完全に埋没し現地表面では0.2ｍ前後のわずかな比高しか認められない。谷３は上面幅18ｍ，深さ2.9ｍあまりの横断面逆台形様を呈し，底面幅はこの部分では5ｍ弱と比較的広く平坦である。上層２ｍあまりは現在に至る耕作土層と客土層の累積である。現耕作土層以下はグライ化が顕著である。谷肩部に最低３段以上のそれに伴う加工面が残されている。この部分にも少量の遺物を包含するが，造成・耕作によって撹拌された層準であって原位置をとどめるものではない。それより下位の層厚0.9ｍほどが二次的な撹拌を蒙っていない自然的な堆積層である。暗灰色～漆黒色シルトや褐色～暗灰色砂が小単位ごとにレンズ状に堆積する。ごく局所的に粗粒砂を観察できるが，この部分の堆積物は全般的に微細で，静穏な堆積環境を示唆している。最下層付近で微細な植物遺体を交える。また全般的に大形で磨耗していない遺物片を多く包含する。

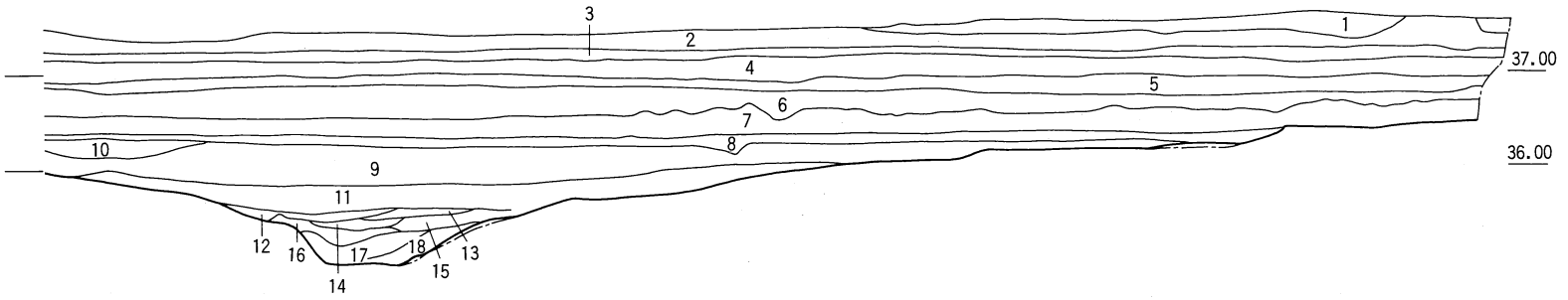
谷３土層２

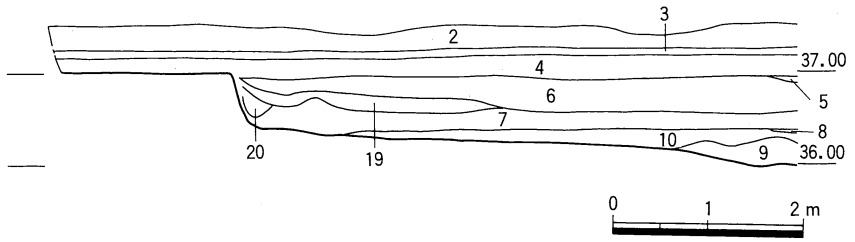
４ａ区南壁セクション。上面幅22ｍ以上を測り，深さは西縁からで約２ｍとなる。中心部で幅3.5ｍ，深さ0.6ｍ程が断面ｕ字形にひときわ抉れ込む以外は両肩はこの地点に限って緩やかな傾斜を示す。しかしその形状も本来的なものではなく水田造成時に谷肩部を削り込んで平坦地ないしは緩斜面部分を広く作出したものであろう。上層1.9ｍほどはやはり



1．黒色砂質土　現耕作土
2．造成土
3．旧耕作土
4．暗緑色砂質土　旧床土　グライ化
5．明褐色砂質土
6．淡灰褐色粘質土
7．淡褐色砂質土
8．淡灰褐色シルト　淡青色砂礫混入　9点より青み強い
9．淡灰褐色シルト　淡青色砂礫少量混入　東端で10層と識別困難
10．暗灰色シルト　淡青色砂礫混入
11．暗灰色シルト　淡青色砂礫極少量混入
12．漆黒色シルト・粘土　炭細片・古式土師器　堆積物の粒径は部位によって微妙に異なる
13．褐色粗砂　古式土師器
14．暗青色砂　古式土師器
15．黒灰色シルト　黒色砂ラミナ状混入・植物遺体・古式土師器
16．灰色シルト　砂混入
17．褐色砂質土
18．淡灰色細砂　部分的にグライ化
19．淡灰褐色粘質土
20A．淡緑色シルト
20B．暗灰色シルト　風化礫混入
21．暗灰色シルト　砂礫混入
22．漆黒色シルト・粘土　堆積物の粒径は部位により微妙に異なる溝？埋土か
23．黒色シルト　砂混入　22層より僅かに淡い
24．淡灰色シルト　やや汚れる
25．淡青灰色シルト　地山層類似
26．淡灰色シルト　東寄りでやや汚れる　15層との差異漸移的
27．暗緑色砂質土　4層
28．黄褐色細砂　褐色ブロック（Ｆｅ）多い　5層
29．淡灰褐色粘質土　6層
30．淡灰褐色砂質土　6層類似　粒径大
31．黒色砂質土　現耕作土
32．褐色砂質土　Ｆｅ斑紋
33．淡褐色砂質土
34．淡緑灰褐色砂質土　旧耕作土・床土
35．黄色粘土　地山　河道寄りでは淡緑褐色の砂質土に漸移的変化
36．淡青色シルト　淡青色砂ラミナ状混入　地山
37．黄色粘土　白色砂礫混入　地山
38．青灰色粗砂　地山
39．青灰色砂礫　風化礫多量混入　地山
40．青灰色シルト　地山　39層にラミナ状に含まれる

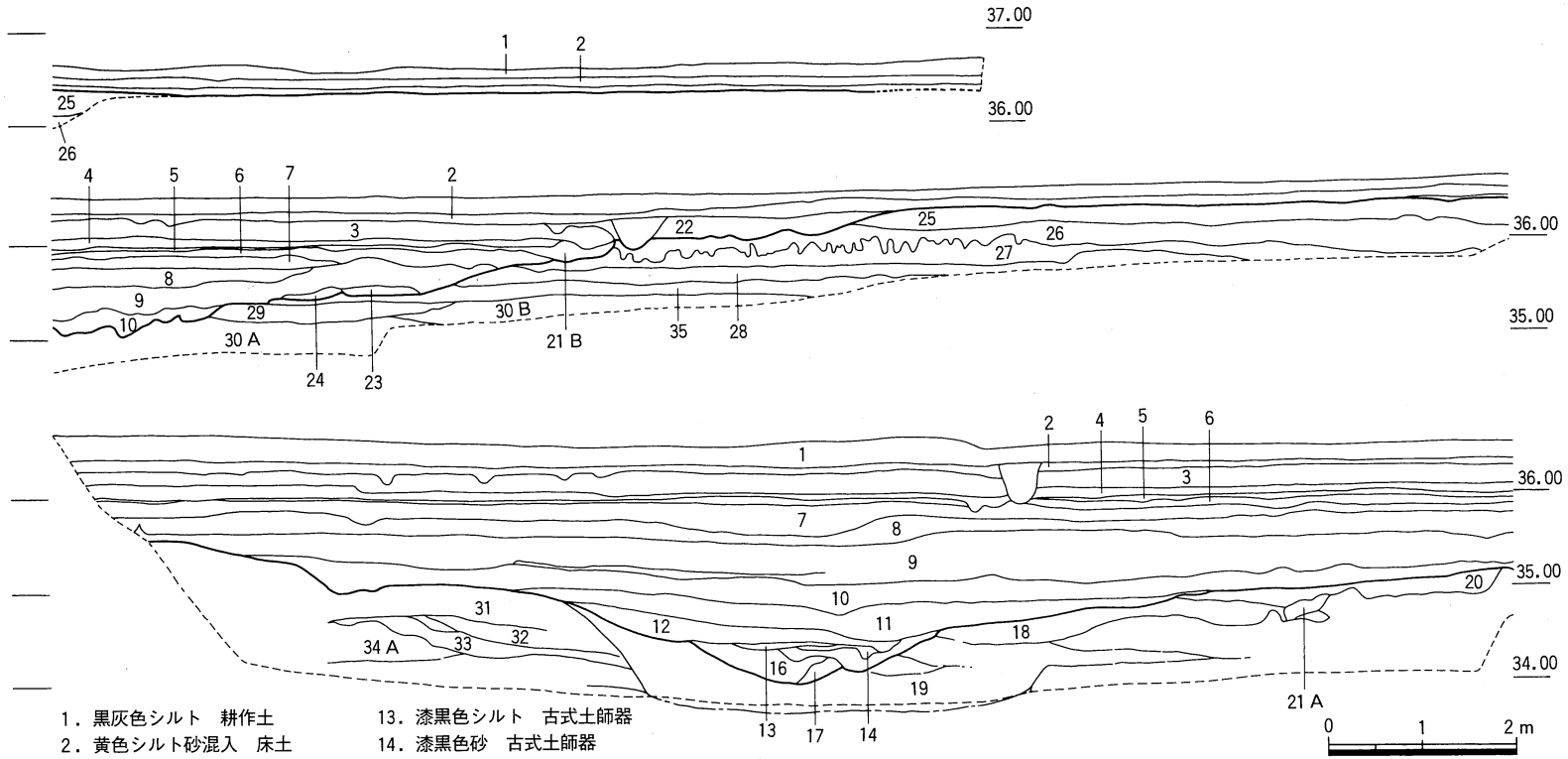
第15図　谷３断面図１（１/80）





1．造成土
2．暗褐色細砂　現耕作土
3．淡灰色シルト　Ｆｅ・Ｍｎ斑紋
4．淡灰色シルト　Ｆｅ・Ｍｎ斑紋多い
5．淡黄色粘質土　造成土
6．淡橙色粘着土　造成土
7．暗灰褐色砂質土　旧耕作土
8．淡灰褐色砂質土　旧耕作土
9．灰黒色砂質土　粗砂混入
10．暗褐色粘質土　粗砂混入　Ｆｅ多い
11．黒色シルト
12．灰黒色シルト　古式土師器
13．灰黒色粗砂　古式土師器
14．灰黒色砂　古式土師器
15．灰黒色粗砂　古式土師器
16．灰黒色シルト　古式土師器
17．灰黒色粘土　灰黒色シルト混入　古式土師器
18．暗青灰色粗砂　礫少量混入
19．灰褐色砂質土　粗砂多量混入（Ｆｅ）
20．褐色砂質土　Ｆｅ

第16図　谷３断面図２（１/80）



1．黒灰色シルト　耕作土
2．黄色シルト砂混入　床土
3．地山ブロック等混入　造成土
4．造成土
5．淡灰色シルト
6．淡褐色砂質土
7．灰色シルト砂混入
8．淡黄緑色シルト砂混入
9．淡灰褐色シルト砂混入
10．淡黒色シルト砂混入
11．漆黒色細砂　古式土師器
12．漆黒色砂質土　古式土師器
13．漆黒色シルト　古式土師器
14．漆黒色砂　古式土師器
15．黒褐色粗砂　古式土師器
16．黒色砂　古式土師器
17．黒色シルト　古式土師器
18．暗灰色砂　地山　堅緻
19．淡黄緑色風化礫　地山
20．淡黄緑色砂　地山　堅緻
21A．淡褐色粗砂　地山　堅緻
21B．灰色粘質土　地山
22．暗黄色粘土　ブロック状堆積造成土
23．灰色シルト
24．暗灰色粘土
25．黄色粘土　砂礫細量混入（Ｍｎ）地山
26．淡黄色シルト　地山
27．黄褐色シルト　地山　堅緻
28．暗黄色粘土　拳大風化礫混入　地山
29．暗灰色砂質土　地山　堅緻
30A．淡黄緑色シルト　砂ラミナ状混入
30B．淡黄白色シルト　地山　僅かにグライ化
31．淡灰緑色砂質土　地山　極めて堅緻
32．淡灰色粗砂　淡灰色細砂　地山　ラミナ状堆積
33．黒灰色シルト　植物遺体少量混入　地山
34A．淡緑色シルト　地山堅緻
34B．淡灰色粗砂　地山
35．暗黄褐色粘土　風化礫混入　地山

第17図　谷３断面図３（１/80）

耕作土層・床土層の連続で上部１ｍ程度より下位ではグライ化が顕著である。水田造成時の谷肩部の加工は西肩部で顕著な段差として観察できる。

谷中央部の凹部堆積層は二次的な撹拌を蒙らない自然的なそれである。灰黒色シルトを主体とし概ね微細な堆積物を持って充塡されるが，局部的に粗粒砂等を認める。この部分に古式土師器などの大形片を濃密に包含する。

谷３土層３

４ａ区北壁セクション。この部分では上面幅25ｍ深さ2.5ｍを測り，中央部で断面Ｕ字形に幅７ｍ深さ１ｍ程窪む。概ねその部分以高の堆積層は耕作土層・造成土層の連続堆積をなす。これに対応するようにやはり両肩斜面に少なくとも３段の削平部を観察できる。

谷中央部の凹部堆積層は二次的な撹拌を蒙らない自然的なそれである。灰黒色シルトを主体とし概ね微細な堆積物を持って充塡されるが，局部的に粗粒砂等を認める。この部分に古式土師器などの大形片を濃密に包含する。

第18図　古墳時代遺構配置図（1/400）

第２節　古墳時代の遺構・遺物

1.　埴輪製作関連遺構

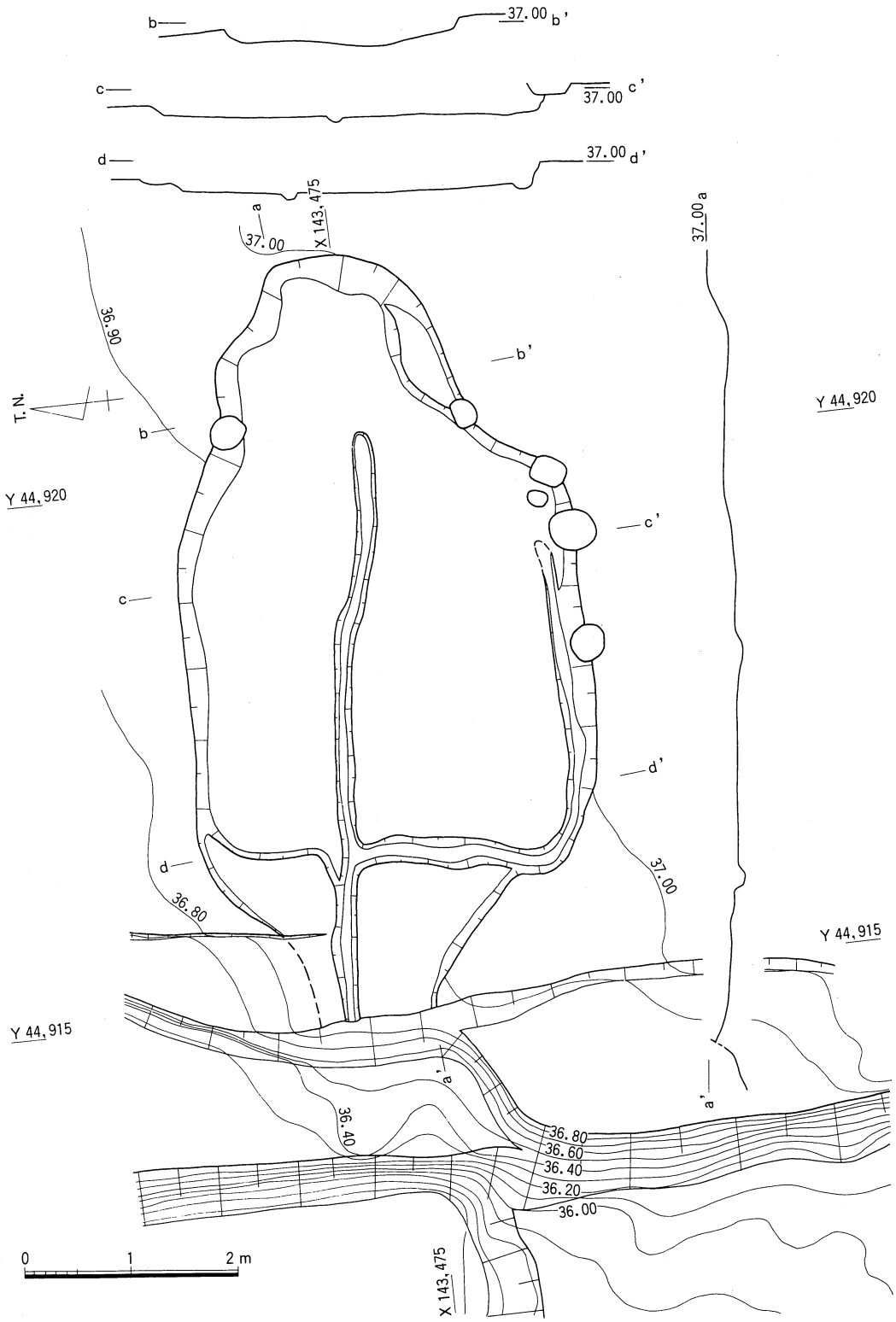
埴輪焼成土坑

３ａ区西端，地形的には丘Ｃの西縁にあって谷３に面する。土坑の末端は谷部の開墾時に破壊されている。不明遺構ＳＸ０２は約20ｍ東方の丘陵中央部に残存する。溝状遺構ＳＸ０１は丘陵西縁部で本焼成土坑より斜面上方40ｍに位置する。また本焼成土坑は中世後半の掘立柱建物ＳＢ０１等と重複する。

本地区では後世の削平が顕著である。古墳時代～近世の堆積層は残存していない。近年の耕作によって撹拌されている。本焼成土坑も現在の床土直下で検出している。残念ながら残存状況は必ずしも良好ではなく，後述するように上部を一定程度削られている。削平は数次に及んだらしい。最初の削平は中世以前に想定されるが，重複する中世後半の遺構そのものもある程度削られている。

焼成土坑の平面形態は基部を谷に向けた木葉形とでも称するもので，あまり整ったものではない。あるいは方形土坑の東西に舌状の張り出しを付加した形態とも見なしうる。中央の略方形部分だけで幅3.8ｍ，長４ｍを測り，東端には長1.7ｍの舌状の突出部が続き，西端にも長1.4ｍ以上の張り出し部分がある。それらを加え残存長でも7.2ｍを測る。掘り込みの深さは現状では中央部でも最大0.25ｍを測るにすぎない。中央部，つまり方形部分のおよそ3.3×3.5ｍほどの範囲は床面がほぼ水平となり，南北壁つまり土坑超側辺の立ち上がりはきつい。しかし東端張り出し部では先端に向けて緩やかに立ち上がり，この部分では中央側壁部分のようにきつく立ち上がることはない。また西端は一見谷に向かって開口しているかの観を与えるが，末端は破壊されているものの残部から実際には西壁も緩やかに立ち上がり閉じていることがわかる。いずれにしても南北の側辺部分に比べ東西端部壁が緩やかな立ち上がりを持つことに注意しておきたい。

床面には２条の小溝が認められる。断面形は概ね台形様を呈し幅0.15～0.2ｍ，深さ0.05～0.08ｍを測る小規模な溝である。南辺部分を除き検出した大部分の範囲で微細な炭片を多量に含む黒色土によって充塡されていた。１条は方形部東端付近に始まりほぼ中軸上を通り西端から外部に抜ける。もう１条は南辺際を通り中央の方形部西辺に沿って鍵の手に曲がり中央の溝に合流する。末端は既に失われているが土坑外に出て谷部斜面に延び



第19図　焼成土坑平面図・断面図（1 /60）

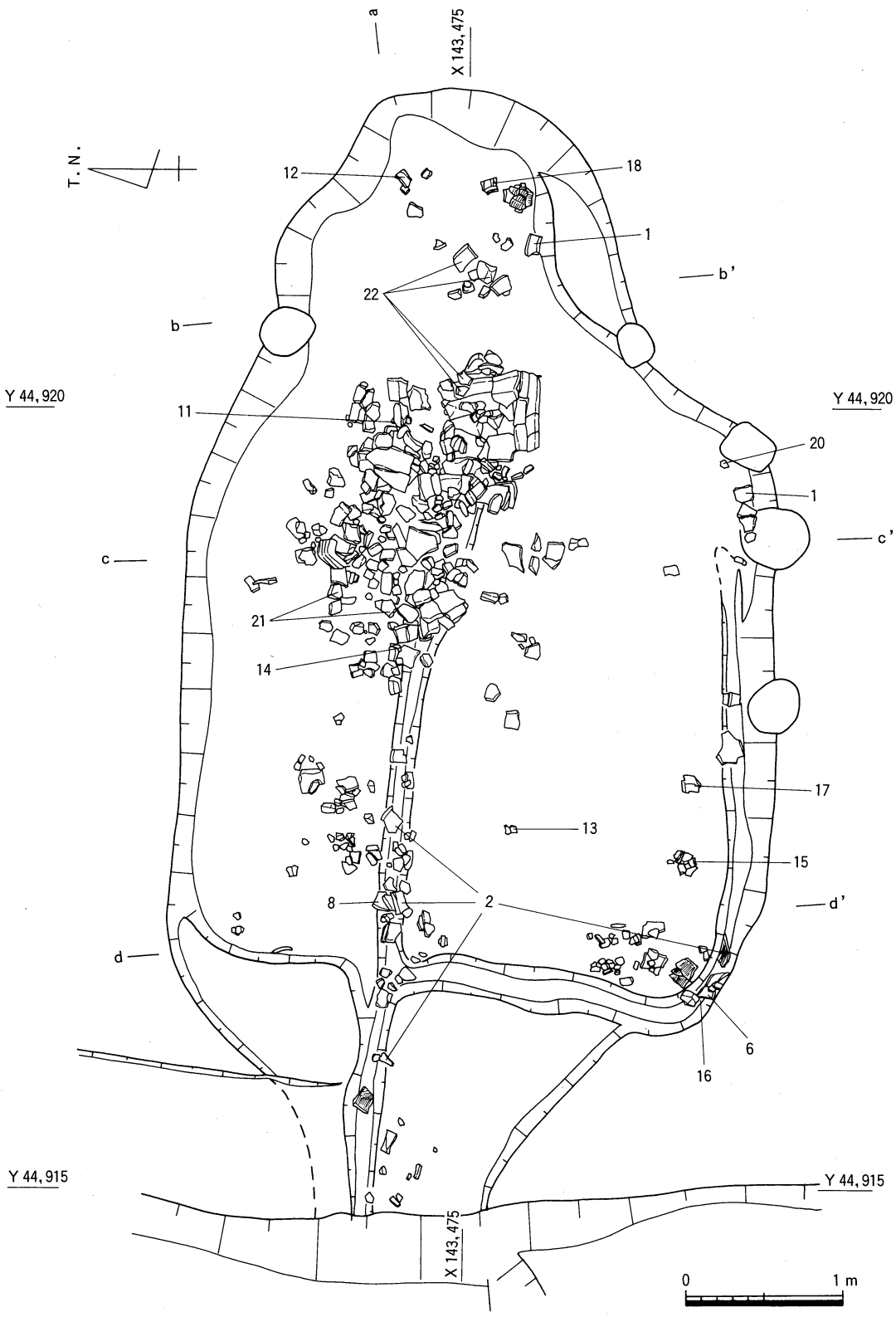
ることは確実であろう。２条の床溝は土坑中軸と山側の壁際に配されていること，それが外部に抜けることやその規模・形状から，これらが排水目的の溝と考えるのが合理的であろう。また排水溝の存在は本土坑の機能を示唆する重要な材料の一つである。

土坑埋土は大別して３層に区分できる。ほぼ上面全体を比較的地山表層に類似した黄灰色系の砂質土が覆っている。中位には少量の炭細片を交える暗灰褐色砂質土が層厚0.1ｍ前後認められる。床面直上では中央部の溝周辺を中心に炭片を多量に含む暗褐色粘質土が堆積する。先に述べた床溝の埋土は同層に近似するが炭片の含有量が遙かに多い。両層とも包含される炭片はひどく細片化しており本来の材形状をとどめるものはない。また細片とはいえ堆積土中に比較的多量に炭片が認められるにも関わらず，炉壁材などの可能性がある焼土塊は認められない。南壁際では局部的に地山類似土等のブロック状堆積が認められる。

土坑からは箱形土製棺蓋材・円筒埴輪・蓋形埴輪・半裁器台形埴輪・大形二重口縁壷などが出土している。小形丸底土器や高坏の細片も少量認められるが，比較的大型器種が目につく。土坑内遺物の出土位置は大部分が，床面直上の炭片を多く含む暗褐色粘質土の分布と密接に関わり，同層上面ないしは同層中に顕著に認められる。土坑中央部に箱形土製棺蓋材が位置し，他器種は小片化して縁辺部に散乱する傾向が高い。なお土坑内西部で検出した須恵器壷片は上層黄灰色砂質土層の下面に位置する。

土坑内遺物の遺存状態は総じて良好ではない。肌荒れや変色が目につく。それらは埋没環境に起因すると見るよりも，一般には二次的な被熱資料に多く見られる現象である。また同一個体で破片単位で微妙に色調を違える例や，器体表層と芯部で，後者が還元状態にあるなど色調を違えるにも関わらず，破断面の一部が表層部分と同一の色調を呈する例が注意される。前者は埋没環境に極端な格差が生じるとは考えがたい同一土坑内資料相互での現象であるから，埋没後の二次的な変化とは理解できない。むしろ後者と共に焼成時の破損を示す可能性が高い。このような特徴は上層出土の須恵器以外の資料に見ることができる。なお肌荒れや変色は箱形土製棺蓋材以外の，小片化した資料に顕著な傾向がある。

さて既に述べたように土坑内検出遺物の中心となるのは土製棺蓋材である。２枚の部材を持って構成される棺蓋の片方の破片，およそ８割程度が土坑内から得られた。これは中央溝の先端部付近を中心にほぼ中軸線上に集中する。土坑の残存状況からすれば本来的には棺蓋一枚（半身分）がほぼ完全に土坑内に存したことが予想できる。ただし本来的にこれと組み合って機能する残り半身の蓋材や棺身材は小片すら出土していない。蓋材半身は土坑主軸とは直交して，合わせ口を南に向けて裏返した状態で出土した。蓋材の合わせ部

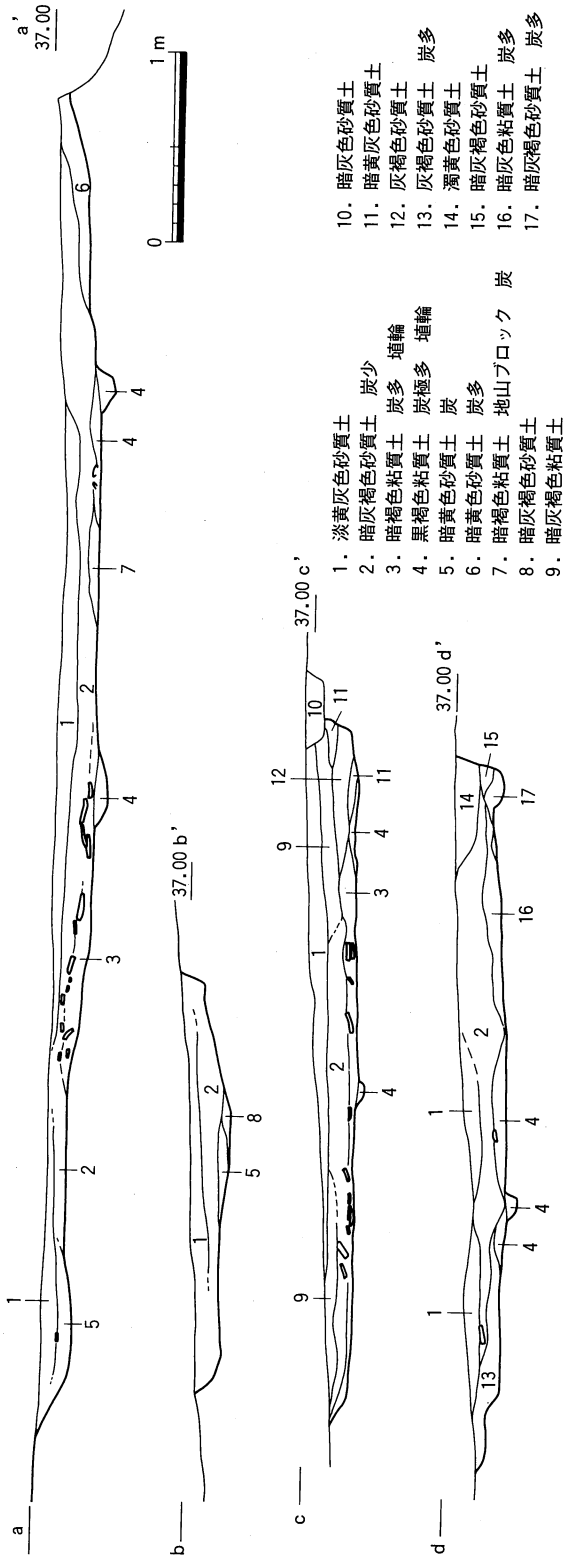


第20図　焼成土坑遺物出土状態図（1 /40）

から一方の側縁，すなわち南東部分も細かく砕け破片化しているが，それらの位置関係は材本来の形態をかなり忠実にとどめている。この部分では裏返しになった蓋本体の取り上げ後に本来外表に貼付された突帯がその配置を保ちつつ脱落した状態で確認できた。

この状態からすれば，先に予測した焼成時破損は，別地点で生じたことではないものと見なければならない。もっとも北半部すなわち蓋材小口部付近の破片に限って配列がかなり乱れ散乱しているので土製棺蓋材を土坑内のこの位置に置いた状態が完全に保たれているのではなく，少なくとも一部については二次的に撹乱されたことが推定できる。しかし本来的な位置関係を保つ部分が過半以上であることは間違いなく，局部的な撹乱が想定されるにせよ先の推定を覆すには至らない。なお埋土の状況から判断してこの局部的な撹乱は中層堆積以前，すなわち先に述べた須恵器片の流入以前の早い時期の所産と考えられる。

この他，円筒埴輪・蓋形埴輪・大形二重口縁壺などは，いずれもごく一部の破片が土坑内でも縁辺部に散乱した状態で認められるにすぎない。半身分がほぼ残存していた土製棺蓋材とは極めて対照的な状況である。蓋形埴輪で



第21図　焼成土坑土層図（1/40）

は頂部の立ち飾り板の小片をわずかに得たにすぎない。円筒埴輪・大形二重口縁壷・「半裁器台形」埴輪等の小片の多くは南辺壁際小溝の屈曲部付近では半ば以上溝内に埋もれた状態で検出した。後世の削平によって失われている部分も否定できないが，その些少さからすれば，大形壷・円筒埴輪その他については破砕・脱落した局部的な部材が土坑内に残されたか周辺からの初期の流入を予測させるものである。

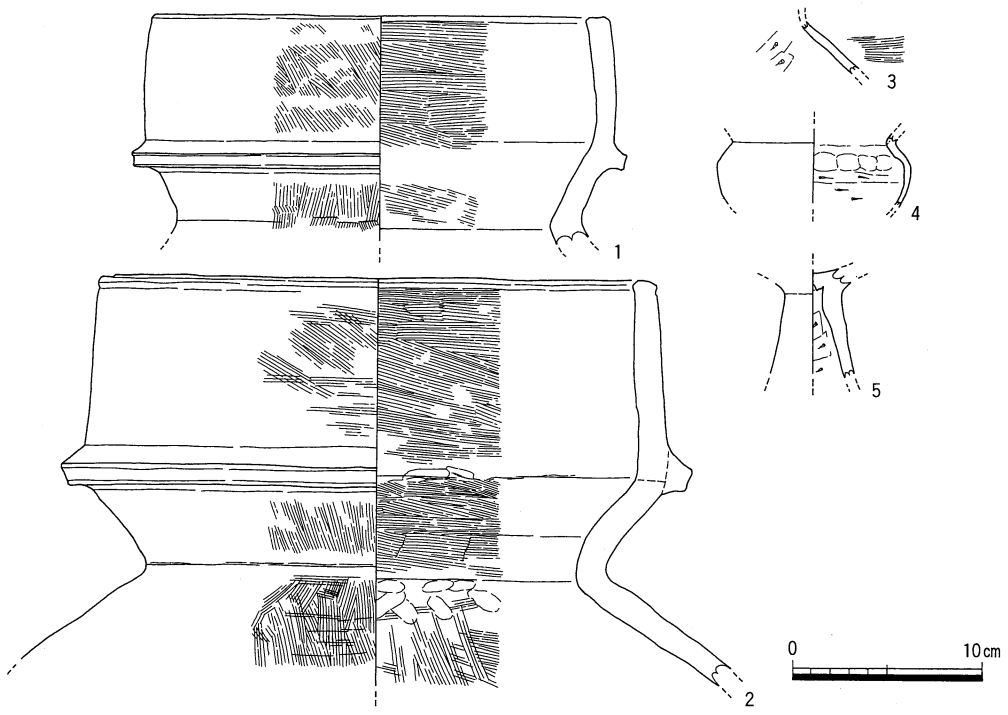
さて出土遺物の特徴的な遺存状態－変色・破損状態－と床面上に広く堆積する含炭層の存在から本土坑において，これらの焼成がなされた可能性が高いと考える。土坑の形状はこの推定と矛盾するものではないし，排水溝を設置して浸水を嫌う構造もこの推定を補強するであろう。土坑床面・壁面の変色・硬化の欠如は焼成方法と後世の上部削平によって説明が可能と考える。また本土坑の規模や遺存遺物，更に後で見る前面谷部の遺物出土状態から土製棺・埴輪類など土師質大形器種の焼成施設と推定する。

焼成土坑出土遺物は以下の通りである。

土師器　大形二重口縁壷
　　小形丸底土器
　　高坏
　　甕（壷）
円筒埴輪　円筒埴輪２ａ類
形象埴輪　蓋形埴輪（飾り板）
　　「半裁器台形」埴輪
土製棺　箱形土製棺（蓋材）
須恵器　中形壷

既に述べたように須恵器は混入資料と判断した。また箱形土製棺蓋材は半身分の部材の大半を検出し接合復元することができた。他器種についてはいずれも部分的な小片に過ぎず，本遺構の一定の削平を考慮してもほぼ完形で遺棄されたとは考えがたい。焼成時破損品のごく一部が残存したか，外部からの早い時期の流入と見たい。

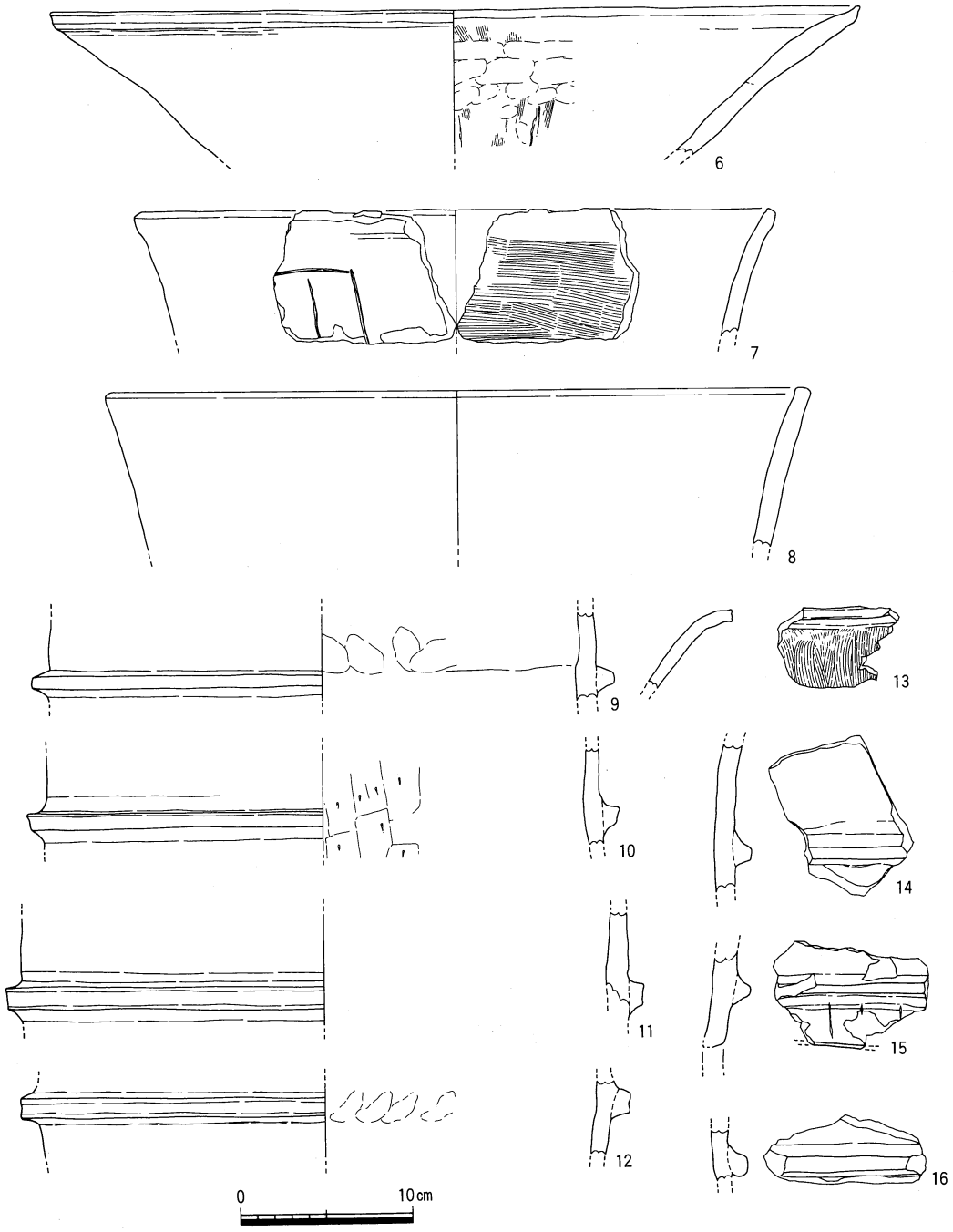
１・２は大形二重口縁壷の口頸部片である。法量に差があるが形態・調整は細部に至るまで酷似している。短い頸部と内湾気味の長大な立ち上がり部，屈曲部の台形突帯が特徴である。なお２は破片の一部が谷３廃棄土器群から見出されている。これらに伴うと見られる若干の体部片も出土しているが形状を知り得るほどではない。また両資料とも二次的被熱による変色が顕著である。特に２は破片ごとに色調が異なっており破砕後の被熱を示



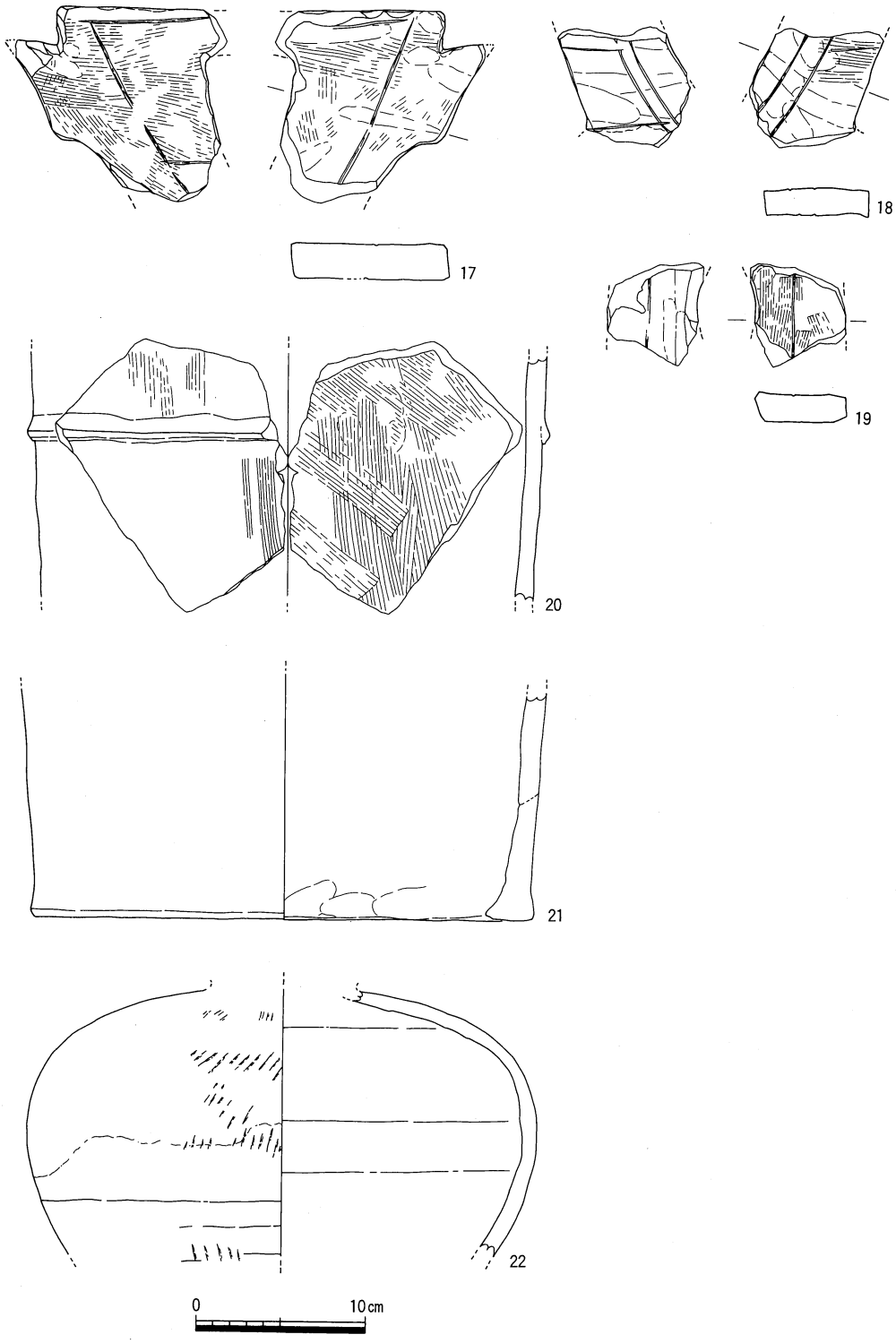
第22図　焼成土坑出土遺物１　土師器（１／４）

している。３は甕ないしは壷肩部小片。外面には当該時期に特徴的なこの部位の横ハケが観察できる。４小形丸底土器は扁平な体部で内面中位は強く削り込む。比較的古い様相をとどめる個体である。５高坏軸部は内面頂部にやはり当該時期に特徴的な棒状刺突痕が見られ，内面をよく削る。

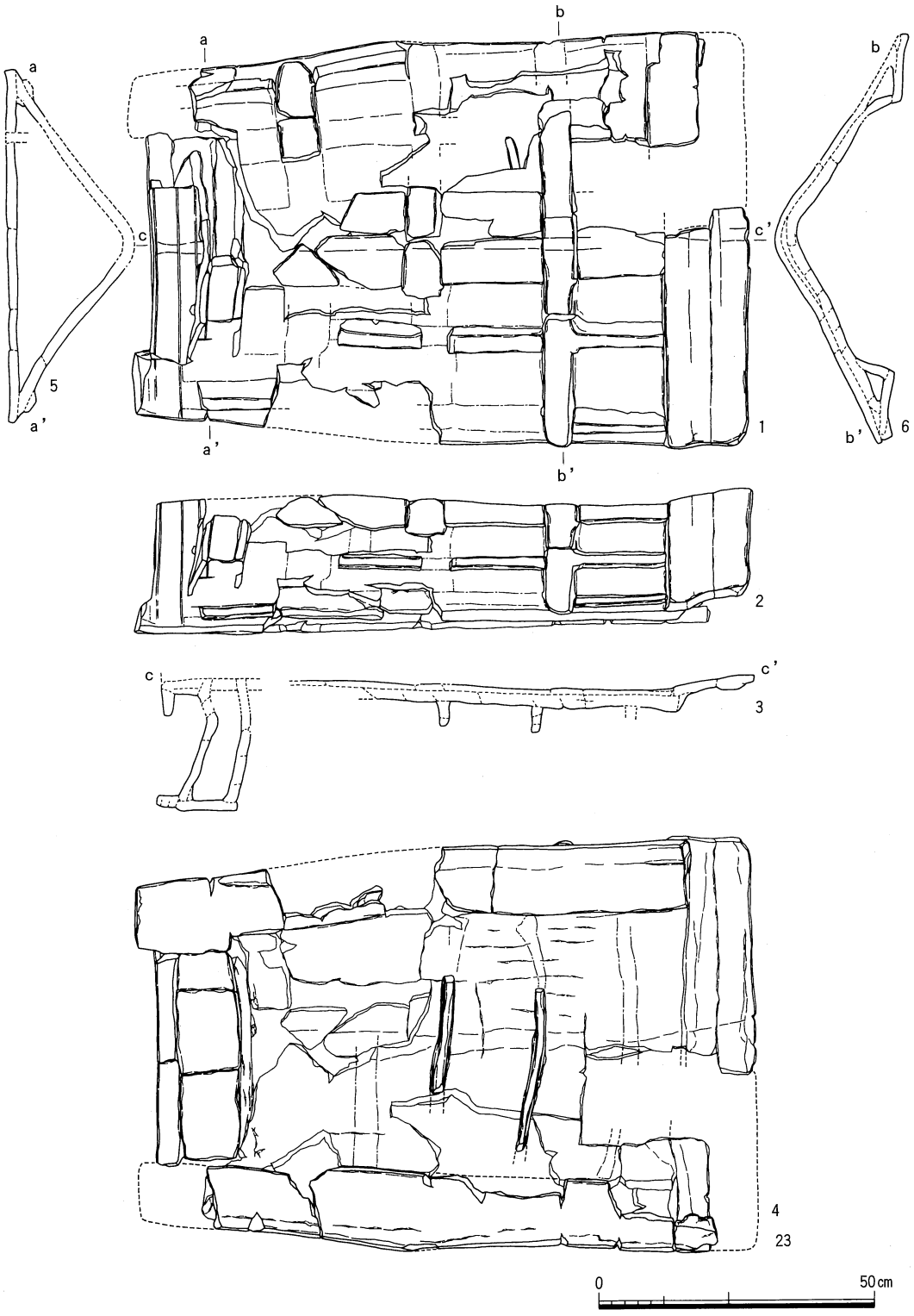
６は全体形状を知り得ないが，端部形態や調整から特異な形状の「半裁器台形」埴輪口縁部片と判断した。内面は粗いハケ調整後の指押さえが観察できる。なお切断面部分は残存していない。７・８は円筒埴輪口縁部片。緩やかに外反して端部は内方に小さく突出しつつ四角く収める。７は外表に線刻がある。13も口縁部片であるが器壁は薄く端部を鈍く折り曲げて強く開く。広口壷や円筒埴輪とは見なしがたく器種不明。外表は端部直近まで縦ハケをとどめる。９～12，14～16，20は円筒埴輪中位段片。小振りだが突出度の高い台形突帯（９・14・15），上部がやや突出した台形突帯（10・11・12）と垂下気味の矩形突帯がある。20以外ではハケ調整は残存しない。15では突帯直下に３本の垂下沈線が見られると共に方形ないしは三角形透かしの一部が残存する。10は内面に弱い縦ケズリを見るが，こうした調整は本遺跡資料では極めて希である。20は細い粘土帯を２本の指で挟みつけて



第23図　焼成土坑出土遺物２　円筒埴輪（１／４）



第24図　焼成土坑出土遺物３　その他（１／４）



第25図　焼成土坑出土遺物４　箱型土製棺（１/12）

貼付している。他に比べ粗雑な接合である。内外面に比較的粗い縦ハケ調整を顕著に残す。

17～19は蓋形埴輪飾り板。粗いハケ調整後表裏に同一意匠の線刻を加える。その配置から見ていずれも17同様に中央に透かし孔を穿つらしい。

21は水平方向に緩く弧を描く小片で下端は内方に強く張り出す。器表が剝落して調整不明。円筒埴輪基底部として図化したが土製棺蓋材頂部片の可能性もある。

22は強く肩の張った須恵器壷体部片。先に見たように後世の焼成土坑削平時の流入品と見られる。外表には並行叩きをとどめ，肩部は自然釉の付着が顕著である。７世紀末葉～８世紀の口頸部の狭い中形壷体部片と考える。

23（及び付図）は箱形土製棺蓋材。比較的類似した形態の今岡古墳出土土製棺を参考にすると，蓋材は２つの部材を組み合わせて構成され，本品はその１部材，つまり蓋材半身分に相当する中心部分で全長110cm，別材との合わせ部の推定幅76cm，小口部ではやや幅を減じて推定62cmとなる。勾配の緩やかな屋根形を呈し，合わせ部で高26cm，小口部では24.5cmとなる。軸方向に水平に，頂部を含めて１側面３段，計５条の粘土帯を付し，これと直交する横断方向の推定４条と合わせて外表を格子目状に区画する（23-1・2）。合わせ部は別材端部と重ねるように外表に貼付した粘土帯に合わせて幅15cmほどを一段高く突出させる。小口端部は軒先状に板材を張り出す。また末端より８cm程内側で５cmの間隔を持った内外二重の壁で小口部分をふさいでいる。また二重壁の下面は別材で密閉しており，この部分は空芯構造の箱形をなしている。今岡古墳資料では蓋材小口部は開放している。U字形の蓋材断面に合わせて上部が蒲鉾形に突出した空芯箱形の棺身小口板を持ってこの部分をふさぐ。本品では小口板上部が棺身材と分離して，蓋材と一体化した構造をとる（23-3）。

この小口部の特異な二重壁構造と対応するように側縁部も複雑な構造を示す。この部分の下面は棺身材上端との合わせを考慮して幅11～13cmの平坦面を作り出すがそのために側縁下部は断面三角形の空芯箱形構造をもつ（23-６）。更にこの空芯構造を補強するためにおおよそ15～20cm間隔で隔壁状の詰め物が認められる（付図）。こうした側縁の特異な構造のため，本品の横断面形状は外見上三角形を呈するが，内面は半円形に近い。また内面には肋骨上の補強材４条を横断方向に渡す（23-４）。

このように大形で複雑な構造の土製品である本品は，細い粘土帯の積み上げではなく基本的に幅10cm内外の粘土板を連結して製作している。一般に土器・円筒埴輪の成形時には粘土帯相互の密着をはかるために接合面は斜めに面取りするなどして接着部分を拡大する配慮が認められるが，本品ではそうした形跡は観察し得た限りでは確認できない。複雑な

細部構造以外では粘土帯の狭い端面をそのまま連結しているようである。こうした成形作業の特徴は後に見るように本遺跡例では家形埴輪や土製棺一般には共通する。しかし円筒埴輪・土師器では一般的な接合手法に拠っておりこれらとは異なる。

外表は粘土帯貼付前に本体は主軸方向，合わせ部張り出し部分は横断方向にハケ調整を施す。その後粘土帯の配置を示す割付線を加え，それに合わせて格子状に貼付し，更にその上面にハケ調整を加える。その際に粘土帯以外の部分も二次的にハケ調整が及ぶ箇所がある。突帯上面のハケ調整は基本的にその方向に合わせており，横断方向のそれへのハケ調整が先行するようである。内面は補強材貼付前に軸方向のハケ調整を施すようであるが後に指押さえとナデで大部分が消されている。また小口部・側縁の空芯構造内面にはハケ調整は及ばず粗い指ナデや押さえがよく残る。

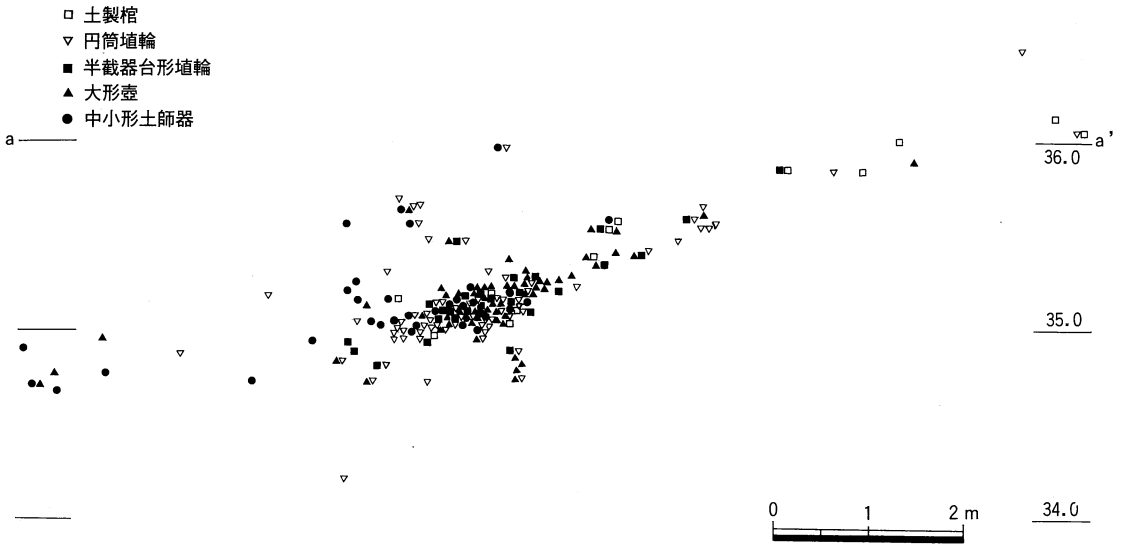
以上の焼成土坑出土資料は器種差を越えて胎土の点で極めて近似した内容をもつ。大小・器種によって含有量は多少異なるものの，いずれも粗粒の石英および焼粘土塊と思われる赤色粒を多量に含む。特に後者は径５㎜前後の大形粒すら珍しくない。角閃石細粒は少量ずつ認められるが雲母粒は極めて少ない。詳細な検討は後章に譲るが，これらの資料は谷３資料の主要部分と同一時期の所産であり，布留式新段階古相に位置づけられる。

谷３廃棄土器群

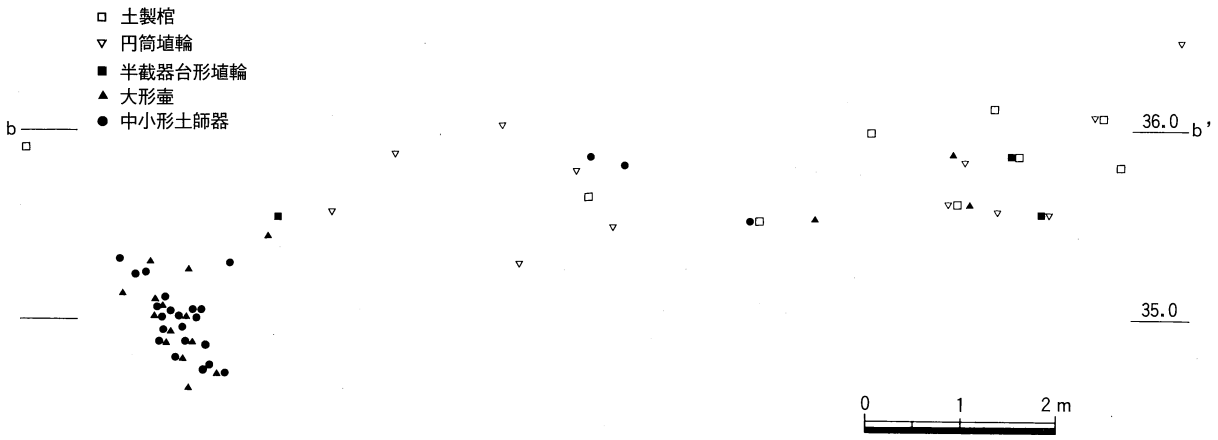
丘Ｃ西側の谷３では多量の古墳時代前期の資料を検出している。同谷は先に述べたように上半部分は水田造成によって大きく改変されているが，下半部には自然堆積層と自然地形が残されており，この部分に多量の遺物が包含されている。上層の耕作土・造成土層では中世後半までの遺物細片を少量含むが，下部の自然堆積層に含まれる多量の遺物の圧倒的大部分は古墳時代前期に比定できるものである。

それらは調査区の全域においてかなり濃密に認められるが特に遺物が集中する範囲が３単位確認できる。１群（４ａ区）は丁度焼成土坑前面の谷底東部に位置し，地形に合わせて南北７ｍ，東西３ｍ前後の範囲に広がる。第８～14表に示したようにこの群では円筒埴輪を中心に特異な形状の半裁器台形埴輪及び大形二重口縁壷といった大形器種を伴う。大形破片が多いが，完形にまで復元できる資料はごくわずかである。また土師器の小形器種はほとんど見ない。これらの全般的な特徴として亀甲状に破砕した砕片やひずみ等が認められる。また一部には焼成土坑資料で指摘したような破断面の変色も認められるが，谷部出土資料はその埋没環境の結果，脱色が顕著であまり明瞭ではない。

第26図　谷３遺物出土状態平面分布図１（４ａ区）（１/80）



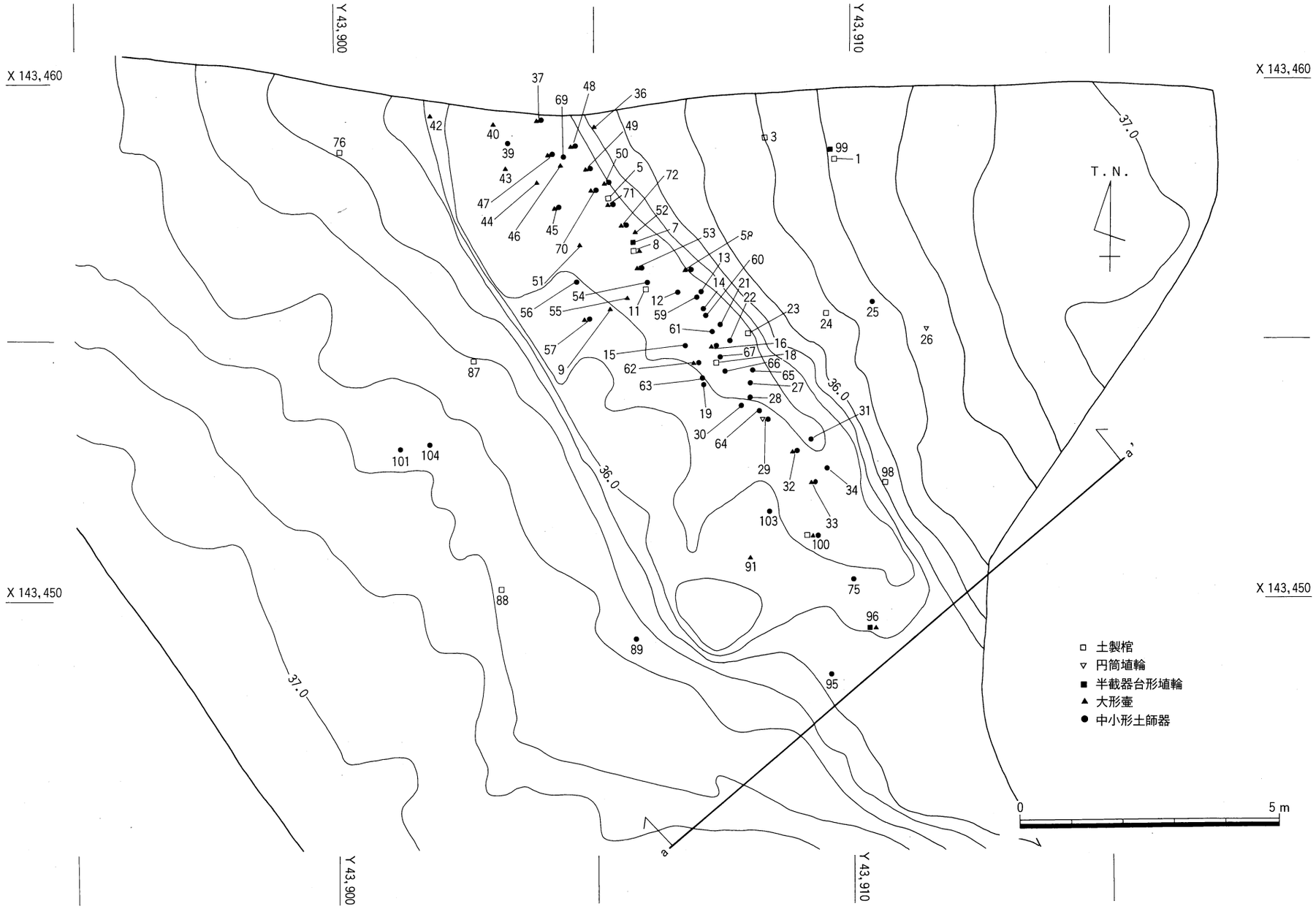
第27図　谷３遺物出土状態垂直分布図１（４ａ区１）



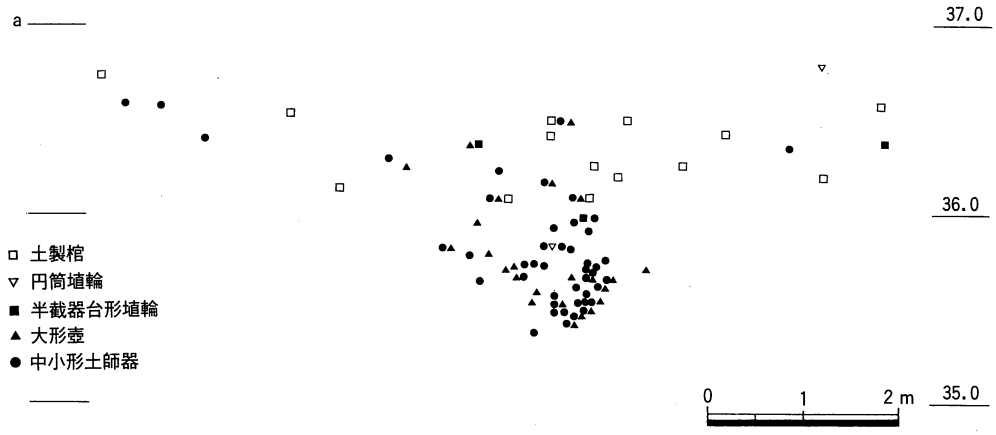
第28図　谷３遺物出土状態垂直分布図２（４ａ区２）

２群はこれより４ｍ程北に寄った谷底に南北４ｍ×東西２ｍの範囲に集中する遺物群である。この群では中・小形壺や甕・高坏など土師器小型器種各種が中心となる。これらはほぼ完形にまで破片が揃う資料が先の１群大型品に比べれば遙かに多い。また土師器大形品の破片も少量伴うが，円筒・形象を問わず埴輪類は伴わない。

３群（４ｂ区）は南北８ｍ以上×東西３ｍ程の広がりを示す。北端は現有水路により確認不能であったが２群には連続しないであろう。１・２群に比べると遺物はやや散漫に分布する。出土遺物の器種構成は土師器小形器種各種を中心として埴輪類は見られない。ま



第29図　谷３遺物出土状態平面分布図２（４ｂ区）（１/100）



第30図　谷３遺物出土状態垂直分布図３（４ｂ区１）

た大形破片を多く含み，２群同様にほぼ完形近くまで揃う個体が比較的目につく。

なおこれら１～３群より南，谷上方の４ｃ区部分でも土師器小形器種を中心とした遺物が比較的濃密に認められる。しかし上記した各群同様の集中は確認できなかった。また上層の耕作土・造成土層では，耕作時の撹拌によって多くは細片化しているが中近世までの遺物片と混在して少なからぬ土師器・埴輪片などが出土している。それらには１～３群を含めた下層資料には含まれない家形埴輪などの形象埴輪類や土製棺片が谷下方の４ａ区を中心に認められる。したがってこれらはかならずしも谷３下層で検出した遺物群の一部が撹乱・混入したものではなく，既に削平された谷上部斜面に，別個のそして異なる器種構成（混入している小片から形象埴輪類や土製棺を中心とするであろう。）の遺物集中単位が存在したことを予想させるものである。

谷下層資料，特に１～３群ではごく少数混在する弥生時代～古墳時代初頭の遺物を除き，器種差を越えて胎土上の特徴が共通する。すなわち石英粗粒及び赤色物（おそらくは焼粘土塊）粗粒を多く含み，角閃石細粒を極少量交える。丘Ｃ東部の古墳時代前期以降出土遺物の特徴と一致するものである。

またこれらは大形片が目につくとはいえいずれも破損品であり，その出土状況からは到底意図的な配列ないしは埋納は想定できない。またこれらがどちらかといえば谷底でも東側による傾向を示すので，丘陵部，東側の丘Ｃ側から投棄された遺物群と見なすべきであろう。また既に述べたように谷３は谷底の勾配が非常に緩い。また少なくとも遺物投棄当時にはその包含層序の堆積物の構成から見て強い水流は想定できない。このことから以上確認した遺物の偏在的な分布傾向や地点ごとの器種構成の格差は自然営力に基づく偶発的か

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.1		○														65	
4 a区 No.2																	
4 a区 No.3					○												
4 a区 No.4		○		○												70,97	
4 a区 No.5		○														65	
4 a区 No.6		○															
4 a区 No.7			○														
4 a区 No.8					○												
4 a区 No.9	○				○											79	
4 a区 No.10				○	○											79,68	
4 a区 No.11																	
4 a区 No.12																	
4 a区 No.13		○															
4 a区 No.14					○												
4 a区 No.15					○												
4 a区 No.16																	
4 a区 No.17																	
4 a区 No.18																	
4 a区 No.19				○	○											66,71	
4 a区 No.20		○			○											65	
4 a区 No.21					○												
4 a区 No.22				○												73	
4 a区 No.23																	
4 a区 No.24		○														65	
4 a区 No.25		○															
4 a区 No.26					○												
4 a区 No.27					○												
4 a区 No.28																	
4 a区 No.29					○												
4 a区 No.30																	
4 a区 No.31																	
4 a区 No.32					○												
4 a区 No.33																	
4 a区 No.34					○												
4 a区 No.35									○								
4 a区 No.36																	
4 a区 No.37					○												
4 a区 No.38	○			○	○											66	
4 a区 No.39																	
4 a区 No.40																	
4 a区 No.41				○	○											79,68	
4 a区 No.42					○												
4 a区 No.43		○			○	○		○	○							63	
4 a区 No.44					○												
4 a区 No.45																	
4 a区 No.47																	
4 a区 No.48																	

第8表　谷3出土遺物一覧1

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.49		○														65	
4 a区 No.50					○												
4 a区 No.51					○												
4 a区 No.52					○												
4 a区 No.53						○										76	
4 a区 No.54				○	○											69	
4 a区 No.55					○												
4 a区 No.56					○												
4 a区 No.57																	
4 a区 No.58					○												
4 a区 No.60				○												69	
4 a区 No.61					○												
4 a区 No.62				○												73	
4 a区 No.63									○								
4 a区 No.64		○		○												73	
4 a区 No.65		○				○										76	
4 a区 No.66																	
4 a区 No.67																	
4 a区 No.68		○		○	○											67	
4 a区 No.69																	
4 a区 No.70					○	○										76	
4 a区 No.71																	
4 a区 No.72																	
4 a区 No.73				○												69	
4 a区 No.74				○												73	
4 a区 No.75				○												73	
4 a区 No.76				○					○								
4 a区 No.77		○														65	
4 a区 No.78		○															
4 a区 No.79		○														65	
4 a区 No.80		○														65	
4 a区 No.81		○		○	○											78, 70, 71, 72	
4 a区 No.82		○		○												65	
4 a区 No.83		○			○											70	
4 a区 No.84					○												
4 a区 No.85		○		○	○											70	
4 a区 No.86		○		○												67	
4 a区 No.87		○			○												
4 a区 No.88				○												70, 72, 59	
4 a区 No.89		○		○												72, 45	
4 a区 No.90																	
4 a区 No.91		○			○												
4 a区 No.92																	
4 a区 No.93				○												67	
4 a区 No.94		○		○												72	
4 a区 No.95		○														54	
4 a区 No.96		○		○	○			○								67, 28	

第9表　谷3出土遺物一覧2

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.97		○		○													
4 a区 No.98		○			○											79, 30, 24, 54, 41	
4 a区 No.99		○							○							38, 62	
4 a区 No.100		○			○												
4 a区 No.101				○												66	
4 a区 No.102																	
4 a区 No.103		○														39	
4 a区 No.104					○												
4 a区 No.105		○															
4 a区 No.106		○														54	
4 a区 No.107		○														60	
4 a区 No.108		○														42	
4 a区 No.109		○														26	
4 a区 No.110		○			○											51	
4 a区 No.111		○														55	
4 a区 No.112																	
4 a区 No.113		○														27, 47	
4 a区 No.114																	
4 a区 No.115		○														36, 55, 43, 37	
4 a区 No.116		○														56	
4 a区 No.117		○														48	
4 a区 No.118		○														40	
4 a区 No.119				○												67	
4 a区 No.120		○															
4 a区 No.121		○														52	
4 a区 No.122		○														25	
4 a区 No.123		○		○												66, 25	
4 a区 No.124										○						77	
4 a区 No.125				○												68, 66	
4 a区 No.126		○			○											50	
4 a区 No.127	○															132	
4 a区 No.128		○														52	
4 a区 No.129		○			○												
4 a区 No.131																	
4 a区 No.132		○						○									
4 a区 No.133								○									
4 a区 No.134		○			○											34	
4 a区 No.135		○														27, 31	
4 a区 No.136		○			○											65, 44, 58, 32, 35	
4 a区 No.137		○			○												
4 a区 No.138		○														28, 35, 64	
4 a区 No.139		○			○											57	
4 a区 No.140		○		○												67, 33, 53	
4 a区 No.141	○	○														54	
4 a区 No.142		○			○												
4 a区 No.143		○														65, 44	
4 a区 No.144																	

第10表　谷3出土遺物一覧3

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.145								○									
4 a区 No.146					○												
4 a区 No.147																	
4 a区 No.148								○									
4 a区 No.149								○									
4 a区 No.150																	
4 a区 No.151								○									
4 a区 No.153								○								102, 83	
4 a区 No.154																	
4 a区 No.156		○														96	
4 a区 No.157		○															
4 a区 No.158		○						○								29, 46	
4 a区 No.159								○									
4 a区 No.160		○														95, 101	
4 a区 No.161																	
4 a区 No.162					○											1	
4 a区 No.163		○														49	
4 a区 No.164		○						○								74, 75	
4 a区 No.165																	
4 a区 No.166																	
4 a区 No.167								○									
4 a区 No.168									○								
4 a区 No.169																	
4 a区 No.170																	
4 a区 No.171																	
4 a区 No.172									○								
4 a区 No.173																	
4 a区 No.174					○				○								
4 a区 No.176								○									
4 a区 No.177					○												
4 a区 No.178									○								
4 a区 No.179		○													○	105	
4 a区 No.180								○									
4 a区 No.181		○															
4 a区 No.182		○														65	
4 a区 No.183					○												
4 a区 No.184	○	○														99	
4 a区 No.185		○														98	
4 a区 No.186	○																
4 a区 No.187																	
4 a区 No.188	○	○														100	
4 a区 No.189																	
4 a区 No.190	○																
4 a区 No.191																	
4 a区 No.192	○																
4 a区 No.193					○												
4 a区 No.194																	

第11表　谷3出土遺物一覧4

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.195		○															
4 a区 No.196	○		○														
4 a区 No.197																	
4 a区 No.198					○												
4 a区 No.199	○								○								
4 a区 No.200																	
4 a区 No.201																	
4 a区 No.202					○											104	
4 a区 No.203																	縄文
4 a区 No.204								○	○								
4 a区 No.205		○															
4 a区 No.206	○															136	
4 a区 No.207									○								
4 a区 No.208		○															
4 a区 No.209									○								
4 a区 No.210																	
4 a区 No.211		○														55	
4 a区 No.212		○															
4 a区 No.213																	
4 a区 No.214		○															
4 a区 No.215		○															
4 a区 No.216					○												
4 a区 No.217				○												103	
4 a区 No.218										○						88	
4 a区 No.219					○												
4 a区 No.220					○												
4 a区 No.221					○												
4 a区 No.222																	
4 a区 No.223								○	○								
4 a区 No.224					○												
4 a区 No.225					○					○						90	
4 a区 No.226									○								
4 a区 No.227								○									
4 a区 No.228							○	○	○							82	
4 a区 No.229					○												
4 a区 No.230								○									
4 a区 No.231					○												
4 a区 No.232										○						87	
4 a区 No.233								○									
4 a区 No.234					○			○									
4 a区 No.235																	
4 a区 No.236																	
4 a区 No.237																	
4 a区 No.238									○								
4 a区 No.239																	
4 a区 No.240																	
4 a区 No.241									○							92	

第12表　谷3出土遺物一覧5

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 a区 No.242								○									
4 a区 No.243										○						86	
4 a区 No.244																	
4 a区 No.245	○																
4 a区 No.246																	
4 a区 No.247															○	129	
4 a区 No.248																	
4 a区 No.249					○			○								84	
4 a区 No.250					○			○	○							84	
4 a区 No.251					○				○								
4 a区 No.252					○	○		○	○	○						80	
4 a区 No.253					○				○							67, 89, 93	
4 a区 No.254					○				○								
4 a区 No.255						○		○	○	○						85, 91, 80, 81, 83	
4 a区 No.256					○												
4 a区 No.257								○									焼土塊
4 a区 No.258								○	○							84	
4 b区 No.1	○													○			
4 b区 No.2																	
4 b区 No.3	○																
4 b区 No.4																	
4 b区 No.5	○																
4 b区 No.6														○			
4 b区 No.7			○													192	
4 b区 No.8	○				○												
4 b区 No.9					○											144	
4 b区 No.10																	
4 b区 No.11	○																
4 b区 No.12									○								
4 b区 No.13									○							187	
4 b区 No.14								○	○								
4 b区 No.15								○	○							188	
4 b区 No.16					○			○	○								
4 b区 No.17																	
4 b区 No.18	○																
4 b区 No.19								○	○					○		154, 191	
4 b区 No.20																	
4 b区 No.21								○		○						174, 169, 176	
4 b区 No.22										○						162	
4 b区 No.23	○																
4 b区 No.24	○															137	
4 b区 No.25									○								
4 b区 No.26		○														194	
4 b区 No.27										○						172	
4 b区 No.28							○			○						163	
4 b区 No.29		○					○			○						165, 146	
4 b区 No.30						○											

第13表　谷3出土遺物一覧6

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 b区 No.31									○							184	
4 b区 No.32					○				○								
4 b区 No.33					○					○						166	
4 b区 No.34								○									
4 b区 No.35																	
4 b区 No.36					○												
4 b区 No.37					○			○	○							144	
4 b区 No.38																	
4 b区 No.39										○						178	
4 b区 No.40					○												
4 b区 No.41																	
4 b区 No.42					○												
4 b区 No.43					○												
4 b区 No.44					○												
4 b区 No.45					○			○									
4 b区 No.46					○												
4 b区 No.47					○			○								160, 149	
4 b区 No.48					○			○	○								
4 b区 No.49					○	○		○								161	
4 b区 No.50					○			○	○	○						144, 171, 157	
4 b区 No.51					○											143, 141	
4 b区 No.52					○												
4 b区 No.53					○			○	○							143, 142, 179	
4 b区 No.54								○		○						175, 176	
4 b区 No.55					○												
4 b区 No.56								○									
4 b区 No.57					○			○	○							149, 148	
4 b区 No.58					○				○								
4 b区 No.59									○							187	
4 b区 No.60										○						175	
4 b区 No.61										○						170	
4 b区 No.62					○			○		○						175, 154, 145	
4 b区 No.63								○								154	
4 b区 No.64						○				○						165, 146	
4 b区 No.65										○						168	
4 b区 No.66								○								155	
4 b区 No.67								○								158	
4 b区 No.68																	焼土塊
4 b区 No.69								○	○							160, 153	
4 b区 No.70					○				○							180, 182	
4 b区 No.71					○		○		○							186, 145	
4 b区 No.72					○				○							159	
4 b区 No.73														○			
4 b区 No.74																211	石包丁
4 b区 No.75									○								
4 b区 No.76	○																
4 b区 No.77																	

第14表　谷3出土遺物一覧7

遺構名	土製棺	円筒	器財	半裁器台	大形壺	二重口縁壺	直口壺	甕	高坏	小丸壺	低脚坏	二重鉢	小鉢	弥生	古代中世	挿図番号	備考
4 b区 No.78																	
4 b区 No.79																	
4 b区 No.80																	
4 b区 No.81																	
4 b区 No.82																	
4 b区 No.83																	
4 b区 No.84																	
4 b区 No.85														○		196	
4 b区 No.86																	
4 b区 No.87	○															138	
4 b区 No.88	○																
4 b区 No.89									○								
4 b区 No.90																	
4 b区 No.91					○											195, 193	
4 b区 No.92																	
4 b区 No.93																	
4 b区 No.94															○	197	
4 b区 No.95								○						○			
4 b区 No.96			○		○											139	
4 b区 No.97																	
4 b区 No.98	○															137	
4 b区 No.99			○													192	
4 b区 No.100	○				○	○		○	○	○				○		140, 164, 167, 173, 189, 190, 181, 185, 183, 147, 156, 150, 151, 152	
4 b区 No.101								○						○			
4 b区 No.102														○			
4 b区 No.103										○						177	
4 b区 No.104									○					○			

第15表　谷3出土遺物一覧8

つ二次的な移動の結果ではなく，本来的な遺物の投棄状態を比較的忠実に反映したものと見てよいであろう。

焼成土坑前面に位置する１群資料は，焼成土坑遺存資料の構成と大形品を主体とする点で共通する。（より詳しく見ると焼成土坑内の縁辺部に散乱する小片資料の構成に近い）また大形二重口縁壷の一部には焼成土坑資料と１群資料とで接合関係の確認できる例すら確認している。（第22図　2）したがって１群は焼成土坑から排出された遺物の一部である可能性が高い。

また２・３群遺物も胎土や後に述べるように共有する器種の型式的特徴さらには破損状態・色調で焼成土坑資料・谷３・１群資料と共通する。この点で同様に焼成時に排出された破損品群と見なしてよいであろう。しかしこれらの器種構成は前２者とは大きく異なると共に，投棄地点も焼成土坑からはかなり隔たった位置にある。焼成時の器種ごとの焼き分けの可能性と共に，丘陵上の溝状遺構ＳＸ０１の存在や強度の削平を考慮すれば，検出した焼成土坑以外にかつて同機能の施設が別個に存在し，そこから排出された可能性も予想した方がよいであろう。

24～79は廃棄土器１群資料である。確認した器種は次の通りである。

円筒埴輪

形象埴輪　「半裁器台形」埴輪

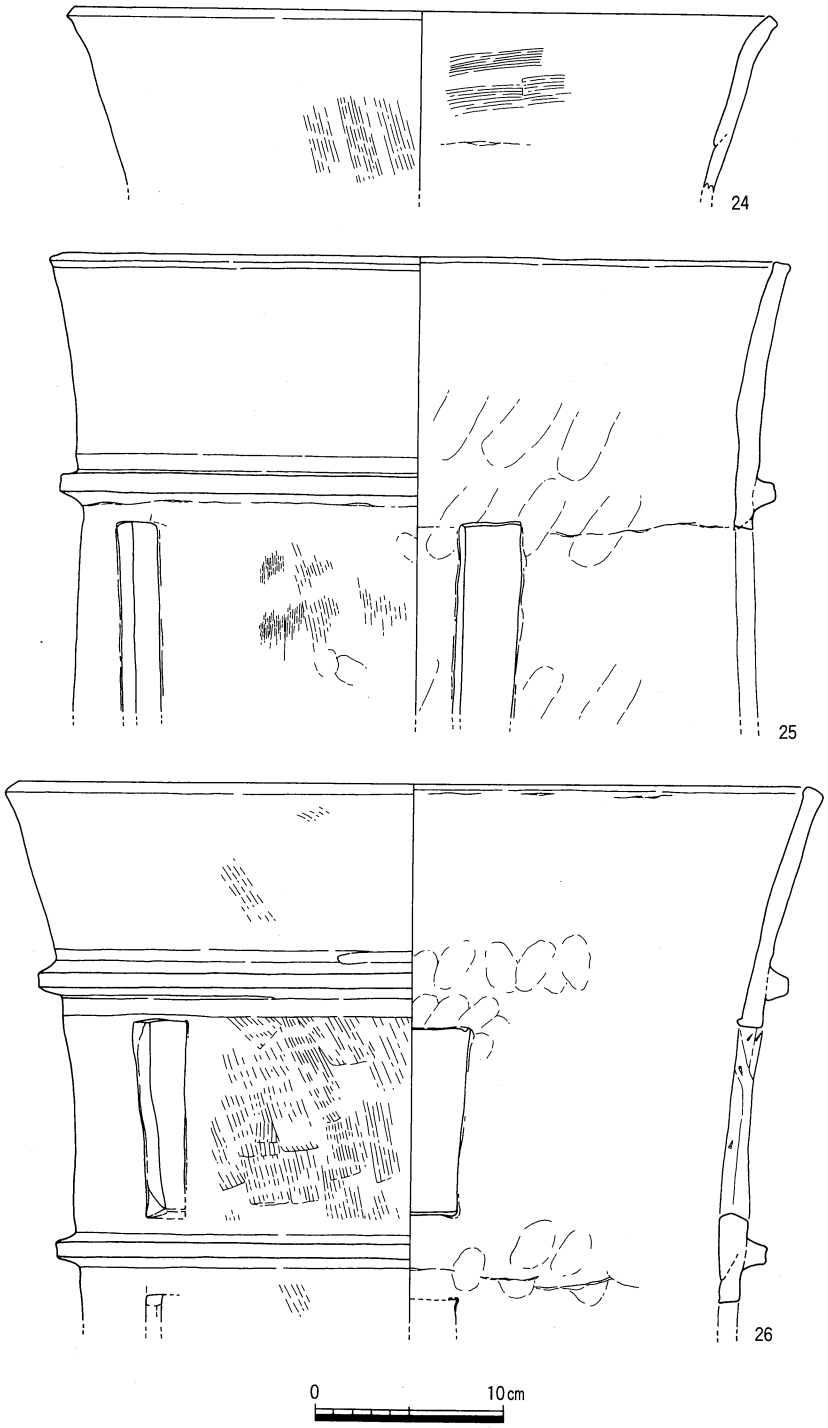
土師器　　大形壷

　　二重口縁壷

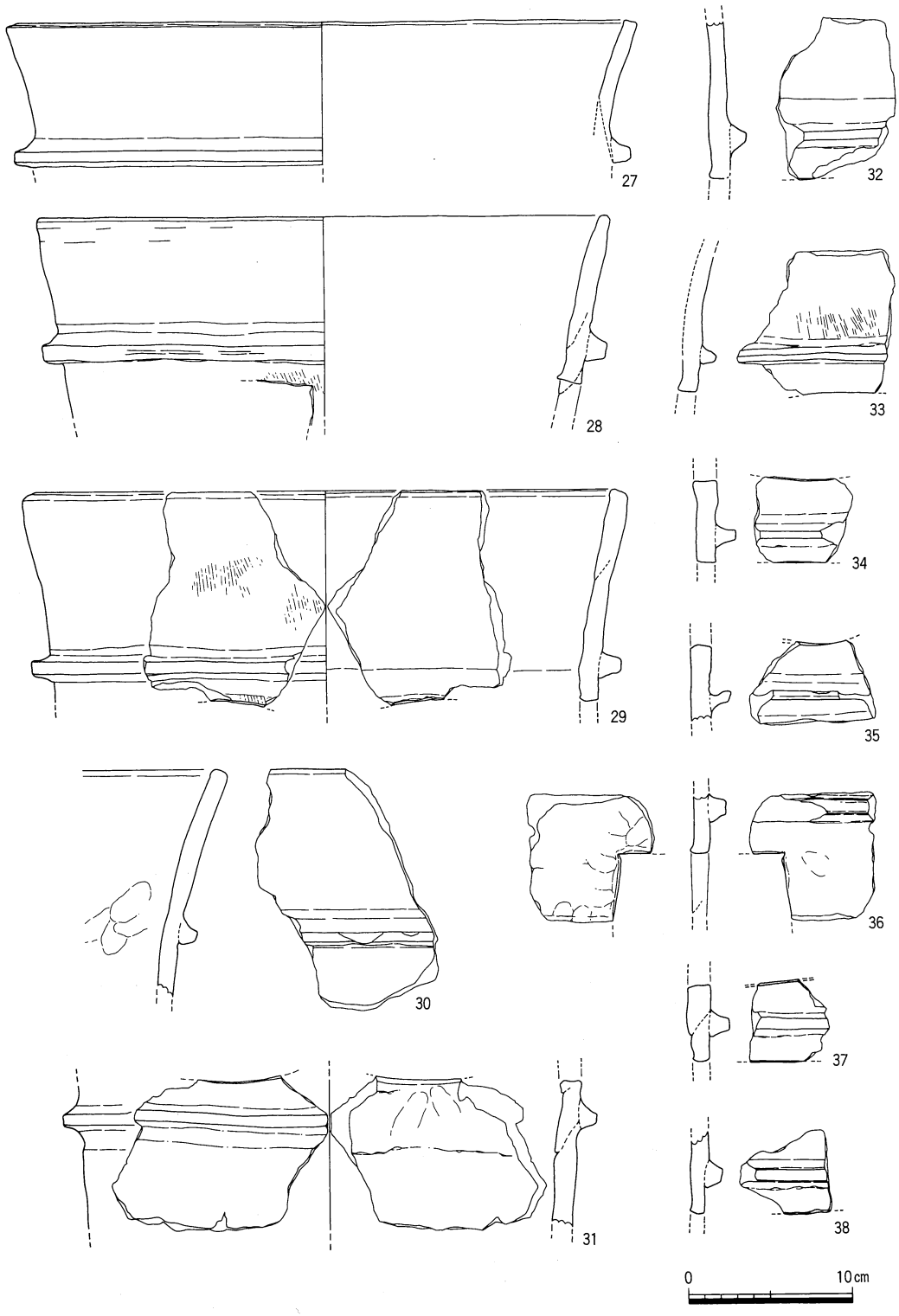
　　小形丸底土器

　　甕

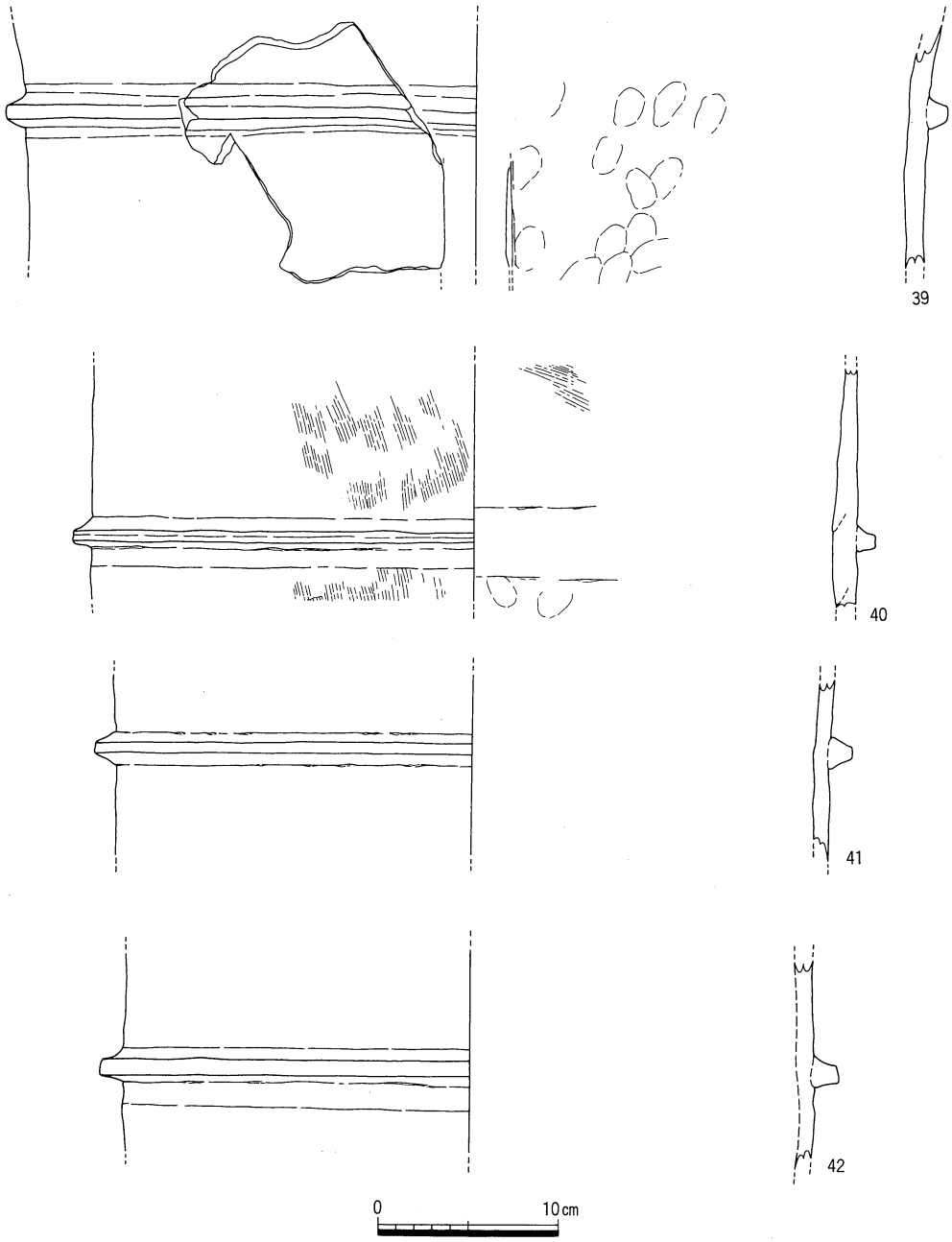
24～30は円筒埴輪口縁部，31～64は同筒部，65は基底部である。口縁部はいずれも緩やかに外反して立ち上がる。端部は四角く収めるが，端部内方を小さく突出させる傾向を持つものが多い。また中間段の突帯間隔が平均して15cm前後を測るのに対して，口縁部はその2/3程度と短いものが多い。長７～８cmの27・28が典型例である。最も長大な25でも12cm弱と2/3強に過ぎない。透かし孔はほぼ縦長長方形に統一されており，25・26では１段あたり５方の配置が復元できる。また26・34・37・49～51・54・55によれば透かし孔は口縁部・基底部を除く各段に穿たれ，原則的に互い違いではなく縦列配置となる可能性が高い。なお突帯形状を含めやや特異な様相を示す47は円形透かしの可能性があるが，45等のように長方形透かし孔の隅を粗雑に穿っただけかもしれない。また46は器体の一部



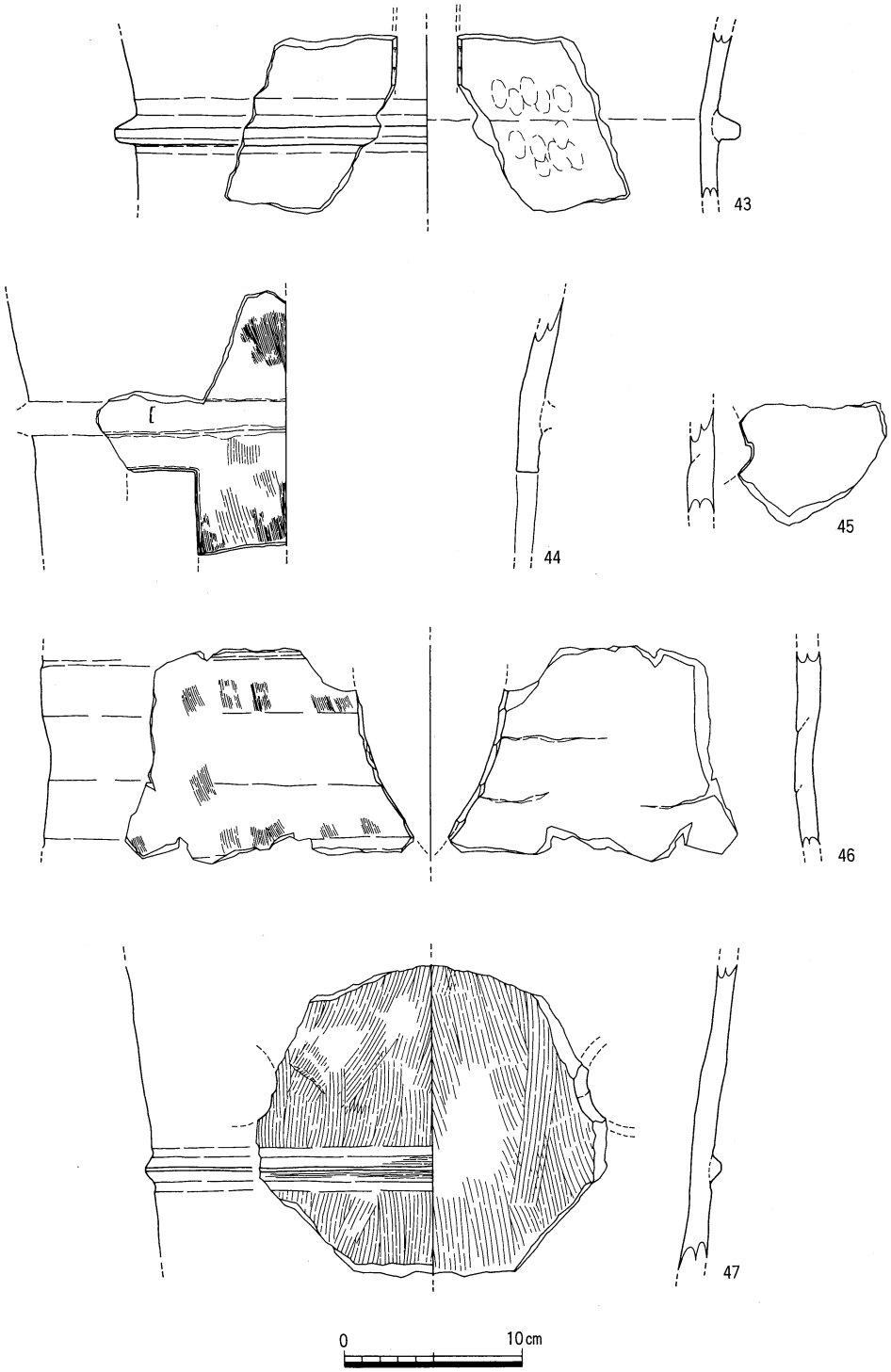
第31図　谷３・１群出土遺物１　円筒埴輪（１／４）



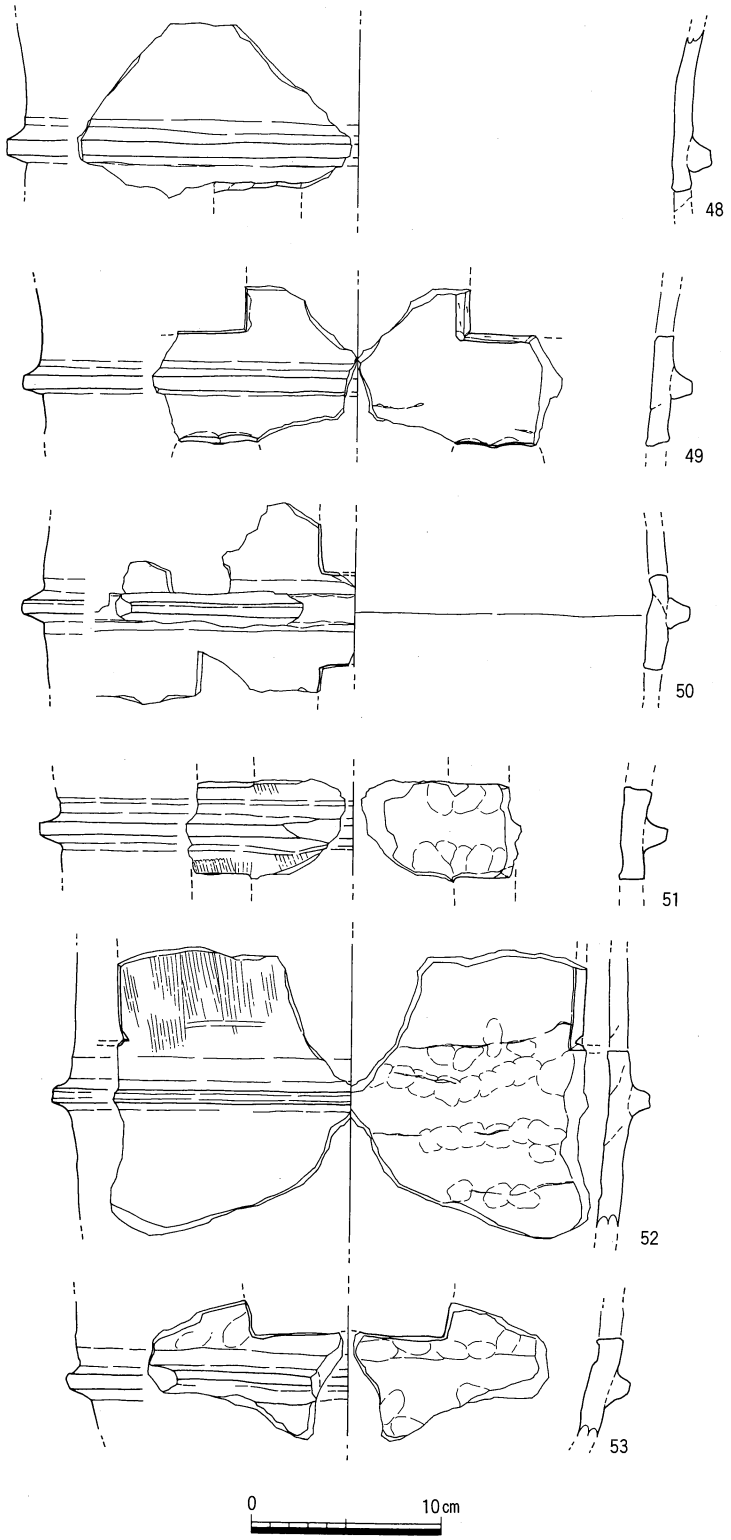
第32図　谷３・１群出土遺物２　円筒埴輪（１／４）



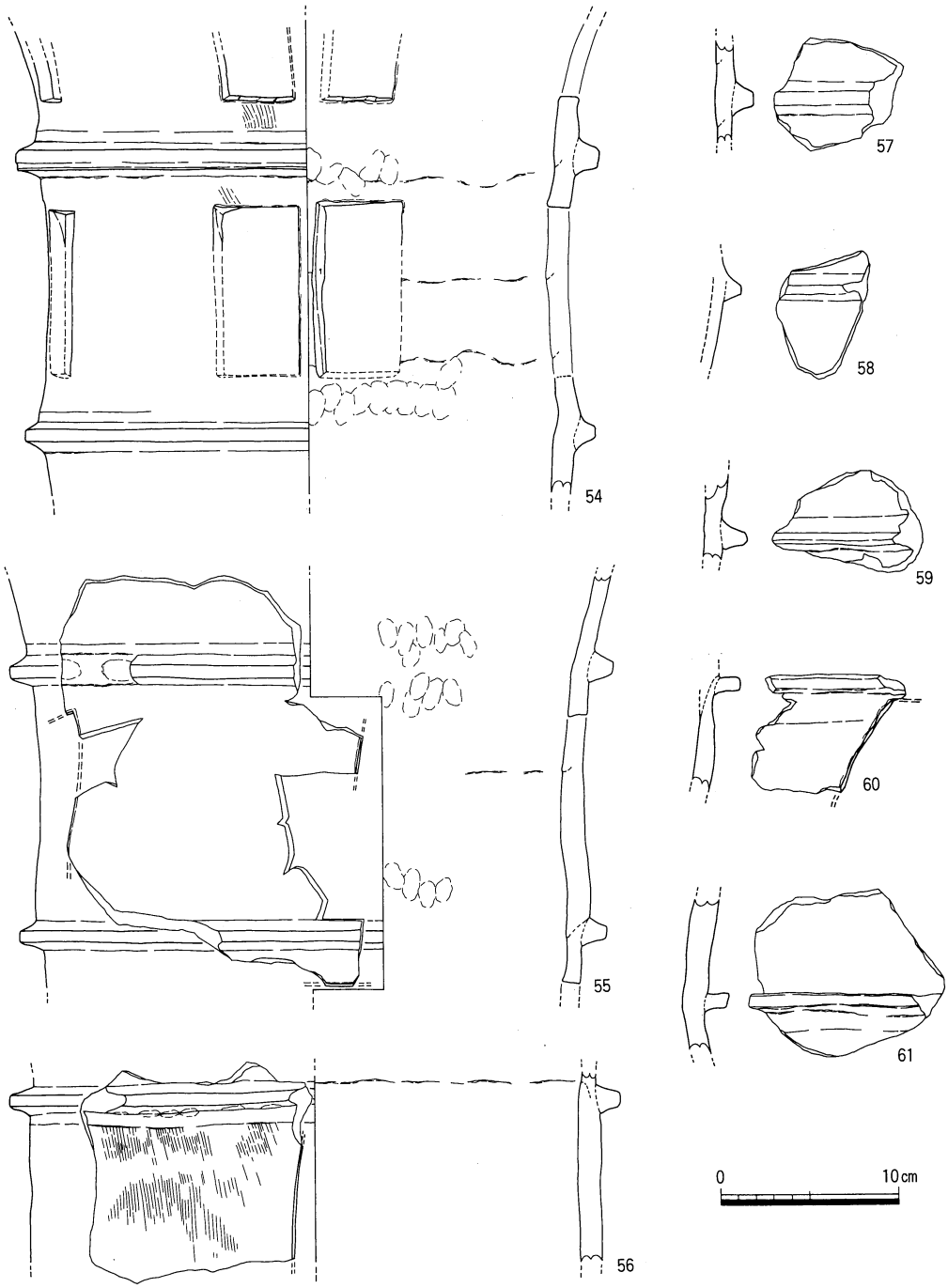
第33図　谷３・１群出土遺物３　円筒埴輪（１／４）



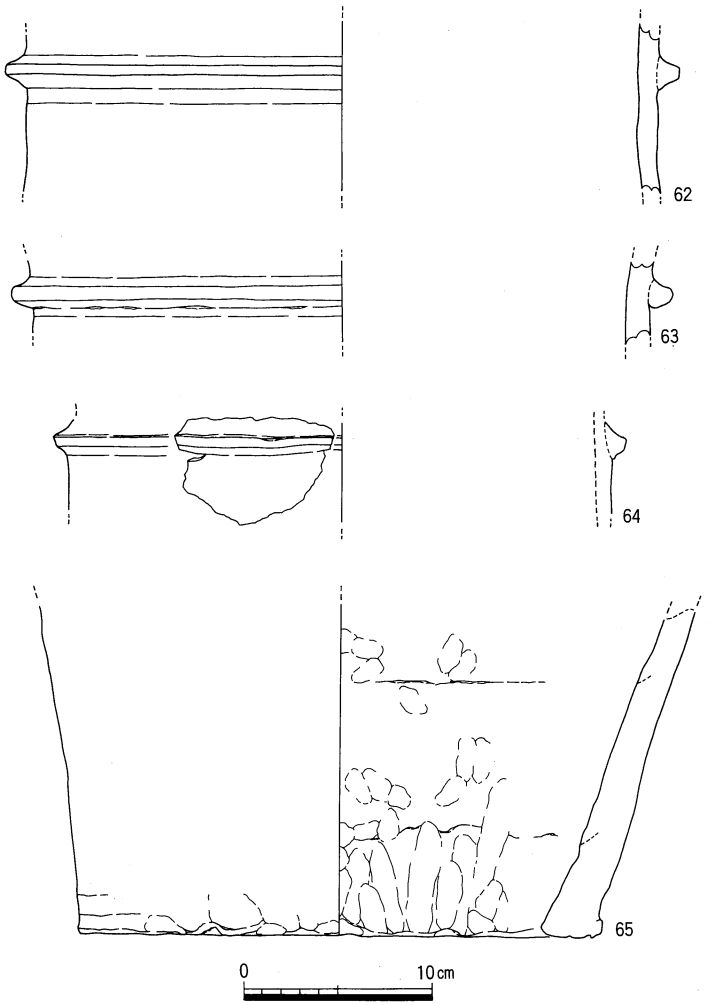
第34図　谷３・１群出土遺物-4　円筒埴輪（１／４）



第35図　谷３・１群出土遺物５　円筒埴輪（１／４）



第36図　谷３・１群出土遺物６　円筒埴輪（１／４）

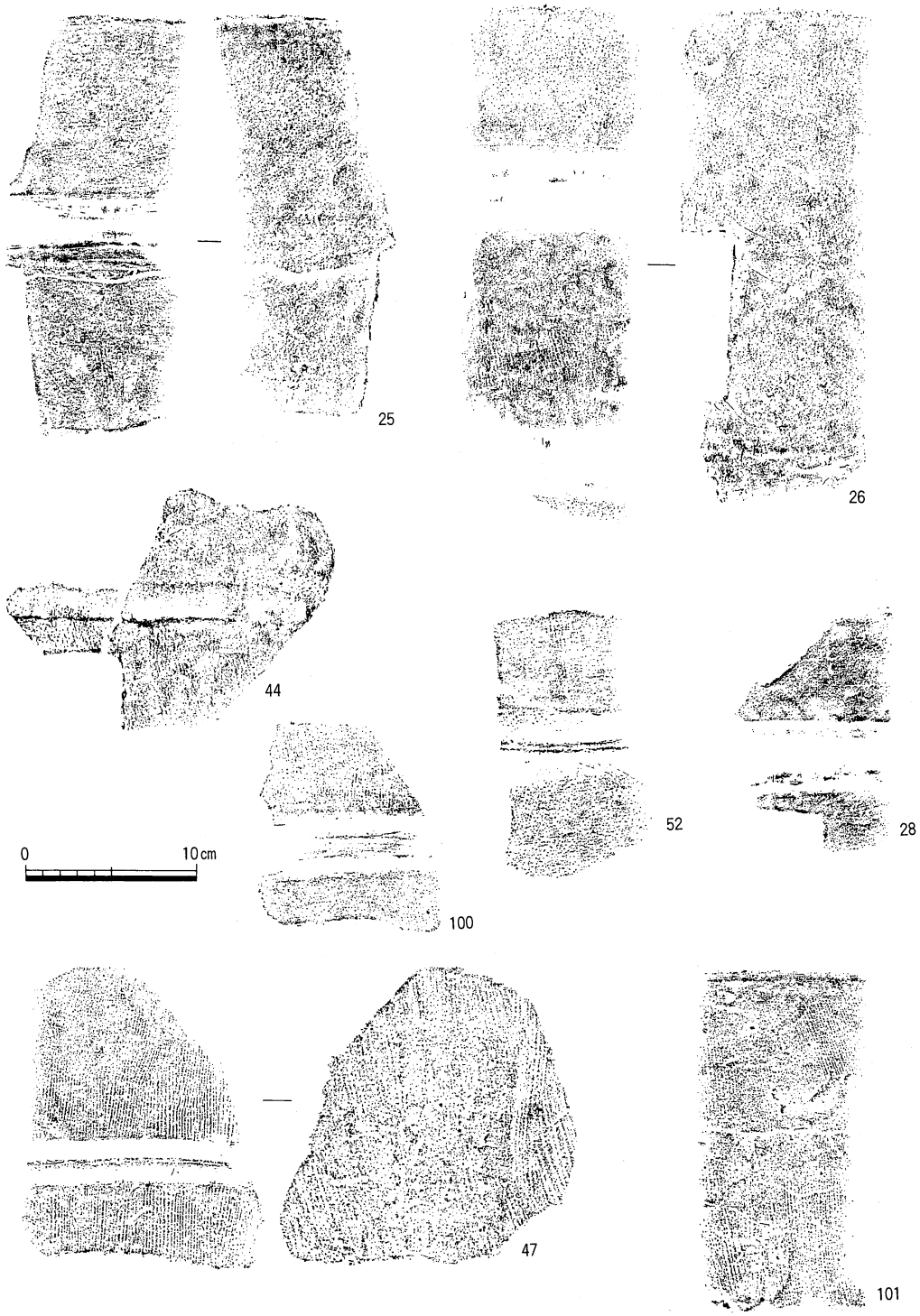


第37図　谷３・１群出土遺物７　円筒埴輪（１／４）

が斜めに切り取られており，三角形透かし孔とも見えるが，全般的な様相から通常の円筒埴輪には含めない方がよいかもしれない。

突帯の大部分は突出度の高い台形をなす。これらの接着は比較的丁寧であるが，それでも上端に比べ，下端がやや粗雑で器体と若干の空隙を有するつ例が多い。35・60・61のように強く突出した矩形ないしは上端の張り出す形態は多くない。また47の蒲鉾形小突帯も例数は極めて少ない。44は突帯剥離部に方形刺突痕が観察できる。確認例は多くないが注意したい。

外面調整は一般に突帯貼付前の縦ハケ調整を比較的丁寧に後にナデ消している。特に口縁部では二次的なナデ調整が顕著で24のようにハケ目をとどめる個体は多くない。横ハケ



第38図　谷３（４ａ区）出土円筒埴輪拓影（１／４）

調整は突帯上下の局部的な施行を含めて一切確認できない。内面には基本的にハケ調整を加えずになでる。突帯貼付位置の器体裏面にはしばしば連続的な指押さえをとどめるが全般的に横ナデで平滑に仕上げている。縦方向ないしは螺旋状の指ナデで凹凸を顕著にとどめる例はない。この点でも内外に加えた縦ハケを消さない47は特異な個体である。また内外に粘土帯接合痕を顕著にとどめる46も円筒埴輪以外の器種と見た方がよいかもしれない。

基底部の資料は多くない。わずかに確認できた65では下端が自重でひどくつぶれている。外面ナデ調整，内面は下端に顕著な指押さえが連続する。

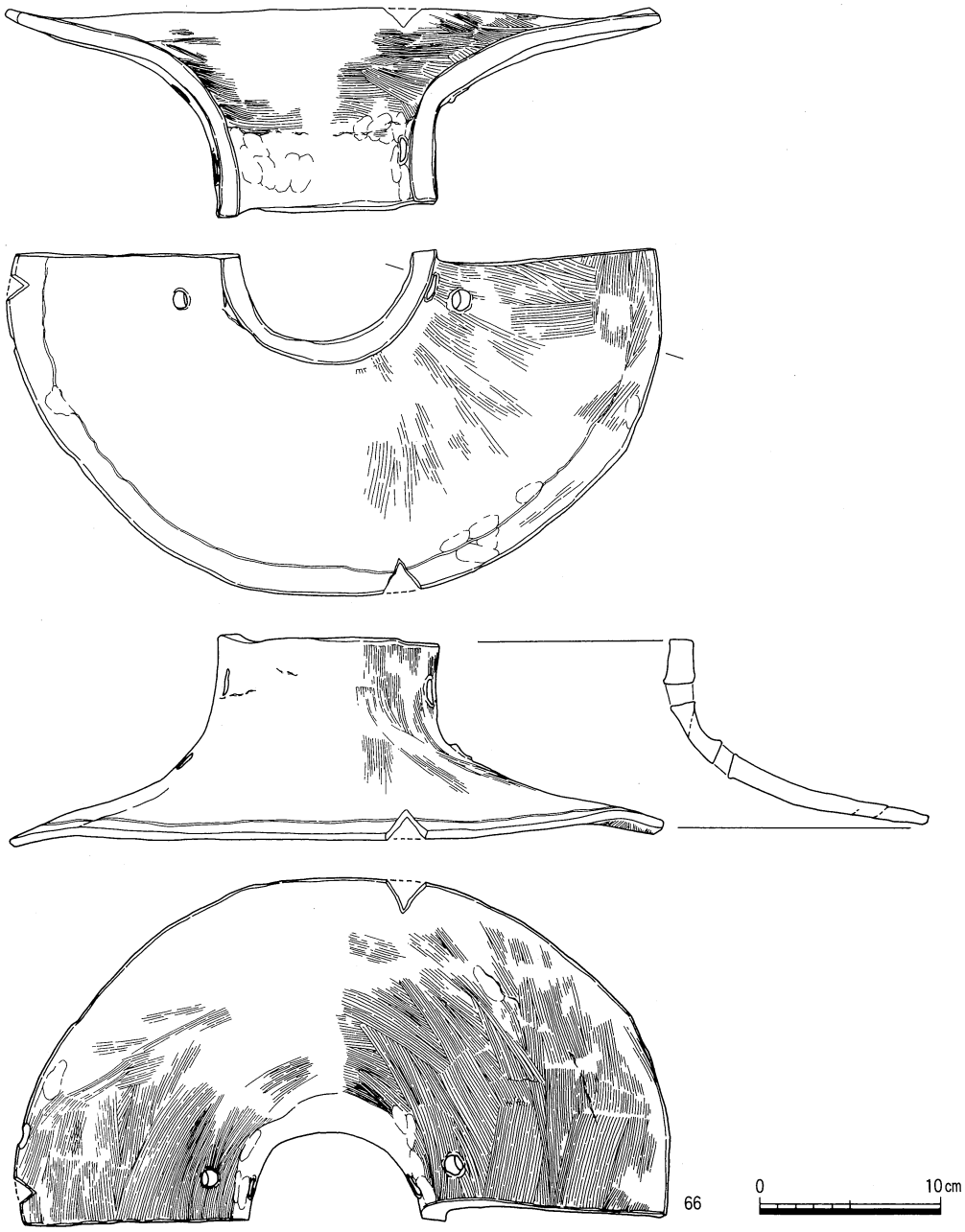
66～73は特異な形状の埴輪である。これらの成形過程は以下のように復元できる。上下両端が外反して強く開く鼓形に整形した後に，まず中位の最も括れた部分を水平に切り離し二つのラッパ状の筒にする。更にそれらを縦に二分割している。結局鼓形の原形を縦横に四分割した形態に仕上げる。したがってそれぞれは側面と下端に縦方向・横方向の切断面を持つことになる。また興味深いことに縦方向の両側の切断面に沿って縦列２個の小円孔をそれぞれ穿つ。他に例を見ない特異な形態だが，その形状からここでは「半裁器台形」と仮称しておく。おそらく奈良県メスリ山古墳の高坏形埴輪のように，別部材と組み合わせるものであろう。例えば円柱の先端を２個体の「半裁器台形」で挟み込み，側縁の小円孔を通して緊縛・固定する等が一案として想定できるであろう。

66は「半裁器台形」埴輪の完形品である。相対的に内面の調整が丁寧なことから大きく開いた側を口縁部と見なした。口縁端部は単純に四角く収める。大きく開いた内面上部は断続的な横ハケ調整が顕著であるが，下端の筒部はこれを省略しており指押さえが顕著に残る。外面は口縁部付近に部分的に横ハケを加える他は縦ハケ調整だが，端部に接合痕を明瞭にとどめる。切断面には軽くナデ調整を加える。67もほぼ全形を知りうる資料である。内面調整は同様に下端がやや粗雑で指押さえをよく残す。63は形態は異ならないが，内面上半部も外面同様の縦ハケ調整となる。また同下半部はやや粗いが横ハケ調整が及ぶ。69～73は小片だがいずれも本器種の特徴をよくとどめている。

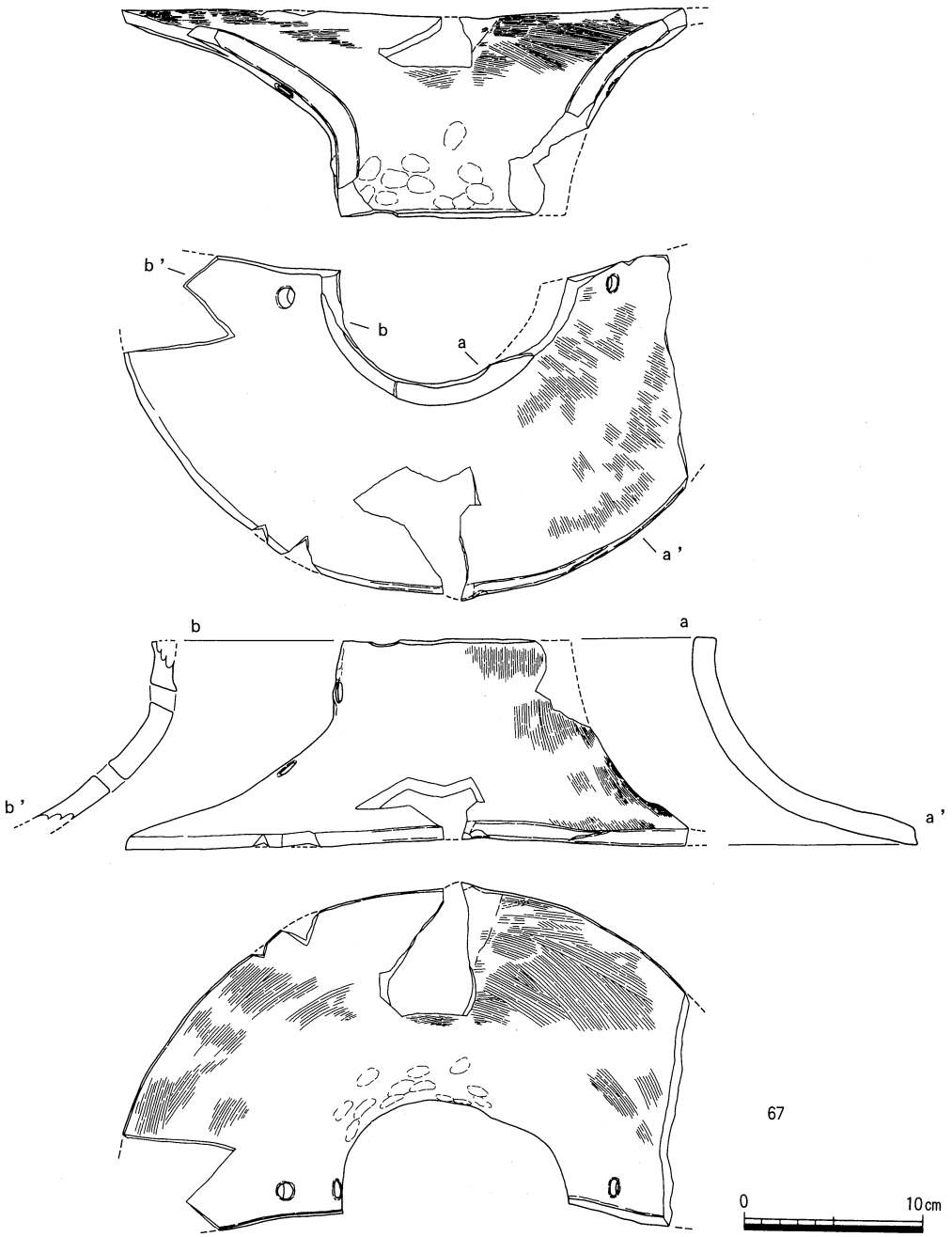
なお切断面の形状から68－66は同一原材を縦に分割した２個体の可能性が高い。70－69－71も同じ理由から同様の関係が予測できる。

74～79は土師器各器種である。大形壷の破片は一定量見られたが図示できるまでに復元できたものはわずかである。他の小形器種も大部分が小片で埴輪類に比べると点数も遙かに少ない。

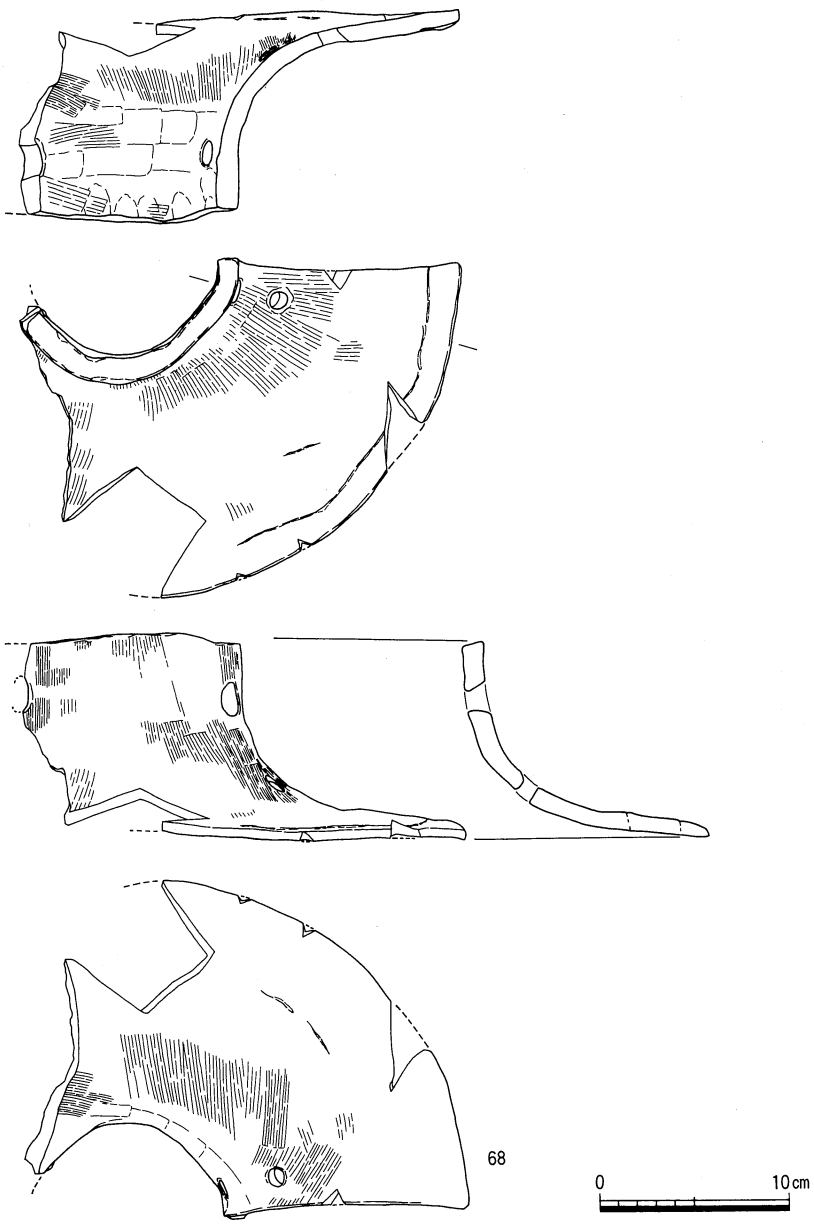
74甕はやや長胴化しているが最大径の位置はまだ低くない。口頸基部外面は強い横ナデ



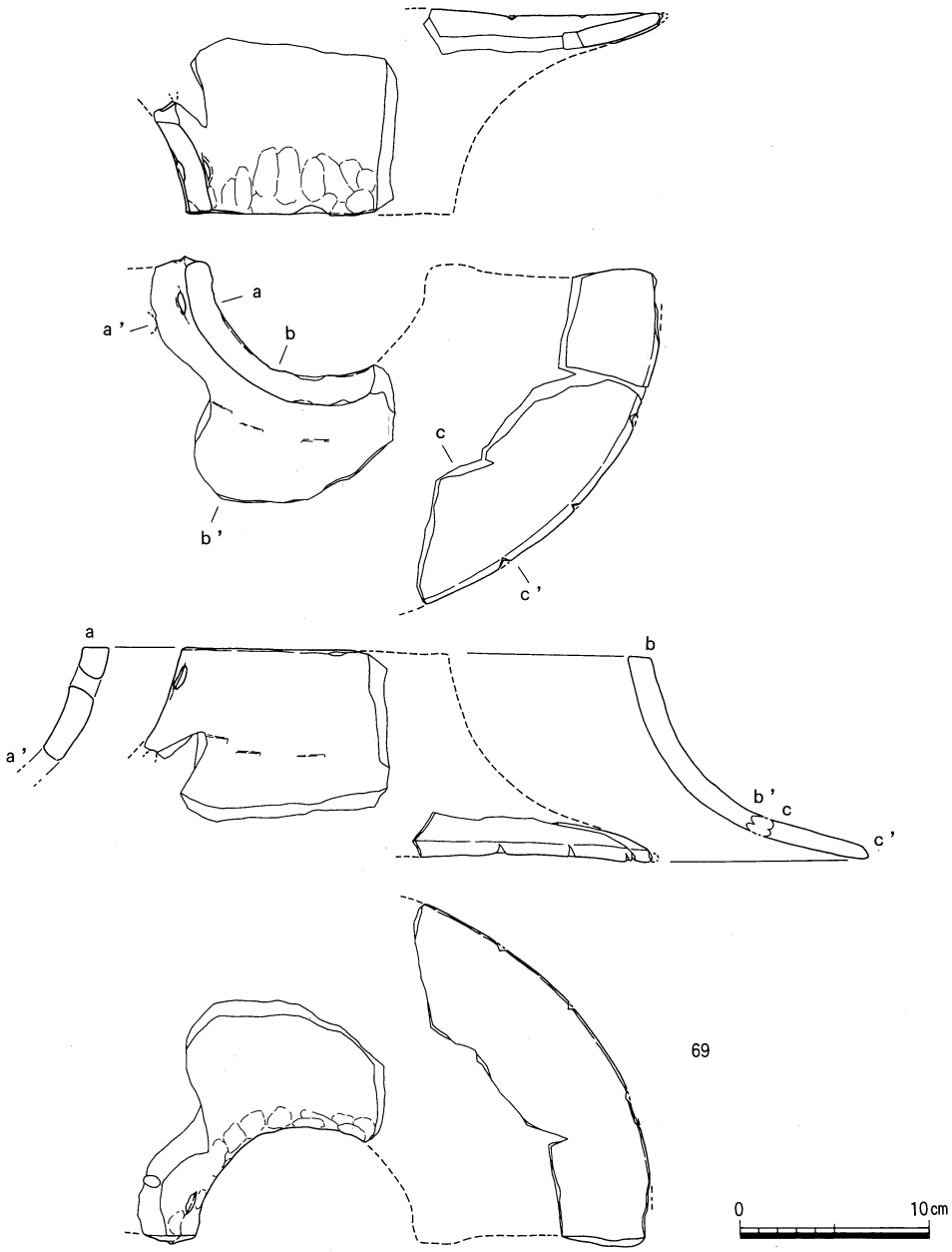
第39図　谷３・１群出土遺物８　半裁器台形埴輪（１／４）



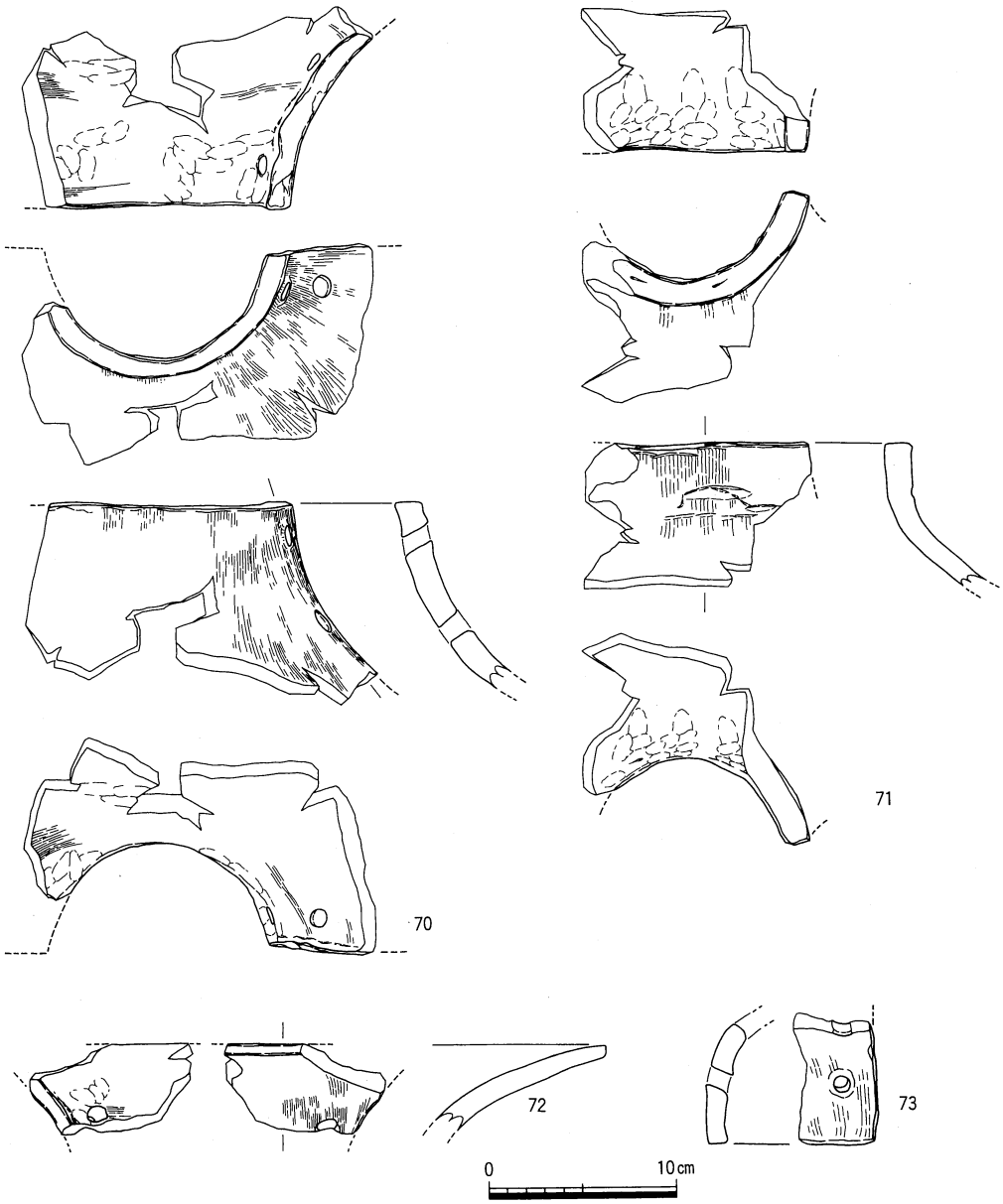
第40図　谷３・１群出土遺物９　半裁器台形埴輪（１／４）



第41図　谷３・１群出土遺物10　半裁器台形埴輪（１／４）

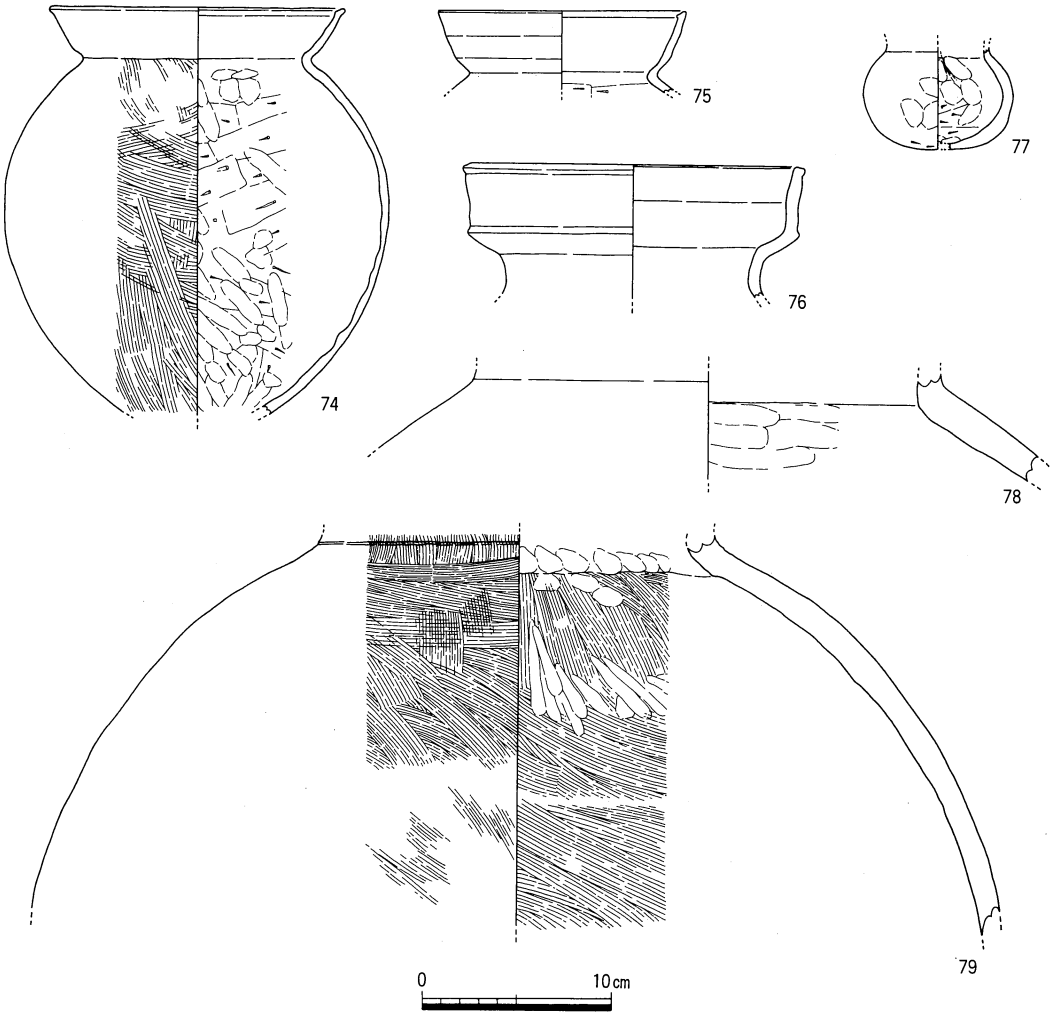


第42図　谷３・１群出土遺物11　半裁器台形埴輪（１／４）



第43図　谷３・１群出土遺物12　半裁器台形埴輪（１／４）

で緩く窪む。端部を強く摘み出して内面の平坦部を拡張している。また外面上半部の横ハケもあまり整っていない。75も口頸基部外面が明瞭に括れる。二重口縁壷76は立ち上がり部が直立する形態で類例は多くない。屈曲部は鈍く突起する。小形丸底土器77は最大径が低いやや鈍重な形態。比較的肉厚だが，底部外面に粗いケズリ調整を見る。78・79は大形壷肩部片。79は内外面に緻密なハケ調整を見る。



第44図　谷３・１群出土遺物13　土師器（１／４）

80～94は廃棄土器２群資料である。確認した器種は次の通りである。

土師器　　二重口縁壷

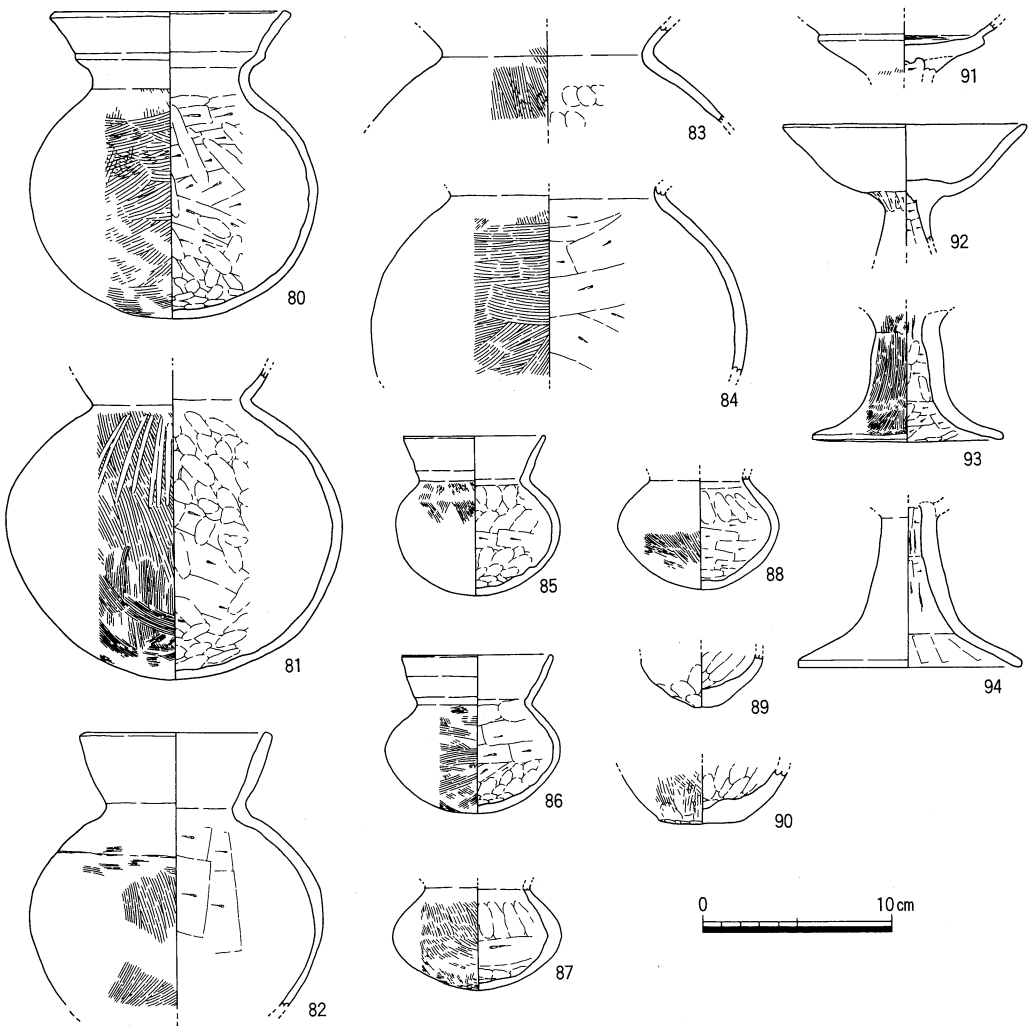
直口壷

小形丸底土器

甕

高坏

二重口縁壷80はほぼ球形の体部で明瞭な頸部を持たない。屈曲は鈍く上半部はよく開く。81は口頸部を欠くが肩部の放射状ミガキから壷と見られる。共に体部内面のケズリ調整の

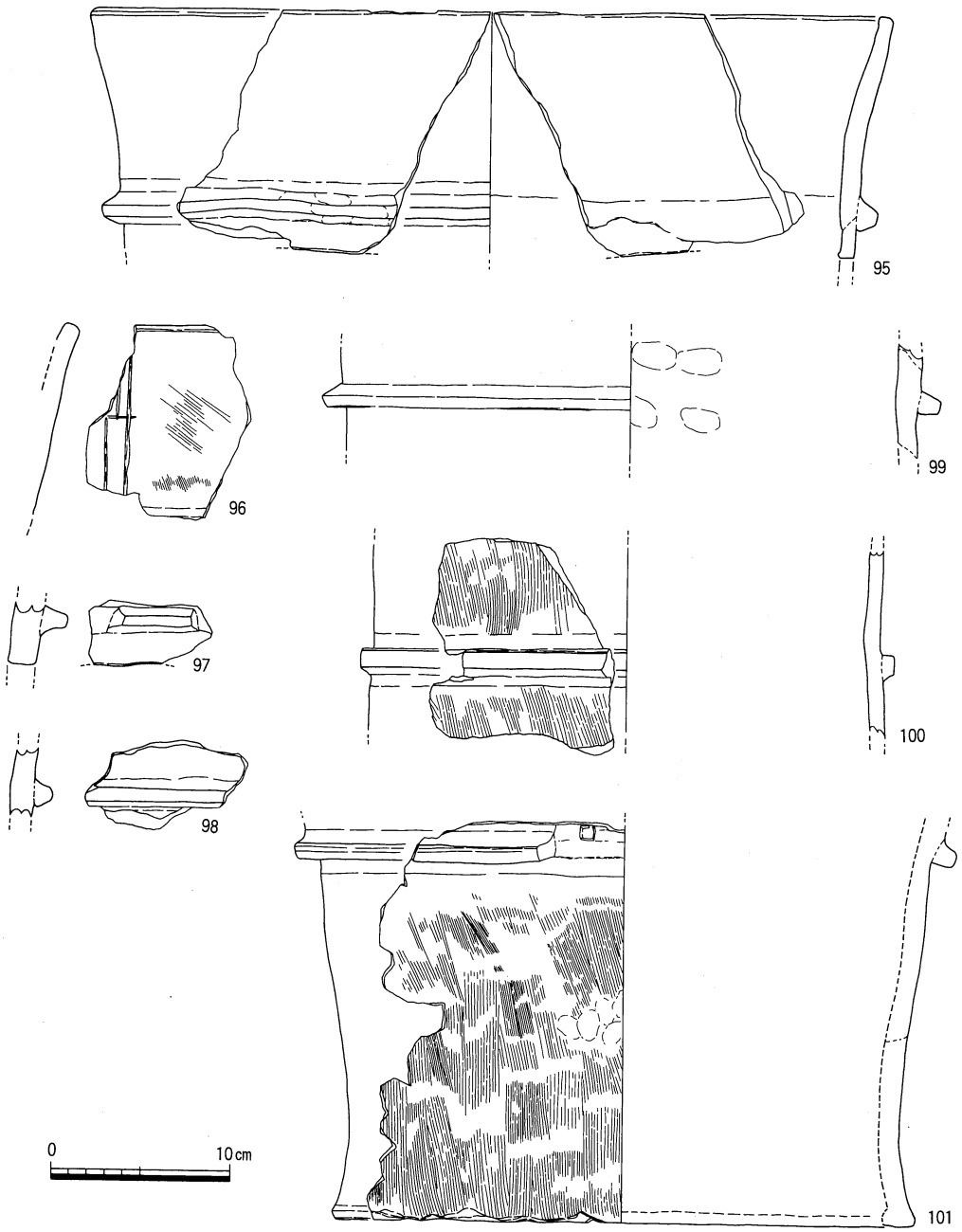


第45図　谷３・２群出土遺物　土師器（１／４）

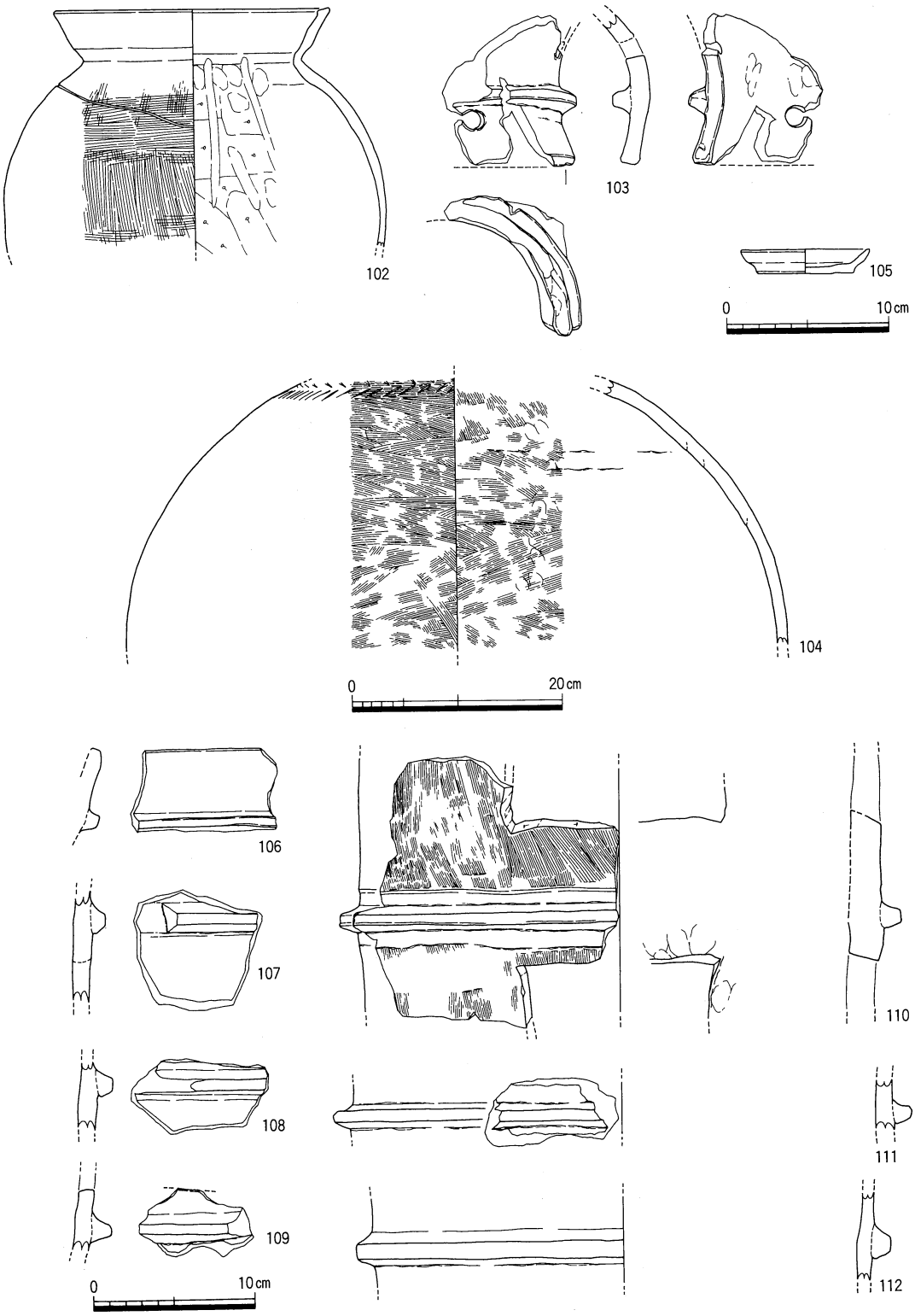
後に底部内面の指押さえが特に顕著である。82は直口壷。口縁端部は単純に四角く収める。肩部に粗雑な沈線文を見る。83は甕肩部であろうが，外面縦ハケ調整で，頚基部も単純に折り返しており横ナデによる顕著な括れも見られない点で当該時期の最も一般的な形態とやや異なる。小形丸底土器85は口縁部がわずかに反り気味に開き，不明瞭ながら二重口縁風にしつらえた形跡がある。86のわずかに内湾気味に開く口頚部形態は一般的な形状である。85～88の内面調整－ナデもしくは指押さえ後に中位を横ケズリし，更に底部と肩部に指押さえを加える－は本遺跡のこの器種で基本的な手法である。底部外面をこそぐように削り込む89の形状は一般的ではない。また90も分厚く平坦な底部で外底面に局部的なケズ

リを施す，小形丸底土器としてはやや違和感のある形状である。

91は坏部外面に強い段を有し，高坏坏部としては一般的な形態ではない。しかし他の高坏の多くのように脚部内面はケズリ調整と頂部の棒状刺突痕が見られる。92の坏部形態は



第46図　谷3（4a区）上層遊離遺物1（1/4）

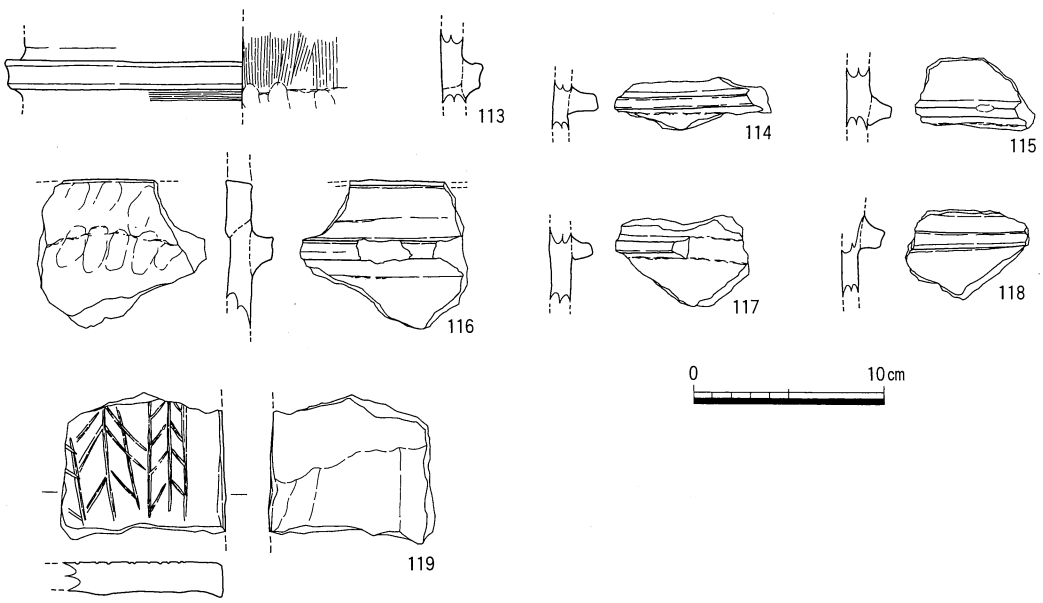


第47図　谷３（４ａ区）上層遊離遺物２・その他１（１／４・１／６）

本遺跡資料で最も一般的である。脚部内面の横ケズリ・棒状刺突痕も同様である。93は肉厚で全体にやや粗雑。外面調整にもやや違和感がある。本品では脚部は別作りの坏部外底面に継ぎ足す構造である。

95～105・132～136は3a区部分，すなわち廃棄土器群1・2に比較的近接した地点の谷3上層堆積層出土資料である。既に述べたように上層堆積層は基本的に歴代の耕作土層であり包含遺物はいずれも造成・耕作時に撹拌され原位置から遊離した資料である。したがって同一層序に比較的近年の陶器片までを多く含む。ここでは古墳時代資料は図化しうる小片まで極力掲載しているが，古代以降については代表的な資料のみを掲げた。後に示す4b・c区上層資料についても同様である。

95円筒埴輪は口縁部長10cmと他段に比べ短い。下端の接合の甘い台形突帯を付す。96円筒埴輪口縁部では3条の垂下沈線と横線を組み合わせた線刻を有する。焼成土坑出土資料7の線刻に類似する。97～100は円筒埴輪中位片。100は扁平な突帯を付し一次縦ハケをナデ消さない。101は円筒埴輪基底部。内面は全体的に剥落している。基底部外面は縦ハケ調整。垂下気味の矩形突帯の剥離面には方形刺突痕が観察できる。102甕は横ハケ調整を加えた肩部にやや斜行して粗く沈線1条を施す。口頸基部外面は緩く括れ端部は先端を摘み気味にして内面平坦面を拡張する相対的に新しい様相が認められる。103は下端と側面に切断

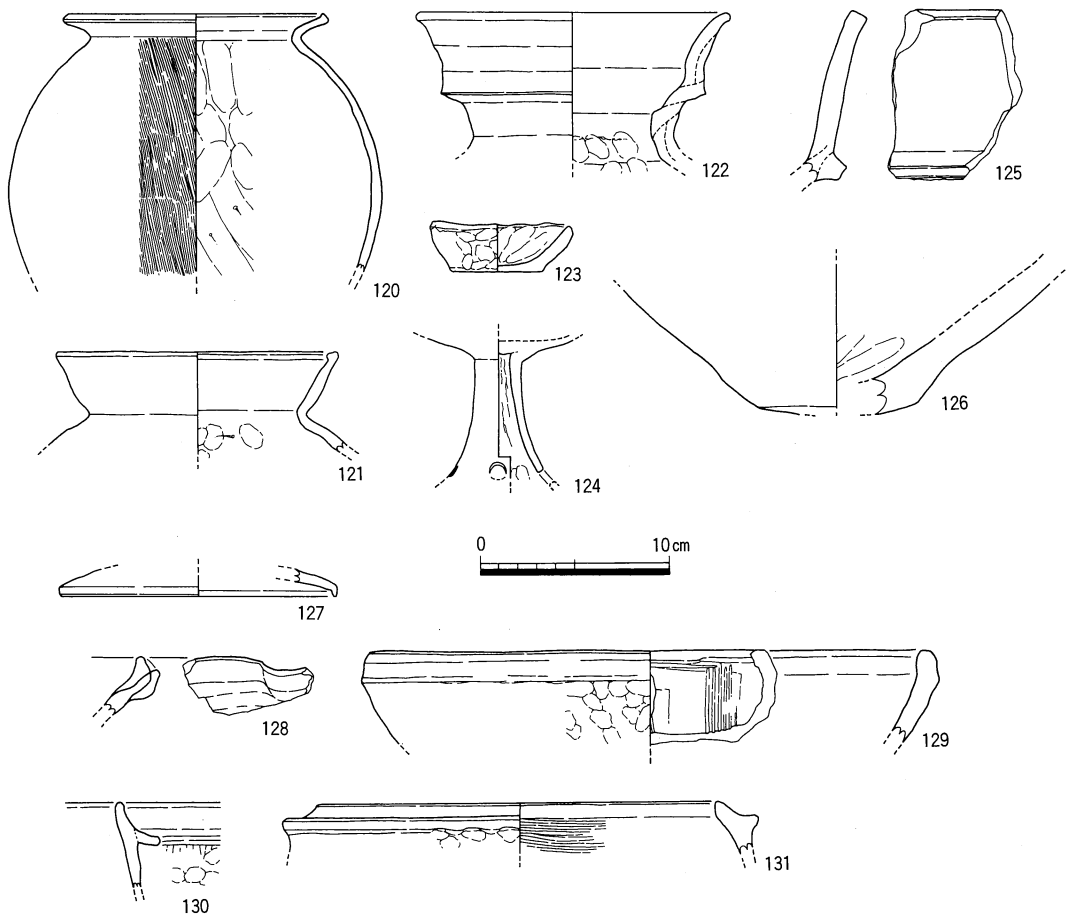


第48図　谷3（4a区）その他2（1/4）

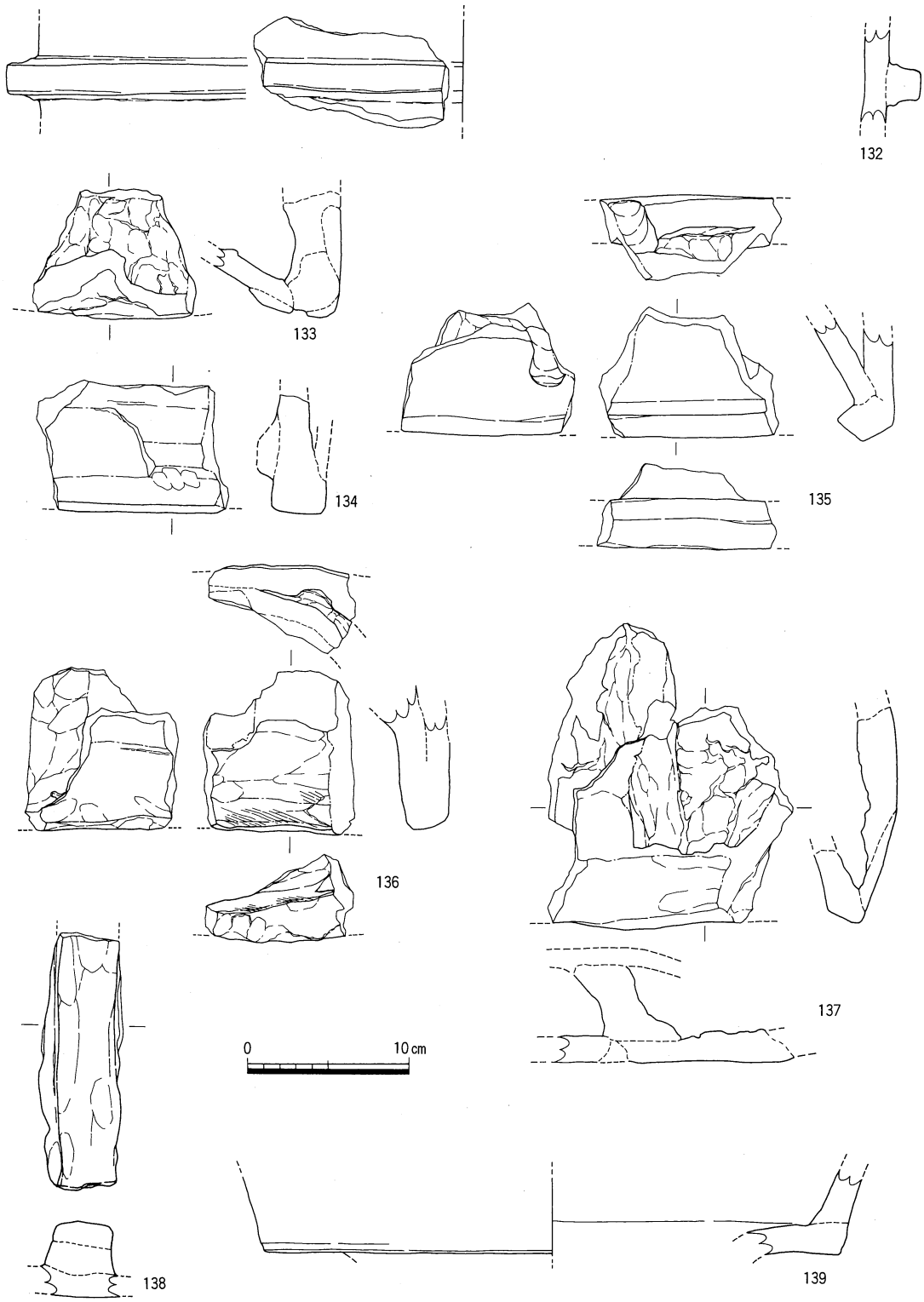
面が観察できるので「半裁器台形」埴輪の同類であろう。しかし下半の円筒部中位に台形様の突帯１条を巡らすことと小円孔が切断面より離れた位置に穿たれる点が他例と異なる。104は大形壷肩部片。上部に「ハ」字状にハケ原体刺突を連続させる。105は中世の土師質小皿である。

132は一方向に緩く円弧を描く器体に大形の突帯を付す。小片だが円筒形土製棺片の可能性が考えられる。整った突帯形態は後に述べる割竹形土製棺のそれとはかなり異なる。133～135は箱形土製棺蓋材片の可能性がある。蓋材側縁の空芯構造部分であろう。焼成土坑資料23とは寸法・形状が微妙に異なる。別材か別個体であろう。ただし様相のやや異なる135は何らかの器財形埴輪の一部と見てよいかもしれない。

106～119は一括して取り上げた４ａ区資料で，厳密に層位や地点を確認できていない。谷下部の廃棄土器１・２群の近辺の資料が多いが，上層資料も含んでいる。106は円筒埴輪



第49図　谷３（４ａ区）その他３（１／４）



第50図　谷３（４ａ・４ｂ区）上層遊離遺物（１／４）

口縁部。長４cmと極端に短い。110では縦列に配された長方形透かし孔が見られる。突帯は突出度の高い台形をなすものが多いが，113・116のようにやや突出度は低いもの上部が強く突出する形態や114のように強く突出する鍔状のものも少数認められる。また113の内面縦ハケ調整も多くない。119は器種不明形象埴輪片。平板な板状品で表面には粗雑な綾杉文を連続的に刻み，裏面には横方向の剝離痕がある。

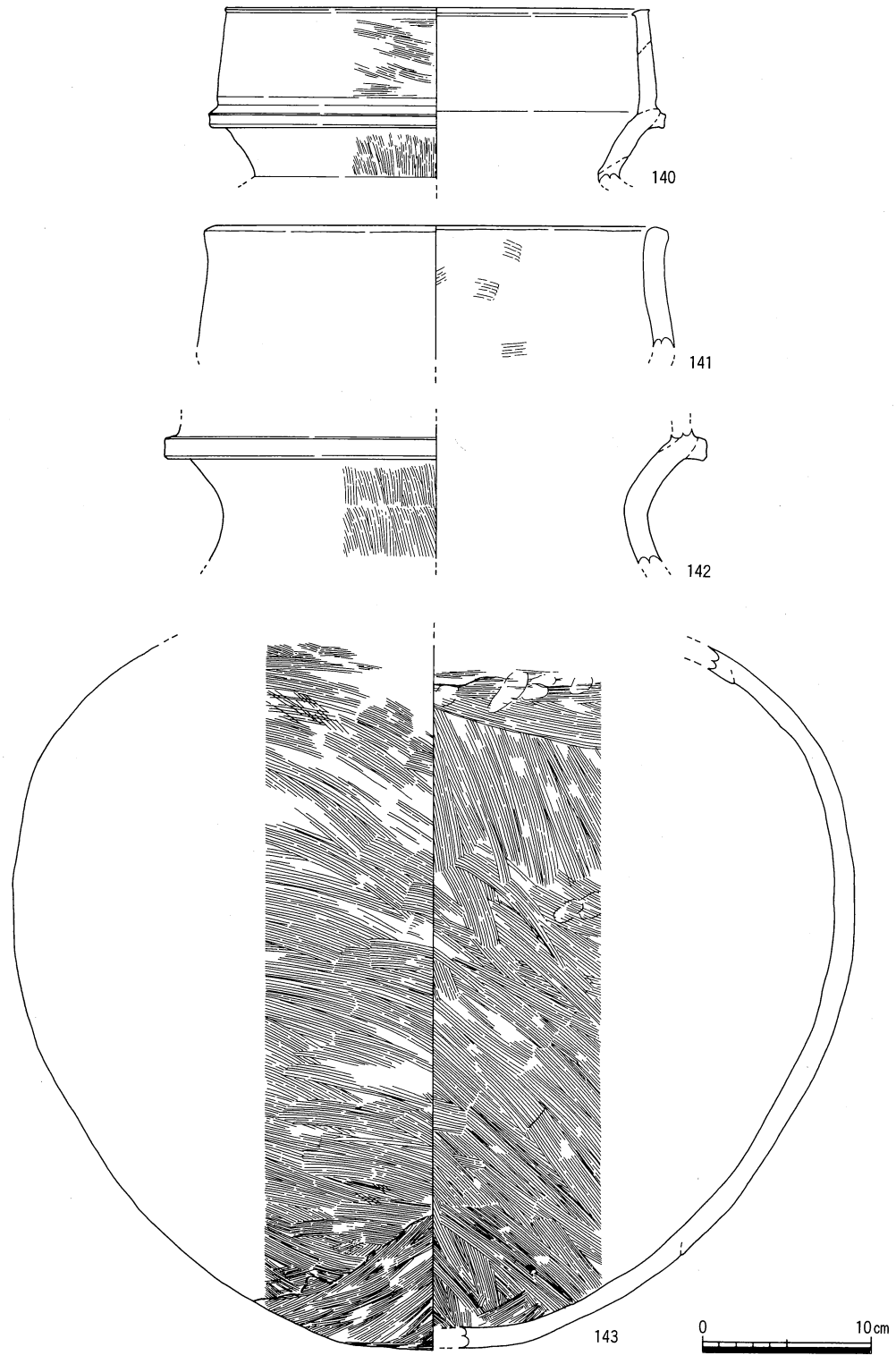
120の甕は他の大多数の土師器の様に赤色粒や顕著な石英粗粒を含まない。また型式的にも下川津Ｂ類甕の系統を継ぐ在地系の甕形土器である。強く折り返して短い口縁部と端部の摘み上げ，内面肩部の顕著な指押さえが特徴である。買田岡下遺跡ＳＤ４８資料や川津二代取遺跡等に類例がある。布留式新段階並行期までは残存しない型式と考えている。121は布留式系統の甕であるが，端部肥厚面が小さくその点でやや古い様相を示す。122二重口縁壷は肉厚で作りがやや粗放。しかし屈曲部の形状は退化していない。123はミニチュア鉢。内外の指押さえ調整が顕著である。124高坏脚部は裾部に円孔を穿ち，内面に削り調整も見ない。120甕と同じく在地系のやや古い型式であろう。125は大形二重口縁壷。小片のため傾きは確実ではない。屈曲部にやはり台形の突帯を巡らす。126は大形壷底部だが，突出気味に小形の平底が残る。

127は須恵器坏蓋。端部は小さく垂下する。８世紀前後の所産であろう。128は瓦質コネ鉢の片口部片。口縁端部の肥厚面はやや長い。129スリ鉢は短く口縁部が立ち上がる。130羽釜は全体に薄手で鍔の突出は強い。131では口縁部は強く内湾して鍔も退化する。

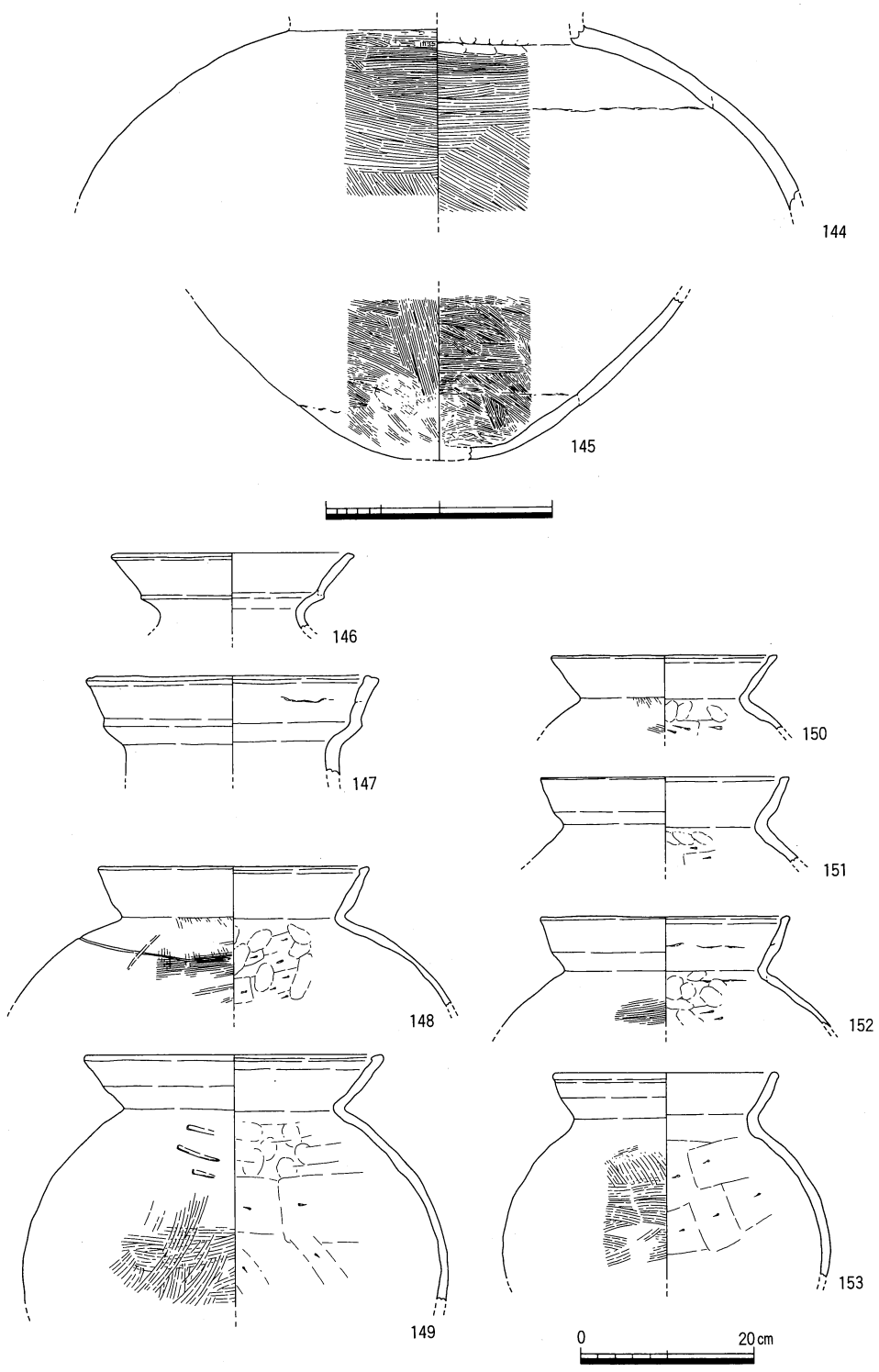
140～191は廃棄土器３群資料。確認した器種は次の通りである。

土師器　大形二重口縁壷
二重口縁壷
甕
二重口縁鉢
小形丸底土器
高坏
ミニチュア鉢

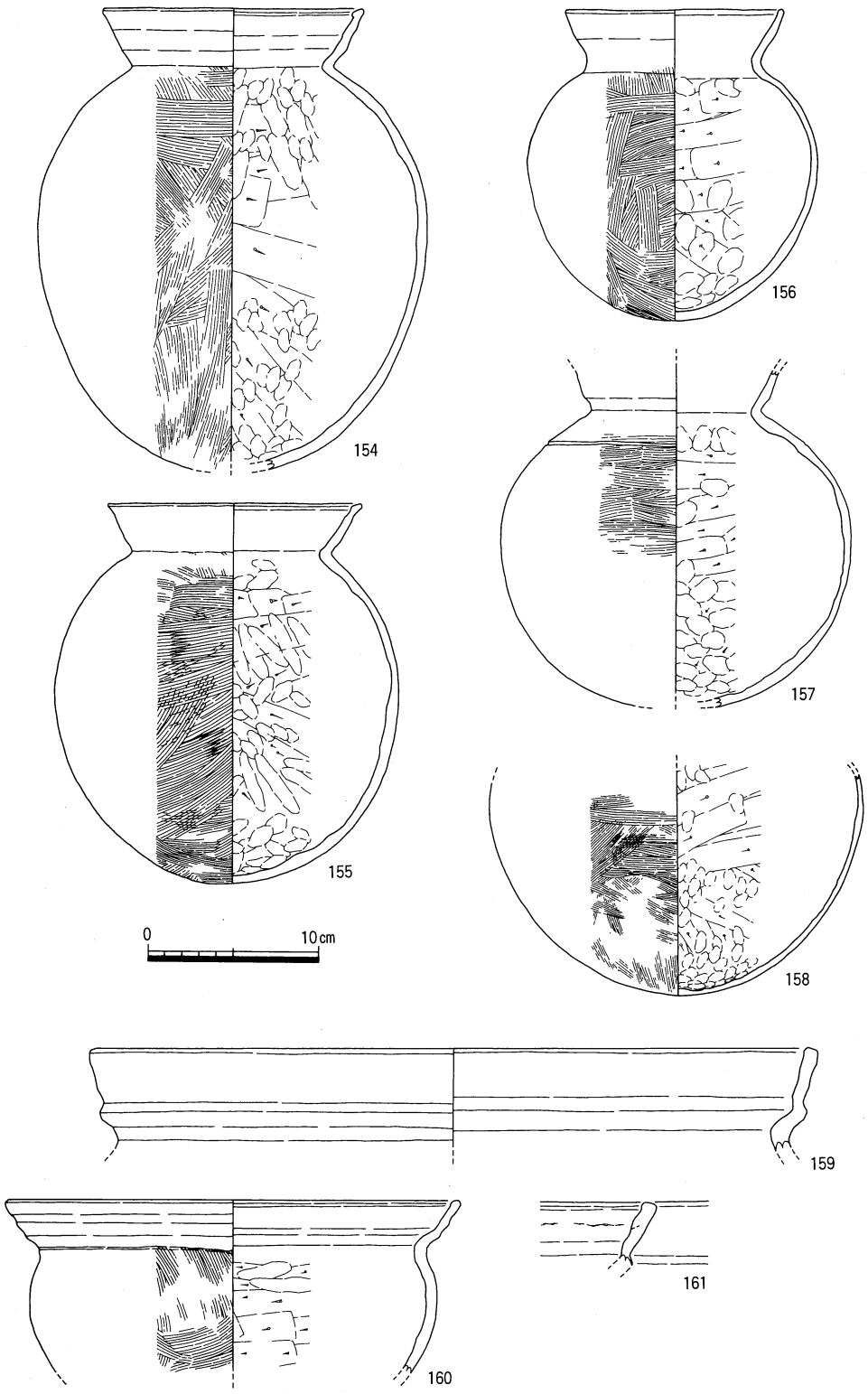
140～142は大形二重口縁壷。立ち上がり部はやや内傾して鈍い屈曲部には突帯を付す。この器種で142のようにやや長めの頚部を持つ例は他にない。143～145はおそらくこれらに対応する体部である。内外面全体に緻密なハケ調整を加える。146は直立頚部を持たない形態で，立ち上がり部は強く開く。147は対照的に直立する頚部を有し，立ち上がり部の開



第51図　谷３・３群出土遺物１　土師器（１／４）



第52図　谷３・３群出土遺物２　土師器（１／６・１／４）



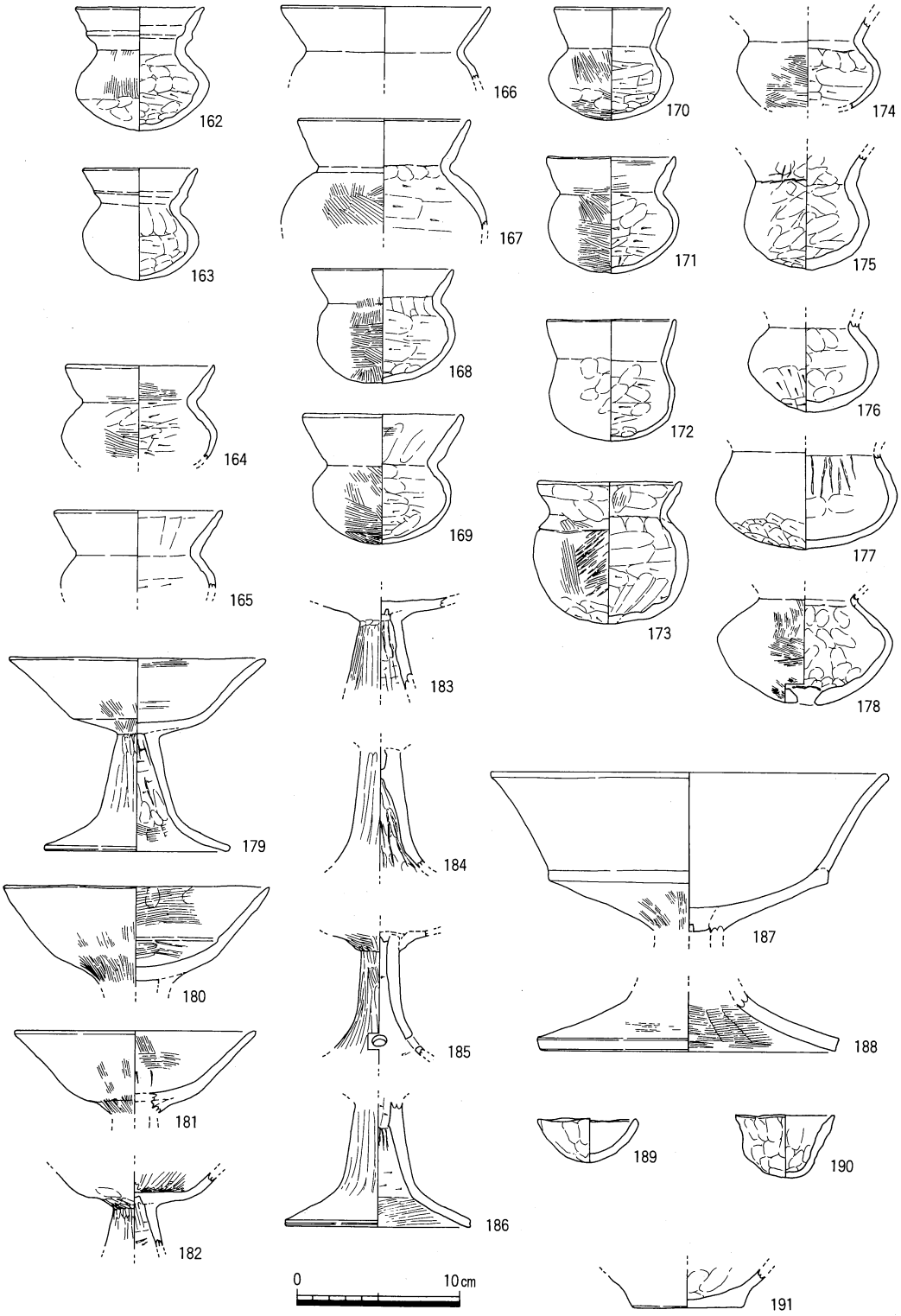
第53図　谷３・３群出土遺物３　土師器（１／４）

きも弱い。甕148～157は細部に多少の差異はあるが，いずれも口縁部はわずかに内湾気味に開き，強い横ナデによって基部は鈍く括れる。155では先端を摘み出して端部肥厚面を引き延ばす。逆に151・152はその部分がやや小さい。153・156では口縁端部をほとんど丸く納める。また148・157の粗雑な肩部沈線は比較的類例が多い。148ではこれに斜交する短線を加える。しかし149の３本一対の短刻線施文例は谷３資料では他例がない。154・155の様にやや長胴化の兆しが見える体部形態と156～158のように球形を呈するものとが見られるが，前者にしても最大径は体中位にあり弛緩した風ではない。またいずれの個体にしても内面底部付近はケズリ調整より後の指押さえが顕著である。

159～161は二重口縁鉢。しかし口縁屈曲部はいずれも鈍化している。立ち上がり部外面には横ナデによる微妙な凹凸が確認できる。

162～178は小形丸底土器。162・163はひどく鈍化しているが二重口縁形態を示す。164～171・174は扁平球状の体部で中位の張りが強い。口縁部はやや肉厚でわずかに内湾気味に開き先端が尖る形状が基本となる。体部内面は中位付近を横ケズリした後に底部に集中的に指押さえを加える。外面は細かくハケ調整を加えるがケズリ調整は希である。ミガキはもはやない。169のように口縁部が大きく発達する古式の形態を示すものから168のように口縁部が矮小化したものまでがある。172は薄手の丁寧な作りであるが体部の張りが弱く最大径も低い位置にある。173は肉厚で鈍重な作り。調整も粗雑で口縁部は凹凸顕著。底部外面にケズリを見る。175・176は底部付近をこそぐように削りやや尖底気味となる。内面横削りの欠落と共に本遺跡のこの器種では一般的なものではない。177は顕著な扁平球状をなし肩上部の絞り込みが弱い。底部の執拗な削り込みと合わせて小形丸底土器には含めない方がよいかもしれない。178は算盤玉形の体部で底部に焼成後穿孔を見る。これらは本資料の主体を占める布留様式系統の器種ではなく，甕・高坏に少数例見るような先行する在地系の小形器種と見るべきであろう。

179～188は高坏。179は谷３出土高坏の基本的な形態を最もよく示している。多くの資料では脚頂部を粘土塊でふさぎつつ頂部側縁から貼り足して坏部を作り出す。脚軸部内面を横ケズリし，裾部には円筒埴輪におけるＢ種横ハケに似て静止痕が法則的に出現する明瞭なハケ調整を施す。また脚部内面頂部の棒状刺突痕も一般的である。180は別作りの坏部に脚を継ぎ足すようだ。185は細身の軸部を持ち裾上部に円孔を穿つ点では古い様相を示すが，内面横ケズリと棒状刺突痕は一般的形態と共通する。大形高坏187は坏部中位の屈曲が明瞭で上半部は緩く外反する。同一個体の可能性が高い脚部片188では脚端をわずかに肥厚



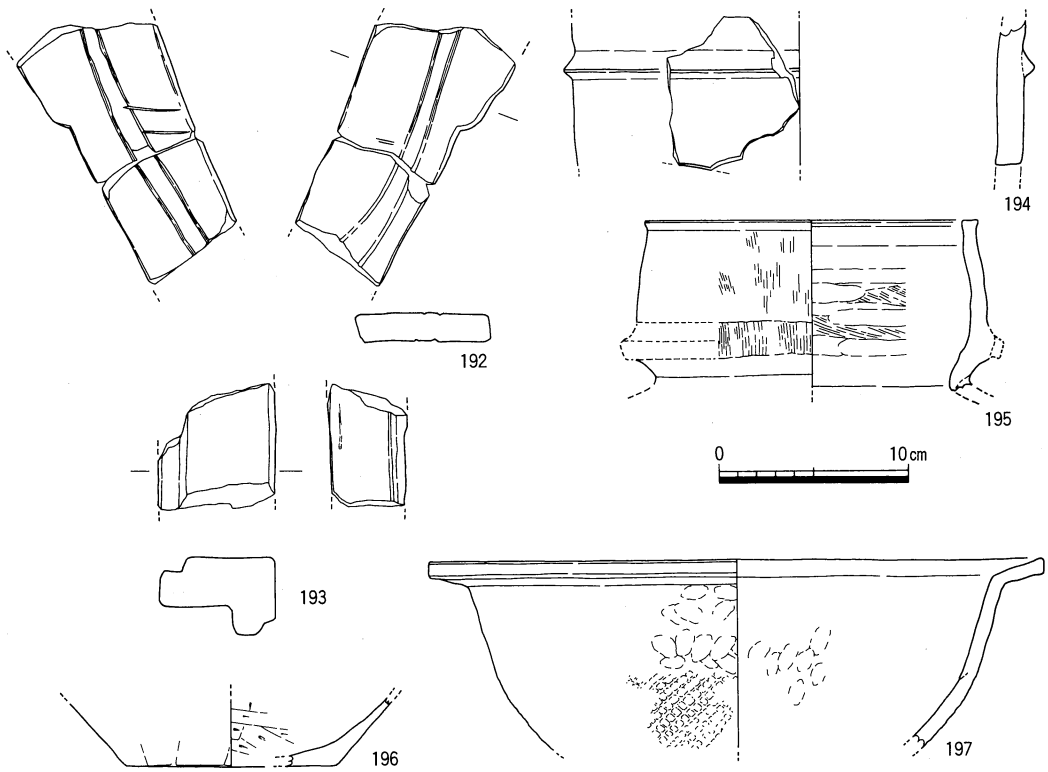
第54図　谷３・３群出土遺物４　土師器（１／４）

気味に四角く収める。189・190はミニチュア鉢。

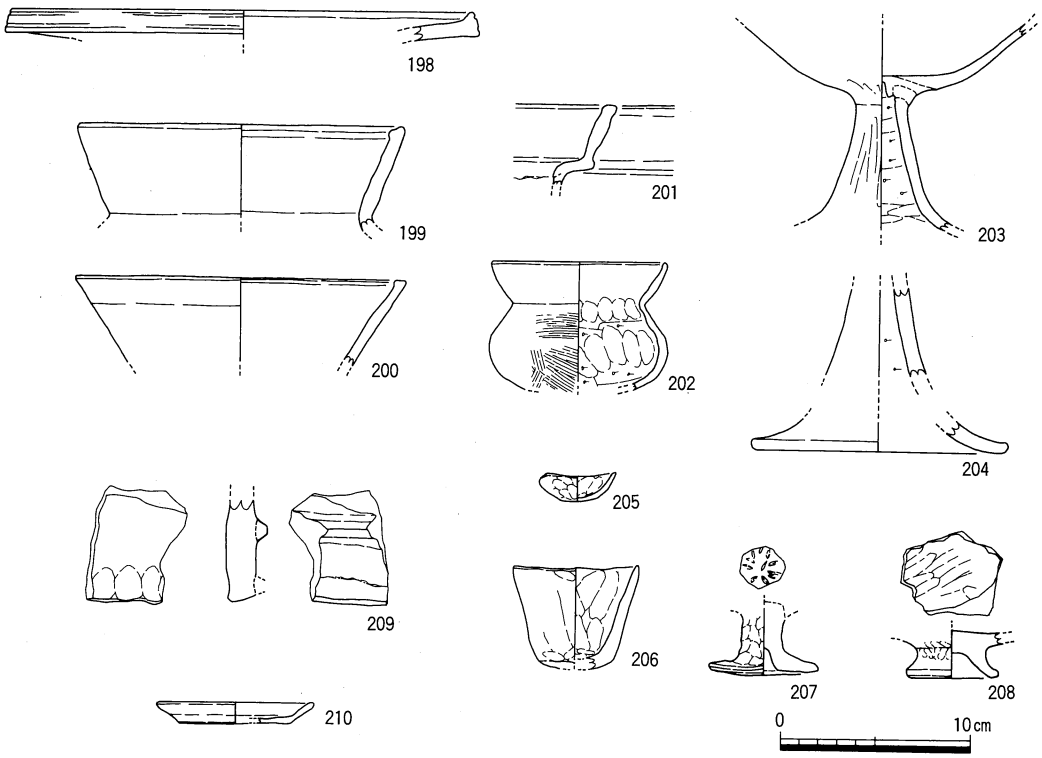
底部191はやや厚手で突出気味の大形平底。弥生中期以前に比定できるであろう。

138・139・192～197は４ｂ区上層資料。かなり大形の矩形突帯を貼付した器体片。突帯の形状はやや粗雑である。土製棺片であろう。139は二重口縁様を呈する小片。下面は別材の剥離痕がある。形象埴輪片か。器種不詳。192は蓋形埴輪飾り板。線刻の意匠から見て内側縁は透かし孔であろう。193は家形埴輪。壁体隅部を残して窓状に大きく壁を穿つ。浮彫風に柱を表現する。谷３を含め丘陵西部で唯一確実な家形埴輪片である。194は円筒埴輪片。断面三角形の小形突帯で透かし孔の形状は不詳。器表は剥落している。195は大形二重口縁壷。屈曲部の突帯が剥落してその部分に先行する縦ハケ調整が明瞭に観察できる。196は下川津Ｂ類壷底部。197は中世の土鍋。半球形を呈する体部の下半に格子叩きが顕著に残る。

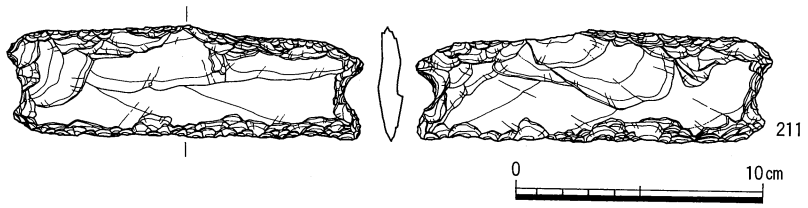
198～211はその他の４ｂ区資料である。調査時に層序・地点を確認し得なかったものである。198は下川津Ｂ類広口壷。おそらく鶴尾神社タイプであろう。199・200は口頚部が直線的に伸びることから直口壷とした。端部の形状は甕と異ならない。二重口縁壷201は直



第55図　谷３（４ｂ区）上層遊離遺物（１／４）



第56図　谷３（４ｂ区）その他（１／４）



第57図　谷３（４ｂ区）出土石包丁（１／３）

立頚部を有し，立ち上がり部が開かないタイプ。202小形丸底土器は最大径の位置がやや低い。高坏脚204は器体に無数の気泡が生じ軽い。二次的被熱痕が顕著だが他の被熱痕の顕著な例ではこのような気泡が生じる例を観察していない。原因は不明である。205・2067はミニチュア鉢。207はミニチュア高坏か。頂部の剝落面には刻み目がある。208倒杯形脚台は低脚杯である。坏底部内面は磨く。209円筒埴輪は矮小化した突帯を付し灰白色を呈し砂粒の混入が少ない。丘陵東縁部の３号墳出土埴輪の様相に酷似しており，焼成土坑・谷３の他円筒埴輪とは大きく異なる。210は中世土師質小皿である。211はサヌカイト製打製石

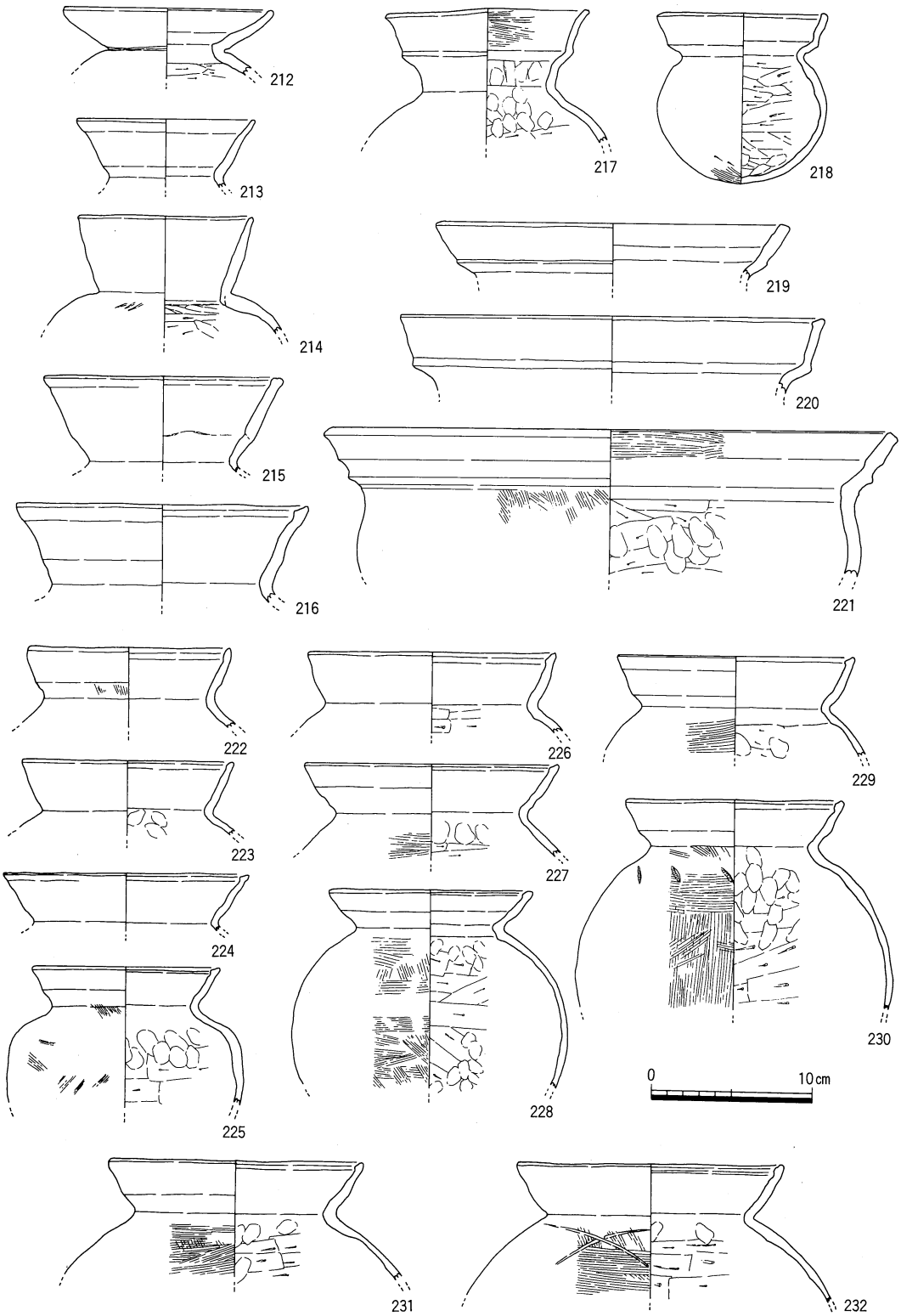
包丁。両端の抉りが顕著である。谷３資料で弥生後期前半以前に遡るのは本品と191底部だけである。

212～291は４ｃ区資料である。同地区では遺物量は豊富だったが，他地区に見られたような顕著な密集状態が確認できなかったこともあって上層（新旧水田耕作土・造成土層）・下層（自然堆積層）単位で一括して取り上げている。概ね古式土師器212～279・290・291は下層出土，古代以降の280～289は上層出土資料である。

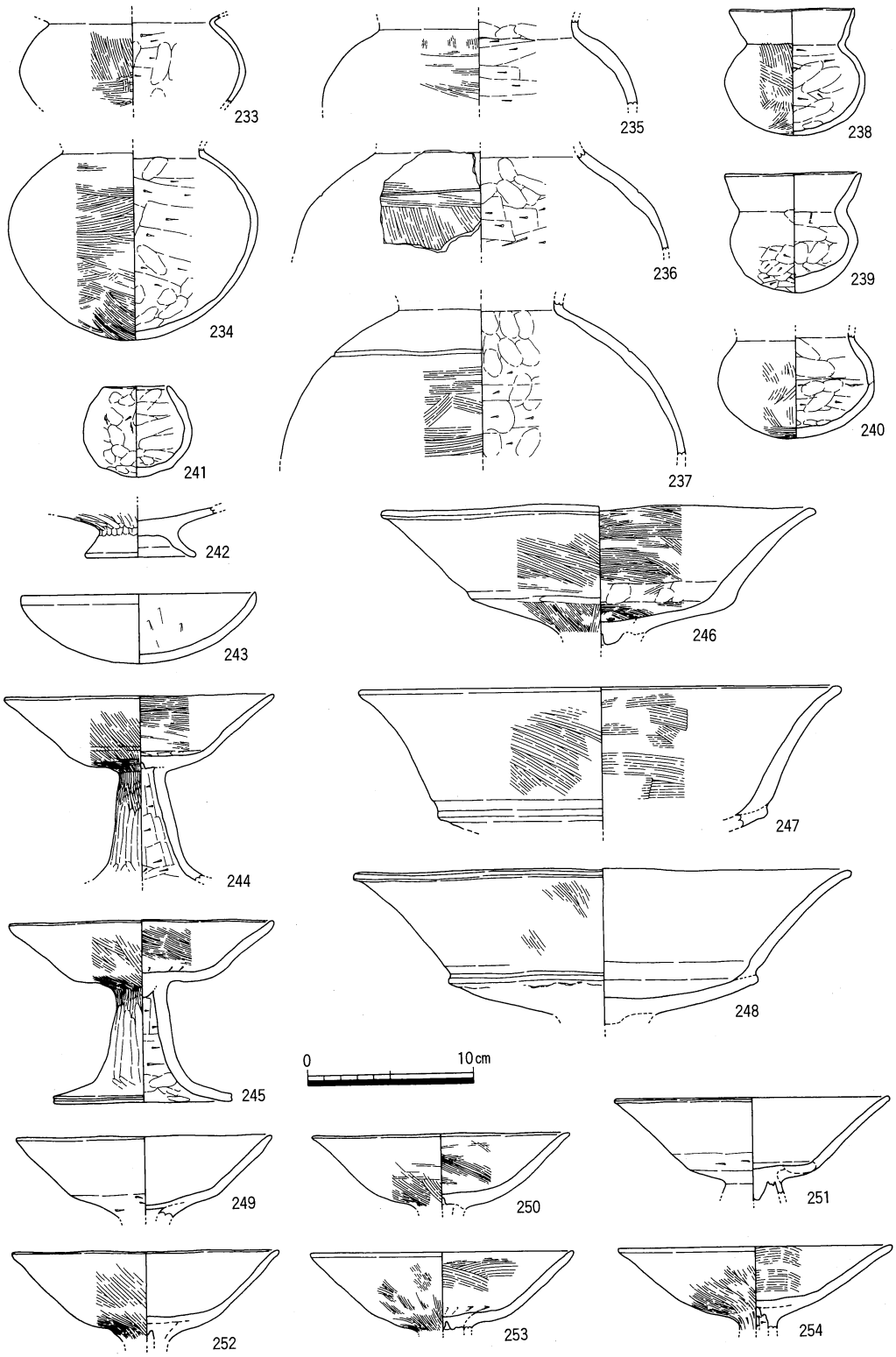
212～216は直口壷。口縁端部を丸く納めるものと甕と同じく肥厚させるものとがある。212は口頚部が変形したものと解したが，鼓形器台の退化形態の可能性も検討すべきかもしれない。

二重口縁壷217は直立頚部が明瞭な形態。全体に薄作り。218はむしろ先行する時期の二重口縁甕に似た形態。体部は球形。二重口縁219・220は口径から見て鉢の可能性がある。221二重口縁鉢は屈曲部が完全に形骸化し外表の鈍い突出に化している。222～232の甕口頚部はいずれも鈍く内湾して開く。端部の内面肥厚は先端を摘み出して長く引き延ばすか鈍化する傾向が強い。229～232は特徴的な肩部横ハケがよく残る。230ではハケ原体の連続刺突文が見える。232は「×」状の沈線文。233・234はやや扁平な体部から見て壷の可能性が高い。235～237は甕であろう。236・237には肩部沈線文が施される。小形丸底土器は扁平球状の体部を保つが口縁部はやや縮小している。239は外面体部下半のケズリが顕著である。ミニチュア土器241は口縁部のすぼまった球形を呈する。このような形態の祖形となる器種は当該時期の土師器組成に見ない。242は低脚杯脚部。浅鉢243は基本的にこの段階の布留式系統の土器様式には含まれない器種である。いくつかの土器と共に先行する時期の混入品と見たい。

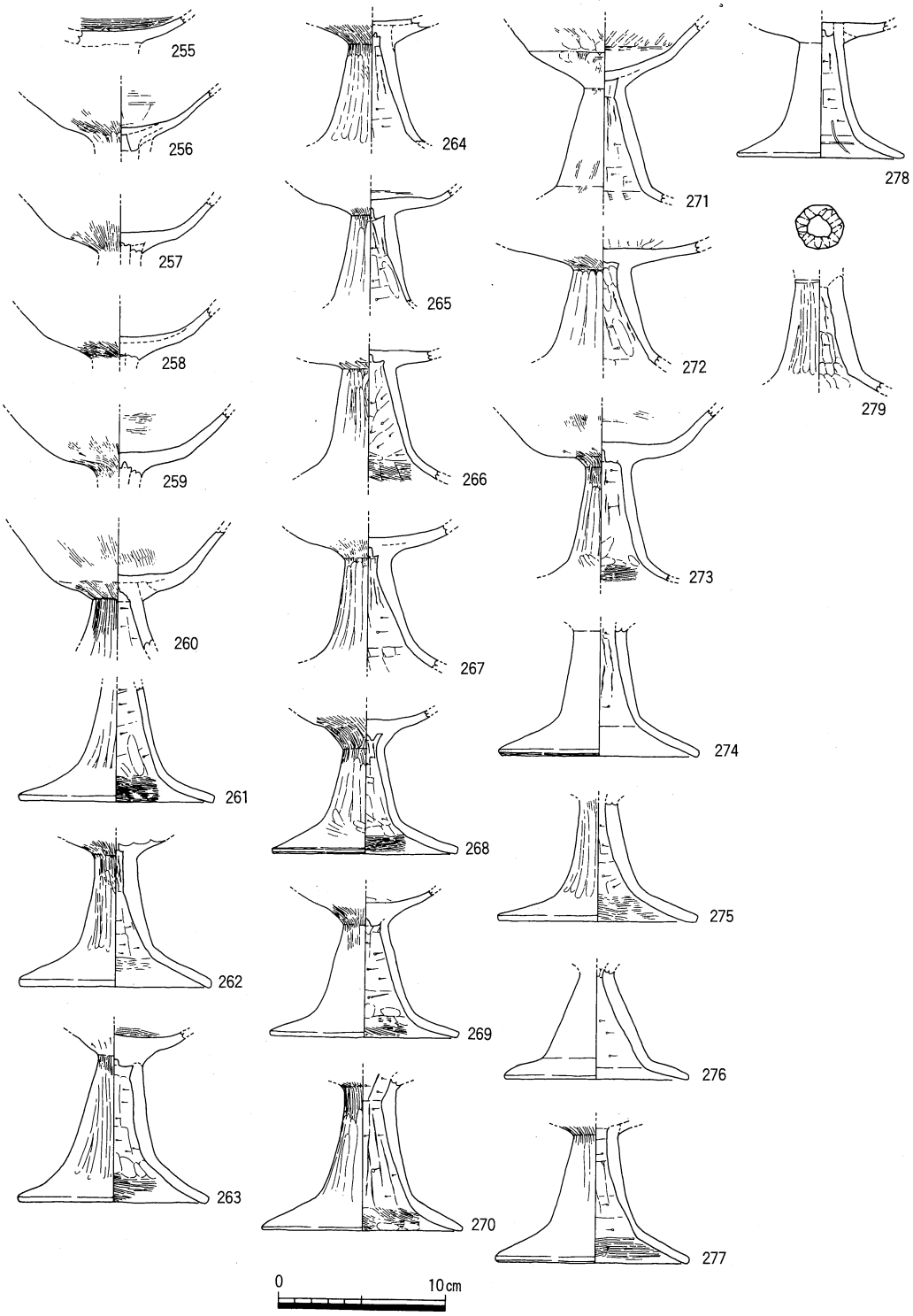
小形高坏の坏部は基本的に緩やかに屈曲して開き，断面台形様を呈する。屈曲の度合いはかなり鈍化するものも含まれるがまだ椀形に変化したものは見ない。251は小形高坏にしては珍しく屈曲部が明瞭である。これに対して大形高坏246～248では屈曲部直上に凹線を配するなどしてその部分を強調する。また上半部は強く開く。坏部外面は上方に向かって螺旋状にハケ調整を行い，上半部は軽くなでる。ハケ調整前に脚部境を局部的に削ることも多い。脚部は軸部に限って上半部に縦ハケ調整を加えた後に縦方向の幅広のミガキを加える事例が多い。裾部は一般になでる。軸部内面は横ケズリ，裾部は横ハケとなる。脚内面頂部に棒状刺突痕を見る例が多い。また脚頂部をふさぐ前に軸上部に刻み目を加える例が246・256・279等の剥落資料に見られる。また255は別作りの坏部に脚部を継ぎ足す，



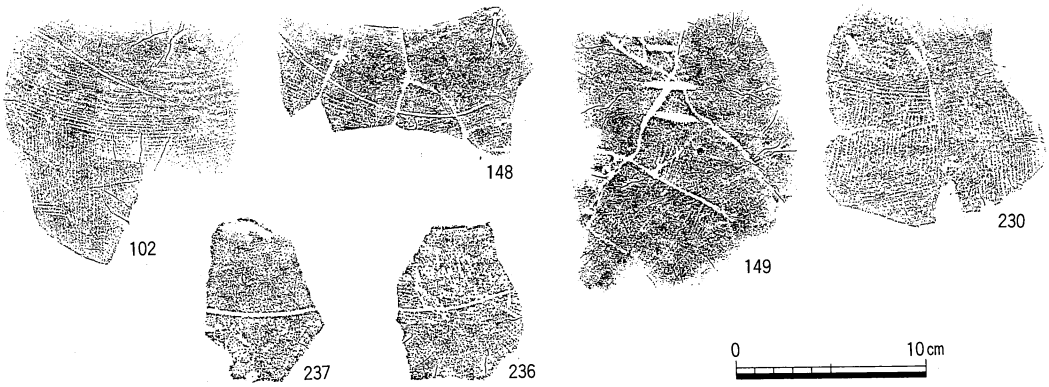
第58図　谷３（４ｃ区）出土遺物１　土師器（１／４）



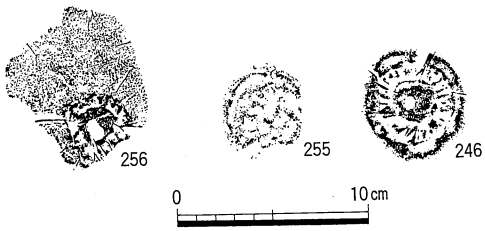
第59図　谷３（４ｃ区）出土遺物２　土師器（１／４）



第60図　谷３（４ｃ区）出土遺物３　土師器（１／４）



第61図　谷３出土土師器甕　肩部文様拓影（１／４）



第62図　谷３出土土師器高杯
接合部拓影（１／４）

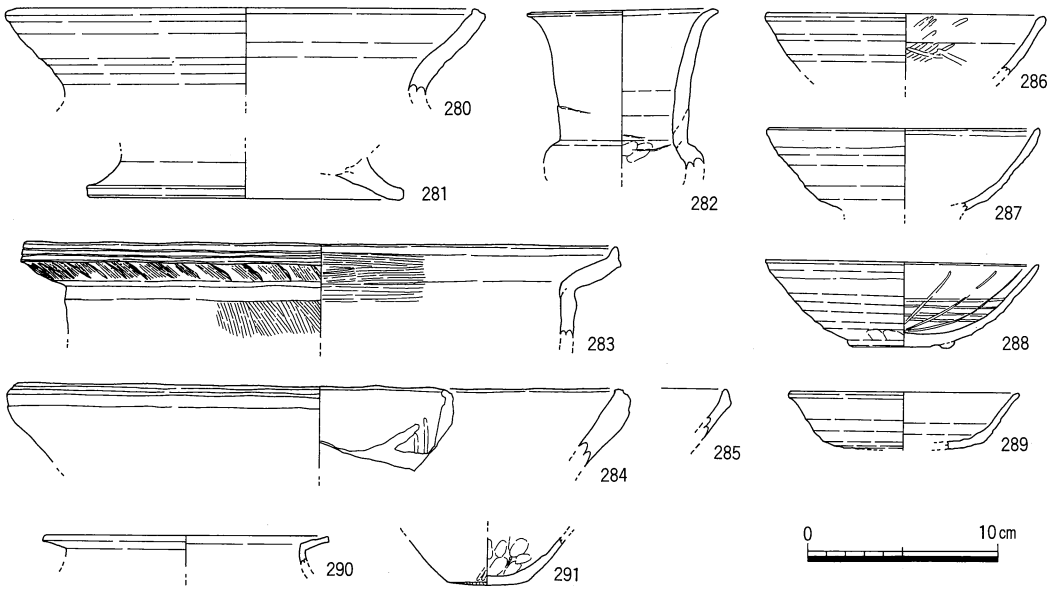
本資料では一般的ではない製作法を取るが，この場合は坏部外面の脚部接合面に一面に浅い刺突を加えている。

290は下川津Ｂ類甕口縁部。291は同底部である。口縁部は薄く小形化し平底は極端に矮小化している。下川津Ｂ類甕の最末期の形態に近い。

280～289は４ｃ区出土の古代・中世資料。280は須恵器大形甕，282は同平瓶。281は大形の土師器台付皿か。283は土師質土鍋。284は瓦質擂鉢。285は須恵質コネ鉢である。286～288は瓦質高台付椀。全体形状と288高台から見て13世紀頃に位置づけられる。

以上示した来たように谷３資料はいくつかの時期に分かれるが，圧倒的大多数をなすのが古墳時代前期末，布留式新段階並行期に位置付けられる土師器・埴輪類である。その時期比定の詳細については後章で改めて検討する。この他，弥生中期前後，古墳時代初頭～前葉，奈良時代末・中世後半の資料がごく少量含まれる。古墳時代前期末資料は，焼成土坑資料と同じく石英・赤色粗粒をふんだんに含む特徴的な胎土を持つ。器種によってその様相は微妙に異なるが埴輪・土師器の差を超えて基本的な構成を共有している。また色調は長期間に及ぶ谷部での埋没によってグライ化・脱色が顕著で丘陵部出土資料とはかなり異なるが，破砕状態等にも共通する点が多い。このような遺物そのものの様相からもこの時期の資料は３ａ区焼成土坑資料やそれと同様の関連遺構（未確認のものも含む）から排出された可能性が高いと考える。

また奈良時代末・中世後半期をピークとする少数の後代資料の存在は，確認し得た限りでの丘陵部での遺構変遷と大筋では一致する。



第63図　谷３（４ｃ区）出土遺物４　古代・中世（１／４）

溝状遺構ＳＸ０１

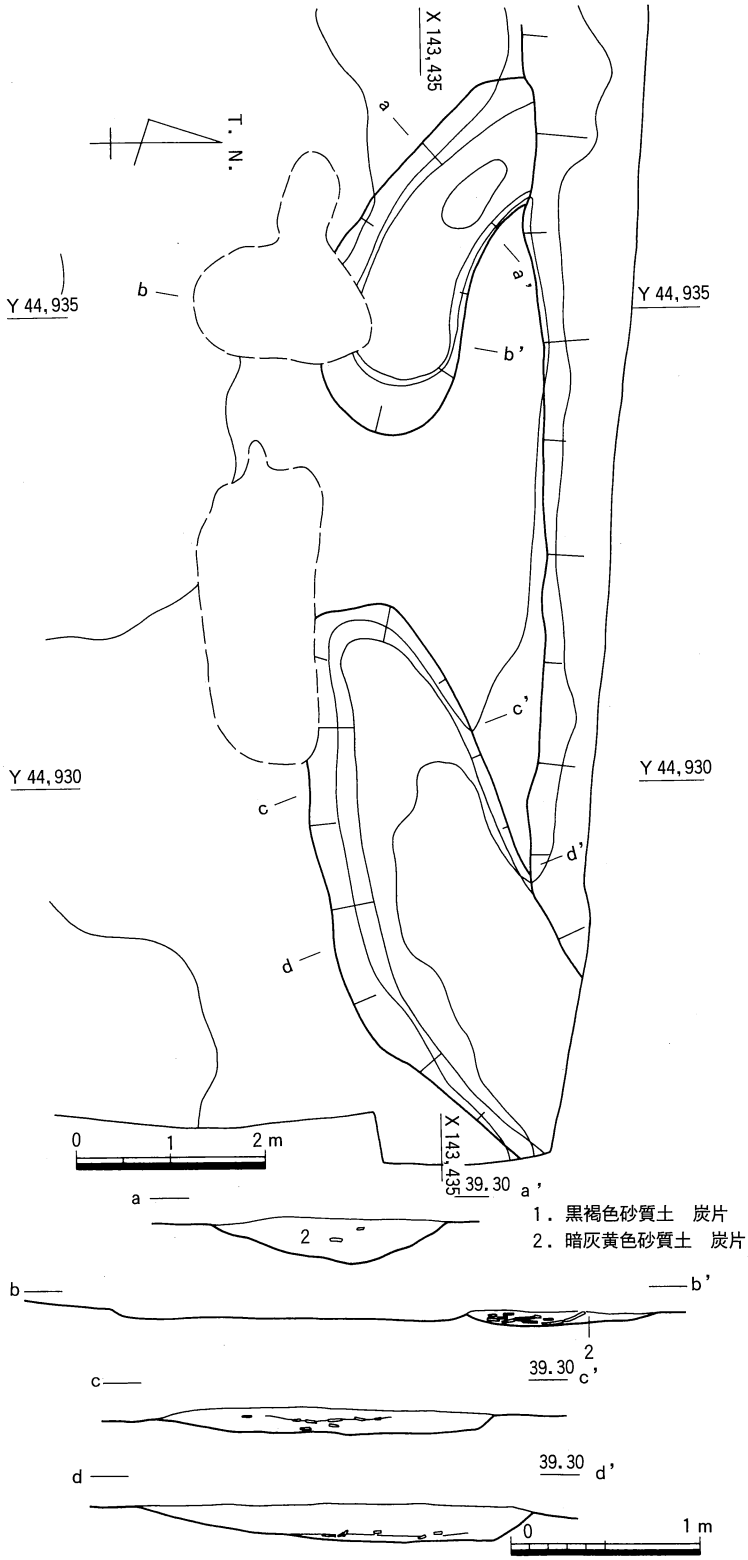
３ｂ区で確認した溝状遺構である。北側は水田造成時に破壊され遺構の南端部が残存しているだけである。また残存部分も全体的に削平によって上半部を失っている。現状では弧状の溝２条が「ハ」字状に並ぶ。東溝は長さ６ｍ程が残存し，最大幅２ｍ強，深さ0.2ｍを測る。これと２ｍ弱の間隙をあける西溝はやや小形で幅1.5ｍ，深さ0.5ｍを測り，４ｍ分残存する。溝側面の立ち上がりはかなり緩やかだが，両溝とも北側縁の立ち上がりが相対的にややきつい傾向にある。また両溝先端部の立ち上がり勾配から，一定の削平を考慮してもその間隙部分「開口部」が本来的な形状である可能性が高いが，一段浅い状態で両溝が連続した可能性も否定できない。

埋土は若干の炭片を交える黒褐色～暗褐色砂質土からなり，小形品を中心とした古式土師器を多量に伴う。出土状態にこれらの溝内設置を示唆する材料はない。出土土器は古式土師器の諸器種をほぼ網羅し，特定器種への顕著な偏りは見出し難い。また多くは比較的細片化しており，完形近くまで破片が揃う例はほとんどない。削平によって一部は失われているだろうが，すでに細片化した土師器片が本遺構に持ち込まれたか流入したものと考

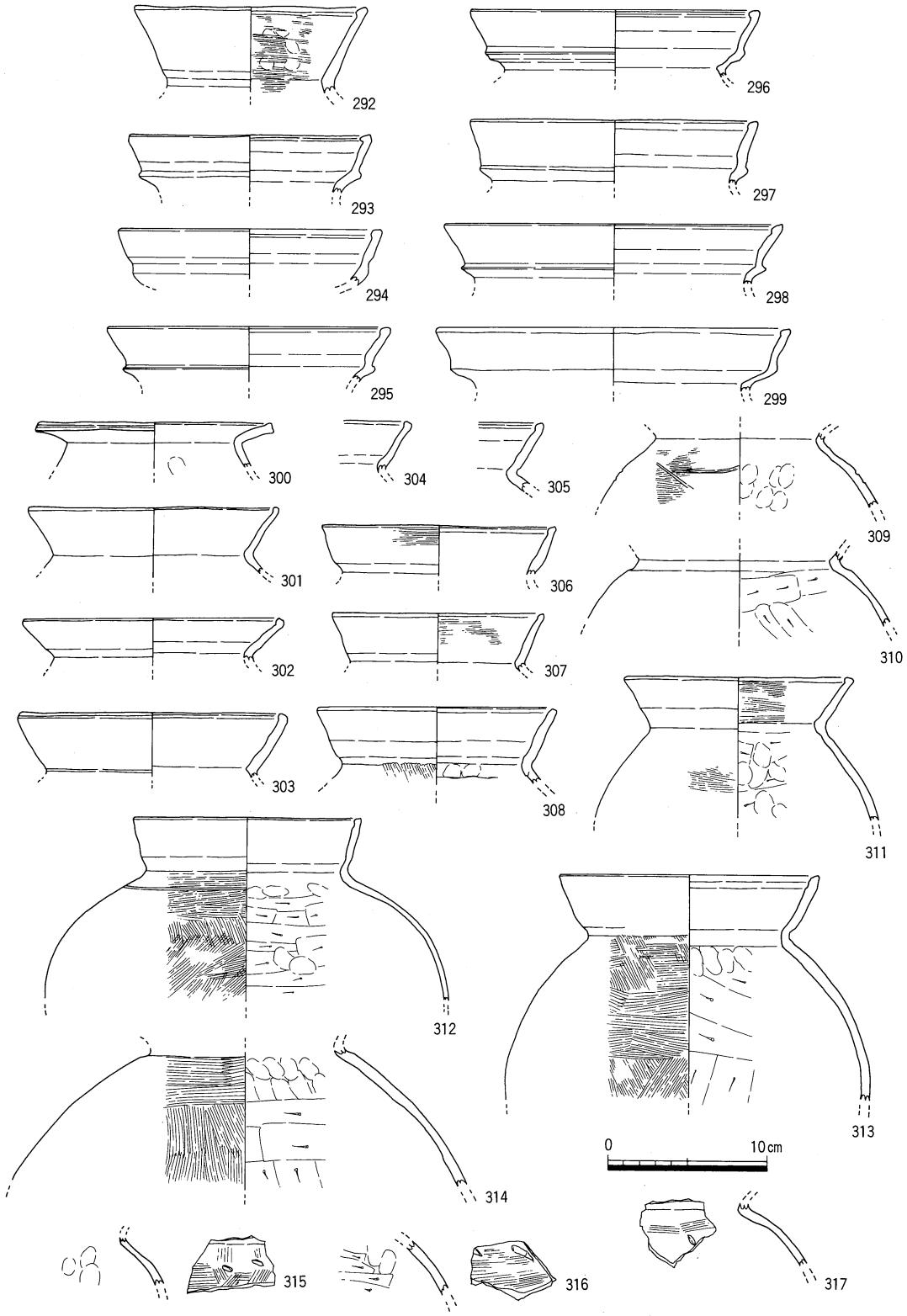
えた方がよいであろう。

調査時には，本遺構を南端が開口した円形周溝状遺構の一部と理解し，古墳基底部の可能性を想定した。しかしかなりの削平を蒙るとはいえ以北でこれを裏付ける遺構が確認できなかったことにくわえ，出土古式土師器の構成が甕を多数含むなど供膳形態が卓越する等の一般的な葬送儀礼的な器種構成が認められないこと，それらには焼成前後の穿孔など儀礼用の加工がないこと等，前期古墳の供献土器のあり方とはそぐわないことや，積極的にそれを支持する出土状態を示さないことから最終的にはむしろ古墳以外の遺構の一部と考えている。若干の小規模な焼土塊の伴出や溝埋土中に炭細片を交えることが機能推定に重要と思える。遺構の形状などから焼成土坑そのものとは見なしがたいが，それに関連する付帯施設，例えば外周の排水溝等を想定したい。

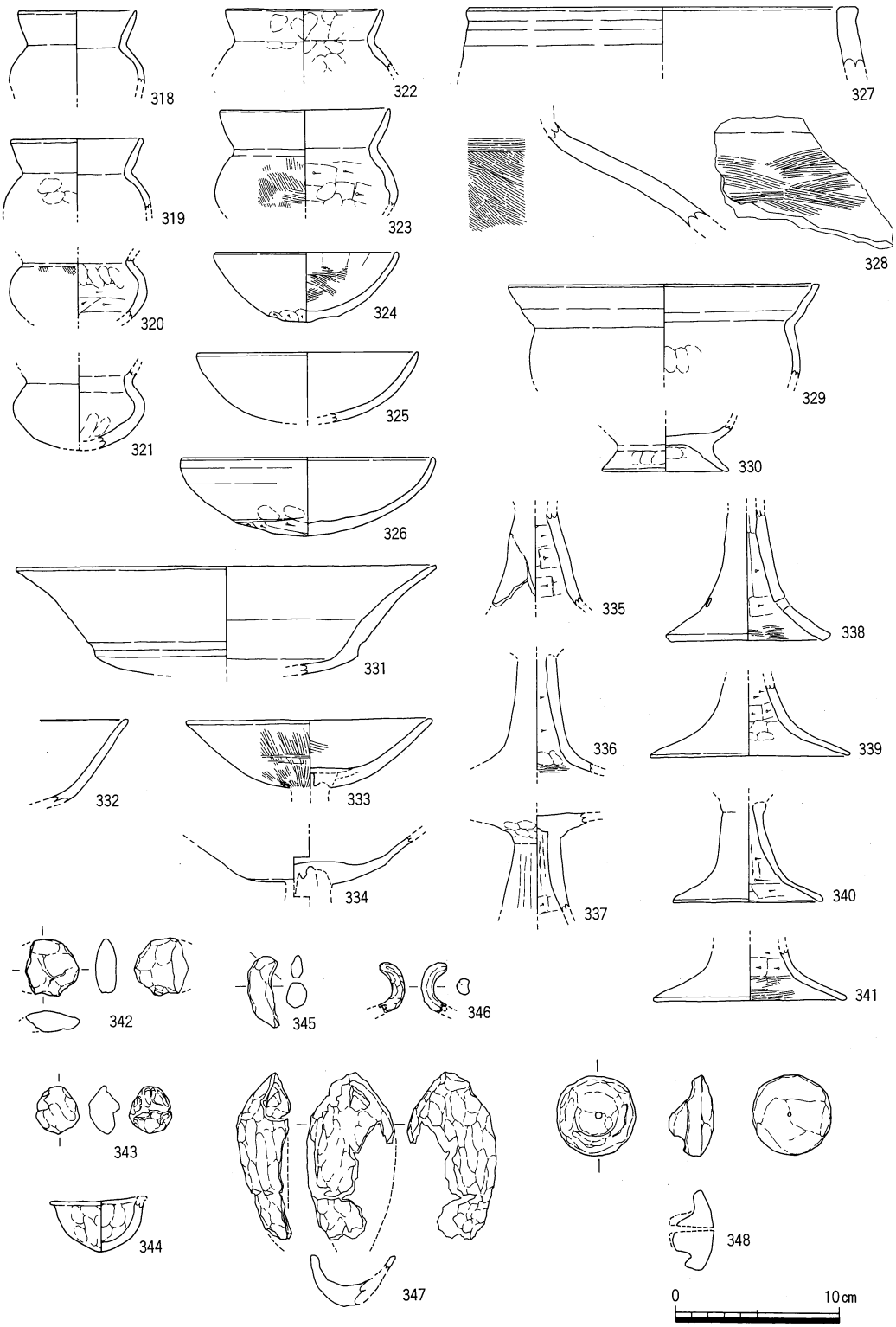
時期は出土土器から布留式中段階～新段階古相と考えら



第64図　溝状遺構ＳＸ０１平面図・断面図（１/80・１/40）

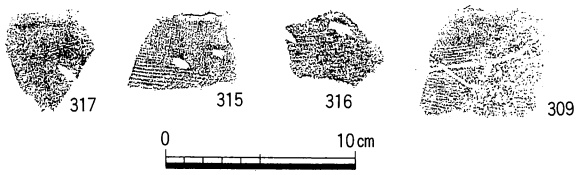


第65図　ＳＸ０１出土遺物１　土師器（１／４）



第66図　ＳＸ０１出土遺物２　土師器・土製品（１／４）

れる。焼成土坑や谷部廃棄土器群1～3の大部分の資料よりもやや古い様相を含むようである。



第67図　ＳＸ０１出土土師器甕　肩部文様拓影（１／４）

292は直口壷。甕同様に口縁端部を肥厚する。二重口縁壷293～299では294を除いて概ね屈曲部は鋭い。また端部内方を小さいが強く突出する。甕300の短い「く」字口縁は下川津Ｂ類とは別系統の伝統的在地形態である。本遺構以外では見ない。301～317は布留様式系統の甕で，口縁部形態に古い様相をとどめている。口頸部は谷３資料などに比べ相対的に直線的に伸び，また厚ぼったくもならない。端部内方は小さく肥厚する。口頸部基部も極端な抉れが認められない。また309・312では肩部に沈線文を見るが，本遺構資料ではむしろ肩部文様は315～317の刺突文が目につく。318～323は小形丸底土器。扁平球状の体部で口縁部は短く直線的に開く。324～326は浅鉢。底部まで残存する324・326ではその部分のケズリが観察できる。327は小片だが大形二重口縁壷口縁部片であろう。328は大形壷肩部片。329は短い外反口縁を有する鉢。谷３資料に見られる二重口縁鉢とは別器種である。330は低脚杯。脚部は直線的に開く。331大形高坏は坏底部がわずかに丸みを帯び，上半部の外反もやや強い。古い様相である。小形高坏の坏部332～334の形態は谷３資料と異ならない。しかし脚部335～341はやや細身で軸・裾境がより緩やかな傾向がある。338では小円孔を穿つ。

342・343は桃核状の土製品。345・346は勾玉状に湾曲した棒状品。土製勾玉と見なすには頭部の膨らみにかける。ただし346は一方の端部付近に貫通孔を認める。347は船形の土製品だが，形状は極めて粗雑。348は紡錘車状の土製品。しかし貫通孔は細く心棒を装着することは困難であろう。

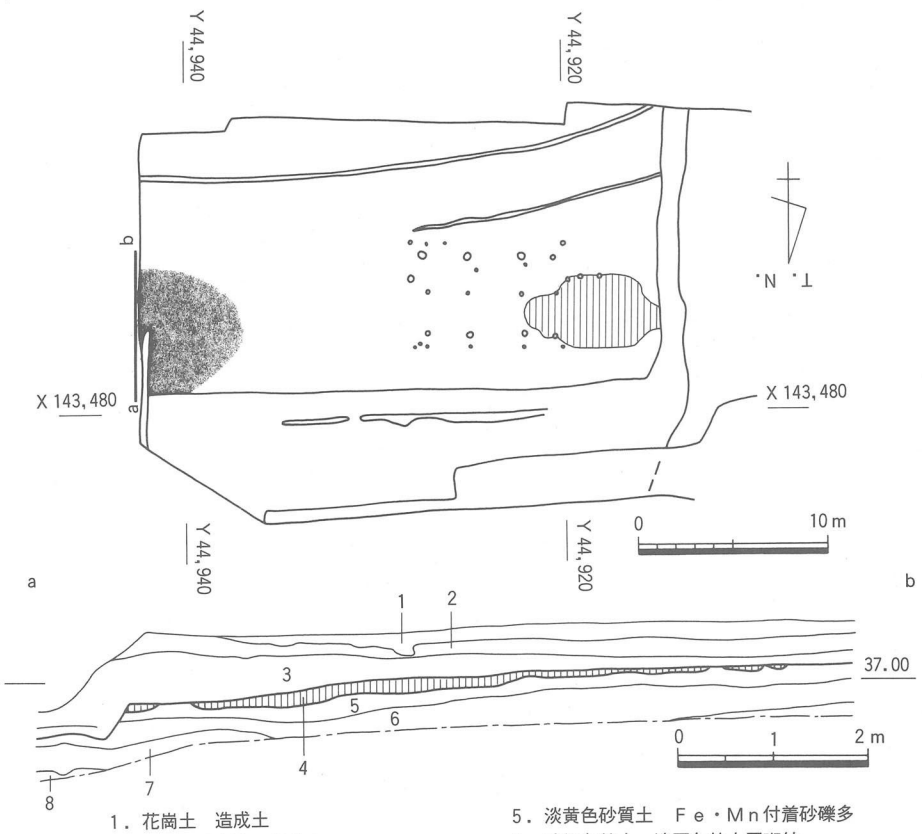
この他図化していないが長径５cm大の焼土塊２点が出土している。全体は黄褐色を呈し部分的に黒灰色・橙色に変色する。スサは含まないが表面に径１cm以下の小枝ないしは茎の圧痕をとどめる部分がある。石英粗粒を極めて多量に含む他，１cm大の土器細片すら交える。また混入物の構成は本遺構出土土師器に類似するが砂粒の混入量は遙かに多いので土器素材粘土の焼成品とは見なしがたい。

本遺構出土土器の構成の中心をなすのは布留式系統の器種であるが，それとは異なる系統の形態がわずかではあるが伴う。甕300や浅鉢は伝統的な在地系統の器種と思われる。また二重口縁壷・甕・高坏の多くでは一般的傾向として布留式系統でも谷３資料より古いと

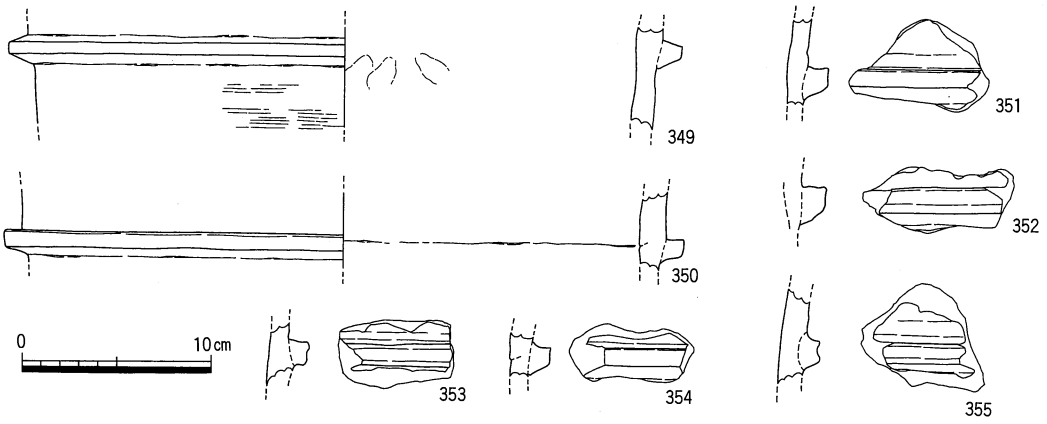
見なすべき様相が観察できる。小形丸底土器も様相がやや異なる。322・323は相対的に口縁部長の萎縮した退化傾向でも理解可能だが，320・321などより古相の傾向が共伴する事から，系統の異なる古相形態の余地もある。詳細な検討は後章で行うが，取りあえず谷３資料群よりも古い様相を持った資料であり，それとは構成上の差異も存在する可能性もここでは指摘しておく。ところでこれらの胎土・色調は布留式系統・在地系統とで格差はない。更に石英・赤色粗粒の多量含有は，上記したような多少の時期差を越えて谷３資料・焼成土坑資料の特徴と一致するものである。

不明遺構ＳＸ０２

３ａ区東端で検出した何らかの遺構残骸と推定する不明瞭な埴輪類の包含範囲である。３ａ区東壁土層の観察に拠れば南北6.9ｍの範囲で最大層厚0.15ｍ，炭片を多く含む黒褐



第68図　不明遺構ＳＸ０２平面図・断面図（１/400・１/８）



第69図　ＳＸ０２出土遺物１　円筒埴輪（１／４）

色土が認められる。見たところ同層の下面はさほど平坦ではないが，下層部分への黒褐色土の浸透も予想され確実ではない。柱穴等の付帯設備は確認していない。里道下の未調査区域には連続するものの２区側では確認できないので東西方向でも10ｍ未満に過ぎない。同層中には炭細片の他，円筒埴輪・蓋形埴輪片などが多く含まれる。出土遺物はかなり細片化しているが時期を違えた資料は交えていない。

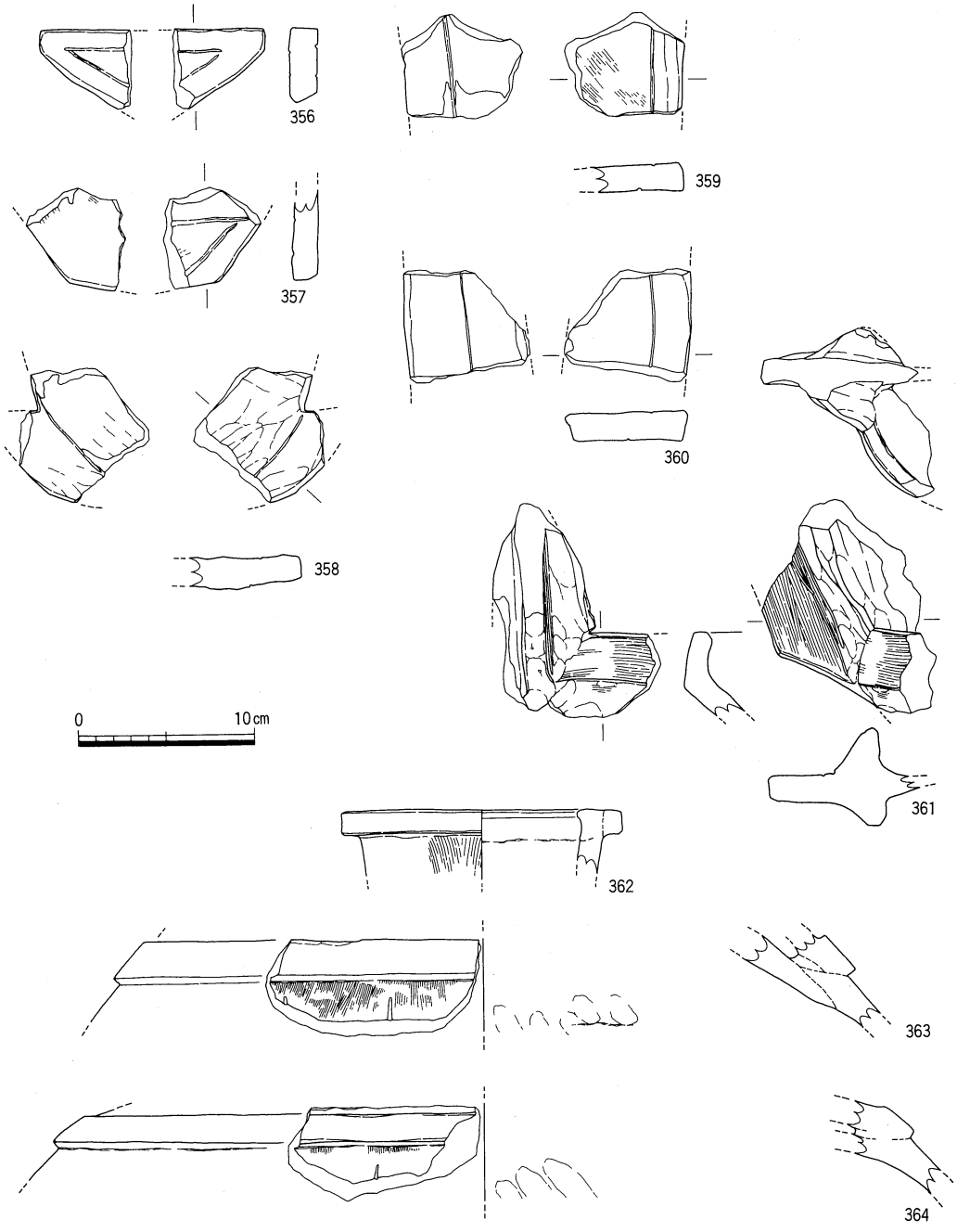
遺物・黒色土分布域の外縁は不明瞭ではっきりした平面形態を把握しにくい。しかし検出位置が地形的には丘Ｃの稜線にほぼ相当し，包含層を形成・残存する地形ではない。また３ａ区では全般的に削平が著しく他遺構の残存状況も良好でないことから考えれば，この遺物包含範囲も，明確な形状が把握できなかったものの何らかの遺構残骸の可能性が高いであろう。

具体的機能は想定困難だが伴出遺物や炭細片の顕著な包含から焼成土坑に類似するか、あるいは関連する遺構も視野に入れておくべきであろう。

349～355は円筒埴輪。いずれも中間段小片で透かし孔の形状を知りうるものはない。突帯はやや突出度の弱い台形で上部が強く張り出す形態が多い。突出度の高い台形状の突帯も含む。349ではかすかに横ハケが認められる。356～364は蓋形埴輪。356～360は同飾り板片。361は飾り板基部片。筒状部との接合部片である。362は口縁部外縁に矩形の突帯を付す。口径から蓋形埴輪上部，筒状部端部と推定した。363・364は笠部。扁平な隆起帯が巡り，その直下に垂下沈線文の一部が見える。基底部円筒との接合部分か。

これらの資料はいずれも土中の鉄分がひどく付着しており調整の詳細などは観察困難である。しかし胎土の特徴は焼成土坑・谷３廃棄資料等に共通する。本遺構で多い円筒埴輪

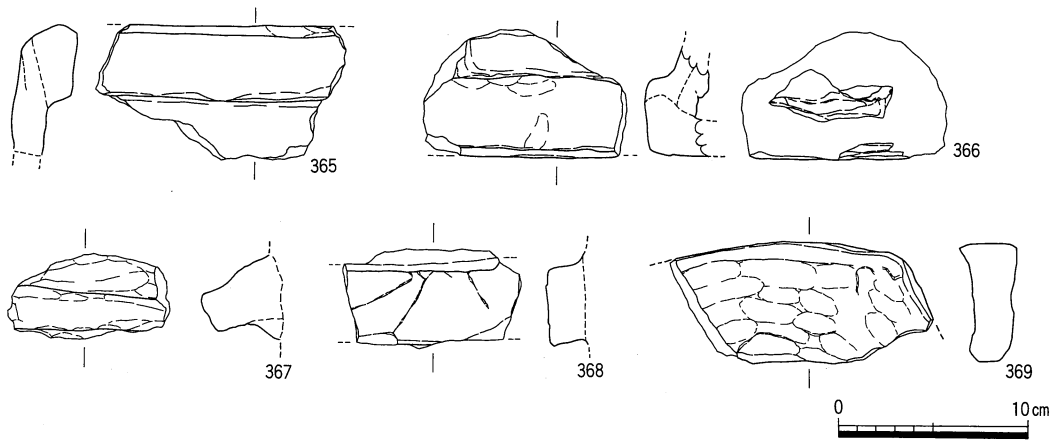
の突帯形状は，谷３資料の主体的な形態とはやや異なるが，少ない資料での厳密な対比は難しいであろう。焼成土坑資料などと大きく隔たらない時期の所産と見てよい。



第70図　ＳＸ０２出土遺物２　器財形埴輪（１／４）

3 a区その他の資料

365～369は3 a区の耕作土・床土層あるいは中世以後の遺構に混入していた土製棺その他の資料である。遊離した資料であるが，出土地点から焼成土坑・不明遺構ＳＸ０２に関わる可能性がある。365は小片だが緩やかに弧を描き円筒形をなす器体の一部と見られる。外表に大形の突帯を巡らし端部は斜めに面取りする。内面に突帯はない。円筒形土製棺口縁部であろう。366は「く」字に折れ曲がる屈曲部に突帯を作り出す。部分的に残存する内面の調整は粗雑。箱形土製棺身材の一部か。屈曲部の形状に難があるが焼成土坑資料と同様の土製棺蓋材の可能性もある。367・368は剥落した大形突帯。調整が比較的粗雑であるので家形埴輪など形象埴輪の一部材と見るよりも土製棺のそれの可能性が高いであろう。369は緩く円弧を描く上端部の形状から箱形土製棺小口板部材の可能性があるが断定はできない。

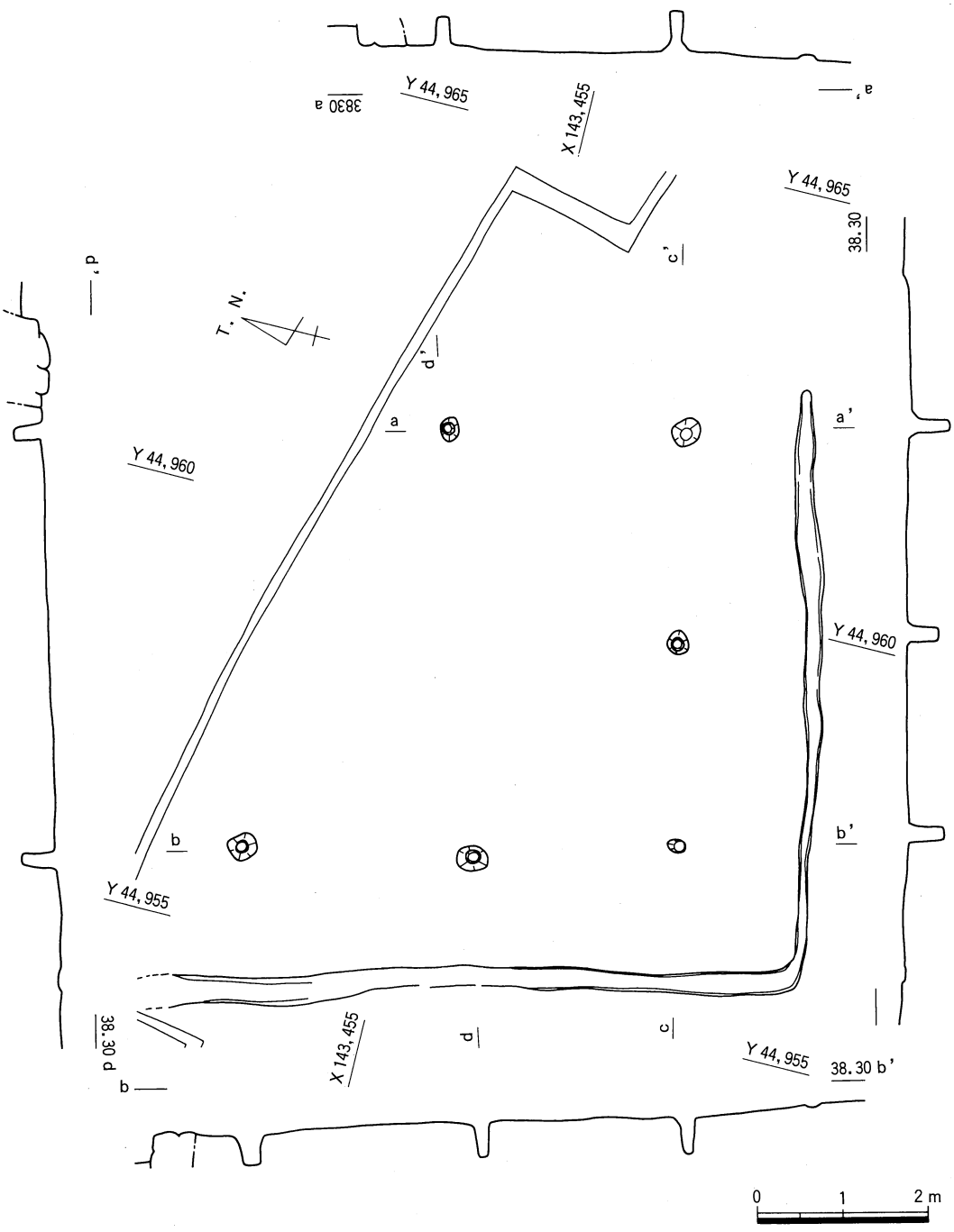


第71図　3 a区出土その他の器財形埴輪等（１／４）

大形竪穴建物

５区西北隅の中世包含層直下で検出した方形の大形竪穴建物である。地形的には丘陵Ｃの推定稜線付近に位置することになる。規模は東西辺推定8.4ｍ，南北辺推定８ｍ，床面積約67ｍ^{2}と古墳時代前期の方形竪穴建物としては異例の規模が想定できる。しかし用水路によって北辺から東辺の半ばまで床面の1/3弱を破壊されており，中央穴が存在しないこと以外には竈や貯蔵穴などの付帯設備の有無について厳密には確認できない。

またほとんど床面直上まで削平が及んでいることに加えて，検出面前後にＭｎ粒の沈着が顕著であったことから遺構検出に手間取り，四周の壁立ち上がりは全く確認し得なかった。床面に散乱する多量の遺物の存在から遺構を推定し，その取り上げ後にかろうじて壁



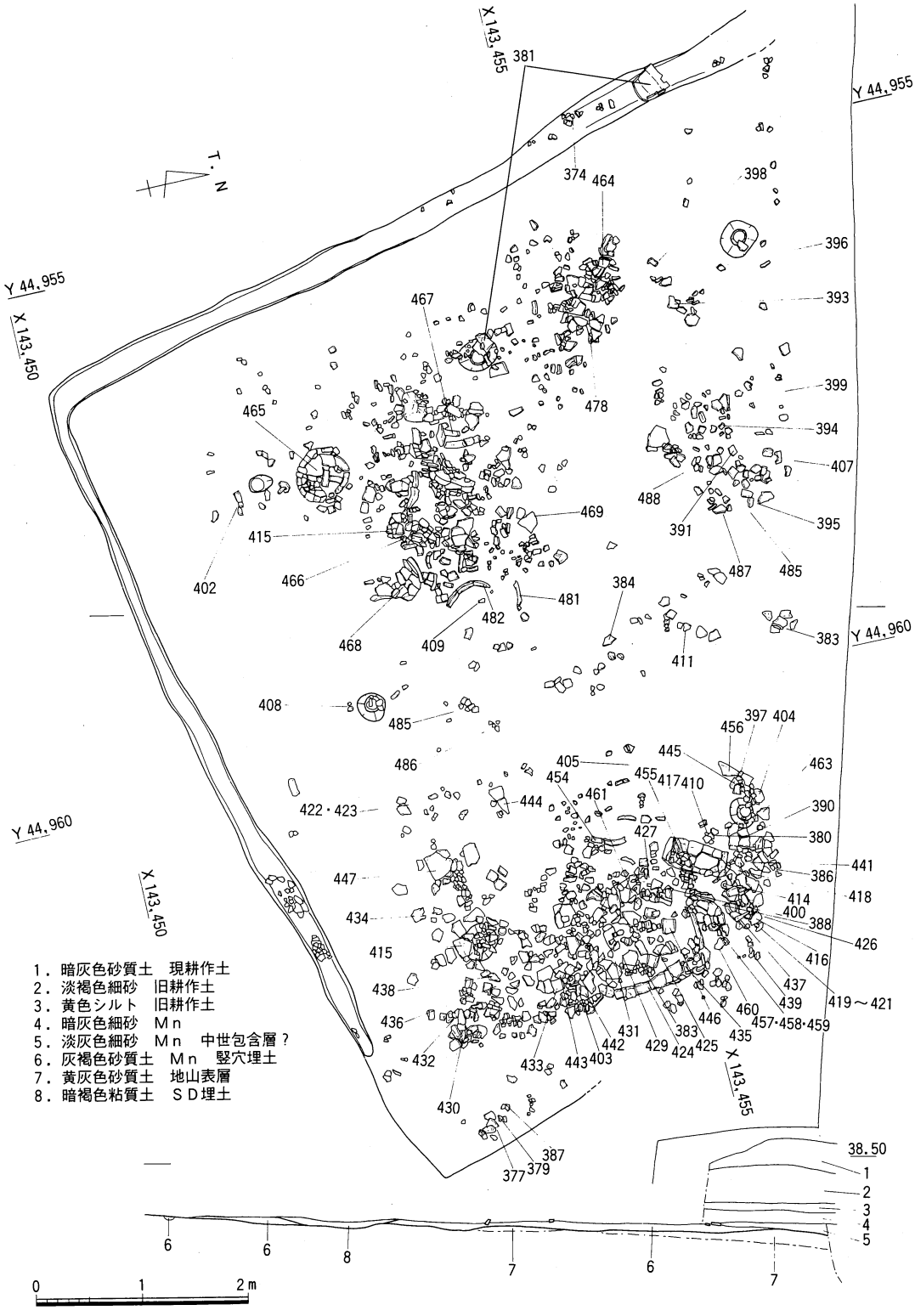
第72図　大形竪穴建物平面図・断面図（1 /80）

溝から平面形状・規模を把握できたに過ぎない。南東隅部から床面南端部には東西方向に溝ＳＤ１７が重複している。

柱配置は北辺２穴を欠くものの竪穴四隅の４本と各辺の中間に配された４本の計８本柱が復元できる。諸柱は竪穴壁の概ね1.5ｍ内側に矩形に配される。柱間は2.4ｍ～2.9ｍとややばらつくが，柱通りは比較的よい。主柱穴は径0.3ｍ前後で深さ0.4～0.5ｍを測り，隅柱と中間柱とで格差はない。60ｍ^{2}を越える大形竪穴に対応する重厚な主柱配置といえよう。柱痕や詰め石などは確認していない。却って各柱穴を覆うように，あるいは一部の柱穴では内部に転落した状態で埴輪大形片が検出できる。

壁溝は東端を除く南辺から西辺の大部分にかけて鍵の手状に残存していた。幅約0.15ｍで，深さはせいぜい0.05ｍ程度にすぎない。埋土は柱穴のそれや床面直上の薄い堆積層と同様の灰褐色～暗褐色砂質土からなる。黒化した床面との識別はやや微妙であった。板材や杭等の壁体擁護材の敷設痕跡は確認していない。この場合も却って南辺中央部と西辺北部で壁溝に半ば埋もれた状態で拳大以上の埴輪大形片が出土している。

また床面直上のほぼ全域に多量の遺物が散乱していた。しかし床面近くまですでに削平を蒙っているため保存状態は必ずしも良好ではない。家形・盾形などの形象埴輪各種と割竹形・円筒形・箱形土製棺および若干の円筒埴輪・土師器などを出土している。その大部分は細片化しているが，出土位置には一定の傾向が認められるので破砕片の二次的集積とは見なしがたい。遺物は床面のほぼ全域に散乱するが，特に(1)東辺に沿った南北方向，(2)西半部南，(3) 西北隅に濃密な集中域がある。(1) は箱形土製棺身材が目につく。中でも北半部では(424・455)の様に空芯構造の身材小口板・長側板がほとんどそのままの状態で検出できた。また北端では盾形埴輪片が比較的集中する傾向にある。(2) では大部分が割竹形土製棺片である。おそらく２個体以上の破片からなるであろう。この群の南北には形態の異なる２種類の小口板（＝割竹形土製棺蓋材）が出土している。(3) は２～３個体の家形埴輪片を中心とする。また円筒埴輪・小形土師器片は竪穴外縁部に比較的多い傾向を持つ。以上の資料はいずれも完全に復元できるまでには破片が残存していなかったが，今見たような出土状況からすれば焼き上げた完品ないしはせいぜいそれに近い程度の破損品を器種ごとに並べ置いた状態が想定できるであろう。谷３資料の様に著しく細片化したものを投棄した状況とは異なるであろう。それらの欠損の多くは後世の竪穴削平に拠るものと考えられる。更に言えば後述するように５区東縁～１ｂ区，すなわち丘陵Ｃ東北斜面で中世包含層その他に比較的多く含まれる形象埴輪・土製棺片のかなりの部分は本竪穴削平資



第73図　大形竪穴建物遺物出土状態図・土層図（1 /60）

料の二次堆積の可能性が考えられるのである。直接的な接合関係はないものの１・２号墳東縁斜面等で見いだされる盾形埴輪・家形埴輪片の形態・色調・胎土などは本竪穴資料に酷似し，逆に古墳群に伴う埴輪類の胎土・色調とはかなり異なっている。

また埴輪類・土製棺の破片が柱穴上面に及んだり甚だしい場合にはその内部に転落していること，また一部の破片が壁溝に埋もれていることに注意する必要がある。これらの遺物は先に述べたように本来竪穴建物の床面に並べ置かれた可能性が高い。したがって本竪穴は少なくとも一時期は，成品（あるいは破損程度の低い品を含むかもしれない。）の保管場として使われたと見られる。しかし上述した状況は現在示されるそのような機能は本建物の廃絶後（上屋や壁擁護材の撤去後）の二次的利用の可能性も示唆する。厳密には本竪穴建物の本来的な機能を示すとは限らないのである。

竪穴北東部ではこれら床面直上の埴輪などの上位－厳密には削平面上に相当するであろう－で平安時代初期まで下る須恵器大甕１個体の半ば以上の破片がまとまって出土した。焼成土坑流入須恵器片と同時期に比定して矛盾がない資料である。周辺遺構でのあり方を参考にするとおそらくはこの大形竪穴建物の最初の削平時期を反映する資料であろう。

本竪穴建物は単独で存在すること，当該時期の竪穴建物としては傑出した規模・構造を有することから通常の居住施設とは考えがたい。しかし北辺を失うなど構造の全容を知り得ないし，出土遺物などからも必ずしも本来的な機能を推定できるわけではない。ここでは焼成土坑との関係から埴輪製作作業場ないしは成品保管場としての機能をとりあえず想定しておきたい。

本遺構で確認した器種は以下の通りである。

土師器　直口壷
　　甕
　　高坏
　　小形丸底土器
円筒埴輪
形象埴輪　盾形埴輪
　　家形埴輪
　　不明飾り板
土製棺　箱形土製棺身材
　　箱形土製棺蓋材（小口部）

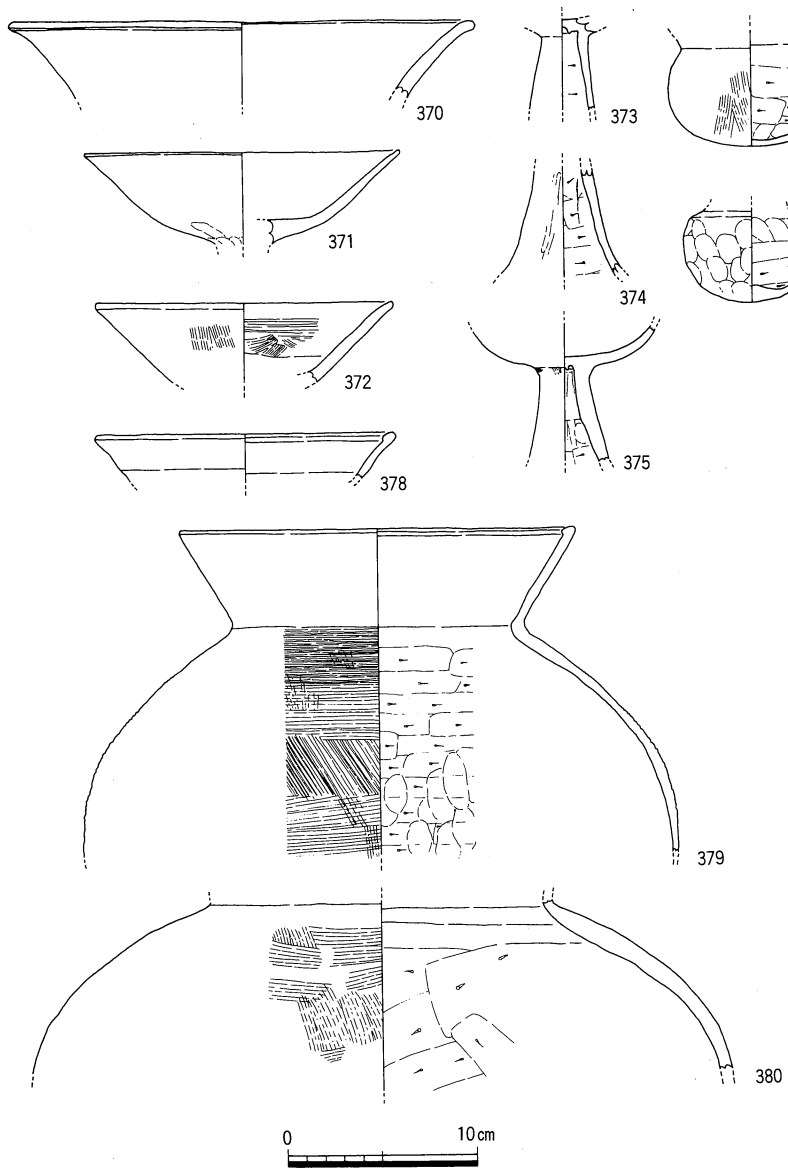
割竹形土製棺

割竹形土製棺小口板

円筒形土製棺？

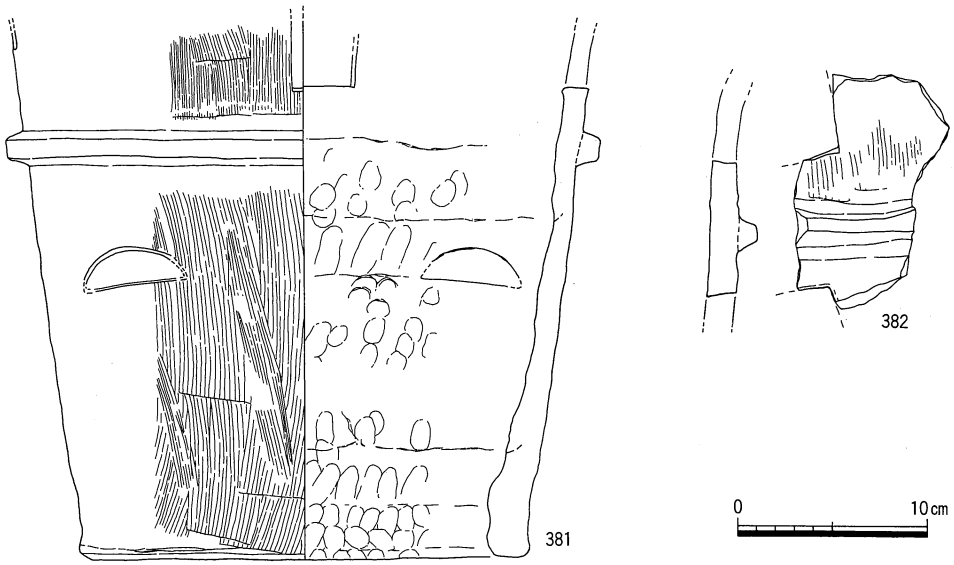
円筒形（？）土製棺小口蓋

370～380は土師器である。直口壷・甕・高坏・小形丸底土器が見られるが点数は多くない。ここに掲載した資料が多少なりとも図化しうる全ての資料である。370は大形高坏坏部

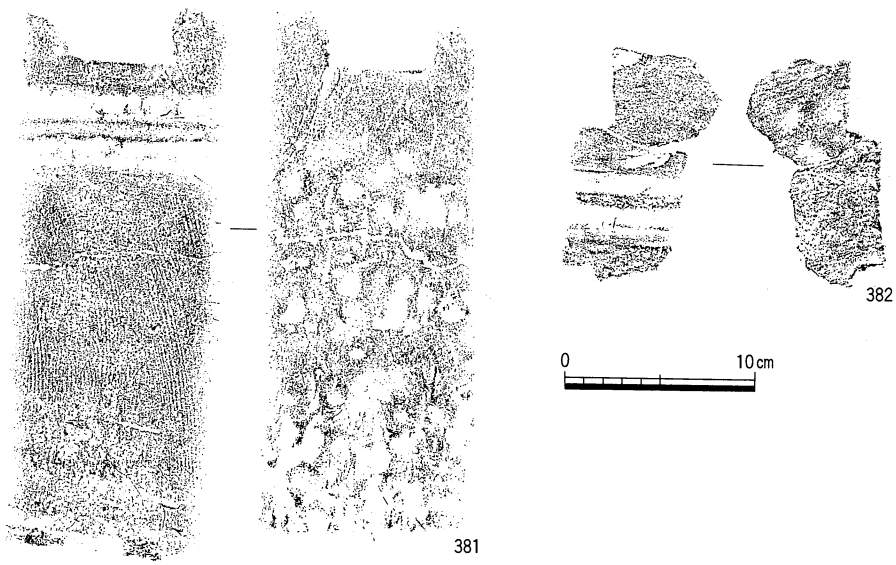


第74図　大形竪穴建物出土遺物１　土師器（１／４）

か。上半部が軽く外反する。371・372は高坏坏部。谷３資料に比べわずかだが屈曲部の鈍化傾向が進行しているように見える。しかしながら上半部はまだわずかとはいえ外反傾向を残す。373～375は高坏軸部。いずれも内面横ケズリが見られる。373・375では頂部に棒状刺突痕がある。しかし375では坏下半部がかなり丸みを帯びており，椀形に近い形状が



第75図　大形竪穴建物出土遺物２　円筒埴輪（１／４）



第76図　大形竪穴建物出土円筒埴輪拓影（１／４）

想定できる。小形丸底土器376は最大径がやや下がる傾向が見受けられる。377は肉厚で外面も指押さえの凹凸が顕著。ハケ調整は加えない。378は甕口縁部片。肥厚部はやや伸びる。379は直線的な口頸部形態から直口壷とした。端部肥厚はあまり間延びしていない。肩部外面の横ハケ調整と内面横ケズリはかなり丁寧。

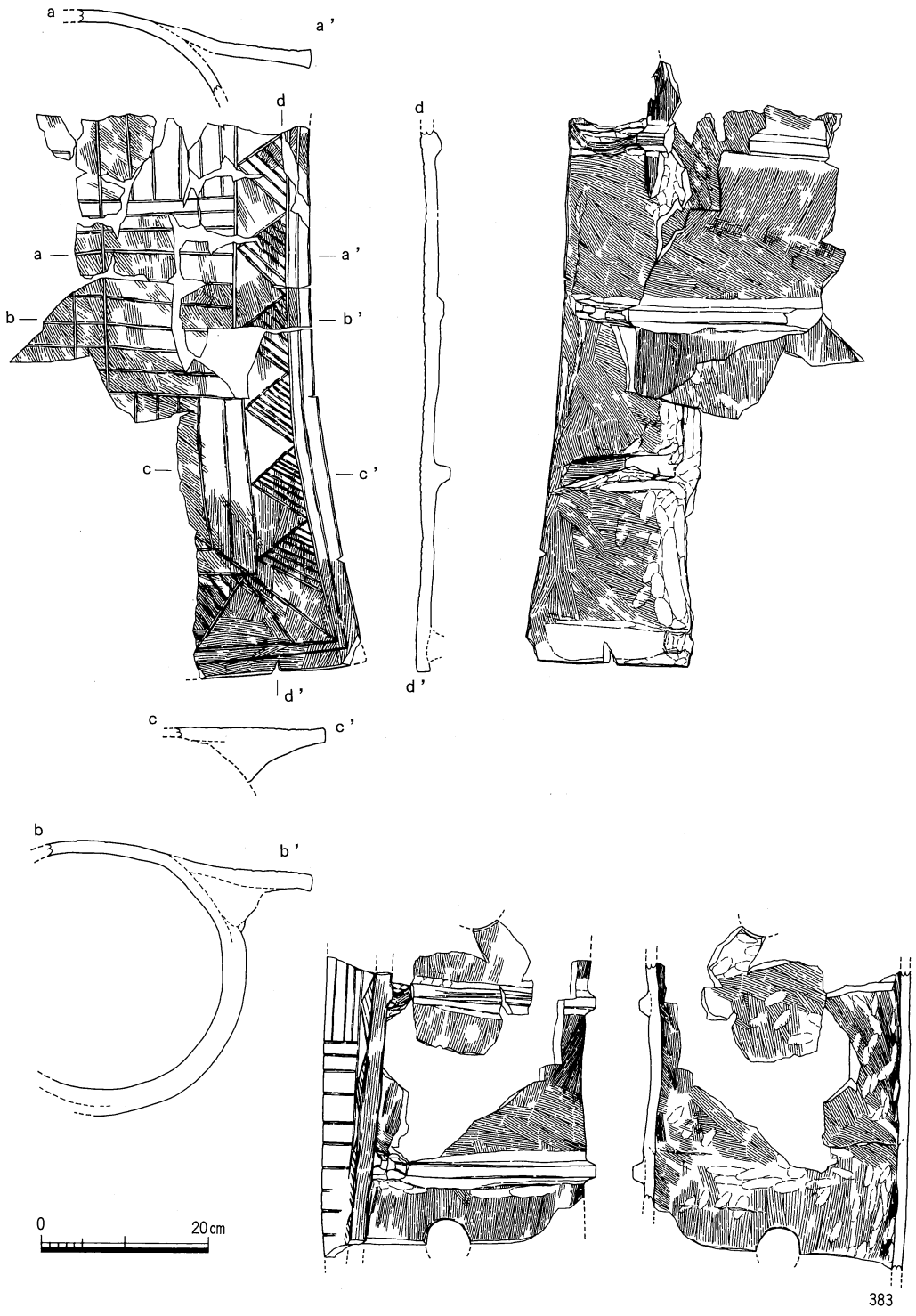
381・382は円筒埴輪。残念ながら本遺構に残された円筒埴輪はこの2点だけである。381は基底部に半円形透かし孔2方，2段目に長方形透かし孔4方を穿つ。突帯は整った台形を呈し器体との接着は丁寧。外面は縦ハケ調整をそのまま残し，内面は基底部では指押さえが顕著に残る。382は同一個体の可能性もあるが取りあえず別個に図化した。断面台形の突帯を付し，各段に長方形透かし孔がある。

383～390は盾形埴輪。383は盾面1/4弱と円筒部中位3段が残存する。盾面は下縁は直線的だが側縁は緩く外反する。おそらくコーナーに向かう斜線で全体を4分割し内区は縦横の並行沈線で格子状に区画し，外区側縁は内向の，下縁は外向の鋸歯文を配する。外縁は二重沈線で縁取る。円筒部はやや扁平な台形突帯を巡らし，推定隔段の側面の2方に円形透かし孔を穿つ。内外は縦基調のハケ調整に横ハケを加えるが，いずれも突帯最終調整前の施行である。円筒部を先に成形し，貼付した突帯の一部を切り取るか，当初から一部に貼付せずにその両側に長方形板を貼り足し盾面とする。裏面は突帯に継ぎ足すように補強材を横方向に渡す。盾面内外にもハケ調整を加える。

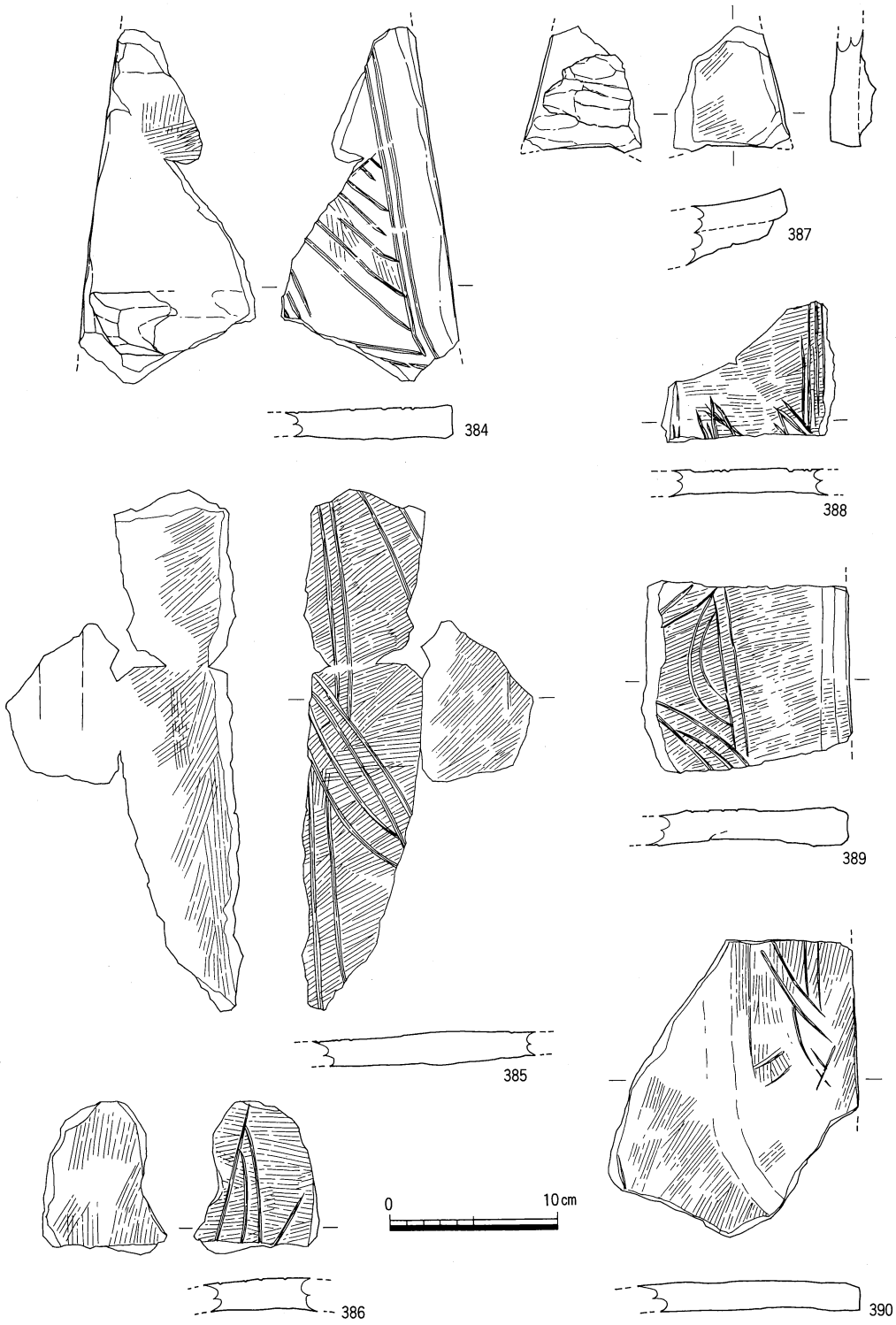
384は盾面のコーナー部片。外縁の二重沈線と外区の内向鋸歯文の一部が残る。裏面には下縁近くに補強材の剝落痕が横に伸びる。文様構図は同じだが下縁鋸歯文の方向から383と別個体と見なした。385・386・389・390は盾面の小片。いずれも小片で構図の全体像は不明だが，二重弧線を組み合わせた文様を持つ。同一個体片でもよいだろう。387はコーナーは鋭角に突出する。裏面には補強材の一部が残り，表面は荒れて文様の有無は読みとれない。388は平板な板材で表面に乱雑に線刻が見られる。取りあえず盾形埴輪の一部と見なしたが躊躇がある。

391～399は家形埴輪である。391は屋根頂部の大形片。両端の妻部分は欠落している。剝落痕から見て突出度の高い突帯を格子状に配置するらしい。外面棟方向のハケ調整，内面指押さえと指ナデ調整。392は小片ながら断面「へ」字状の形態から屋根材頂部片と推定した。頂部を挟んで棟方向の沈線が見られる。

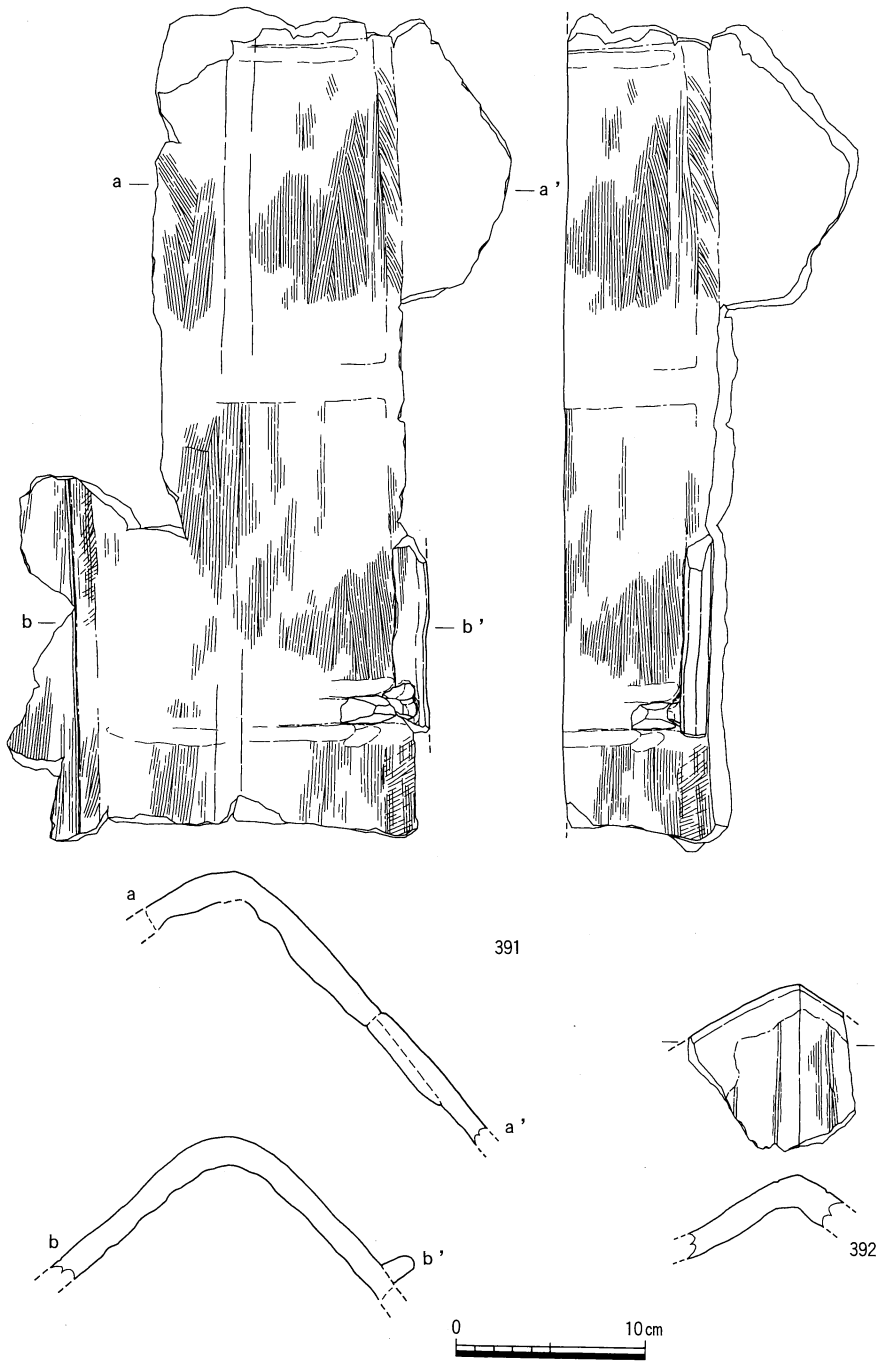
393は切妻形の屋根材。妻部壁体の一部まで残存する。妻部は深く切り落とし，端部に破風板を表現するが棟木は表さない。頂部にはやや斜行して鰭状の板を棟方向に貼る。外面



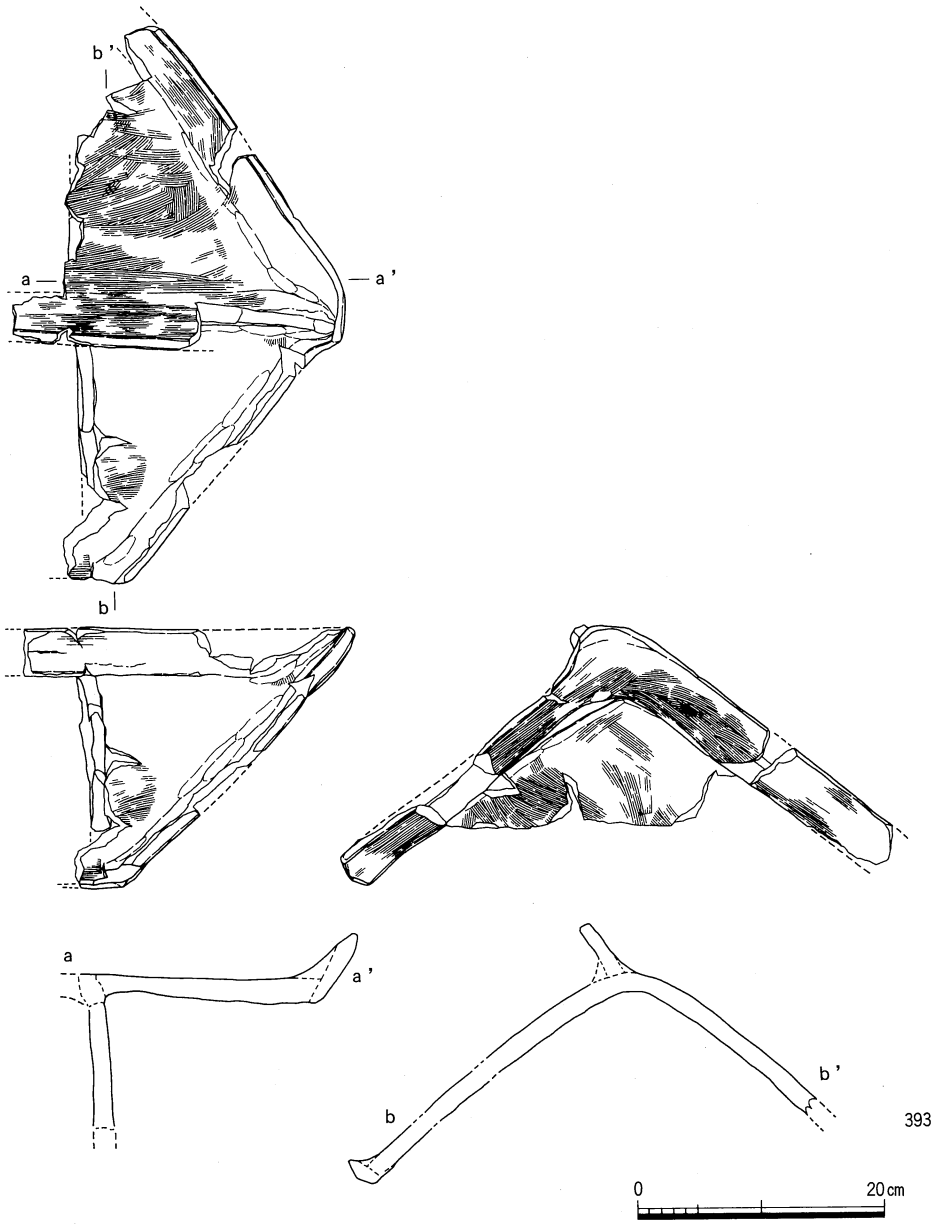
第77図　大形竪穴建物出土遺物３　盾形埴輪（１／８）



第78図　大形竪穴建物出土遺物４　盾形埴輪（１／４）

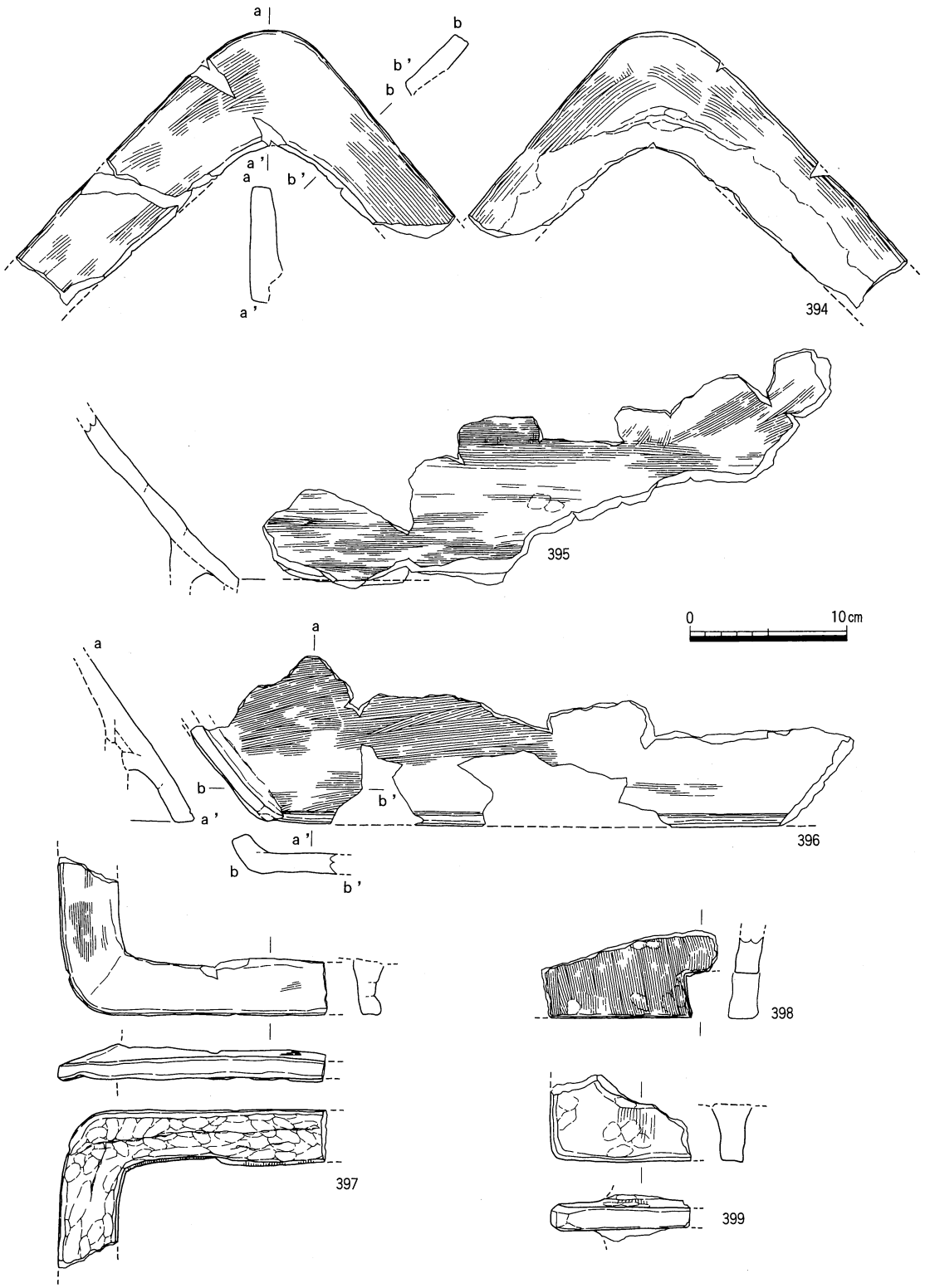


第79図　大形竪穴建物出土遺物５　家形埴輪（１／４）

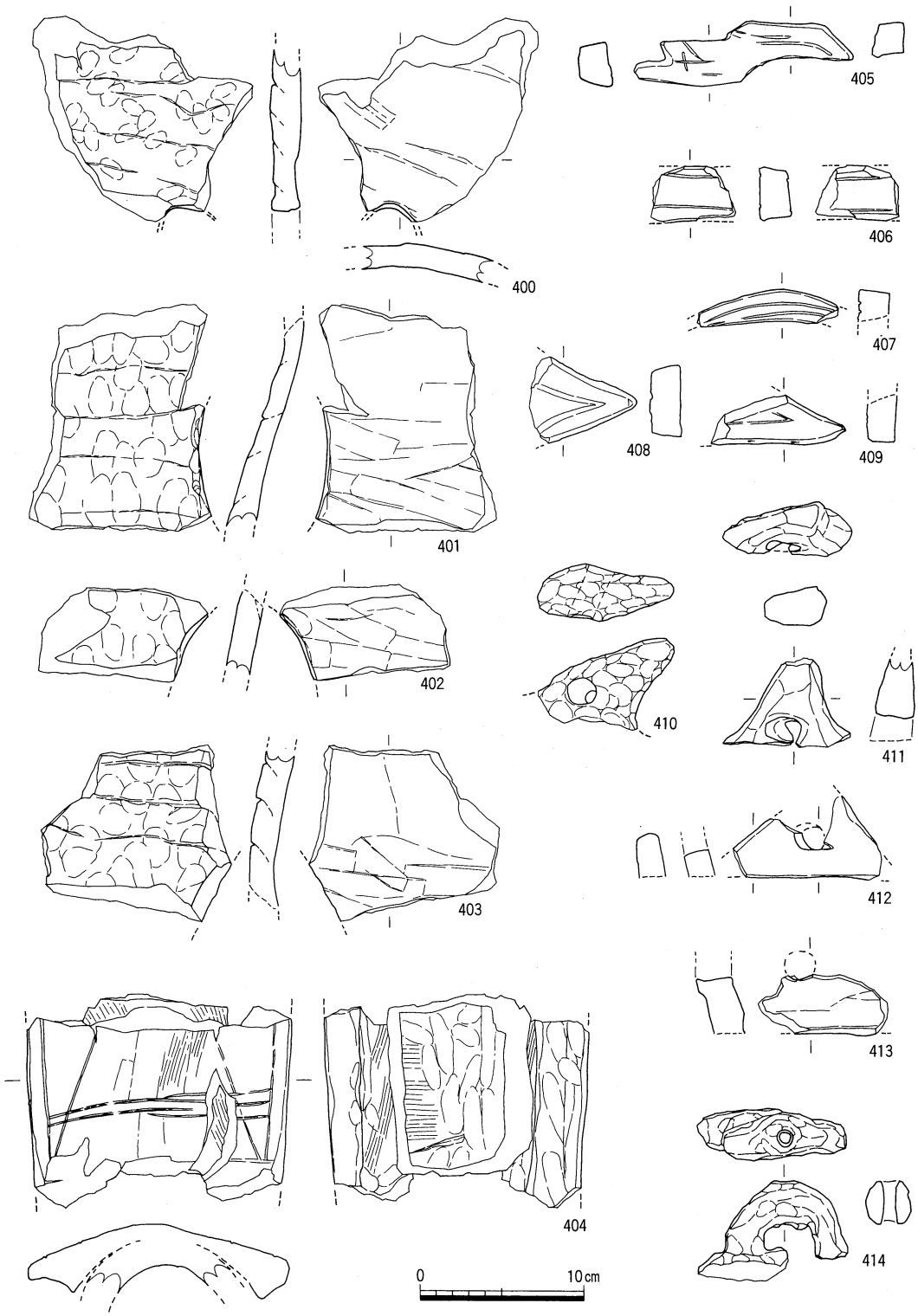


第80図　大形竪穴建物出土遺物6　家形埴輪（1／6）

ハケ調整，内面指押さえと指ナデ。394は破風板片。棟木表現の形跡はない。395は屋根材側縁部片，裏面に壁体の取り付き部分が残る。396は屋根材側縁部片。切妻形の端部から側縁下端が残る。妻部は小さく折り曲げて破風板表現とする。下端に接して沈線がある。裏面には壁体の剥落部が見える。397は壁体下部に取り付く縁側状の張り出し部分。上面は平滑でハケ調整も見えるが下面は接合痕すらとどめ指押さえの凹凸顕著。398は平板な形状で



第81図　大形竪穴建物出土遺物７　家形埴輪（１／４）



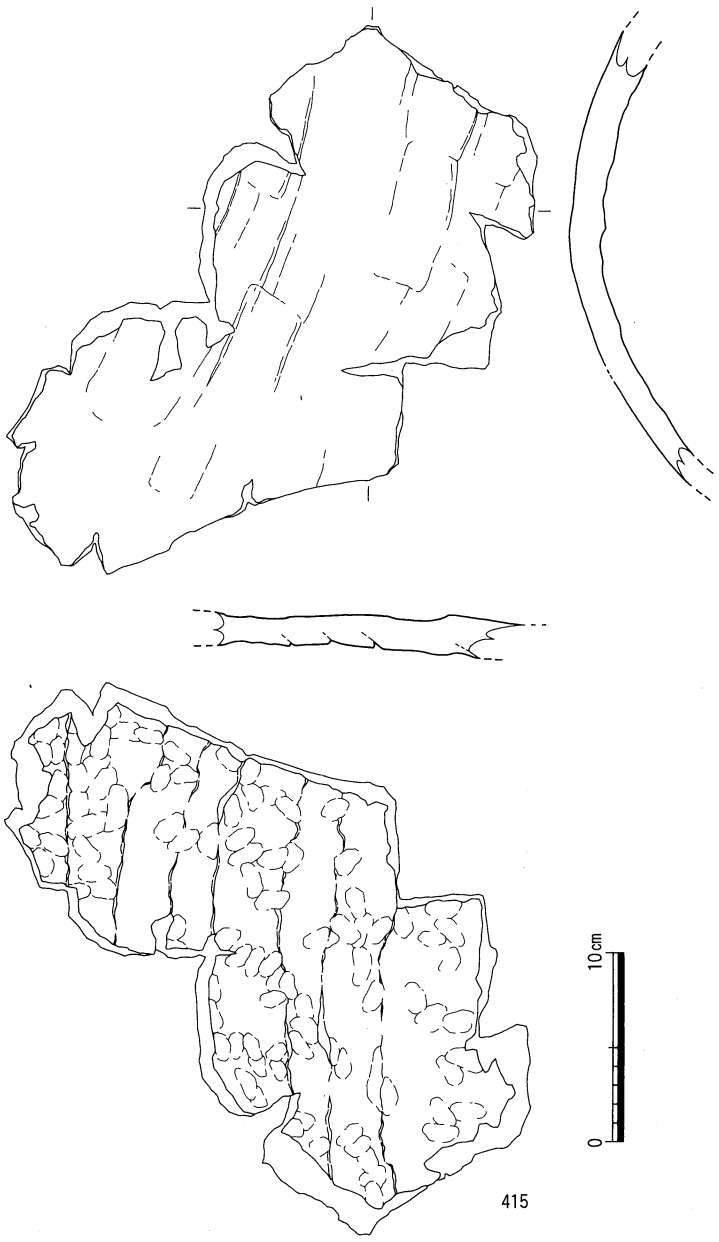
第82図　大形竪穴建物出土遺物８　不明埴輪（１／４）

矩形の刳り込みが見えることから家形埴輪壁体部片と見なした。下端か。399は壁体下部の縁側状張り出しのコーナー部。

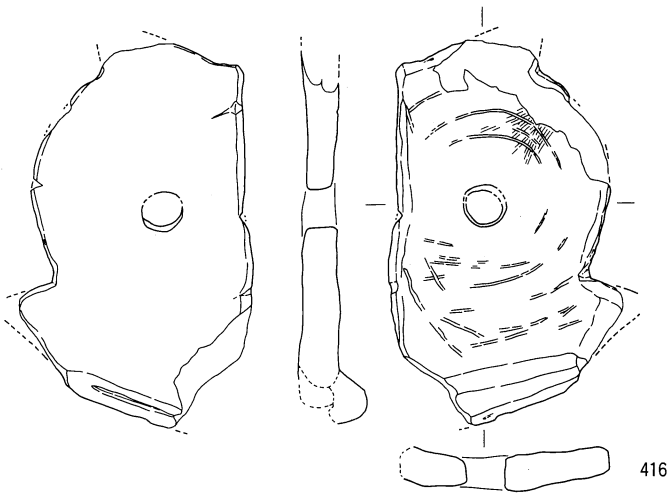
400～403，415は器種不明。一端に向かって緩やかに開く円筒形が想定できる。内面の粘土帯接合痕は非常に明確に残り，多くはその部分で分離している。円弧を描く大小の刳り込みの存在が観察できる外面は無刻の原体で叩き締めた形跡が残る。

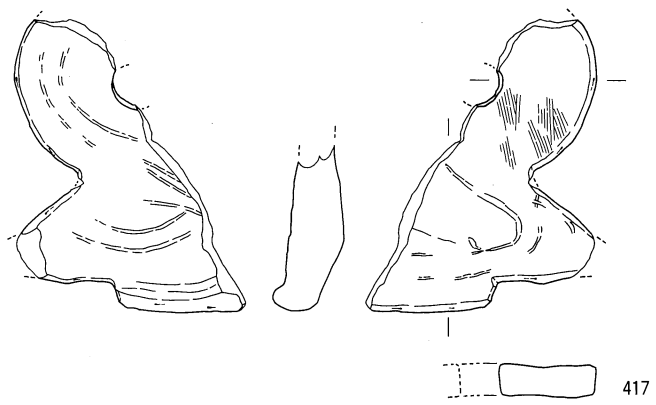
404は小形円筒の両側に鰭状の突起を付す。外表に線刻を見るが構図は不明。小形の盾形埴輪か。全体に肉厚である。405～409は飾り板片。406を除いて一面にだけ線刻があり，蓋形埴輪飾り板とは異なる。器種不明。411～413は不明棘状突起。下面に剝落痕があるがいずれもやや斜行して取り付く。側面に斜めに円孔を穿つ。410・411はやや肉厚で立体的。412・413は同様の特徴ながら平板な作りである。414は環状把手風で頂部に貫通孔がある。粗雑な作りである。

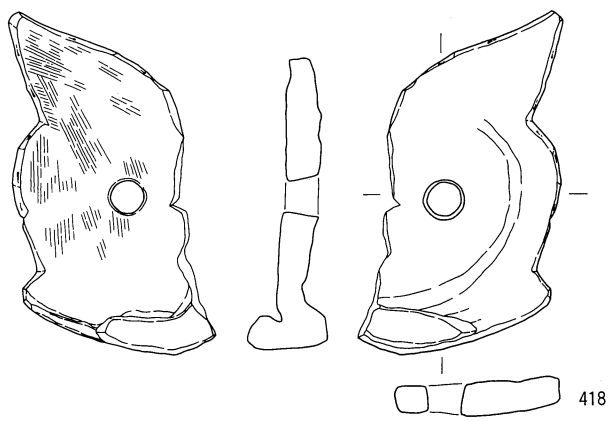
416～418は巴形に似た飾り板。円板の2方に棘状の突出部がある。中



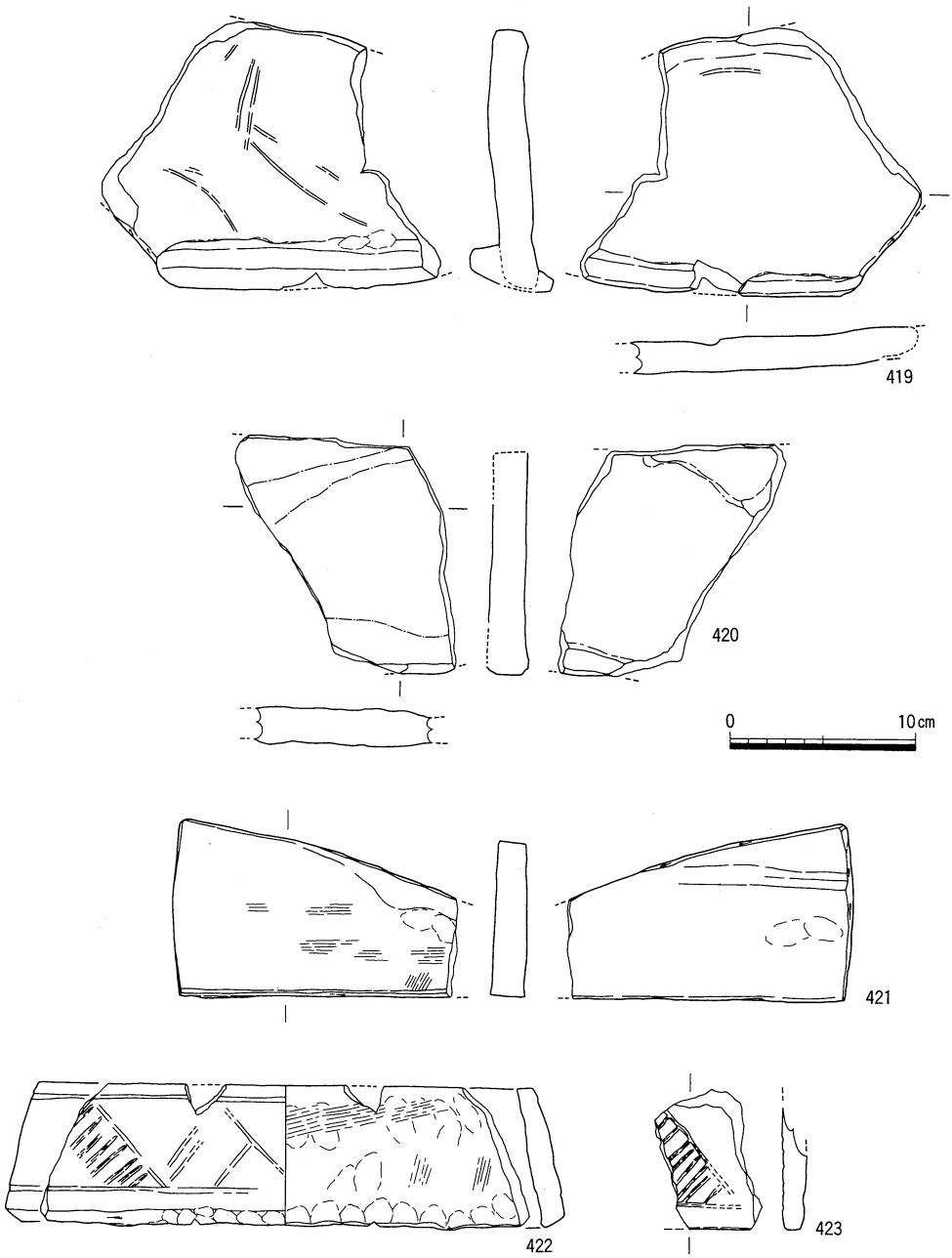
第83図　大形竪穴建物出土遺物9　不明埴輪（1／4）







第84図　大形竪穴建物出土遺物10　不明埴輪（1／4）



第85図　大形竪穴建物出土遺物11　不明埴輪（1／4）

央には円孔を穿ちその周囲には不明確ではあるが両面とも同心円状の沈線が配されるらしい。一方の突起の外縁は粘土帯を足して肥厚させる。また直線的な側縁にはいずれも剝落痕が認められ別材に組み合わせていたことが判る。419は円孔を欠き，棘状突起も確認でき

ないが，一方の側縁に粘土帯を貼り，両面に線刻の一部が残る。416～418に類似した飾り板の可能性がある。420は不明板材。表裏に剝落痕が見える。421は台形の板材で3方が端部となる。器種不明。帯状品422・423は同一個体でもよい。両縁に配された並行沈線間に鋸歯文を充塡する。上下端に接合痕はなく，何らかの形象埴輪の部材であろうが不明。

424～453は組み合わせ箱形土製棺身材。424は唯一全長の判る側板材。全長95cm，幅10cmを測る。残念ながら基底部のみが残存するだけである。今岡古墳出土の同様の箱形土製棺を参考にすると，棺身は側板・小口板を別作りとする。また側板そのものも蓋材と同様に2個の空芯箱形品を組み合わせる。2個の側板材の合せ口は一方の小口に突起を設け，他方を開口して，そこ差し込む構造を取る。本品では片方の小口部をふさがず開口している。また今岡古墳資料では上面に5カ所，小口に2カ所，側面小口際に1カ所大形円孔が穿たれている。空芯構造のため焼成時の破裂防止を意図した空気抜き孔と考えれる。本品では同様の円孔が底面中央部に1カ所だけ穿たれておりかつそれもかなり小さい。更に今岡古墳資料では内部に水平方向に2段補強板が組み込まれている。本品ではその部分まで残存していないが，遊離した補強板片が多数出土しているので同様の構造は想定できる。またそれの剝落痕跡も観察できないので，装着されているとすれば水平方向となろう。外面は全体に主軸方向のハケ調整を加え，内面は同方向の指ナデが基調で部分的にハケ調整を見る。底面と側面の一部には概ね6cm間隔で軸と直交する方向に接合痕が観察できる。

425は側板片。本体のみで長53cm残存する。空芯構造で残存する小口部には長3.5cm程度の突起が作り出されている。もう一枚の側板材との合わせ部であろう。外面ハケ調整，内面指押さえ・指ナデ。やはり軸と直交方向の接合痕が側面で観察できる。426も側板片。幅11cmを測る。小口には長3.5cmの突起を設ける。外面ハケ調整で内面は指押さえ顕著。

427～435は側板底面（上面でもよい）片。幅11cm前後。427・428～430，434では底面の円孔が観察できるがいずれも径3cm未満と小さい。外面は主軸方向のハケ調整を基調として内面は同方向の指ナデを見る。接合痕は軸方向と直交して観察できる。

436～441は身材で突帯貼付が観察できる資料である。側板材の可能性が高いが小口板の一部を含む可能性がある。436は下底ないしは上底から4cmの部分に水平方向に大形でやや扁平な矩形の突帯を付す。調整の方向は異ならないが貼付前後に二度のハケ調整を行っていることが剝落面の観察から判る。437・439・440は扁平矩形の大形突帯を付し，ハケ調整を加える。438は突帯下面に割り付け線と見られる浅い沈線を配する。接合痕とハケの方向からすればこの突帯は縦方向かもしれない。441はやや高く下底ないしは上底から6

第86図　大形竪穴建物出土遺物12　箱形土製棺身材（1／6）

第87図　大形竪穴建物出土遺物13　箱形土製棺身材（1／4）

cm強の位置に突帯を付す。やはり剝落面に粗雑な割付線が見える。

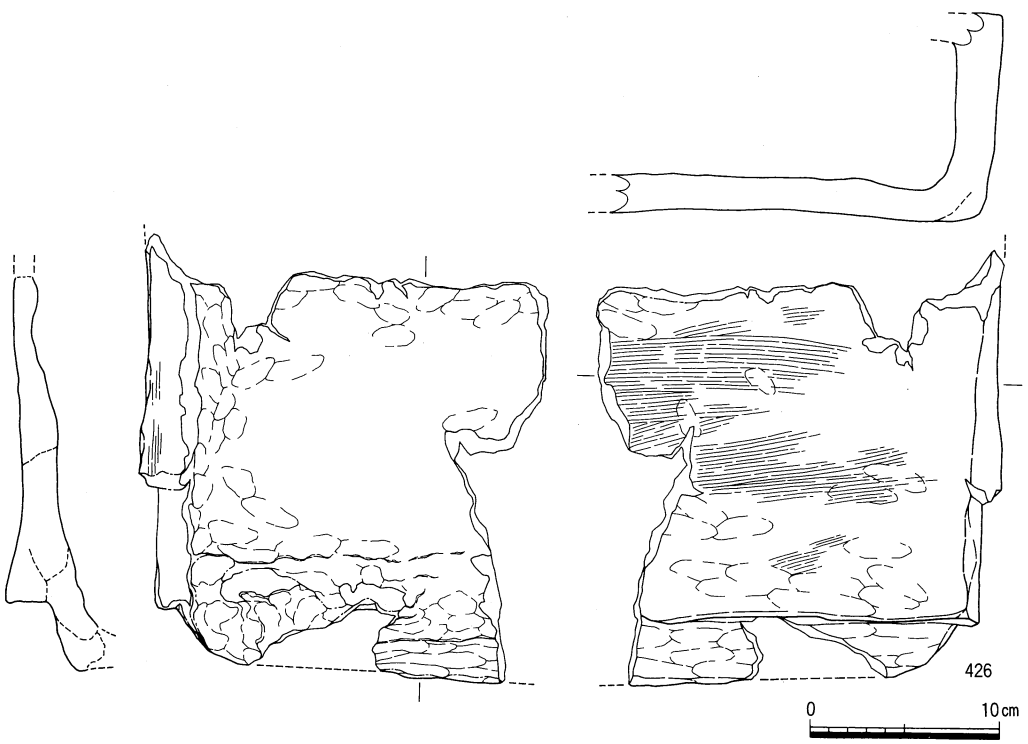
442～446は側面部の大形片。小口材か側板材かは明らかにし得ないが突帯はない。調整・接合痕方向は他例と異ならない。443は内面に水平方向の剝落部が見える。補強板の充塡

位置であろう。444も小口板あるいは側板の側面部分と思われるが，縁できれいに剝落している。

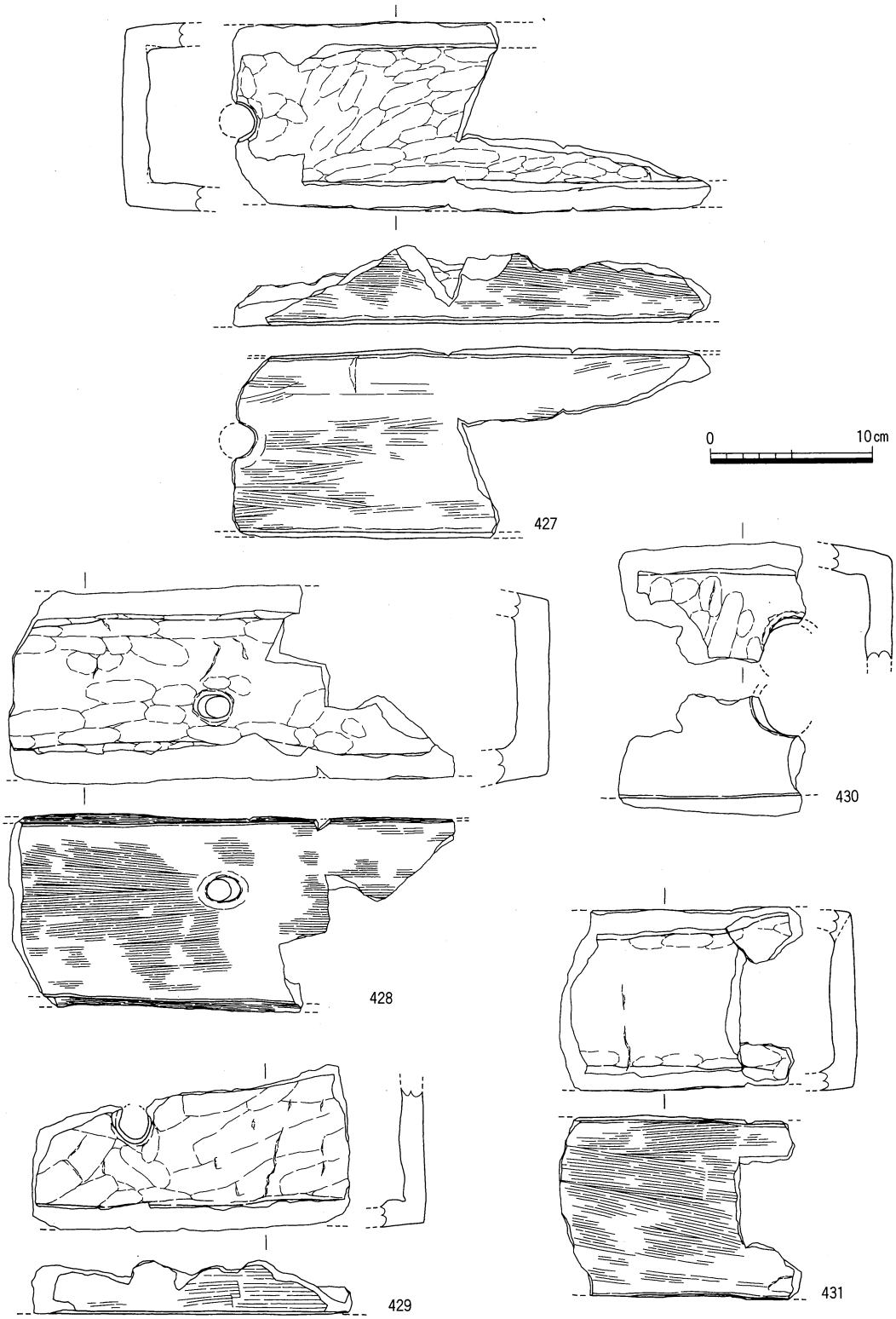
447はやはり側面部の大形片。梯子段状に扁平な大形突帯を付す。剝落面の観察から突帯下面の割付線の存在が判る。447上図下端は帯状に変色部分が見られ剝落部とも見えるが，非常に整った仕上げから開口部の可能性もある。また裏面中央に帯状の剝落部分が見える。補強板充塡位置であろう。

448～453は身材内部に貼った補強板。表裏面とも指ナデによる粗雑な調整。身材内壁に接合する側縁は粘土塊を足すなどして厚く作る。448・451・452では身材底面に穿たれたのと同様の小円孔を見る。これらは今岡古墳例や身材内面の剝落痕等から水平方向に貼付されたものと考えられるが，最長の448でも長31cmに過ぎない。2～3枚の板を継いで1段分の補強材としたのであろう。

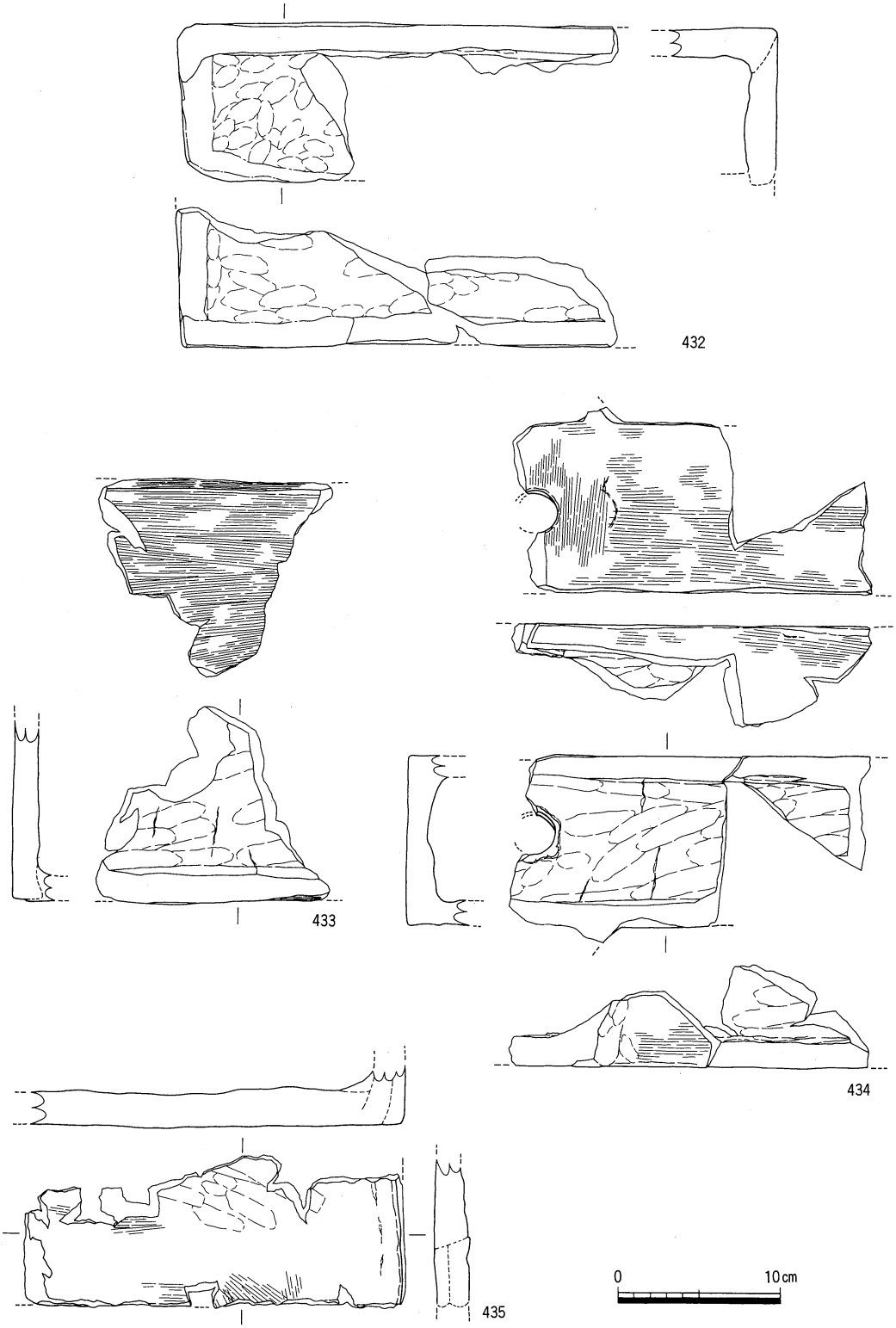
454は鞍形を呈する部材。径5cm前後，長さ20cm内外の棒状粘土塊を継ぎ足して浅いU字形の形状を作る。外縁はやや幅広く平坦に作り出す。内縁もそれに準じて比較的平滑で



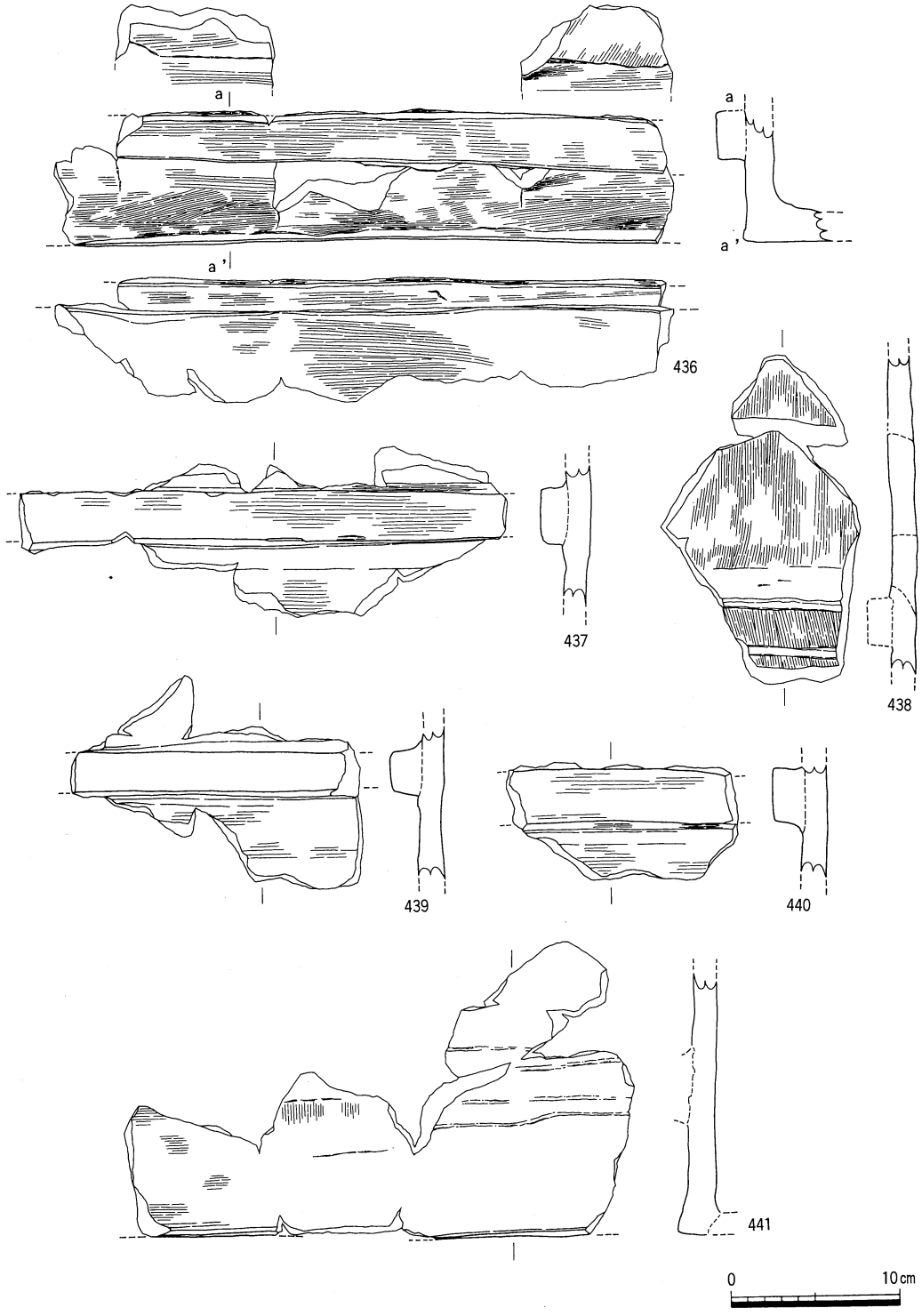
第88図　大形竪穴建物出土遺物14　箱形土製棺身材（1／4）



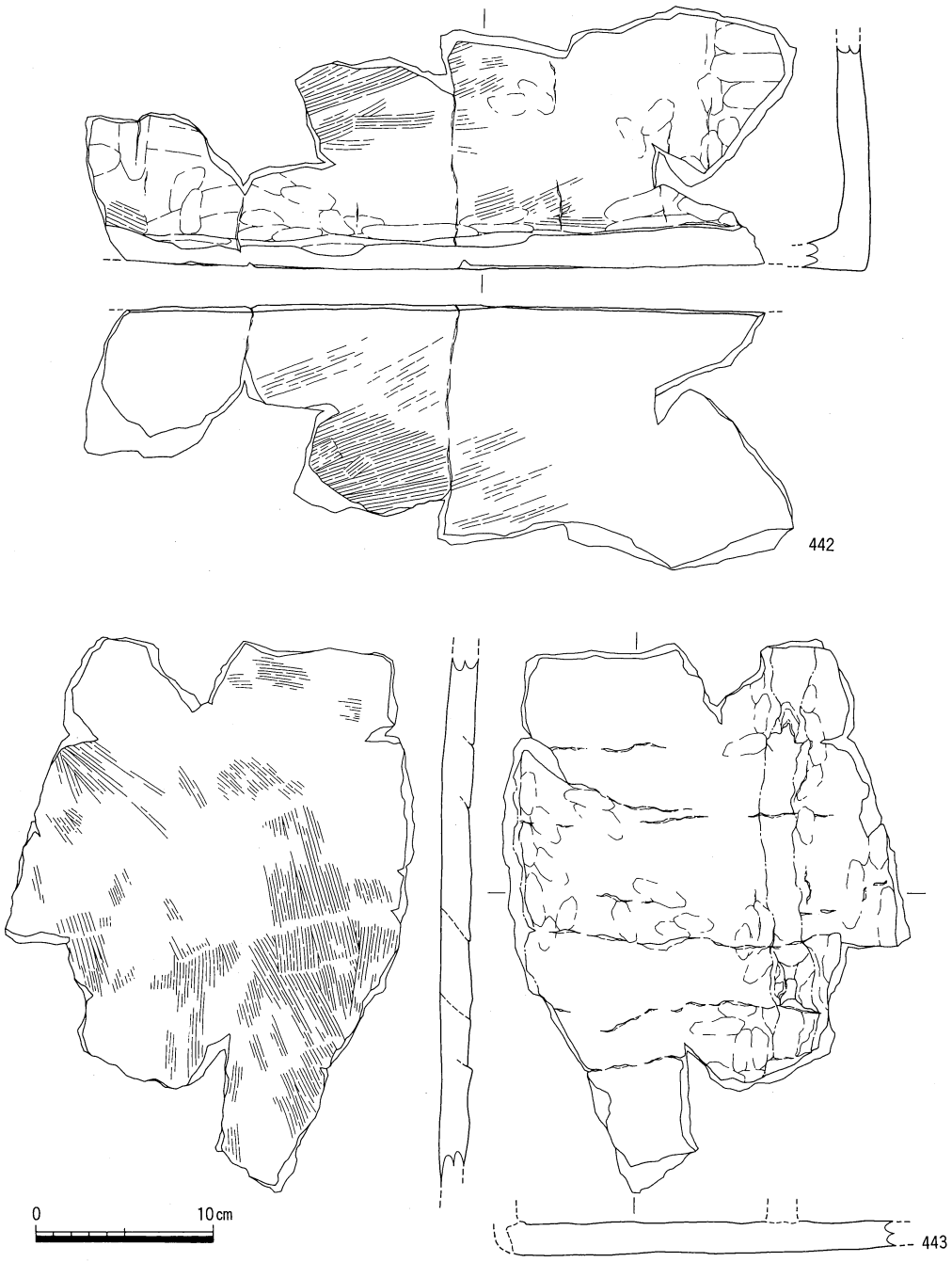
第89図　大形竪穴建物出土遺物15　箱形土製棺身材（1／4）



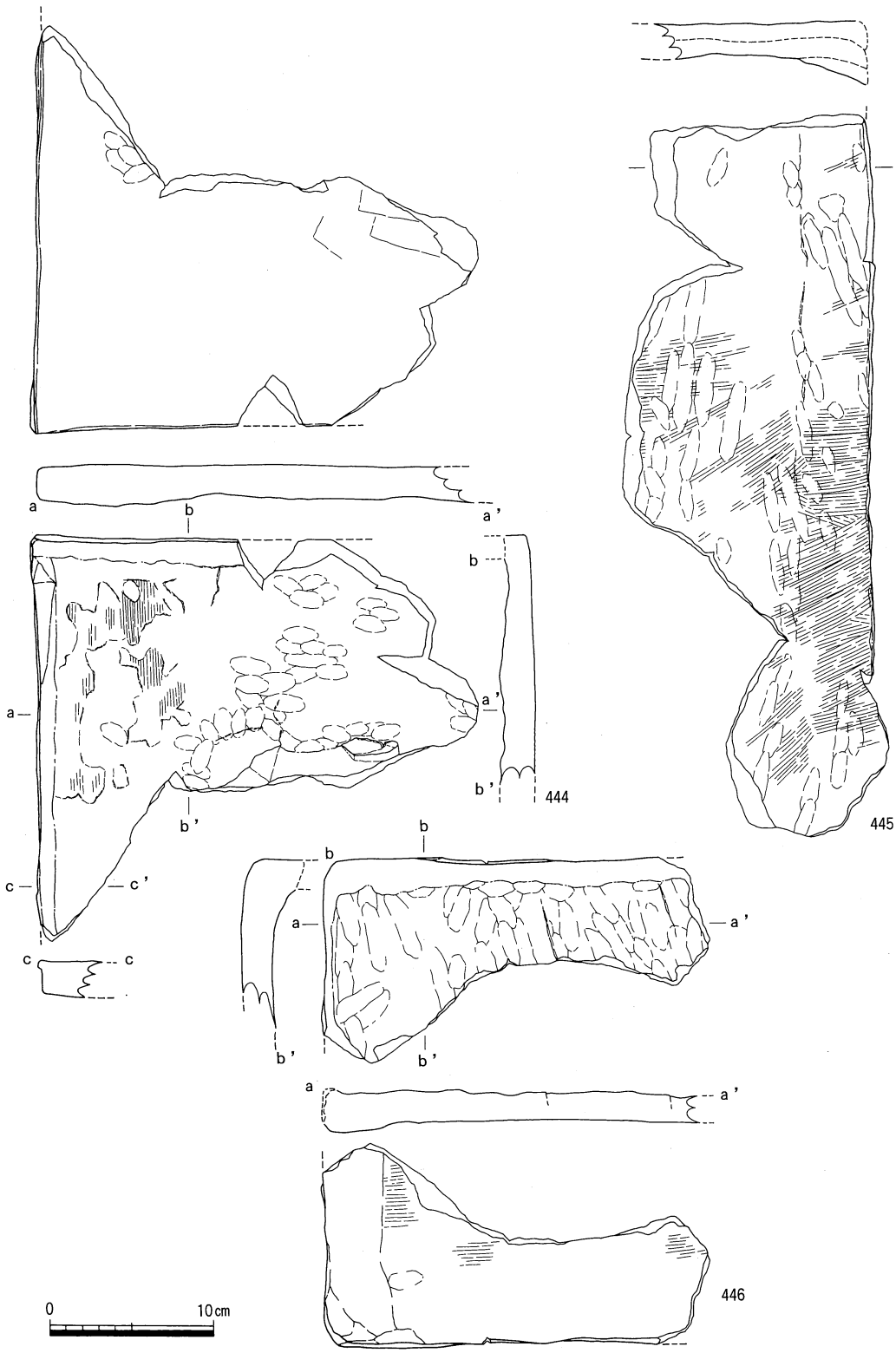
第90図　大形竪穴建物出土遺物16　箱形土製棺身材（1／4）



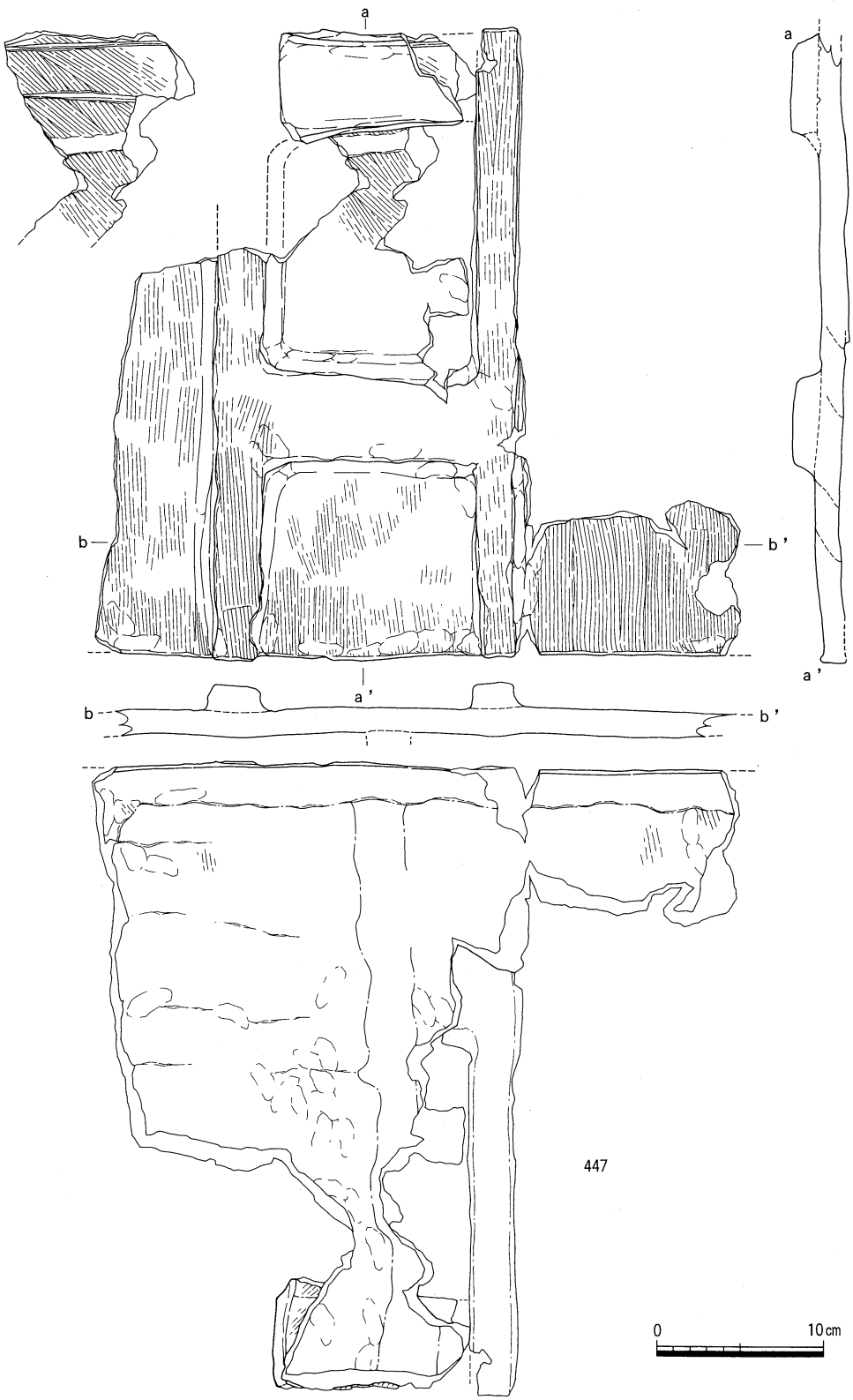
第91図　大形竪穴建物出土遺物17　箱形土製棺身材（1／4）



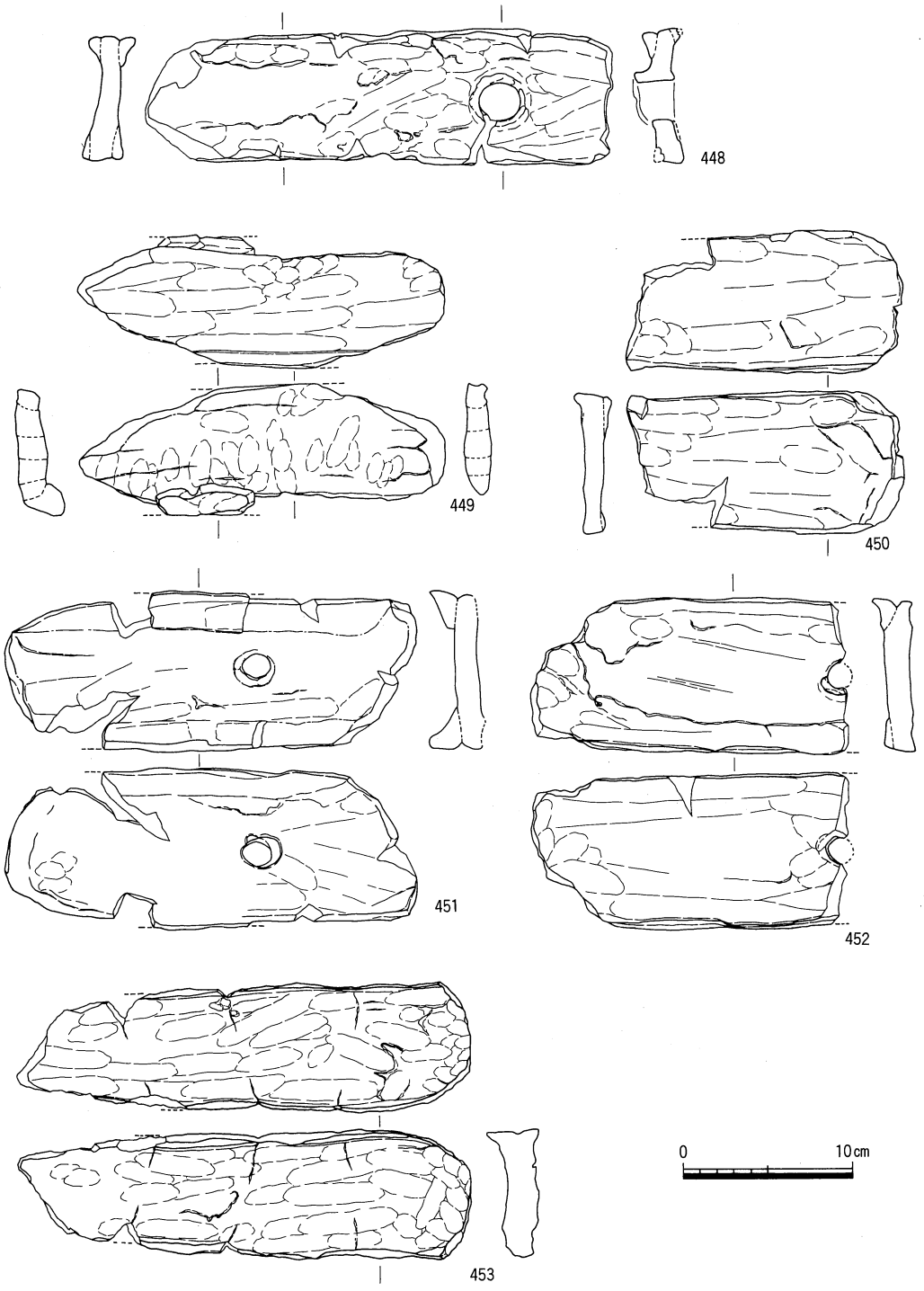
第92図　大形竪穴建物出土遺物18　箱形土製棺身材（１／４）



第93図　大形竪穴建物出土遺物19　箱形土製棺身材（1／4）

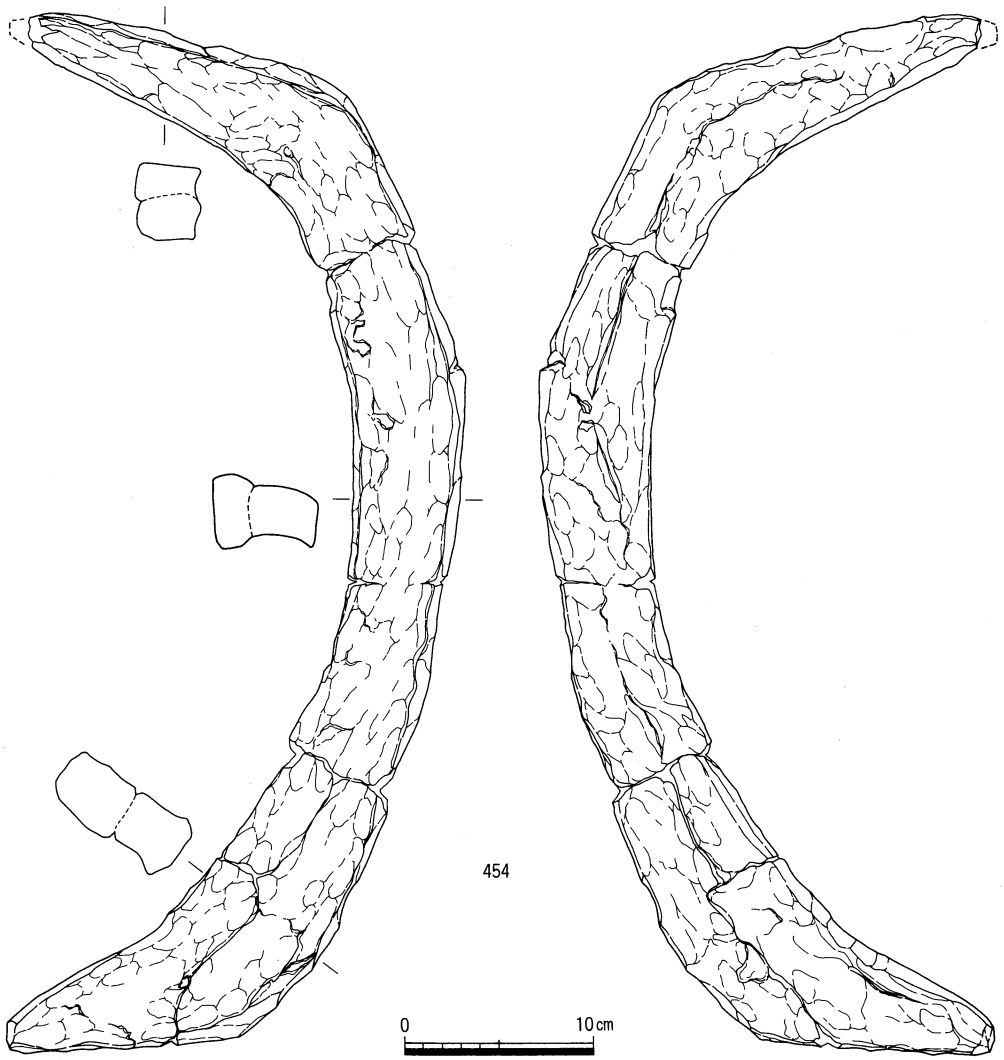


第94図　大形竪穴建物出土遺物20　箱形土製棺身材（１／４）



第95図　大形竪穴建物出土遺物21　箱形土製棺補強材（1／4）

あるが側面の整形は極めて粗雑で接合痕を顕著にとどめる。この様相からいずれかの部位に関わる補強材であることが予想できる。形状からは小口板上部の可能性がある。後に見るように小口板も内外二重壁の箱形構造を有するのでその上端部の充塡材でもよい。あるいは組み合わせ箱形土製棺の蓋材が今岡古墳例と似た断面蒲鉾形を呈するのであればその内面に渡す肋骨状の補強材の一つでもよい。



第96図　大形竪穴建物出土遺物22　箱形土製棺補強材（1／4）

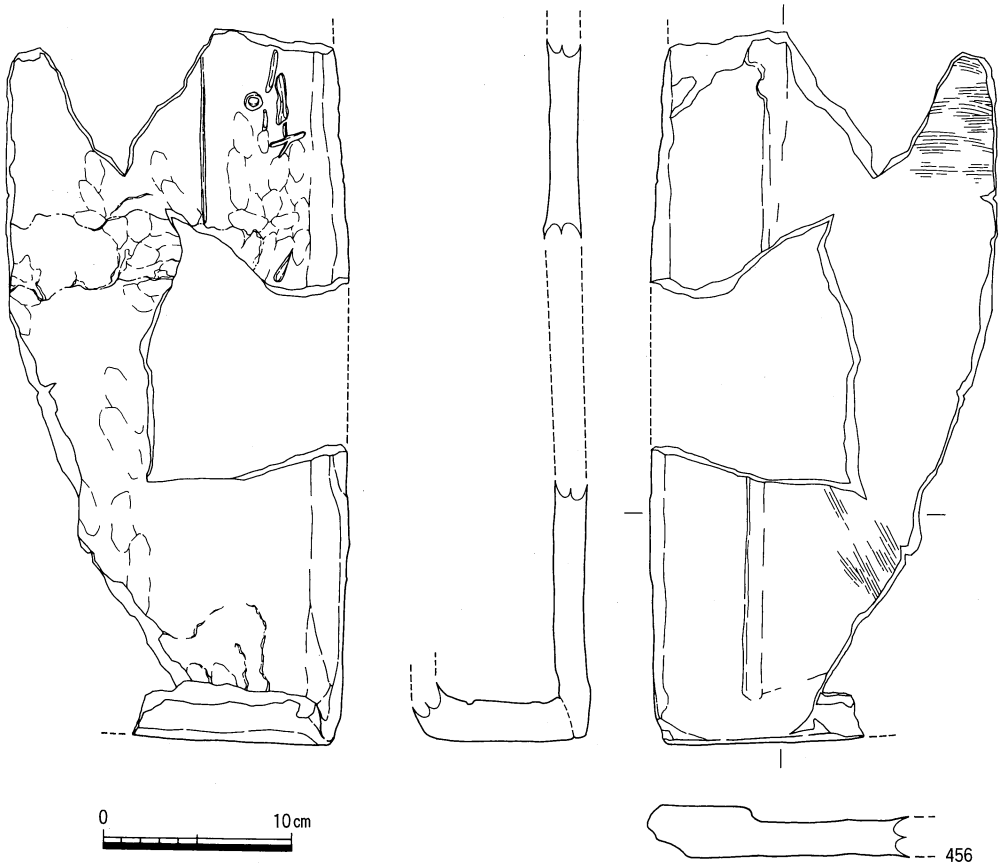
第97図　大形竪穴建物出土遺物23　箱形土製棺小口板（1／4）

455は幅48.5cm，高さ21cm，厚さ10cmの箱形品。上下面の一方には明瞭な剝落痕が認められふさがれていたことが判るが，他方は開口していた可能性がある。材の寸法からみて小口板下半部の可能性が高い。今岡古墳資料では蓋材断面形に合わせ，小口板は側板より突出して上半部は半円形を呈する空芯箱形構造で下面は開口している。一方，焼成土坑土製棺（23）では小口上半部は蓋と一体化している。本品の場合，接合関係は確認できない

ものの本遺構で共伴する小口板上半部片（457）が，蓋材と一体化している可能性が高い事が参考になる。想定される側板材の器高よりかなり低くなるが，下面もしくは上面が開口した単純な箱形となる可能性が高いであろう。

表裏の側板材には水平方向の接合痕が顕著に残り，幅５cm程度の粘土板を並列的に連結して各面を整形していることが判る。片方の端面は粘土板を二重に貼る。ほぼ中央の内面には縦方向の剝落痕が残り，縦に補強材を充塡していたらしい。また内面の帯状剝落痕の先端部分に刺突痕が認められる。補強板貼付箇所の目印か。外面横基調のハケ調整で局部的に縦方向のハケ調整を加える。内面は指ナデで仕上げるが，ごく一部には横ハケを見る。

456は幅38cm以上，高さ18cm以上，幅9.5cm前後の箱形品である。455と同様の小口板であろう。やはり上面か下面は開口する。同じようにほぼ中央部近くの内面に縦方向の剝落痕がある。また同様の円形刺突痕が確認できるが剝落痕位置からはややずれる。外面ハケ



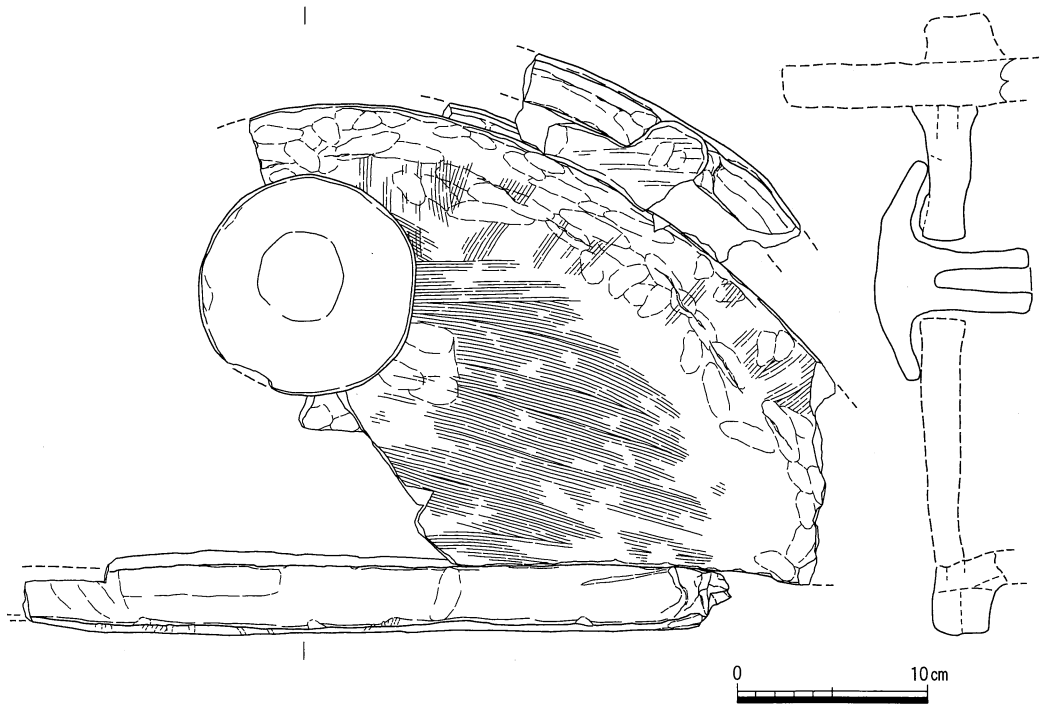
第98図　大形竪穴建物出土遺物24　箱形土製棺小口板（１／４）

調整，内面指押さえ・指ナデ。開口部は肥厚して外面に鈍い隆起帯を持つ。

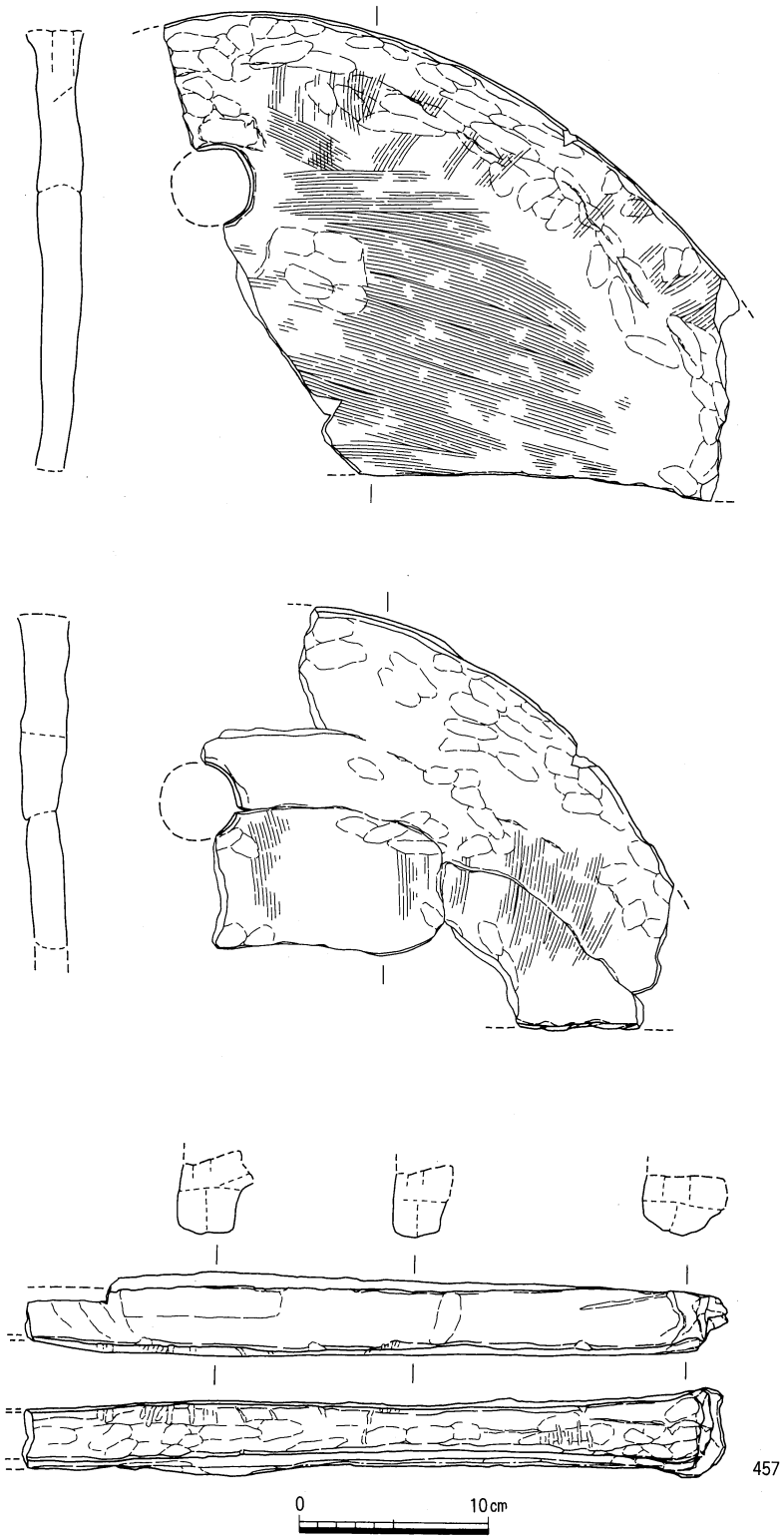
457・458・459は接合関係にあり３者で組み合わせ箱形土製棺蓋材小口部を形成すると考える。457は破損しているものの半円形と推定される板２枚と棒状品からなる。出土状態を参考に復元すれば，半円形板２枚で一定の間隔を開けた表裏の板をなし，棒状品は表板下縁に水平に取り付く。半円形板は表裏板とも中央部上縁寄りに径４cm弱の円孔を穿っており，この部分に458茸状土製品を装着していたことが出土状態から復元できる。外側半円形板の上縁は内外に張り出し気味に丁寧に平坦面を作り出すが，下縁は単純に納める。内外面にはハケ調整が認められる。内側半円形板も同様の形状だが，上縁の形状はやや粗雑である。内に向く側には部分的にハケ調整が残存するが，外面は荒れて確認できない。棒状品は指押さえが目立つが比較的平滑に仕上げている。

458は大きく傘を開いた茸形を呈する。中空の茎部を半円形板中央の円孔に挿入していた。類品は今岡古墳資料にも認められる。装着時に露呈する笠部外面は平滑に仕上げるが，茎部は指押さえの凹凸が顕著となる。

459は蓋材端部片。緩やかに弧を描く板状品で外表には縦横に配された大形突帯の一部が残る。内面には横方向に剥離痕跡が観察できる。この部分に表側半円形板上縁が接合する。



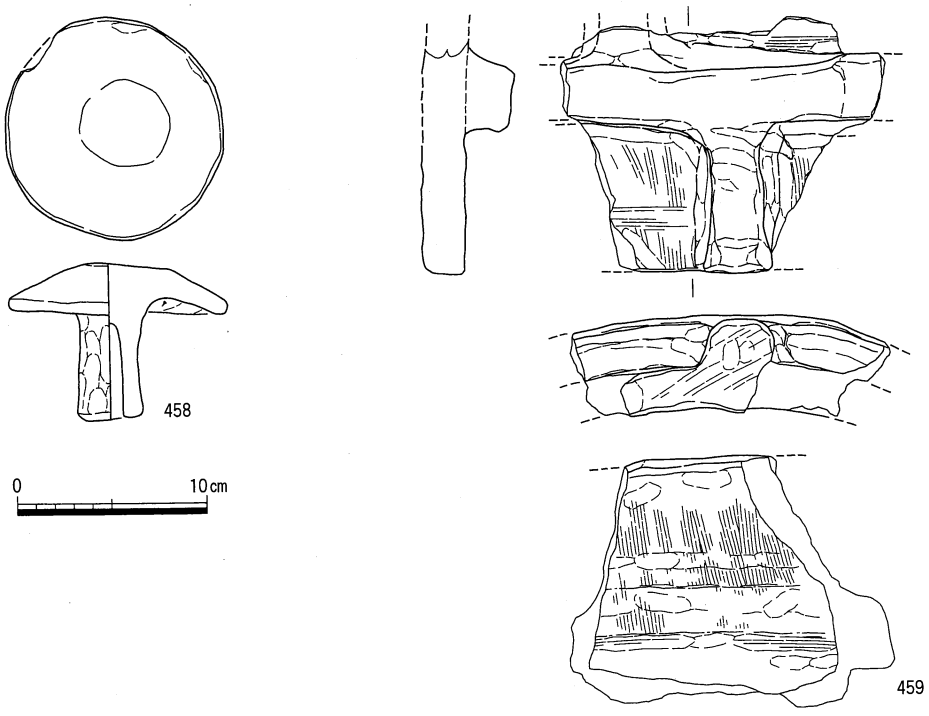
第99図　大形竪穴建物出土遺物25　箱形土製棺蓋材小口部復元図（１／４）



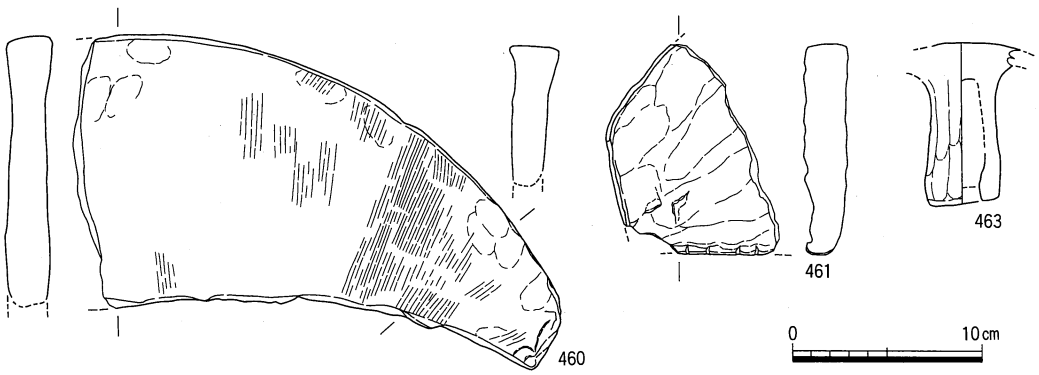
第100図　大形竪穴建物出土遺物26　箱形土製棺蓋材小口部材（1／4）

内外にハケ調整が残る。

さてこれらは第99図に示した接合関係が想定できる。表側半円形板は蓋材端面より約6cm内側に取り付く。心材の厚みから想定すると内側半円形板との間隔は10cm以内と予想できるが蓋材がその部分まで残存せず検証できない。下面は棒状品に続く板によってふさがれるらしい。したがって焼成土坑土製棺蓋材と同じく，二重壁構造の小口部をなす事が予



第101図　大形竪穴建物出土遺物27　箱形土製棺蓋材小口部材（1／4）

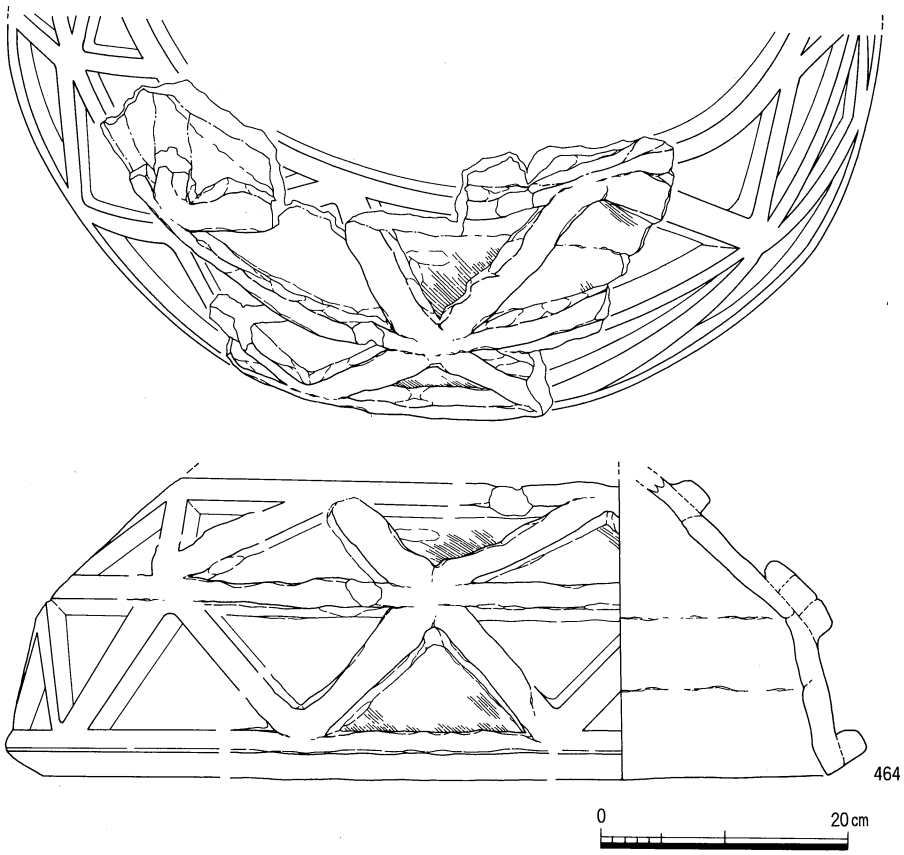


第102図　大形竪穴建物出土遺物28　箱形土製棺蓋材小口部材（1／4）

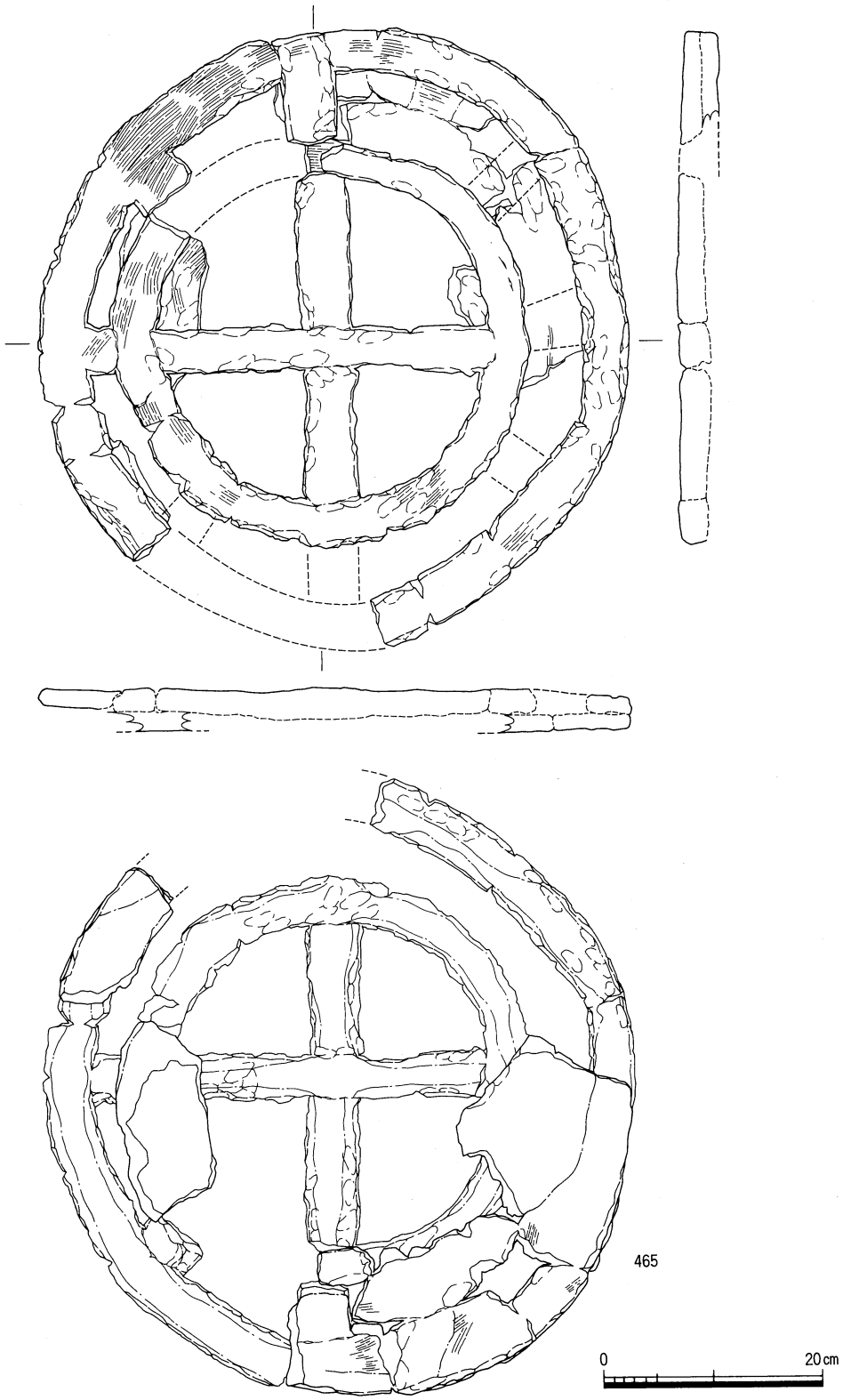
想できる。幅60cm前後，高さ31cmと復元できる。また下縁は棒状品がおそらく両側端まで及ばず下縁は両側が８cm前後ずつ一段窪む。身材小口と推定される455・456の開口部を上に向ければ，この両側の窪みをその開口部側端小口に持たせ掛けるようにして本材と結合することも可能であろう。

460・461は半円形の板材である。460では下縁も緩く弧をなすことや円孔が見られない点で異なるが，上記した457同様の小口板の一部の可能性がある。461では下縁にやや乱雑な刻み目を見る。463は458同様の茸状土製品の茎部であろう。中空で外面は指ナデ調整。

464は円筒形ないしは割竹形土製棺の小口部蓋材。本品の形態では円筒形・割竹形どちらの棺体でも不都合はない。口径68cm推定高30cm弱。ややいびつだが概ね半球形を呈し，外表には端部を含めて横帯３段と連続山形帯２段分の突帯が残る。今岡古墳箱形土製棺蓋材や本遺跡の割竹形土製棺の突帯配置と共通する。器体の外表には斜方向のハケ調整が部分



第103図　大形竪穴建物出土遺物29　円筒形土製棺小口蓋（１／６）

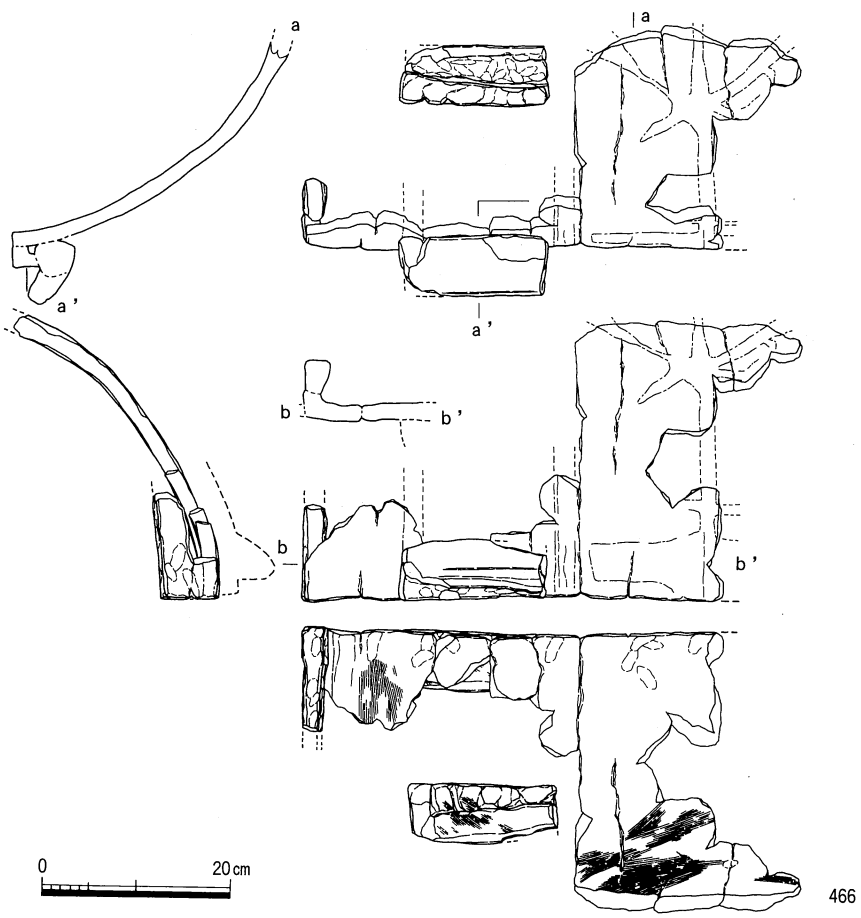


第104図　大形竪穴建物出土遺物30　割竹形土製棺小口蓋（1／6）

的に残存する。内面はナデ調整か。５～７cm間隔で水平方向に接合痕が観察できる。端部の横帯は大形矩形を呈するが，他はやや扁平でいずれも側縁に指押さえの凹凸が顕著に残る。また山形帯は１本の粘土帯を折り曲げつつ貼付するのではなく，棒状粘土を斜帯ごとに貼付している。

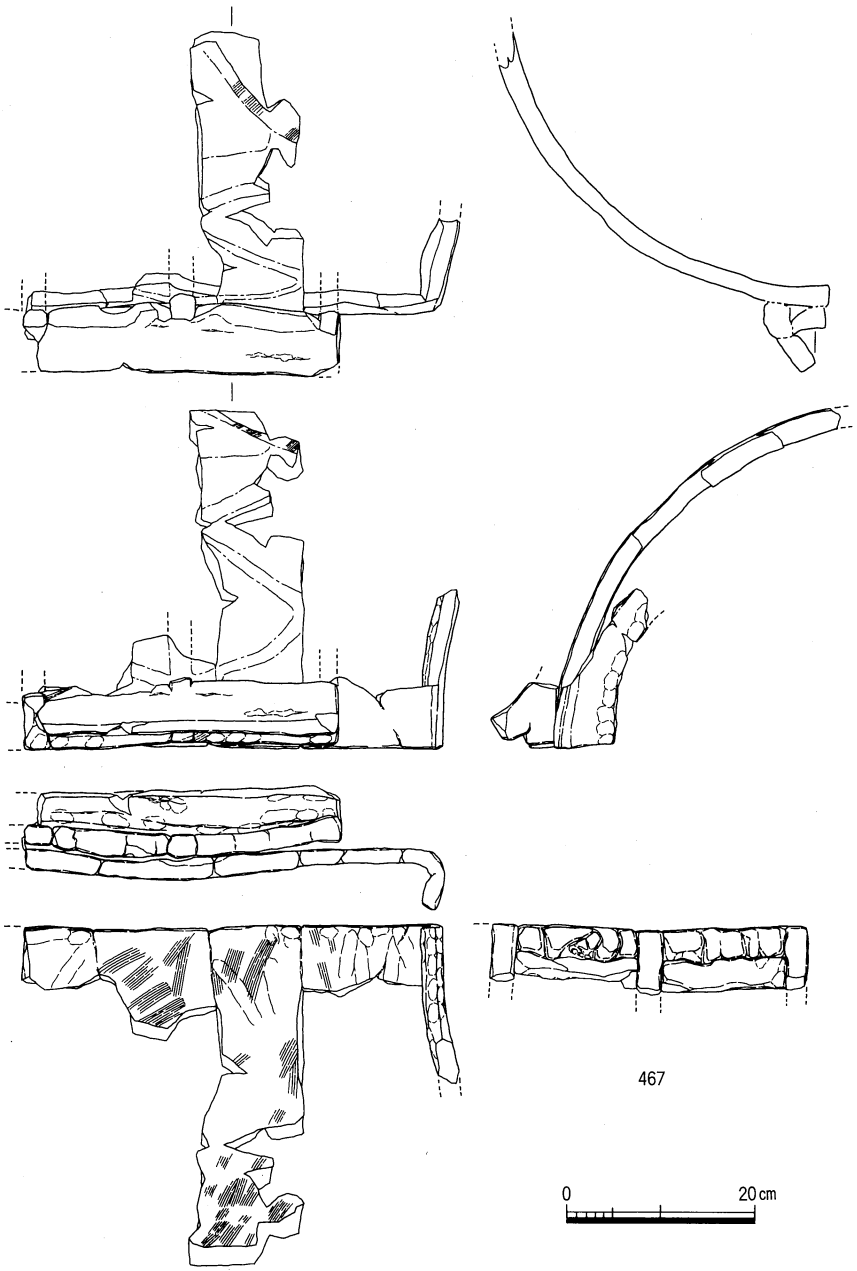
465は割竹形土製棺小口板と想定する径53cm，突帯部分を含めて厚３cmの円盤である。円盤本体は部分的に残存するだけだが，表面の突帯配置はほぼ残存する。外縁と中程に二重の同心円を配する。更に内円は十文字に突帯を渡し，内円と外円は放射状に配置された８本の突帯で連結する。裏面に突帯その他は認められない。裏面は剝落して調整不明。表面は突帯貼付前後に２度のハケ調整がある。突帯は他土製棺資料のそれに比べかなり扁平で側縁を中心に指押さえの凹凸を顕著にとどめるなど粗雑な作りである。

形状と特異な突帯配列から，まず円筒形ないしは割竹形土製棺蓋材と想定できる。しか

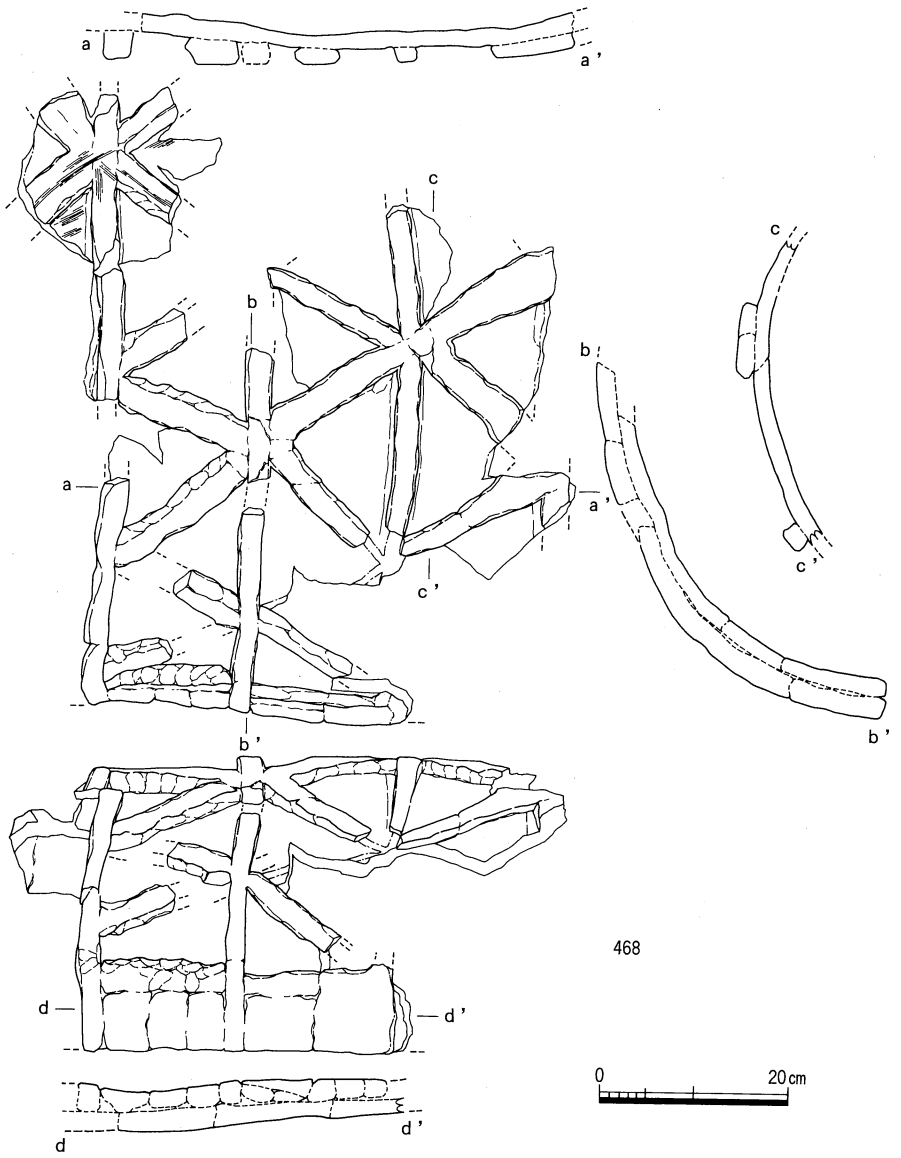


第105図　大形竪穴建物出土遺物31　割竹形土製棺（１／８）

し円筒形土製棺の場合には，この形状では安定的な器体との結合が困難となる。一方，後に見るように共伴する推定内径60cm弱の割竹形土製棺は端部内面に口金状に狭い間隔で2条の突帯を巡らすと復元できる。この内面突帯間に本材を差し込めば安定的に本体と小口板を固定できるであろう。このことから本品を割竹形土製棺小口板と推定した。



第106図　大形竪穴建物出土遺物32　割竹形土製棺（1／8）



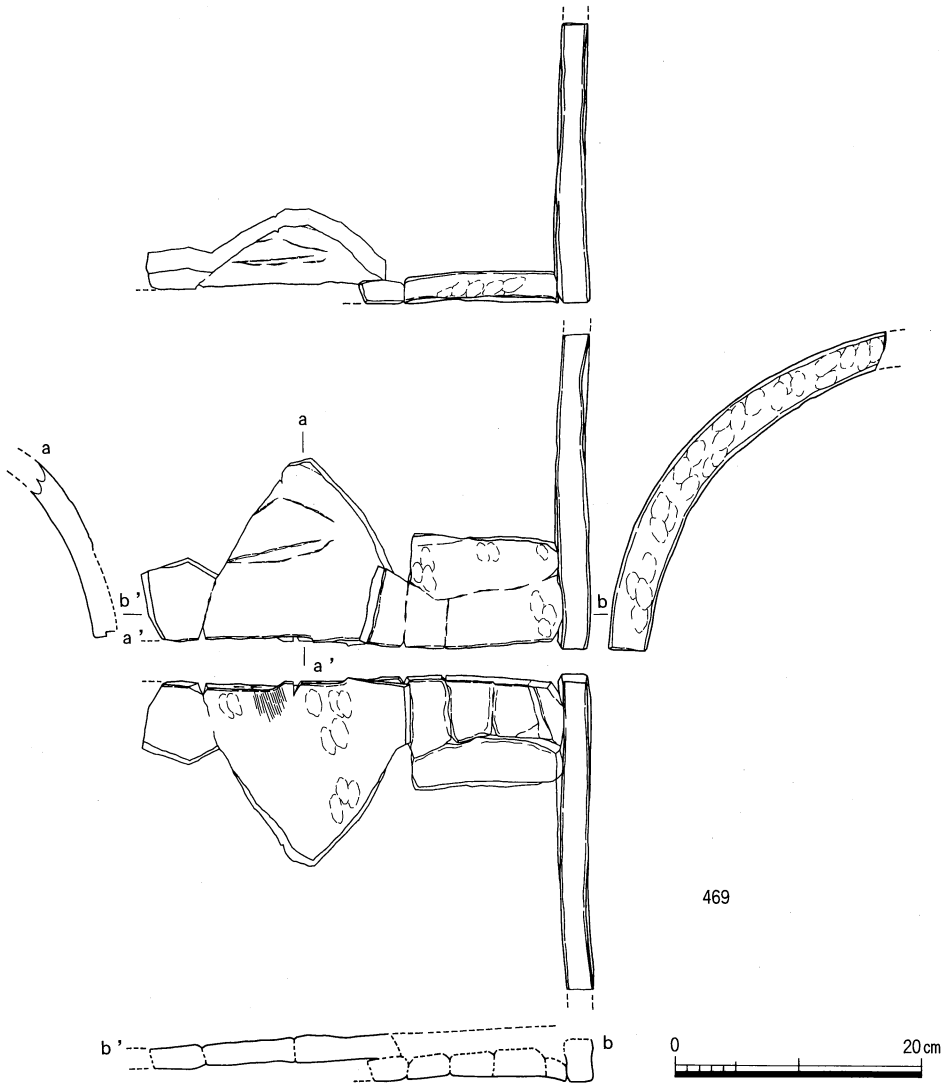
第107図　大形竪穴建物出土遺物33　割竹形土製棺（1／8）

466～469は割竹形の形状をなす土製棺と推定した。半裁円筒形の部材2個（箱形土製棺の蓋材のように半身が各々2つの部材からなるとすれば計4個）と2個を合わせて円筒形の棺身とし，両端に別作りの小口板を装着する構造と推定する。

466は小口端部の一部～側縁部下半の一部が残存する。断面半円形で推定幅60cm前後，高30cm強。長さは不明。側縁部には逆「r」字形の補強材が取り付く。また小口端内面には現状でも口金状に突帯1状が巡るがその外側面には剝落痕らしい変色部分が観察でき，

このような突帯がもう１条巡る可能性が高い。箱形土製棺蓋材に見られる内面の肋骨状補強材は確認できない。側縁材は棒状粘土塊を連結して形作る。外表の突帯は全て脱落しているが，剝落痕からおおよその配置は復元できる。補強材の一部を延長するようにおおよそ15cm間隔で横断方向に並行帯を巡らし，その間を連続山形帯で充塡する。外面は剝落して調整不明。内面には部分的にハケ調整が残存する。また横断方向に５cm内外の間隔で接合痕をとどめる。

467は推定幅60cm前後，高35cm前後で基本的形態は466に等しい。ただし小口端部や側



第108図　大形竪穴建物出土遺物34　割竹形土製棺（１／６）

縁材の細部形状に微妙な違いが見られるので同一個体とは断定できない。小口端部は折り返して内方に突帯状に突出する。やはり外側面に剝落痕が観察できる。外表の突帯は脱落しているが側縁材・剝落痕から約15cm間隔の横帯とその間に充塡された連続山形帯からなる構成と想定できる。内外面の一部にハケ調整が残るが方向は一定していない。横断方向に7～10cm間隔で接合痕が巡る。

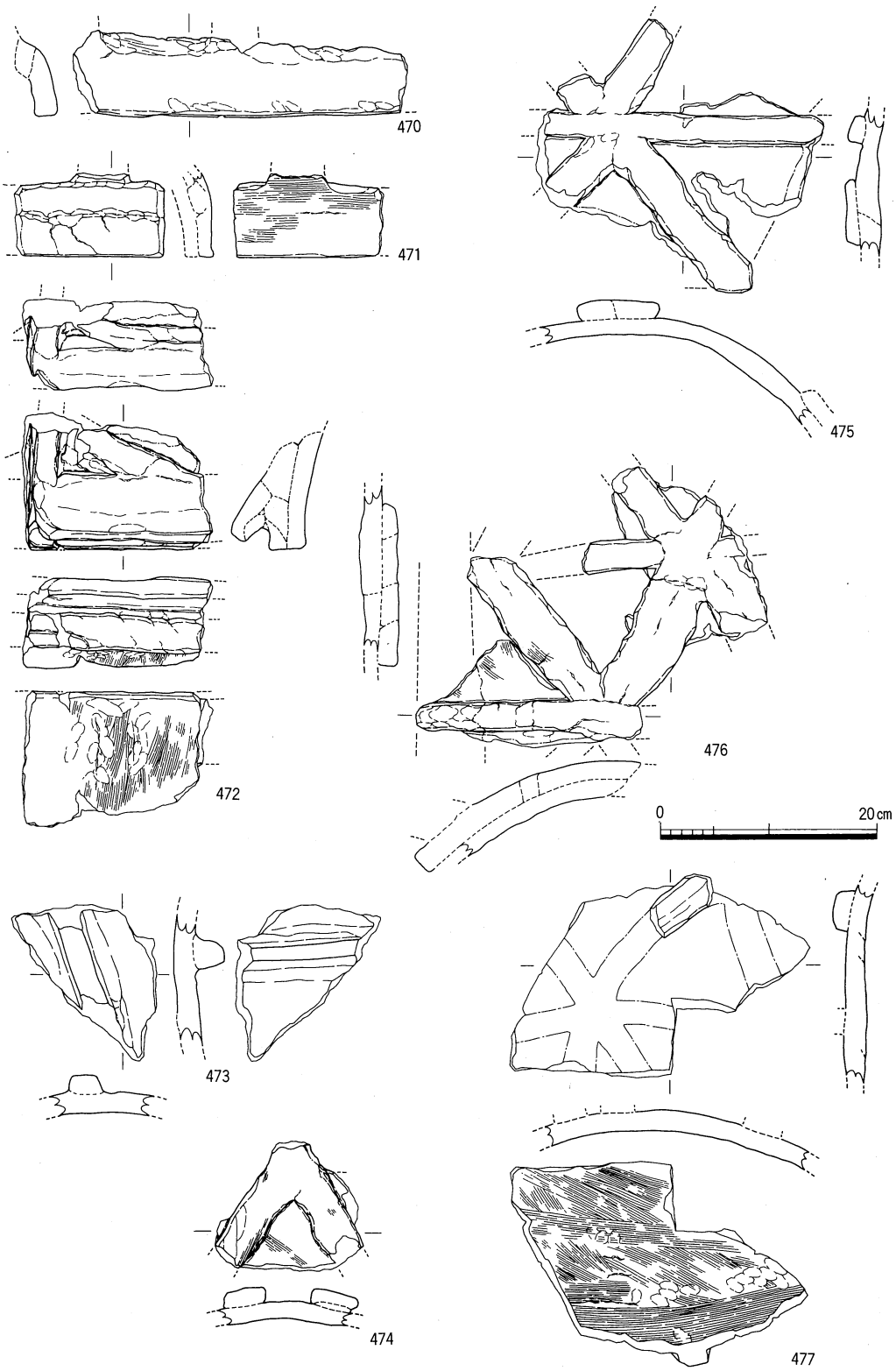
468も同様の割竹形土製棺であるが，推定幅70cm前後，高30cm弱とやや平たい。中間部分の長60cmほどが残存しているだけで端部形状は不明。やはり側縁には粘土帯を貼り足すが466・467のように複雑な構造ではなく単なる肥厚帯である。外面には同じく横断方向の並行帯とその間に連続山形帯を配する。側縁端部まで梁渡した横帯の間を充塡するように粘土帯を連結して側縁の肥厚帯を形成する。突帯のうち，連続山形帯部分は棒状粘土帯を並べて横帯よりも幅広く作る。また特に山形帯部分の側縁は連続的な指押さえによって凹凸が顕著である。外面のごく一部にハケ調整が残存する。

469は同様の形態の側縁肥厚帯を有する破片である。外表の突帯は横帯1条を除いて脱落しているが，剝落痕からその間にやはり連続山形帯を配したことが想定できる。また横帯間に粘土帯を充塡して側縁肥厚帯を作り出す状態が残存部からよく判る。

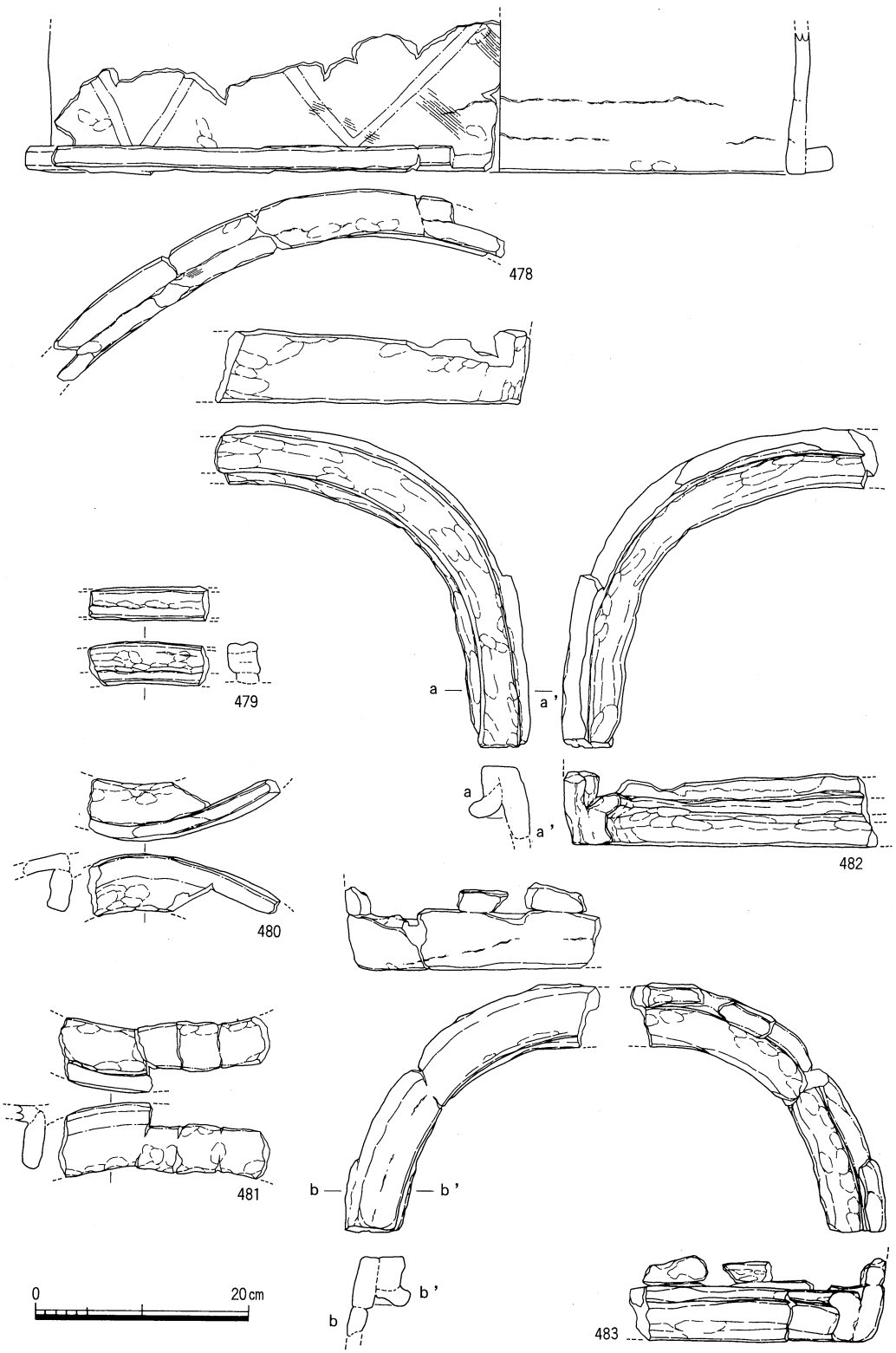
470～477は土製棺小片。470は割竹形土製棺側縁材の一部であろう。裏面の剝落部分にもう1枚の粘土帯が取り付きそれを介して器体に接する構造であれば466・467の側縁材と同じ形態となるが，確定はできない。上縁に突帯端部が続いている。外面横ハケ調整。472は逆「r」字形の側縁帯で内側に器体側縁端部が連続している。外面横断方向のハケ調整。側縁帯が棒状粘土帯を連結して形作られその一部から延長して横帯とする構造がよく分かる。473は緩く円弧を描く器体の外表に斜方向の突帯が取り付く。連続山形帯の一部であろう。内面には横断方向の突帯がある。474～477は緩く円弧を描く器体の外表に連続山形帯＋横帯の貼付が予想できる。やはり連続山形帯は横帯よりも幅広く作られる。これらでは内面突帯はない。

478は端部片ながら内面突帯が観察できないので形状は似るが割竹形土製棺本体ではなく，464同様の小口蓋材片と推定した。端部はほぼ直立し，外縁の突帯は整った矩形で突出度が高い。脱落しているが剝落痕から連続山形帯が配されたことが判る。外表には斜方向のハケ調整を見る。

479は割竹形土製棺小口端部の可能性があるが詳細不明。480・481は466・467に見るような小口端部際の口金状の内面突帯部片であろう。この内面突帯部分が末端とならないこ



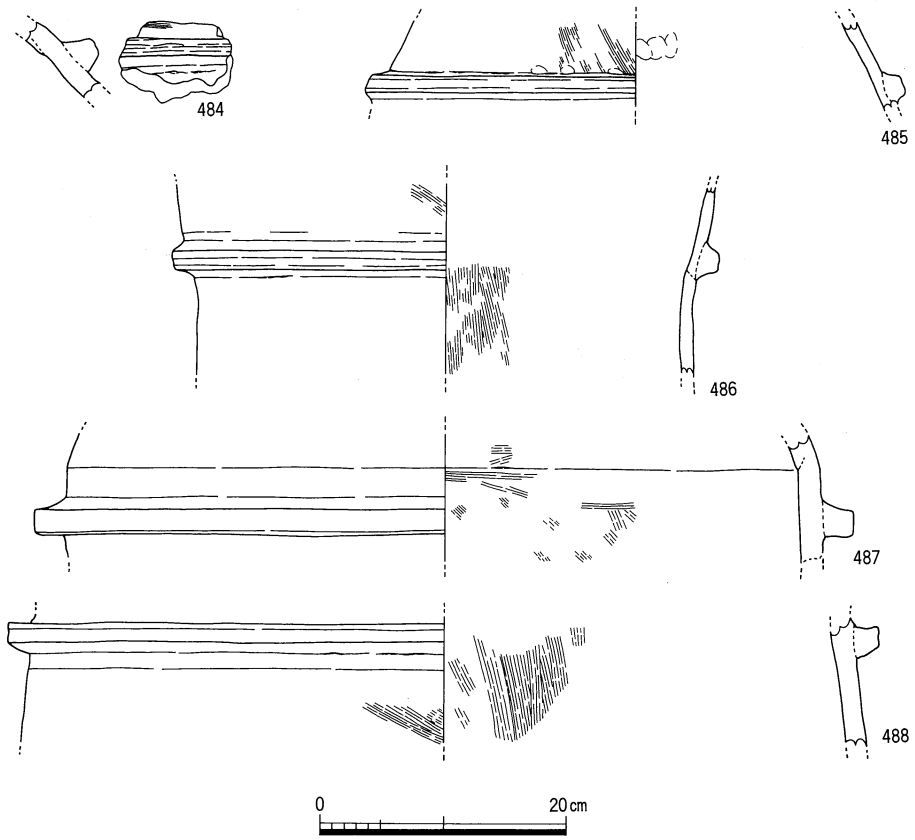
第109図　大形竪穴建物出土遺物35　割竹形土製棺（1／6）



第110図　大形竪穴建物出土遺物36　割竹形・円筒形土製棺（1／6）

とは外側部分の剝落痕の存在から想定できる。482・483は割竹形土製棺小口端部片である。端部内面にやや幅広い粘土帯を貼って肥厚させ，更にその内側に口金状に突帯を配する。それより内側は破損しており明らかではないが，466・467等のの内面突帯部分に連続する可能性が高い。なお482・483は接合関係はないものの形態・寸法に格差はなく同一個体と見ることも可能である。

484～488は体部径・器厚・突帯形状から通常の円筒埴輪片ではなく土製棺片と見なした。小片のため円筒形・割竹形の区別は困難である。いずれも外面には横帯しかない。内外面にハケ調整を見る。484・485は強く内傾することから小口部蓋材片の可能性がある。487も上部が緩やかに内傾するので同様の可能性がある。486・488は本体片であろう。



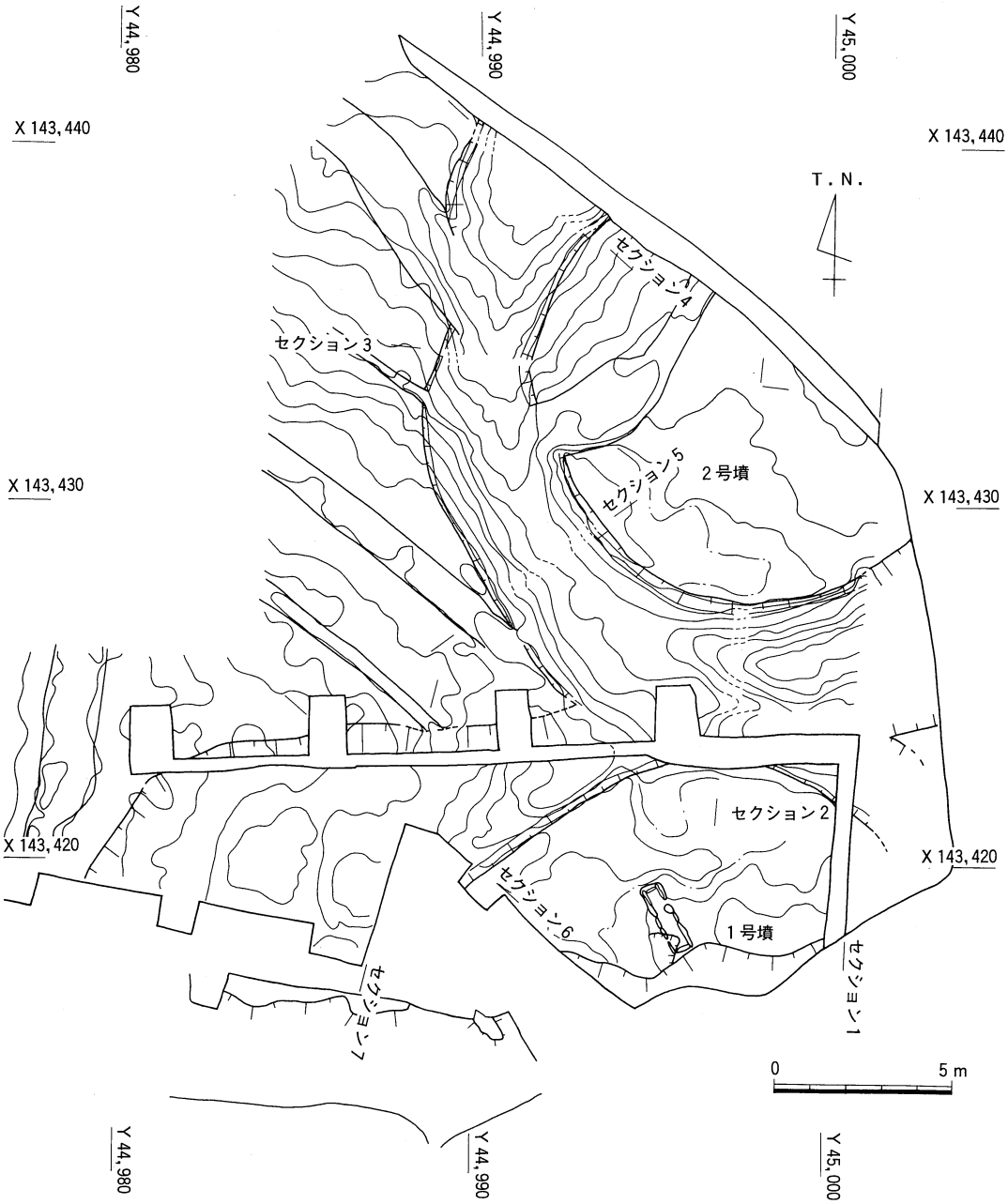
第111図　大形竪穴建物出土遺物37　円筒形土製棺（1／6）

2. 古墳群

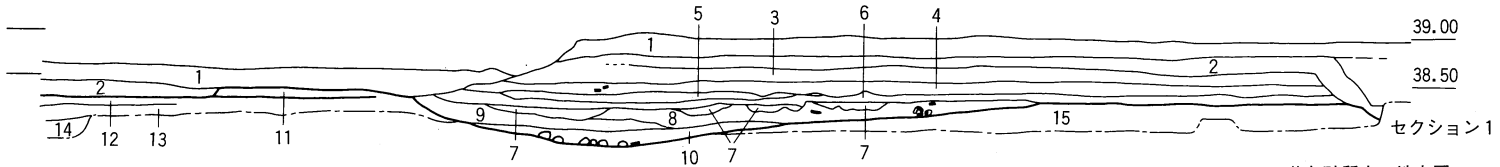
1号墳

墳丘形態・周溝

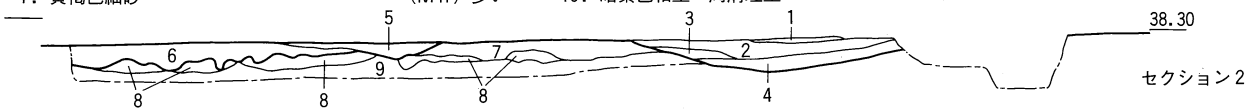
5区西南隅から5ｄ・5ｆ区で検出した古墳である。地形的には谷4に面した丘陵C東



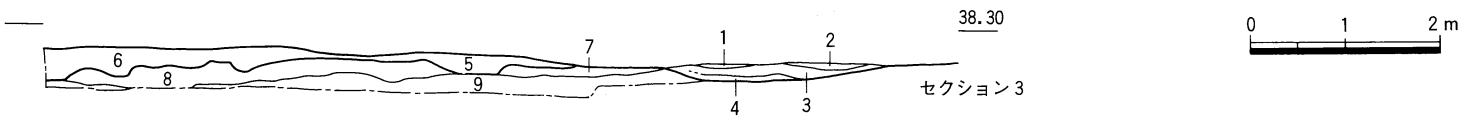
第112図　1・2号墳平面図（1/200）



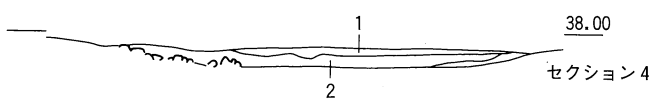
1．黒灰色細砂　耕作土
2．褐色細砂　旧耕作土
3．褐色細砂　旧耕作土
4．黄褐色細砂
5．黄褐色細砂　褐色ブロック（Ｆｅ）多い
6．黄褐色細砂　黒褐色ブロック（Ｍｎ）多い
7．黄色細砂　ブロック状堆積
8．暗灰褐色細砂　周溝埋土上層
9．暗灰色弱粘質土　周溝埋土上層
10．暗紫色粘土　周溝埋土
11．濃黄色細砂　Ｍｎ多い　墳丘盛土？
12．黄色細砂　墳丘盛土
13．濃黄色細砂　Ｍｎ多い　墳丘盛土？
14．濁黄色砂質土　濃黄色土ブロック含む　墳丘盛土？
15．黄色砂質土　地山層



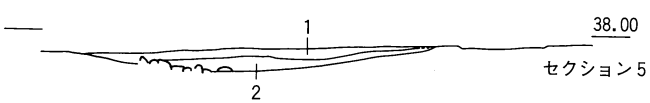
1．淡黄色砂質土　旧耕作土？
2．灰褐色砂質土　周溝埋土上層
3．暗褐色粘質土　周溝埋土
4．暗黄色粘質土　周溝埋土
5．淡黄色砂質土　濃黄色土ブロック含む　墳丘盛土？
6．淡黄色砂質土　濃黄色土ブロック多い　墳丘盛土？
7．淡黄色細砂　地山１層
8．暗灰褐色砂質土　堅緻
9．濃黄色粘質土　地山２層



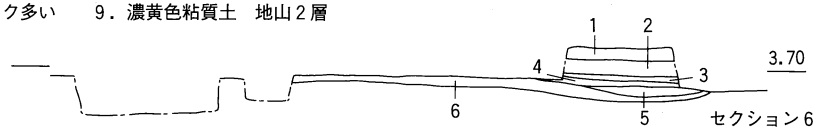
1．黄褐色砂質土　Ｆｅ多い　周溝埋土？
2．灰褐色砂質土　Ｍｎ多い　周溝埋土？
3．暗灰褐色砂質土　やや粘性有り　周溝埋土
4．暗褐色粘質土　堅緻　周溝埋土
5．淡黄色砂質土　濃黄色土ブロック含む　墳丘盛土？
6．淡黄色砂質土　濃黄色土ブロック多い　墳丘盛土？
7．淡黄色細砂　地山１層
8．暗灰褐色砂質土　堅緻
9．濃黄色粘質土　地山２層



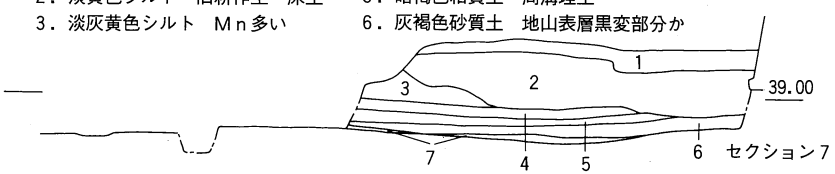
1．淡灰褐色砂質土　Ｍｎ多い　周溝埋土上層
2．暗褐色粘質土　周溝埋土



1．灰褐色　砂質土　Ｍｎ，Ｆｅ多い
2．暗褐色　粘質土　周溝埋土



1．暗灰色砂質土　耕作土
2．淡黄色シルト　旧耕作土・床土
3．淡灰黄色シルト　Ｍｎ多い
4．淡灰褐色砂質土　Ｍｎ多い　周溝埋土上層
5．暗褐色粘質土　周溝埋土
6．灰褐色砂質土　地山表層黒変部分か



1．暗灰色砂質土　耕作土
2．県道工事造成土
3．灰褐色・暗灰色砂質土　旧耕作土・床土
4．淡灰黄色シルト
5．淡灰褐色砂質土　Ｍｎ多い　周溝埋土上層
6．暗褐色粘質土　周溝埋土
7．淡灰黄色砂質土　Ｍｎ多い　地山表層黒変

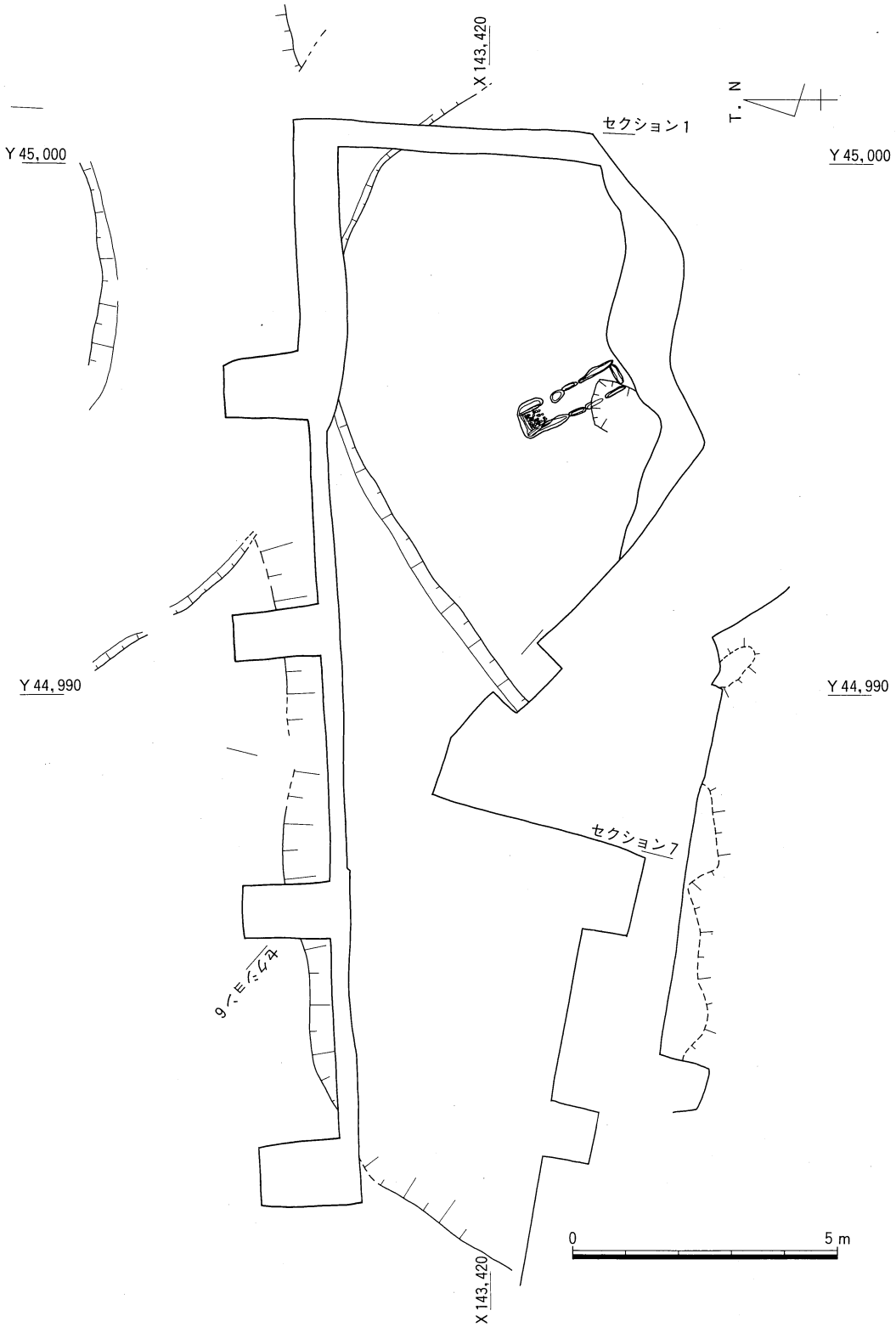
第113図　１・２号墳墳丘・周溝断面図（１/80）

縁に位置する。北側に接する２号墳とは周溝の一部が重複する。谷４を利用した溜め池構築時に墳丘南半部を大きく削り取られると共に，全般的に削平が著しい。周溝と従属的な主体部の一部を確認したに過ぎない。

５区南東隅で検出した１号墳周溝は，おそらく溝下半部をとどめるに過ぎないがその本来的な形状はほぼ反映している。溝南肩すなわち墳丘側は緩やかに円弧を描くが，西方では北肩すなわち外縁がこれと並行して円弧をなさず大きく西方に開いて行く。この周溝形態から，墳丘盛土は一切残存しないものの本墳を円墳ではなく西南西方向に前方部を向けた小規模な前方後円墳と推定した。その後５区南側に位置する旧県道路線部分に設定した５ｆ調査区で前方部の確認をはかったが，溜め池構築時の破壊や水道管埋設時の撹乱などによって墳丘想定部分は大きく損なわれており，その確証を摑むには至らなかった。また墳丘東部の把握を目指した５ｄ区でも溜め池構築に伴う撹乱などによって大きく旧状を損なっていた。５区東南端から同区では全般的に地山層付近にＭｎ粒の沈着による黒化が著しい。調査時にはこの部分の遺物散乱部を東縁周溝と見なしたが確証は薄い。したがって墳丘東端は残存する地形などからおおよその推定は可能であるが明確に把握することはできていない。

したがって墳丘形態及び規模の詳細を知ることは困難であったが，前方後円墳とすれば丘陵縁辺部に並行して全長20ｍ未満，後円部径12ｍ前後を測るであろう。なお円丘部は正円ではなく東北東－西南西に延びた楕円形を呈する。葺石・列石等の石材を用いた墳丘装飾ないしは区画設備は残存しないし，周溝転落石材も見られないので，本来的に施されていないと判断する。周溝は円丘部北側で幅2.5ｍ前後，深さ0.2ｍ程度が残存する。それより西方，推定前方部北側面では確認した範囲だけでも，深さは最大でも0.1ｍを残すに過ぎないが幅は７ｍを越す。推定通り前方後円墳で正しければ，周溝は前方部部分で大きく幅を増す馬蹄形状の形態となる。周溝には暗褐色粘質土が一様に堆積し，ごく一部分ではその上位にやや淡い灰褐色土が薄く認められる。

周溝西部，すなわち推定前方部側面部分では少量の埴輪片と土師器片が見られるが，古代以降の遺物は含まない。。また周溝北部（円丘部北側）では比較的大形の円筒埴輪片が２つのまとまりに分かれて出土し，それからやや離れた位置で板状鋤先（536）が出土している。共に周溝底からさほど浮いたレベルではない。円筒埴輪は周溝底樹立を示すものではなく転落資料であろう。この他上面で８世紀～９世紀の須恵器小片を出土している。５ｆ区では周囲がひどく削平ないしは撹乱を蒙る中で奇跡的に0.4×0.5ｍの範囲に局所的に



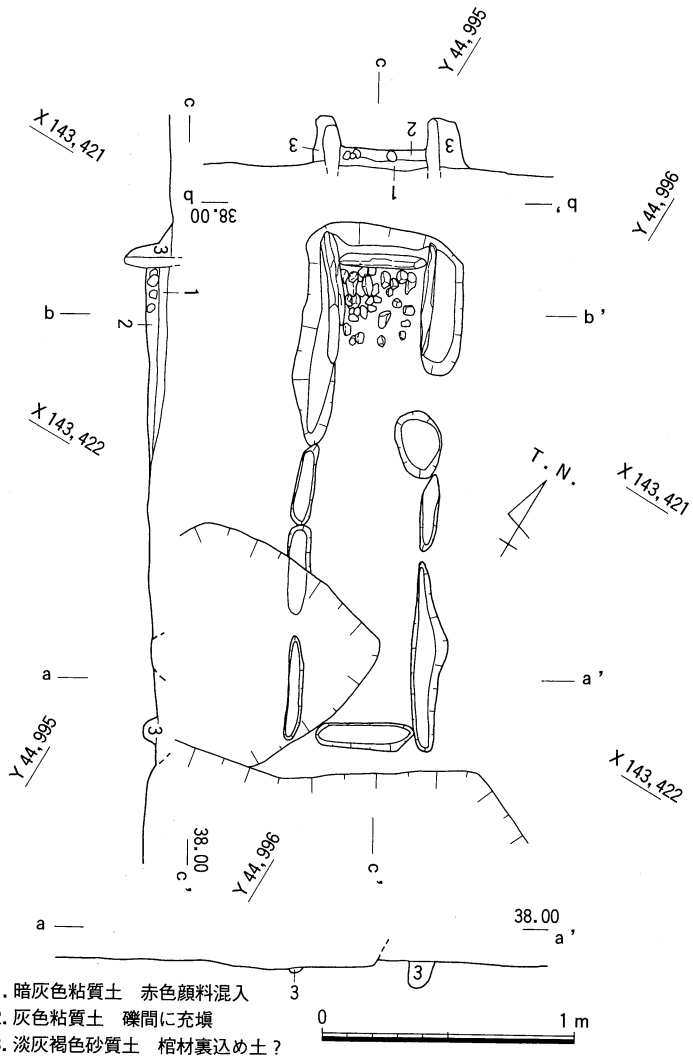
第114図　1号墳平面図（1/120）

円筒埴輪片が集積状態で残されていた。その出土地点を墳丘南側の周溝残部とする意見もあるが位置的にはやや困難である。あまりにも周囲の撹乱が著しくこの資料が原位置を保つか否かも含めて判断が難しい。

また５ｄ区の推定墳丘東縁部分では地山層直上部分を中心に一定範囲に円筒埴輪・形象埴輪片が他部分周溝で出土していない角礫を交えて散在していた。埴輪類は周溝北側等で出土した円筒埴輪とは胎土・形態ともに格差が大きい。同様の特徴を持つ埴輪類は１号墳では他地点で一切確認していない。東縁部分に限定される。詳細は２号墳資料と共に検討するが，本墳に伴うものではなく２次的堆積の可能性が高いであろう。

主体部

円丘部中央ではなく北側にかなりずれた位置で箱式石棺１基を検出している。この状態では果たして本墳に伴う箱式棺との確認も厳密には困難であるが，概ね推定される墳丘主軸に直交する方位をとることなどから，中心主体ではなく本墳に伴う従属的な埋葬施設と推定している。削平が著しく配石は北端３石の，しかも下半部が残存するに過ぎない。また蓋石はおろか床面も南半部ではほぼ損なわれ旧状は北端の配石残存部分でようやく確認できただけであった。しかし配石の掘り方ないしは抜き取り痕からおおよその規模は復元することができる。それに拠れば内法で長さ1.82ｍ，幅は南端・中央部で



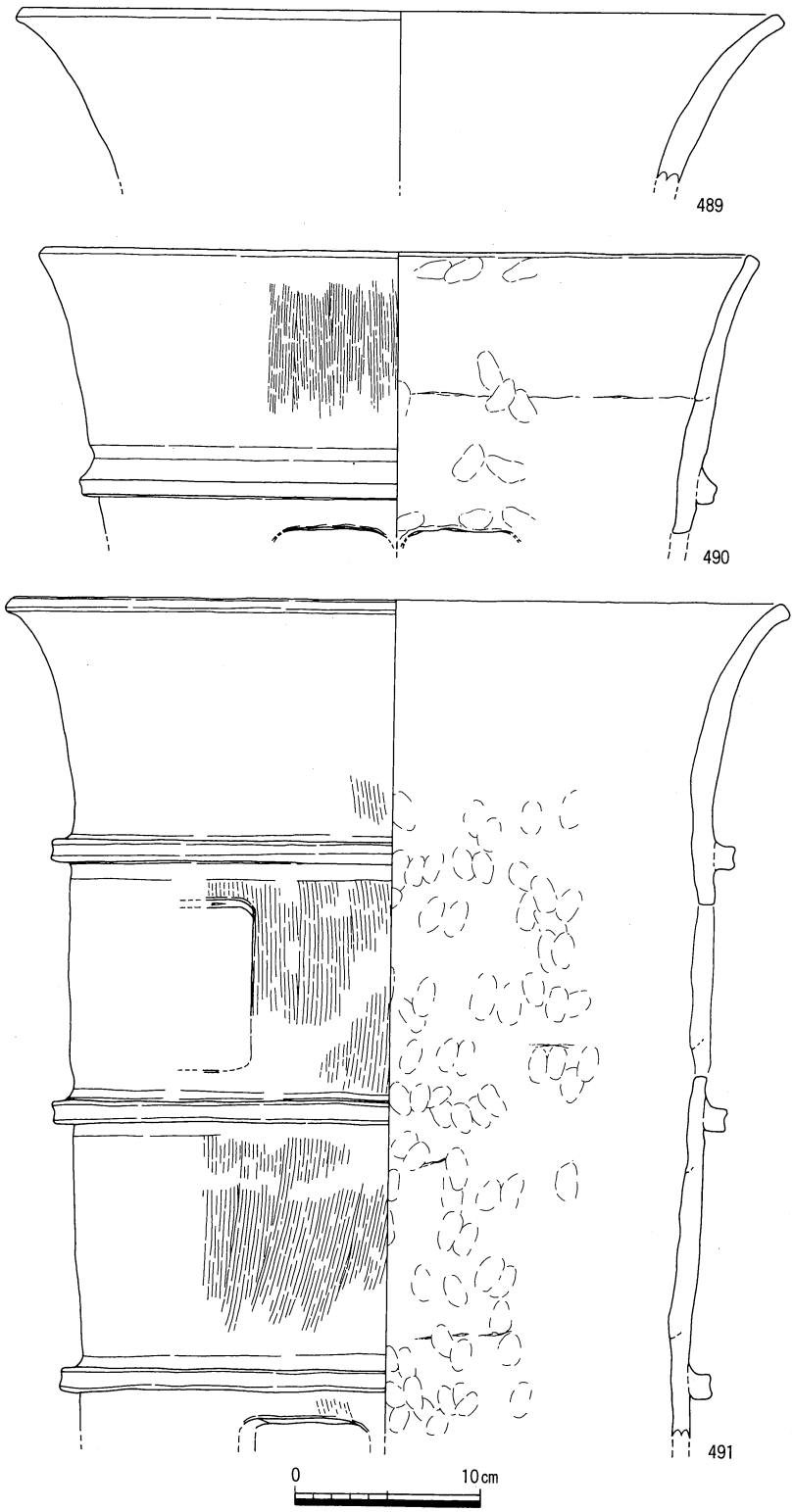
第115図　１号墳主体部平面図・断面図（１/30）

0.43m，北端の配石残存部で0.35mを測る。若干幅広くなる南側を頭位方向とするとS30°Eとなる。

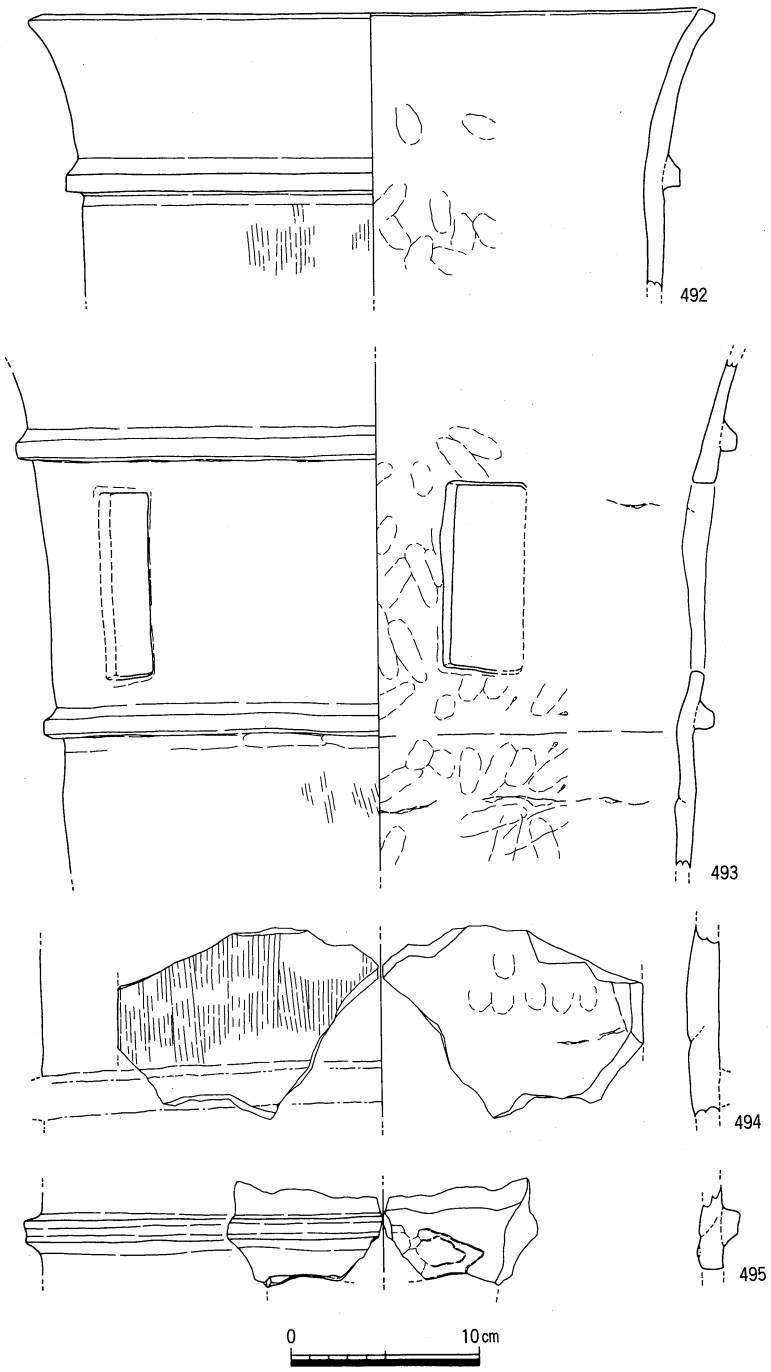
配石には安山岩系統の石材を利用している。人為的な加工は施しておらず板状の自然石を使用したようだ。北端では小口石材を側辺端部の2石が挟み込み，両側石が小口石よりもわずかに外方に突出する。配石掘り方から判断する限りでは南端も同様の構造が想定できる。床面には花崗岩質の山砂利を粗く敷き，その間に淡灰色～灰白色粘土が充填されている。また床面の一部でわずかに淡橙色を帯びた部分が見られた。赤色顔料の使用が予想できる。被覆粘土の存在を示す痕跡は確認していない。なお棺内に副葬品は見られなかった。

489～506は東縁部を除く1号墳周溝出土円筒埴輪である。1号墳に伴うと見てまず間違いない資料である。いずれも角閃石細粒を多量に含み多くは橙色を呈する。下川津B類土器と同質の胎土的特徴を有する点で注意される円筒埴輪である。

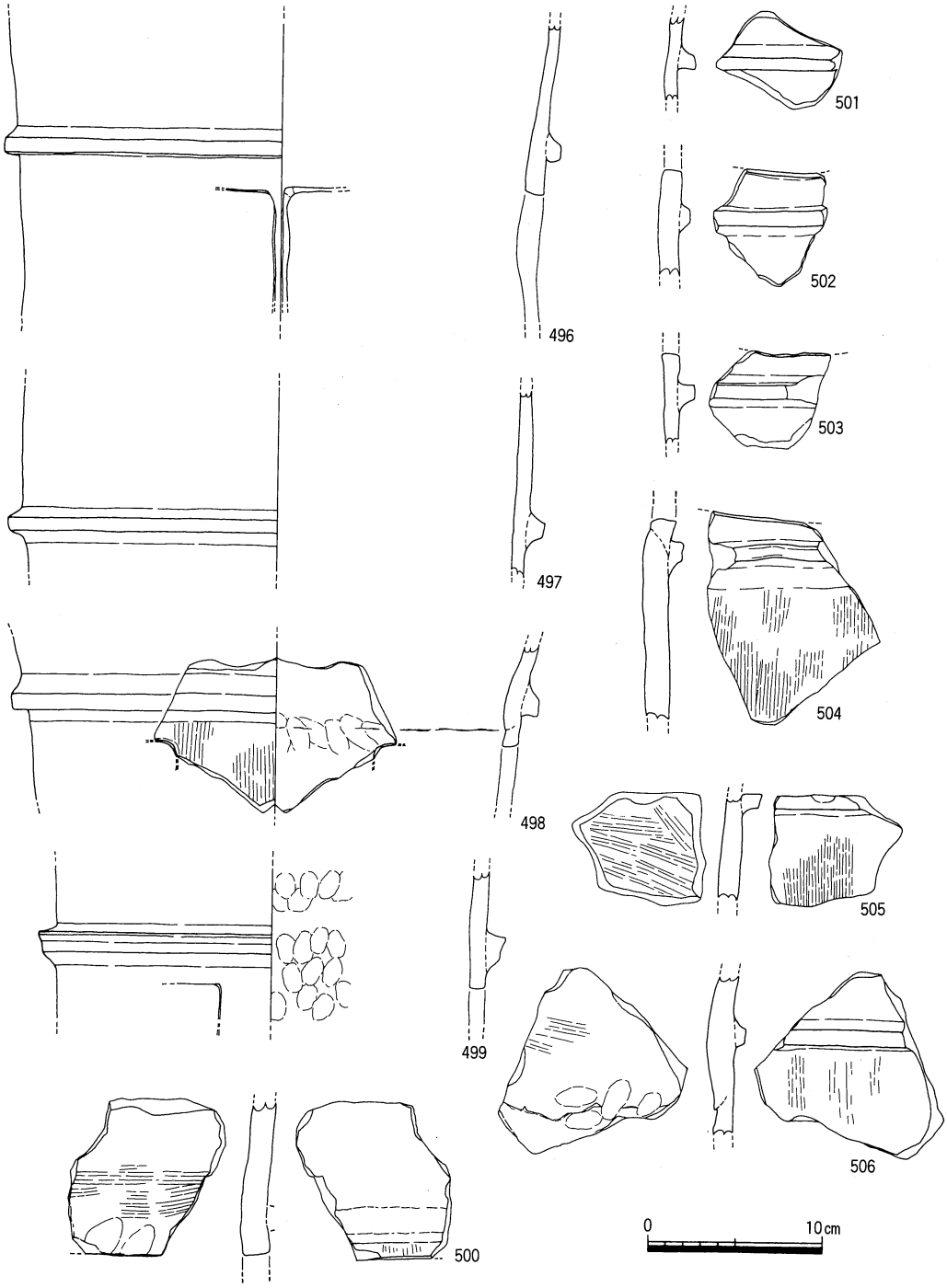
491が1号墳出土埴輪で最も残りがよい資料である。口縁部を含め上半部3段あまりが残存する。本古墳出土円筒埴輪ではいずれも口縁部は緩やかに外反する。端部はわずかに外方に張り出し気味に四角く収める。490は外反がかなり弱いが，489・491・492のように谷3資料よりも外反が強い傾向がある。また中位段の突帯間隔は15cm前後で，口縁部長も492を除いてほぼこれに匹敵する。透かし孔は観察し得た限りではいずれも縦長長方形である。493では1段あたり3方程度と推定できる。また透かし孔は隔段に少しずつずらしながら配されるらしい。突帯形状は491に見るようにかなり整った矩形で頂部がわずかに凹面をなすものが多い。上端は丁寧に器体と密着させるが下端はやや粗雑となる傾向がある。この他台形様で上下端いずれかが鈍く突出する形態や，やや扁平な台形突帯を含む。外面調整は口縁部まで縦ハケが及ぶ。外表が荒れており二次調整の有無は判断しにくいが，少なくとも横ハケ調整は観察できない。また横ナデを加えたとしても谷3資料のように丁寧なものではない。内面には比較的指押さえの凹凸がよく残る。500・505・506のように部分的とはいえ内面にハケ調整を加えることは多くない。



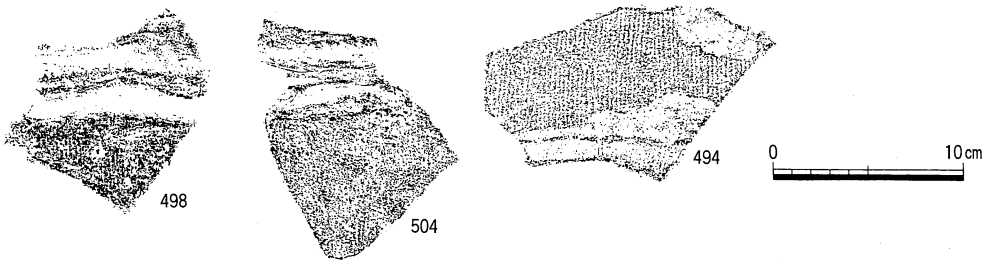
第116図　1号墳出土遺物1　円筒埴輪（1／4）



第117図　1号墳出土遺物2　円筒埴輪（1／4）



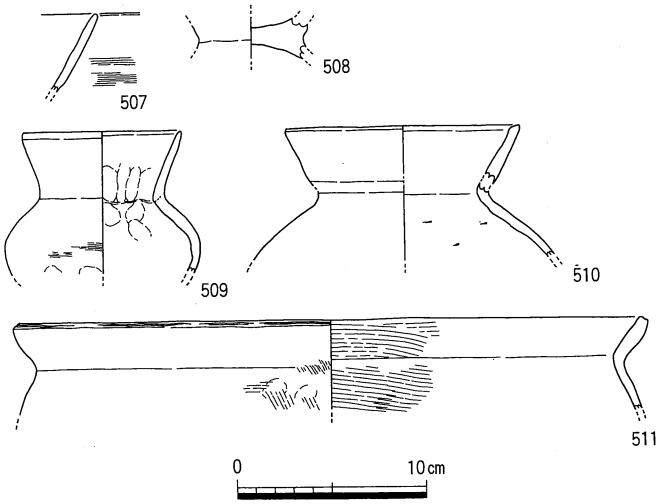
第118図　1号墳出土遺物3　円筒埴輪（1／4）



第119図　1号墳出土円筒埴輪拓影（1／4）

507～511は周溝出土土師器。上記した円筒埴輪類とは異なり胎土に角閃石細粒をほとんど含まない。赤色粗粒は顕著ではないが石英粒はかなりふんだんに含む。このうち507・509・511は北端，2号墳周溝との重複部分で検出しており帰属は明らかにしがたい。また508・511は推定前方部の北側周溝で検出しているが，小片のため本墳帰属と断定するにはやや躊躇がある。

507は直口壷ないしは小形丸底土器口縁部。わずかに内湾気味に開き端部はやや尖る。508は低脚杯片の可能性がある。509小形丸底土器は扁平球状の体部に直線的に開く口縁部を付す。体部径が口径を凌駕する。内面ケズリ調整を見ない。甕510は磨耗がひどく細部形状がわかりにくいがわずかに端部肥厚面が確認できる。511は短い「く」字口縁の鉢であろうか。胎土・調整から古式土師器と見なしたが当該時期に一般的な形態ではない。後代の煮沸具の混入かもしれない。



第120図　1号墳出土遺物4　土師器（1／4）

536は2片に折れているが同一個体であろう。刃幅12cm以上となるので，手鎌ではなく板状鍬（鋤）先と考える。刃先はかなり損耗しているが現存長で4cm強を測る。側縁は一旦折り曲げた後にその下端を更に三角形に内側に折り込む。

細かい検討は後章で果たすが，円筒埴輪の年代観から1号墳は焼成土坑など丘陵東・中部の埴輪製作関連遺構に先行して築造されたものと判断できる。また石清尾山石船塚古墳

より先行して，石清尾山姫塚古墳と同時期かやや後出する可能性が高いであろう。

2号墳

5区東北隅から5d区にかけて検出した円墳である。地形的には谷4に面した丘陵C東縁に位置し，南側に接する1号墳とは周溝の一部が重複する。また北の推定3号墳とも同様に相接する位置が想定できる。谷4を利用した溜め池構築時に墳丘東南半部を大きく破壊されると共に全体的に削平が著しい。特に墳丘北東部の半ば近く（5e区）は完全に削り取られ周溝も全く残存していない。

しかし残存する周溝によって墳丘の形態と規模は復元できる。径約12.6mの比較的整った円形墳丘が復元できるであろう。前方後円墳は困難であるが，残存状況からすれば小規模な突出部の有無までは厳密には否定できない。周溝幅は2.6～4.2mを測る。残存深度は0.2～0.3mで暗灰褐色～暗褐色砂質土層を埋土とする。上層には薄く淡灰褐色～灰褐色砂質土が覆うが，これはやや新しい堆積層のようである。後述するように古代以降の遺物片がこの層序には混入している。周溝南端で約9mほど，1号墳円丘部北側周溝と重複するが両墳周溝埋土の様相は酷似しており，その堆積状態から前後関係を論じることは困難である。しかし強いて言えば2号墳南端の葺石石材分布範囲は1号墳周溝に掛かるにも関わらずその影響を蒙った形跡がないことは注意すべきかもしれない。この部分の葺石自体二次的に転落・移動している可能性が高いので確定的とは見なしがたいが，2号墳の後出を示唆するものである。

周溝肩部の立ち上がりには内外縁で明確な差がなく同じようにかなり緩やかな勾配を持つ。周溝内肩部分には幅1m～1.3mほどで拳大から人頭大の角礫が帯状に密集して分布する。本来墳丘部分を覆った葺石の一部であろうが，大きさもまちまちで，特に一定の方向に面を揃えたり法則的な配列を観察できる部分は認められない。却ってこれら角礫に挟み込まれ，あるいはその直下に比較的多量の埴輪片が見いだされる。したがってこれらは墳丘構築当時の原位置を示すものではなく，二次的に移動したものが大部分を占めると考える。

墳丘盛土はほとんど残存していない。しかし部分的には，明確な地山層直上に類似した土質ながら堆積状況でこれと区別しうる薄層が見出しうる。（第113図）墳丘盛土残部の可能性がある。またそのように解釈することが可能であれば，しばしば古墳盛土最下層に認められる「黒色帯」は本墳では認められない可能性が高い。なお主体部は墓壙の痕跡を含

第121図　2号墳遺物出土状態図（1/80）

	出土レベル	墳丘との関係	実測番号	備　考
1	38.430	周溝		埴輪1
2	38.415	周溝(2cm)		鉄製鍬先
3	38.428-38.453	周溝(3-5cm)	493	埴輪1
4	38.438-38.420	周溝	496,491,501	埴輪1
5	38.357	周溝(5cm)	659	須恵器
6	38.300	周溝(2cm)		埴輪3
7	38.253	周溝		埴輪2b・土師器
8	38.299	周溝		埴輪2b
9	38.295	周溝		器財？
10	38.345	周溝		埴輪2b
11	38.310	周溝	571	埴輪2b
12	38.274	周溝		埴輪2b
13	38.286	周溝		埴輪2b
14	38.343	周溝		埴輪2b
15	38.322	周溝		埴輪2b
16	38.357	周溝		埴輪2b
17	38.344	周溝	578	埴輪2b
18	38.297	周溝	577	埴輪2b
19	38.278	周溝		埴輪2b
20	38.289	周溝	569	埴輪2b
21	38.327	周溝		埴輪2b
22	37.955	周溝		器財？・埴輪2b
23	37.990	周溝	559,573,588	家埴輪・埴輪2b・壺埴輪
24	38.047	周溝		埴輪2b
25	38.039	周溝		埴輪2b・器財？
26	38.110	周溝	505	埴輪1
27	38.016	周溝		埴輪1
28	37.988	周溝	563	埴輪2b
29	37.740	葺石間		埴輪2b
30	37.730	葺石間		壺埴輪
31		葺石間		埴輪2b・壺埴輪・器財
32	37.730	葺石間		壺埴輪
33		葺石間		埴輪
34		葺石間	582	家埴輪
35		葺石間	560	埴輪2b
36	37.797	葺石間		壺埴輪
37		周溝	579	盾形埴輪
38		葺石直上	567,583,582 587	家埴輪・埴輪2b
40	37.870-37.880	周溝	574.539	埴輪2b・3
41	37.855	葺石間	535	鉄鏃
42	37.845	葺石間	534	鉄鏃
43	37.865-37.855	葺石間	514,524,509	壺埴輪・小形丸底
44	38.105	周溝上層		埴輪3
45	38.080	周溝上層		埴輪1
46	38.180	周溝上層		埴輪1
47	38.000	周溝上層		埴輪1
48	37.920-37.935	周溝(5cm)	537	埴輪3
49	38.050	周溝上層		埴輪3

	出土レベル	墳丘との関係	実測番号	備　考
50	37.965	周溝上層	493,537	埴輪1・埴輪3
51	38.075	周溝上層	537	埴輪3
52	38.052	周溝上層		埴輪1
53	38.195	周溝上層		埴輪3
54	37.846	周溝		埴輪1・3
55	37.815	周溝	542	埴輪3
56	38.130	周溝上層	506	埴輪1
57	37.913-37.933	葺石間	513,507	壺埴輪・小形丸底
58	38.215	周溝上層		埴輪1
59	38.095	周溝上層		埴輪1
60	38.235	周溝上層		埴輪1
61	38.216	周溝上層		埴輪1
62	38.006	周溝上層	497	埴輪1
63	38.167	周溝上層	502	埴輪1
64	38.150	周溝上層		埴輪1
65	38.225	周溝上層	511	土師器鉢？
66	38.090	周溝(4cm)		土師器
67	38.180-38.220	葺石間	519,522	壺埴輪
68	38.110	葺石間		埴輪1
69	38.100-38.090	葺石間	521	壺埴輪
70	38.222	周溝上層(13cm)		埴輪1
71	38.126	周溝(5cm)	490	埴輪1
72	38.271	周溝上層(19cm)		埴輪1
73	38.140	周溝(5cm)	562	埴輪2b
74	38.258	周溝上層(14cm)	659	須恵器
75	38.238	周溝上層(13cm)	659	須恵器
76	38.258	周溝上層(10cm)		埴輪1
77	38.258	周溝上層(10cm)	540	埴輪3
78	38.218	周溝上層(7cm)		埴輪1
79	38.258	周溝上層(10cm)		埴輪1
80	38.234	周溝(3cm)		土師器
81	38.220	周溝(3cm)		土師器
82	38.270	周溝上層(15cm)	659	須恵器
83	38.168	葺石間	527	壺埴輪
84	38.145-38.270	葺石間	522	壺埴輪
85	38.100-38.190	葺石間	528,515	壺埴輪
86	38.108-38.235	葺石間	528,518,524 582	壺埴輪・家埴輪
87	38.135	葺石間	515	壺埴輪
88	38.047-38.120	葺石間	512	壺埴輪
89	38.250	周溝(2cm)	659	須恵器
90	38.078-38.085	葺石間	526,518	壺埴輪
91		周溝上層(10cm)	530	壺埴輪
92	37.870-37.875	葺石間	516	壺埴輪
93		周溝上層(10cm)		土師器・器財？
94	37.920	周溝(5cm)	530	壺埴輪
95	37.890	周溝(6cm)	516	壺埴輪
96	37.808	葺石間	532	壺埴輪
97	37.790	葺石間	587	埴輪2b・家形埴輪
98	37.720-37.765	葺石間	525,520,517	壺埴輪
99	37.720	周溝上層(9cm)		器財？

第16表　1・2号墳出土遺物一覧

めて残存していない。

周溝から壷形埴輪・円筒埴輪と若干の形象埴輪・土製棺片及び須恵器片・土師器片等が出土した。壷形埴輪片の出土量が最も多く，円筒埴輪片がこれに次ぐ。また遺物の種別によって明瞭に位置・層位など出土状況に明瞭な格差がある点注意したい。1号墳に伴う遺物と後の流入遺物を含むと考える。壷形埴輪は周溝残存範囲のほぼ全域で見出される。それらは周溝内に均一に散乱するのではなく径0.5m～1m内外の範囲で細片化しているものの多くは同一個体と見られる破片が集中する箇所が不規則に連続する。その多くは葺石－既に述べたように転落・移動の可能性が高い－間隙あるいは直上に見出され，そうでない場合は溝底にほぼ貼り付いている。しかし周溝内にそれを並立した形跡はないし，多くは細片化した破片は完形近くまで揃うことは極めて希であった。今少し墳丘斜面の上方か，あるいは墳頂部に樹立された壷形埴輪が葺石などの崩落に伴い周溝内に流入したものであろう。また鉄鏃2本が同様に墳丘南側の葺石間から重なって出土している。他に副葬品とおぼしき遺物，あるいは石槨石材や粘土塊等の主体部材の残滓らしきものも周溝内で確認していない。

円筒埴輪は胎土色調から3グループに分かつことができ，それぞれで出土状況に明瞭な違いがある。1は角閃石細粒を濃密に含む特異な胎土の1群である。1号墳出土円筒埴輪と同じ特徴を持つ。これらは周溝南部の1号墳周溝重複部分やその近辺に多く見出され，溝底よりやや浮いた位置にあるものが多い。1号墳に伴う円筒埴輪が，後に1号墳の自然崩壊か削平に伴って流入したものと理解できる。2は概ね黄白色を呈し砂粒の混入が少ない。その型式的特徴は後に詳しく見るが，明らかに1号墳出土円筒埴輪や大形竪穴建物あるいは谷3資料よりもかなり後出する内容である。このグループは周溝各所から散在的に出土しており，特定箇所に偏在する傾向はない。後で見るように北側に隣接する3号墳出土埴輪に極めて近似する特徴を有するので，同墳からの混入の可能性がある。しかし，周溝南端部においても同程度に出土することから一概にそのようにも理解しがたい。本墳に伴う可能性も否定できない。この位置づけ如何によっては2号墳の年代決定に影響する資料であるが，出土状況からは確定的な見解を出すことは困難である。3は大形竪穴建物出土埴輪に胎土・形態が近似し，胎土の点では大形竪穴建物や本墳周溝出土の形象埴輪類・土製棺片とも特徴を共有し，出土位置・状況は形象埴輪・土製棺片のそれと一致する。また1号墳東縁で検出し，先に同古墳に伴わないと推定した埴輪類はこれと同質の様相を持つ。円筒埴輪のこのグループと形象埴輪・土製棺片は周溝確認範囲の南東隅，つまり丘陵

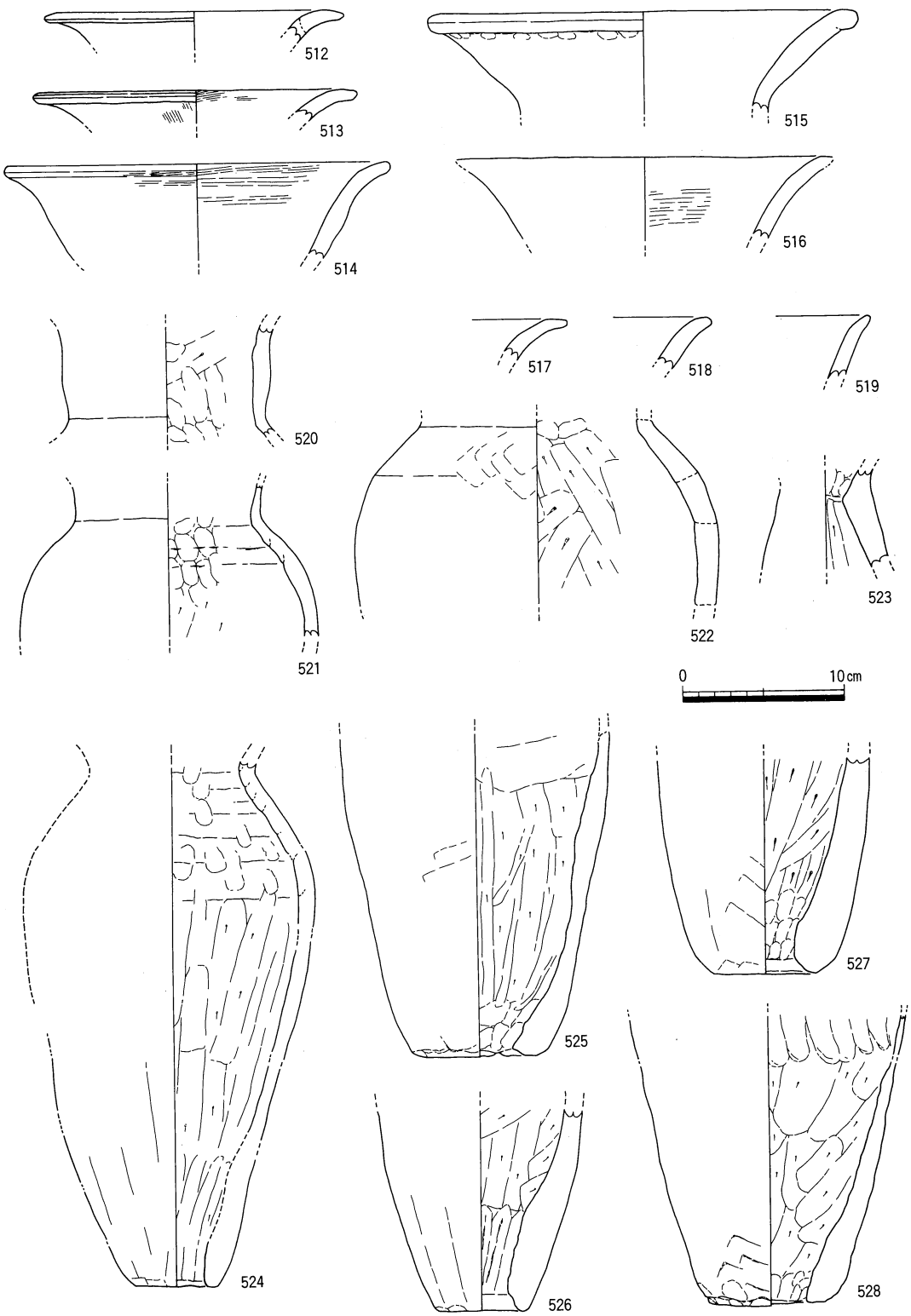
東縁において多く出土し，家形埴輪大形片も比較的まとまった量含まれる。周溝西側で出土した少量の破片は溝底から浮いたレベルで散発的に見出される傾向にあるが，この部分では葺石直上でまとまって検出したものも多い。この点は1号墳における同類資料の出土状況に通じる。むしろこれらは2号墳あるいは1号墳に伴うというよりも，丘陵東縁部に散在すると見た方がよいであろう。5d区の溜め池部分造成土層に，1・2号墳共伴埴輪がほとんど含まれないにも関わらず，この1群と土製棺片がまとまって見られることはこの予測を支持する。また後に述べるように，この一群は2号墳に伴う事が確実な壷形埴輪の年代観とも矛盾する。むしろ型式的特徴から判断すれば大形竪穴建物出土資料と差異はない。今回の調査で未確認の別個の古墳に伴う埴輪・土製棺類の可能性は完全には否定できないが，先に示した大形竪穴建物の位置と削平状況を考慮すれば，それの破壊時に丘陵東部に流出した一部と考える事は特に困難ではない。少なくともこれらが2号墳に伴うと判断することが難しい点を強調しておく。

須恵器片は小片であるが判別可能な限りではいずれも8世紀代に下る資料である。1号墳同様に全てが周溝上層から出土しており明らかに後世の流入資料である。

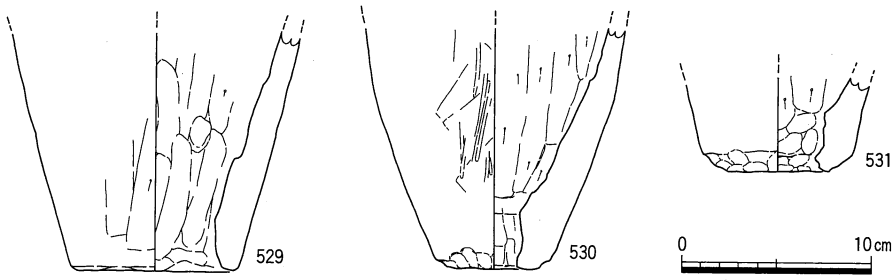
512～522・524～531は2号墳出土の壷形埴輪である。推定器高33～35cmで口径20～25cm，体部径は20cm弱と細い。いずれも赤褐色に近い色調を呈し石英粗粒を多く含むが赤色粒・角閃石などはほとんど含まない。焼成は比較的堅緻であるが須恵質というほど硬質ではない。また随所に黒斑と思われる暗色系の変色部分がある。

512～519は口縁部片。緩やかに外反して開き，端部付近で鈍く屈曲する形態。二重口縁形態は見られない。端部形状は515の様に鈍く玉縁状に肥厚する例もあるが，多くは鈍く尖る。粗雑なハケ調整の後に横ナデを加える。全体に厚ぼったく端部の作りも精緻さに欠ける。520・521ではほぼ直立する頚部形態が想定できるが，522・524の肩上端部を見ると必ずしもそのようではないらしい。523は細身の円柱状を呈し上部でやや括れる。内面下半は縦ケズリ，上端は指押さえ。壷形埴輪には含めがたいが胎土・土質の類似からここに掲載した。

524～531は壷形埴輪体部。全形を知りうるのは524のみである。ほとんど円筒と化した細身の体部で肩部がわずかに張り，上端はよく絞り込む。底部は成形後の穿孔ではなく当初から充塡せずに開口している。外面は平滑になでる。内面基底部は指押さえが顕著だが，それ以上，肩部最大径まではケズリ上げる。肩部は細かい単位で粘土帯を積み上げて内傾する形状を作り上げている。この部分の内面は粗雑に指押さえが加えられるだけで接合痕



第122図　2号墳出土遺物1　壷形埴輪（1／4）



第123図　2号墳出土遺物2　壷形埴輪（1／4）

を顕著にとどめている。525は体部径が一回り大きく，基底部もあまり絞り込まれずにより円筒形に近い。527・528では外面基底部付近に連続的に板圧痕が観察できる。無刻原体による叩き締めの形跡かもしれない。529は外面基底部でわずかだが上方向の砂粒の動きが観察できる。しかしケズリ調整と見なすほどではない。530は外面にミガキ状の縦方向の条線が認められるが明瞭ではない。また528・530・531では底面付近に特に指押さえが顕著に見られる。

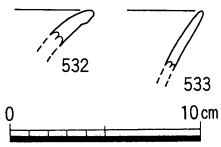
532・533は土師器片。口縁部だが小片で器種の特定は難かしい。533は小形丸底土器でもよい。

534・535は葺石間出土の鉄鏃。いずれも平板な作りで鏑はない。534はやや大形で幅広。逆刺がある。やや小形の535も逆刺があるようだが確定できない。

537～543は2号墳出土の円筒埴輪。現時点で2号墳に伴う円筒埴輪か混入品かの判断は困難である。口径30cm弱と小形である。いずれも黄白色～灰白色の淡色系の色調を呈し石英粒を少量含む。焼成は軟質である。

537は直線的に鈍く開く口縁部を持つ。端面が緩く凹面をなしつつ四角く収める。小形の台形突帯で頂部は凹面をなす。2段目に円形透かし推定2方を穿つ。外面縦ハケ調整で口縁部付近のみナデ消す。内面は口縁部のみ横ハケを施す。538～541は中位段の小片。小形の台形突帯を付し調整は不明。538は円形透かしの一部が残る。542は部分的に二次横ハケを施すが静止痕は未確認。小形の台形突帯を付す。543は小形の台形突帯を付し，外面縦ハケ，内面の一部に横ハケを見る。

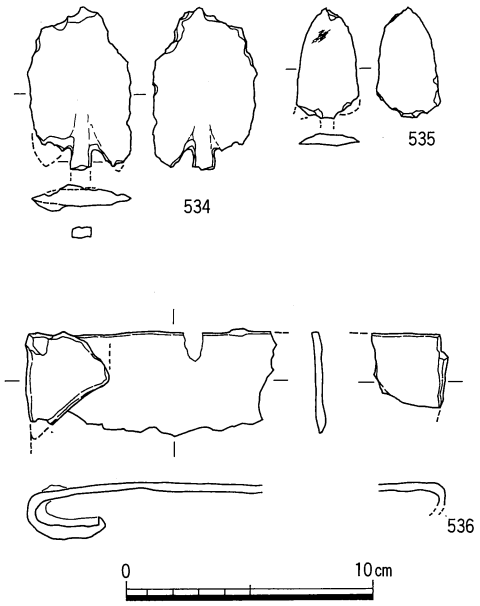
本墳の壷形埴輪は，形骸化した体部形態の点で高松市権八原古墳群C地区円墳出土のそれに比較的近いが，その傾向はより発展している。同古墳の厳密な時期比定も難しいが，周辺の状況から古墳時代中期中・後葉の1点に置くことが妥当であろう。したがって本墳は古墳時代



第124図
2号墳出土遺物3
土師器（1／4）

中期後半に取りあえず比定できる。また3号墳資料に類似した円筒埴輪がこれに伴うとしてもこの想定と特に矛盾はない。

以下に述べる推定3号墳・ＳＸ０３は工事中に不時発見した遺構であってそのごく一部分を確認したに過ぎない。にもかかわらず古墳と推定したのはその形状に加えてそれらから埴輪片のみを検出したからである。既に1章で示したようにこれらの調査にあたっては遺構の残存状態も良好ではなかったが，それ以上に工事工程との関係で乏しい知見しか得ることができなかった。深く反省しなければならない。



第125図　１・２号墳出土鉄器（１／３）

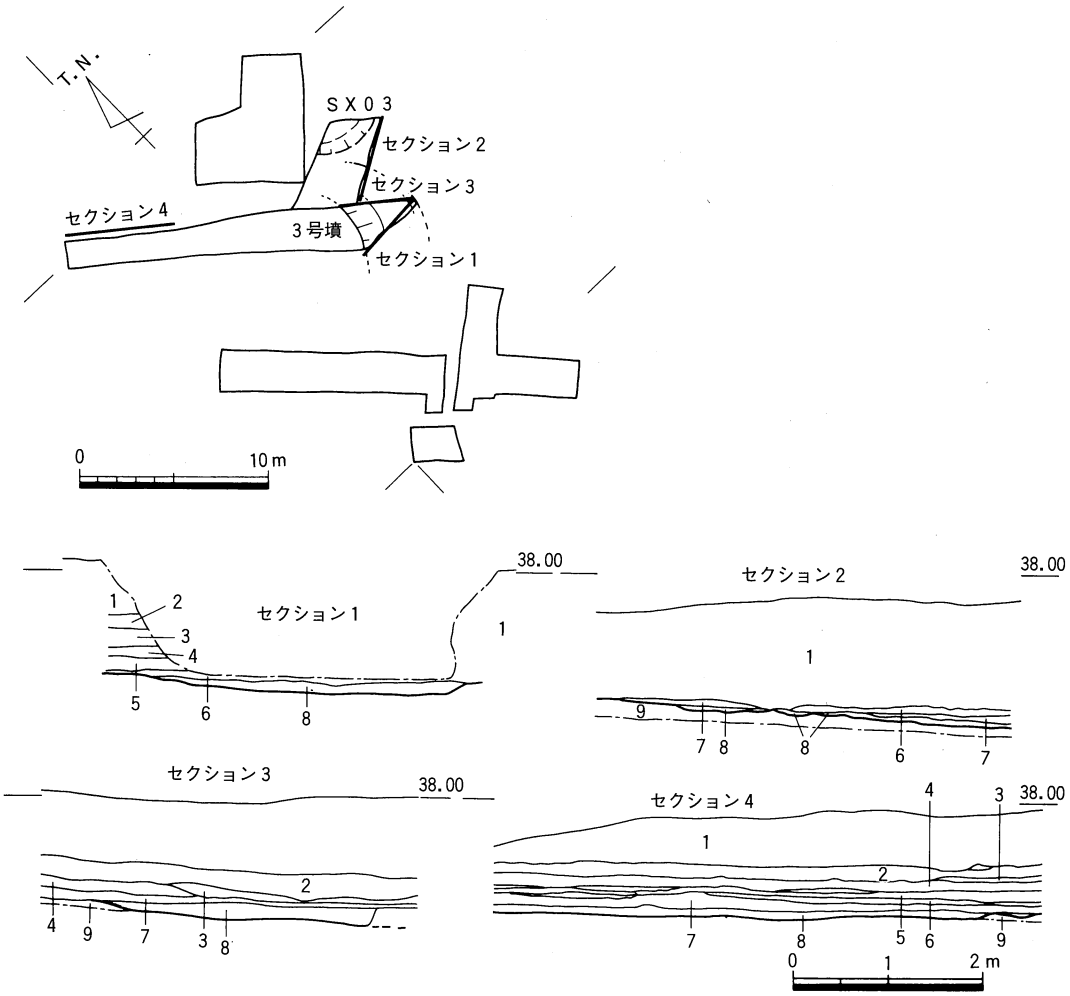
３号墳

５ｅ区については当初２号墳北半部が残存している可能性を考慮して南半部にトレンチ１～３を，次いで北部にトレンチ６を設定した。しかし水田造成時の削平が著しく２号墳周溝北端部と推定した位置のトレンチ１～３では水田区画に伴う段差と極めて希薄な中世以後の遺物包含層を確認したにとどまる。これによって２号墳北部（５ｅ区部分）は周溝まで含めて完全に破壊されていると判断した。またトレンチ６においても同様に遺構・遺物は確認できず著しい削平が及んだものと判断した。しかしその後トレンチ１～３北側部分のの掘削工事途上で，南に向かって閉じる弧状溝の一部が掘削面で確認された。急遽工事側の了解を得て，その隣接部分にトレンチ４・５を設定し弧状溝の全体把握に努めた。

その結果上部は中世以前に削平を蒙り残存状態は甚だ不良ながらも幅３ｍ内外，深さ0.1ｍ程度の浅い溝状遺構をトレンチ４で検出した。周辺の削平が著しく溝は断続的にしか残存していなかったが工事区域からトレンチ４東端にかけて確認した。また同じ溝の延長部分と理解されるわずかな落ち込みを同トレンチ西部でも検出した。それらから復元して弧状溝はトレンチ３西端北側に中心をもつ径15ｍ内外の円形周溝の一部と推定した。しかし

既調査のトレンチ３・６でそれに関わる遺構は検出しておらず，ごく局部的な残存と考えられる。

埋土は暗褐色粘質土で葺石あるいは石列材の可能性がある石材は検出していない。また埋土に炭片などは交えていない。遺物は小片が多いが，いずれも黄白色を呈する無黒斑の円筒埴輪などであった。以上から詳細は確認できていないものの本遺構を径15ｍ前後の円墳周溝の一部と判断した。この想定が正しければ２号墳北側に位置し，これと相接するか周溝の一部が重複する位置関係になる。



第126図　３号墳・ＳＸ０３検出状態図（１/400・１/80）

544～548は３号墳周溝残部出土埴輪。黄白色～灰白色の淡色系の色調を呈し石英粒を少量含むなど，その特徴は２号墳出土円筒埴輪に酷似する。544は直線的に開く円筒埴輪口縁部。端面は鈍く窪み，内面に横ハケを見る。545は朝顔形円筒埴輪の口縁屈曲部。頚部に粗い縦ハケが残る。546・547は中位段片。突帯はかなり矮小化している。547は外面１次縦ハケ調整で円形透かし孔を穿つ。548は基底部片。断面三角形の小形突帯直上に円形透かし孔の一部が残る。本墳出土円筒埴輪もかなり小型である。

549は形象埴輪片。家形埴輪片か。コーナー部付近で突出部分は屋根下端か。壁体に方形の刳り込みが見える。胎土・色調は円筒埴輪と異ならない。

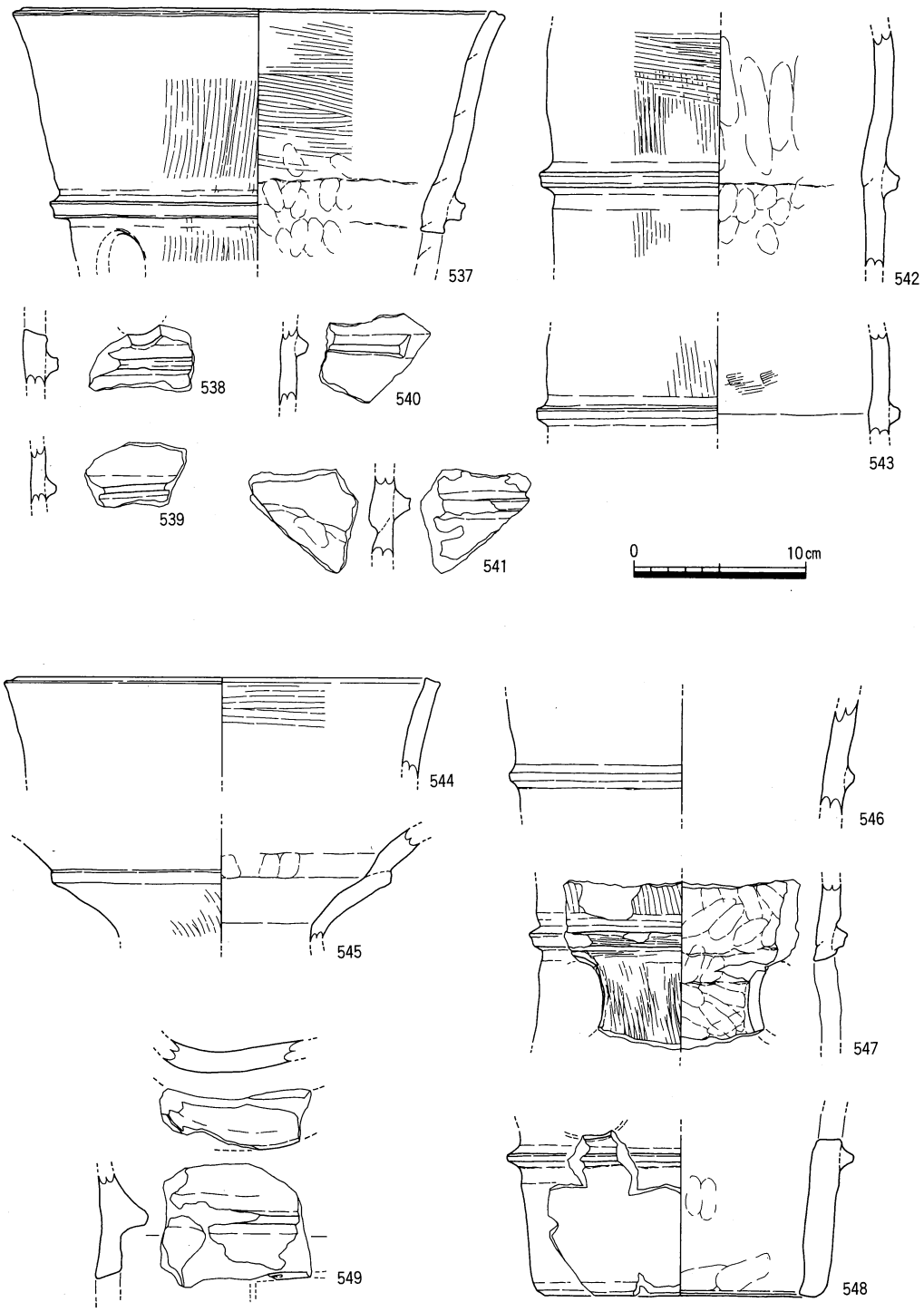
これら埴輪類の形式的特徴から本墳は古墳時代中期後半に位置付けることができる。

不明遺構ＳＸ０３

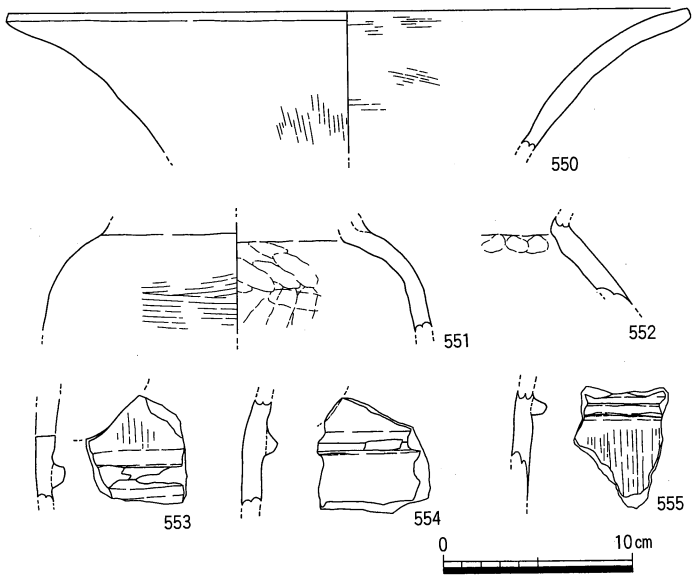
なおトレンチ５北端でもわずかばかりの緩やかな落ち込みを検出した。トレンチ北西コーナーに向かう緩やかな落ち込みでその外縁は弧状を呈する。確認範囲では最深部でも深さ0.1ｍ弱と残存状態は極めて不良である。埋土は３号墳周溝と同様の暗褐色粘質土である。やはり若干の円筒埴輪片ばかりを検出している。先行して設定したトレンチ６で関連する遺構を確認していないので，この落ち込みも局部的にしか残存していないものと思われる。工事の進行によってこれ以上の確認行為は困難であった。甚だ根拠は薄弱であるが，出土遺物から３号墳に隣接する別の古墳がの存在した可能性を想定しておく。

550～555はＳＸ０３と推定した落ち込み部分出土の円筒埴輪。胎土・色調の特徴は２・３号墳出土円筒埴輪と異ならない。550～552は朝顔形円筒埴輪。口縁部550は強く外反して開き，端部は四角く収める。551・552は肩部であろう。551では外面に横ハケ調整を見る。553～555は突帯がひどく矮小化する。553・555は外面に縦ハケが残る。

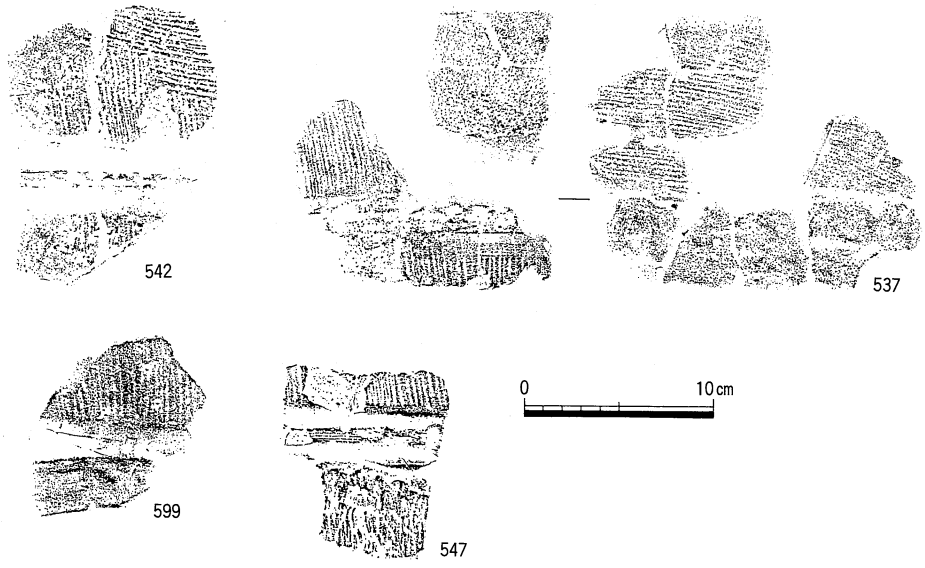
以上の埴輪類も型式的特徴から３号墳同様に，古墳時代中期後半に位置づけることができる。



第127図　2号墳出土円筒埴輪・3号墳出土円筒埴輪・器財形埴輪（1／4）



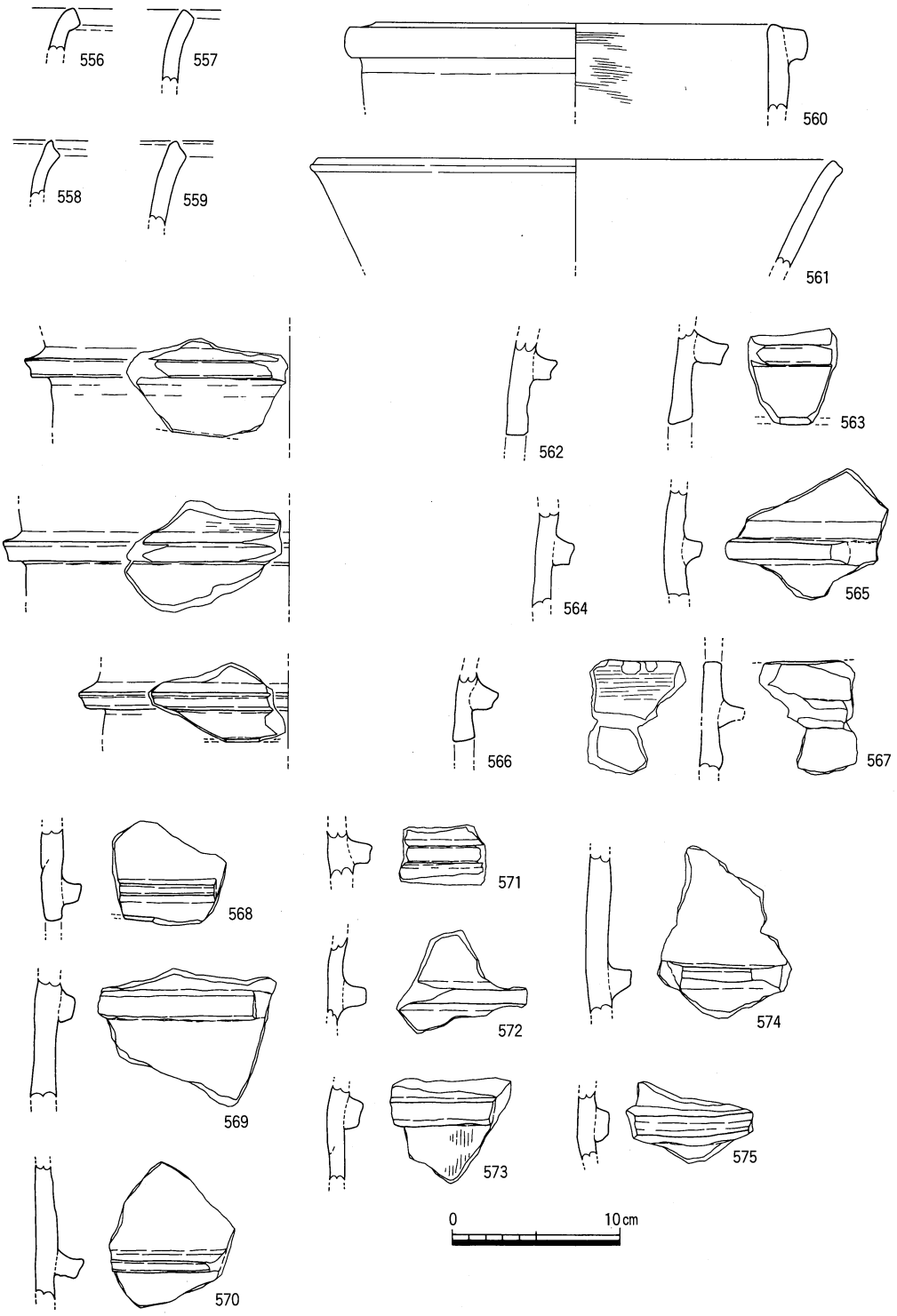
第128図　ＳＸ０３出土円筒埴輪（１／４）



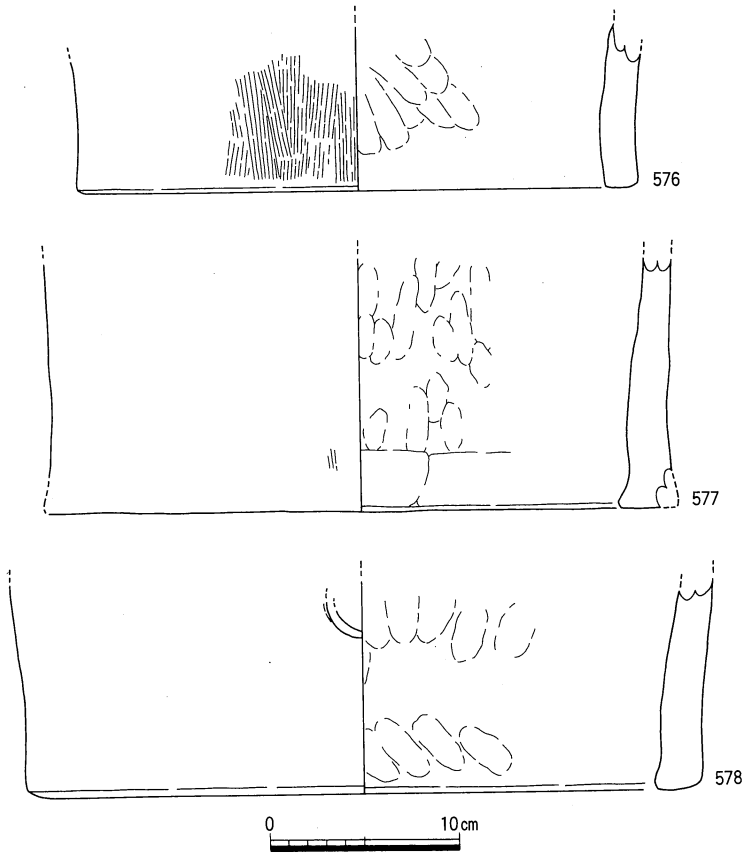
第129図　２・３号墳出土円筒埴輪拓影（１／４）

１・２号墳周辺流入資料

462・556～598は１・２号墳周溝東部など，丘Ｃ東縁部から出土した埴輪・土製棺類である。既に述べたように１・２号墳に伴うものではなく，大形竪穴建物などの資料がその地点に二次的に堆積した可能性が高いと考える資料である。全般的に色調・胎土は大形竪



第130図　古墳群周辺出土遺物１　円筒埴輪（１／４）

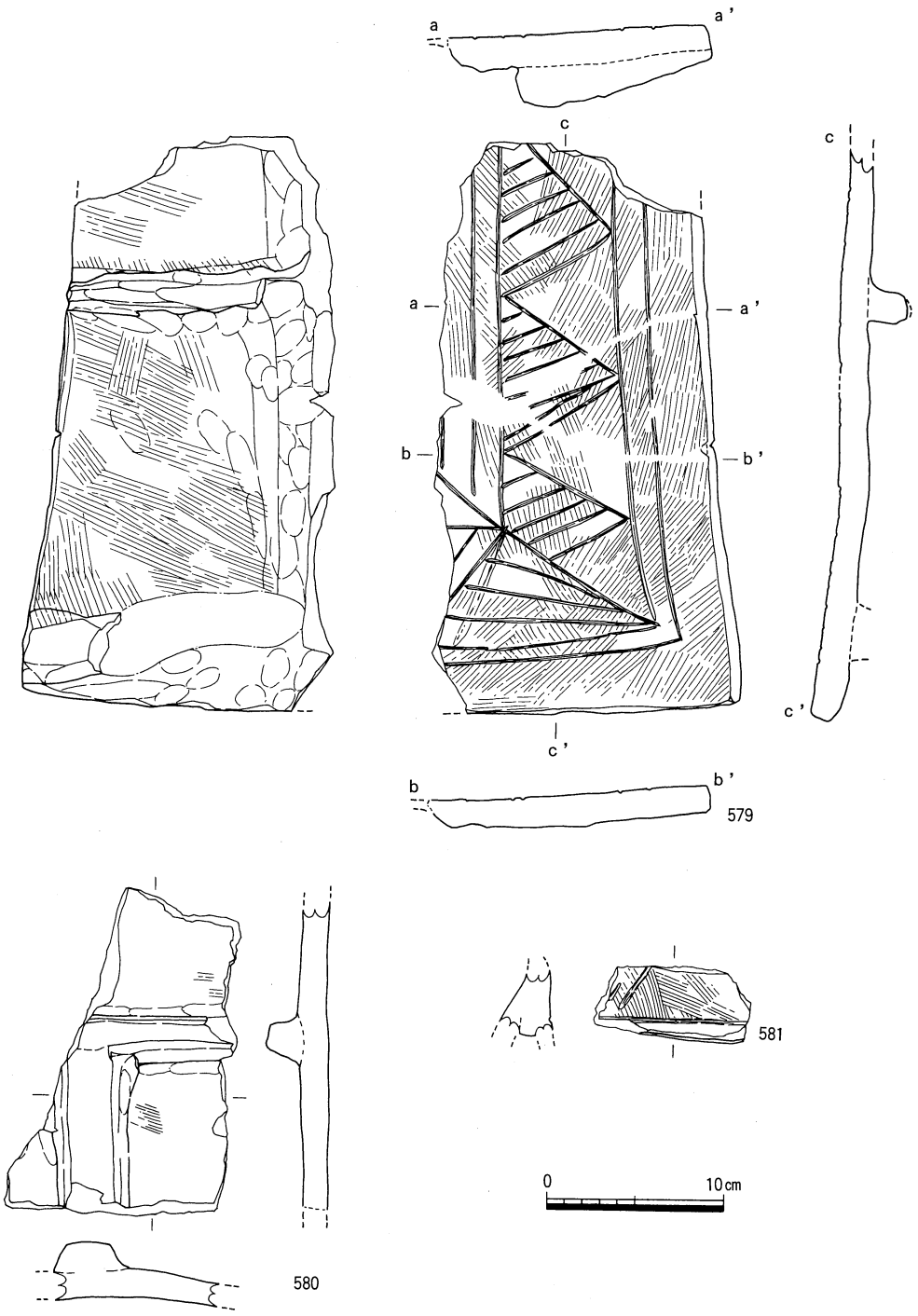


第131図　古墳群周辺出土遺物２　円筒埴輪（１／４）

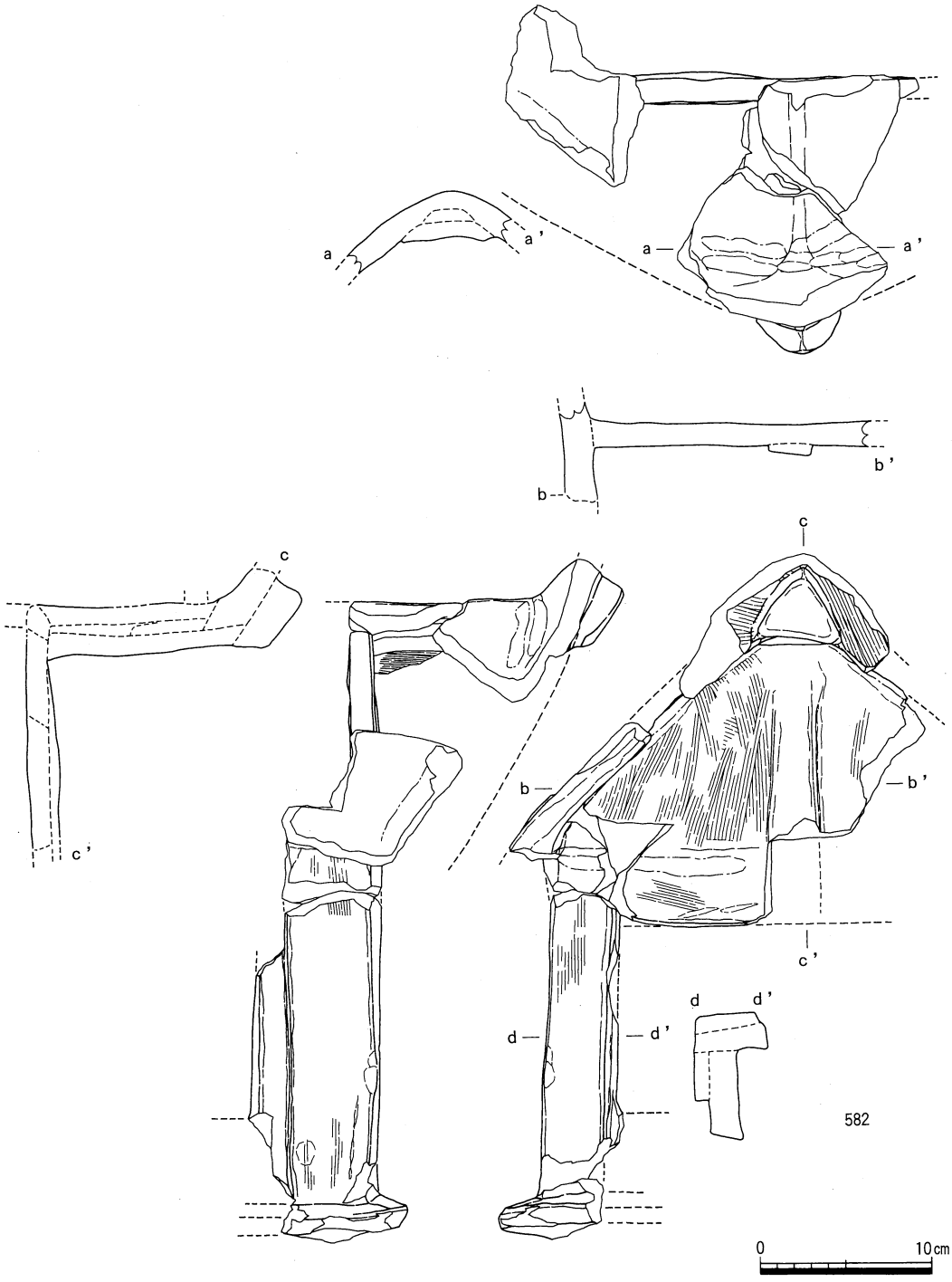
穴建物出土遺物によく似る。橙色ないしは赤褐色もしくは褐色を呈する。石英粗粒を多く含む。赤色粗粒も見られるがあまり多くはない。極微量の角閃石細粒も見られる。

556～561は円筒埴輪口縁部。谷３資料，古墳群資料とは異なる形状であることに注意したい。556は口縁部を小さく折り曲げ，端部はやや張る。557～559もこれより遙かに微弱だが同様の傾向を持つ。558では端部の張り出しが特に顕著。560は口縁端部外面に突帯を巡らし有段とする。561は谷３資料と異ならない口縁部形態。ただし小片のため図化した傾きは微妙。

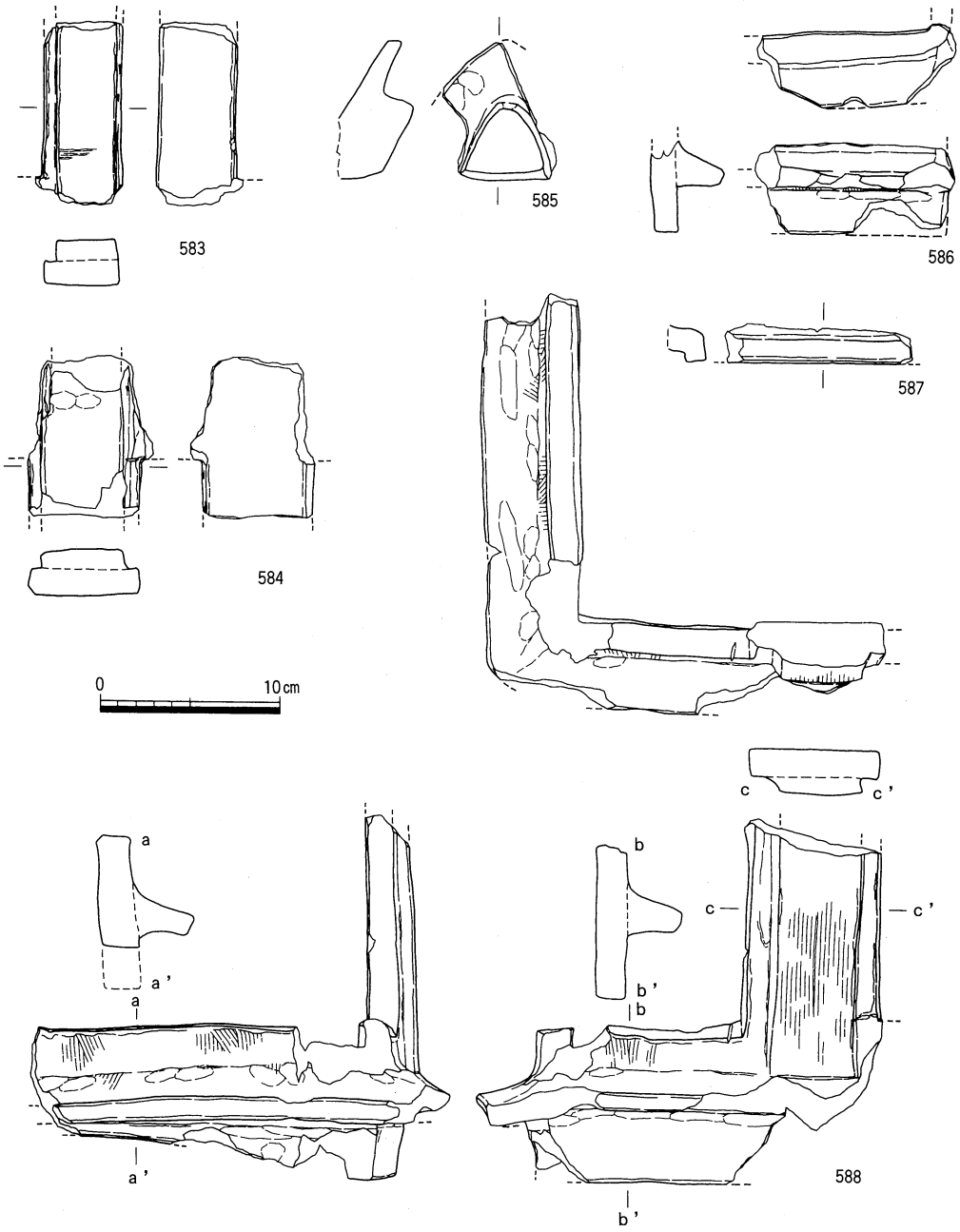
562～575は円筒埴輪中位段小片。562・563・566～568では直線的な刳り込みの透かし孔が見られる。長方形ないしは三角形透かし孔である。円形透かし孔はない。外面調整の細部は不詳だが，少なくとも基底部以外では縦ハケ調整後ナデ消すものが多いようである。突帯は563・567・570のように強く突出して上端を摘み出す形態，562・566・568・574



第132図　古墳群周辺出土遺物３　盾形埴輪他（１／４）



第133図　古墳群周辺出土遺物４　家形埴輪（１／４）



第134図　古墳群周辺出土遺物５　家形埴輪（１／４）

など比較的突出度の高い台形で上部を突出させる傾向を持つものが多いが，569・573・575の扁平な台形突帯も含む。

576～578は円筒埴輪基底部。576・577では外面に縦ハケ調整が残る。内面は指ナデも

しくは指押さえが見られるがその凹凸はあまり顕著ではない。578は円弧を描く透かし孔の一部が残る。穿孔部位から見て半円形透かし孔の一部であろうか。

579は盾形埴輪盾面片。大形竪穴建物出土盾形埴輪383にほぼ一致した文様構成をもつ。外縁に沿って二重沈線が巡り，その内側を対角線方向の斜線で4分割。内区は縦方向の並行沈線，外区には鋸歯文を配する。383との違いは側縁外区が外向鋸歯文であること，下縁のそれが複合鋸歯文であることである。裏面には横方向の補強材2条が残る。補強材の間隔も約10cmと383に一致する。

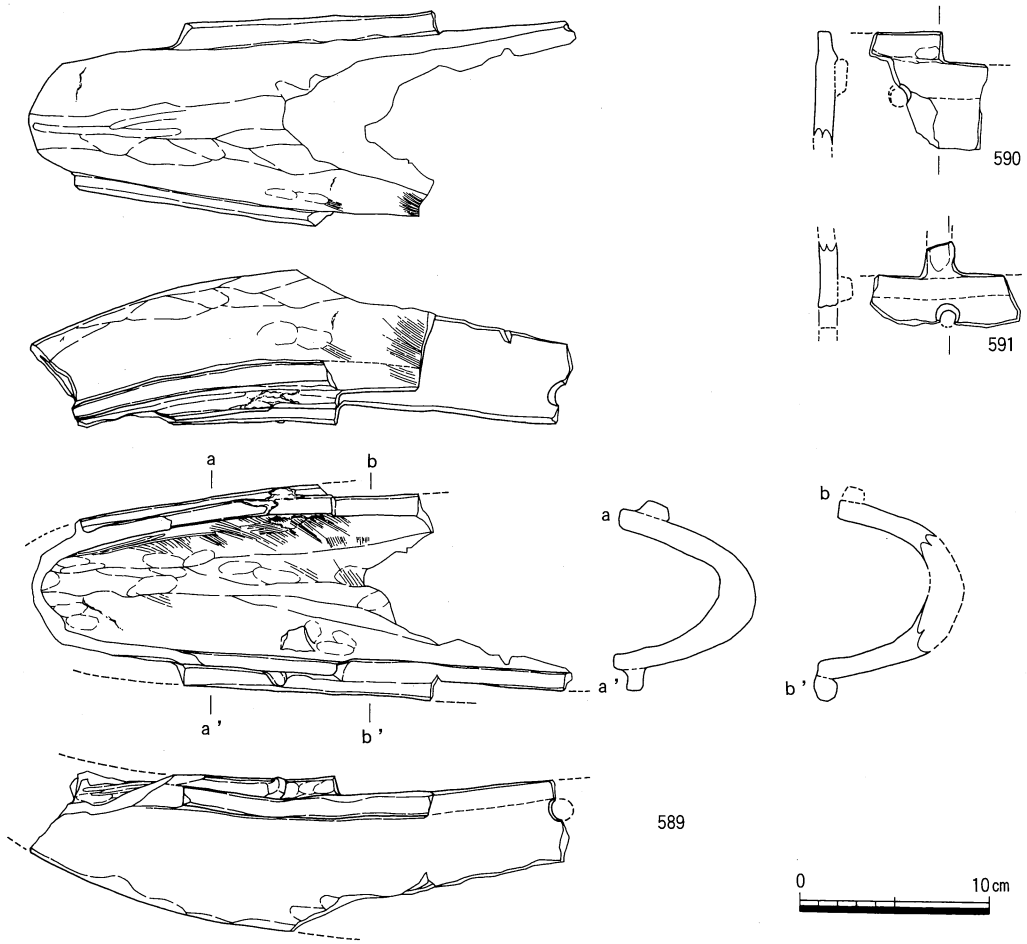
580は土製棺片。横断方向にわずかだが弧を描く。外表には大形突帯を縦横に配する。小片であるがこのような突帯配置は組み合わせ箱形土製棺459にも見られる。

581は不明形象埴輪片。表面は沈線文，裏面には斜行して別材が取り付く。

582～588は家形埴輪。582は家形埴輪妻部で屋根から壁体下部の一部までが残存する。屋根材妻部には破風板が作り出され，その頂部に三角形様の突起がある。屋根裏面にはそれから連続するように粘土帯を貼り足す。丁寧な棟木表現である。壁体妻部は下半部はコーナー部を除いて大きく刳り抜く。壁側面についても同様である。コーナー部は粘土帯を足して浮き彫り状に柱を表現する。同様に壁体上部には棟持柱と梁材の表現が見られる。また隅柱下端には縁側状の張り出しが見られる。破風板・壁および壁体より外側の屋根材裏面にはハケ調整が観察できる。内面は指ナデ調整が基調となる。

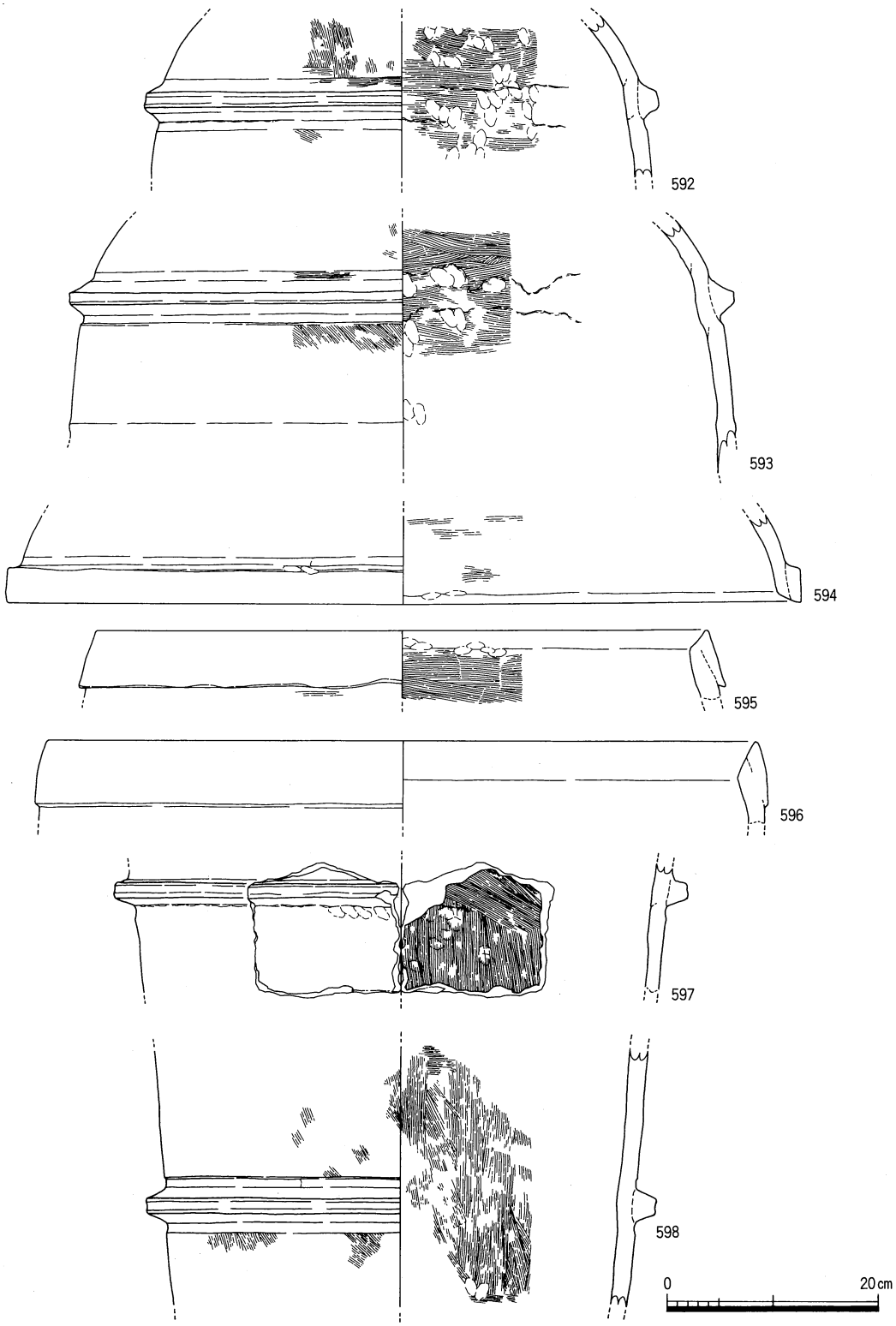
583・584は壁体柱部片。いずれも柱の際で壁を刳り抜き，柱自体は浮き彫り状に表現する。585は破風板頂部片。三角形様の棟木表現がある。586は壁帯に水平方向でやや垂下気味の板が取り付く。2階建て構造の1下階軒表現か下部の縁側状張り出し部分であろう。587も壁体に取り付く部材。「く」字に折れる。下階軒材か。588は家形埴輪壁体。コーナー部分を含む大形片である。隅柱は欠損しているが，中間部分の柱材が残る。本例でも柱部を除いて壁を大きく刳り抜く。柱は浮き彫り状に表す。下縁近くにはわずかに垂下気味に幅広く縁側状張り出しが取り付く。壁体外面は縦ハケ調整。内面はナデ調整。

589～591は船形埴輪。589は船体の1/3強が残る。船底は丸みを帯びて断面U字形。断面形状からすれば一体成形船か。側縁上部に突帯でフェンダー表現が見られる。船体中程は側縁が一段低くなるが，明確なピボット表現はない。隔壁表現の痕跡がある。また中位でフェンダー直下に円孔を穿つ。船体表現としては不可解。590・591は側縁部小片。589と同一個体片か。590は側縁の段差部分。フェンダー剝離痕直下に円孔を穿つ。591側縁の突起はピボット表現か。やはりフェンダー剝離部直下に円孔がある。



第135図　古墳群周辺出土遺物６　船形埴輪（１／４）

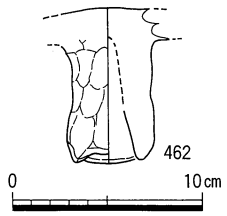
592～598は円筒形土製棺。いずれも外表の突帯は横帯のみである。592は一方に向かって緩やかに閉じる形態。中位に大形の台形突帯１条を見る。外面縦ハケ後突帯上下部分横ハケ。内面横ハケ。半球形の蓋であろう。593もやや縦に長いが上部が半球形に閉じる気配なのでおそらく蓋であろう。湾曲部に大形台形突帯１条。外面斜ハケ後突帯上下は横ハケ。内面横ハケ。594は傾きから蓋と推定した。端部片である。端部外面に幅広の突帯を付し，端面は斜めに落とす。内面横ハケ。595・596は傾きから円筒棺本体の口縁部と推定した。蓋同様に端部外面に幅広い突帯を付し，端面は斜めに落とす。595は内面に横ハケが観察できる。597・598は大形の台形突帯から円筒形土製棺本体と推定した。小片のため図化した器径にはやや躊躇がある。597では内面は緻密な縦基調のハケ調整。598は内外面縦ハケである。



第136図　古墳群周辺出土遺物７　円筒形土製棺（１／６）

462は大形竪穴建物資料で組み合わせ箱形土製棺小口板に装着されていたのと同様の茸状土製品茎部であろう。やはり中空で外面は指押さえが凹凸顕著である。

これらは既に度々述べたように胎土・形態の点で大形竪穴建物出土資料に酷似する。したがって同様の時期に位置づけることができる。

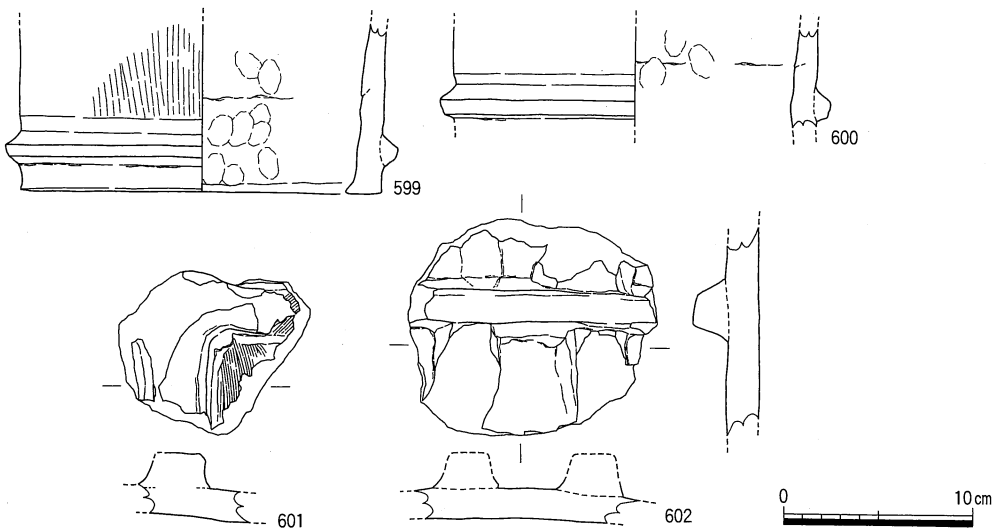


第137図　古墳群周辺出土遺物８
箱形土製棺部材（１／４）

１ｂ区中世包含層等出土の古墳時代資料

599～602は調査区北部の１ｂ区，つまり丘Ｃ北東部で中世以降の包含層等に混在していた古墳時代資料である。出土位置から見て，古墳群もしくは大形竪穴建物など丘陵東部の古墳時代遺構に本来帰属した資料である可能性が高い。

円筒埴輪599・600は胎土・色調の点で３・４号墳等出土円筒埴輪に極めて類似する。599は円筒基底部に近接して断面三角形の小突帯が巡る。外面１次縦ハケ。600はやや扁平な小形台形突帯を持つ。調整不詳。共に径20cm前後と小形の円筒埴輪である。601・602は土製棺片であろう。ほぼ平板な小片で棺形態は定かではない。外表に大形突帯を縦横に貼る。土製棺459・580の突帯配置と同様である。



第138図　１ｂ・２区出土円筒埴輪・土製棺（１／４）

第３節　古代以後の遺構・遺物

1. 古代

大形竪穴建物・焼成土坑は既に述べたようにかなり大規模な削平を蒙っており，その削平面ないしはそれと近似したレベルの埋土上層部分でそれぞれ奈良時代後半～平安時代初頭に比定できる須恵器片を出土している。（659）また丘陵東縁部の１・２号墳周溝上層においても須恵器片が出土している他，谷３でも大部分は中世以後の耕作に伴う撹乱層出土資料であるが，やはりこの時期の遺物片が若干量認められる。明確な遺構としては確認できなかったが，このような形で古代の遺物が少量出土している。

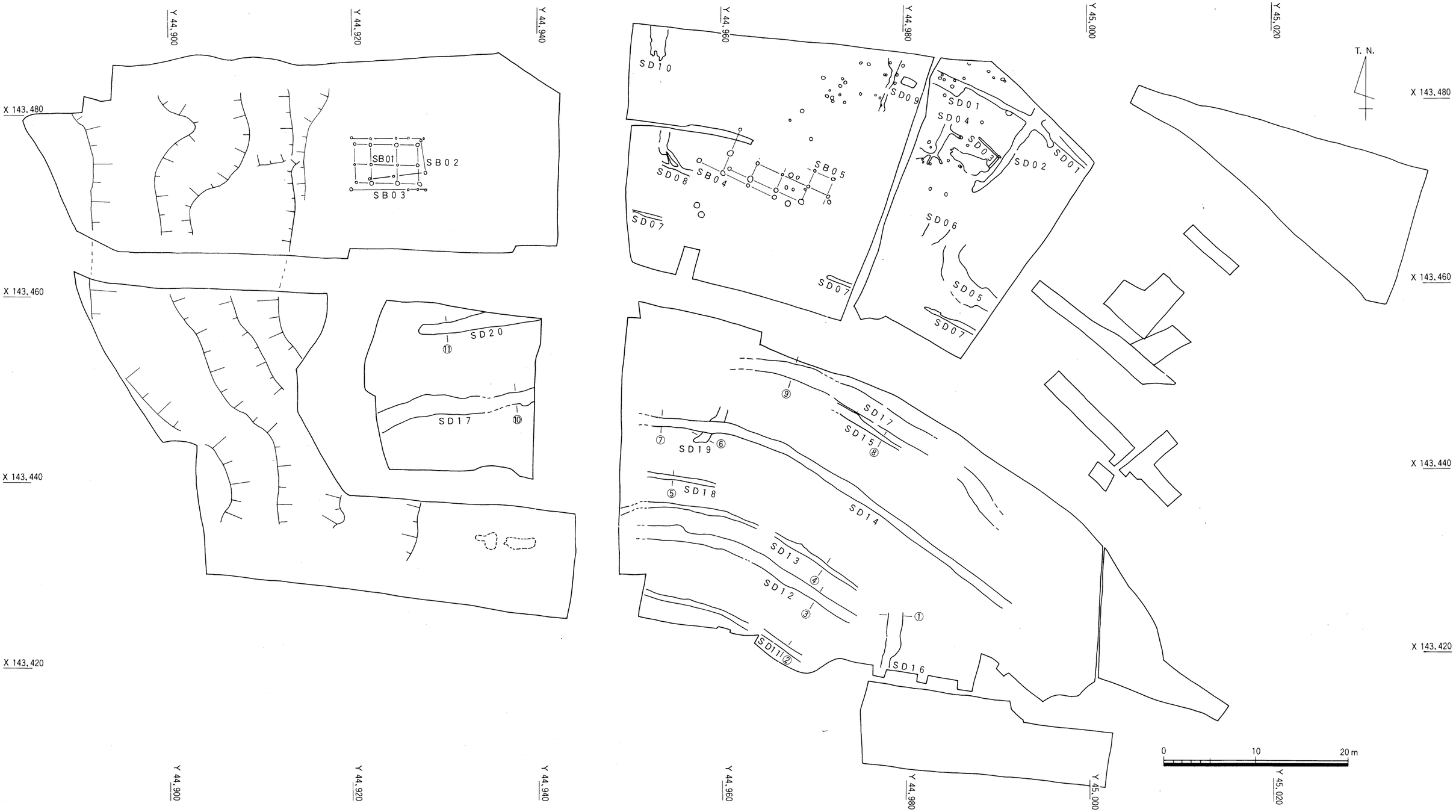
先行する古墳時代の諸遺構の一定程度の削平を含めた丘陵Ｃ全体に対する改変行為がこの時期になされたと推定できる。長胴甕片を出土したＳＤ１７は唯一この期に遡る可能性がある溝状遺構であるがこの他には，柱穴等の建物遺構の形跡すら認められない。したがってこの時期の改変行為は集落域の造営ではなく耕地開発に伴うものであったと推定する。以後の継起的な開発と耕作によってほとんどその形跡を留めていないが，須恵器などの出土状況から本丘陵の再開発の起点はこの時期に遡ると予想する。

2. 中世

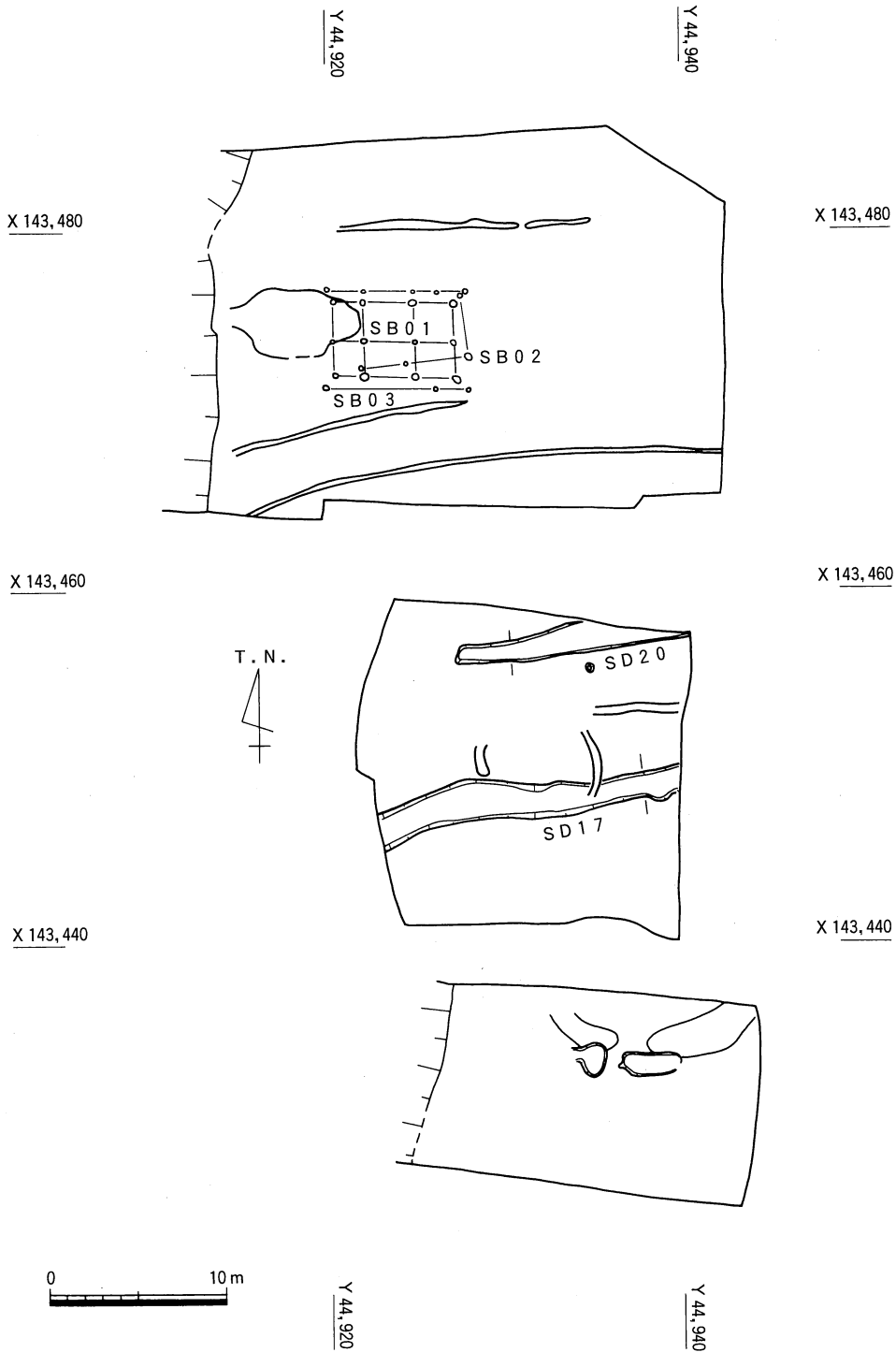
この時期も詳細な時期区分を行うことが僅少な資料からは困難であるので一括して取り扱う。大局的には三足羽釜出現以降の資料が大半を占めるが希に平安後期に遡る遺物を散見する。従って中心となるのは中世後半であるがその中でも一定の時期幅がある。

谷３はかなり埋没が進行しているので水田利用の可能性が高いが，確認はできていない。この時期の遺構埋土・遺物包含層は灰色～暗灰色砂質土からなる。丘陵部分では南半部（３ｂ・３ｃ・５区）には一定間隔で等高線に並行する小規模溝群が連続する。この一角では建物遺構を全く伴わない。畑地か水田かは不分明であるが耕地区画であろう。断片的なデータから判断すれば５ｅ区も同様の土地利用を想定すべきであろう。５区東部のの小規模溝の方向を見ると，古墳群の存在に配慮した形跡は見いだしがたい。やはり中世段階にはかなり削平が完了していたようである。

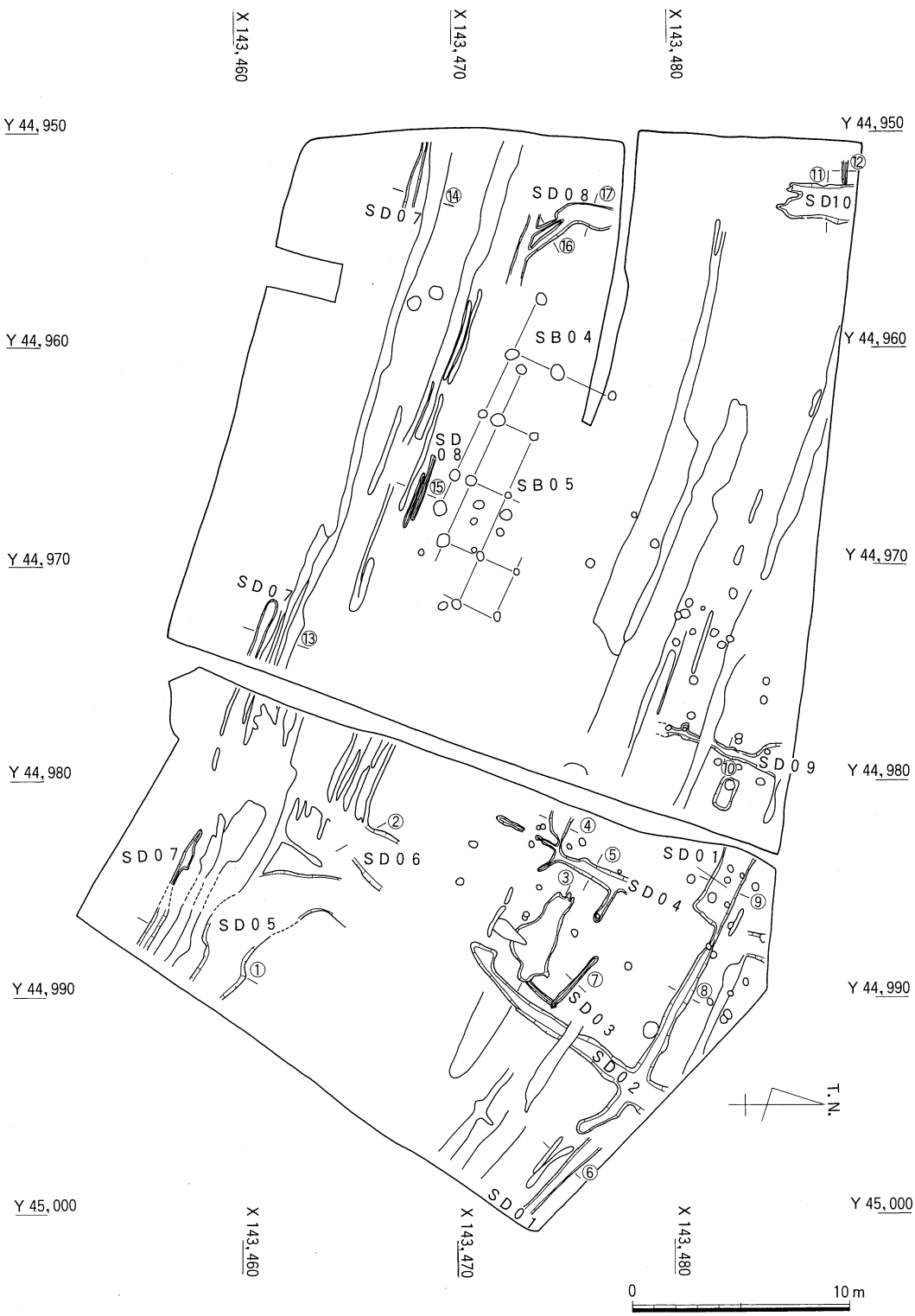
北部には２群の居住単位が認められる。東北部分（１ｂ・２区）では東西30～40ｍ，南



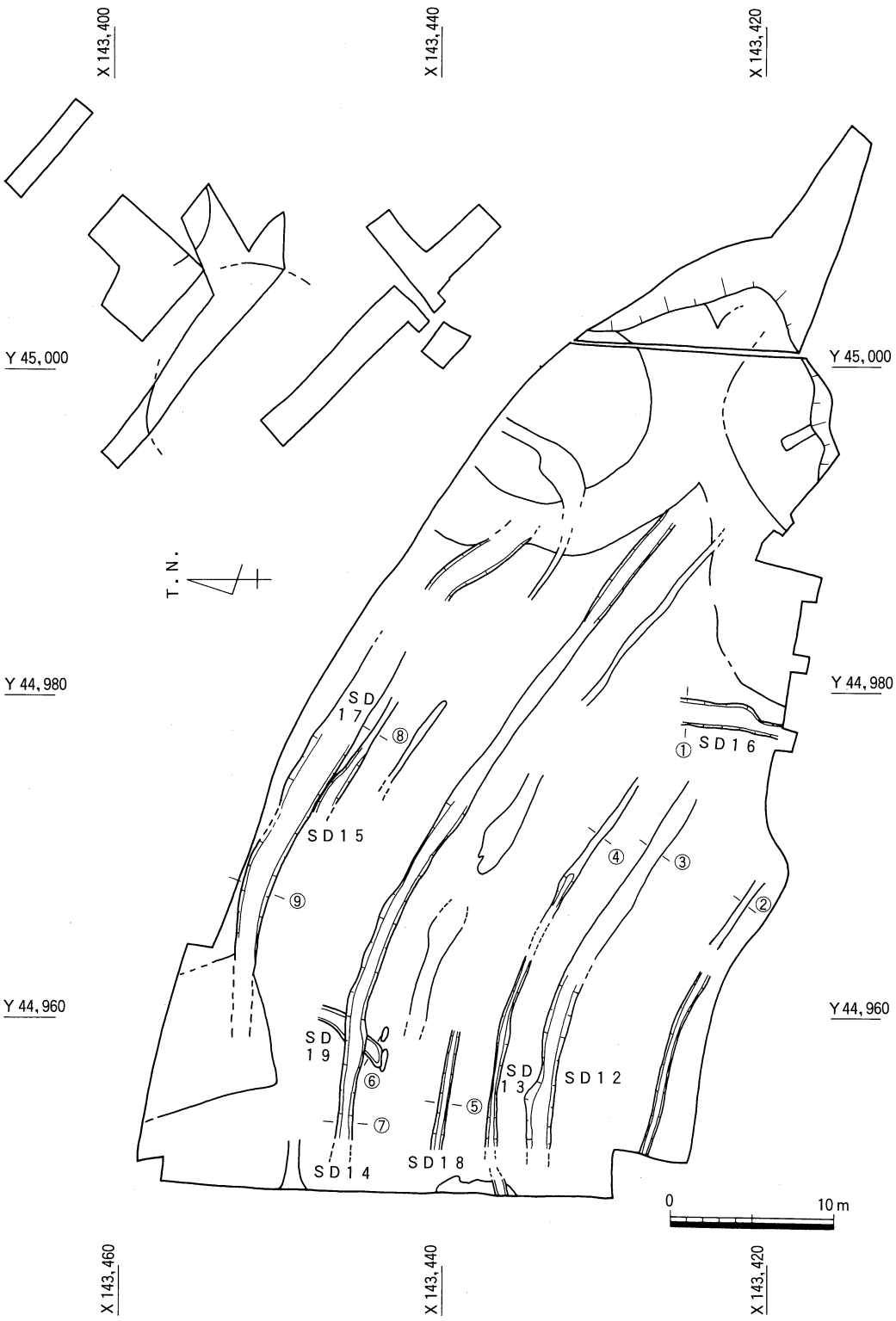
第139図　古代・中世遺構配置図（1 /400）



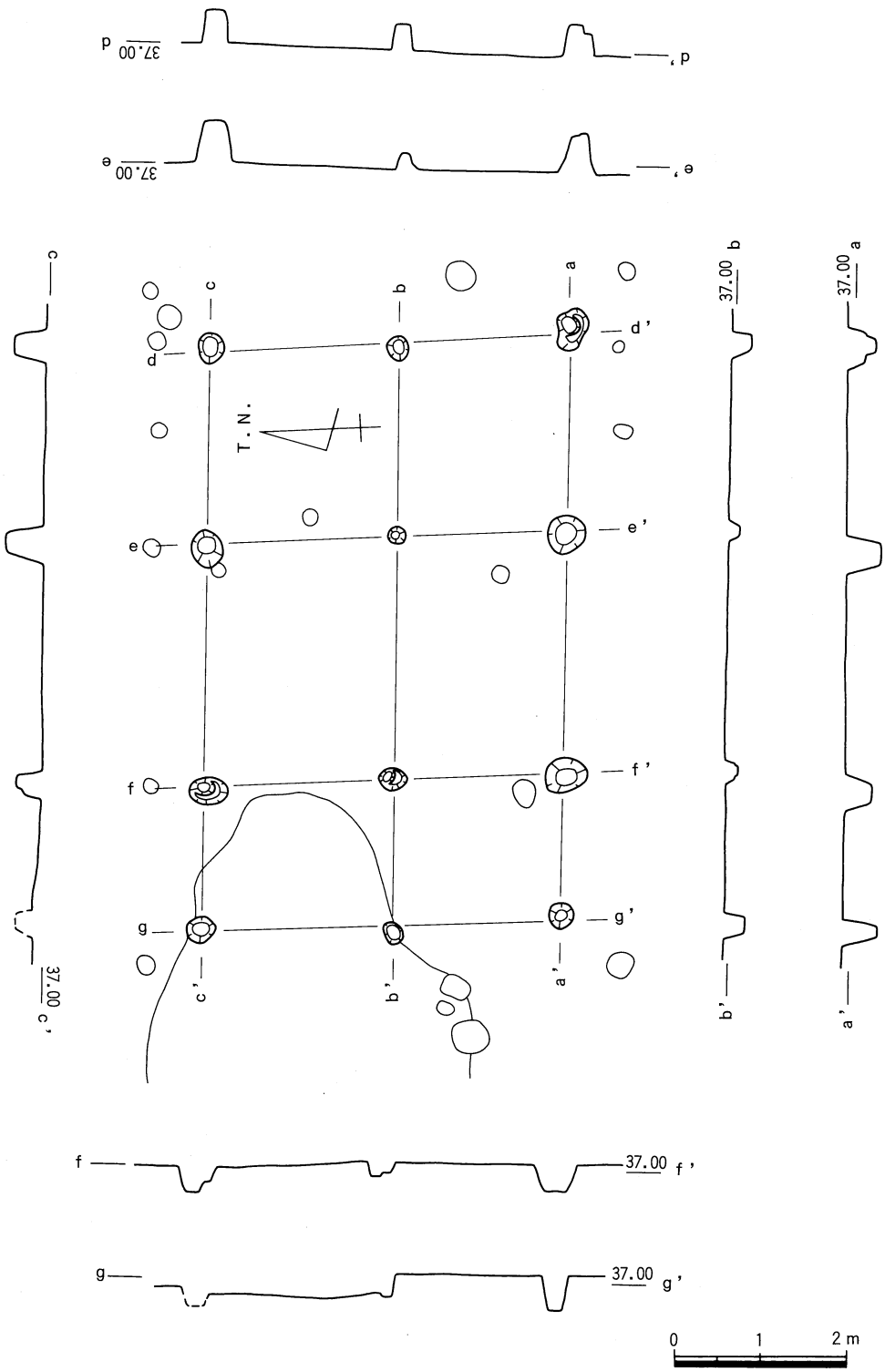
第140図　３ａ～３ｃ区中世遺構配置図（１/400）



第141図　1 b・2区中世遺構配置図（1/300）



第142図　5～5ｅ区中世遺構配置図（1/400）



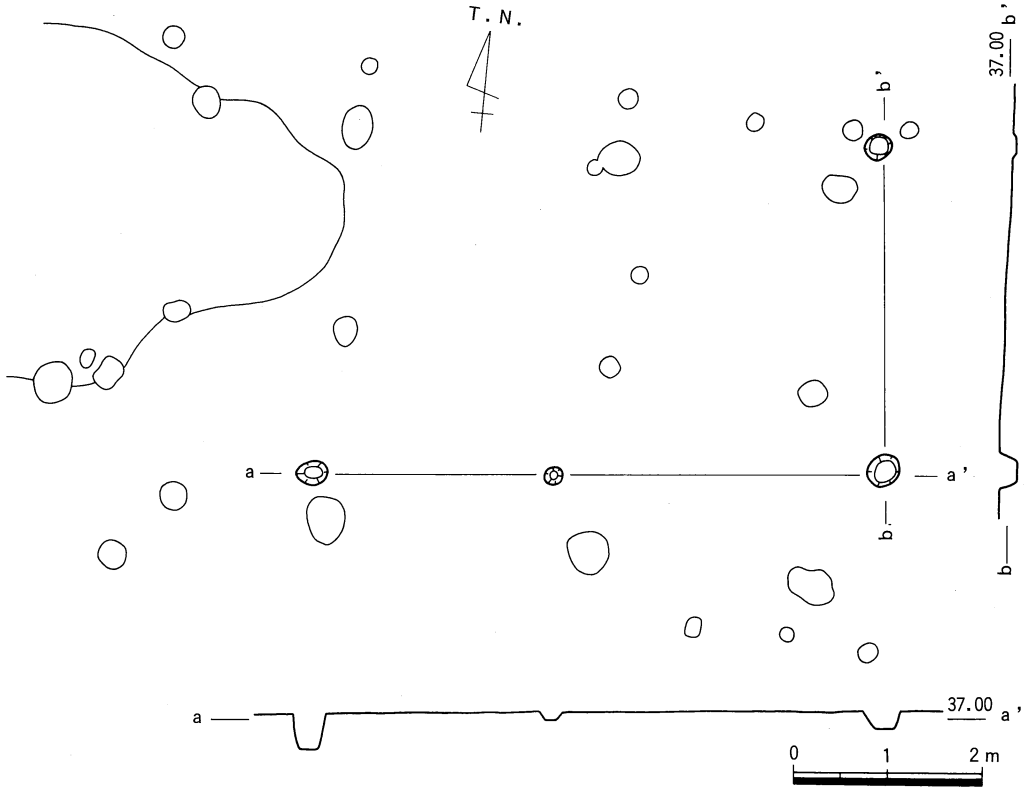
第143図　掘立柱建物ＳＢ０１平面図・断面図（１/80）

北20ｍ以上の範囲に柱穴群・小規模土坑が集中する。後の水田造成によって局部的に顕著な削平を蒙っているため中世以降は偏在して残存するようである。このため建物配置の復元などはかなり困難であるが，南半部に少なくとも２棟の掘立柱建物が復元でき，北東部にも別の建物群が想定できるであろう。また断片的に残存する小規模溝の配置から，この範囲は溝によって区画された可能性がある。いま東西南辺にその痕跡が認められる。

また北西部（３ａ区）では３棟の掘立柱建物が重複して検出された。これに伴う区画施設は確認していないが，この部分の削平が顕著であることを考慮すると断定は困難である。

ＳＢ０１

３ａ区中央で検出した建物である。ほぼ同一地点でＳＢ０２・０３と重複する。強度の削平のためか周囲に併存する建物などは見出しがたい。焼成土坑ＳＦ０１の東端にも重複している。6.8ｍ×4.3ｍ，桁行３間，梁間２間で棟方向Ｎ85°Ｅの東西棟総柱建物である。床面積29.2ｍ^{2}を測る。桁方向の柱間は一様ではなく西から各々1.6ｍ，2.9ｍ，2.5ｍと



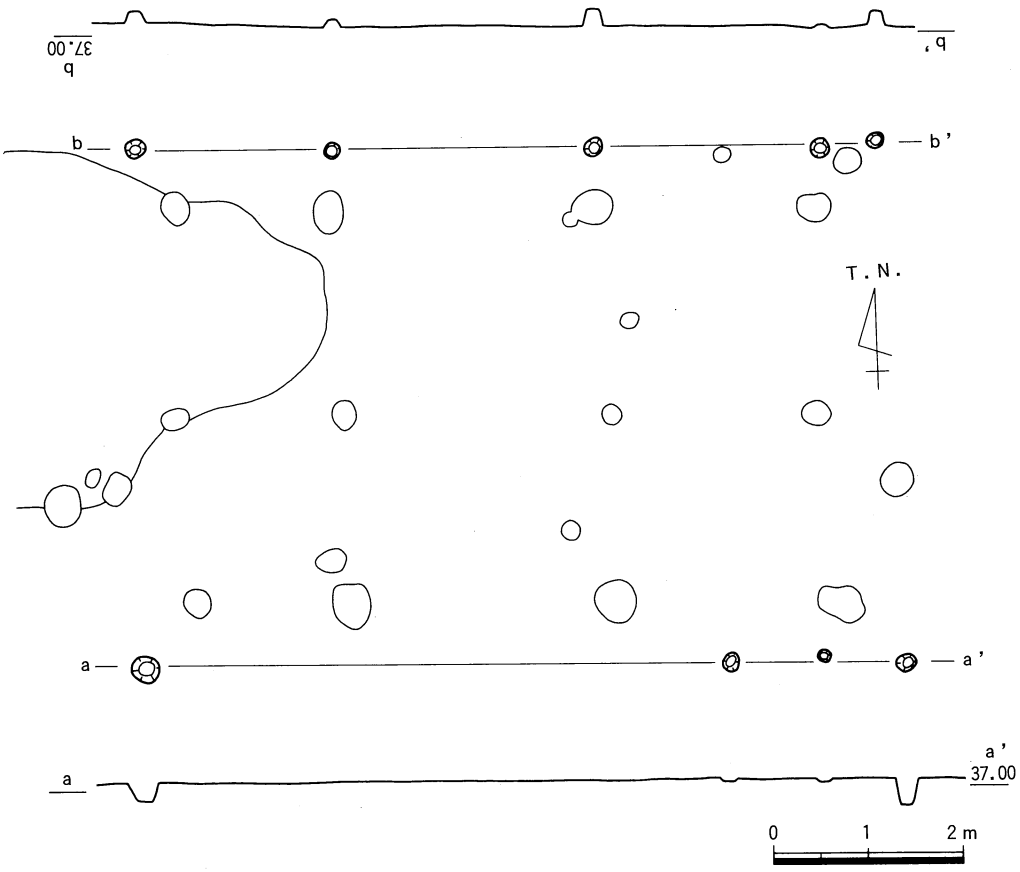
第144図　掘立柱建物ＳＢ０２平面図・断面図（１/80）

なり中間の柱間が極端が広い。梁方向のそれは1.1～1.2ｍでほぼ揃う。強度の削平のためか柱穴は略円形ないしは楕円形と形態は整わず，深さも0.1～0.45ｍと全般的に浅い。南北の両長側辺８穴に比べ，中間列４穴は側柱を含めて一回り小形で浅い。埋土は灰色砂質土で柱痕は確認していない。

瓦質コネ鉢・土師質坏が出土している。650は瓦質コネ鉢。口縁端部を摘み上げてやや幅広い端面を形成しその部分に凹線。652は同一個体の片口部か。楠井Ⅱ－２～３に相当する。651は瓦質コネ鉢下半部。底面は脱落している。外面は指押さえ顕著。251・252は薄作りの土師質坏。654底面には回転篦切り痕が観察できる。

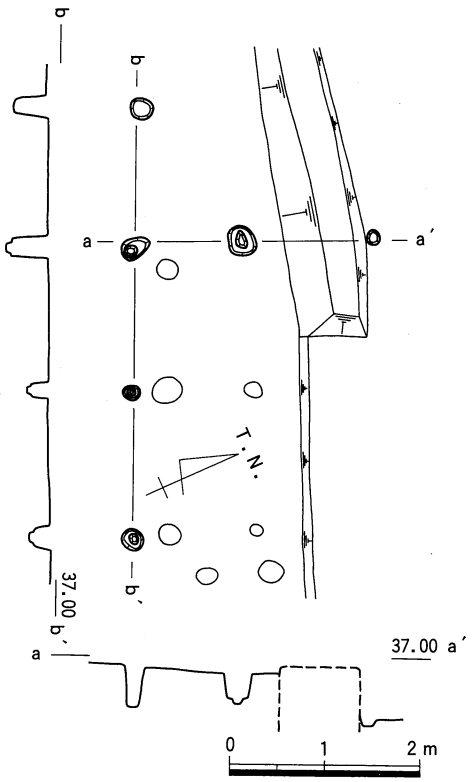
ＳＢ０２

３ａ区中央でＳＢ０１等と重複して検出した遺構である。ここでは建物としたが間隔の開いた柱列２辺分計４穴を確認しているだけで柵状柱列とするべきかもしれない。柱列は



第145図　掘立柱建物ＳＢ０３平面図・断面図（１/80）

東西２間分とその東端から北に折れる１間分からなる。柱間は2.5ｍ，3.5ｍ，3.5ｍと広い。柱穴は径0.2～0.3ｍの楕円形ないしは略円形を呈する。削平によって残りは極めて悪い。埋土は灰色砂質土。遺物は検出していないが，埋土からＳＢ０１に近い時期を想定する。



第146図　掘立柱建物ＳＢ０４平面図・断面図（１/80）

ＳＢ０３

本遺構もとりあえず建物としたがＳＢ０１の両側に位置する２列の柱列である。削平によって特に北辺では多くの柱穴が消失していると見られる。残存する柱穴はいずれも径0.2ｍ以下で最大でも0.3ｍ程度しか残存しない。この柱列はＳＢ０１の軸方向と完全に一致し，その側柱との間隔も約0.5ｍと南北列で同様である。柱間がＳＢ０１側柱と一致しないので庇柱列とは見なしがたい。またＳＢ０１本体に近接しすぎるので付帯する囲繞設備とも考えがたい。ＳＢ０１と密接に関わる遺構であろうが性格は特定でない。遺物は出土していない。埋土は灰色砂質土でＳＢ０１などと異ならない。

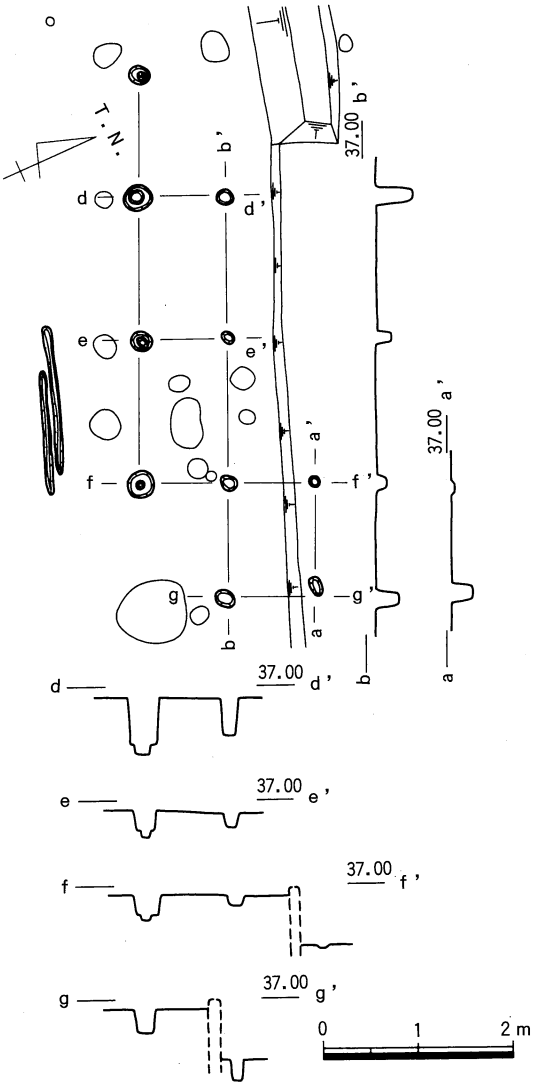
ＳＢ０４

１ｂ区から２区に連続する柱穴群の南西部分（２区）に位置し，ＳＢ０５と重複する。本建物は２区中程の水田区画に関わる顕著な段差部分にあり，建物北半部の柱穴は１穴を除いて完全に破壊されている。本遺構は南辺３間分（4.5ｍ）とこれに直交方向の南北２間分（2.6ｍ）の計６穴から桁行３間以上梁間２間程度の東西棟掘立柱建物を想定した。南辺４穴は1.1～1.2ｍと一定の間隔で並び，直交する南北３穴は0.9～1.0ｍの間隔をとる。柱穴は径0.2～0.3ｍで削平の顕著な北端１穴を除いて0.4ｍ前後残存する。また４穴では下面に柱下端の臍状圧痕が残る。

遺物は出土していないが，暗灰色系統の柱穴埋土から中世後半と推定した。

ＳＢ０５

１ｂ区から２区に連続する柱穴群の南西部分(２区)に位置し，ＳＢ０４と重複する。本建物も２区中程の段差部分にあり，建物北半部の柱穴の多くは破壊されている。それでも桁行４間以上（5.5ｍ～）梁間２間（1.9ｍ）の東西棟総柱建物が想定できる。桁方向の柱間は中程の２間では1.5ｍを測るが，東西端では1.2～1.3ｍとやや狭い。梁間方向では１ｍ弱に過ぎない。南辺柱穴は最大深0.5ｍとよく残るが，中間列・北列は概して残りが悪い。後の削平によるものである。遺物は出土していないが暗灰色系の柱穴埋土から中世後半と見なした。



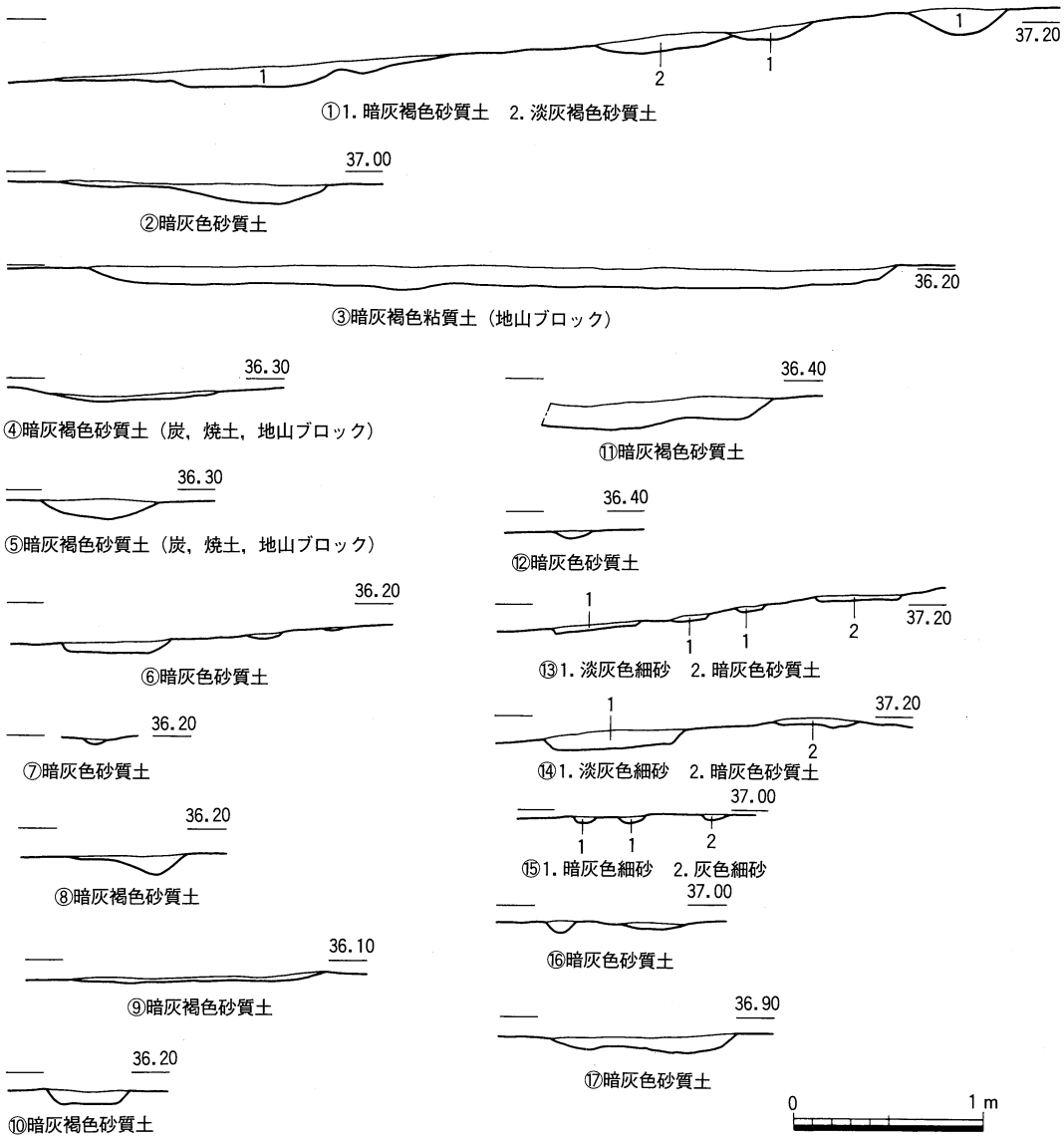
第147図　掘立柱建物ＳＢ０５平面図・断面図（１/80）

１ｂ区・２区小溝群

丘陵Ｃ北東部に位置するこの地区の中世後半期の小溝は概ね，等高線並行方向と直交方向の，地形に対応した２方向が同じ程度に認められる。また雨水などの浸食によるものであろうが，等高線直交方向の溝は概して深く底面がやや複雑に抉れる傾向にある。このような配置や多数の柱穴などと混在することからこの部分の中世溝は主に宅地区画などの機能を果たすものと推定する。しかし近世以降の溝などとの重複や削平によって断片的にしか残存しておらず，その配置の詳細を知ることは困難である。埋土は色調に多少の濃淡があるものの概ね暗灰色系を呈し細砂ないしはシルトが堆積する場合が多い。以下個別の溝について見て行く。

ＳＤ０１（第141図⑥）

１ｂ区北端の東西溝。削平その他で詳細は把握しにくいが本来的には同一位置の複数条



第148図　１ｂ・２区中世溝断面図（１/40）

の小溝が重複していた可能性がある。土師質坏小片・羽釜片が出土している。坏609は形態から楠井Ⅱ－２～３並行か。羽釜619は比較的低い位置に取り付く鍔の突出度は高い。口縁端部の成形も整っており本器種では比較的古い様相を示す。楠井Ⅱ－１並行か。

ＳＤ０２（第148図⑧）

１ｂ区北部の南北溝。雨水によるものか底面は深く抉れ，壁面もかなり崩落して変形が

著しい。１ｂ区中央の段差によって南方への連絡は絶たれているが，位置関係から見てＳＤ０６・ＳＤ０５に続く可能性が高い。いずれにしても１ｂ区南部で東西方向に屈曲するようである。

土師質小皿・羽釜が出土している。小皿603は底面に回転篦切り痕を見る。羽釜621は底部の叩き出しが顕著。体下半部に格子叩きが残る。口縁部は強く内傾する。口縁端部・鍔は肉厚で尖る。楠井Ⅱ－１並行か。624は三足羽釜の脚基部。

ＳＤ０３・ＳＤ０４（第148図⑤・⑦）

１ｂ区北部でＳＤ０１・０２・０４に挟まれた位置で検出した壁溝状の東西小溝。炭細片を多く含み埋土は緻密。同様の埋土を持ち隣接するＳＤ０４と組合わさる可能性がある。周囲で鉄滓が出土していることと合わせ，詳細は不明ながら加熱・燃焼作業に関わる何らかの施設の下部構造の一部と考えるべきだろう。

三足羽釜脚622・亀山焼小片636が出土している。636は軟質で外面に比較的細かい格子叩きを残す。胎土の様相などから13ｃ代に収まる資料か。

ＳＤ０５（第148図①）

１ｂ区南半で弧状に屈曲する小溝。南北溝ＳＤ０２延長部分の可能性がある。近世小溝が多く重複して形状は不詳。かなり浅い。

土師質小皿606・東播系コネ鉢610・土鍋631が出土している。610はやや焼成が甘い。端部は上下に鈍く摘み直立する端面を持つ。631の肉厚で短い口縁部はわずかに内湾傾向を持つ。楠井Ⅱ－２に比定できる。

ＳＤ０６（第148図②）

１ｂ区南半でＳＤ０５同様に弧状に屈曲する小溝。共に南北溝ＳＤ０２延長部分の可能性がある。本溝も近世小溝が多く重複して形状は不詳。

土鍋627・628が出土している。627口縁部は短いが直線的に開き，端部に平坦面を作り出す。楠井Ⅰに比定できる。628はやや肉厚で内湾傾向を持ち，端部を摘み上げる。楠井Ⅱ－２に比定できる資料である。

ＳＤ０７（第148図①・⑬・⑭）

１ｂ区・２区南端で断続的に検出した東西溝。削平と他溝の重複によって残りはよくない。かなり小規模なＵ字溝である。

634は須恵器薬壷下半部である。８ｃ～９ｃ前半に位置づけられる資料であるが，本遺構埋土は他の中世遺構と異ならず，古代に遡らせることには躊躇がある。

ＳＤ０８（第148図⑯・⑰）

２区西端で屈折する小溝。北端のＳＤ１０に連続することは間違いなかろう。また位置関係や埋土の類似から１ｂ区ＳＤ０６に連絡する可能性がある。屈曲部分の形状からすれば複数条の小規模溝が重複しているようだ。遺物は出土していない。

ＳＤ０９（第148図⑩）

２区東北隅で検出した南北小溝。やはり底面は大きく抉れる。削平と重複によって他溝との関係は不詳。遺物は出土していない。

ＳＤ１０（第148図⑪）

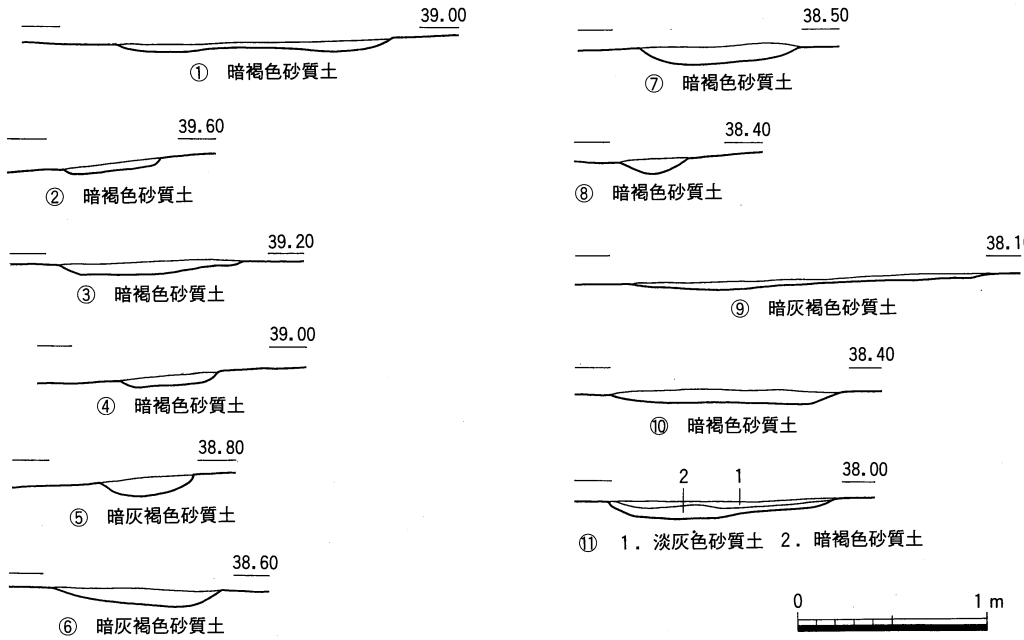
２区西北隅で検出した南北小溝。位置関係と埋土の類似から南方のＳＤ０８に連結する可能性が高い。

須恵質の鉢底部635が出土している。東播系コネ鉢か。

３ｃ区・５区中世小溝（第139図）

丘陵Ｃ南部に位置する同地区で検出した中世小溝についてはここで一括してその様相を示しておく。不明瞭で断片的な２条（ＳＤ１６・ＳＤ１９）を除いて，地形に合致した等高線並行方向を走る。この地点には当該時期の建物遺構など集落域の形跡はないことから，これらの小溝も耕地区画などの機能を想定できる。また幅は0.5～2.1ｍとかなりばらつくが，いずれも極めて浅く断面形も皿状ないしは逆台形を呈する。取排水機能には不適な形状である。

これらの小溝に伴う遺物は少ない。またそのほとんどが図化不能の小片で胎土などから多くが中世後半期の遺物と推定できるに過ぎない。かろうじて図示できたのはＳＤ１６・１７資料に過ぎない。前者では663は薄作りの土師質坏が出土している。底部に回転篦切り痕が観察できる。後者では土鍋口縁部片662が出土している。



第149図　3c・5区中世溝断面図（1/40）

その他の古代・中世遺物

1b・2区柱穴出土遺物　建物として復元できなかった柱穴状遺構から出土した資料である。

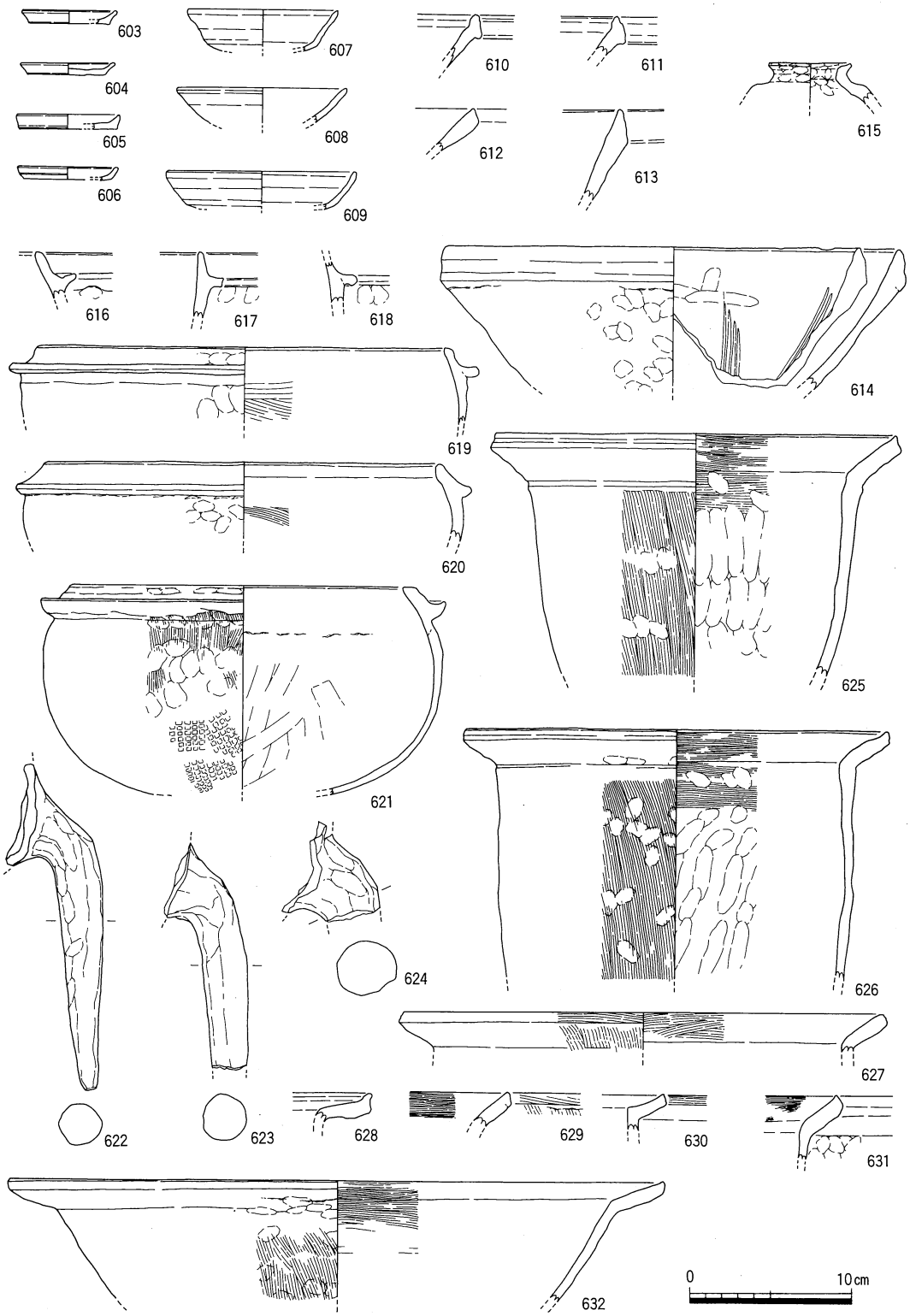
それらからは土師質小皿604・605，土師質坏608・土師質小壷615・羽釜620・623，甕625・626・土鍋629・630等が出土している。大部分が小片に過ぎない。甕625・626は長胴形態で短く開く口縁部を持つ。体部外面縦ハケ調整。内面口縁部は横ハケ調整。これらは10～11c代まで遡る可能性がある。この時期の資料は多くない。他資料は概ね13～14c代に位置づけてよいであろう。

近世溝混入資料

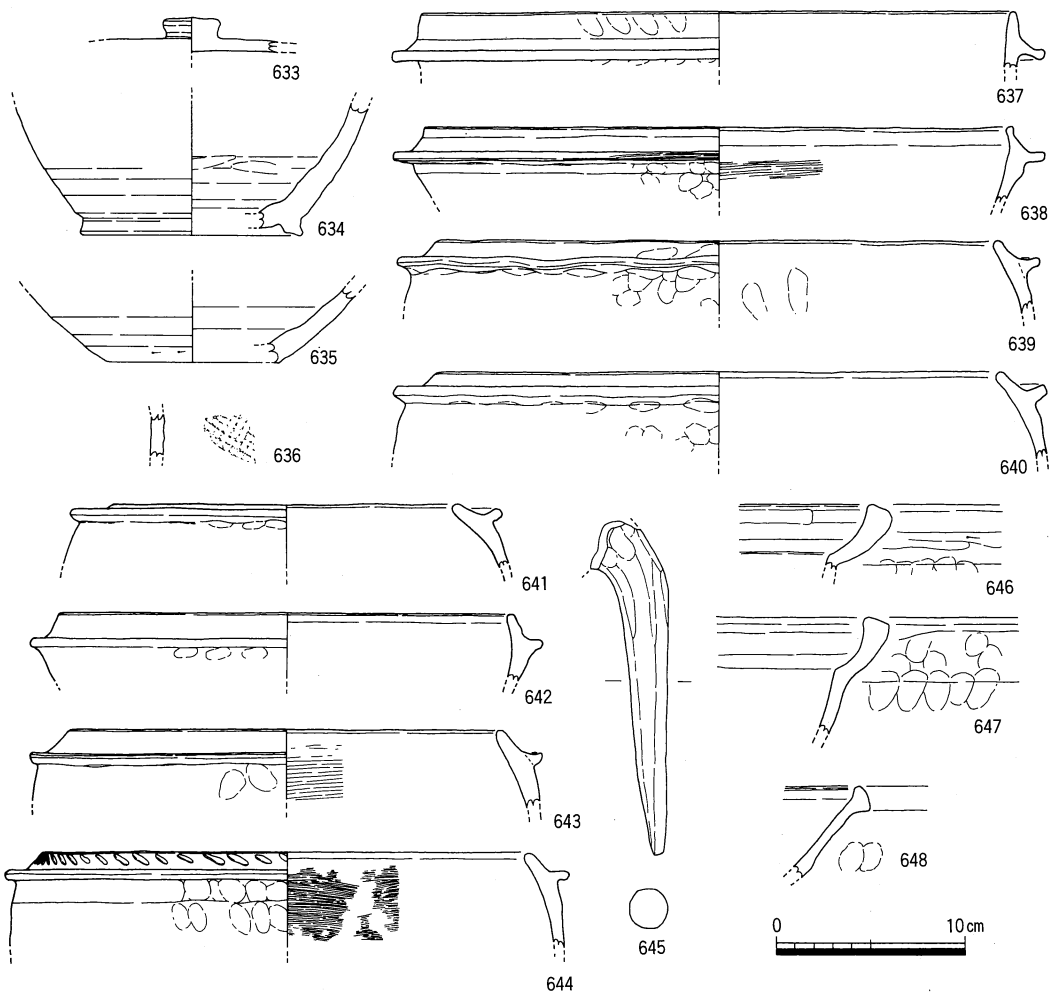
埋土や掘り込み層位から近世以降の所産と見なした小溝群からもこの時期の資料が若干出土している。瓦質コネ鉢612・613・614，羽釜616～618・655・661，土鍋632等が見られる。コネ鉢612は楠井Ⅱ－2並行で，概ね14c後葉に比定できる。613・614は楠井Ⅱ－3並行で15c前葉まで下る資料である。羽釜616・618，土鍋632は各々楠井Ⅱ－1・Ⅱ－3・Ⅱ－2に比定することが可能でコネ鉢とさほど隔たらない。羽釜617はこれらよりやや古い形態を持つ。

古墳時代遺構混入資料

須恵器坏659は2号墳周溝上面出土資料で8c後半～9c前葉に位置づけられる。須恵器



第150図　1・2区古代・中世遺物1（1/4）



第151図　1・2区古代・中世遺物2（1／4）

甕664は大形竪穴建物上面出土資料で，ほぼ同様の年代に比定できる。こられは焼成土坑の状況と同じく，古墳時代遺構削平の上限を示す資料と考える。古墳時代後期前半に古墳群の造営が中断した後，この時期に至って丘Cの再開発が始まったものと考える。

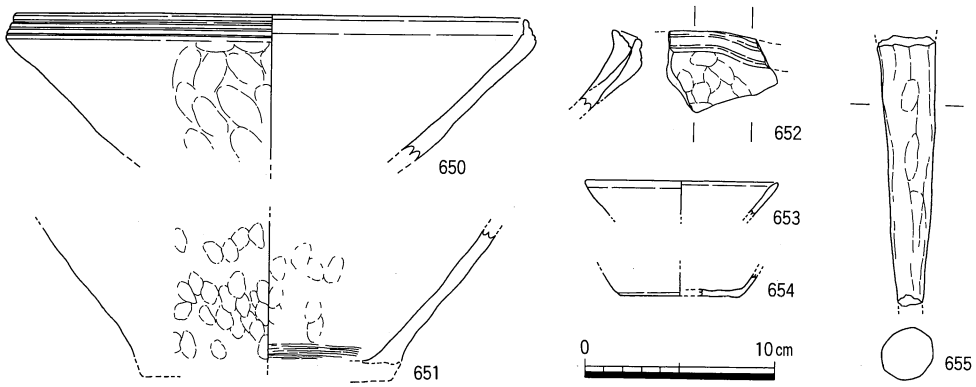
包含層資料

1b区では東播系須恵質コネ鉢611・羽釜640～644・土鍋646・647等の資料がある。楠井Ⅱ－2～3並行の14c後半代を中心とする時期の資料が多い。

2区では羽釜639・645・東播系須恵質コネ鉢648等が見られ，ほぼ同様の同様の年代を示す。

これに対して5区～5f区では須恵器坏656～658のように古墳時代遺構の削平面付近で検

出した資料と同様に８ｃ後半～９ｃ前葉に位置づけられる資料が他地区よりも多い傾向にある。しかし羽釜660のようにやや古相ではあるが中世後半期の資料も認められる。

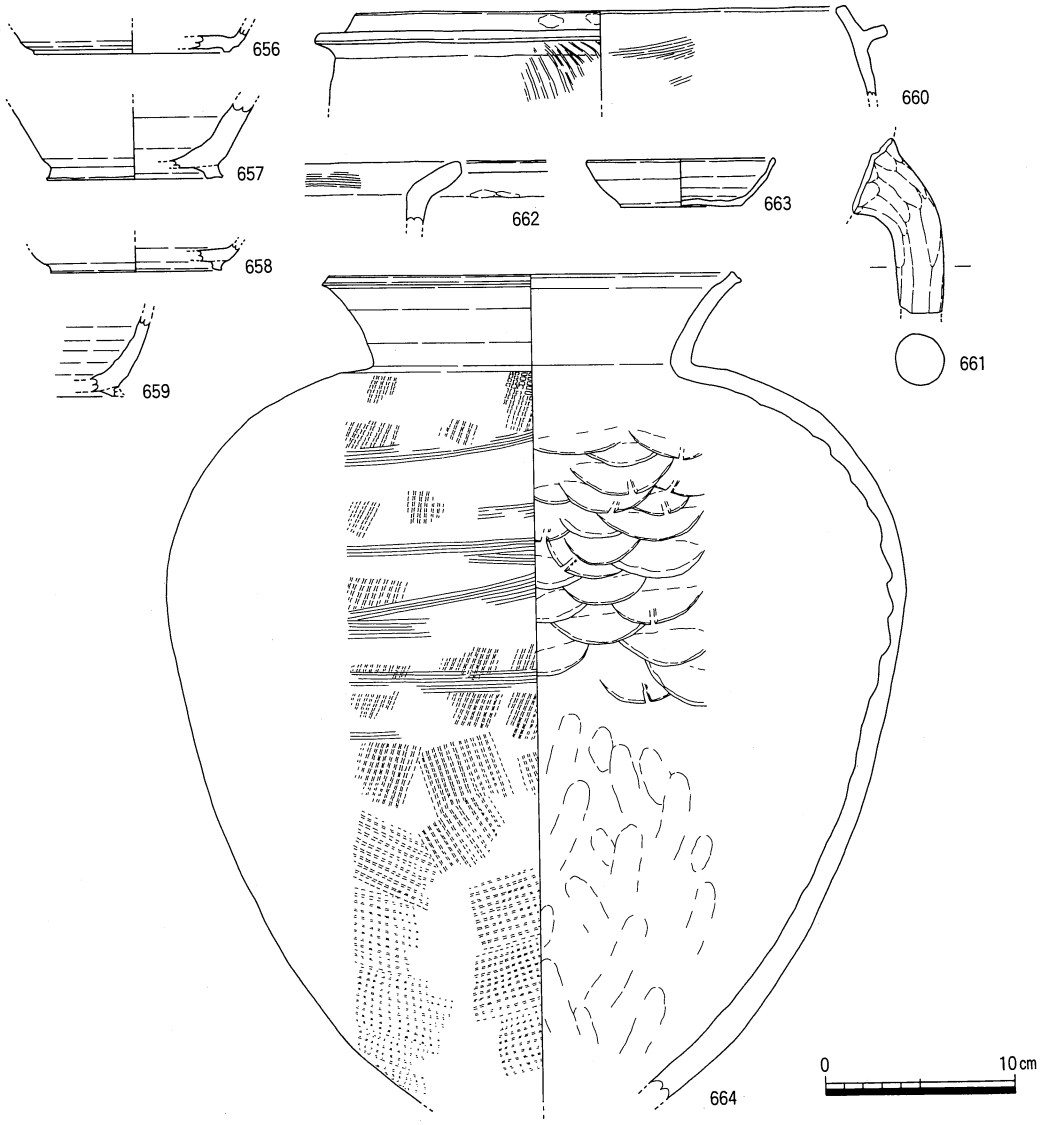


第152図　３区中世遺物（１／４）

3. 近世以後

詳細な時期比定は困難であるので近世以降と一括した。この時期の遺構埋土は中世包含層以上の層位に認められる旧耕作土層などと同質の淡灰色砂質土あるいは淡黄色シルトで，中世以前の遺構とは比較的明瞭に識別できる。

２区部分は調査直前まで宅地として利用されていたが，その上限は到底近世段階まで遡るものではない。また北部（１ｂ・２・３ａ区）の中世後半段階の集落域は近世以後に継続的に機能した形跡はない。むしろこの部分も近世以降の時期に比定できる小規模溝群が連続しており，一旦は丘陵＊上面の大部分が耕地化した可能性が高いであろう。



第153図　5区古代・中世遺物（1／4）

第４章　自然科学分析

中間西井坪遺跡出土土器・埴輪の胎土分析

岡山理科大学自然科学研究所
白　石　　純

1. はじめに

中間西井坪遺跡出土の埴輪類および土器類を蛍光Ｘ線分析法により分析し，以下のことについて検討した。

(1) 中間西井坪遺跡出土の埴輪で，形態・技法的および肉眼観察による胎土分析から，４つに分類[1]された埴輪が蛍光Ｘ線分析法でどのように分類されるか。

(2) 中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構から出土した形象埴輪・土師器類・土製棺等と埴輪の４類型との胎土の比較。

(3) 埴輪製作関連遺構から出土した埴輪類と香川県内の古墳から出土した円筒埴輪・土器との比較。特に，肉眼観察で類似していると考えられる円筒埴輪１類（下川津Ｂ類土器に類似）と石船塚古墳，横立山経塚古墳との比較。また，埴輪製作関連遺構から出土した土製棺と同類のものを伴う今岡古墳の資料との比較。そして，以前分析した上天神遺跡[2]（弥生後期初頭‥‥下川津Ｂ類）とこれら１類および古墳の資料との比較。

2. 分析方法および結果

分析装置は波長分散型蛍光Ｘ線分析装置を使用し，分析方法・測定資料の作製などは現在まで行っている方法である[3]。

分析資料は第１表～第３表までの128点で，中間西井坪遺跡（埴輪･土製棺･壺･甕･高杯など）95点，石船古墳・今岡古墳・岩崎山４号墳・横立山経塚古墳・御厩天神社古墳・御産盥山古墳・田尾茶臼山古墳・富田茶臼山古墳・川東古墳・稲荷山古墳の埴輪類33点である。

分析の結果，K_2O・Fe_2O_3・Tio_2・CaO・Sr・Rbの各元素に顕著な差がみられた。このうち，特にK_2O・CaO・Sr・Rbの元素に差異があり，K_2O-CaO・Sr-Rbの散布図を作成し検討した。

まず，⑴の目的である４類型に分類された円筒埴輪と壺形埴輪が分析値でどのようになるかでは，第１図K_2O-CaOの散布図では円筒埴輪１類と３類および２ａ類・２ｂ類・（土製棺棺･形象埴輪･土師器類）の３つのグループに識別できた。なお，３のグループには資料番号16～20の壷形埴輪も含まれている。

⑵の検討課題である中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構から出土した形象埴輪・土師器類と円筒埴輪４類型・壺形埴輪の胎土の比較では，第２図K_2O-CaO・３図Sr-Rbの各散布図から，これら埴輪製作関連遺構から出土した土器類は全て一つにまとまり，円筒埴輪２ａ類とほぼ同じ胎土分析値で，差異はみられなかった。

⑶の検討課題である⑴，⑵で検討してきた中間西井坪遺跡の埴輪・土製棺・土師器類と県内の古墳から出土した埴輪・土師器類との比較では，第４図K_2O-CaO・５図Sr-Rbの各散布図から円筒埴輪１類の分布領域には石船・横立山経塚古墳の円筒埴輪と土師器がほぼ重なり同じ分析値を示した。また，円筒埴輪２ａ・２ｂ類の分布領域には今岡古墳の円筒埴輪が入った。その他の古墳の円筒埴輪・土師器は川東，稲荷山，御産盥山の各古墳がほぼ一つにまとまりグループを成し，岩崎山４号，富田茶臼山，御厩天神社，田尾茶臼山の各古墳がまとまり別のグループをつくった。

また，円筒埴輪１類（胎土が下川津Ｂ類土器に類似），石船塚および横立山経塚古墳と上天神遺跡との比較では，両者の分布領域が非常に接近し一部重なるが識別できた。

3. まとめ

今回の中間西井坪遺跡出土および県内の古墳から採集した埴輪，土師器類の蛍光Ｘ線分析では，以下のことがわかった。

１）円筒埴輪・壺形埴輪が形態・技法的および胎土の肉眼観察などにより，４類型まで分類されているが，胎土分析値ではどうなるかでは，１類と３類および２ａ・２ｂ類の大きく３つのにわかれた。ただ，２ａ類と２ｂ類の識別は分析値からは全くできなかった。

２）中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構内から出土した埴輪・土製棺・土師器類と円筒埴輪

２ａ類の胎土の比較では，全て一つにまとまり識別されなかった。このことより，埴輪製作関連遺構内の遺物に使用されている粘土は土器の種類に関係なく全て同じ粘土を使用していることが推測される。また，資料番号74（挿図番号120）の甕だけが単独でプロットされた。

３）中間西井坪遺跡の埴輪・土製棺・土師器類と県内の古墳採集の埴輪との比較では，円筒埴輪１類の領域に石船古墳と横立山経塚古墳の埴輪・土師器が入った。また円筒埴輪２ａ・２ｂ類（この領域には今回分析した中間西井坪の埴輪製作関連遺構の遺物が全て含まれている。）の領域には，今岡古墳の埴輪が入り，この古墳の埴輪類の生産地がほぼ推定された。

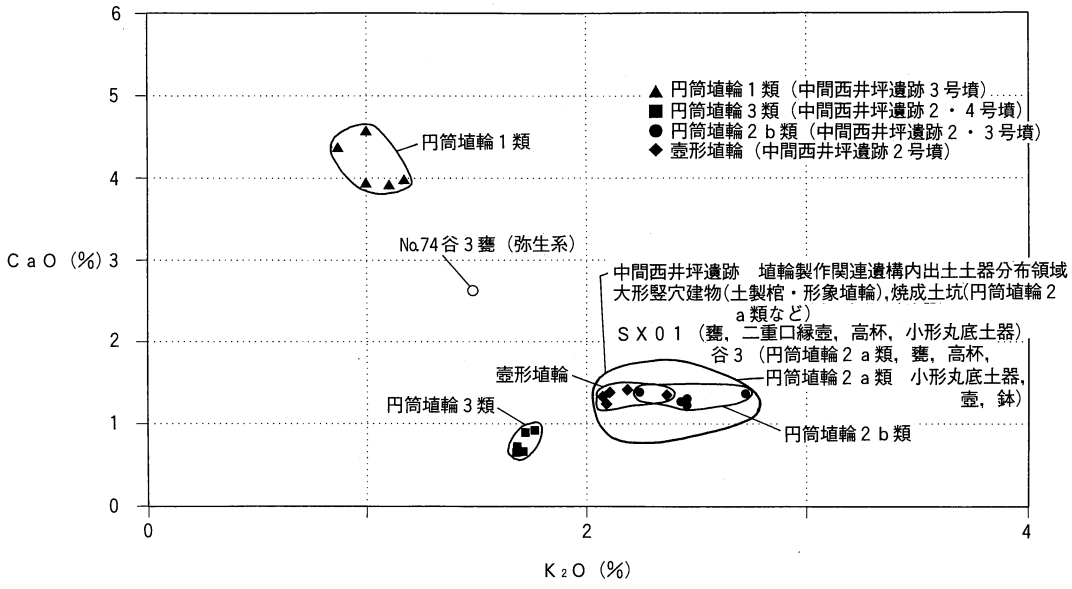
また，その他の古墳はこれら二つの領域に入らず，それぞれ別のグループをつくる可能性が考えられる。一つは川東古墳，稲荷山古墳，御産盥山古墳のグループ，もう一つは岩崎山４号墳，富田茶臼山古墳，御厩天神社古墳，田尾茶臼山古墳のグループである。分析値からこの二つにわかれた原因であるが，一般的に胎土分析値で焼成された粘土が識別できる要因としては地域・水系で地質構造が変わることがあり，この基盤層の差異が起因することがほとんどであるが，今回のこの二つのグループとも県内の東・西部両地域の古墳で同じ分析結果となり，地域・水系ごとのまとまりはみられなかった。他の原因を考える必要がある。

円筒埴輪１類（胎土が下川津Ｂ類土器に類似）と上天神遺跡の土器との比較では，両方の分布領域が一部分で重複するだけでほぼ識別された。このことは，多量の柱状の角閃石細粒を含むいわゆる下川津Ｂ類土器類の中でも焼成粘土中の角閃石およびその他鉱物の量の差異で，この土器類がもう少し細分される可能性があることを示唆する結果となった。

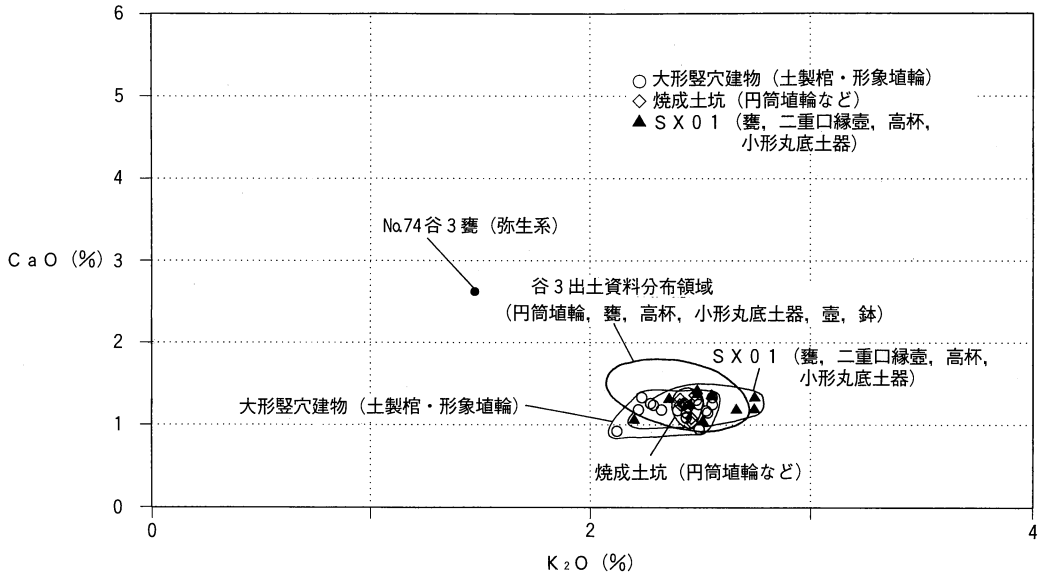
註(1)　資料提供者の大久保徹也氏による分類である。

(2)　白石　純「蛍光Ｘ線による考古学遺物（石器・土器）の化学分析（Ⅱ）」『自然科学研究所研究報告第12号』　岡山理科大学　1986．

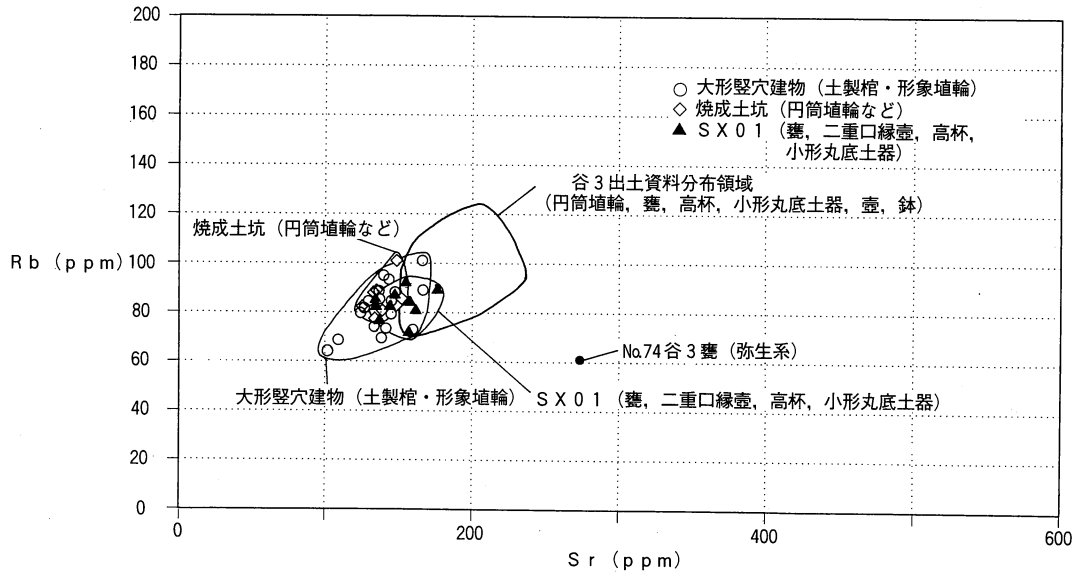
(3)　白石　純「上天神遺跡出土土器の胎土分析」『上天神遺跡第２分冊　高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　第６冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1995．12



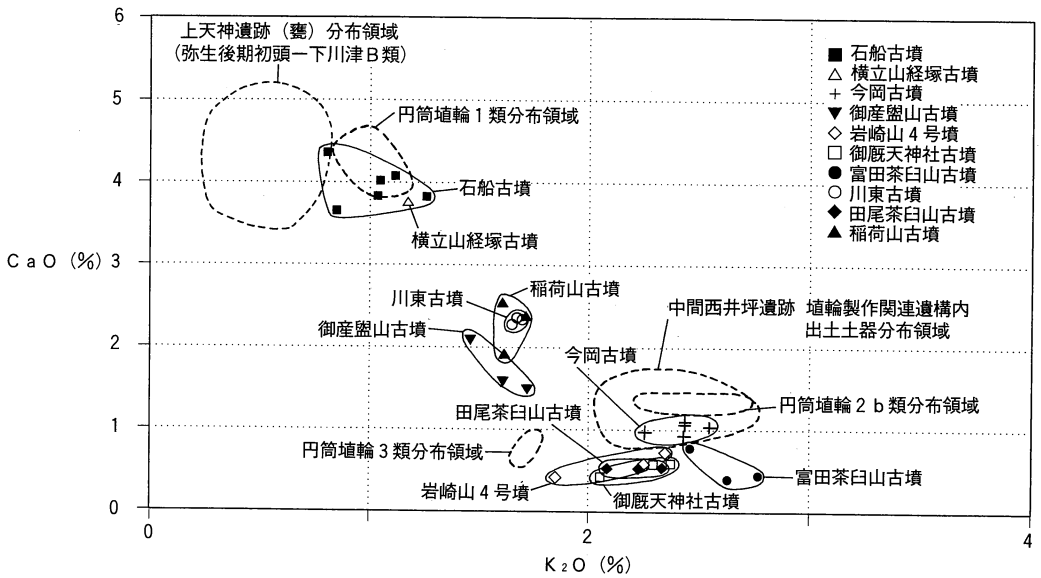
第154図　Ｋ２Ｏ－ＣａＯによる中間西井坪遺跡出土埴輪類の胎土による比較



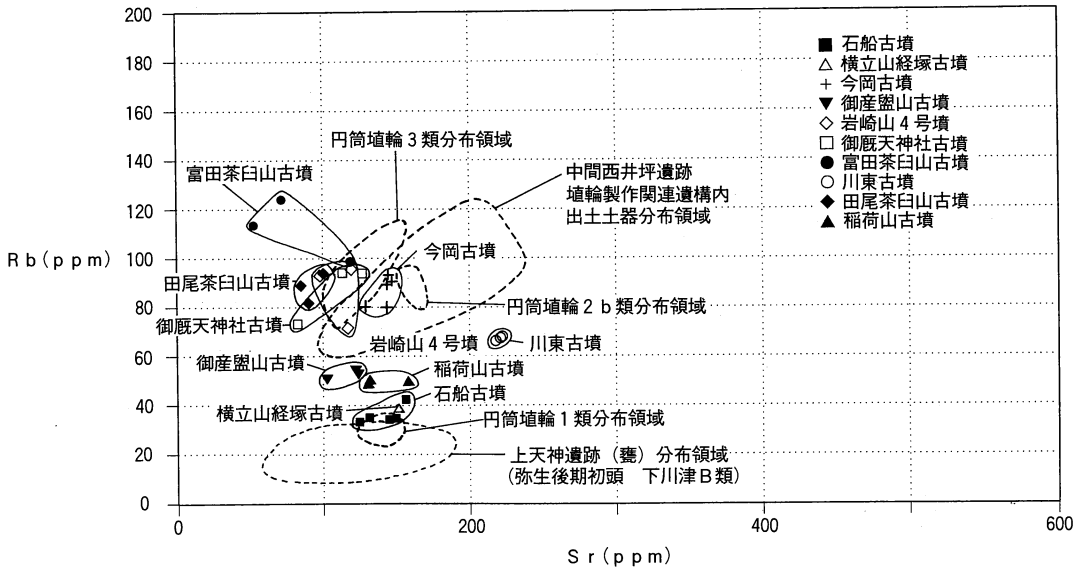
第155図　Ｋ２Ｏ－ＣａＯによる中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構内から出土した土器の比較



第156図　Ｓｒ－Ｒｂによる中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構内から出土した土器の比較



第157図　Ｋ２Ｏ－ＣａＯによる中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構内出土土器と
香川県内古墳出土埴輪類との比較



第158図　Ｓｒ－Ｒｂによる中間西井坪遺跡の埴輪製作関連遺構内出土土器と香川県内古墳出土埴輪類との比較

資料番号	遺　跡　名	挿図番号	出土地点	種　別	K	Fe	Si	Ti	AL	Ca	Sr	Rb	備　考
1	中間西井坪遺跡	492	1号墳	円筒埴輪1	0.86253418	14.60543558	48.29071139	2.37644568	17.68074901	4.37384846	126.61367972	29.11784751	下川津B類類似胎土
2	中間西井坪遺跡	496	1号墳	円筒埴輪1	0.99123832	14.43679941	48.49042813	2.43076465	16.89844634	4.56891017	134.09448972	32.52005248	下川津B類類似胎土
3	中間西井坪遺跡	491	1号墳	円筒埴輪1	0.98870866	14.34298978	45.21854681	1.69954772	17.84135419	3.93698213	145.60342818	29.89844	下川津B類類似胎土
4	中間西井坪遺跡	494	1号墳	円筒埴輪1	1.16171269	13.07093854	50.22014883	2.25330629	15.34938344	3.96904297	142.23295334	26.99699247	下川津B類類似胎土
5	中間西井坪遺跡	497	1号墳	円筒埴輪1	1.09569475	13.55528375	51.29861927	2.11935226	15.97108093	3.91870446	142.74674524	33.99286848	下川津B類類似胎土
6	中間西井坪遺跡	542	3号墳	円筒埴輪3	1.68368634	5.24714152	66.43193871	0.79406765	19.51302965	0.64220702	108.91868685	81.99194202	
7	中間西井坪遺跡	547	2号墳	円筒埴輪3	1.71515283	4.67525294	61.78809017	0.70435532	19.61837284	0.8864087	149.65210831	112.34667984	
8	中間西井坪遺跡	537	3号墳	円筒埴輪3	1.75994632	4.87909076	64.63275132	0.72229779	18.50277124	0.88491053	106.80186424	93.75974188	
9	中間西井坪遺跡	548	3号墳	円筒埴輪3	1.68356294	4.63581235	63.86340767	0.68272605	18.27654243	0.69374406	130.58015316	86.29256475	
10	中間西井坪遺跡	543	2号墳	円筒埴輪3	1.70571289	5.14079936	64.03533774	0.76801421	20.51292644	0.65179531	107.95275809	74.70150281	
11	中間西井坪遺跡	578	2号墳周辺	円筒埴輪2b	2.45301132	9.9759579	54.86747071	0.81520535	17.36990027	1.29750651	160.64725487	94.11321772	
12	中間西井坪遺跡	560	1号墳周辺	円筒埴輪2b	2.23663289	10.0367775	53.41561679	0.88255105	17.1039519	1.35683403	164.63427998	82.12449546	
13	中間西井坪遺跡	574	1号墳周辺	円筒埴輪2b	2.4544921	10.10460057	56.03103784	0.83806356	16.38899979	1.20881485	157.89333031	92.50784828	
14	中間西井坪遺跡	565	2号墳周辺	円筒埴輪2b	2.71615761	9.03823018	57.11819162	0.77637098	16.92089653	1.35024209	161.81870039	89.82732316	
15	中間西井坪遺跡	569	2号墳周辺	円筒埴輪2b	2.43906734	8.75127223	57.13555829	0.76113217	17.1177674	1.23368447	152.13886108	92.3163822	
16	中間西井坪遺跡	528	2号墳	壺形埴輪	2.0668989	10.88843626	57.87537859	0.99266372	18.32144281	1.32986698	152.5498946	79.44397034	
17	中間西井坪遺跡	525	2号墳	壺形埴輪	2.18351004	10.91036818	57.9066386	0.94866781	18.35425462	1.41736009	156.454713	78.45718361	
18	中間西井坪遺跡	520	2号墳	壺形埴輪	2.08368103	10.58691847	58.64819557	0.9813575	17.68765676	1.25226178	144.84301617	81.19662138	
19	中間西井坪遺跡	522	2号墳	壺形埴輪	2.36157339	9.71001035	61.56753341	0.89262832	18.11593725	1.35983037	164.59317663	90.44590588	
20	中間西井坪遺跡	524	2号墳	壺形埴輪	2.09935258	10.20228054	58.78365562	0.97422967	18.79116979	1.39368901	164.26434981	69.9148508	
21	中間西井坪遺跡	464	大形竪穴	円筒？土製棺蓋	2.31819898	11.22570861	57.80591189	0.84519139	16.50815848	1.22319728	158.73594902	73.40542472	
22	中間西井坪遺跡	482	大形竪穴	割竹土製棺	2.31752029	10.17445097	59.49568924	0.84592875	17.9156125	1.22559436	139.972269	73.12558968	
23	中間西井坪遺跡	475	大形竪穴	割竹？土製棺	2.21170648	11.9188678	58.42763881	0.8161885	16.34409942	1.17315841	137.56772293	70.209414	
24	中間西井坪遺跡	468	大形竪穴	割竹土製棺	2.26754409	10.88438162	59.74055934	0.80414493	16.53578947	1.23937752	143.67157065	79.47342666	
25	中間西井坪遺跡	424	大形竪穴	土製棺身材	2.2297843	10.07013613	55.73059439	0.77612519	15.60151631	1.32507283	132.53256236	74.67204649	
26	中間西井坪遺跡	455	大形竪穴	箱形土製棺身材	2.47775263	8.63553068	57.75381187	0.76408161	17.57022501	1.28761859	165.10696852	101.40365694	
27	中間西井坪遺跡	435	大形竪穴	箱形土製棺身材	2.28259865	9.36978917	57.69650185	0.76162374	15.85882999	1.22559436	128.11395206	84.58409819	
28	中間西井坪遺跡	433	大形竪穴	箱形土製棺身材	2.54710231	9.77451599	54.44025054	0.77637098	16.88635778	1.30739443	138.57475505	95.12946077	
29	中間西井坪遺跡	431	大形竪穴	箱形土製棺身材	2.41377075	11.174657	55.07934413	0.76899736	16.00389274	1.29630797	135.67696876	88.63434219	
30	中間西井坪遺跡	488	大形竪穴	円筒土製棺	2.42061934	10.24374846	55.591661	0.77366732	16.23012154	1.20911449	137.11558606	86.23365211	
31	中間西井坪遺跡	592	1・2号墳周辺	円筒土製棺	2.42993589	7.84450722	57.72776186	0.7834988	18.42505905	1.0742792	147.20645889	87.60337099	
32	中間西井坪遺跡	593	1・2号墳周辺	円筒土製棺	2.39519935	7.71715466	55.62986768	0.83068995	18.89133217	1.14888806	144.96632622	85.18795275	
33	中間西井坪遺跡	597	1・2号墳周辺	円筒土製棺	2.52001645	7.88781815	58.77844562	0.73999447	17.81199626	1.12911222	166.11400064	88.69325483	

第17表　胎土分析報告付表

資料番号	遺　跡　名	挿図番号	出土地点	種　別	K	Fe	Si	Ti	AL	Ca	Sr	Rb	備　考
34	中間西井坪遺跡	598	1・2号墳周辺	円筒土製棺	2.52458218	7.71383722	56.57461473	0.73704502	17.92424719	1.1201232	142.33571172	92.80241148	
35	中間西井坪遺跡	383	大形竪穴	盾形埴輪	2.54876819	7.93555233	59.65025264	0.69304911	17.17993715	1.25585739	156.78353982	85.43833147	
36	中間西井坪遺跡	393	大形竪穴	家形埴輪	2.43592069	12.24065879	53.3565701	0.80316178	15.34074875	1.21151156	121.80458758	82.46324314	
37	中間西井坪遺跡	396	大形竪穴	家形埴輪	2.42968909	15.27610995	52.20863297	0.78104093	14.14570803	1.15068586	100.65691317	64.33287814	
38	中間西井坪遺跡	395	大形竪穴	家形埴輪	2.31573102	14.34096246	51.93250286	0.76998051	14.33912503	1.18004999	107.66503462	68.82496695	
39	中間西井坪遺跡	590	大形竪穴	舟形埴輪	2.11033501	8.46855322	56.21512459	0.83658884	18.71173067	0.91607247	129.30594926	85.23213723	
40	中間西井坪遺跡	381	大形竪穴	円筒埴輪２ｂ	2.49984087	10.88769905	53.91577699	0.91868177	17.10567884	1.25076361	148.37790441	85.76235099	
41	中間西井坪遺跡	379	大形竪穴	甕	2.50872553	11.23179057	58.84270231	0.85625182	14.38747928	1.19742876	130.80622159	89.01727435	
42	中間西井坪遺跡	380	大形竪穴	甕	2.44943278	12.16988689	56.38531799	0.81004382	14.67760477	1.21870277	131.54608192	86.69022507	
43	中間西井坪遺跡	376	大形竪穴	小形丸底土器	2.48885845	9.6445832	62.67900053	0.76776842	14.93319151	0.96041829	123.30485992	80.87260186	
44	中間西井坪遺跡	23	焼成土坑	土製棺蓋材	2.435859	12.39344501	54.99251076	0.7950508	15.21122844	1.24237386	132.88194085	77.67659113	
45	中間西井坪遺跡	6	焼成土坑	円筒埴輪２ａ	2.44054812	8.84618767	64.16732446	0.73065455	15.19741294	1.0275363	131.79270203	87.45608939	
46	中間西井坪遺跡	20	焼成土坑	円筒埴輪２ａ	2.48065248	10.59852948	54.12938708	0.91745283	16.27502192	1.31698272	150.49472702	85.77707915	
47	中間西井坪遺跡	8	焼成土坑	円筒埴輪２ａ	2.44659462	13.56634186	57.02788491	0.84789505	14.07317666	1.09974809	136.95117266	81.38808746	
48	中間西井坪遺跡	363	不明遺構ＳＸ０２	キヌガサ	2.39291648	11.2745486	53.51287016	0.85379394	16.34064554	1.24926544	125.13395907	82.94927242	
49	中間西井坪遺跡	364	不明遺構ＳＸ０２	キヌガサ	2.40537968	10.5404744	53.62401687	0.93293742	17.41652758	1.19802803	133.90952464	88.59015771	
50	中間西井坪遺跡	2	焼成土坑	大形壺	2.42481487	9.02072151	54.44893387	0.79554238	18.14356825	1.24746763	147.00094213	101.16800638	
51	中間西井坪遺跡	311	溝ＳＸ０１	甕	2.64915248	9.5434015	60.7860331	0.6375012	14.83475608	1.1854434	145.5006698	87.97157499	
52	中間西井坪遺跡	312	溝ＳＸ０１	甕	2.34584014	9.36702465	51.83872282	1.07106983	19.15728054	1.33106551	153.24865158	92.8318678	
53	中間西井坪遺跡	313	溝ＳＸ０１	甕	2.72837401	7.71475873	60.31018624	0.70804213	16.26811417	1.32956734	175.3211514	90.19552716	
54	中間西井坪遺跡	298	溝ＳＸ０１	二重口縁壺	2.53982183	10.24540717	55.16444083	0.82872365	16.96925078	1.36222744	142.82895194	83.90660282	
55	中間西井坪遺跡	296	溝ＳＸ０１	二重口縁壺	2.18844596	8.20260568	62.32819372	0.80291599	16.01252742	1.088362	132.71752744	86.73440955	
56	中間西井坪遺跡	334	溝ＳＸ０１	高杯	2.46547452	9.91900863	58.22792206	0.75916587	15.20259376	1.43923337	156.68078144	85.20268091	
57	中間西井坪遺跡	340	溝ＳＸ０１	高杯	2.7355311	6.92908003	60.82944978	0.73606187	17.57022501	1.20761632	160.33897973	82.13922362	
58	中間西井坪遺跡	336	溝ＳＸ０１	高杯	2.49903878	9.20225881	56.70139145	0.82135003	18.122845	1.05690043	136.27296736	77.72077561	
59	中間西井坪遺跡	328	溝ＳＸ０１	小形丸底土器	2.46899137	11.57164315	55.12449748	0.92236857	16.00043886	1.22439582	132.69697576	83.56785514	
60	中間西井坪遺跡	320	溝ＳＸ０１	小形丸底土器	2.48114607	10.91331701	57.38390172	0.87738952	15.48926537	1.41945753	155.83816273	72.94885176	
61	中間西井坪遺跡	28	谷３	円筒埴輪２ａ	2.27704574	8.11635242	58.35643545	0.85256501	17.49769364	1.48687518	180.64403544	88.82580827	
62	中間西井坪遺跡	26	谷３	円筒埴輪２ａ	2.31209078	6.92871142	61.64915678	0.75425013	16.55823966	1.42245387	188.92636079	86.95533195	
63	中間西井坪遺跡	101	谷３	円筒埴輪２ａ	2.50527038	5.99835578	60.73393308	0.79160978	17.77745751	1.32896807	191.49532027	105.61591071	
64	中間西井坪遺跡	65	谷３	円筒埴輪２ａ	2.329675	9.18198561	58.76107895	0.78620246	16.22148686	1.43473886	167.47041124	94.05430508	
65	中間西井坪遺跡	55	谷３	円筒埴輪２ａ	2.30888243	10.33516216	56.52425138	0.80979803	16.0574278	1.46650007	162.16807888	80.35711626	
66	中間西井坪遺跡	69	谷３	半裁器台形埴輪	2.21405105	10.62175151	59.54431593	0.75621642	15.61360487	1.23428374	158.46877723	76.95491129	

第18表　胎土分析報告付表

資料番号	遺　跡　名	挿図番号	出土地点	種　別	K	Fe	Si	Ti	AL	Ca	Sr	Rb	備　考
67	中間西井坪遺跡	72	谷3	半裁器台形埴輪	2.38224255	8.3863546	62.68247386	0.83585148	17.66520657	1.15817671	162.33249229	91.66834316	
68	中間西井坪遺跡	73	谷3	半裁器台形埴輪	2.27445438	8.30194437	62.4462871	0.83609727	16.24393704	1.22379655	162.62021575	87.27935147	
70	中間西井坪遺跡	149	谷3	甕	2.26501443	8.01701374	57.63571849	0.91499496	17.54777482	1.29660761	179.39038321	100.5346955	
71	中間西井坪遺跡	74	谷3	甕	2.32677514	5.88869619	59.95416943	0.76948893	18.03131731	1.34424941	187.9809837	100.50523918	
72	中間西井坪遺跡	230	谷3	甕	2.43314424	6.64378079	62.0260136	0.79136399	16.90362715	1.44972056	204.4634277	97.91308301	
73	中間西井坪遺跡	156	谷3	甕	2.28642399	7.39517936	61.47028004	0.74343549	17.54086708	1.29900468	174.08805085	85.79180731	
74	中間西井坪遺跡	120	谷3	甕	1.46989926	6.80909954	59.59988928	0.95702457	16.9657969	2.62937949	272.20175118	61.3283335	弥生系甕
75	中間西井坪遺跡	248	谷3	高杯	2.29240879	8.20555451	57.27970168	0.80586544	17.06941315	1.47518945	168.74461514	91.27068284	
76	中間西井坪遺跡	252	谷3	高杯	2.23953274	7.91896516	58.28870542	0.87419428	17.45106633	1.52073381	191.26925183	89.9598766	
77	中間西井坪遺跡	259	谷3	高杯	2.42049594	6.47053707	61.33308332	0.78128672	18.50795205	1.4527169	193.71490125	102.6702787	
78	中間西井坪遺跡	262	谷3	高杯	2.48089927	6.8153658	63.35456413	0.90442611	18.73763473	1.26814238	177.33521563	106.64688191	
79	中間西井坪遺跡	203	谷3	高杯	2.20874493	7.86054148	58.22444873	0.87296535	17.19029877	1.51204443	200.51750595	81.53536906	
80	中間西井坪遺跡	162	谷3	小形丸底土器	2.30561238	7.70351632	58.58914888	0.89238254	17.00206259	1.42215424	175.85549497	105.42444463	
81	中間西井坪遺跡	238	谷3	小形丸底土器	2.25267463	8.0735944	58.40332547	0.84666612	16.60832085	1.66785409	194.45476158	87.89793419	
82	中間西井坪遺跡	86	谷3	小形丸底土器	2.46565962	4.52965449	62.20836367	0.73311243	17.98123613	1.43174253	207.83390254	114.11405905	
83	中間西井坪遺跡	175	谷3	小形丸底土器	2.4671404	4.94967837	62.71199721	0.68493813	17.76536894	1.50814919	212.5402363	87.92739051	
84	中間西井坪遺跡	239	谷3	小形丸底土器	2.53210945	4.94451791	60.76692976	0.75695379	18.44405537	1.61152291	203.43584391	112.77379648	
85	中間西井坪遺跡	80	谷3	二重口縁壺	2.60756735	5.24861593	64.07354442	0.77342153	18.19710331	1.213609	186.93284823	106.44068767	
86	中間西井坪遺跡	217	谷3	二重口縁壺	2.09367627	8.66096433	58.70203226	0.86313386	16.91744265	1.54170819	193.55048785	84.36317579	
87	中間西井坪遺跡	76	谷3	二重口縁壺	2.22774823	9.12927529	57.09387827	0.71320366	16.25602561	1.19413279	154.07071861	74.43639593	
88	中間西井坪遺跡	146	谷3	二重口縁壺	2.31363325	6.11686186	60.75824642	0.70853371	17.4545202	1.38979377	184.17892368	89.84205132	
89	中間西井坪遺跡	143	谷3	大形壺	2.24008803	6.63862034	60.25634955	0.79677131	19.04675654	1.29540907	191.57752697	92.58148908	
90	中間西井坪遺跡	144	谷3	大形壺	2.24465376	8.35318028	58.02820532	0.87665215	17.44933939	1.4491213	190.40608145	94.67288781	
91	中間西井坪遺跡	104	谷3	大形壺	2.44079492	4.51601616	59.8812294	0.73827396	19.31270491	1.50275578	202.61377688	121.9052557	
92	中間西井坪遺跡	140	谷3	大形壺	2.10842234	8.07433161	56.81253816	0.7893977	18.29381181	1.37750878	175.17728967	87.92739051	
93	中間西井坪遺跡	145	谷3	大形壺	2.37132183	5.86842299	60.17646285	0.81176433	18.25754612	1.50635138	193.11890265	111.96374768	
94	中間西井坪遺跡	159	谷3	二重口縁鉢	2.34750601	6.49744514	65.72858842	0.79922919	16.58068985	1.19623023	186.35740131	107.89877551	
95	中間西井坪遺跡	221	谷3	二重口縁鉢	2.51989305	4.4697564	63.58901423	0.67240299	18.20919187	1.52073381	232.43425848	95.95423773	
96	中間西井坪遺跡	160	谷3	二重口縁鉢	2.67488097	7.12499287	64.72305802	0.78177829	17.92424719	1.15577964	159.96904957	108.54681455	
97	高松市石船塚古墳		表採資料	円筒埴輪	1.03775938	13.15995633	48.92285831	2.06650801	16.52715479	4.02297708	147.24756224	34.65563568	下川津B類類似胎土
98	高松市石船塚古墳		表採資料	円筒埴輪	1.24877	12.64096237	48.79260826	1.8765145	17.2144759	3.83360841	154.31733872	42.50574498	下川津B類類似胎土
99	高松市石船塚古墳		表採資料	円筒埴輪	1.10717077	13.34020352	48.25945137	2.13999839	16.05915474	4.08859692	147.51473403	35.20057761	下川津B類類似胎土
100	高松市石船塚古墳		表採資料	土師器	0.84192671	13.68779677	45.66834366	1.5845193	18.84297792	3.65382803	143.15777875	34.58199488	下川津B類類似胎土

第19表　胎土分析報告付表

資料番号	遺　跡　名	挿図番号	出土地点	種　　別	K	Fe	Si	Ti	AL	Ca	Sr	Rb	備　　考
101	高松市石船塚古墳		表採資料	土師器	0.79589925	14.0130895	46.77112744	2.13729473	17.07459396	4.362762	122.8938264	33.5068392	下川津Ｂ類類似胎土
102	高松市石船塚古墳		表採資料	土師器	1.023692	13.87357301	51.0468025	2.17637489	17.91043169	3.83780329	129.6964311	35.24476209	下川津Ｂ類類似胎土
103	高松市今岡古墳		表採資料	円筒埴輪	2.43949924	10.2887181	54.71811731	0.89090781	17.00378953	1.10544113	142.74674524	93.14115916	
104	高松市今岡古墳		表採資料	円筒埴輪	2.55123615	9.16373973	56.90458153	0.81594272	16.98824709	1.04761178	145.39791142	90.44590588	
105	高松市今岡古墳		表採資料	円筒埴輪	2.43845035	9.27524234	55.24780086	0.89361147	17.84480807	1.0733803	142.13019496	89.41493468	
106	高松市今岡古墳		表採資料	円筒埴輪	2.25717866	9.83791582	55.80874442	0.95358355	18.02959038	0.97929523	141.65750642	79.72380538	
107	高松市今岡古墳		表採資料	円筒埴輪	2.43332934	10.32115523	56.21165125	0.82798629	16.67394447	0.94034282	127.3946434	80.06255306	
108	津田町岩崎山４号墳		表採資料	円筒埴輪	2.34997397	5.91228683	57.8163319	1.08581707	19.95512564	0.7267038	118.10528594	95.88059693	
109	津田町岩崎山４号墳		表採資料	円筒埴輪	1.84589304	4.94672954	66.14886193	0.80389914	17.85171582	0.43006617	114.94032786	71.57913288	
110	津田町岩崎山４号墳		表採資料	円筒埴輪	2.24866419	4.69958078	63.026334	1.29129517	20.23488951	0.5864751	95.45733919	93.494635	
111	高松市横立山経塚古墳		表採資料	円筒埴輪	1.16393386	12.80941424	50.34518888	1.71208286	17.54086708	3.78536734	149.93983177	39.44228769	下川津Ｂ類類似胎土
112	高松市御厩天神社古墳		表採資料	円筒埴輪	2.2916684	3.47231489	69.29222986	0.64290852	17.61167151	0.57029487	125.87381939	94.12794588	
113	高松市御厩天神社古墳		表採資料	円筒埴輪	2.05209114	7.77834287	72.99654136	0.82233318	16.6290441	0.43815629	79.67365217	73.3759684	
114	高松市御厩天神社古墳		表採資料	円筒埴輪	2.37027295	3.62381099	69.73681671	0.6625715	17.69974532	0.59276741	111.63150806	93.99539244	
115	多度津町御産盥山古墳		表採資料	円筒埴輪	1.7170655	13.90472002	50.36950223	1.53585344	17.09186334	1.48537701	122.05120769	52.80072884	下川津Ｂ類類似胎土？
116	多度津町御産盥山古墳		表採資料	円筒埴輪	1.45632548	13.18465277	47.95379792	1.39772103	18.05031363	2.08344641	120.61259039	54.39137012	下川津Ｂ類類似胎土？
117	多度津町御産盥山古墳		表採資料	円筒埴輪	1.60187345	14.09805264	47.88259456	1.49529855	17.80854238	1.58545475	101.10905004	50.79769908	下川津Ｂ類類似胎土？
118	坂出市田尾茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.32905801	5.96149542	57.5610418	0.83339361	21.2762328	0.54632415	99.77319111	94.28995565	
119	坂出市田尾茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.22071454	8.04852935	53.84804696	0.85920126	20.34541351	0.53853367	89.10687137	81.62373802	
120	坂出市田尾茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.08115137	7.771708	55.20091084	0.94031104	20.51638032	0.53523769	84.13336582	88.61961403	
121	大川町富田茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.45362831	7.08905402	53.08043999	1.00052891	19.8100629	0.77674267	117.8792175	97.48596637	
122	大川町富田茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.62576856	7.58980209	56.94105154	0.91204551	20.29533232	0.39111375	51.92888982	113.70167056	
123	大川町富田茶臼山古墳		表採資料	円筒埴輪	2.76588701	6.88079295	60.02710946	0.94547257	19.02948716	0.45283835	70.52815643	123.79046018	
124	大川町川東古墳		表採資料	土師器	1.64123742	9.82298738	56.96362822	0.94596415	16.92953121	2.27491251	216.67112314	66.29172343	
125	大川町川東古墳		表採資料	土師器	1.66634892	10.17979572	55.11407747	0.97496704	17.4130737	2.36360417	221.41856025	68.10328711	
126	大川町川東古墳		表採資料	土師器	1.68559901	10.01134385	54.81189735	0.91499496	17.86898519	2.34442759	220.65814824	66.92503431	
127	長尾町稲荷山古墳		表採資料	土師器	1.70830424	14.42039655	45.39047688	1.63810092	19.16764216	2.40555292	157.11236663	50.22330084	
128	長尾町稲荷山古墳		表採資料	土師器	1.60884544	15.17290092	45.56588029	1.66071334	19.0588451	1.93482796	131.68994365	50.44422324	
129	長尾町稲荷山古墳		表採資料	土師器	1.60360102	14.64340176	45.87674375	1.57542518	17.81717707	2.55716771	129.96360288	49.41325203	

第20表　胎土分析報告付表

第５章　まとめ

第１節　古式土師器

谷３，溝状遺構ＳＸ０１からまとまった量の古式土師器が出土している。特に前者では厳密には廃棄単位を違えるものの，同一時期の所産と見なしよい状況で円筒埴輪その他が共存する。この他焼成土坑や大形竪穴建物でも少数の古式土師器類が埴輪類と共伴している。これらは第４章白石報告や出土状況が示すように共に本遺跡製作品の一部である。いずれも石英粒・赤色粒(焼粘土塊)を多く含む胎土で，その特徴は埴輪類・土製棺類と基本的に共通する。

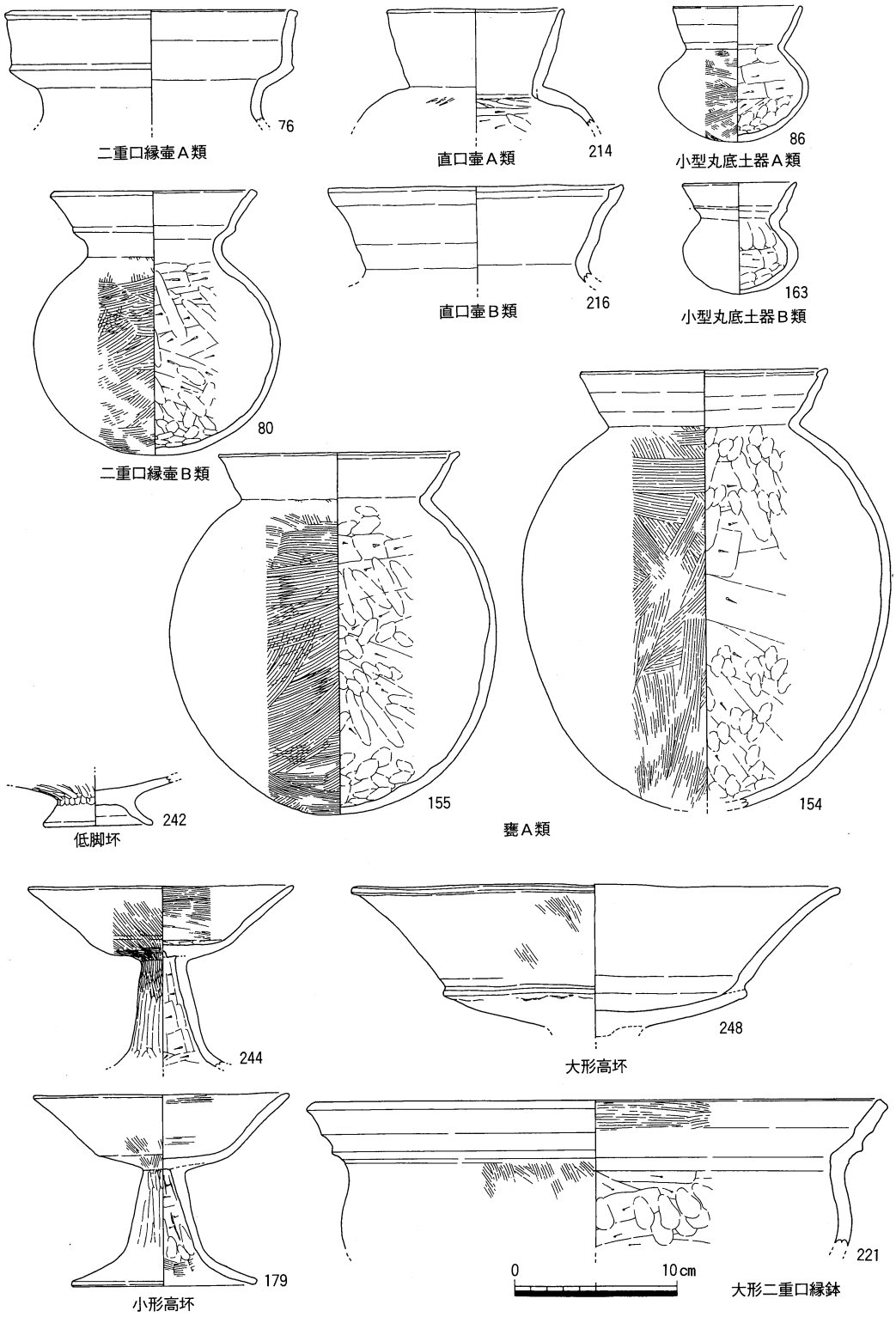
ここではこれらの内容と編年的位置づけを簡単に整理しておきたい。

(1) 谷３資料

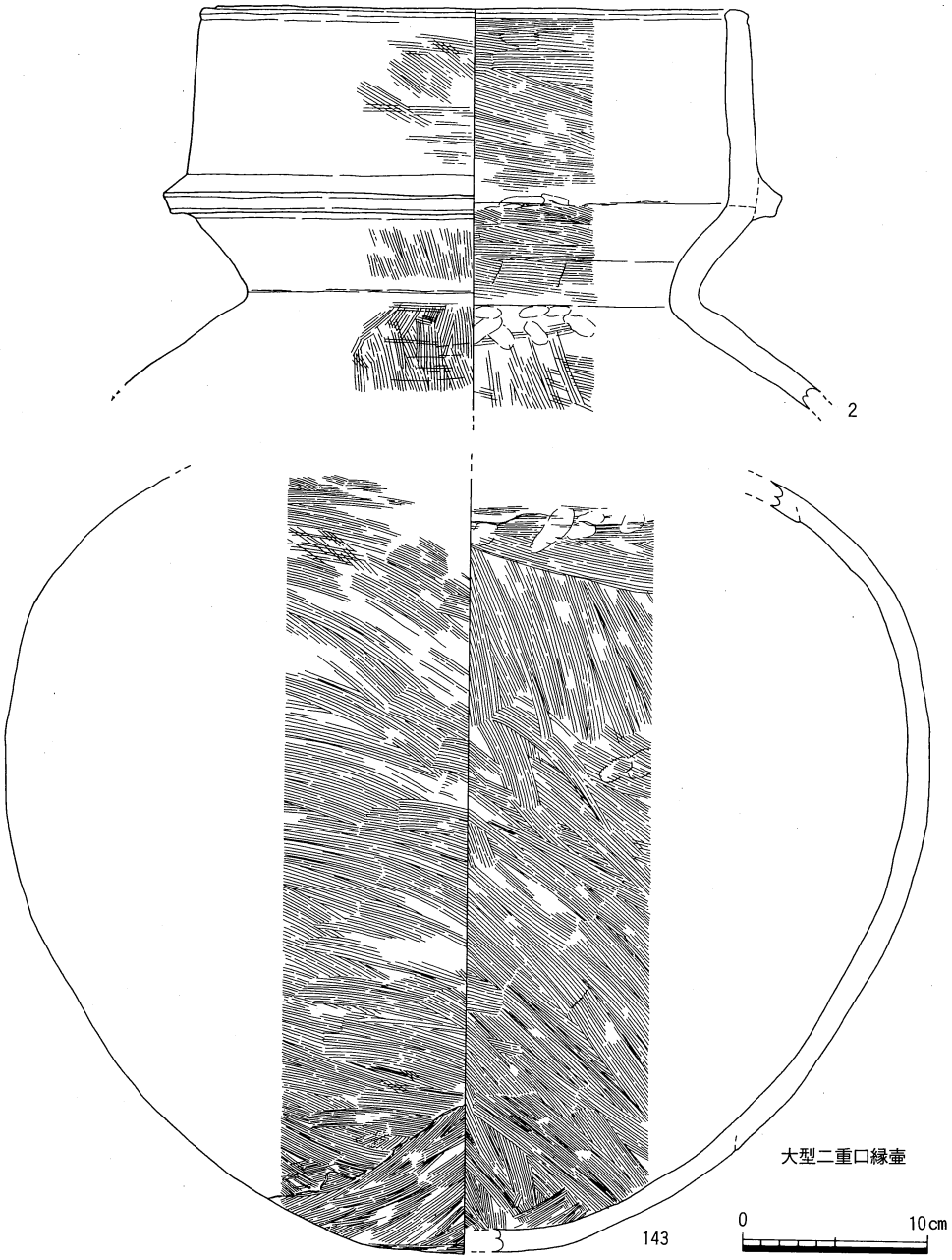
第３章で見たように複数の廃棄単位に分かれるが，若干の時期の異なる夾雑物を除けばその様相に明確な差異は認めがたい。ここでは一括して検討することにしたい。

ここで確認できた器種組成は次の通りとなる。

壷　　大形二重口縁壷
　　中形二重口縁壷Ａ類
　　　　Ｂ類
　　中形直口壷　Ａ類
　　　　Ｂ類
　　小形丸底土器　Ａ類
　　　　Ｂ類
甕　　Ａ類
高坏　大形高坏
　　小形高坏
鉢　　二重口縁大形鉢
　　低脚坏



第159図　中間西井坪遺跡谷３の古式土師器１（１／４）



第160図　中間西井坪遺跡谷３の古式土師器２（１／４）

大形二重口縁壺はやや内傾する長大な立ち上がり部を有し頚部は短い。口縁屈曲部は突帯を貼付して強調する。口径20cm以上の大形壺は全てこの形態に統一されている。本器種

の祖形は，しばしば土器棺として広い範囲での使用例が報告される下川津Ｂ類様式の大形二重口縁壺に求められることは間違いない(1)。しかし遅くとも布留１式段階には畿内地方でその模倣形態が出現しており，布留様式の大法量壷の１形態として，その中に取り込まれたものと考えられる。その過程で突帯貼付，頚部の鈍化などの変化を来している。本例は調整技法などの点から見ても布留様式の一翼を担う大形壷としての「再輸入」と見なすべきであろう。

中・小形二重口縁壺は口頚部形態から２種に分離できる。Ａ類は短く直立する頸部を有し，受部は萎縮している。立上り部は短く口縁端部は鈍く肥厚する。屈曲部は鈍い突起もしくは段を有する。Ｂ類は頸部直立部分をもたず，口縁立上り部は外反して開く。屈曲部は鈍い段をなし，口頸部が体部並に薄作りとなる。

直口壺は２種に分かれるがいずれも口径に比して短い。一見して太頚である。Ａ類は口縁部が直線的に開くがあまり長くない。端部は丸く収めるか薄く尖る。Ｂ類は口縁端部が甕同様に内方に小さく肥厚する点に特徴がある。Ａ類に比べ相対的に口頚部の開きが小さい傾向がある。

小形丸底土器も口頚部形態で２種に区分できる。しかしいずれも体部の肥大と口縁部の萎縮が認められる。全体的な調整の簡略化も確実に進行しているが，まだ極端に鈍重な印象を与えるには至っていない。

Ａ類は扁平球状の体部を有し，頸基部の絞り込みは弱い。口縁部は比較的大きく開き，端部は尖る。口頚部は横ナデを原則とし，体部外面は縦基調のストロークの短いハケ調整のち，最大径付近を横ハケ調整する。内面は中位を中心に横ケズリ後底部および肩部を指押さえする。底部外面にケズリを加える個体もあるが，形骸的で粗雑である。

Ｂ類は鈍化した二重口縁形態を有する点でＡ類と区別できる。屈曲部はかなり鈍化し，立上り部も短い。体部の形態・調整はＡ類と異ならない。山陰系統の形態である。

甕は「く」字口縁形態のＡ類しか認められない。球形の体部でやや長胴化した個体も認められる。口縁部は僅かに内湾気味に開くが，その形状には鈍化の兆しが見える。体部に比してやや分厚く鈍重な観を与える個体が多く，口縁部中位外面に鈍い稜すら観察できるものすらある。頚基部外面は１条の強い横ナデで狭い凹面を有することが多い。

口縁端部は小さく内方に肥厚する形態を基本とする。ただし肥厚部分が鈍化すると共に間延びしたり，むしろ端部を上方にやや引き出してその部分を強調する個体が大部分を占める。

内面はケズリ調整後，底部中心に下半部と肩部に指押さえが顕著に認められる。外面は縦基調のハケ調整後に肩部の横ハケを原則的に施す。また肩部に乱雑に×状ないしは１条の沈線文を加える個体がかなり見られる。しかし列点文・刺突文例は例外的にしか過ぎない。

高坏には大小２種類がある。脚部の形状は坏部ほど差異が大きくない。大形高坏は概ね口径25cm以上となる。杯中位で屈曲して上半部は外反して開く。屈曲部は鈍い段を有し，その部分を強調する。また粗雑とはいえミガキ調整を施す例もまだ残存している。小形高坏では杯中位の屈曲はひどく鈍化したものが多く，もはやその部分で明瞭は稜を認められない。しかし断面形は未だ台形状を呈し上半部は外反気味によく開く。次期に盛行する単純な椀形坏部はまだ出現していない。

脚部は軸部と緩やかに折り返した短い裾部の差が明瞭である。杯・脚の接合は①杯部下面に脚を接着させる②外側に補強粘土を巻く。③余分な補強粘土をケズリ落とす。④⑤杯外面縦（放射状ないしは螺旋状）ハケ⑥軸部縦ミガキ，杯部外面横ナデの手順を守る個体が圧倒的大部分を占める。この成形手法に拠る場合，軸部内面頂部に針穴状刺突痕を原則的に有する。坏外底面中央に単純に脚部を貼付する成形手法は例外的に見られるに過ぎない。調整は軸部内面横ケズリ，裾部内面横ハケを原則とする。後者では短い間隔で規則的に原体静止痕を見るものが多い。また大部分では透かし孔を穿たないが，ごく希に軸部下単位小円孔２方を穿つ例がある。

大形二重口縁鉢は半球形の体部にひどく鈍化した二重口縁を付す。立ち上がり部は高いが受部はひどく萎縮し，屈曲部は外見上口縁部外面の連続的な横ナデの一単位と大差ない。

この他低脚杯を伴うが脚部片のみで全体形状は不明。よく張り出した倒杯形の脚部で，外面にミガキ調整を見る。

(2) 溝状遺構ＳＸ０１

溝状遺構ＳＸ０１はひどく削平されており，良好な資料は多くないが，器種組成・各器種の形態について谷３資料とやや異なる様相を示す。また埴輪類との共伴は確認できていない。これらの器種組成は次の通りである。

（器種分類名称は谷３資料に準ずる。）

壷　　大形二重口縁壷

　　中形直口壷Ｂ類

小形丸底土器A類

甕　A類

B類

C類

高坏　大形高坏

小形高坏

鉢　二重口縁鉢

低脚杯

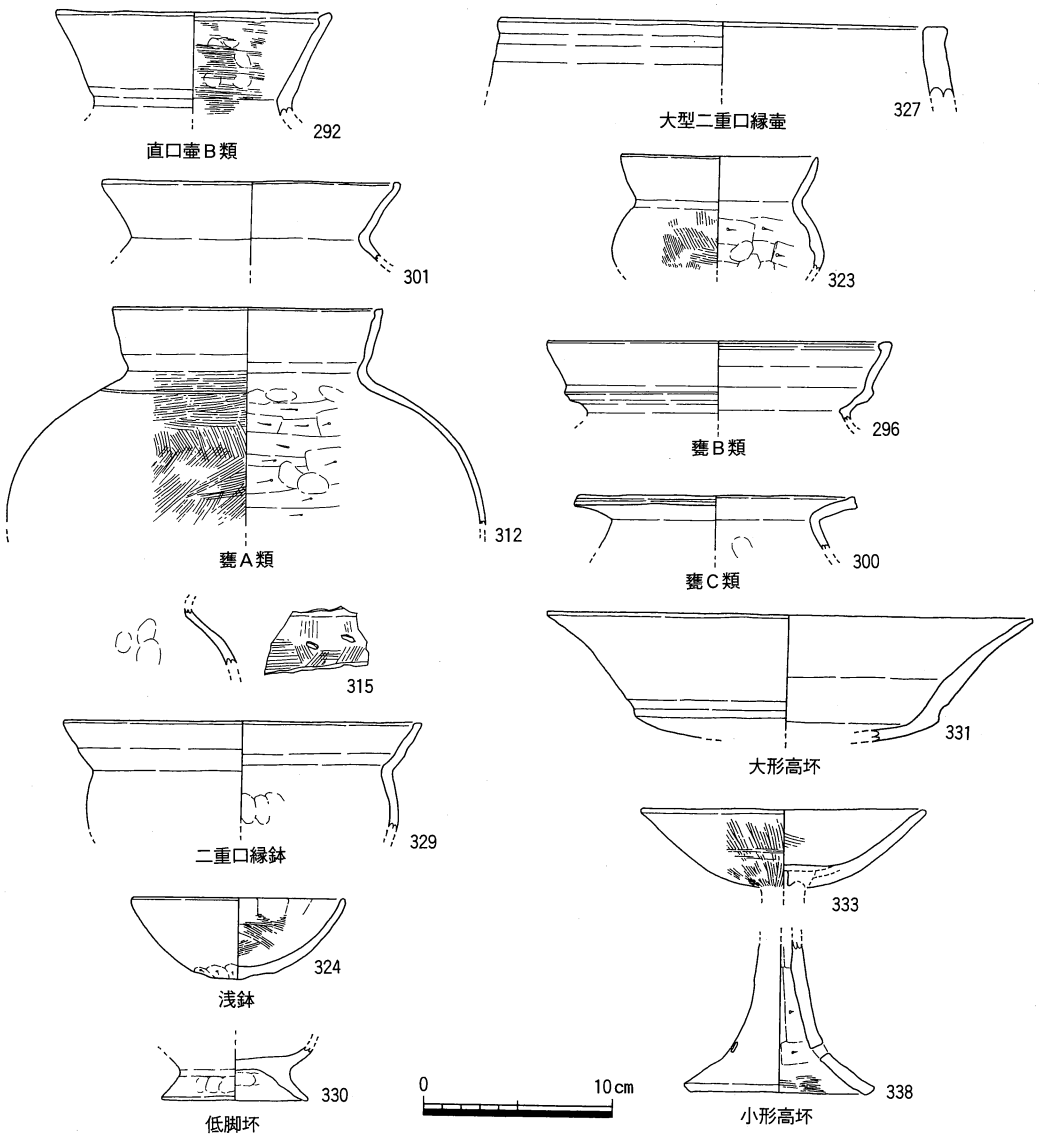
浅鉢

大形二重口縁壷は小片だが谷3資料に類似した形態となることは間違いない。また中形の二重口縁壷を確認していないが，資料の残存状況に起因する欠落と考えたい。直口壷B類は口頚部が直線的に開き端部の肥厚が鋭利である。小形丸底土器はいずれも扁平球状の体部で中位の張りは強い。口縁部は直線的だがかなり短い。調整は基本的に谷3資料に異ならない。

甕は3種類が見られる。A類は端部肥厚を特徴とする「く」字口縁甕。布留様式甕の主流的な形態で，谷3資料ではこの形態ばかりである。本遺構の甕A類では口縁部は全般的傾向として薄手で極端な内湾傾向を示さない。また端部肥厚はまだ鋭利であり，谷3資料で見られた肥厚よりも端部摘み出しによってこの部分を強調する個体は含まれない。また調整はほとんど異ならない。谷3資料で盛行した肩部沈線も少数例見られるが，それよりも肩部刺突文が優越する。甕B類としたものは二重口縁形態である。A類に準じて出土している。この口縁部形態は山陰地方に由来するものであろう。多くは屈曲部が鋭く突出し，口縁端部内方突起も鋭利である。C類はわずかな量が認められるだけであるが，胎土の特色から混入品では無いと判断できる。強く折り返し直線的に短く開く口縁部を特徴とする。在地的かつ伝統的な甕口縁部形態の一つである。

高坏には大・小2種類がある。坏部の形態・調整は谷3資料と格差がない。頂部の針穴状刺突痕を含めた脚部の調整法も同様であるが，裾の部の折り返しがやや緩やかである点と小円孔透かしがやや多い点に多少の差が認められる。

二重口縁鉢は中形品しか確認していないが，屈曲部は完全に形骸化し外表の微妙な凹線に転化している。また浅鉢が伴う。弥生後期終末期以来の伝統的な形態で底部にケズリを加える個体すら見られる。



第161図　中間西井坪遺跡ＳＸ０１の古式土師器（１／４）

⑶　編年的位置の検討

まずは谷３資料・溝状遺構ＳＸ０１資料を合わせて全体的な中間西井坪遺跡の古式土師器資料の位置づけから検討する。一部に在地形態の残存や，山陰系器種の共存が見られるものの，取りあえず全体的な様相は広義の布留様式に包摂される内容と見て間違いないであろう。したがってまずは布留様式の消長に基づいてこれらの編年上の位置づけをなすことができる。

組成上の特色としては小形器台・小形精製鉢の欠落，体部が肥大化した新しい様相の小形丸底土器と高坏の多量化が重要である。これらの特色は広義の布留様式後半段階の指標とされる点である。寺沢氏の編年案[2]では布留４式以降に位置づけられることになろう。一方小形丸底土器の全体的な鈍化傾向が極限に達していないことや椀形坏部の高坏がまだ出現していないことから布留様式の最末期（寺沢編年４式（新））まで下らせる必要はない。甕Ａ類の口縁部形状をはじめとする布留様式系統の諸器種の形態的特徴もこの位置づけを支持する。

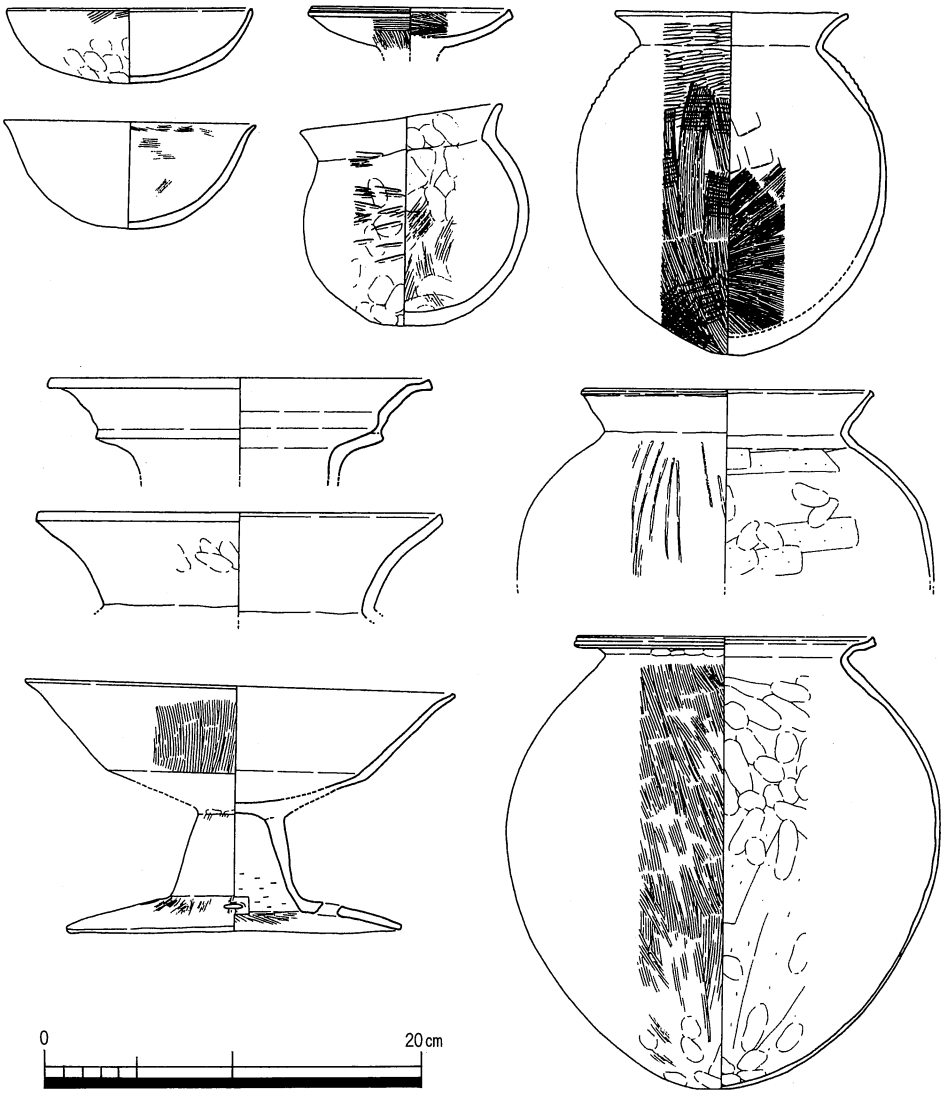
大枠としてこのように位置づけられる資料群であるが，既に見たように谷３資料と溝状遺構ＳＸ０１資料とでは一定の格差が見られる。なお大形竪穴建物等の若干量の資料については，資料上の制約からここまでで示した大枠としての位置づけで満足しなければならない。

さて溝状遺構ＳＸ０１の甕Ａ・Ｂ類の口縁部形状や直口壷のそれは明らかに谷３資料よりも古い様相をとどめている。その他の器種における微妙な差異も同様に理解することが可能である。一般的な消費地（しかも多地域の土器が一定量流入しうる条件を備えた消費遺跡）であればこの程度の相違は搬出元の相違などに解消することも可能であろうが，これら資料の性格上，系統差ととらえることは困難である。したがってＳＸ０１→谷３の変化を想定することが可能であるが，布留様式系の器種組成に限れば両者に本質的な差異はなく，先に見たように布留４式（古）内の微細な時間差と理解しておきたい。

(4) 中間西井坪遺跡出土古式土師器の評価

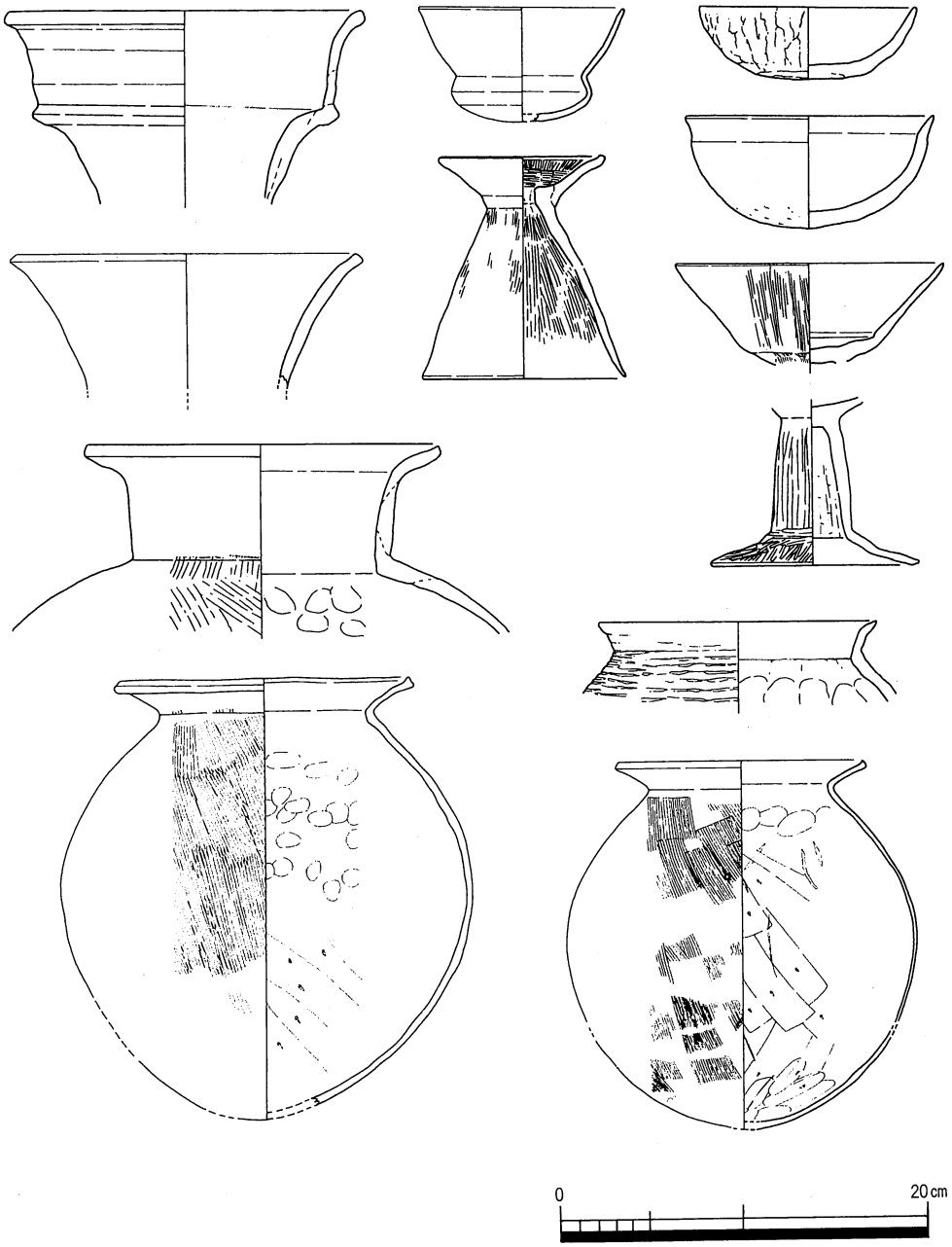
今のところ讃岐地方においては，様式的組成を保持した状態での布留様式は中間西井坪遺跡で確認した布留４式（古）並行期以前には認められない。おそらく布留式最古段階に並行する下川津Ⅵ式[3]期以来，小形器台など在来の組成に含まれない形態の一部はわずかずつ取り込まれてはいるが，続く時期の川津二代取遺跡[4]資料や買田岡下遺跡[5]ＳＤ４８資料に基づいて設定できる買田岡下式においても様式の骨格をなす器種構成や主要器種の形態・製作技法は後期後葉以来の伝統的様相を堅く守っている。また一般集落の資料ではないが，中間西井坪遺跡焼成土坑・谷３資料などの直前時期に位置づけられるであろう石清尾山石船塚古墳などで伝統的形態の広口壷が使用されていること[6]は，直前の時期まで根強く伝統的な土器様式が残存したことを示唆する。

中間西井坪遺跡資料，とくにＳＸ０１資料では甕Ｃ・浅鉢といった伝統的な組成の一部



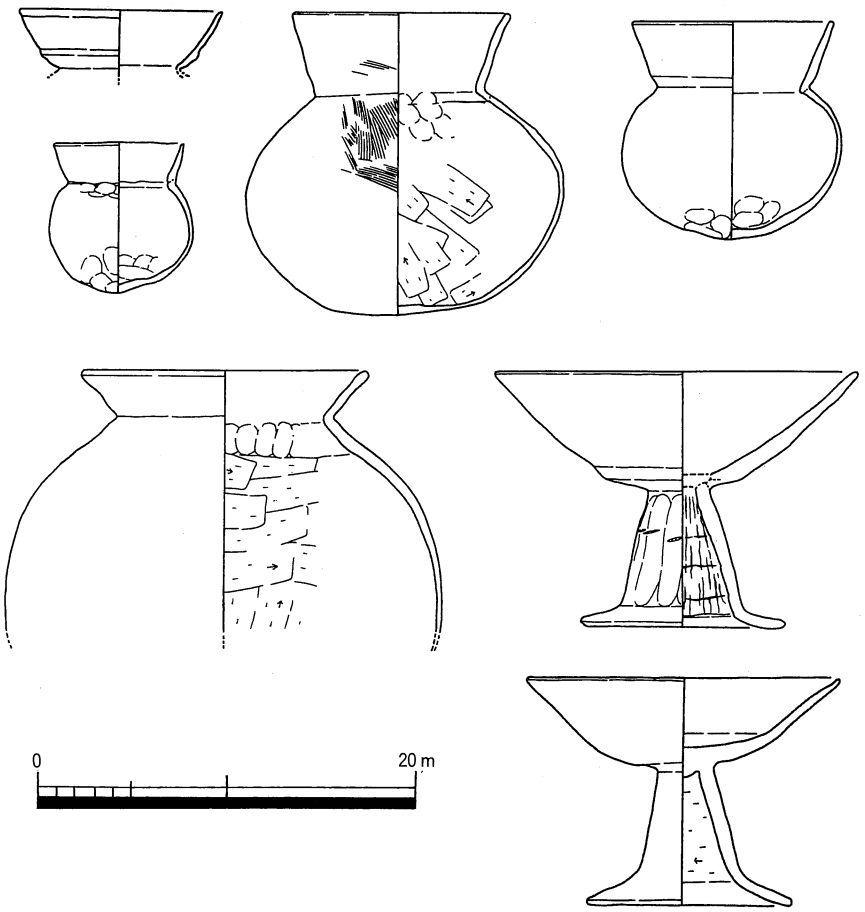
第162図　下川津Ⅵ式の主要器種と形態（1／4）

が少数残存するが，これまで見てきたように大勢としては布留様式といってよいであろう。しかもそうした残存物は直続する谷3資料では払拭されているのである。つまり中間西井坪遺跡の古式土師器は讃岐地方において伝統的土器様式の最末期に出現した，様式的内容を完備した最も古い布留系土器様式であり，中間西井坪遺跡の工人集団はそれまで在地の伝統にない器財形埴輪・土製棺の製作に加え，土師器製作の点でも外来的な技術体系で装備された集団と評価すべきであろう。



第163図　買田岡下式の主要器種と形態（1／4）

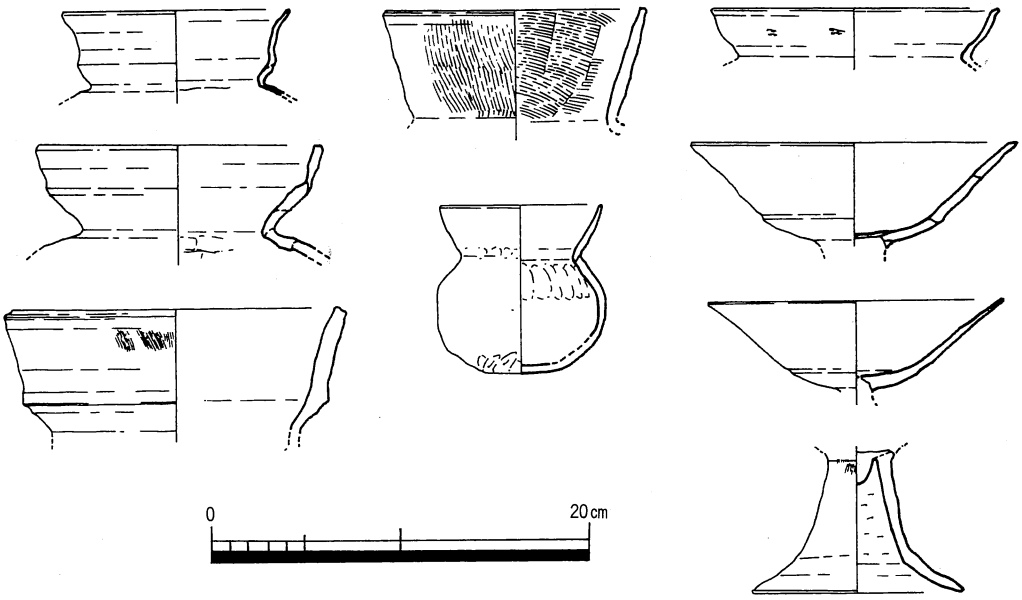
なお中間西井坪遺跡にほぼ並行する資料として志度町鴨部南谷遺跡[7]，下川津遺跡[8]ＳＨⅡ０２上層資料がある。これらも広義の布留様式の内容を備えた土器群であり，伝統的形態はその中に含まれない。中間西井坪遺跡で見られた現象は局所的なものではないこと，新規の布留様式による伝統的土器様式の最終的な駆逐がこの時期前後に急速に完了したこ



第164図　下川津遺跡ＳＨⅡ０２上層の古式土師器（１／４）

とをおそらく示すであろう。

上記したように，本資料を寺沢編年　布留４式（古）並行と位置づけたが，ＳＸ０１資料に含まれる伝統的要素の残存を除外してもその組成の細部や一部の器種における調整手法は畿内地方の典型的な布留様式のそれとは微妙に異なる。組成では低脚杯・大形二重口縁鉢の存在がそれである。また甕Ｂが一定量存在することも同様に評価できるであろう。また高坏軸部や小形丸底土器体部の内面ケズリも畿内地方では必ずしも一般的な技法ではない。これらは「山陰的な」様相と見なしうる可能性が高い。また甕肩部の沈線・刺突文表現は当該時期の畿内地方には原則的に残存しない。こうした典型的な布留様式からややはずれる要素は，今回十分果たしきれないが，本資料のそして本遺跡の土器・埴輪製作集団の技術的系譜を追求する際の重要な指標となろう。



第165図　鴨部南谷遺跡ＳＨ８８０２の古式土師器（１／４）

第２節　円筒埴輪

(1)　中間西井坪遺跡出土円筒埴輪の概要

中間西井坪遺跡では多量の円筒埴輪を検出している。主な出土地点は１号墳，焼成土坑・谷３，大形竪穴建物・古墳群周辺，２・３号墳・ＳＸ０３である。出土地点ごとに円筒埴輪の様相は多かれ少なかれ差異が認められる。以下ではこれらを４類型に区分してその様相を示す。このうち前３者（１～２ａ類）は口径40cm前後の大型品が多く，方形透かしを基調として全般的に大形で突出度の相対的に高い突帯を有し，黒斑が認められるなど一見して古相を呈する点で共通するがより細かい様相では差違も大きい。一方２・３号墳等の３類は対照的に口径20cm前後の小形品で円形透かしを持つなど新しい様相を示す。

以下では口縁部形態・透かし孔形状・透かし孔配置・突帯形状・外面調整・内面調整・突帯貼付時調整　素地粘土（肉眼観察）の８項目を指標にしてこれらの細かな特徴をまず提示することにする。次いで共伴する器財形埴輪や土師器を含めて，讃岐地方の円筒埴輪の中での位置づけを検討する。特にその作業にあたっては焼成土坑資料など，本遺跡で製作されたと見られる資料（２ａ・２ｂ類）の搬出先の検討を重視したい。

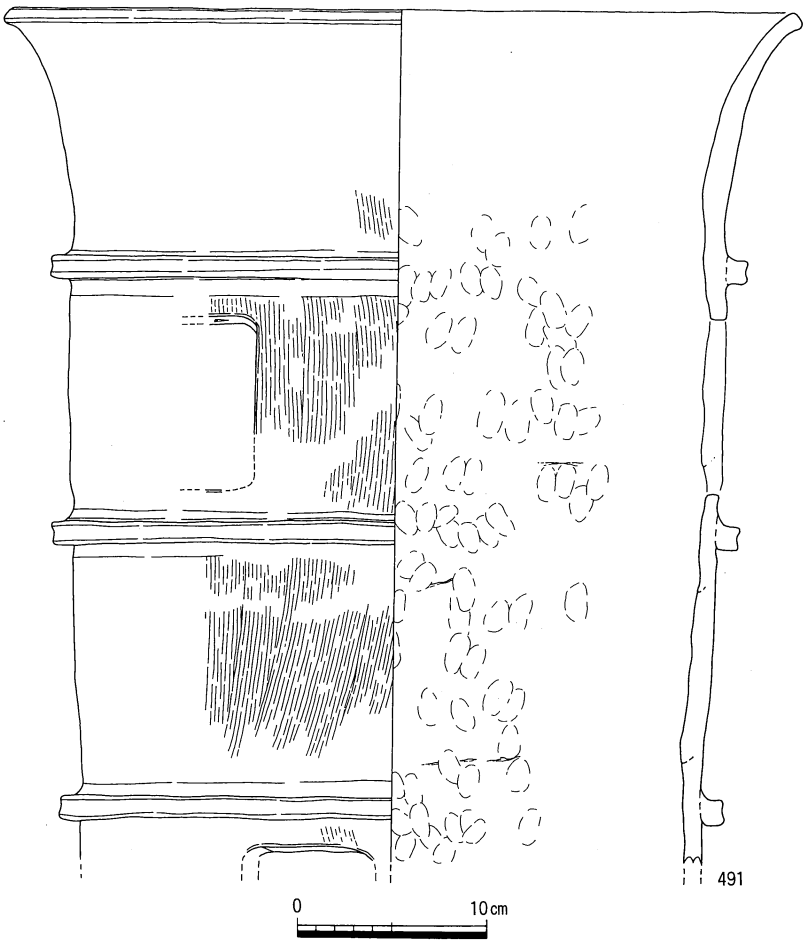
なお各資料については第３章に出土地点単位に掲載したものに加え，第107図～177図に

小片に至るまで掲載可能な全資料の断面図を列挙している。類型間の差異と各類型のヴァリエイションの参考とされたい。

1類：1号墳出土埴輪

本類型は胎土などの点から中間西井坪遺跡の製作品ではなく外部から搬入して1号墳に樹立したと推定できるものである。

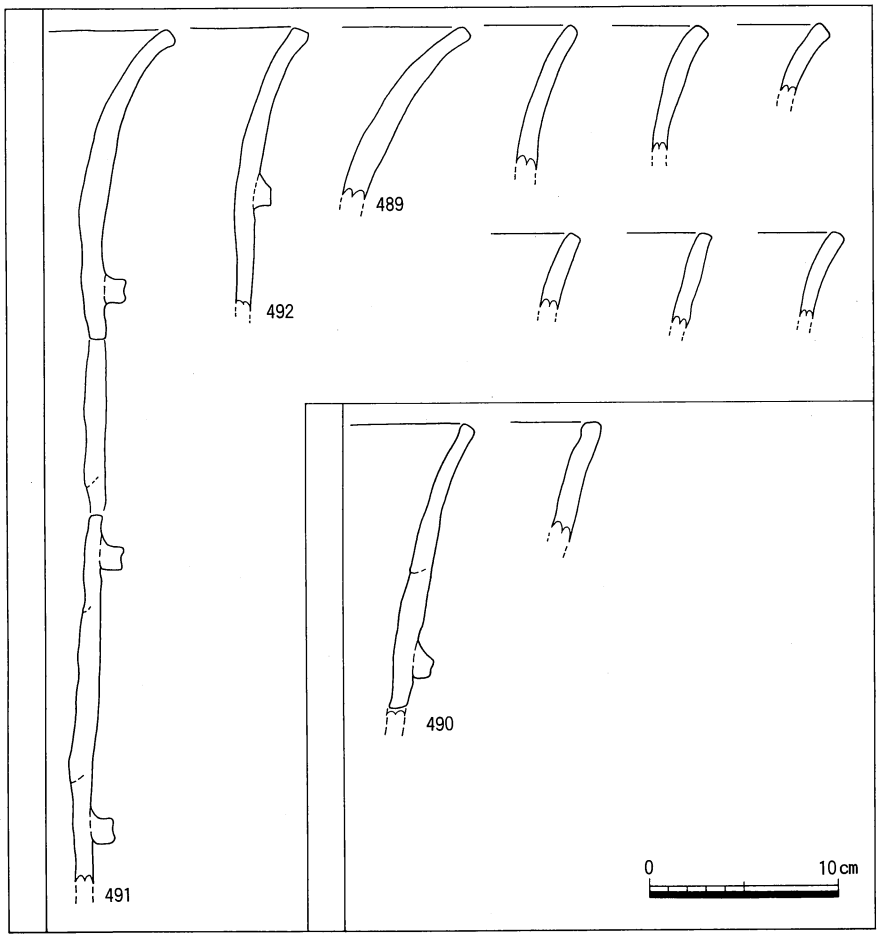
計測し得た限りでは全て口径40cm前後の大型品ばかりである。器高・段数は不明。ただし491は最低5段75cm以上にはなるであろう。口縁部は緩やかに外反する。端部の強調は顕著ではないが端部外方をわずかに張り出す傾向を持つ個体が多い。又本類型では中位段の突帯間隔は平均15cm前後を測るが，口縁部は1例を除きほぼこれに匹敵



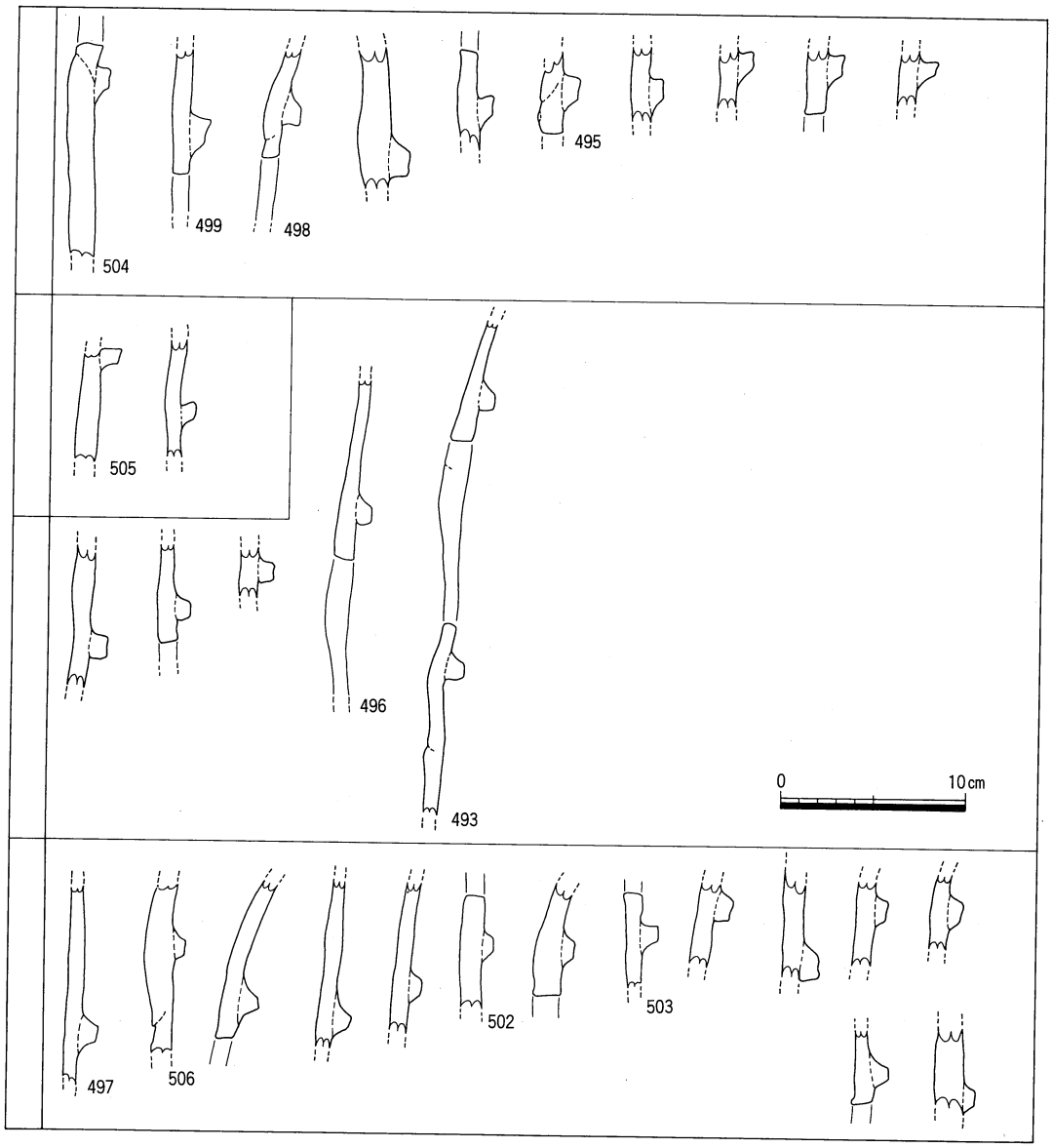
第166図　円筒埴輪1類（1／4）

長さを持つ。短口縁型は含まれるものの非常に限定された存在である。

透かし孔は確認した限り縦長の長方形に限られる。小片が多く三角形透かしが絶無と見なすにはやや躊躇するが，長方形透かしが卓越する点は動かないであろう。また円形透かしは全く含まれない。段あたり孔数は唯一推定可能な493によれば４～５方と考えられる。



第167図　円筒埴輪１類の口縁部形態（１／４）



第168図　円筒埴輪１類の突帯形状（１／４）

また491等では１段おきにやや位置をずらした配列が復元できる。

突帯形状は単純ではなく一定の差異を含む。突出度の高い台形・扁平な矩形・扁平で上端を強く突出させる形態のほぼ均等に多く，これらで全体の９割強を占める。鍔状に近い突出度を持ち上端を強く突出させる形態がこれにわずかに加わる。

外面調整は確認した限り１次調整タテハケで終わる。ヨコハケ・ヨコナデ等の二次調整が明確に付加される資料はない。内面調整はナデを基調とするが突帯位置裏面以外にもかなり顕著な指押さえ痕をとどめる個体が目につく。ハケ調整はごく例外的に認められるにすぎない。

ケズリ調整は皆無である。また突帯下面位置の方形刺突など貼付前調整は確認していない。

以上に加えて本類では使用する素地粘土に顕著な特徴がある。弥生後期初頭～古墳時代前期に高松平野香東川下流域で主体的に分布する下川津Ｂ類様式に極めて近似した，角閃石細粒を多量に含む特徴的な粘土を使用している。おそらくこの特徴と関連して色調は橙色ないしは明褐色を基調とする。この点で他類型とは大きく異なる。他に赤色粒（おそらく焼粘土粒）や長石・石英粒若干等も含む。

なお１類では他器種埴輪の共伴を確認していない。

２ａ類：焼成土坑・谷３出土資料等

本遺跡において製作されたと推定する資料である。

口径40cm前後の大型品を中心とする。器高・段数は不明である。口縁部は緩やかに外反し，やはり端部の強調は顕著ではないが，１類とは逆に端部内方に小さく隆起する傾向を持つ個体が多い。本類も中位段の突帯間隔は平均15cm前後だが，口縁部長はこの2/3前後と短い型が大多数を占める。106はその最も極端な例である。

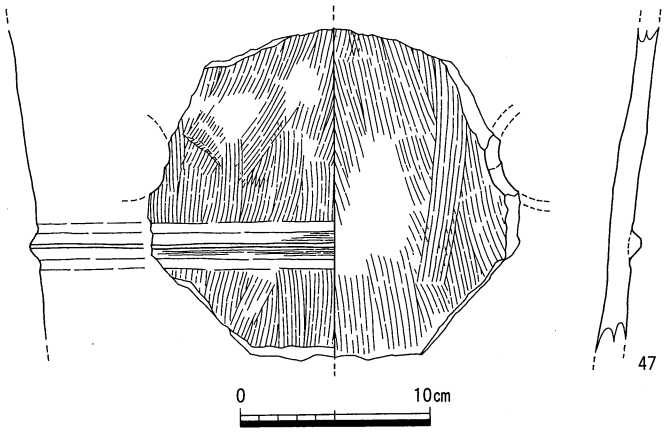
突帯・調整の点でやや特異な47では円形透かし孔の可能性があるが小片のため断定は困難である。これを除けば透かし孔はほぼ長方形に統一されている可能性が高い。また25・26等では１段あたり５方透かしと推定され，口縁部・最下段を除く中位各段に，位置を揃えて配置しているようである。

突帯形状はやはり単一の様相を示さないが，突出度の高い台形突帯が全体の６割強を占め，他形態を圧倒している。扁平な矩形突帯，扁平で上端を強く突出する形態，突出度が高く上端を突出させる形態が各々１割前後ずつ認められる。この他断面形が蒲鉾型を呈する矮小化した小突帯がやはり１割弱伴う点に注意したい。上述の47もこの典型例であるが，調整その他の要素についても他資料との差異が大きい１群である。

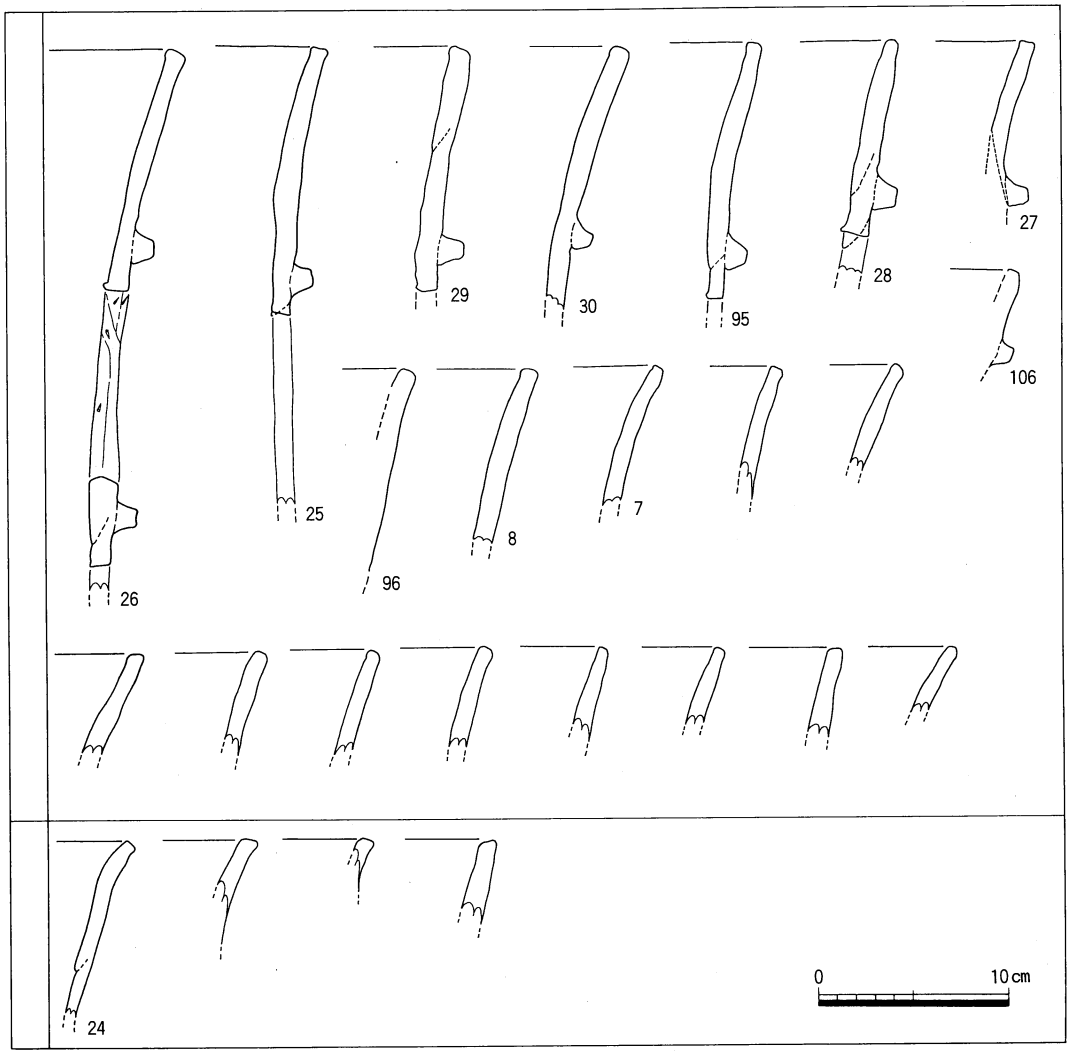
外面調整は１次タテハケ後ヨコナデ調整が一般的である。２次ヨコナデの強弱によって１次調整の残存度に差異はあるが，２次調整を欠くものは極例外的である。内面も最終的にはかなり丁寧にナデ調整が及ぶ。突帯貼付時の痕跡であろうが，一般に突帯裏面位置には横方向の指押さえ痕が連続する事が多い。しかし本類ではこの部分も含め極力，平滑に仕上げている。内面にハケ調整が及ぶのは先に触れた47等の特異な１群に多い。

また本類ではわずか２例（44・101）であるが明確な突帯下面の方形刺突痕を確認している点で注意を要する。胎土は粗粒の赤色粒（焼粘土塊）と石英粗粒を多量に含む点に特

第169図　円筒埴輪２ａ類１（１／４）



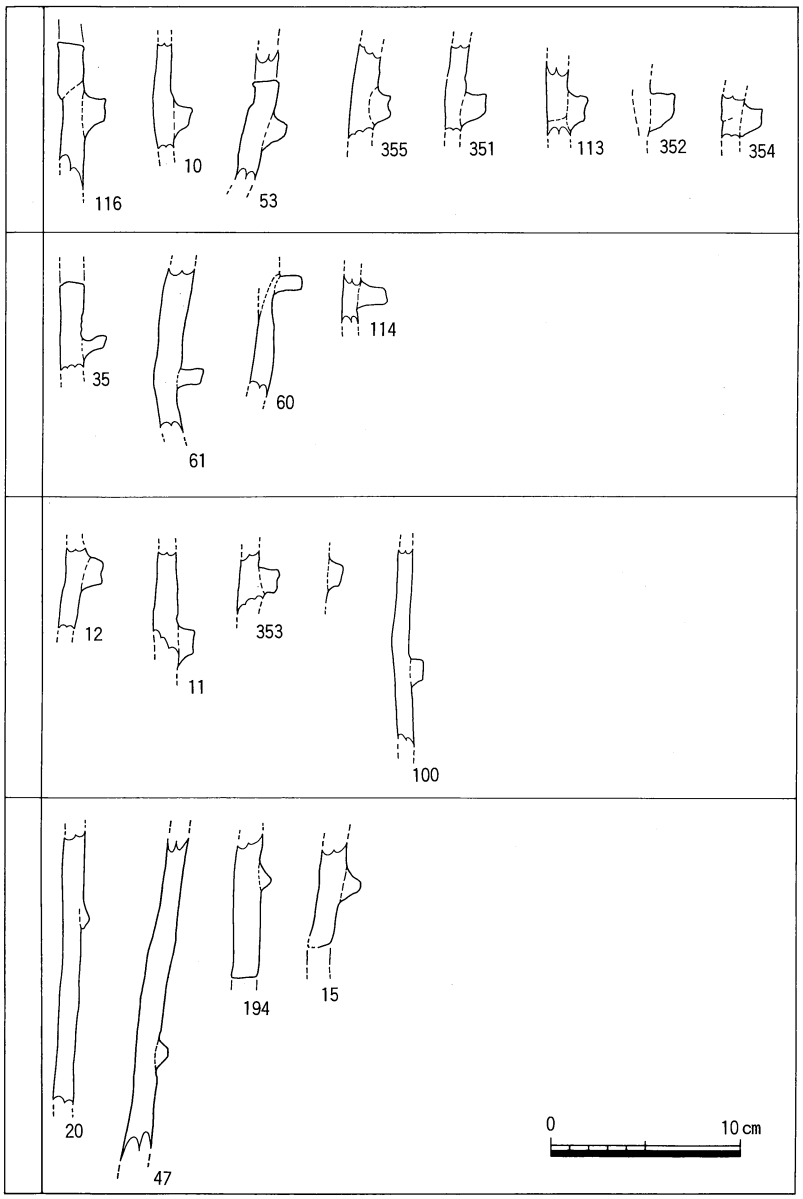
第170図　円筒埴輪２ａ類２（１／４）



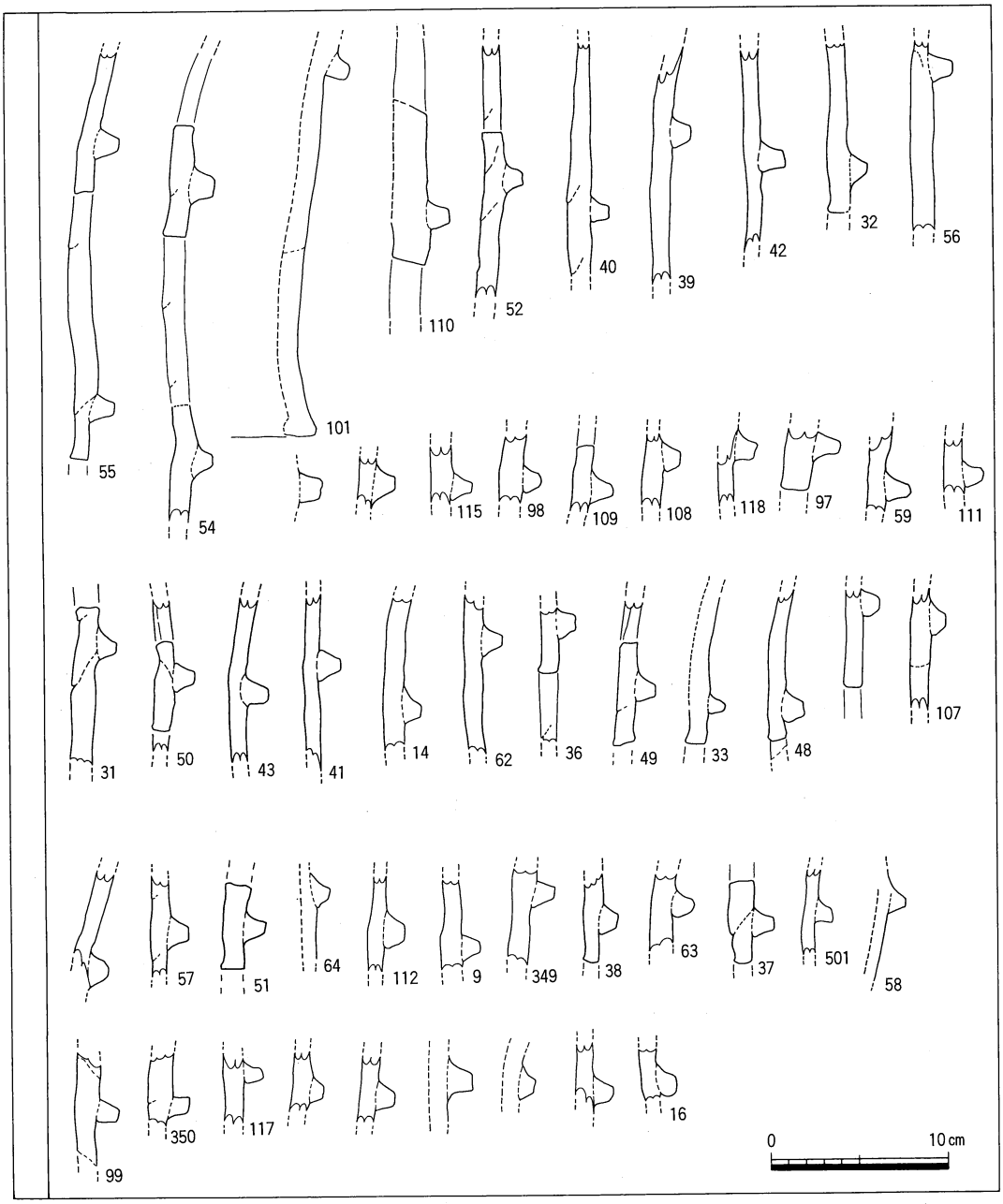
第171図　円筒埴輪２ａ類の口縁部形態（１／４）

徴がある。１類に顕著であった角閃石細粒はごくわずかしか含まれない。

焼成土坑・谷３資料などの所見では本類は少なくとも器財形埴輪：家・蓋・（仮称）半裁器台形，箱形土製棺，土師器諸形態と共に製作されている。これら諸器種は素地粘土の特徴も完全に一致している。器財形埴輪を伴うこと，朝顔形円筒を欠くことに注意したい。また突帯貼付部分の方形刺突痕を確認するものの鰭付円筒埴輪を伴わない点も重要であろう。共伴する土師器類は別に詳述するが布留式新段階，寺沢氏編年[9]の布留４式（古）に並行する。



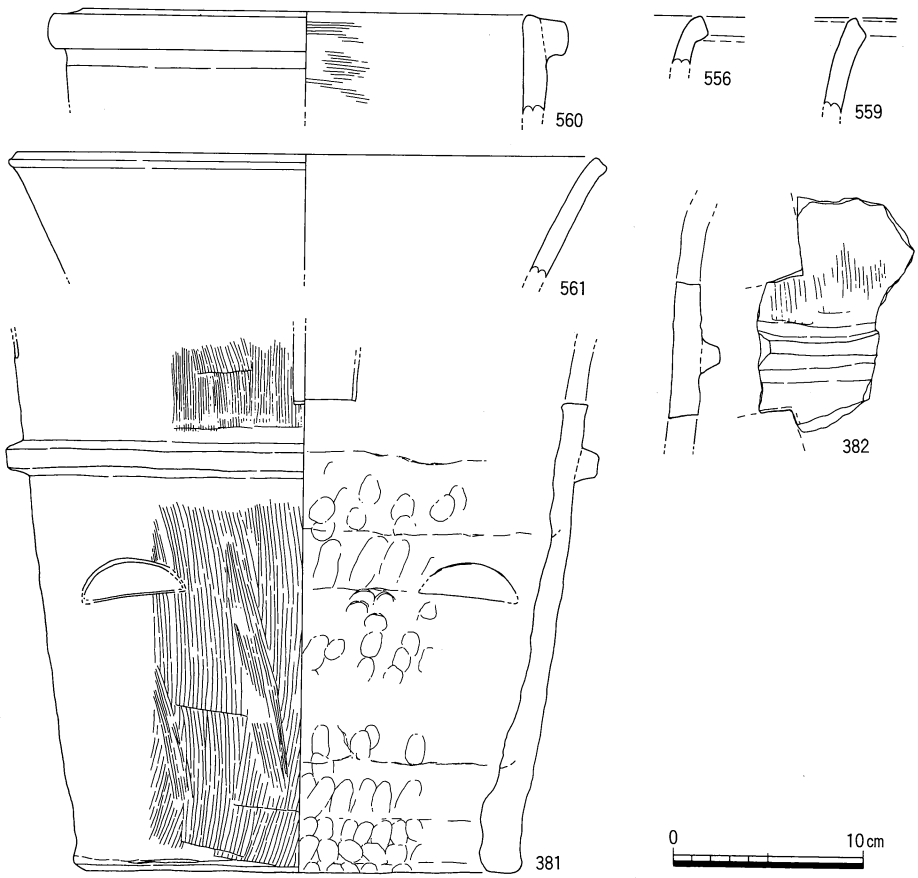
第172図　円筒埴輪２ａ類の突帯形状１（１／４）



第173図　円筒埴輪２ａ類の突帯形状２（１／４）

２ｂ類：大形竪穴建物・古墳群周辺資料

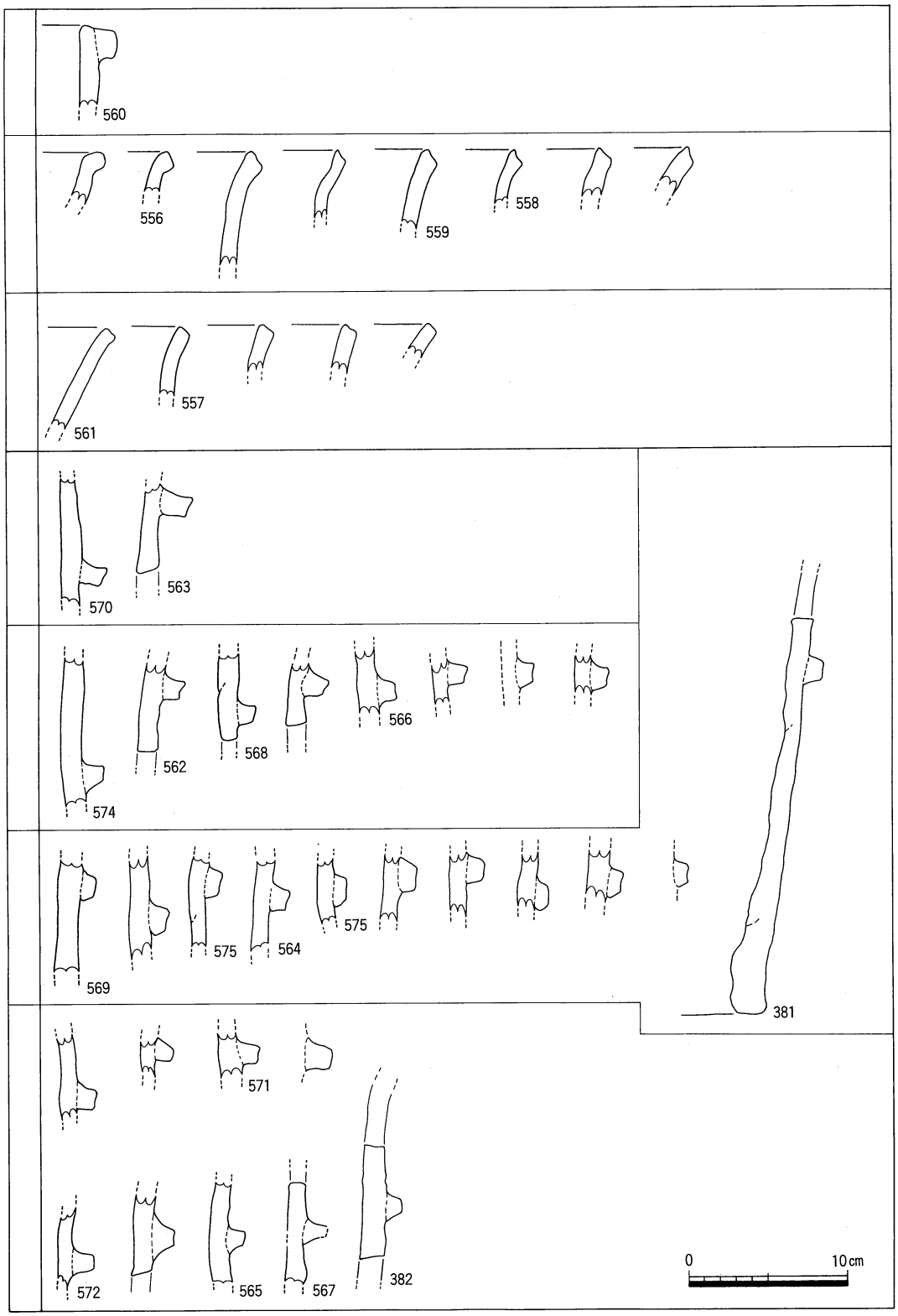
古墳群周辺では多様な埴輪類が出土している。１・３類・壷形埴輪は１～３号墳・ＳＸ０３に伴う。しかしここで述べる２ｂ類は既に第３章で検討したように二次的な流入資料で，本来的に大形竪穴建物に帰属する可能性が高いものである。したがって本類型も中間西井坪遺跡で製作された円筒埴輪と考えられる。



第174図　円筒埴輪２ｂ類（１／４）

大部分が小片であるが，基底部381等から推定すると２ａ類と大差ない法量を推定してよいだろう。口縁部形態には３類型がある。第１は緩く外傾もしくは外反する口縁部端を小さく外方に折り曲げる形態である。屈曲の度合いには格差があるが，いずれも端面を強くなでつけてその部分に凹面をなすと共に内外の端部をやや張り出す。この形態が最も多い。この他やや扁平な突帯を端部外面に貼付して段をなす形態と，１・２ａ類で見た単純な外反口縁形態も少数伴う。

小片が多く，透かし孔の全形を知りうる例はほとんどないが，断片的な資料から類推しても縦長長方形が大多数を占める点は動かないであろう。三角形透かしと断定できる例はなく存在したとしてもごく少数であろう。この他381を含め２例ほど最下段の半円形透かしが認められる。また後述するように本類は器財形埴輪を伴うが，盾形埴輪（383）円筒部では円形透かし孔が採用されている。しかし円筒埴輪においては確認していない。配列は２ａ類と同じく381等で中位段各段の縦列配置が見られる。



第175図　円筒埴輪２ｂ類の口縁部形態と突帯形状（１／４）

突帯形状はやはり変化に富むが，台形，扁平矩形，扁平な上部突出形態が大部分を占め鍔状に近い突出度で上部を強く突出させる形態がわずかに加わる。資料の残存状態が必ずしも良好ではなく調整手法の観察はやや困難であるが，確認した限りでは外面調整は１次タテハケと２次ヨコナデが見られ両者は拮抗する。内面調整においてもハケ・ナデが見られるが，ケズリ調整は含まない。また２ａ類で見られた突帯下面方形刺突は本類では未確認である。

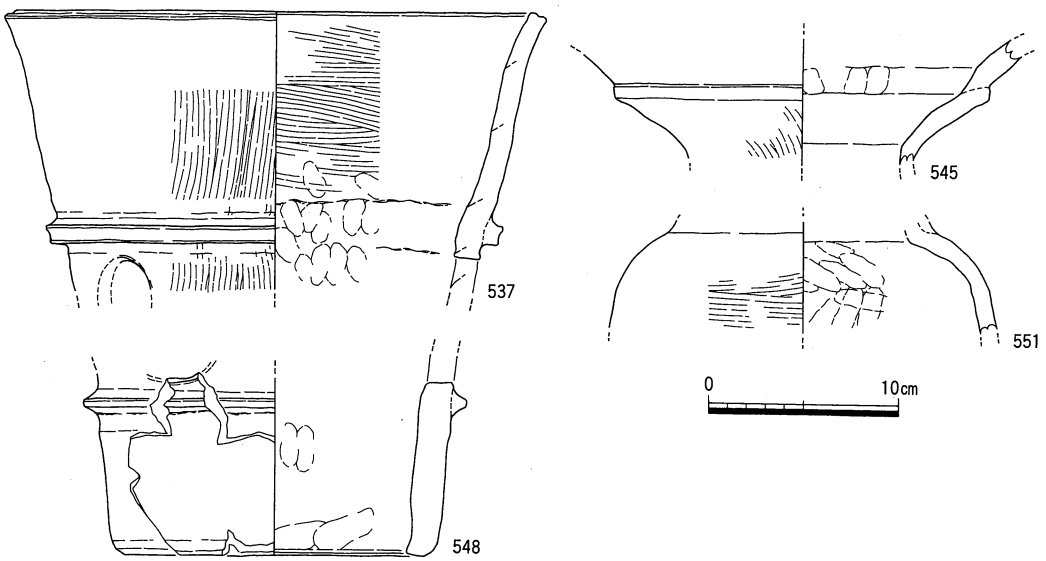
胎土は比較的２ａ類に似た様相を示すが，赤色粒が相対的に細かく混入量もやや少ない傾向が見て取れる。

大形竪穴建物，古墳群周辺の状況から見て本類型は少なくとも器財形埴輪：家・盾・船　土製棺：箱形・割竹形・円筒形を伴う。また点数は多くないが大形竪穴建物では類似した胎土の土師器類が見られる。器財形埴輪・土製棺・土師器の共伴および朝顔形円筒の欠落の点で２ａ類と一致する。

３類：２・３号墳資料など

本類型も中間西井坪遺跡で製作されたものではなく外部から搬入され古墳群で使用されたと推定される資料である。

資料数は多くない。計測し得た限りでは口径30cm以下である。器高は不明ながら本類型は小形である。口縁部はかなり直線的に伸びてわずかに開く。端部は内外に小さく摘み出す程度の単純な形態である。透かし孔は円形で推定２方配置となる。突帯はかなり矮小化

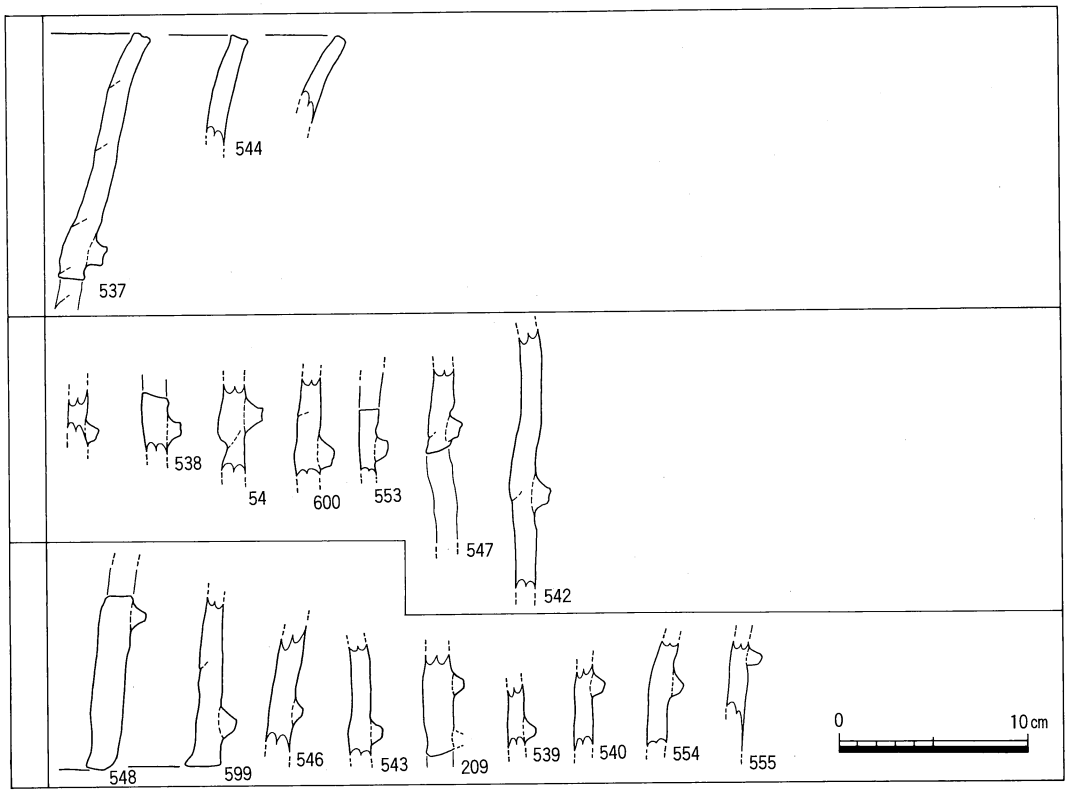


第176図　円筒埴輪３類（１／４）

して突出度も小さい台形を呈する。頂部を強くなでて凹面をなす例が多いが，全般的に残存状況が良好ではなく細部形態の変化は十分確認できない。外面は１次タテハケで終える場合と２次調整にヨコハケを加える場合がある。後者ヨコハケは連続的だが，静止痕は確認していない。口縁部内面はヨコハケ調整とするが以下は縦方向の指ナデが連続し，かなり凹凸が顕著となる。

胎土は石英粒をわずかに含む程度でかなりきめが細かく黄白色を呈する。また部分的に暗色系に変色した破片なども見られるが明確な黒斑といいうるか躊躇がある。

本類型では同様の焼成・胎土の家形埴輪・朝顔形円筒を伴う。



第177図　円筒埴輪３類の口縁部形態と突帯形状（１／４）

円筒埴輪３類は円形透かし孔・無黒斑の可能性・突帯形状・外面調整から川西氏の編年案(10)では４期に位置づけられる様相を示す。一方，１類・２ａ類・２ｂ類は，川西氏の云うＢ種ヨコハケを採用しないこと，方形透かし孔基調などの点から同氏の編年案では２期以前に位置づけられるものである。さて１・２ａ・２ｂ類の関係であるが，１類は胎土の特徴（肉眼観察，第４章掲載の蛍光Ｘ線分析結果）から明確に後２者と区別できる。２ａ類・２ｂ類はこれまで示した来たように諸状況から中間西井坪遺跡においてで製作されたことが確実な埴輪である。本遺跡の理解にあたって２ａ・２ｂ類円筒埴輪の供給先の追求

を含めて，これらの編年的位置づけと関係を整理することは不可欠である。このため続いて讃岐地方の円筒埴輪の検討を行う。ただし今回は中間西井坪遺跡１・２ａ・２ｂ類円筒埴輪の位置付けにとって不可欠な中期前半以前の資料に限定して作業を行う。

⑵　讃岐地方の中期前半以前の円筒埴輪

1.　主要古墳の編年的位置

当該時期の主要な資料には高松市高松茶臼山古墳，仲多度郡多度津町御産盥山古墳，高松市姫塚古墳，綾歌郡綾歌町快天山古墳，高松市石船塚古墳，高松市横立山経塚古墳，大川郡津田町岩崎山４号墳，大川郡志度町鴨部不明墳，高松市今岡古墳，大川郡大川町富田茶臼山古墳の資料がある。

これらの資料の具体的な検討に先立って，まずは副葬品など，埴輪以外の材料からこれら諸墳の編年的位置を整理しておくことにしたい(11)。

高松茶臼山古墳(12)は高松平野東縁部に位置する全長75ｍの前方後円墳で後円部に長大な竪穴石槨２基を収める。最古式の鍬形石を伴う点から和田編年(13)２期に位置づけられる。快天山古墳(14)は讃岐中部大束川上流域に位置する全長100ｍの前方後円墳で，内行花文鏡・石釧・板状鉄斧等を副葬する。最古式の鷲ノ山石製刳抜石棺を有することから和田編年３期に比定できるであろう。石船塚古墳(15)は石清尾山古墳群中に所在する全長58ｍの積石前方後円墳。副葬品は不明ながら鷲ノ山石製の刳抜石棺を持つ。快天山古墳石棺よりもかなり後出的な形態を有することから和田編年４期のうちに位置づけられる。岩崎山４号墳(16)は讃岐東部，津田湾岸の首長墳系列の１基で全長49ｍの前方後円墳である。車輪石・石釧・斜縁二神二獣鏡・滑石製斧形・銅鏃・板状鉄斧等を副葬し棺身が箱形を呈する新しい型式の火山石製刳抜石棺を収める。石棺の形態上の比較に基づけば石船塚古墳より後出する可能性が高い。しかし同様の火山石製刳抜石棺で岩崎山４号墳よりも更に後出的な形態のそれを収める岡山県鶴山丸山古墳(17)が，碧玉製台付盤の存在から和田編年５期に下らないとすれば，本墳もまた４期のうちに収めるべきであろう。また四国最大規模の墳長139ｍの富田茶臼山古墳(18)は讃岐東部津田川上流域に位置する。馬蹄形周濠と発達した前方部形態から取りあえずはこれらより後出する時期に比定できる。

以上からまずは，高松茶臼山古墳→快天山古墳→石船塚古墳→岩崎山４号墳→富田茶臼山古墳の時間的な関係を示すことができる。これらに比べやや編年的位置づけを検討する材

料に乏しい御産盥山古墳，姫塚古墳，横立山経塚古墳，今岡古墳については次のように考える。

姫塚古墳[19]は石船塚古墳と同じ石清尾山古墳群に所在する全長43ｍの積石前方後円墳で，低平な前方部先端に撥形前方部の変形と見なしうる基壇状の方形壇を有する特異な墳丘形態をもつ。柄鏡形の墳形を有する石船塚古墳より古い様相である。また高松平野西縁部に位置する全長34ｍ以上の積石前方後円墳，横立山経塚古墳[20]は柄鏡形の墳丘形態から石船塚古墳に近い時期が想定できる。

尾根線上の傾斜地に築かれた全長50ｍの御産盥山古墳[21]は墳丘上半部を削平されているが，斜面下方に後円部を向けその基底部は前方部前端に比べかなり下がる。一方狭い前方部は鈍く撥形に開き，一定の削平を考慮したとしてもかなり低平な形態と予想される。かかる墳丘形態は及び築造位置は讃岐地方の前期前方後円墳の重要な特徴で今のところ５期以降に下る例はない。

今岡古墳[22]は埴輪・土製棺以外の材料で位置づけが難しい。取りあえずは立地と墳丘形態から富田茶臼山古墳より先行すること，墳丘形態から高松茶臼山古墳より後出することが想定できる程度である。また鴨部不明墳[23]は具体的な所在地を含めて明らかではない。

2. 各古墳出土埴輪の様相

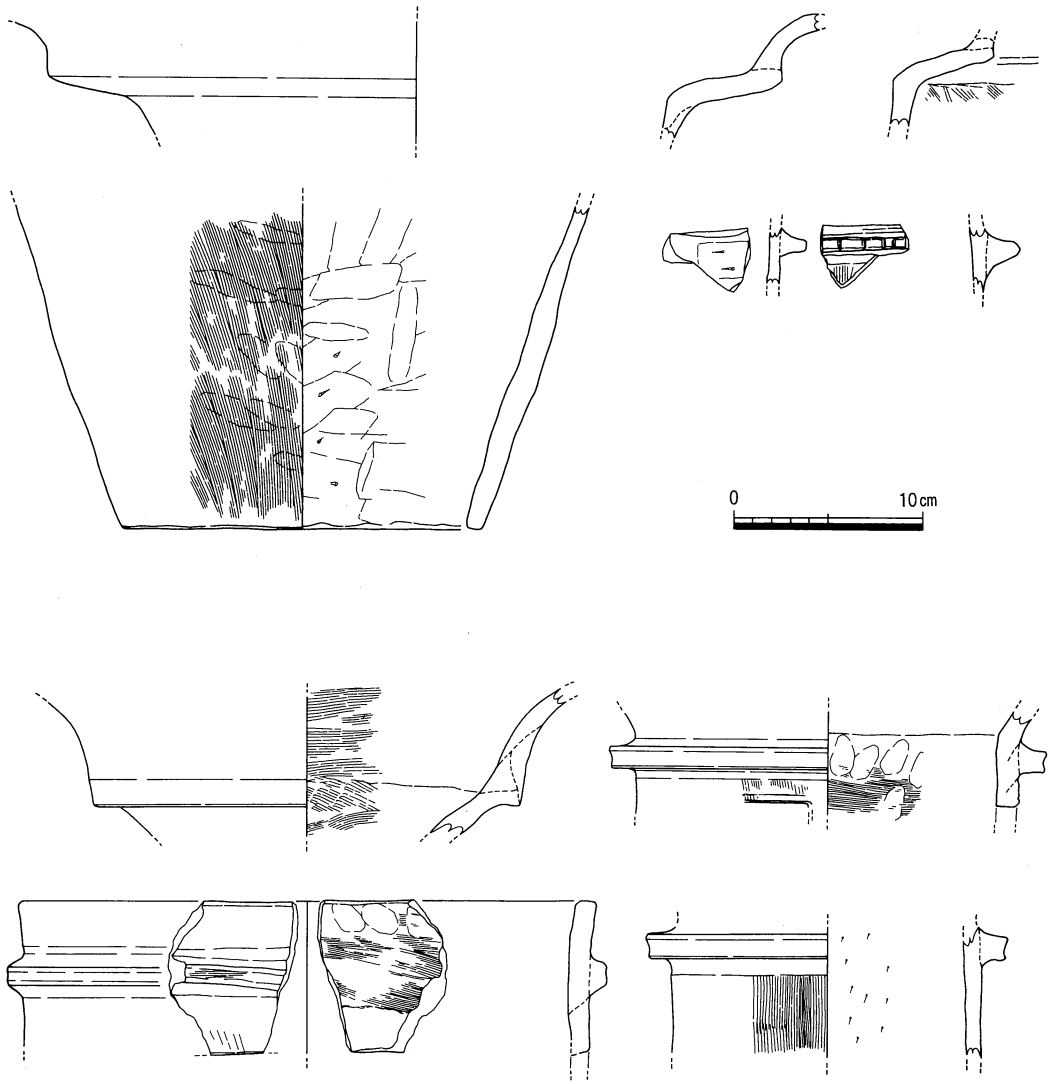
高松茶臼山古墳：

未報告のため，埴輪の全容は不明であるが，採集資料や寺田氏資料[24]でその一端を窺える。それらに拠れば立ち上がり部を強く外反させた二重口縁形態を有し，鍔状の突出度の高い突帯を持つ。透かし孔は方形ないしは三角形で，外面は１次タテハケないしはヨコナデ調整で内面はケズリ調整が目立つ。

御産盥山古墳[25]：

二重口縁形態と短い直口縁形態がある。前者は分厚い屈曲部を強く張り出し，立ち上がり部は外反する。透かし孔には少なくとも方形があるが，円形透かし孔はない。突帯は整った矩形型を基調とし，やや基底部の広がった台形形態を含む。突出度の高い鍔状突帯は見られない。外面は１次タテハケ調整ばかりで，内面調整にはナデ・ハケ調整が見られる。また器体部，透かし孔の周囲に線刻を有する破片を含む。

器財形埴輪・朝顔形円筒埴輪は含まない。広口壷は頚部形態から丸井型が予想できる。



第178図　高松茶臼山古墳(上)・御産盥山古墳(下)の円筒埴輪（1／4）

快天山古墳[26]**：**

口縁部形態は不詳。透かし孔は方形ないしは三角形を呈し，円形透かし孔は見ない。突帯はやや扁平だが上部を強く突出させる形態を主体とし，断面矩形も伴う。外面には1次タテハケ調整を見るだけである。内面はハケもしくはナデ調整を主体とするが1例だけケズリ調整を見る。器財形埴輪はまだ伴わない可能性が高いが，円筒埴輪と同質の胎土による鳥形土製品がある。また広口壷種類以上を伴う。第2主体に伴う口頸部大形片は円筒埴輪と同質で端部を単純に四角く収める形態だが，他に下川津B類様式と同質の胎土による頸部小片がある。

姫塚古墳[27]：

口縁部形態・透かし孔形状は不明。突帯はやや扁平だが上部を強く突出させる形態が多く，単純な矩形も伴う。外面調整は１次タテハケのみで，内面はハケもしくは・指押さえ調整。朝顔形円筒埴輪・器財形埴輪は伴わない。また多数の広口壷を伴うが，確認した限りでは丸井古墳例に近似した形態ばかりである。なおこれらの広口壷は円筒埴輪同様に墳丘各所から採集されており，埴輪同様墳丘に並置された可能性が高い。また円筒埴輪・広口壷共に，全てが角閃石細粒を濃密に含む，下川津Ｂ類様式同様の胎土を採用する。

石船塚[28]：

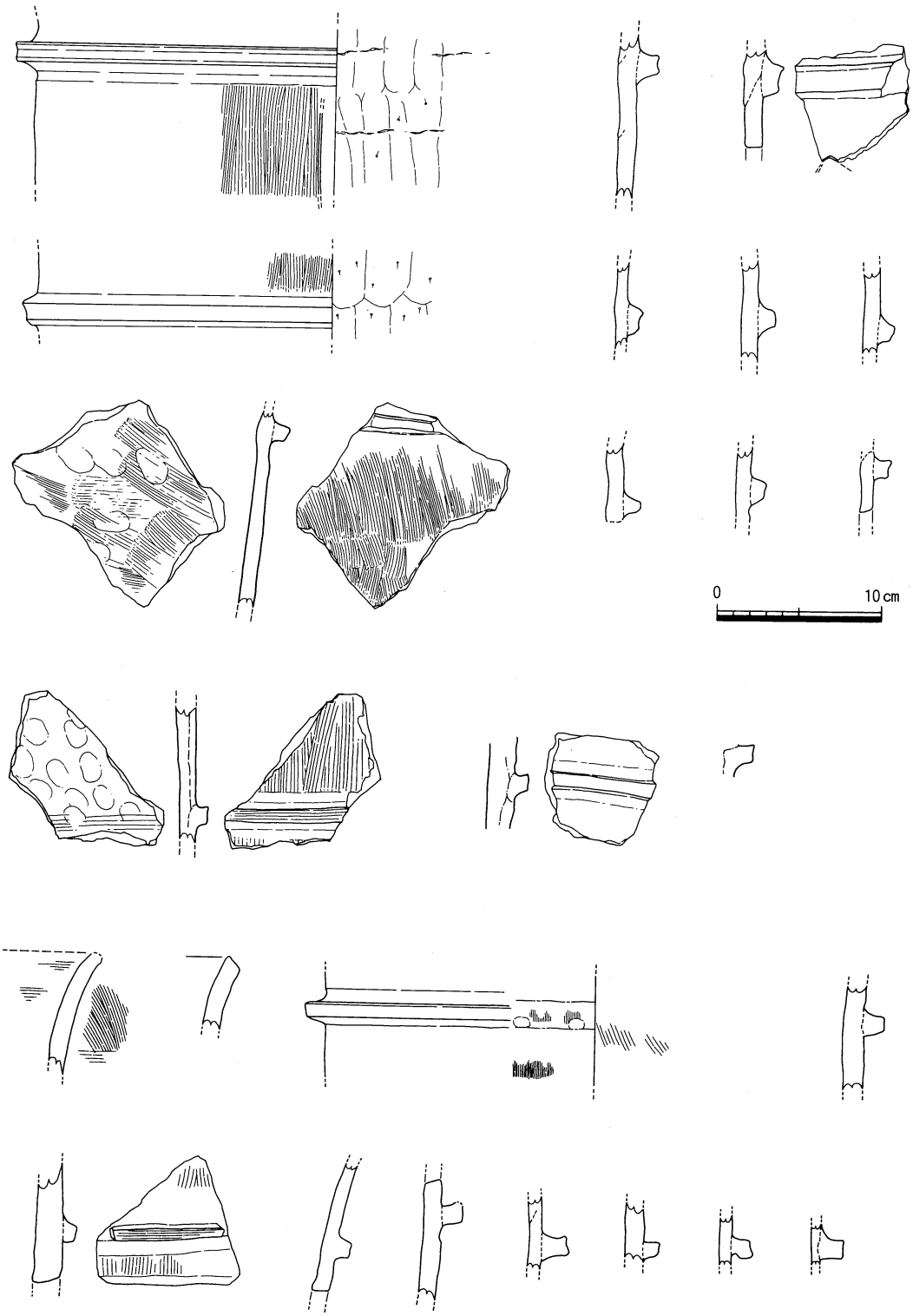
口縁部はわずかな小片に依れば端部を強調することなく外反する形態と予想できるが，長短は不明。透かし孔には方形・三角形が見られるが円形透かしはない。また隔段配置の可能性が高い。突帯は断面矩形ないしは突出度は高いものの基底部が広がり台形状を呈する形態からなる。姫塚などに見られる上部を強く突出する形態は見ない。外面調整は１次タテハケを基調とするものの部分的に断続的なヨコハケ調整，川西氏のＡ種ヨコハケが見られる。内面調整には指押さえ・ナデと局部的にハケ調整が混在する。また一部の突帯剝落部に棒状器具による刺突ではないが，それと同様の指頭圧痕が連続する。

朝顔形円筒埴輪・器財形埴輪は伴わない。本古墳でも円筒埴輪と共に広口壷片が墳丘各所から採集されており姫塚古墳同様に並置されていた可能性が高い。しかしそれらの形態には猫塚古墳出土壷同様の，内傾する短い頚部から強く折り返して開く口縁部を有する形態を含み，姫塚古墳とは様相を異にする。また円筒埴輪・広口壷の胎土はやはり角閃石細粒を濃密に含む下川津Ｂ類様式と同質のものばかりである。

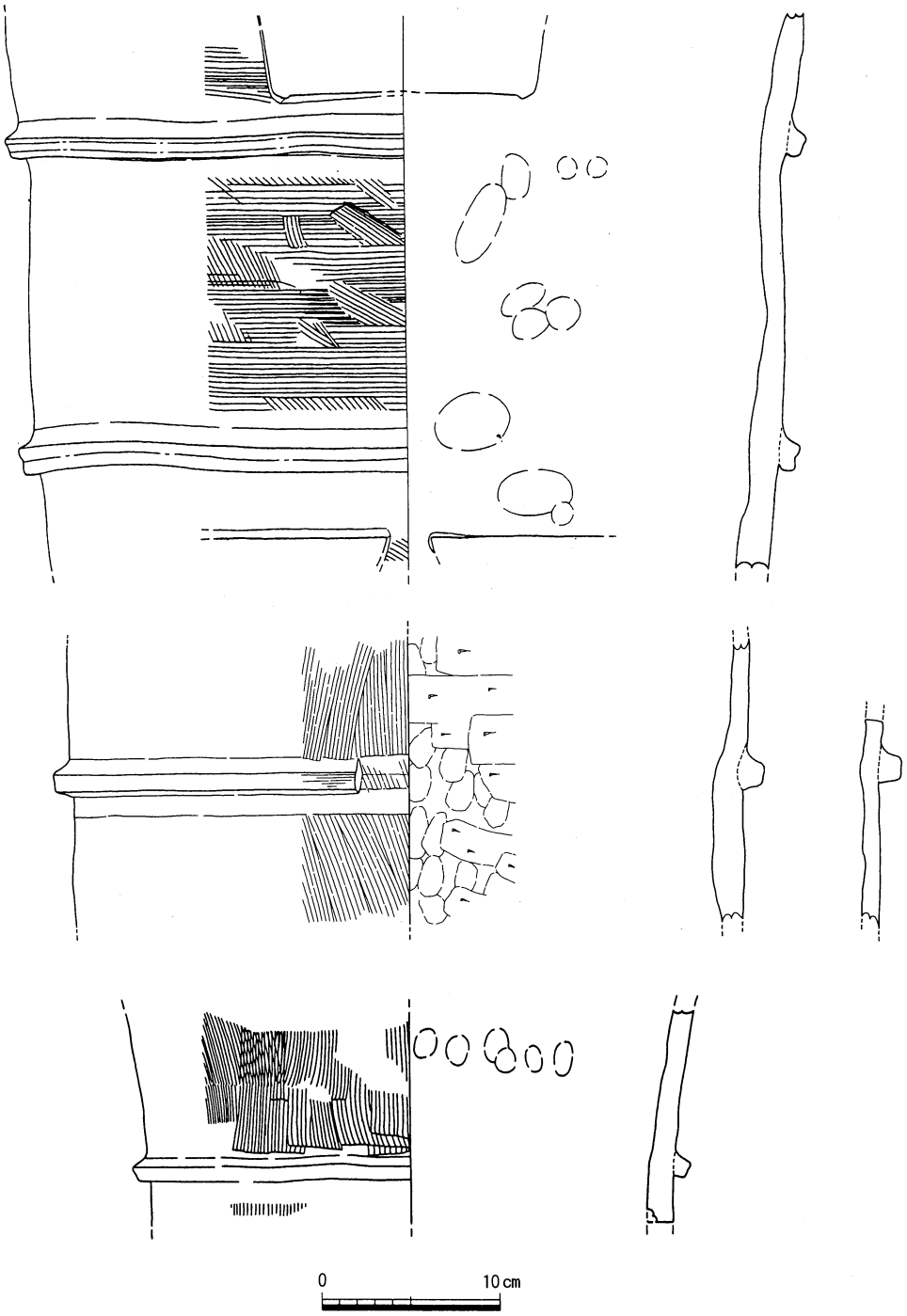
横立山経塚古墳[29]：

口縁部形態は不明。透かし孔形状には方形と三角形がある。隔段配置で穿孔位置を段ごとに微妙にずらす。突帯はやや垂下気味で下端の接着が甘い矩形型が最も多く，突出度の高い台形戸谷や扁平な上部突出型を交える。外面調整は１次タテハケを基調に部分的にいわゆるＡ種ヨコハケが加わる。内面調整は指押さえ・ナデ・ハケ調整がある。

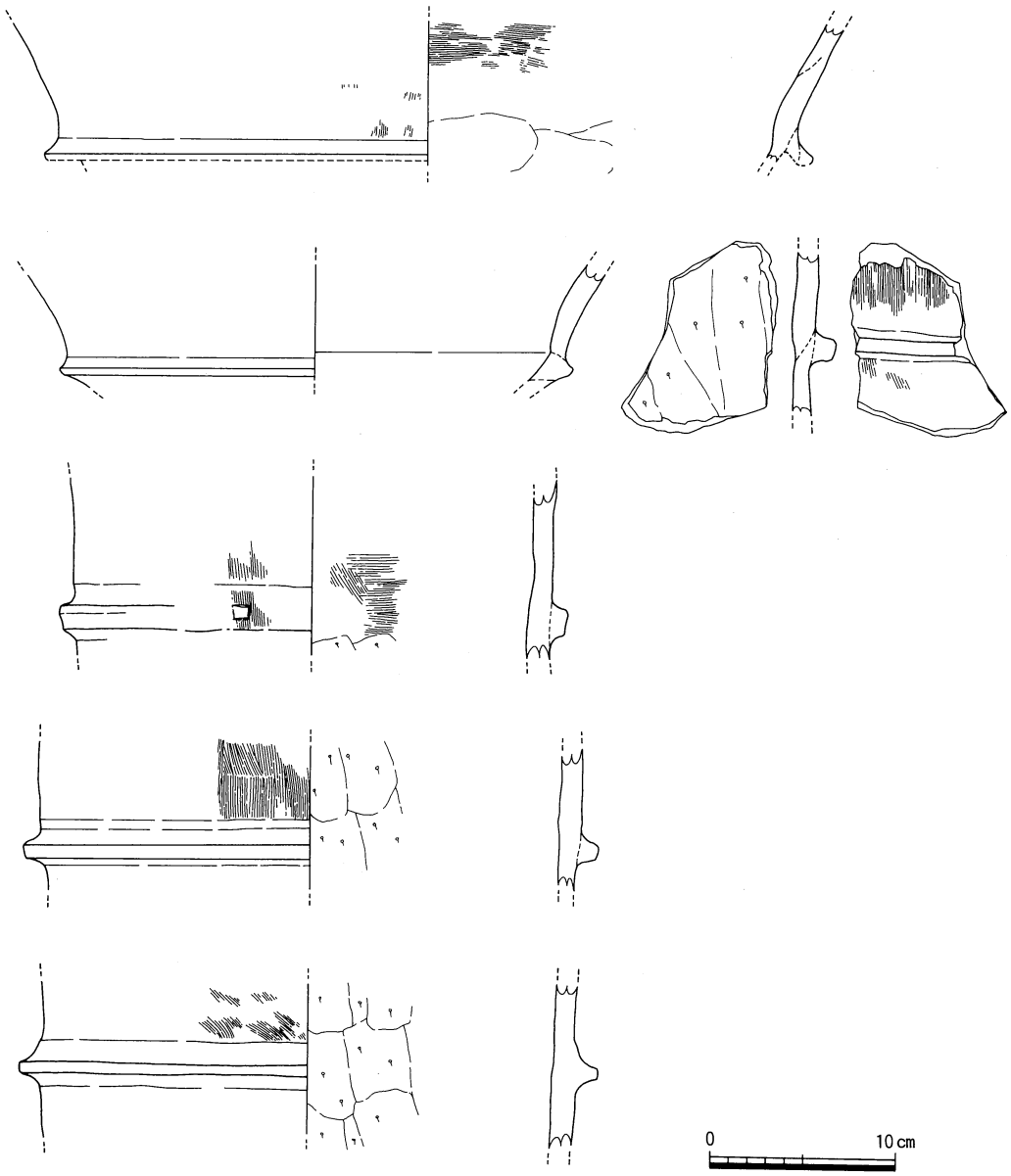
器財形埴輪・朝顔形円筒埴輪は知られていない。また円筒埴輪は全て石清尾山古墳群と同様の下川津Ｂ類様式の胎土を採用している。



第179図　快天山古墳(上)・姫塚古墳(中)・石船塚古墳(下)の円筒埴輪（1／4）



第180図　横立山経塚古墳の円筒埴輪（1／4）

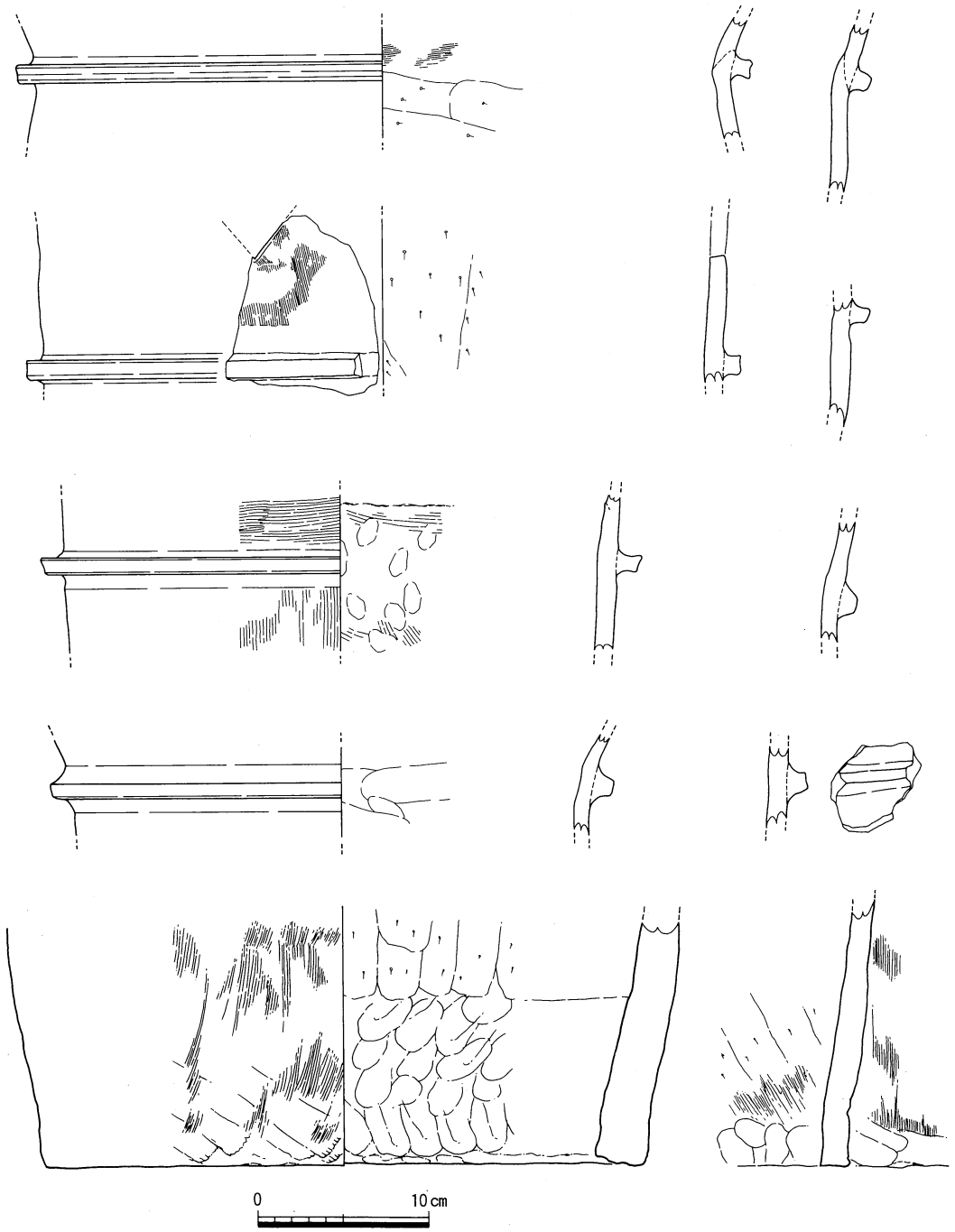


第181図　岩崎山４号墳の円筒埴輪１（１／４）

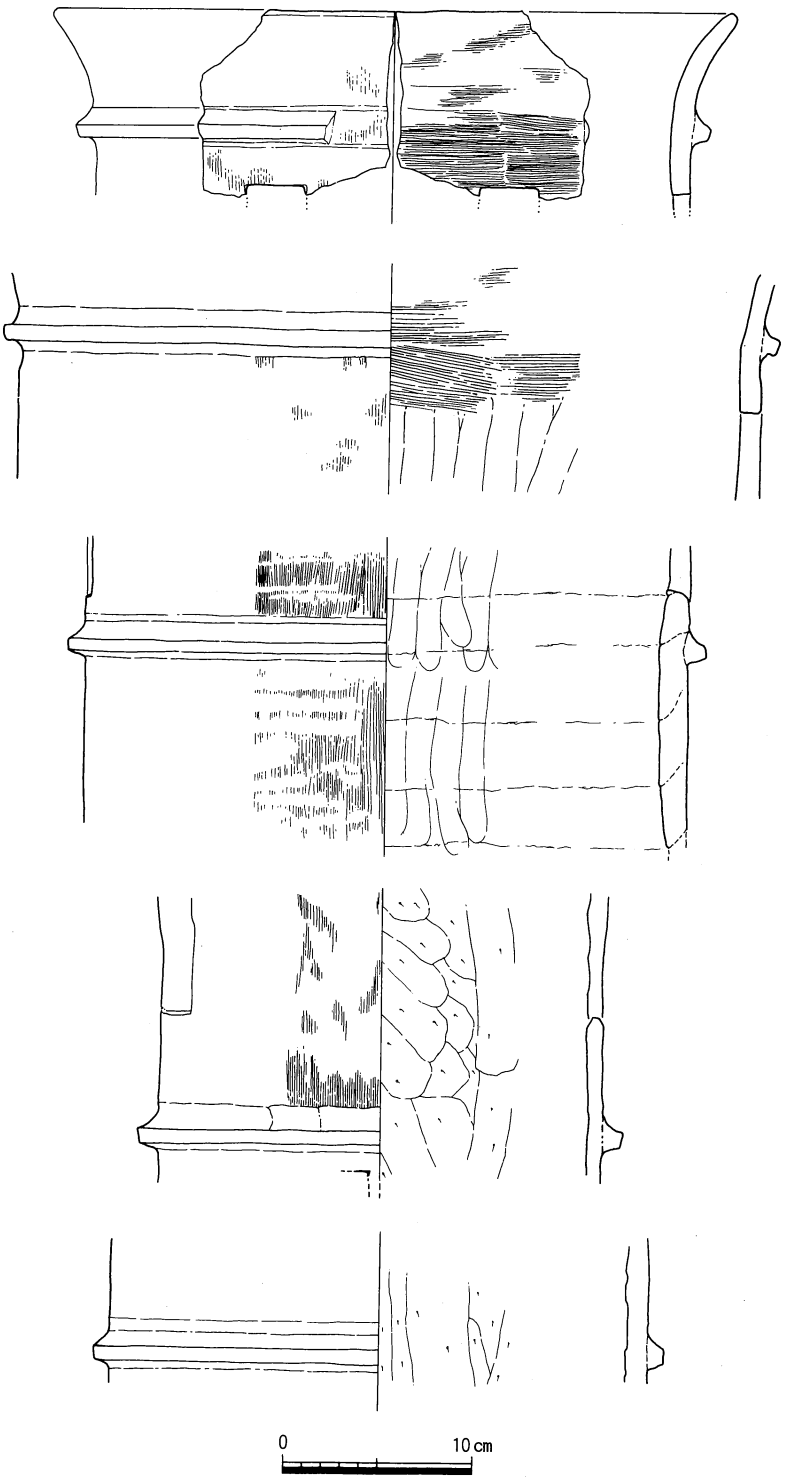
岩崎山４号墳[30]：

長短は不明ながら口縁部は緩やかに外反する形態らしい。透かし孔形状には方形・三角形があり，隔段配置となる。突帯形状では突出度の高い台形ないしは矩形が多く，わずかに上部をやや突出させた形態を含む。外面調整では１次タテハケもしくはタテハケ後のヨコナデを基調とし，口縁部などに局部的にヨコハケ調整を加える例がある。内面はケズリ

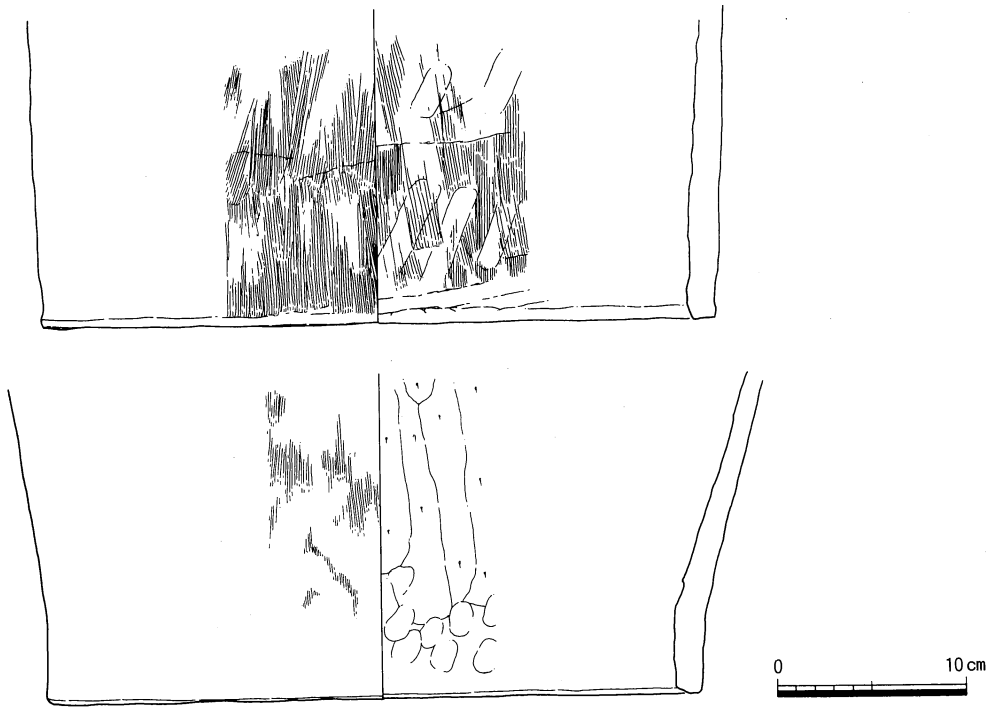
調整がほぼ例外なく加えられるが，それに先行して上半部にヨコハケ調整を見る場合がある。また器体の突帯下面位置に明確な方形刺突がある。



第182図　岩崎山４号墳の円筒埴輪２（１／４）



第183図　鴨部不明墳の円筒埴輪１（１／４）



第184図　鴨部不明墳の円筒埴輪２（１／４）

本墳では器財形埴輪・朝顔形円筒埴輪・鰭付円筒埴輪を伴う。器財形埴輪では少なくとも家形埴輪・盾形埴輪がある。後者では盾面文様に綾杉帯を含む。

鴨部不明墳[31]**：**

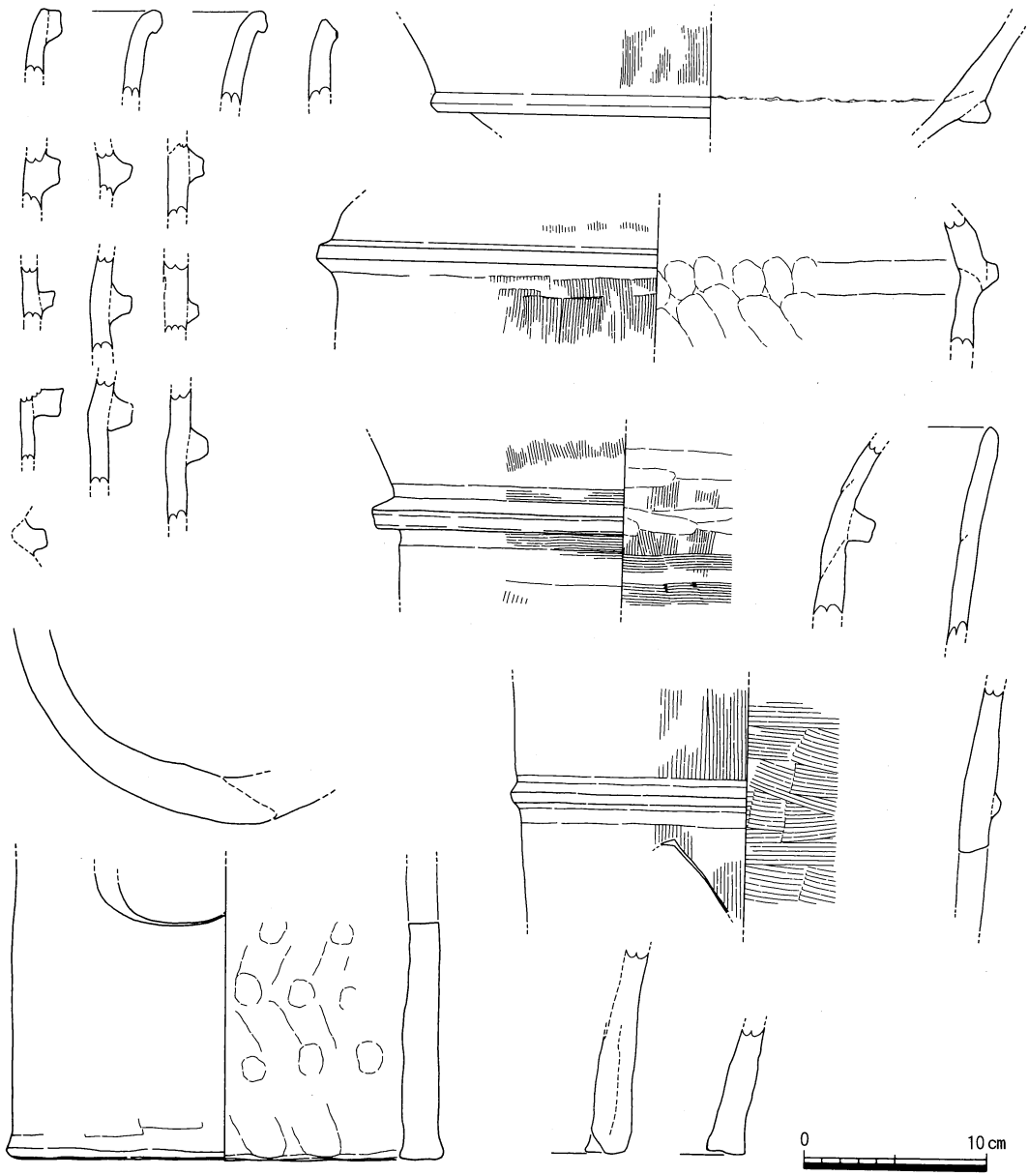
緩やかに外反する短口縁形態がある。方形透かし孔で隔段配置となる。突帯は突出度の高い台形。外面調整には１次タテハケとタテハケ後ヨコナデがある。内面は例外なくケズリ調整を加える。

今岡古墳[32]**：**

口縁端部を小さく屈曲させると共に端面を強くなでつけて凹面をなす形態が最も多い。次いで端部外面にやや扁平な突帯を貼付する形態がある。また単純に口縁部を緩やかに外反させる形態もわずかに含まれる。透かし孔は方形を基調とし，三角形透かしも少数存在する。また最下段の半円形透かし例もある。突帯形状では台形およびやや扁平だが上部を突出させる型が多い。しかし後者の上部突出は全般的に鋭利さを失っている。また整った矩形型や薄手で突出度の高い形態も少量見られる。この他断面蒲鉾形の小突帯を一定量伴う。外面調整には１次タテハケ・２次ヨコナデの他，局部的ではあるが連続的なヨコハケ調整を施す例がある。しかしこの場合，原体幅は狭く明確な静止痕は確認していない。内

面調整はハケもしくはナデでケズリ調整はない。また明確な棒状器具を用いたものではないが，器体の突帯貼付位置に連続的に指頭圧痕を確認する例がある。

朝顔形円筒埴輪，器財形埴輪は伴うが鰭付円筒埴輪は確認していない。器財形埴輪には少なくとも家形・盾形・蓋形・草摺形がある。なお蓋形埴輪の立ち飾り文様，笠部形態は中間西井坪遺跡資料と同型式である。

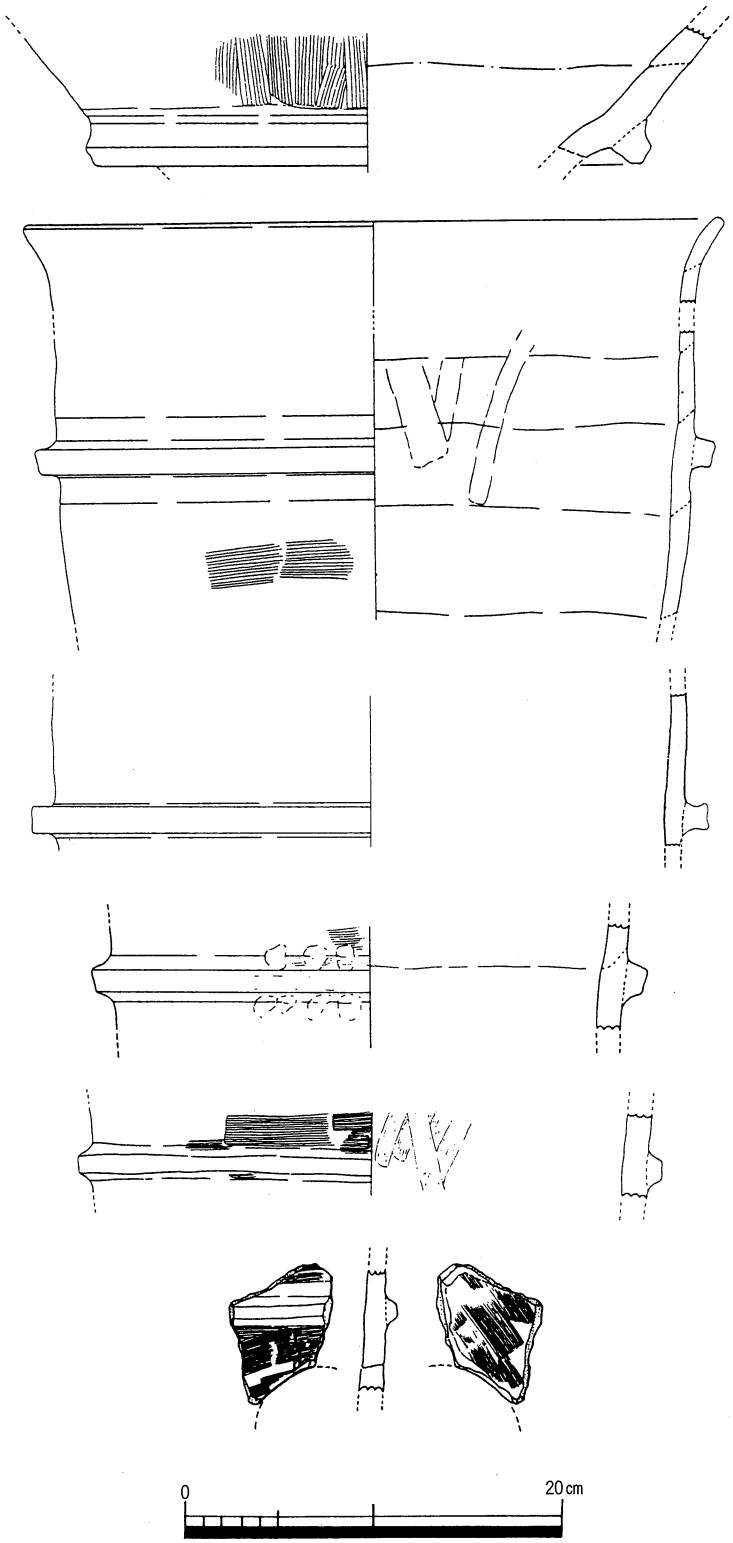


第185図　今岡古墳の円筒埴輪（1／4）

また本墳では他に箱形2，円筒形1以上の土製棺を伴う。調整手法などで埴輪類と共通する部分が多い。またこれら土製棺類や各種埴輪類はいずれも赤色粒（おそらく焼粘土塊）粗粒・石英粗粒を多量に含み，多くは明橙色ないしは赤褐色を呈する近似的な胎土を共有する。

富田茶臼山古墳(33)

端部を小さく外方に屈曲させる形態と緩やかに外反する口縁部形態とが知られる。透かし孔は円形に統一される。台形突帯が他を圧倒するものの，断面蒲鉾形鋸形突帯や矩形，上部突出型も少数見られる。外面調整を観察できる資料は多くないが，1次タテハケ調整に加え，明確な連続的なヨコハケ調整が認められる。内面はハケないしはナデ調整でケズリ調整はない。また突帯下面の方形刺突は知られていない。



第186図　富田茶臼山古墳の円筒埴輪（1／4）

朝顔形円筒埴輪および器財形埴輪を伴う。後者では少なくとも家形，盾形，蓋形がある。前2者では文様に綾杉帯を含む。

3. 讃岐地方古墳時代中期前半以前の円筒埴輪の様相

以上諸古墳の埴輪の様相を示した。先に検討した副葬品その他の要素に基づく諸古墳の時間的関係に基づき，まずは埴輪諸要素の消長を整理しておく。

先に埴輪以外の要素に基づき前後関係を推定した際に位置を確定できなかった今岡古墳の位置づけについて，重複を避けるために，埴輪の様相から先にここで明らかにしておきたい。埴輪の様相から岩崎山4号墳と富田茶臼山古墳の間に置く事が合理的である。まず，器財形埴輪・朝顔形円筒埴輪の共伴から岩崎山4号墳以後に位置づけられる。更に口縁部形態，外面調整では富田茶臼山古墳に近く，透かし孔の様相では岩崎山4号墳に近いからである。なお古墳そのものの所在も含めて不明な鴨部不明墳資料は，円筒埴輪のみであるが岩崎山4号墳に近接した位置と見るべきであろう。

口縁部形態：

二重口縁は特殊器台形埴輪に由来するが，屈曲部が極端に分厚く作られ，立ち上がり部を強く外反させるといった形態や文様帯を欠くなどの点でそれとは異なる。和田2期に位置づけられる高松茶臼山古墳に見られる。しかし副葬品の内容からそこまで遡らせることが著しく困難な津頭東古墳[34]でも，この口縁部形態が知られる。また御産盥山古墳例についても短い直口縁形態を伴い，突帯形態の点でも後出的な要素を示すので高松茶臼山古墳より後出する可能性が高い。つまり二重口縁形態は古い様相ではあるが一定期間存続する可能性がある。もっともそうであっても岩崎山4号墳以後に残存することはないであろう。

一方，屈曲口縁・貼付口縁は今岡古墳以後の様相であって，岩崎山4号墳以前には認められない。また口縁部を緩やかに外反させ，端部を特に強調しない形態には長短2種がある。前者は今岡古墳・富田茶臼山古墳でも少数残存するが，後者は見られないようである。また後者は上記したように御産盥山古墳では二重口縁に伴うことから相対的に古い様相と見なしてよいであろう。

透かし孔：

円形透かし孔は今岡古墳で少数例存在している可能性があるが，普遍化するのは富田茶臼山古墳以後で，その段階には方形・三角形透かし孔は残存しない。またどうやら本地方

では方形透かし孔は三角形透かし孔に一般的に優越するらしい。またこれらは富田茶臼山古墳以後には残存しない。なお半円形透かし孔は今のところ今岡古墳最下段例に認めるだけである。

突　帯：

突帯形態は多様で，同一古墳で複数形態が共存するのが一般的である。一方，姫塚古墳と石船塚古墳に見るように同じ首長系列で，同系統の製作集団の手になる場合でも，その傾向が連続しない。したがって明瞭にその形態変化を示すことは困難である。

ただしおおよその傾向としては鍔状の高い突帯や，やや扁平でも上部を強く摘み出した突出形態が古い様相で，逆に基底部幅の広い台形形態が新しい様相であることは確認できる。前者は一部では遅くまで残存するものの，多数派をしめることはないし，形態の鋭利さを次第に喪失する傾向は否定できない。

調　整：

外面調整は快天山古墳・姫塚古墳（和田３期）までの古い段階ではタテハケ調整ばかりである。石船塚古墳・岩崎山４号墳（同４期）ではこれに断続的なヨコハケ調整とヨコナデ調整が加わる。また富田茶臼山古墳では明確な連続ヨコハケ調整を見るが，部分的には今岡古墳まで遡るようである。しかしいずれの段階においても２次調整を欠く個体は一定量伴っている。

また内面調整では大局的にはケズリ調整が古い様相といえるが，その消長は複雑である。岩崎山４号墳ではケズリ調整を貴重とするが，先行する姫塚古墳・石船塚古墳ではこれを欠く。今岡古墳以後はケズリ調整を全く見なくなる。

円筒埴輪に伴う器種：

器財形埴輪は岩崎山４号墳の段階に出現する。また朝顔形埴輪も同様である。一方朝顔形円筒埴輪を欠く石船塚古墳以前では広口壷（後節で詳述するように焼成前穿孔が確認できる場合が多く，明らかに儀器として用いられている。その意味で壷形埴輪と見なしてもよいと思われる。）を共伴する例が多い。それらの壷形土器は全て在地系統で畿内系統の器種は使用されていない。

また鰭付円筒埴輪は岩崎山４号墳で確認するだけである。

以上出現期から中期前半までの讃岐地方の主要な円筒埴輪を概観した。埴輪類の組成を重視すれば，器財形埴輪・朝顔形円筒埴輪の出現を画期として前後２段階に大別できるであろう。前半期には円筒埴輪の採用以前から本地方の首長墳祭祀の道具立ての一つであっ

た広口壷（在地系形態）が円筒埴輪の樹立と並行して残存する。また二重口縁形態の円筒埴輪が一定期間存続する可能性が端的に示すように，複数系統が錯綜的に並列するようである。同系列ないしは密接な関係が予測される系列の相前後する古墳間でも埴輪類の様相が一様ではない。やや極端に云えば円筒埴輪の諸要素とその組み合わせは古墳ごとに異なり，１古墳でも様々な要素が雑然と共存する。このことが前半期の円筒埴輪の様相を複雑にしているといってよいであろう。このことは高橋克壽氏が既に指摘するように当該時期の未成熟な，臨時的な埴輪生産体制に起因する現象であろう。これに関連する問題については第６節で少し検討する。

これに対して後半期では，それまでの古い様相が払拭されると共に埴輪の組成および型式はかなりの程度統一が図られる。後にもう一度検討するが，前半期，すなわち円筒埴輪導入の初期においては円筒埴輪・広口壷の使用とその型式の組み合わせは古墳単位あるいはせいぜい系列単位で異なり，地域的な格差が大きい。讃岐地方では古墳時代の当初において在地系壷形土器ないしはそれから転化した壷形埴輪の使用が一般的であって，円筒埴輪の導入がやや遅れて個別的になされ，しかも先行する祭祀形態の止揚が不徹底であった点が，この錯綜状況の直接的な原因であると考える。

後半期には円筒埴輪・朝顔形埴輪＋器財形埴輪が基本組成として讃岐地方諸地域で広く承認される。一部の弱小系列では前半期のに見られた形態的特徴を墨守する壷形埴輪の樹立が継続するが，大勢は決していると見てよい。

ところで，石清尾山墳墓群では群形成の当初からその終末まで，一貫して墳墓で使用する土器類・円筒埴輪の製作にあたって素地粘土の選択（ないしは調合）について厳格な規制が働いている。後節で再論するが，同墳墓群では仮器化した供膳形態小形器種＋広口壷（鶴尾神社４号墓[35]）→仮器化した広口壷（猫塚古墳[36]）→円筒埴輪＋広口壷（姫塚古墳・石船塚古墳）と墳丘祭祀の道具立てを変化させる。この間，一貫して角閃石細粒を濃密に含む独特の素地粘土を使用し続ける。ちなみにこのような特徴を有する胎土は弥生時代後期初頭以来，香東川下流域で製作される下川津Ｂ類様式の重要な特色の一つである[37]。なお下川津Ｂ類様式は以前述べたように石清尾山山塊を含めて下流域の最大でも径４km圏内が製作地でありながら[38]，弥生終末期を頂点に東部瀬戸内海沿岸諸地方に盛んに搬出されている。

また石清尾山墳墓群で用いられる土器類の形態は明らかに同様式に特有な技法に則って製作されたものである。つまり石清尾山墳墓群では素地粘土の選択，土器製作技術に示さ

れるように伝統的な技術を保持する製作集団が円筒埴輪など新規の様相を受容しつつ一貫して，その役割を果たしている。

このようなあり方が当該時期の本地方で一般的な様相と見なしうるかは即断しがたいが，1例として重要である。更に弥生時代終末期の一時期，下川津B類土器が広範囲に搬出されたのと同じように，この段階でも円筒埴輪・壷が石清尾山墳墓群以外にも供給されている。横立山経塚古墳の円筒埴輪は全てこの独特の胎土が観察されるし(39)，同様の胎土は快天山古墳出土広口壷の一部(40)にも認められる。両古墳とも下川津B類土器の製作圏内からはずれることは云うまでもない。

(3) 中間西井坪遺跡出土埴輪の位置

以上，中間西坪遺跡出土円筒埴輪の概要に加え，讃岐地方の中期前半以前の円筒埴輪の様相を示した。最後に中間西井坪遺跡の編年的位置を示すことにしたい。

1類：第4章胎土分析報告と肉眼観察に基づけば，石清尾山古墳群および横立山経塚古墳の円筒埴輪と同じ特徴を有する。この点で中間西井坪遺跡で製作された埴輪類（2a類・2b類）とは全く異質である。また突帯形状とヨコハケを欠く外面調整の特徴は，それらの中でも古い様相を示す姫塚古墳資料により近似する。したがって1号墳に樹立された円筒埴輪1類は，中間西井坪遺跡での埴輪生産の開始に先行する時期の所産で，かつ石清尾山古墳群などに円筒埴輪・壷形埴輪を供給したのと同じ集団の手になる可能性が高い。

2a類：朝顔形円筒埴輪は見られないものの，各種器財形埴輪を同時に製作していることは確実である。その点で，岩崎山4号墳・今岡古墳など後半段階の一群に含めることができる。口縁部形態の特徴等で，同じく中間西井坪遺跡で製作された円筒埴輪2b類より先行する要素が見受けられる。第4章分析報告に示されたように，その胎土の特徴は今岡古墳資料と完全に一致するが，今のところ同古墳出土の円筒埴輪では口縁部形態・透かし孔配置・突帯下面調整などの点で本類に一致する資料は見ていない。口縁部形態や突帯下面調整および突帯形状の傾向は岩崎山4号墳・鴨部不明墳に近く，今岡古墳より先行してこれらに極めて近接した時期の所産と考える。共伴する土師器類の年代観もこの点と矛盾しない。ただし内面のケズリ調整